

朝来市

池田古墳

—一般国道9号池田橋盛土化事業（平野地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

本文編(一)



平成27(2015)年3月

兵庫県教育委員会

朝 来 市

いけ だ
池 田 古 墳

—一般国道9号池田橋盛土化事業（平野地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成27（2015）年3月

兵庫県教育委員会



池田古墳遠景 南東上空から



池田古墳遠景 北西上空から

巻首図版 2



池田古墳遠景 西上空から



池田古墳遠景 南上空から



池田古墳近景 北東上空から



池田古墳近景 北上空から



池田古墳近景 北東上空から



池田古墳全景（池田橋撤去前）北東上空から



池田古墳全景（迂回路完成後）北東上空から



池田古墳全景（竣工後）北東上空から



池田古墳全景 北西上空から



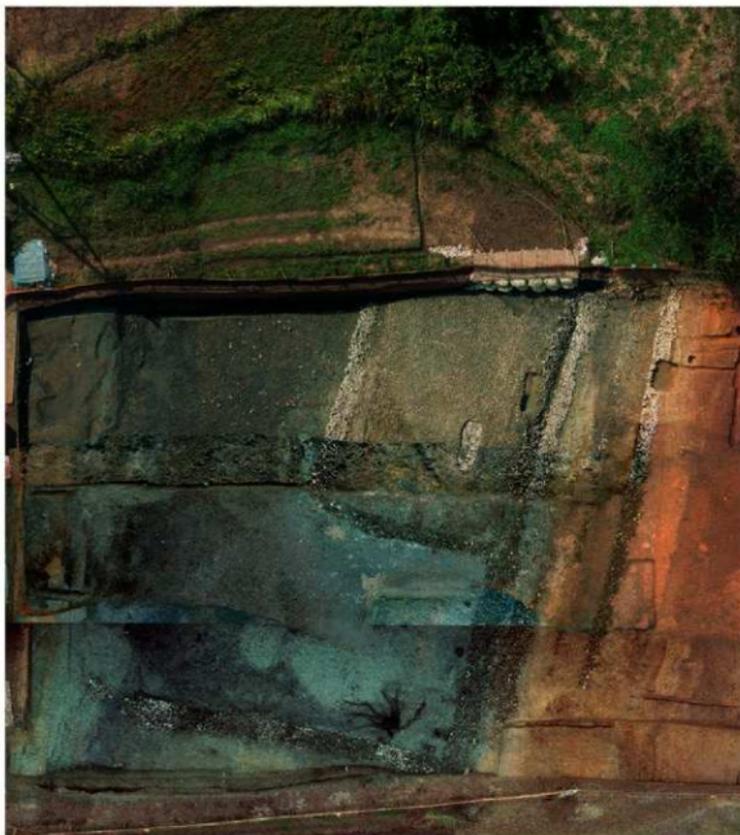
池田古墳全景 南上空から



池田古墳 俯瞰



調査区俯瞰（第1次～第3次調査合成）



南半部（第1次～第3次調査）俯瞰



南半部近景（第1次調査）南から



南側1段目斜面全景（第1次調査）南西から



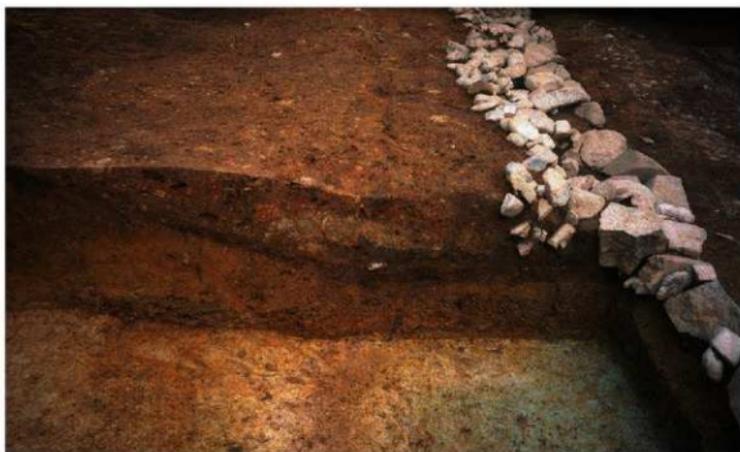
南側1段目斜面全景（第1次調査）南東から



南側1段目テラス（第1次調査）東から



南側2段目葺石全景（第2次調査）南東から



前方部南側1段目テラス断面（第2次調査）西から



北半部（第1次～第3次調査）俯瞰



前方部北側3段目斜面葺石全景（第2次調査）北から



前方部北側3段目斜面葺石近景（第2次調査）北から



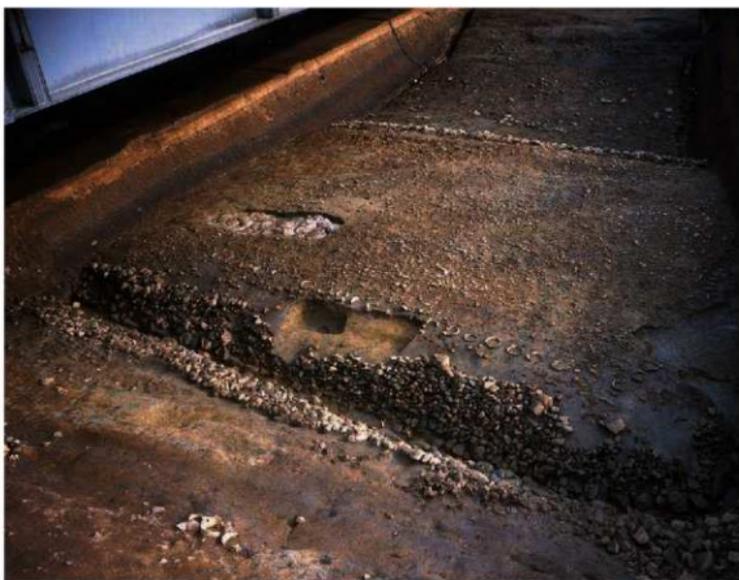
前方部北側1段目斜面（第1次調査）西から



前方部北側1段目斜面（第1次調査）北東から



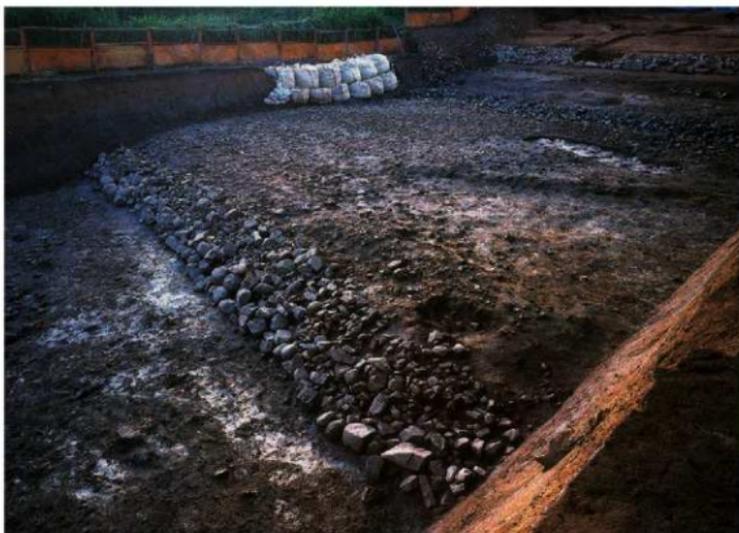
南造り出し全景（第2次調査）南から



南造り出し全景（第2次調査）北から



南造り出し全景（第2次調査）北から



南造り出し全景（第2次調査）南東から



北造り出し全景（第2次調査）南から



北造り出し全景（第2次調査）南東から



北造り出し全景（第2次調査）北から



北造り出し全景（第2次調査）北東から



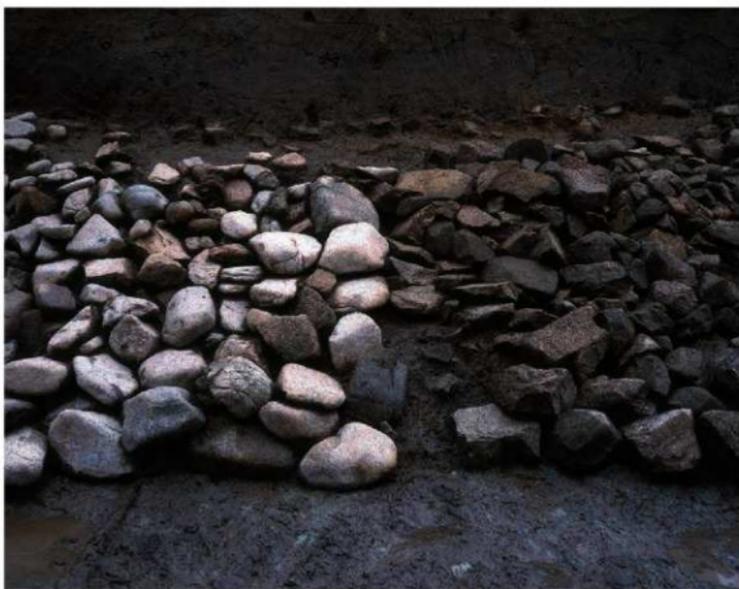
南渡土堤全景（第1次調査）南から



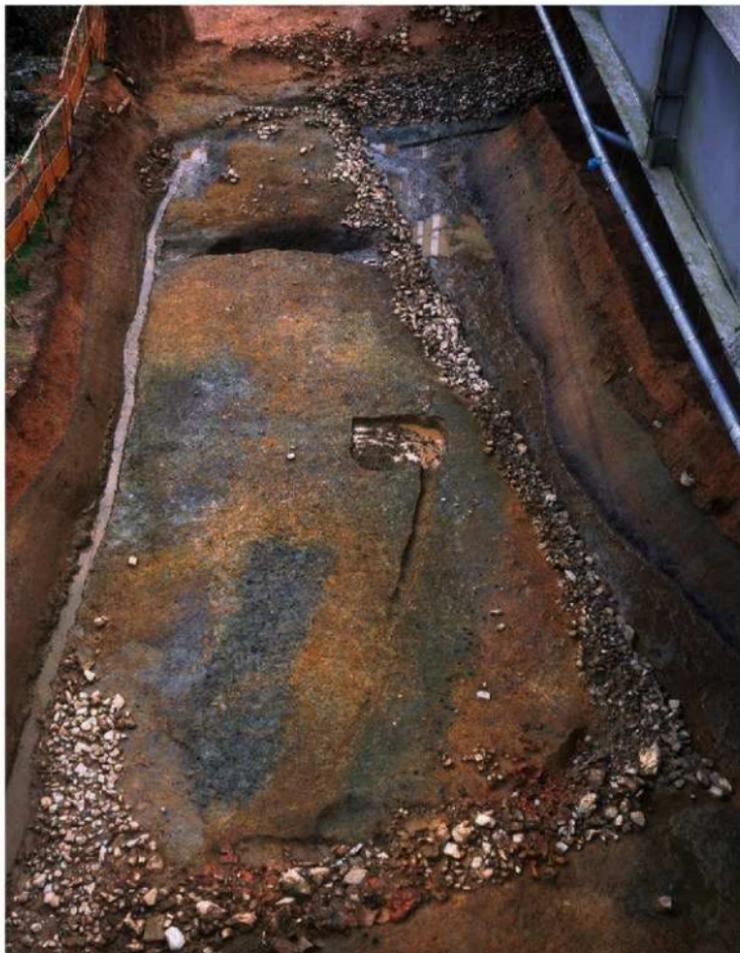
南渡土堤西側斜面全景（第1次調査）南西から



南渡土堤全景（第1次調査）北西から



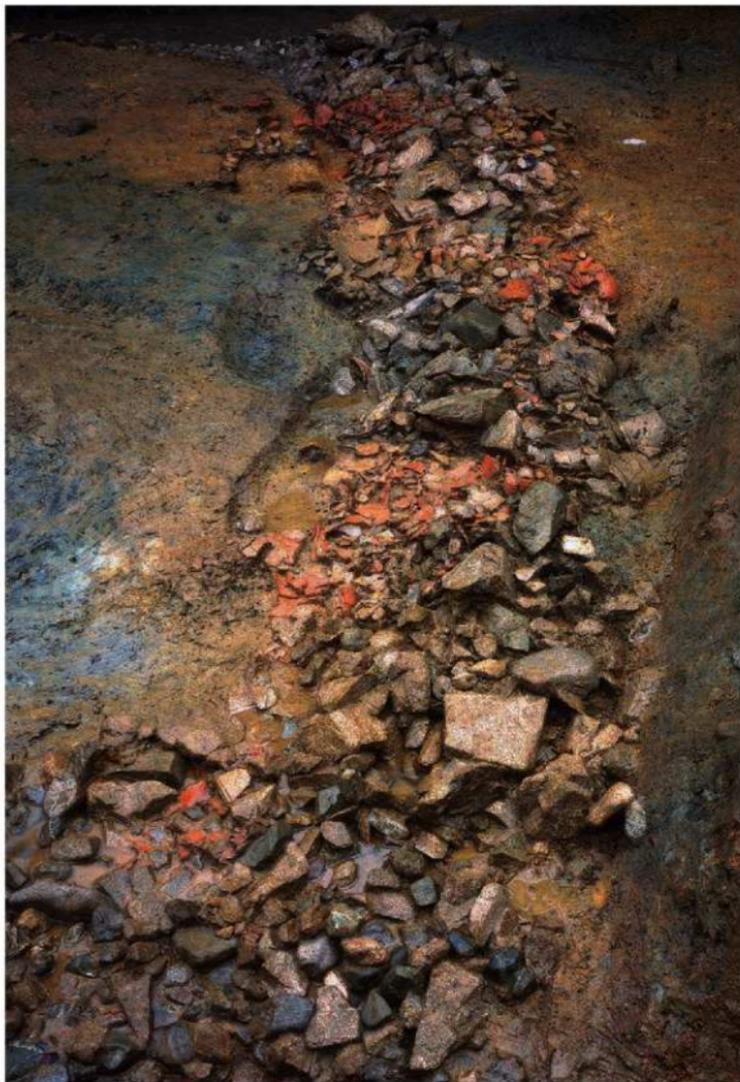
南渡土堤葺石近景（第1次調査）西から



北渡土堤全景（第1次調査）北から



北渡土堤全景（第1次調査）南から



北渡土堤と外堤の接合部近景（第1次調査） 東から



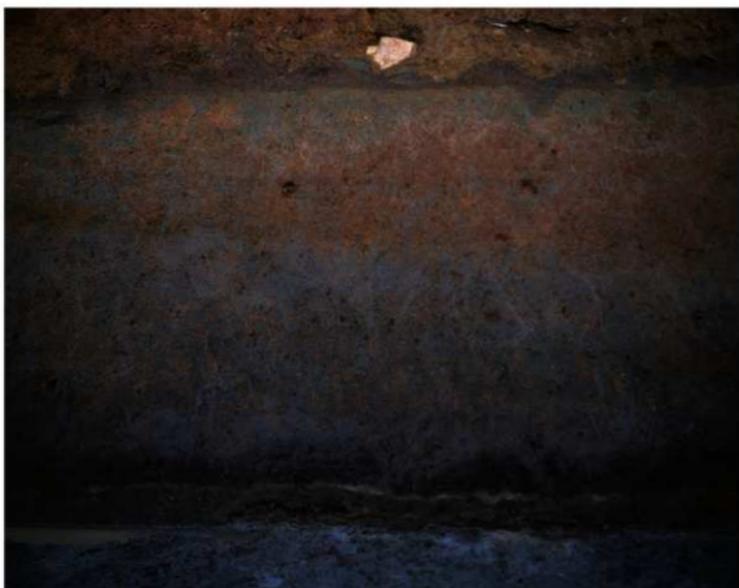
北渡土堤と外堤接合部近景 北から



北渡土堤と外堤の接合部埴輪出土状況 北から



北周濠断面（第2次調査）北東から



北周濠断面近景（第2次調査）東から



池田古墳出土主要埴輪他



南造り出し樹立主要埴輪・小型土製品



北造り出し樹立主要埴輪・小型土製品



前方面南側1段目テラス埴輪出土埴輪



北渡土堤北端出土埴輪



池田古墳出土円筒系埴輪



池田古墳出土円筒埴輪



池田古墳出土朝顔形埴輪・壺形埴輪



池田古墳出土朝顔形埴輪



池田古墳出土土壺形埴輪



池田古墳出土土丹後一因幅型円筒埴輪



池田古墳出土水鳥形埴輪



池田古墳出土水鳥形埴輪



池田古墳出土水鳥形埴輪



池田古墳出土水鳥形埴輪



池田古墳出土水鳥形埴輪



池田古墳出土水鳥形埴輪



池田古墳出土水鳥形埴輪



水鳥形埴輪14



水鳥形埴輪 5



水鳥形埴輪 16



水鳥形埴輪17



水鳥形埴輪17出土状況 北東から



水鳥形埴輪19



水鳥形埴輪23



水鳥形埴輪19出土状況 東から



水鳥形埴輪25



水鳥形埴輪25出土状況 南西から



水鳥形埴輪26



水鳥形埴輪26出土状況 南から



水鳥形埴輪27



水鳥形埴輪27出土状況 南から



水鳥形埴輪28



水鳥形埴輪28出土状況



水鳥形埴輪29



水鳥形埴輪29出土状況 西から



水鳥形埴輪30



水鳥形埴輪30出土状況 西から



水鳥形埴輪31



水鳥形埴輪31出土状況 西から



池田古墳出土家形埴輪



池田古墳出土家形埴輪



池田古墳出土家形埴輪



池田古墳出土家形埴輪



家形埴輪 2



家形埴輪 3



家形埴輪 4



家形埴輪 4



家形埴輪 5



家形埴輪 5



家形埴輪 8



柵形埴輪



盾形埴輪



船形植輪



船形植輪



北造り出し出土小型土製品・小型土器



北造り出し出土小型土製品



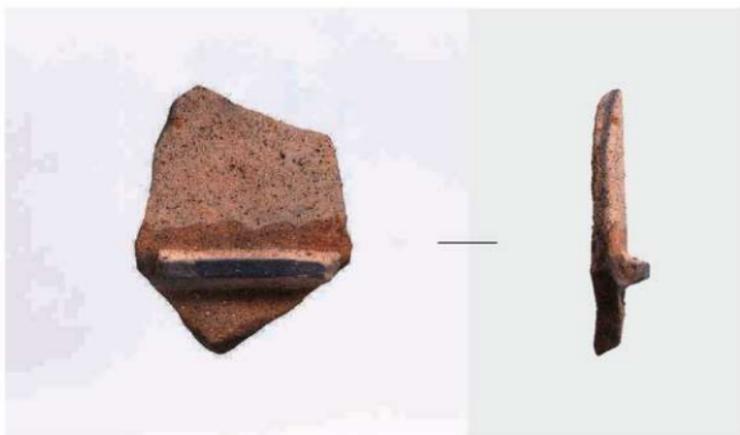
北造り出し出土小型土器（壺・鉢）



北造り出し出土小型土器（高坏）



2種の胎土からなる円筒埴輪



2種の胎土からなる円筒埴輪 (69)



池田古墳出土木製品



池田古墳出土笠形木製品

例 言

1. 本書は、朝来市和田山町平野に所在する池田古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、一般国道9号池田橋盛土化事業（平野地区）に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所からの依頼を受け、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施した。
3. 調査の推移は以下のとおりである。

（発掘作業）

- | | |
|-------|------------------------|
| 本発掘調査 | 平成20年10月26日～平成21年3月23日 |
| | 実施機関：兵庫県立考古博物館 |
| | 工事請負：福井建設株式会社 |
| 本発掘調査 | 平成21年7月6日～平成21年12月22日 |
| | 実施機関：兵庫県立考古博物館 |
| | 工事請負：株式会社安井工務店 |
| 本発掘調査 | 平成22年12月20日～平成23年3月15日 |
| | 実施機関：兵庫県立考古博物館 |
| | 工事請負：株式会社米田建設 |

（出土品整理作業）

- | | |
|--|-----------------------------------|
| | 平成23年6月1日～平成24年3月26日 |
| | 実施機関：兵庫県立考古博物館 |
| | 平成24年8月4日～平成25年3月19日 |
| | 実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 |
| | 平成25年6月20日～平成26年3月19日 |
| | 実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 |
| | 平成26年5月20日～平成27年3月20日 |
| | 実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 |
3. 本発掘調査は、平成20年度に兵庫県立考古博物館 吉識雅仁・山田清朝が、平成21年度に同山上雅弘・山田清朝が、平成22年度に同渡辺 昇・山田清朝が、それぞれ担当した。
 4. 本書の編集は友久伸子の補助を得て山田が行い、第6章を除いては山田が執筆した。
 5. 本報告にかかわる遺物・写真・図面類は兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
 6. 調査後の空中写真の撮影および図化は、平成20年度が三和航測株式会社、平成21年度が株式会社ジオテクノ関西に、平成22年度が株式会社 大設に、それぞれ委託して行った。
 7. 遺物写真の撮影は、平成24年度が谷口フォト株式会社に、平成25年度が株式会社 クレアチオに、それぞれ委託して行った。なお、撮影の一部については、兵庫県立考古博物館（平成24年度以降は、兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部）整理保存課深江英憲が行った。
 8. 調査成果の測量については、四等三角点「301市場公民館」と電子基準点「950342和田山」及び電子基準点「960647青垣」を使用し三級基準点を設置し、これを基準とした。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に位置する。
 9. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とし、一等水準点「第

1169)「交1170」をもとに3級水準点を設置した。

10. 第5図は、国土地理院発行1/25000地形図「八鹿」を使用した。第10図は、国土地理院発行1/25000地形図を編集した『兵庫県遺跡地図』データを使用した。
11. 第499図・第501図・第503図・第505図に使用した写真は、編集者が長野県安曇野市犀川白鳥湖にて撮影したものである。
12. 第512図・第525図・第526図の写真に使用された植輪は、兵庫県立考古博物館「考古楽者」グループが作製したものである。
13. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
14. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。

石野博信・一瀬和夫・伊藤明良・今尾文昭・岩本 崇・上田 睦・魚津知克・岡林峰夫・小栗明彦・加賀見省一・賀来孝代・河上邦彦・河内浩之・北垣聡一郎・木下 亘・清野孝之・藏本晋司・高妻洋成・潮崎 誠・白石太一郎・新谷勝行・杉原和雄・瀬戸谷皓・高橋克壽・立花 聡・谷本 進・千種 浩・辻本與志一・寺沢知子・寺前直人・戸田真美子・富山直人・徳田誠志・松井敬代・田畑 基・中佐古美奈子・中嶋雄二・高 正龍・中尾秀正・中島皆夫・新納 泉・仁尾一人・柳宜田佳男・林 正憲・藤木 透・肥後弘幸・菱田哲郎・榎本誠一・福井 優・古谷 毅・前岡孝彰・丸山 潔・森岡秀人・森田喜久男・山根壬生子・山本輝雄・安田 滋・山本雅和・和田晴吾

凡 例

1. 方位については、平成20年度からの3次の調査およびその後の成果発表において、後円部側を「南」、前方部側を「北」と呼称してきた。しかし、①朝来市教育委員会刊行の調査報告においては後円部側を「西」、前方部側を「東」と呼称していること、②調査成果図をもとにした正確な方位の検討結果から、本報告をもって後円部側を「西」、前方部側を「東」と呼称することにする。

2. 観察表の計測値は以下の通りである。

- ・円筒埴輪は4条5段を前提とする。このため、基底部から口縁部まで残存しない個体については、口縁部を5段目として、基底部を1段目として、表を作成した。
- ・頸径は頸部突帯下端部を基準として計測した。
- ・口縁部もしくは基底部が残存しない円筒埴輪の残存部位について、観察表では3段目・4段目として記載。また、突帯が残存しない円筒埴輪の体部片については、3段目として観察表に掲載した。
- ・()内の数値は残存値である。

3. 家形埴輪の部分名称については、以下の文献を参照した。

三輪嘉六・宮本長二郎「日本の美術 第348号 家形はにわ」至文堂 1995

4. 本書の構成については、以下の方針のもと記述していった。

(1)遺構について

前方部→周辺施設→周濠・外堤の順に報告する。前方部については、1段目→2段目→3段目の順に、周辺施設については造り出し→渡土堤の順に報告する。また、それぞれ南北に分かれているため、南側→北側の順に報告する。

(2)出土物について

埴輪の報告においては、種別ごとに報告する。各種別の報告においては、出土地点単位で報告する。順序として、前方部上段から下段→造り出し・渡土堤→周濠→外堤とする。これは、相互に接合関係の存在する可能性を考慮してのものである。

土器については、埴丘内から出土したものについては、「池田古墳下層遺跡」に伴う土器として取り扱う。他の、特に周濠内から出土した土器については池田古墳に関連した土器として取り扱う。

(3)写真図版について

遺構に関しては、基本的に本文の掲載順に準じている。ただし、埴輪の出土状況について、埴丘・区画溝・石敷き遺構に伴うものは、その箇所で開催している。以下、造り出し斜面・渡土堤斜面・周濠内については、種別ごとに掲載している。

遺物に関しては、図版掲載順を基本として掲載している。

第4節	池田古墳の自然科学分析（花粉分析）報告	463
第5節	池田古墳から出土した牛歯	470
第6節	池田古墳における樹種同定	472
第7節	池田古墳の石材同定	478
第8節	池田古墳における種実同定	487
第9節	池田古墳出土埴輪の蛍光X線分析	490
第7章	出土遺物のまとめ	
第1節	円筒系埴輪	513
第2節	水鳥形埴輪	547
第3節	家形埴輪	563
第4節	その他の埴輪	569
第5節	小型土製品・小型土器	572
第6節	木製品	574
第7節	埴輪等樹立地点の復元	576
第8節	小結	602
第8章	古墳のまとめ	
第1節	前方部	603
第2節	造り出し	608
第3節	渡土堤	611
第4節	墳丘形態の復元	623
第9章	総括	
第1節	調査成果の概略	629
第2節	池田古墳の特徴	631
第3節	池田古墳の歴史・保存・活用	637
	報告書抄録	640

巻首図版目次 本文編(一)

- 巻首図版1
池田古墳遠景 南東上空から
池田古墳遠景 北西上空から
- 巻首図版2
池田古墳遠景 西上空から
池田古墳遠景 南上空から
- 巻首図版3
池田古墳近景 北東上空から
池田古墳近景 北上空から
- 巻首図版4
池田古墳近景 北東上空から
池田古墳全景(池田橋撤去前) 北東上空から
- 巻首図版5
池田古墳全景(迂回路完成後) 北東上空から
池田古墳全景(竣工後) 北東上空から
- 巻首図版6
池田古墳全景 北西上空から
池田古墳全景 南上空から
- 巻首図版7
池田古墳 俯瞰
- 巻首図版8
調査区俯瞰(第1次～第3次調査合成)
- 巻首図版9
南半部(第1次～第3次調査) 俯瞰
- 巻首図版10
南半部近景(第1次調査) 南から
南側1段目斜面全景(第1次調査) 南西から
- 巻首図版11
南側1段目斜面全景(第1次調査) 南東から
南側1段目テラス(第1次調査) 東から
- 巻首図版12
南側2段目葺石全景(第2次調査) 南東から
前方部南側1段目テラス断面(第2次調査) 西から
- 巻首図版13
北半部(第1次～第3次調査) 俯瞰
- 巻首図版14
前方部北側3段目斜面葺石全景(第2次調査) 北から
前方部北側3段目斜面葺石近景(第2次調査) 北から
- 巻首図版15
前方部北側1段目斜面(第1次調査) 西から
前方部北側1段目斜面(第1次調査) 北東から
- 巻首図版16
南造り出し全景(第2次調査) 南から
南造り出し全景(第2次調査) 北から
- 巻首図版17
南造り出し全景(第2次調査) 北から
南造り出し全景(第2次調査) 南東から
- 巻首図版18
北造り出し全景(第2次調査) 南から
北造り出し全景(第2次調査) 南東から
- 巻首図版19
北造り出し全景(第2次調査) 北から
北造り出し全景(第2次調査) 北東から
- 巻首図版20
南渡土堤全景(第1次調査) 南から
南渡土堤西側斜面全景(第1次調査) 南西から
- 巻首図版21
南渡土堤全景(第1次調査) 北西から
南渡土堤葺石近景(第1次調査) 西から
- 巻首図版22
北渡土堤全景(第1次調査) 北から
- 巻首図版23
北渡土堤全景(第1次調査) 南から
- 巻首図版24
北渡土堤と外堤の接合部近景(第1次調査) 東から
- 巻首図版25
北渡土堤と外堤接合部近景 北から
北渡土堤と外堤の接合部堆積出土状況 北から
- 巻首図版26
北周濠断面(第2次調査) 北東から
北周濠断面近景(第2次調査) 東から
- 巻首図版27
池田古墳出土主要埴輪他
- 巻首図版28
南造り出し樹立主要埴輪・小型土製品
- 巻首図版29
北造り出し樹立主要埴輪・小型土製品
- 巻首図版30
前方部南側1段目テラス埴輪列出土埴輪
- 巻首図版31
北渡土堤北端出土埴輪
- 巻首図版32
池田古墳出土円筒系埴輪
池田古墳出土円筒埴輪
- 巻首図版33
池田古墳出土朝顔形埴輪・壺形埴輪
池田古墳出土朝顔形埴輪
- 巻首図版34
池田古墳出土壺形埴輪
池田古墳出土丹後-因幡型円筒埴輪

- 卷首図版35
池田古墳出土水鳥形埴輪
- 卷首図版36
池田古墳出土水鳥形埴輪
- 卷首図版37
池田古墳出土水鳥形埴輪
- 卷首図版38
池田古墳出土水鳥形埴輪
- 卷首図版39
水鳥形埴輪14
- 卷首図版40
水鳥形埴輪 5 水鳥形埴輪16
- 卷首図版41
水鳥形埴輪17 水鳥形埴輪17出土状況 北東から
- 卷首図版42
水鳥形埴輪19 水鳥形埴輪23
水鳥形埴輪19出土状況 東から
- 卷首図版43
水鳥形埴輪25
水鳥形埴輪25出土状況 南西から
- 卷首図版44
水鳥形埴輪26 水鳥形埴輪26出土状況 南から
- 卷首図版45
水鳥形埴輪27 水鳥形埴輪27出土状況 南から
- 卷首図版46
水鳥形埴輪28
- 卷首図版47
水鳥形埴輪28出土状況
- 卷首図版48
水鳥形埴輪29 水鳥形埴輪29出土状況 西から
- 卷首図版49
水鳥形埴輪30 水鳥形埴輪30出土状況 西から
- 卷首図版50
水鳥形埴輪31 水鳥形埴輪31出土状況 西から
- 卷首図版51
池田古墳出土家形埴輪
- 卷首図版52
池田古墳出土家形埴輪
- 卷首図版53
家形埴輪 2 家形埴輪 3
- 卷首図版54
家形埴輪 4
- 卷首図版55
家形埴輪 5
- 卷首図版56
家形埴輪 8 櫛形埴輪
- 卷首図版57
盾形埴輪
- 卷首図版58
船形埴輪
- 卷首図版59
北造り出し出土小型土製品・小型土器
- 卷首図版60
北造り出し出土小型土製品
北造り出し出土小型土器（壺・鉢）
- 卷首図版61
北造り出し出土小型土器（高坏）
- 卷首図版62
2種の胎土からなる円筒埴輪
2種の胎土からなる円筒埴輪（69）
- 卷首図版63
池田古墳出土木製品
- 卷首図版64
池田古墳出土笠形木製品

挿 図 目 次

—本文編—

第1章			
第1図	兵庫県における朝来市の位置……………xvii	第45図	墓石の検出（前方部南側2段目斜面）……………33
第2図	兵庫県下の道路・鉄道網……………1	第46図	完存する水鳥形埴輪の発見……………33
第3図	朝来市の地理的位置……………2	第47図	南造り出し 埴輪出土状況の実測……………33
第4図	和田山町の地理的位置……………3	第48図	兵庫県文化財保護審議委員会……………33
第5図	池田古墳の位置……………4	第49図	幻の取材……………33
第6図	谷底平野横断面……………4	第50図	墳丘北側 埴輪出土状況の実測……………33
第7図	朝来市中心部（城ノ山古墳から）……………5	第51図	断割り調査位置図……………34
第8図	池田古墳周辺の微地形……………5	第52図	トータルステーションシステムによる 出土地点の測量……………34
第9図	宮ノ本道路と調査地……………7	第53図	整理作業……………35
第10図	主要周辺道路……………8	第54図	埴輪の水洗作業1)……………36
第11図	宮ノ本道路全景（東上空から）……………10	第55図	埴輪の水洗作業2)……………36
第12図	池田古墳から見た宮ノ本道路……………10	第56図	櫛形埴輪の復元……………37
第13図	梅田東古墳群 10号墳第1主体部……………11	第57図	円筒埴輪の復元作業……………37
第14図	池田古墳と城ノ山古墳……………13	第58図	水鳥形埴輪の実測……………37
第15図	整備後の茶すり山古墳（西上空から）……………14	第59図	遺物写真の撮影……………38
第16図	但馬における古代交通路……………16	第60図	遺構内のトレース……………38
第17図	池田古墳の調査……………20	第61図	水鳥形埴輪の復元……………38
第18図	平成22年度調査……………21	第62図	レーダーによる三次元計測……………39
第19図	高田地内所在石棺片……………22	第63図	水鳥形埴輪28の3D画像……………39
第20図	復元された長持形石棺……………22	第64図	CTスキャン投影……………39
第2章		第65図	X線透過写真……………39
第21図	竣工後の池田古墳 城ノ山古墳から……………25	第66図	家形埴輪1 身舎の復元……………40
第22図	工事予定地と調査位置……………25	第67図	ポリスチレンフォーム保温板による 屋根の復元……………40
第23図	調査位置図……………26	第68図	モルタルの塗布……………40
第24図	調査位置図（第1次調査）……………26	第69図	家形埴輪1の完成……………40
第25図	機械掘削（南周濠）北から……………27	第70図	水鳥形埴輪14の復元……………40
第26図	周濠の掘削作業（南周濠）北から……………27	第71図	家形埴輪4の復元……………40
第27図	最初の水鳥形埴輪発見……………27	第3章	
第28図	文化財審議委員会視察……………27	第72図	住居跡の検出作業……………41
第29図	ポール写真の撮影……………28	第73図	池田古墳下層遺跡 遺構位置図……………41
第30図	文化庁榎宜田佳男調査官の視察……………28	第74図	竪穴住居跡……………42
第31図	木桶の取り上げ（北周濠）……………28	第75図	竪穴住居跡……………42
第32図	現地説明会……………28	第76図	SD01断面 西から……………43
第33図	調査位置図（第2次調査）……………29	第77図	SD01断面……………43
第34図	前方部南側1段目テラスの検出……………29	第78図	SD02断面 西から……………43
第35図	南造り出しの調査……………29	第79図	SD02断面……………43
第36図	南造り出し埴輪の検出……………30	第80図	池田古墳下層遺跡出土土器……………46
第37図	墓石の実測（南側2段目斜面）……………30	第4章	
第38図	兵庫県文化財保護審議委員会……………30	第81図	全体図（第1次～第3次）……………47
第39図	池田古墳調査整備検討委員会……………30	第82図	平面図（南半）……………48
第40図	区画溝の検出……………31	第83図	池田古墳残存部（南半）……………48
第41図	北造り出しの調査……………31	第84図	平面図（北半）……………49
第42図	埴輪出土状況の実測（北造り出し）……………31	第85図	池田古墳残存部（北半）……………49
第43図	調査位置図（第3次調査）……………32	第86図	基本土層図（南半）……………52
第44図	第3次調査と迂回路……………32	第87図	基本土層図（北半）……………53

第88図	前方部南側斜面の検出	54	第138図	北側3段目斜面	97
第89図	前方部南側	54	第139図	北側3段目斜面葺石	98
第90図	前方部北側	55	第140図	北側2段目テラス 横断面 (Bライン)	99
第91図	南側1段目斜面	56	第141図	北側3段目斜面葺石 (A区)	99
第92図	南側1段目斜面断面	57	第142図	北側3段目斜面葺石 (B区)	100
第93図	南側1段目斜面葺石 (a~c区)	58	第143図	北側3段目斜面葺石断面	101
第94図	南側1段目斜面葺石 (a区・b区)	59	第144図	北側3段目斜面 墳丘断面	101
第95図	南側1段目斜面葺石 (c区)	60	第145図	南造り出しの調査	102
第96図	南側1段目斜面葺石 (d区・e区)	61	第146図	造り出し	102
第97図	南側1段目斜面葺石立面図 (d区)	62	第147図	南造り出し 断割り断面	103
第98図	南側1段目斜面葺石平面図 (d区)	63	第148図	南造り出し 平面図・断面図	104
第99図	南側1段目斜面葺石の検出	64	第149図	南造り出し 断面	105
第100図	南側1段目斜面葺石立面図 (e区)	64	第150図	南造り出し 北側填輪列	105
第101図	南側1段目斜面葺石平面図 (e区)	65	第151図	南造り出し 北側填輪列 (P群・Q群)	106
第102図	南側1段目斜面 葺石断面	66	第152図	南造り出し 西側填輪列 (R群・S群)	107
第103図	北側1段目斜面	67	第153図	南造り出し 東側斜面葺石断面	109
第104図	北側1段目斜面葺石 (f区・g区)	68	第154図	南造り出し 東側斜面葺石	109
第105図	北側1段目斜面葺石 (f区)	69	第155図	南造り出し 東側斜面葺石 (A区)	110
第106図	北側1段目斜面葺石 (g区)	70	第156図	南造り出し 東側斜面葺石 (B区)	111
第107図	北側1段目斜面横断面 (1)	71	第157図	南造り出し 南側斜面葺石	112
第108図	北側1段目斜面葺石の検出	71	第158図	南造り出し 南側斜面葺石 (A区)	113
第109図	北側1段目斜面横断面 (2)	72	第159図	南造り出し 南側斜面葺石 (B区)	114
第110図	南側1段目テラスの検出	73	第160図	南造り出し 南側斜面葺石断面	115
第111図	南側1段目テラス	73	第161図	南造り出し 北側斜面葺石	115
第112図	南側1段目テラス 横断面	74	第162図	南造り出し 北側斜面葺石 (A区)	116
第113図	南側1段目テラス 断割り断面1)	75	第163図	南造り出し 北側斜面葺石 (B区)	117
第114図	南側1段目テラス 断割り断面2)	76	第164図	南造り出し 西側斜面葺石	118
第115図	南側1段目テラス 填輪列 (A群・B群)	78	第165図	区画溝の検出	119
第116図	南側1段目テラス 填輪列 (C群)	79	第166図	区画溝	119
第117図	南側1段目テラス 填輪列 (D群)	80	第167図	区画溝 (A区)	120
第118図	南側1段目テラス 填輪列 (E群)	81	第168図	区画溝 (B区)	121
第119図	H41掘り方底部	81	第169図	区画溝 (C区)	122
第120図	南側1段目テラス 填輪列 (F群)	82	第170図	区画溝内上層部断面	122
第121図	南側1段目テラス 填輪列 (G群)	83	第171図	区画溝横断面	123
第122図	南側1段目テラス 填輪列 (G群・H群)	84	第172図	区画溝土層断面	124
第123図	P1	85	第173図	北造り出し 断割り断面	125
第124図	P1 平面・断面図	85	第174図	北造り出し	126
第125図	北側1段目テラス	86	第175図	北造り出し 東側斜面の検出	127
第126図	P2	87	第176図	北造り出し 東側斜面葺石	127
第127図	北側1段目テラス 横断面	87	第177図	北造り出し 東側斜面葺石 (A区)	128
第128図	北側1段目テラス 填輪列 (I群・K群)	88	第178図	北造り出し 東側斜面葺石 (B区)	129
第129図	北側1段目テラス 填輪列 (L群・M群)	89	第179図	北造り出し 東側斜面葺石断面1)	130
第130図	北側1段目テラス 填輪列 (N群・O群)	90	第180図	北造り出し 東側斜面葺石断面2)	131
第131図	填輪列の検出作業	91	第181図	北造り出し 北側斜面葺石	132
第132図	南側2段目斜面	92	第182図	北造り出し 北側斜面葺石断面	133
第133図	南側2段目斜面葺石 (A区)	93	第183図	石敷き遺構	135
第134図	南側2段目斜面葺石 (B区)	94	第184図	石敷き遺構 (1区・2区)	136
第135図	南側2段目斜面葺石横断面	95	第185図	石敷き遺構 (2区)	137
第136図	南側2段目斜面葺石 (C区)	96	第186図	石敷き遺構 (3区・4区)	138
第137図	北側3段目斜面葺石の実測	97	第187図	石敷き遺構の検出	139

第188図	石敷き遺構横断面	140	第237図	前方部南側1段目テラス	
第189図	南渡土堤の調査	141		主要埴輪出土位置	181
第190図	渡土堤	141	第238図	h1 埴輪出土状況	182
第191図	南渡土堤	142	第239図	h2 埴輪出土状況	183
第192図	南渡土堤横断面 (A-B)	143	第240図	h3 埴輪出土状況	183
第193図	南渡土堤断り断面	143	第241図	h4 埴輪出土状況	184
第194図	南渡土堤西側斜面葺石	144	第242図	h7 埴輪出土状況	184
第195図	南渡土堤横断面	145	第243図	h5 埴輪出土状況	185
第196図	南渡土堤西側斜面葺石 (1区)	146	第244図	27体外面拓影	187
第197図	南渡土堤西側斜面葺石 (2区)	147	第245図	h6 埴輪出土状況	189
第198図	南渡土堤西側斜面葺石 (3区)	148	第246図	134底部下面	195
第199図	南渡土堤西側斜面葺石横断面	149	第247図	埴輪列出土円筒系埴輪	199
第200図	南渡土堤南端部	150	第248図	前方部南側1段目斜面	
第201図	南渡土堤南端部横断面	151		主要円筒系埴輪出土位置	201
第202図	北渡土堤の調査	152	第249図	160拓影	203
第203図	断面剥ぎ取り作業	152	第250図	161拓影	203
第204図	剥ぎ取り断面 (右半が北渡土堤)	152	第251図	163拓影	203
第205図	北渡土堤	153	第252図	162拓影	203
第206図	前方部～北渡土堤土層断面	154	第253図	174拓影	204
第207図	北渡土堤横断面	155	第254図	区画溝内主要埴輪出土位置	205
第208図	北渡土堤西側斜面葺石	156	第255図	h12埴輪出土状況の実測	206
第209図	北渡土堤西側斜面葺石 (1区)	157	第256図	h8 埴輪出土状況	206
第210図	北渡土堤西側斜面葺石 (2区)	158	第257図	h9 埴輪出土状況	207
第211図	北渡土堤西側斜面葺石 (3区)	159	第258図	h10 埴輪出土状況	207
第212図	北渡土堤西側斜面葺石断面	160	第259図	h11 埴輪出土状況	208
第213図	北渡土堤東側斜面葺石	161	第260図	h11 円筒系埴輪出土位置	209
第214図	北渡土堤東側斜面葺石断面	161	第261図	h12 埴輪出土状況	209
第215図	溝状遺構	162	第262図	h16 埴輪出土状況	209
第216図	溝状遺構断面	162	第263図	h14 埴輪出土状況	210
第217図	北渡土堤北端部	163	第264図	h16-h21 埴輪出土状況	211
第218図	北渡土堤北端 埴輪出土状況	164	第265図	203拓影	215
第219図	北渡土堤北端 溝状遺構横断面	165	第266図	242 1次口縁上端面	219
第220図	北渡土堤北端 埴輪の検出作業	165	第267図	242拓影	219
第221図	南周濠	166	第268図	245拓影	221
第222図	南周濠断面	167	第269図	南造り出し北側埴輪列出土埴輪	222
第223図	土層断面実測	168	第270図	南造り出し西側埴輪列出土埴輪	224
第224図	北周濠	168	h18 埴輪出土状況	225	
第225図	北周濠断面	169	第272図	h19 埴輪出土状況	226
第226図	北周濠断面 (第2次調査西壁)	169	第273図	h20 埴輪出土状況	226
第227図	南外堤の調査 (第3次調査)	170	第274図	286線刻拓影	226
第228図	南外堤断面	171	第275図	291拓影	228
第229図	北外堤断面	173	第276図	292拓影	228
			第277図	293拓影	229
			第278図	352線刻拓影	233
第230図	池田古墳関連出土遺物	174	第279図	h22 埴輪出土状況	240
第231図	主要円筒系埴輪出土位置 (南側)	175	第280図	h23 埴輪出土状況	240
第232図	主要円筒系埴輪出土位置 (北側)	176	第281図	428拓影	241
第233図	出土円筒系埴輪	177	第282図	477線刻拓影	245
第234図	円筒埴輪・朝顔形埴輪 部分名称	178	第283図	495頭部	246
第235図	壺形埴輪 部分名称	178	第284図	519線刻拓影	249
第236図	丹後・因幡型円筒埴輪 上部名称	179			

第5章

第285回	h24 埴輪出土状況	250	第332回	水鳥形埴輪28出土状況	328
第286回	541線刻	252	第333回	水鳥形埴輪29出土状況	330
第287回	h25 埴輪出土状況	253	第334回	水鳥形埴輪30出土状況	333
第288回	h26 埴輪出土状況	254	第335回	水鳥形埴輪31出土状況	334
第289回	h27 埴輪出土状況	262	第336回	南造り出し水鳥形埴輪出土位置	336
第290回	h28 埴輪出土状況	262	第337回	769出土位置	337
第291回	h29 埴輪出土状況	264	第338回	854拓影	344
第292回	h30 埴輪出土状況	264	第339回	857出土位置	345
第293回	h31 埴輪出土状況	267	第340回	前方部南側1段目斜面水鳥形埴輪出土位置	346
第294回	h32-h34 埴輪出土状況	269	第341回	家形埴輪出土地点(南側)	348
第295回	656拓影	270	第342回	家形埴輪部分名称(高床式入母屋建物)	349
第296回	北端部出土円筒系埴輪	272	第343回	家形埴輪の規模(高床式入母屋建物)	349
第297回	675出土状況	273	第344回	家形埴輪規模・名称(高床式切妻建物)	350
第298回	695出土状況	273	第345回	家形埴輪1出土地点	350
第299回	h35 埴輪出土状況	274	第346回	家形埴輪1断面	351
第300回	714拓影	281	第347回	家形埴輪2出土地点	353
			第348回	家形埴輪3出土地点	355
			第349回	家形埴輪4出土地点	357
			第350回	家形埴輪5出土地点	361
			第351回	家形埴輪6出土地点	362
			第352回	家形埴輪7出土地点	363
			第353回	家形埴輪8出土地点	364
			第354回	家形埴輪9出土地点	365
			第355回	家形埴輪10出土地点	367
			第356回	家形埴輪11出土地点	367
			第357回	妻側壁体 線刻	368
			第358回	家形埴輪12出土地点	368
			第359回	家形埴輪13出土地点	369
			第360回	家形埴輪14出土地点	370
			第361回	家形埴輪15出土地点	371
			第362回	家形埴輪16出土地点	371
			第363回	家形埴輪17出土地点	372
			第364回	家形埴輪18出土地点	373
			第365回	家形埴輪19出土地点	373
			第366回	家形埴輪20出土地点	374
			第367回	家形埴輪21出土地点	375
			第368回	家形埴輪22出土地点	375
			第369回	家形埴輪23出土地点	376
			第370回	家形埴輪24出土地点	378
			第371回	家形埴輪出土地点(北側)	383
			第372回	櫛形埴輪部分名称	386
			第373回	櫛形埴輪出土地点(南側)	386
			第374回	船形埴輪出土地点	395
			第375回	船形埴輪部分名称	395
			第376回	船形埴輪の規模	396
			第377回	北造り出し小型木製品出土位置図	400
			第378回	主要木製品出土位置図	403
			第379回	W1出土状況	404
			第380回	W2・W7・W8出土状況	405

— 本文欄二 —

第301回	水鳥形埴輪出土位置図	284
第302回	池田古墳出土水鳥形埴輪	285
第303回	水鳥形埴輪部分名称	285
第304回	水鳥形埴輪の規模	286
第305回	主要水鳥形埴輪出土位置	287
第306回	水鳥形埴輪1出土状況	288
第307回	水鳥形埴輪2・3出土状況	291
第308回	水鳥形埴輪5出土状況	293
第309回	水鳥形埴輪6出土位置	294
第310回	水鳥形埴輪4・7・8・10出土状況	296
第311回	水鳥形埴輪9出土位置	298
第312回	水鳥形埴輪11出土状況	300
第313回	水鳥形埴輪12出土位置	301
第314回	水鳥形埴輪13・他(827)出土状況	302
第315回	水鳥形埴輪14出土位置	303
第316回	水鳥形埴輪15出土位置	305
第317回	水鳥形埴輪16出土状況	306
第318回	水鳥形埴輪17出土状況の実測	308
第319回	水鳥形埴輪17出土状況	309
第320回	水鳥形埴輪18出土位置	311
第321回	水鳥形埴輪19出土状況	312
第322回	水鳥形埴輪19出土状況	313
第323回	水鳥形埴輪20出土状況	314
第324回	水鳥形埴輪21出土状況	316
第325回	水鳥形埴輪22-23出土状況	317
第326回	水鳥形埴輪24出土状況	320
第327回	水鳥形埴輪25出土状況	322
第328回	水鳥形埴輪26出土状況	324
第329回	水鳥形埴輪26 拓影	325
第330回	水鳥形埴輪27出土状況	326
第331回	水鳥形埴輪28出土状況	327

第381図	W5・W9出土状況	406	第430図	池田古墳の種実	489
第6章					
第382図	暦年較正年代グラフ(参考)	416	第431図	分析対象古墳	493
第383図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)	426	第432図	№1～72試料のK-Ca、Rb-Sr分布図	505
第384図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)	427	第433図	№1～72試料のK-Rb、Ca-Sr相関図	505
第385図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3)	428	第434図	南地区出土円筒系埴輪の両分布図	505
第386図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(4)	429	第435図	北地区出土円筒系埴輪の両分布図	505
第387図	砂の粒径組成(1)	430	第436図	家形埴輪の両分布図	506
第388図	砂の粒径組成(2)	431	第437図	水鳥形埴輪の両分布図	506
第389図	砂の粒径組成(3)	432	第438図	楕形埴輪、盾形埴輪の両分布図	506
第390図	砂の粒径組成(4)	433	第439図	土師器の両分布図	506
第391図	砕屑物・基質・孔隙の割合	434	第440図	南地区出土円筒系埴輪の両相関図	507
第392図	胎土薄片(1)	438	第441図	北地区出土円筒系埴輪の両相関図	507
第393図	胎土薄片(2)	439	第442図	水鳥形、楕形、盾形埴輪の両相関図	507
第394図	胎土薄片(3)	440	第443図	前方部南側1段目テラス出土埴輪の両分布図	507
第395図	胎土薄片(4)	441	第444図	前方部南側1段目テラス出土埴輪の両相関図	508
第396図	胎土薄片(5)	442	第445図	前方部北側1段目のテラス・斜面出土埴輪の両分布図	508
第397図	胎土薄片(6)	443	第446図	前方部北側1段目のテラス・斜面出土埴輪の両相関図	508
第398図	胎土薄片(7)	444	第447図	南造り出し出土埴輪の両分布図	508
第399図	胎土薄片(8)	445	第448図	南造り出し出土埴輪の両相関図	509
第400図	胎土薄片(9)	446	第449図	南造り出し北側埴輪列出土埴輪の両分布図	509
第401図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図1)	449	第450図	南造り出し北側埴輪列出土埴輪の両相関図	509
第402図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図2)	450	第451図	南造り出し西側埴輪列出土埴輪の両分布図	509
第403図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図3)	451	第452図	南造り出し出土家形埴輪の両分布図	510
第404図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図4)	452	第453図	南造り出し出土家形埴輪の両相関図	510
第405図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図5)	453	第454図	南波土提出土埴輪の両分布図	510
第406図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図6)	454	第455図	南波土提出土埴輪の両相関図	510
第407図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図7)	455	第456図	北波土提出土埴輪の両分布図	511
第408図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図8)	456	第457図	北波土提出土埴輪の両相関図	511
第409図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図9)	457	第458図	岡田2号墳出土埴輪の両分布図	511
第410図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図10)	458	第459図	岡田2号墳出土埴輪の両相関図	511
第411図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図11)	459	第460図	その他の古墳出土埴輪の両分布図	512
第412図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図12)	460	第461図	その他の古墳出土埴輪の両相関図	512
第413図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図13)	461	第7章		
第414図	分析試料と蛍光X線スペクトル(図14)	462	第462図	円筒埴輪口縁部の分類	513
第415図	サンプリング位置図	464	第463図	突帯断面の分類	515
第416図	花粉化石群集の層位分布	466	第464図	円筒埴輪の法量(口縁部高)	516
第417図	花粉化石	469	第465図	円筒系埴輪の法量(底部高)	517
第418図	池田古墳の動物遺体	471	第466図	円筒埴輪の法量(口径)	517
第419図	池田古墳の木製品Ⅰ	474	第467図	円筒系埴輪の法量(底径)	519
第420図	池田古墳の木製品Ⅱ	475	第468図	円筒埴輪の規格(1)	520
第421図	池田古墳の木製品Ⅲ	476	第469図	各規格の円筒埴輪	520
第422図	池田古墳の木製品Ⅳ	477	第470図	円筒埴輪の規格(2)	521
第423図	石材サンプリング位置図(南側)	478	第471図	主要朝顔形埴輪・壺形埴輪出土位置(南側)	525
第424図	詳細サンプリング位置図(南側)	479	第472図	主要朝顔形埴輪・壺形埴輪出土位置(北側)	526
第425図	石材サンプリング位置図(北側)	480	第473図	朝顔形埴輪・壺形埴輪 口縁部の分類	527
第426図	詳細サンプリング位置図(北側)	481	第474図	朝顔形埴輪・壺形埴輪 頂部突帯の分類	527
第427図	古墳周辺石材採取地点	482	第475図	朝顔形埴輪の分類(1)	528
第428図	池田古墳の位置と周辺の地質	485	第476図	朝顔形埴輪の分類(2)	529
第429図	池田古墳出土石材のマイクロスコブ写真	486	第477図	池田古墳出土壺形埴輪(1)	531

第478図	池田古墳出土壺形埴輪(2)……………	532	第526図	水鳥形埴輪の樹立(2)……………	588
第479図	主要壺形埴輪……………	533	第527図	南造り出し南辺樹立円筒系埴輪(1)……………	589
第480図	壺形埴輪の分類(1)……………	534	第528図	南造り出し南辺樹立円筒系埴輪(2)……………	590
第481図	壺形埴輪の分類(2)……………	535	第529図	南造り出し樹立円筒系埴輪……………	591
第482図	丹後・因幡型円筒埴輪出土位置……………	535	第530図	南造り出し埴輪樹立位置の復元……………	592
第483図	池田古墳出土丹後・因幡型円筒埴輪……………	536	第531図	南造り出し上樹立形象埴輪(1)……………	593
第484図	丹後・因幡型円筒埴輪の分類……………	536	第532図	南造り出し上樹立形象埴輪(2)……………	594
第485図	線刻集成(1)……………	538	第533図	南造り出し裾部樹立水鳥形埴輪……………	595
第486図	線刻集成(2)……………	539	第534図	北造り出し埴輪出土位置図……………	596
第487図	線刻集成(3)……………	540	第535図	北造り出し樹立円筒系埴輪……………	597
第488図	円筒系埴輪の規格(1)……………	541	第536図	北造り出し樹立形象埴輪・小型土製品……………	598
第489図	円筒系埴輪の規格(2)……………	542	第537図	主要水鳥形埴輪配置図……………	600
第490図	円筒埴輪と朝顔形埴輪……………	543	第538図	池田古墳出土主要埴輪……………	602
第491図	背部の縦合(上側:縦合1 下側:縦合2)……………	547	第8章		
第492図	水鳥形埴輪の頭部成形……………	548	第539図	前方部残存範囲……………	603
第493図	尾部成形……………	549	第540図	池田古墳横断面(南側)……………	604
第494図	水鳥形埴輪製作手順……………	550	第541図	池田古墳横断面(北側)……………	605
第495図	水鳥形埴輪頭部表現の分類……………	551	第542図	前方部横断面の復元……………	606
第496図	水鳥形埴輪 背部表現の分類(1)……………	552	第543図	南周濠内の水位(ケース1)……………	612
第497図	水鳥形埴輪 背部表現の分類(2)……………	553	第544図	南周濠内冠水状況(ケース1)……………	613
第498図	水鳥形埴輪17……………	557	第545図	南周濠内の水位(ケース2)……………	614
第499図	コハクチョウ……………	557	第546図	南周濠内冠水状況(ケース2)……………	615
第500図	水鳥形埴輪25……………	557	第547図	北周濠内冠水状況(ケース3)……………	616
第501図	カモ……………	557	第548図	北周濠内の水位(ケース3)……………	617
第502図	水鳥形埴輪31……………	557	第549図	北周濠内冠水状況(ケース4)……………	618
第503図	コハクチョウの嘴……………	557	第550図	北周濠内の水位(ケース4)……………	619
第504図	水鳥形埴輪16 風切……………	558	第551図	北周濠内冠水状況(ケース5)……………	620
第505図	コハクチョウ(後姿)……………	558	第552図	北周濠内の水位(ケース5)……………	621
第506図	水鳥形埴輪の規格……………	560	第553図	南周濠冠水状況(ケース2)……………	622
第507図	3規格の水鳥形埴輪……………	560	第554図	墳丘の復元……………	624
第508図	棟木の分類……………	564	第555図	池田古墳の規格……………	626
第509図	家形埴輪の分類……………	566	第556図	仲津山古墳との比較……………	627
第510図	屋根と身舎の接合……………	567	第557図	池田古墳の復元……………	627
第511図	水鳥形埴輪の樹立(1)……………	576	第9章		
第512図	水鳥形埴輪の樹立(2)……………	576	第558図	南造り出しへの導線……………	632
第513図	1段目埴輪列……………	578	第559図	北造り出しへの導線……………	633
第514図	南造り出し 円筒系埴輪出土位置図……………	580	第560図	導線の高低差……………	634
第515図	南造り出し西辺樹立円筒系埴輪……………	581	第561図	竈跡 東から……………	637
第516図	南造り出し北辺 円筒系埴輪出土位置図……………	581	第562図	工房跡 北から……………	637
第517図	南造り出し東辺 円筒系埴輪出土位置図……………	582	第563図	池田橋下の墳丘……………	638
第518図	南造り出し南辺 円筒系埴輪出土位置図……………	582	第564図	京都方面迂回路(南周濠) 北東から……………	638
第519図	南造り出し北辺樹立円筒系埴輪(1)……………	583	第565図	砂による養生(前方部北側1段目斜面) 北から……………	638
第520図	南造り出し北辺樹立円筒系埴輪(2)……………	584	第566図	EPS工法による盛土(1)……………	639
第521図	南造り出し北辺樹立円筒系埴輪(3)……………	585	第567図	EPS工法による盛土(2)……………	639
第522図	南造り出し北辺樹立円筒系埴輪(4)……………	586	第568図	EPS工法による盛土(3)……………	639
第523図	南造り出し東辺樹立円筒系埴輪(1)……………	587	第569図	EPS工法による盛土(4)……………	639
第524図	南造り出し東辺樹立円筒系埴輪(2)……………	588			
第525図	水鳥形埴輪の樹立(1)……………	588			

表 目 次

—本文編一—	
第1表 主要周辺遺跡一覧……………	9
第2表 池田古墳下層遺跡出土土器観察表1)……………	44
第3表 池田古墳下層遺跡出土土器観察表2)……………	45
第4表 F群埴輪間規模……………	77
第5表 G群埴輪間規模……………	80
第6表 北側埴輪列P群埴輪間規模……………	108
第7表 北側埴輪列Q群埴輪間規模……………	108
第8表 西側埴輪列埴輪間規模……………	108
—本文編二—	
第9表 土錘計測表……………	412
第10表 放射性炭素年代測定結果 (δ ¹³ C補正值)……………	415
第11表 放射性炭素年代測定結果 (δ ¹³ C未補正值, 暦年較正用 ¹³ C年代, 較正年代)……………	415
第12表 試料一覧……………	417
第13表 薄片観察結果(1)……………	419
第14表 薄片観察結果(2)……………	420
第15表 薄片観察結果(3)……………	421
第16表 薄片観察結果(4)……………	422
第17表 薄片観察結果(5)……………	423
第18表 薄片観察結果(6)……………	424
第19表 薄片観察結果(7)……………	425
第20表 胎土分類結果……………	435
第21表 分析結果一覧……………	448
第22表 花粉分析結果……………	465
第23表 池田古墳における動物遺存体同定結果……………	470
第24表 池田古墳における樹種同定結果……………	472
第25表 葺石と石材……………	483
第26表 分析試料一覧(1)……………	483
第27表 分析試料一覧(2)……………	484
第28表 池田古墳における種実同定結果……………	489
第29表 分析試料一覧(1)……………	491
第30表 分析試料一覧(2)……………	492
第31表 分析結果一覧(1)……………	500
第32表 分析結果一覧(2)……………	501
第33表 分析結果一覧(3)……………	502
第34表 分析結果一覧(4)……………	503
第35表 分析結果一覧(5)……………	504
第36表 周辺の古墳出土埴輪……………	504
第37表 体部突帯間規模……………	518
第38表 朝顔形埴輪突帯間規模……………	528
第39表 水鳥形埴輪 製作技法・表現方法一覧(1)……………	554
第40表 水鳥形埴輪 製作技法・表現方法一覧(2)……………	555
第41表 主要家形埴輪一覧(1)……………	564
第42表 主要家形埴輪一覧(2)……………	565
第43表 南造り出しにおける円筒系埴輪の樹立位置……………	579
第44表 南北造り出しの比較……………	609
第45表 構成要素の比較……………	634

図 版 目 次 (図版編)

円筒系埴輪

図版1 埴輪

前方部南側 2 段目斜面出土埴輪 (1~9)

図版2 埴輪

前方部南側 2 段目斜面出土埴輪 (10~16)

前方部南側 1 段目テラス出土埴輪 (1) (17)

図版3 埴輪

前方部南側 1 段目テラス出土埴輪 (2) (18~24)

図版4 埴輪

前方部南側 1 段目テラス出土埴輪 (3) (25~32)

図版5 埴輪

前方部南側 1 段目テラス出土埴輪 (4) (33~36)

図版6 埴輪

前方部南側 1 段目テラス出土埴輪 (5) (37)

図版7 埴輪

前方部南側 1 段目テラス出土埴輪 (6) (38)

図版8 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (1) (39)

図版9 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (2) (40~42)

図版10 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (3) (43~49)

図版11 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (4) (50~62)

図版12 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (5) (63~67)

図版13 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (6) (68~73)

図版14 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (7) (74~82)

図版15 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (8) (83~87)

図版16 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (9) (88~95)

図版17 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (10)

(96~103)

図版18 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (11)

(104~109)

図版19 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (12)

(110~116)

図版20 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (13)

(117~127)

図版21 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (14)

(128~136)

図版22 埴輪

前方部南側 1 段目テラス埴輪列出土埴輪 (15)

(137~139)

前方部南側 1 段目斜面出土埴輪 (1) (140~144)

図版23 埴輪

前方部南側 1 段目斜面出土埴輪 (2) (145~158)

図版24 埴輪

前方部南側 1 段目斜面出土埴輪 (3)

(159~163・166~177)

図版25 埴輪

区画溝出土埴輪 (1) (178~180)

図版26 埴輪

区画溝出土埴輪 (2) (181~186)

図版27 埴輪

区画溝出土埴輪 (3) (187~190)

図版28 埴輪

区画溝出土埴輪 (4) (191~192)

図版29 埴輪

区画溝出土埴輪 (5) (193~198)

図版30 埴輪

区画溝出土埴輪 (6) (199~205)

図版31 埴輪

区画溝出土埴輪 (7) (206~221)

図版32 埴輪

区画溝出土埴輪 (8) (222~232・236~239)

図版33 埴輪

区画溝出土埴輪 (9) (240~242)

図版34 埴輪

区画溝出土埴輪 (10) (243)

図版35 埴輪

区画溝出土埴輪 (11) (244~246)

図版36 埴輪

区画溝出土埴輪 (12) (247~252)

図版37 埴輪

区画溝出土埴輪 (13) (253)

図版38 埴輪

南造り出し 北側埴輪列出土埴輪 (1) (254~263)

図版39 埴輪

南造り出し 北側埴輪列出土埴輪 (2) (264~269)

図版40 埴輪

南造り出し 北側埴輪列出土埴輪 (3) (270~276)

南造り出し 西側埴輪列出土埴輪 (1) (277~281)

- 図版41 埴輪
南造り出し 西側埴輪列出土埴輪 (2) (282~285)
南造り出し出土埴輪 (1) (286)
- 図版42 埴輪
南造り出し出土埴輪 (2) (287~288)
- 図版43 埴輪
南造り出し出土埴輪 (3) (289~291)
- 図版44 埴輪
南造り出し出土埴輪 (4) (292~293)
- 図版45 埴輪
南造り出し出土埴輪 (5) (294~301)
- 図版46 埴輪
南造り出し出土埴輪 (6) (302~315)
- 図版47 埴輪
南造り出し出土埴輪 (7) (316~331)
- 図版48 埴輪
南造り出し出土埴輪 (8) (332~344)
- 図版49 埴輪
南造り出し出土埴輪 (9) (345~354~366~368)
- 図版50 埴輪
南造り出し出土埴輪 (10) (369~377)
- 図版51 埴輪
南造り出し出土埴輪 (11) (378~388)
- 図版52 埴輪
南造り出し出土埴輪 (12) (389~403)
- 図版53 埴輪
南造り出し出土埴輪 (13) (404)
- 図版54 埴輪
南造り出し出土埴輪 (14) (405~406)
- 図版55 埴輪
南造り出し出土埴輪 (15) (407~411)
- 図版56 埴輪
南造り出し出土埴輪 (16) (412~419)
- 図版57 埴輪
南造り出し出土埴輪 (17) (420~421)
- 図版58 埴輪
南造り出し出土埴輪 (18) (422~424)
- 図版59 埴輪
南波土堤出土埴輪 (1) (425~431)
- 図版60 埴輪
南波土堤出土埴輪 (2) (432~447)
- 図版61 埴輪
南波土堤出土埴輪 (3) (448~460)
- 図版62 埴輪
南波土堤出土埴輪 (4) (461~475~477)
- 図版63 埴輪
南波土堤出土埴輪 (5) (478~487)
- 図版64 埴輪
南波土堤出土埴輪 (6) (488~495)
- 図版65 埴輪
南波土堤出土埴輪 (7) (496~501)
- 図版66 埴輪
南波土堤出土埴輪 (8) (502~506~508~513)
- 図版67 埴輪
南波土堤出土埴輪 (9) (515~518)
南外堤出土埴輪 (519~522)
- 図版68 埴輪
南周濠出土埴輪 (1) (523~535)
- 図版69 埴輪
南周濠出土埴輪 (2) (536~539)
- 図版70 埴輪
南周濠出土埴輪 (3) (540~541)
- 図版71 埴輪
前方部北側1段目斜面出土埴輪 (1) (542~545)
- 図版72 埴輪
前方部北側1段目斜面出土埴輪 (2) (546~549)
- 図版73 埴輪
前方部北側1段目斜面出土埴輪 (3) (550~557)
- 図版74 埴輪
前方部北側1段目斜面出土埴輪 (4) (558~562)
前方部北側3段目斜面出土埴輪 (559~561~563~565)
- 図版75 埴輪
前方部北側1段目テラス埴輪列出土埴輪 (1) (566~577)
- 図版76 埴輪
前方部北側1段目テラス埴輪列出土埴輪 (2) (578~590)
- 図版77 埴輪
前方部北側1段目テラス埴輪列出土埴輪 (3) (591~595)
- 前方部北側1段目斜面出土埴輪 (5) (596~603)
- 図版78 埴輪
前方部北側1段目斜面出土埴輪 (6) (604~607)
石敷き遺構出土埴輪 (1) (608)
- 図版79 埴輪
石敷き遺構出土埴輪 (2) (609~614)
- 図版80 埴輪
石敷き遺構出土埴輪 (3) (615~617)
北造り出し出土埴輪 (1) (618)
- 図版81 埴輪
北造り出し出土埴輪 (2) (619~624)
- 図版82 埴輪
北造り出し出土埴輪 (3) (625~635)
- 図版83 埴輪
北造り出し出土埴輪 (4) (636~640)
- 図版84 埴輪
北造り出し出土埴輪 (5) (641~643)
- 図版85 埴輪
北波土堤出土埴輪 (1) (644~645)

図版86 埴輪
北渡土堤出土埴輪 (2) (646~649)
図版87 埴輪
北渡土堤出土埴輪 (3) (650~659)
図版88 埴輪
北渡土堤出土埴輪 (4) (660~663~669)
図版89 埴輪
北渡土堤出土埴輪 (5) (670~674)
北渡土堤北端部出土埴輪 (1) (675)
図版90 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (2) (676)
図版91 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (3) (677)
図版92 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (4) (678~679)
図版93 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (5) (680~683)
図版94 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (6) (684~687)
図版95 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (7) (688~691)
図版96 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (8) (692~693)
図版97 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (9) (694~699)
図版98 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (10) (700~703)
図版99 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (11) (704~705)
図版100 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (12) (706)
図版101 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (13) (707~708)
図版102 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (14) (709~710)
図版103 埴輪
北渡土堤北端部出土埴輪 (15) (711~712)
北周灌出土埴輪 (1) (713~719)
図版104 埴輪
北周灌出土埴輪 (2) (720)
前方部盛土層出土埴輪 (721~727~729~732)

水鳥形埴輪

図版105 埴輪
733 (水鳥形埴輪1)
図版106 埴輪
733 (水鳥形埴輪1)
図版107 埴輪
734 (水鳥形埴輪2)

図版108 埴輪
735 (水鳥形埴輪3)・736 (水鳥形埴輪4)
図版109 埴輪
737 (水鳥形埴輪5)
図版110 埴輪
737 (水鳥形埴輪5)
図版111 埴輪
738 (水鳥形埴輪6)
図版112 埴輪
738 (水鳥形埴輪6)
図版113 埴輪
739 (水鳥形埴輪7)・740 (水鳥形埴輪8)
図版114 埴輪
739 (水鳥形埴輪7)・741 (水鳥形埴輪9)
図版115 埴輪
742 (水鳥形埴輪10)・743 (水鳥形埴輪11)
図版116 埴輪
744 (水鳥形埴輪12)
図版117 埴輪
745 (水鳥形埴輪13)
図版118 埴輪
745 (水鳥形埴輪13)
図版119 埴輪
746 (水鳥形埴輪14)
図版120 埴輪
746 (水鳥形埴輪14)
図版121 埴輪
746 (水鳥形埴輪14)
図版122 埴輪
746 (水鳥形埴輪14)・747 (水鳥形埴輪15)
図版123 埴輪
748 (水鳥形埴輪16)
図版124 埴輪
748 (水鳥形埴輪16)
図版125 埴輪
748 (水鳥形埴輪16)
図版126 埴輪
748 (水鳥形埴輪16)
図版127 埴輪
749 (水鳥形埴輪17)
図版128 埴輪
749 (水鳥形埴輪17)
図版129 埴輪
750 (水鳥形埴輪18)
図版130 埴輪
750 (水鳥形埴輪18)
図版131 埴輪
751 (水鳥形埴輪19)
図版132 埴輪
751 (水鳥形埴輪19)

図版133 埴輪
751 (水鳥形埴輪19)
図版134 埴輪
751 (水鳥形埴輪19)
図版135 埴輪
752 (水鳥形埴輪20)・753 (水鳥形埴輪21)
図版136 埴輪
754 (水鳥形埴輪22)
図版137 埴輪
755 (水鳥形埴輪23)
図版138 埴輪
755 (水鳥形埴輪23)
図版139 埴輪
756 (水鳥形埴輪24)
図版140 埴輪
756 (水鳥形埴輪24)
図版141 埴輪
757 (水鳥形埴輪25)
図版142 埴輪
757 (水鳥形埴輪25)
図版143 埴輪
758 (水鳥形埴輪26)
図版144 埴輪
758 (水鳥形埴輪26)
図版145 埴輪
759 (水鳥形埴輪27)
図版146 埴輪
759 (水鳥形埴輪27)
図版147 埴輪
760 (水鳥形埴輪28)
図版148 埴輪
760 (水鳥形埴輪28)
図版149 埴輪
760 (水鳥形埴輪28) - 小鳥1・小鳥2
図版150 埴輪
760 (水鳥形埴輪28) - 小鳥3・小鳥4
図版151 埴輪
761 (水鳥形埴輪29)
図版152 埴輪
761 (水鳥形埴輪29)
図版153 埴輪
762 (水鳥形埴輪30)
図版154 埴輪
762 (水鳥形埴輪30)
図版155 埴輪
763 (水鳥形埴輪31)
図版156 埴輪
763 (水鳥形埴輪31)
図版157 埴輪
763 (水鳥形埴輪31)

南造り出し出土水鳥形埴輪 (1) (764~768)
図版158 埴輪
763 (水鳥形埴輪31)
南造り出し出土水鳥形埴輪 (2) (769~775)
図版159 埴輪
南造り出し出土水鳥形埴輪 (3)
(776・777・824~829・853~857)
図版160 埴輪
南造り出し出土水鳥形埴輪 (4) (783)
区西溝出土水鳥形埴輪 (868)
前方部南側1段目斜面出土水鳥形埴輪
(869・870・878・879)
南渡土堤出土水鳥形埴輪 (880)

家形埴輪

図版161 埴輪
890 (家形埴輪1)
図版162 埴輪
890 (家形埴輪1)
図版163 埴輪
890 (家形埴輪1)
図版164 埴輪
890 (家形埴輪1)
図版165 埴輪
897 (家形埴輪2)
図版166 埴輪
897 (家形埴輪2)
図版167 埴輪
898 (家形埴輪3)
図版168 埴輪
898 (家形埴輪3)
図版169 埴輪
899 (家形埴輪4)
図版170 埴輪
899 (家形埴輪4)
図版171 埴輪
900 (家形埴輪5)・901 (家形埴輪6)
図版172 埴輪
900 (家形埴輪5)・901 (家形埴輪6)
図版173 埴輪
902 (家形埴輪7)
図版174 埴輪
903 (家形埴輪8)
図版175 埴輪
904~906 (家形埴輪9)
図版176 埴輪
907~910 (家形埴輪9)
図版177 埴輪
913 (家形埴輪10)・914 (家形埴輪11)

- 図版178 埴輪
915~918 (家形埴輪12)
- 図版179 埴輪
919-920 (家形埴輪13)
- 図版180 埴輪
922-923 (家形埴輪14)・924-925 (家形埴輪15)
- 図版181 埴輪
926 (家形埴輪16)・928 (家形埴輪17)
- 図版182 埴輪
932-933 (家形埴輪18)・937~940 (家形埴輪19)
- 図版183 埴輪
941~943 (家形埴輪20)・944 (家形埴輪21)
- 図版184 埴輪
945 (家形埴輪21)・948 (家形埴輪22)
- 図版185 埴輪
953~955 (家形埴輪23)
- 図版186 埴輪
956-957 (家形埴輪23)
- 図版187 埴輪
家形埴輪 (958-959-961-962-964-965
967-988-994-998-999)
- 図版188 埴輪
家形埴輪 (1001-1003-1007~1011-1029~1032)
- 図版189 埴輪
家形埴輪 (1034-1039~1042-1044-1049-1051)
- 楕形埴輪**
- 図版190 埴輪
南造り出し出土楕形埴輪 (1054-1056-1058-1060)
北造り出し出土楕形埴輪 (1055-1057)
前方部南側1段目斜面出土楕形埴輪 (1059)
南渡土堤出土楕形埴輪 (1081)
- 図版191 埴輪
南造り出し出土楕形埴輪 (1082~1085)
前方部南側1段目斜面出土楕形埴輪 (1086)
- 図版192 埴輪
楕形埴輪 (1108-1109) 圓形埴輪 (1142-1143)
- その他の埴輪**
- 図版193 埴輪
盾形埴輪 (1147~1154)

- 図版194 埴輪
船形埴輪 (1155~1157)
- 図版195 埴輪
壺形埴輪 (1162~1168) 靴形埴輪 (1169~1171)
冑形埴輪 (1172)

小型土製品・土器

- 図版196 小型土器
小型土器 (1178~1217)
- 図版197 小型土器・小型土製品
小型土器 (1218~1246) 小型土製品 (1247~1253)
- 図版198 土器
出土土器 (1254~1284)

木製品

- 図版199 木製品
出土木製品 (W1)
- 図版200 木製品
出土木製品 (W1)
- 図版201 木製品
出土木製品 (W2)
- 図版202 木製品
出土木製品 (W3・W4)
- 図版203 木製品
出土木製品 (W5)
- 図版204 木製品
出土木製品 (W6・W7)
- 図版205 木製品
出土木製品 (W8)
- 図版206 木製品
出土木製品 (W9)
- 図版207 木製品
出土木製品 (W10~W12)

土製品・金属製品

- 図版208 土製品・金属製品
出土土製品 (1285~1288)
出土金属製品 (M1~M6)

写真図版目次

—写真図版編—

池田古墳

- 写真図版1 古墳
池田古墳全景 (昭和53年12月撮影) 東上空から
- 写真図版2 古墳
池田古墳全景 南から (昭和46年)
池田古墳後円部 南から (昭和46年)
- 写真図版3 古墳
前方部側 (調査前) 南から
くびれ部側 (調査前) 南から
- 写真図版4 古墳
前方部側 (調査後) 南から (第1次)
くびれ部側 (調査後) 南から (第2次)
- 写真図版5 古墳
南側俯瞰 (第1次～第3次)
- 写真図版6 古墳
南側俯瞰 (第1次) 南側俯瞰 (第3次)
南側俯瞰 (第2次)
- 写真図版7 古墳
南側全景 南から (第2次)
南側全景 南から (第3次)
南側全景 南から (第1次)

前方部

- 写真図版8 古墳
南側斜面 俯瞰 (第1次～第3次)
- 写真図版9 古墳
南側1段目斜面 (b区・c区) 全景 東から (第2次)
南側1段目斜面 (b区西側) 南から (第2次)
南側1段目斜面 (b区東側) 近景 南から (第2次)
南側1段目斜面 (c区北側) 南から (第3次)
- 写真図版10 古墳
南側1段目斜面 近景 南から (第3次)
南側1段目斜面 (a区) 近景 南東から (第2次)
- 写真図版11 古墳
南側1段目斜面 全景 西から (第1次)
南側1段目斜面 近景 東から (第1次)
- 写真図版12 古墳
南側1段目斜面 全景 南から (第1次)
南側1段目斜面 近景 南から (第1次)
- 写真図版13 古墳
南側1段目斜面 (d区・e区) 西から (第1次)
南側1段目斜面 (d区・e区) 東から (第1次)
- 写真図版14 古墳
南側2段目斜面 全景 南から (第2次)
南側2段目斜面 全景 南から (第3次)

- 南側2段目斜面 全景 南から (第1次)
- 写真図版15 古墳
南側1段目テラス 西から (第2次)
- 写真図版16 古墳
南側1段目テラス 南東から (第2次)
南側1段目テラス 東から (第2次)
- 写真図版17 古墳
南側1段目テラス 南から (第3次)
南側1段目テラス 西から (第3次)
- 写真図版18 古墳
南側1段目テラス 南東から (第1次)
南側1段目テラス 東から (第1次)
- 写真図版19 古墳
南側2段目斜面断面 東から (第2次)
南側1段目テラス～2段目斜面断面
東から (第1次)
- 写真図版20 古墳
南側1段目テラス 埴輪列 西から (第2次)
- 写真図版21 古墳
南側1段目テラス 埴輪列 東から (第2次)
- 写真図版22 古墳
南側1段目テラス 埴輪列C群 (H7～H11)
南から (第2次)
南側1段目テラス 埴輪列E群 (H16～H18)
南から (第2次)
南側1段目テラス 埴輪列A群 (H1～H6)
東から (第2次)
- 写真図版23 古墳
南側1段目テラス 埴輪列F群 (H19～H29)
西から (第3次)
- 写真図版24 古墳
南側1段目テラス 埴輪列F群 (H19～H29)
南から (第3次)
南側1段目テラス 埴輪列F群 (H19～H29)
南から (第3次)
南側1段目テラス 埴輪列F群 (H19～H29)
東から (第3次)
- 写真図版25 古墳
南側1段目テラス 埴輪列F群 (H21～H23)
南から (第3次)
南側1段目テラス 埴輪列F群 (H27～H29)
南から (第3次)
南側1段目テラス 埴輪列F群H29断面
東から (第3次)
- 写真図版26 古墳
南側1段目テラス 埴輪列G群・H群

		南東から (第1次)	写真図版38 古墳			
	南側1段目テラス	埴輪列G群・H群	南側2段目斜面	葺石 (C区) 東から (第1次)		
		東から (第1次)	写真図版39 古墳			
写真図版27 古墳			南側2段目斜面	h1 出土状況	南から (第2次)	
	南側1段目テラス	埴輪列G群・H群	南側2段目斜面	h1 出土状況	南から (第2次)	
		南西から (第1次)	南側2段目斜面	h2 出土状況	南から (第2次)	
	南側1段目テラス	埴輪列G群・H群	写真図版40 古墳			
		東から (第1次)	南側2段目斜面	h4 出土状況	南から (第2次)	
	南側1段目テラス	埴輪列G群・H群	南側2段目斜面	h4 出土状況	南から (第2次)	
		西から (第1次)	南側2段目斜面	h3 出土状況	南から (第2次)	
写真図版28 古墳			写真図版41 古墳			
	南側1段目テラス	埴輪列G群・H群	南側2段目斜面	h5 出土状況	南から (第2次)	
		東から (第1次)	南側2段目斜面	h6 出土状況	南から (第3次)	
	南側1段目テラス	埴輪列G群・H群掘方全景	写真図版42 古墳			
		東から (第1次)	前方部北側 俯瞰 (第1次~第3次)			
写真図版29 古墳			写真図版43 古墳			
	南側1段目テラス	埴輪列G群 (H31~H33)	北側1段目斜面	葺石 東から (第3次)		
		南から (第1次)	北側1段目斜面	葺石 北から (第3次)		
	南側1段目テラス	埴輪列G群 (H33~H35)	写真図版44 古墳			
		南から (第1次)	北側1段目斜面	葺石 北から (第3次)		
	南側1段目テラス	埴輪列G群 (H36~H38)	北側1段目斜面	葺石近景 北から (第3次)		
		南から (第1次)	写真図版45 古墳			
写真図版30 古墳			北側1段目斜面	h25出土状況	北から (第3次)	
	南側1段目テラス	埴輪列G群 (H39~H41)	北側1段目斜面	h26出土状況	北から (第3次)	
		南から (第1次)	写真図版46 古墳			
	南側1段目テラス	埴輪列G群 (H44~H46)	北側1段目斜面	h25出土状況	北から (第3次)	
		南から (第1次)	北側1段目斜面	h25出土状況	東から (第3次)	
写真図版31 古墳			写真図版47 古墳			
	南側2段目斜面	全景 東から (第2次)	北側1段目斜面	葺石 北西から (第1次)		
写真図版32 古墳			北側1段目斜面	葺石 西から (第1次)		
	南側2段目斜面	全景 西から (第2次)	写真図版48 古墳			
写真図版33 古墳			北側1段目斜面	葺石 北東から (第1次)		
	南側2段目斜面	葺石 (A区・B区)	北側1段目斜面	葺石 東から (第1次)		
		南西から (第2次)	写真図版49 古墳			
	南側2段目斜面	葺石 (A区西半) 南から (第2次)	北側1段目斜面	葺石 北から (第1次)		
	南側2段目斜面	葺石 (A区東半~B区西半)	北側1段目斜面	基底石 北東から (第1次)		
		南西から (第2次)	写真図版50 古墳			
写真図版34 古墳			北側1段目テラス	埴輪列 西から (第2次)		
	南側2段目斜面	葺石 (B区西半) 南から (第2次)	北側1段目テラス	埴輪列 東から (第2次)		
	南側2段目斜面	葺石 (B区東半) 南から (第2次)	北側1段目テラス	埴輪列I・J群 西から (第2次)		
	南側2段目斜面	葺石断面 西から (第2次)	写真図版51 古墳			
写真図版35 古墳			北側1段目テラス	埴輪列I群 (H54~H59) 出土状況	北から	
	南側2段目斜面	葺石 (B区) 西から (第3次)	北側1段目テラス	埴輪列I群 (H55) 出土状況	南から	
写真図版36 古墳			南側2段目斜面	葺石 (B区) 東から (第3次)		
	南側2段目斜面	葺石 (B区) 南から (第3次)	北側1段目テラス	埴輪列L群 (H63) 出土状況	南から	
写真図版37 古墳			南側2段目斜面	葺石 (C区) 南東から (第1次)		
	南側2段目斜面	葺石 (C区) 南から (第1次)	北側1段目テラス	埴輪列I群 (H57・H58) 出土状況	南から	

写真図版52 古墳 北側1段目テラス 埴輪列O群 (H65~H67) 出土状況 北から 北側1段目テラス 埴輪列N群東側出土状況 北から 北側1段目テラス 埴輪列N群西側出土状況 北から	南造り出し 北側埴輪列H87 (273) 南から 南造り出し 北側埴輪列H88 (274) 南から 南造り出し 埴輪列北西隅 西から
写真図版53 古墳 北側3段目斜面 葺石全景 北から (第2次) 北側3段目斜面 葺石B区 北から (第2次) 北側3段目斜面 葺石A区 北から (第2次)	写真図版66 古墳 南造り出し 西側埴輪列全景 北から
写真図版54 古墳 北側3段目斜面 葺石全景 西から (第2次)	写真図版67 古墳 南造り出し 西側埴輪列S群 東から (第2次) 南造り出し 西側埴輪列S群 南から (第2次)
写真図版55 古墳 北側3段目斜面 葺石近景 北から (第2次) 北側3段目斜面 葺石近景 北から (第2次)	写真図版68 古墳 南造り出し 西側埴輪列H90 (278) 東から (第2次) 南造り出し 西側埴輪列H91 (277) 東から (第2次) 南造り出し 西側埴輪列H93 (279) 東から (第2次) 南造り出し 西側埴輪列H94 (280) 東から (第2次) 南造り出し 西側埴輪列H95 (281) 東から (第2次) 南造り出し 西側埴輪列H96 (283) 東から (第2次) 南造り出し 西側埴輪列H98 (284) 東から (第2次)
造り出し	
写真図版56 古墳 南造り出し 輪軸 (第1次~第3次)	写真図版69 古墳 南造り出し 南側斜面全景 東から (第2次)
写真図版57 古墳 南造り出し 全景 北西から (第2次)	写真図版70 古墳 南造り出し 南側斜面全景 西から (第2次)
写真図版58 古墳 南造り出し 全景 北東から (第2次) 南造り出し 全景 北から (第2次) 南造り出し 全景 南から (第2次)	写真図版71 古墳 南造り出し 南側斜面全景 南から (第2次) 南造り出し 南側斜面A区西側 南から (第2次)
写真図版59 古墳 南造り出し 全景 北から (第3次)	写真図版72 古墳 南造り出し 南側斜面A区東側 南から (第2次) 南造り出し 南側斜面B区中央 南から (第2次)
写真図版60 古墳 南造り出し 全景 東から (第3次) 南造り出し 全景 南東から (第3次) 南造り出し 東側斜面 南東から (第3次)	写真図版73 古墳 南造り出し 東側斜面A区南側 東から (第3次) 南造り出し 東側斜面B区中央 南東から (第3次)
写真図版61 古墳 南造り出し 埴輪列全景 北西から (第2次) 南造り出し 西側埴輪列全景 東から (第2次) 南造り出し 北側埴輪列全景 西から (第2次)	写真図版74 古墳 南造り出し 東側斜面A区全景 東から (第3次) 南造り出し 東側斜面A区北側 東から (第3次)
写真図版62 古墳 南造り出し 北側埴輪列掘り方確認状況 西から (第2次)	写真図版75 古墳 南造り出し 東側斜面A区北半 南東から (第3次) 南造り出し 東側斜面A区近景 北東から (第3次)
写真図版63 古墳 南造り出し 北側埴輪列全景 東から (第2次)	写真図版76 古墳 南造り出し 東側斜面A区中央部 東から (第3次) 南造り出し 東側斜面A区北側 東から (第3次)
写真図版64 古墳 南造り出し 北側埴輪列H81 (267) 南から (第2次) 南造り出し 北側埴輪列H82 (268) 南から (第2次) 南造り出し 北側埴輪列H74 (260) 南から (第2次) 南造り出し 北側埴輪列H75 (263) 南から (第2次) 南造り出し 北側埴輪列H84 (270) 南から (第2次) 南造り出し 北側埴輪列H85 (271) 南から (第2次)	写真図版77 古墳 区画溝 全景 東から (第2次)
写真図版65 古墳 南造り出し 北側埴輪列H86 (272) 南から 南造り出し 北側埴輪列H89 (275) 南から	写真図版78 古墳 区画溝 全景 西から (第2次) 南造り出し 北西隅 北西から (第2次)
	写真図版79 古墳 区画溝 北西隅 北東から (第2次) 区画溝 底部A区中央部 東から (第2次)
	写真図版80 古墳 区画溝 底部B区中央部 東から (第2次)

- 写真図版81 古墳
区画溝 C区 西から (第3次)
- 写真図版82 古墳
区画溝 C区 北から (第3次)
区画溝 C区 東から (第3次)
区画溝 C区 南東から (第3次)
- 写真図版83 古墳
区画溝 南側斜面A区中央部 北から (第2次)
区画溝 南側斜面A区東側 北から (第2次)
- 写真図版84 古墳
区画溝 南側斜面B区全景 北から (第2次)
区画溝 南側斜面B区西側 北から (第2次)
- 写真図版85 古墳
区画溝 南側斜面B区東側 北から (第2次)
区画溝 断面 西から (第2次)
- 写真図版86 古墳
区画溝 h8出土状況 東から (第2次)
区画溝 h8出土状況 南から (第2次)
- 写真図版87 古墳
区画溝 h8出土状況 南東から (第2次)
区画溝上面 h9出土状況 北から (第2次)
- 写真図版88 古墳
区画溝 h11出土状況 東から (第2次)
区画溝上面 h10出土状況 南から (第2次)
- 写真図版89 古墳
区画溝 h12出土状況 東から (第2次)
区画溝 h12出土状況 南から (第2次)
区画溝 h12出土状況 東から (第2次)
区画溝 h12出土状況 南から (第2次)
区画溝 h14出土状況 北から (第2次)
- 写真図版90 古墳
区画溝 h11出土状況 北から (第2次)
区画溝 h13出土状況 南から (第2次)
- 写真図版91 古墳
区画溝 h15出土状況 南から (第3次)
区画溝 h16出土状況 南東から (第3次)
- 写真図版92 古墳
北造り出し 全景 俯瞰 (第2次・第3次)
- 写真図版93 古墳
北造り出し 全景 南西から (第2次)
北造り出し 全景 北から (第2次)
- 写真図版94 古墳
北造り出し 北側～東側斜面 北東から (第2次)
北造り出し 北側斜面 北から (第2次)
北造り出し 北側斜面 西から (第2次)
- 写真図版95 古墳
北造り出し 北側斜面全景 東から (第2次)
- 写真図版96 古墳
北造り出し 北側斜面全景 北東から (第2次)
北造り出し 北側斜面全景 北東から (第2次)
- 写真図版97 古墳
北造り出し 北側斜面西部 北から (第2次)
北造り出し 北側斜面中央部 北から (第2次)
- 写真図版98 古墳
北造り出し 北側斜面東部 北から (第2次)
北造り出し 北東隅 北東から (第2次)
- 写真図版99 古墳
北造り出し 東側斜面全景 南から (第2次)
- 写真図版100 古墳
北造り出し 東側斜面全景 北から (第2次)
北造り出し 東側斜面B区北側 東から (第2次)
- 写真図版101 古墳
北造り出し 東側斜面B区北側 東から (第2次)
北造り出し 東側斜面B区南側 東から (第2次)
- 写真図版102 古墳
北造り出し 東側斜面A区北側 東から (第2次)
北造り出し 東側斜面A区南側 東から (第2次)
- 写真図版103 古墳
前方部・北造り出し接合部 北東から (第3次)
前方部・北造り出し接合部近景 北東から (第3次)
- 写真図版104 古墳
前方部・北造り出し接合部近景 北東から (第3次)
- 写真図版105 古墳
石敷き遺構 全景 東から (第2次)
- 写真図版106 古墳
石敷き遺構 全景 西から (第2次)
- 写真図版107 古墳
石敷き遺構 1区～2区 東から (第2次)
- 写真図版108 古墳
石敷き遺構 2区 東から (第2次)
石敷き遺構 2区 北から (第2次)
- 写真図版109 古墳
石敷き遺構 3区全景 東から (第2次)
石敷き遺構 3区近景 東から (第2次)
- 写真図版110 古墳
石敷き遺構 3区近景 北から (第2次)
石敷き遺構 3区近景 北から (第2次)
- 写真図版111 古墳
石敷き遺構 4区全景 東から (第2次)
石敷き遺構 4区近景 北から (第2次)
- 写真図版112 古墳
h27 (608-609-612) 出土状況 東から (第2次)
- 写真図版113 古墳
石敷き遺構 h28 (613) 出土状況 北から (第2次)
石敷き遺構 615出土状況 東から (第2次)

渡土堤

- 写真図版114 古墳
南渡土堤 全景 俯瞰(第1次)
- 写真図版115 古墳
南渡土堤 全景 南から(第1次)
- 写真図版116 古墳
南渡土堤 全景 南から(第1次)
南渡土堤 全景 北西から(第1次)
- 写真図版117 古墳
南渡土堤 西側斜面全景 南西から(第1次)
南渡土堤 前方部との接合部 南西から(第1次)
- 写真図版118 古墳
南渡土堤 西側斜面1区 西から(第1次)
南渡土堤 西側斜面2区 西から(第1次)
- 写真図版119 古墳
南渡土堤 西側斜面2区 西から(第1次)
南渡土堤 西側斜面3区 西から(第1次)
南渡土堤 西側斜面3区南端 西から(第1次)
- 写真図版120 古墳
南渡土堤 西側斜面1・2区間日跡②
西から(第1次)
南渡土堤 西側斜面1・2区間日跡②
南西から(第1次)
- 写真図版121 古墳
南渡土堤 南端部 西から(第1次)
- 写真図版122 古墳
北渡土堤 全景 俯瞰(第1次)
- 写真図版123 古墳
北渡土堤 全景 北から(第1次)
- 写真図版124 古墳
北渡土堤 全景 南から(第1次)
- 写真図版125 古墳
北渡土堤 西側斜面全景 北西から(第1次)
北渡土堤 西側斜面全景 北から(第1次)
北渡土堤 西側斜面全景 南から(第1次)
- 写真図版126 古墳
北渡土堤 前方部との接合部 北西から(第1次)
北渡土堤 西側斜面1区 南西から(第1次)
- 写真図版127 古墳
北渡土堤 西側斜面2区北側 西から(第1次)
北渡土堤 西側斜面3区北側 西から(第1次)
北渡土堤 西側斜面 北外堤との接合部
南西から(第1次)
- 写真図版128 古墳
北渡土堤 東側斜面全景 北東から(第1次)
北渡土堤 東側斜面全景 南東から(第1次)
- 写真図版129 古墳
北渡土堤 溝状遺構 西から(第1次)
北渡土堤 溝状遺構断面 西から(第1次)

写真図版130 古墳

- 北渡土堤 h31出土状況 西から(第1次)
北渡土堤 h32~h34出土状況 南西から(第1次)
- 写真図版131 古墳
北渡土堤 北外堤との接合部全景
南東から(第1次)
北渡土堤 北外堤との接合部墳輪出土状況
南から(第1次)
- 写真図版132 古墳
北渡土堤 北外堤との接合部全景
(墳輪取り上げ後) 東から(第1次)
- 写真図版133 古墳
北渡土堤・北外堤接合部 676・707出土状況
北から(第1次)
北渡土堤・北外堤接合部 692出土状況
北から(第1次)
北渡土堤・北外堤接合部 708出土状況
南から(第1次)
北渡土堤・北外堤接合部 706・709出土状況
南から(第1次)

周濠

- 写真図版134 古墳
南周濠・南外堤 俯瞰(第1次~第3次)
- 写真図版135 古墳
南周濠 西壁 南東から(第2次)
南周濠 西壁近景 東から(第2次)

外堤

- 写真図版136 古墳
南外堤 全景 北東から(第2次)
南外堤 全景 北東から(第3次)
南外堤 全景 北東から(第1次)
- 写真図版137 古墳
南外堤 全景 東から(第2次)
南外堤 全景 東から(第3次)
- 写真図版138 古墳
南外堤 全景 北から(第2次)
南外堤 全景 北から(第3次)
南外堤 全景 北から(第1次)
- 写真図版139 古墳
北周濠 俯瞰(第1次~第3次)
- 写真図版140 古墳
北外堤 全景 南東から(第2次)
北外堤 全景 南東から(第3次)
- 写真図版141 古墳
北外堤 全景 南から(第2次)
北外堤 全景 南から(第3次)

円筒系埴輪

- 写真図版142 遺物出土状況
朝顔形埴輪の検出
- 写真図版143 遺物出土状況
南周濠 h18 (291・298) 出土状況 南から
南周濠 288・328・329・348出土状況 南から
- 写真図版144 遺物出土状況
南周濠 197・288・322・325出土状況 南から
南周濠 331出土状況 東から
南周濠 420出土状況 南から
南周濠 h24 (541) 出土状況 北から
- 写真図版145 遺物出土状況
南周濠 h19 (289) 出土状況 南から
南周濠 h19 (289) 出土状況 南東から
南周濠 h21 (191) 出土状況 南から
- 写真図版146 遺物出土状況
南周濠 292・300出土状況 東から
南周濠 h20 (366) 出土状況 南西から
南周濠 h22 (428) 出土状況 南から
前方部・南渡土堤接合部
h23 (495・496・502) 出土状況 南西から
- 写真図版147 遺物出土状況
北造り出し東側斜面
h29 (619・628・638) 出土状況 東から
北周濠 h30 (618) 出土状況 北から
- 写真図版148 遺物出土状況
北周濠 620出土状況 北から
北造り出し北側斜面 632出土状況 北から
- 写真図版149 遺物出土状況
北周濠 681出土状況 西から
北周濠 666出土状況 南から
北周濠 719出土状況 北から

水鳥形埴輪

- 写真図版150 遺物出土状況
水鳥形埴輪出土状況の実測
- 写真図版151 遺物出土状況
南造り出し南側斜面
水鳥形埴輪2 (734) 出土状況 東から
南造り出し南側斜面
水鳥形埴輪3 (735) 出土状況 南から
南造り出し南側斜面
水鳥形埴輪4 (736) 出土状況 南から
南造り出し南側斜面
水鳥形埴輪5 (737) 頭部出土状況 南から
南造り出し南側斜面
水鳥形埴輪5 (737) 体部出土状況 南から
- 写真図版152 遺物出土状況
南造り出し南側斜面

- 水鳥形埴輪5 (737) 出土状況 南から
南造り出し南側斜面
水鳥形埴輪9 (741) 出土状況 南から
南造り出し南側斜面
水鳥形埴輪10 (742) 出土状況 南から
南造り出し南側斜面
水鳥形埴輪11 (743) 出土状況 南から
- 写真図版153 遺物出土状況
南周濠 水鳥形埴輪12 (744) 出土状況 北西から
南造り出し南側斜面
水鳥形埴輪14 (746) 嘴出土状況 南から
南周濠 水鳥形埴輪14 (746) 翼出土状況 南から
南周濠 水鳥形埴輪14 (746) 台部出土状況 南から
南造り出し南側斜面
水鳥形埴輪15 (747) 翼出土状況 東から
南造り出し上面南東隅
水鳥形埴輪16 (748) 頸部・体部出土状況 東から
南造り出し南東裾部 水鳥形埴輪16 (748)
頭部・台部出土状況 東から
- 写真図版154 遺物出土状況
南造り出し東側裾部 水鳥形埴輪16 (748)
水鳥形埴輪17 (749) 出土状況 東から
南造り出し東側裾部
水鳥形埴輪17 (749) 出土状況 北から
- 写真図版155 遺物出土状況
南造り出し東側裾部
水鳥形埴輪18 (750) 出土状況 南東から
南造り出し東側裾部
水鳥形埴輪18 (750) 出土状況 東から
南造り出し東側裾部
水鳥形埴輪19 (751) 出土状況 南から
- 写真図版156 遺物出土状況
南造り出し東側裾部
水鳥形埴輪19 (751) 出土状況 南東から
南造り出し東側裾部
水鳥形埴輪19 (751) 出土状況 南東から
南造り出し東側裾部
水鳥形埴輪19 (751) 出土状況 北東から
- 写真図版157 遺物出土状況
南造り出し東側裾部
水鳥形埴輪20 (752) 出土状況 北から
南造り出し東側裾部
水鳥形埴輪21 (753) 出土状況 東から
南造り出し東側裾部
水鳥形埴輪22 (754) 出土状況 東から
- 写真図版158 遺物出土状況
南造り出し東側裾部 水鳥形埴輪22 (754)
水鳥形埴輪23 (755) 出土状況 東から

- 写真図版159 遺物出土状況
南造り出し東側裾部
水鳥形埴輪23 (755) 出土状況 南から
前方部南側1段目斜面裾部
水鳥形埴輪24 (756) 出土状況 南から
前方部南側1段目斜面裾部
水鳥形埴輪25 (757) 出土状況 南から
- 写真図版160 遺物出土状況
前方部南側1段目斜面裾部
水鳥形埴輪25 (757) 体部出土状況 南から
前方部南側1段目斜面裾部
水鳥形埴輪25 (757) 体部出土状況 西から
前方部南側1段目斜面裾部
水鳥形埴輪25 (757) 頭部出土状況 南から
- 写真図版161 遺物出土状況
前方部南側1段目斜面
水鳥形埴輪26 (758) 出土状況 南から
前方部南側1段目斜面
水鳥形埴輪26 (758) 頭部出土状況 南から
前方部南側1段目斜面
水鳥形埴輪26 (758) 体部出土状況 南から
- 写真図版162 遺物出土状況
前方部南側1段目斜面
水鳥形埴輪27 (759) 出土状況 南から
前方部南側1段目斜面
水鳥形埴輪27 (759) 出土状況 南から
前方部南側1段目斜面
水鳥形埴輪27 (759) 頭部出土状況 西から
- 写真図版163 遺物出土状況
前方部南側1段目斜面裾部～南渡土堤裾部
水鳥形埴輪28 (760)・水鳥形埴輪29 (761) 出土状況 南西から
前方部南側1段目斜面裾部～南渡土堤裾部
水鳥形埴輪28 (760)・水鳥形埴輪29 (761) 出土状況 東から
- 写真図版164 遺物出土状況
前方部南側1段目斜面裾部
水鳥形埴輪28 (760) 出土状況 南から
前方部南側1段目斜面裾部
水鳥形埴輪28 (760) - 小鳥1 出土状況 南から
前方部南側1段目斜面裾部
水鳥形埴輪28 (760) - 小鳥2 出土状況 西から
前方部南側1段目斜面裾部
水鳥形埴輪28 (760) - 小鳥3 出土状況 西から
- 写真図版165 遺物出土状況
南渡土堤裾部 水鳥形埴輪29 (761) 出土状況 北から
南渡土堤裾部 水鳥形埴輪29 (761) 出土状況 南西から
- 写真図版166 遺物出土状況
南渡土堤裾部 水鳥形埴輪29 (761) 出土状況 北西から
- 南渡土堤裾部 水鳥形埴輪30 (762) 出土状況 北から
- 写真図版167 遺物出土状況
南渡土堤裾部 水鳥形埴輪31 (763) 出土状況 西から
南渡土堤裾部 水鳥形埴輪31 (763) 頭頸部出土状況 西から
- 写真図版168 遺物出土状況
南造り出し南側裾部 764出土状況 西から
南造り出し南側裾部 765出土状況 南から
南造り出し南側裾部 768出土状況 南から
南造り出し東側裾部 769出土状況 東から
南造り出し東側裾部 774出土状況 東から
南造り出し東側裾部 852出土状況 東から
- 写真図版169 遺物出土状況
南造り出し北側裾部 852出土状況 東から
南造り出し北側裾部 857出土状況 南から
南造り出し北側裾部 857出土状況 北から
- 家形埴輪**
- 写真図版170 遺物出土状況
前方部南側1段目斜面
家形埴輪1 (890) 屋根出土状況 南から
南周濠 家形埴輪1 (890) 屋根出土状況 南から
南造り出し 家形埴輪1 (890) 出土状況 東から
南造り出し 家形埴輪1 (890) 出土状況 南から
南周濠 家形埴輪1 (890) 柱出土状況 北から
南造り出し 家形埴輪1 (890) 屋根～壁出土状況 南東から
- 写真図版171 遺物出土状況
前方部南側1段目斜面
家形埴輪3 (898) 屋根出土状況 南から
南造り出し 家形埴輪6 (901) 屋根出土状況 東から
南周濠 家形埴輪8 (903) 柱出土状況 南から
南周濠 家形埴輪8 (903) 屋根出土状況 東から
南周濠 家形埴輪5 (900) 壁出土状況 西から
南周濠 家形埴輪8 (903) 屋根出土状況 南から
- 写真図版172 遺物出土状況
南周濠 家形埴輪9 (904) 屋根出土状況 南から
南周濠 家形埴輪9 (906) 屋根出土状況 南西から
区画溝 家形埴輪9 (907) 屋根出土状況 東から
区画溝 家形埴輪9 (911) 破風出土状況 南から
南周濠 家形埴輪12 (915) 屋根出土状況 南から
南周濠 家形埴輪12 (916) 屋根出土状況 南から
- 写真図版173 遺物出土状況
区画溝 家形埴輪13 (920) 柱出土状況 南から
区画溝 家形埴輪15 (924) 屋根出土状況 南から
区画溝 家形埴輪17 (928) 屋根出土状況 南から
南周濠 家形埴輪18 (932) 屋根出土状況 西から
南造り出し 家形埴輪18 (933) 屋根出土状況 南から
南造り出し 家形埴輪18 (934) 屋根出土状況 西から

- 南造り出し 家形埴輪18 (934) 屋根出土状況 東から
南造り出し 家形埴輪18 (935) 屋根出土状況 西から
- 写真図版174 遺物出土状況**
南造り出し 家形埴輪19 (937) 壁出土状況 東から
南周濠 家形埴輪20 (941) 壁体出土状況 南から
南造り出し 家形埴輪21 (944) 階廻突帯出土状況 南から
南周濠 家形埴輪21 (945) 階廻突帯出土状況 南から
前方部南側1段目斜面
家形埴輪22 (948) 壁体出土状況 南から
区画溝 家形埴輪22 (949) 階廻突帯出土状況 北東から
- 写真図版175 遺物出土状況**
南周濠 家形埴輪23 (953) 階廻突帯出土状況 東から
南周濠 家形埴輪23 (955) 階廻突帯出土状況 北西から
南造り出し 家形埴輪23 (956) 壁体出土状況 東から
区画溝 959出土状況 北から
南造り出し 998出土状況 北から
南周濠 1028出土状況 南から
北造り出し 1031出土状況 北から
北造り出し 1031出土状況 北から
- その他の埴輪**
写真図版176 遺物出土状況
北造り出し 1036出土状況 北東から
北造り出し 1038出土状況 北から
南周溝 盾形埴輪(1148) 出土状況 北東から
区画溝 船形埴輪1 (1155) 出土状況 南西から
- 小型土製品**
写真図版177 遺物出土状況
北造り出し 1179出土状況 北から
北造り出し 1180出土状況 北から
北造り出し 1181出土状況 北から
北造り出し 1195出土状況 南から
北造り出し 1196出土状況 北から
北造り出し 1199出土状況 北から
北造り出し 1201出土状況 北東から
北造り出し 1203出土状況 北から
- 木製品**
写真図版178 遺物出土状況
北周濠 W 1 出土状況 西から
北周濠 W 2・W 7・W 8 出土状況 北西から
- 写真図版179 遺物出土状況**
北周濠 W 3 出土状況 北から
北周濠 W 5 出土状況 西から
北周濠 W 6 出土状況 西から
- 円筒系埴輪**
写真図版180 遺物
主要円筒系埴輪
写真図版181 遺物
主要円筒埴輪 (a) 主要壺形埴輪 (b)
写真図版182 遺物
前方部南側2段目斜面出土埴輪 (2・5・7・9)
前方部南側1段目テラス出土埴輪(口縁部静止痕)(17)
写真図版183 遺物
前方部南側2段目斜面出土埴輪 (16)
前方部南側1段目テラス出土埴輪 (18・26・34・36)
34 (1次・2次口縁接合面) (a)
写真図版184 遺物
前方部南側1段目テラス出土埴輪 (27)
27 (口縁部線刻) (a) 27 (3段目静止痕) (b)
写真図版185 遺物
前方部南側1段目テラス出土埴輪 (37)
37 (1次・2次口縁接合面) (a) 37 (肩部穿孔) (b)
写真図版186 遺物
37 (3段目静止痕) (a)
前方部南側1段目テラス出土埴輪 (38)
写真図版187 遺物
38口縁部 (a・b) 38線刻 (4段目外面) (c)
38肩部内面 (d) 38静止痕 (4段目) (e)
写真図版188 遺物
前方部南側1段目テラス埴輪列出土埴輪(39・41・47・49)
写真図版189 遺物
前方部南側1段目テラス埴輪列出土埴輪(54・75・84~86)
写真図版190 遺物
前方部南側1段目テラス埴輪列出土埴輪(88~90・92・93)
写真図版191 遺物
前方部南側1段目テラス埴輪列出土埴輪 (95~97・101)
写真図版192 遺物
前方部南側1段目テラス埴輪列出土埴輪
(98・100・102・103)
写真図版193 遺物
前方部南側1段目テラス埴輪列出土埴輪 (104~106)
写真図版194 遺物
前方部南側1段目テラス埴輪列出土埴輪(107~109・111)
108内面 (a)
写真図版195 遺物
前方部南側1段目テラス埴輪列出土埴輪
(110・112・116・128)
写真図版196 遺物
前方部南側1段目テラス埴輪列出土埴輪
(113・114・117・120)

- 写真図版197 遺物
前方面南側1段目テラス壇輪列出土壇輪
(121・123・126・134)
- 写真図版198 遺物
前方面南側1段目テラス壇輪列出土壇輪 (135・139)
前方面南側1段目斜面出土壇輪 (143・146・150・155・160)
- 写真図版199 遺物
前方面南側1段目斜面出土壇輪 (162～165・174・175)
- 写真図版200 遺物
前方面南側1段目斜面出土壇輪 (177)
区画溝出土壇輪 (178～180)
- 写真図版201 遺物
区画溝出土壇輪 (186・188～190)
186線刻 (a)
- 写真図版202 遺物
区画溝出土壇輪 (191・192)
- 写真図版203 遺物
区画溝出土壇輪 (195・199)
- 写真図版204 遺物
区画溝出土壇輪 (203・206・208)
192ヨコハケ (a) 195線刻 (b)
- 写真図版205 遺物
199突帯剥離面 (a・b)
206口縁部内面線刻 (c) 206突帯剥離面 (d)
- 写真図版206 遺物
区画溝出土壇輪 (219・221・228～231・233～235)
- 写真図版207 遺物
区画溝出土壇輪 (242・243)
- 写真図版208 遺物
区画溝出土壇輪 (244～246・248)
246突帯剥離面 (a)
- 写真図版209 遺物
区画溝出土壇輪 (250・253)
南造り出し北側壇輪列出土壇輪 (257・258)
- 写真図版210 遺物
南造り出し北側壇輪列出土壇輪 (259～261・263)
260底部内面 (a)
- 写真図版211 遺物
南造り出し北側壇輪列出土壇輪 (264・266・267・269)
- 写真図版212 遺物
南造り出し北側壇輪列出土壇輪 (268・270・271・273)
南造り出し西側壇輪列出土壇輪 (277)
277底部内面 (a)
- 写真図版213 遺物
南造り出し北側壇輪列出土壇輪 (275)
南造り出し西側壇輪列出土壇輪 (278・279・282)
南造り出し出土壇輪 (287)
- 写真図版214 遺物
南造り出し出土壇輪 (286) 286突帯剥離面 (a・b)
- 286静止痕 (c) 287静止痕 (d・e)
- 写真図版215 遺物
南造り出し西側壇輪列出土壇輪 (281・283)
南造り出し出土壇輪 (290)
- 写真図版216 遺物
南造り出し出土壇輪 (288)
- 写真図版217 遺物
南造り出し出土壇輪 (289)
- 写真図版218 遺物
289静止痕 (a・b) 289口縁部外面 (c)
289体部外面 (2段目) (d)
- 写真図版219 遺物
南造り出し出土壇輪 (291) 291突帯剥離面 (a・b)
291体部外面 (4段目) (c)
- 写真図版220 遺物
291内面 (a) 292線刻 (b)
292外面 (c) 293口縁部外面 (d)
- 写真図版221 遺物
南造り出し出土壇輪 (292・293・298)
298口縁部外面 (a)
- 写真図版222 遺物
南造り出し出土壇輪
(295・303・322・326・348・349・352)
- 写真図版223 遺物
南造り出し出土壇輪 (355～362)
- 写真図版224 遺物
南造り出し出土壇輪 (363～366・378・388)
366体部外面 (2段目) (a)
- 写真図版225 遺物
南造り出し出土壇輪 (382・399・404・405) 404線刻 (a)
- 写真図版226 遺物
南造り出し出土壇輪 (416・420)
- 写真図版227 遺物
405外面 (4段目) (a) 420線刻 (b)
420底部外面 (c) 421突帯剥離面 (d)
- 写真図版228 遺物
428口縁部外面 (a) 428体部 (4段目) 外面 (b・c)
- 写真図版229 遺物
南造り出し出土壇輪 (417・421・424)
南渡土堤出土壇輪 (431・432)
- 写真図版230 遺物
南渡土堤出土壇輪 (428・461・466・469・472)
- 写真図版231 遺物
南渡土堤出土壇輪 (470・476・477・483・495・496)
- 写真図版232 遺物
南渡土堤出土壇輪 (504・507・508・513)
513内面 (a)
- 写真図版233 遺物
南渡土堤出土壇輪 (514～518) 515線刻 (a)

写真図版234 遺物
南外堤出土埴輪 (519)
南周濠出土埴輪 (523・526・538・540)
写真図版235 遺物
南周濠出土埴輪 (539)
前方部北側1段目斜面出土埴輪 (543・544)
写真図版236 遺物
南周濠出土埴輪 (541) 541口縁部 (a)
前方部北側1段目斜面出土埴輪 (554・557)
写真図版237 遺物
539外面 (a) 539頸部突帯剥離面 (b)
541突帯剥離面 (c) 541体部外面 (d)
写真図版238 遺物
前方部北側1段目斜面出土埴輪 (542・549・558)
前方部北側1段目テラス埴輪列出土埴輪 (566)
542体部外面 (a)
写真図版239 遺物
前方部北側1段目斜面出土埴輪 (548)
前方部北側1段目テラス埴輪列出土埴輪
(569・572・573・575・577・579)
写真図版240 遺物
前方部北側1段目テラス埴輪列出土埴輪
(581・583・585～588・594)
前方部北側1段目斜面出土埴輪 (597)
写真図版241 遺物
前方部北側1段目斜面出土埴輪 (601・606)
石敷き遺構出土埴輪 (608・611・613・615)
606線刻 (a)
写真図版242 遺物
北造り出し出土埴輪 (618・631・636)
618線刻 (a) 618口縁部外面 (b)
写真図版243 遺物
北造り出し出土埴輪 (635・639・640)
北渡土堤出土埴輪 (644・646)
640刺突 (a) 644口縁部外面 (b)
写真図版244 遺物
北渡土堤出土埴輪 (645・647・649・651・652)
645線刻 (a)
写真図版245 遺物
北渡土堤出土埴輪 (653～659・661)
写真図版246 遺物
北渡土堤出土埴輪 (662・663・666・672～674)
写真図版247 遺物
666体部外面 (a) 666底部外面 (b)
675穿孔 (c) 676線刻 (d)
写真図版248 遺物
北渡土堤北端部出土埴輪 (675・679)
写真図版249 遺物
北渡土堤北端部出土埴輪 (676・682)

写真図版250 遺物
北渡土堤北端部出土埴輪 (677・680・686)
679線刻 (a) 682線刻 (b)
写真図版251 遺物
北渡土堤北端部出土埴輪 (688・692)
写真図版252 遺物
北渡土堤北端部出土埴輪 (684・687・689・690・696)
写真図版253 遺物
北渡土堤北端部出土埴輪 (694・695・700・703・708)
692線刻 (a)
写真図版254 遺物
北渡土堤北端部出土埴輪 (705) 705線刻 (a)
写真図版255 遺物
705外面 (a)
写真図版256 遺物
705外面 (a)
写真図版257 遺物
北渡土堤北端部出土埴輪 (706・707)
写真図版258 遺物
北渡土堤北端部出土埴輪 (709～711)
北周濠出土埴輪 (713・714)
706線刻 (a) 719内面 (b)
写真図版259 遺物
前方部盛土層出土埴輪 (724・725・728)

水鳥形埴輪

写真図版260 遺物
出土水鳥形埴輪
写真図版261 遺物
南造り出し出土水鳥形埴輪 (733: 水鳥形埴輪1)
733翼近景 (a) 733下尾筒内面 (b)
733胸部内面 (c)
写真図版262 遺物
南造り出し出土水鳥形埴輪 (734: 水鳥形埴輪2)
734頭部 (a) 734頭部内面 (b)
写真図版263 遺物
南造り出し出土水鳥形埴輪
(735: 水鳥形埴輪3・736: 水鳥形埴輪4)
735頭部X線透過写真 (a)
写真図版264 遺物
南造り出し出土水鳥形埴輪
(736: 水鳥形埴輪4・737: 水鳥形埴輪5)
736頭部内面 (a) 736頭部 (b)
写真図版265 遺物
南造り出し出土水鳥形埴輪 (737: 水鳥形埴輪5)
737頭部接写 (a) 737頭部内面 (b)
写真図版266 遺物
737頭部X線透過写真 (a) 737体部内面 (b)
737上尾筒～下尾筒内面 (c)

- 737体部～尾部内面 (d) 737台部内面 (e)
 写真図版267 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (738: 水鳥形埴輪 6)
 738上背～尾内面 (a) 738尾筒内側面 (b)
 写真図版268 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪
 (739: 水鳥形埴輪 7・740: 水鳥形埴輪 8)
 739上背部内面 (a)
 写真図版269 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (741: 水鳥形埴輪 9)
 740頭部X線透過写真 (a) 741頭部 (b)
 741頸部内面 (c) 741頭部内面 (d)
 写真図版270 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (742: 水鳥形埴輪10)
 742頭部 (a・b)
 写真図版271 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (743: 水鳥形埴輪11)
 742頭部X線透過写真 (a) 742頭部内面 (b)
 写真図版272 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (744: 水鳥形埴輪12)
 743嘴 (下嘴接合前) (a) 743頸部内面 (b)
 743嘴横断面 (c) 743下嘴内面 (d)
 743上嘴内面 (e) 744脇部内面 (f)
 744尾部内面 (g) 744尾部 (表面・裏面) (h)
 写真図版273 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (745: 水鳥形埴輪13)
 746嘴 (上下) (a) 746左翼 (b)
 746右翼 (c) 746左翼 (d)
 写真図版274 遺物
 746尾部 (a) 746尾部上側内面 (b)
 746風切羽 (接合前・接合後) (c)
 746風切羽 (復元後) (d) 746風切羽と尾 (e)
 写真図版275 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (746: 水鳥形埴輪14)
 746頭部 (a～c)
 写真図版276 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪
 (746: 水鳥形埴輪14・747: 水鳥形埴輪15)
 746頭部 (a)
 写真図版277 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (748: 水鳥形埴輪16)
 写真図版278 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (748: 水鳥形埴輪16)
 写真図版279 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (748: 水鳥形埴輪16)
 748頭部 (a・b) 748台部下内面 (c) 748台部内面 (d)
 写真図版280 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (748: 水鳥形埴輪16)
 748頭部X線透過写真 (a) 748頭部内面 (b)
 写真図版281 遺物
 748頭部 (a) 748右翼先端部裏面 (b)
 写真図版282 遺物
 748頭部 (a) 748尾部～尾筒接合部 (尾部側) (b)
 748背部 (翼接合前) (c) 748背部 (翼接合・復元後) (d)
 写真図版283 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (749: 水鳥形埴輪17)
 写真図版284 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (749: 水鳥形埴輪17)
 写真図版285 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (749: 水鳥形埴輪17)
 749翼 (a) 749背部～台部X線透過写真 (b)
 写真図版286 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (749: 水鳥形埴輪17)
 749胸部内面 (a) 749頭部内面 (b)
 写真図版287 遺物
 749頭部 (a～c) 749台部底面 (d)
 749台部内面 (e・f)
 写真図版288 遺物
 749頭部 (a) 749頭部X線透過写真 (b)
 写真図版289 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (750: 水鳥形埴輪18)
 750頸部内面 (a) 750上尾筒～下尾筒内面 (b)
 750脇部内面 (c)
 写真図版290 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (751: 水鳥形埴輪19)
 写真図版291 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (751: 水鳥形埴輪19)
 写真図版292 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (751: 水鳥形埴輪19)
 写真図版293 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (751: 水鳥形埴輪19)
 751脚部 (接合前) (a) 751脚部 (接合後) (b)
 写真図版294 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (751: 水鳥形埴輪19)
 751髀接合面 (a) 751台部内面 (b)
 写真図版295 遺物
 751頭部 (a) 751頭部X線透過写真 (b)
 写真図版296 遺物
 751頭部 (a～c) 751頭部内面 (d)
 751脇部内面 (e)
 写真図版297 遺物
 751下尾筒～脇部内面 (a) 751背部 (翼接合前) (b)
 751背部 (右翼接合後) (c) 751背部 (左翼接合後) (d)
 751背部 (両翼接合・復元後) (e)
 写真図版298 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (752: 水鳥形埴輪20)
 752頭部X線透過写真 (a) 752頭部内面 (b)
 写真図版299 遺物

- 南造り出し出土水鳥形埴輪 (753: 水鳥形埴輪21)
753頭頸部X線透過写真 (a) 753頸部内面 (b)
写真図版300 遺物
- 南造り出し出土水鳥形埴輪 (754: 水鳥形埴輪22)
754頭頸部X線透過写真 (a) 754頸部内面 (b)
写真図版301 遺物
- 南造り出し出土水鳥形埴輪 (755: 水鳥形埴輪23)
写真図版302 遺物
- 南造り出し出土水鳥形埴輪 (755: 水鳥形埴輪23)
写真図版303 遺物
- 南造り出し出土水鳥形埴輪 (755: 水鳥形埴輪23)
755頸部内面 (a)
写真図版304 遺物
- 南造り出し出土水鳥形埴輪 (755: 水鳥形埴輪23)
755脇部~胸部内面 (a)
写真図版305 遺物
- 南造り出し出土水鳥形埴輪 (755: 水鳥形埴輪23)
755頭頸部X線透過写真 (a)
写真図版306 遺物
- 755頸部 (a~c) 755胸部 (d)
755背部内面 (e) 755背部 (f)
写真図版307 遺物
- 前方部南側1段目斜面出土水鳥形埴輪
(756: 水鳥形埴輪24)
- 756頸部内面 (a)
写真図版308 遺物
- 前方部南側1段目斜面出土水鳥形埴輪
(756: 水鳥形埴輪24)
- 756頭頸部X線透過写真 (a)
写真図版309 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (757: 水鳥形埴輪25)
写真図版310 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (757: 水鳥形埴輪25)
写真図版311 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (757: 水鳥形埴輪25)
写真図版312 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (757: 水鳥形埴輪25)
写真図版313 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (757: 水鳥形埴輪25)
757頸部 (a・b) 757背部内面 (c)
写真図版314 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (757: 水鳥形埴輪25)
757頸部内面 (a) 757背部 (b) 757脇部視刻 (c)
写真図版315 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (758: 水鳥形埴輪26)
写真図版316 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (758: 水鳥形埴輪26)
写真図版317 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (758: 水鳥形埴輪26)
- 758背部内面 (a) 758背部 (b) 758頸部内面 (c)
写真図版318 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (758: 水鳥形埴輪26)
758視刻 (a)
写真図版319 遺物
- 758頭部断面 (翼接合前) (a) 758頭部 (b~d)
写真図版320 遺物
- 758頭部 (a) 758頭頸部X線透過写真 (b)
写真図版321 遺物
- 前方部南側1段目斜面出土水鳥形埴輪
(759: 水鳥形埴輪27)
- 写真図版322 遺物
- 前方部南側1段目斜面出土水鳥形埴輪
(759: 水鳥形埴輪27)
- 写真図版323 遺物
- 前方部南側1段目斜面出土水鳥形埴輪
(759: 水鳥形埴輪27)
- 759台部と跨の接合 (a・b)
写真図版324 遺物
- 前方部南側1段目斜面出土水鳥形埴輪
(759: 水鳥形埴輪27)
- 759頸部内面 (a)
写真図版325 遺物
- 前方部南側1段目斜面出土水鳥形埴輪
(759: 水鳥形埴輪27)
- 759頸部 (a・b) 759頭頸部X線透過写真 (c)
写真図版326 遺物
- 前方部南側1段目斜面出土水鳥形埴輪
(759: 水鳥形埴輪27)
- 759頭頸部X線透過写真 (a)
759尾部 (表面・内面・裏面) (b)
写真図版327 遺物
- 759背部 (翼接合前) (a) 759背部 (翼接合後) (b)
759背部内面 (c)
写真図版328 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (760: 水鳥形埴輪28)
写真図版329 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (760: 水鳥形埴輪28)
写真図版330 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (760: 水鳥形埴輪28)
写真図版331 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (760: 水鳥形埴輪28)
760嘴 (上面・下面・頭部との接合面) (a)
760小鳥3貼り付け痕 (b)
写真図版332 遺物
- 南周濠出土水鳥形埴輪 (760: 水鳥形埴輪28)
760背部 (a・b)
写真図版333 遺物
- 760頭部 (a~c) 760頭部~体部X線透過写真 (d)

- 760頭頂部X線透過写真 (e)
 写真図版334 遺物
 760頭部 (a) 760頸部 (b)
 760体部~台部X線透過写真 (c)
 写真図版335 遺物
 760小鳥1・小鳥2 (a) 760小鳥1 (b)
 写真図版336 遺物
 760小鳥1・小鳥2 (a) 760小鳥1 (b・c)
 写真図版337 遺物
 760小鳥1・小鳥2 (a) 760小鳥2 (b)
 写真図版338 遺物
 760小鳥1・小鳥2 (a) 760小鳥2 (b~d)
 写真図版339 遺物
 760小鳥3 (a~c)
 写真図版340 遺物
 760小鳥3 (a・b)
 写真図版341 遺物
 760小鳥4 (a~c)
 写真図版342 遺物
 760小鳥4 (a・b)
 写真図版343 遺物
 南周濠出土水鳥形埴輪 (761: 水鳥形埴輪29)
 761背部 (a)
 写真図版344 遺物
 南周濠出土水鳥形埴輪 (761: 水鳥形埴輪29)
 761背部内面 (a)
 写真図版345 遺物
 南周濠出土水鳥形埴輪 (761: 水鳥形埴輪29)
 761台部下内面 (a)
 写真図版346 遺物
 南周濠出土水鳥形埴輪 (761: 水鳥形埴輪29)
 761頭部内面 (a) 761台部内面 (b)
 写真図版347 遺物
 南渡土堤出土水鳥形埴輪 (762: 水鳥形埴輪30)
 761頭部X線透過写真 (a) 761頭部 (b)
 写真図版348 遺物
 南渡土堤出土水鳥形埴輪 (762: 水鳥形埴輪30)
 761頭部 (a~c)
 写真図版349 遺物
 南渡土堤出土水鳥形埴輪 (762: 水鳥形埴輪30)
 762背部 (a)
 写真図版350 遺物
 南渡土堤出土水鳥形埴輪 (762: 水鳥形埴輪30)
 762背部内面 (a)
 写真図版351 遺物
 762頭部 (a~c) 762頭頂部X線透過写真 (d)
 写真図版352 遺物
 762頭部 (a) 762台部下内面 (b)
 762背部~台部X線透過写真 (c)
 写真図版353 遺物
 南渡土堤出土水鳥形埴輪 (763: 水鳥形埴輪31)
 写真図版354 遺物
 南渡土堤出土水鳥形埴輪 (763: 水鳥形埴輪31)
 写真図版355 遺物
 南渡土堤出土水鳥形埴輪 (763: 水鳥形埴輪31)
 763右翼 (表面・裏面) (a)
 写真図版356 遺物
 南渡土堤出土水鳥形埴輪 (763: 水鳥形埴輪31)
 763左翼 (表面・裏面) (a)
 写真図版357 遺物
 763頭部 (a・b) 763頭頂部 (c) 763背部 (d)
 写真図版358 遺物
 763頭頂部 (a) 763頭部内面 (b)
 763頭頂部X線透過写真 (c)
 763脇部内面 (d) 763翼刺離面 (e)
 写真図版359 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (764・765・768)
 写真図版360 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (766・767)
 写真図版361 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (769~773)
 写真図版362 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (774~782)
 写真図版363 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (784~801)
 写真図版364 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (802~810・824~826・829)
 写真図版365 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (811~823)
 写真図版366 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (827・828・836・837)
 写真図版367 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (830~835・838・839・846)
 写真図版368 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (840~845・848)
 写真図版369 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (847・849~852)
 写真図版370 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (853~856) 854線刻 (a)
 写真図版371 遺物
 南造り出し出土水鳥形埴輪 (857~860)
 写真図版372 遺物
 区画溝出土水鳥形埴輪 (861~868)
 前方部南側1段目斜面出土水鳥形埴輪 (869・870)
 写真図版373 遺物
 前方部南側1段目斜面出土水鳥形埴輪 (871~879)
 南渡土堤出土水鳥形埴輪 (880)

- 写真図版374 遺物
南造り出し出土水鳥形埴輪 (783)
南渡土堤出土水鳥形埴輪 (881~887)
前方部盛土層出土水鳥形埴輪 (888・889)
- 家形埴輪**
- 写真図版375 遺物
池田古墳出土家形埴輪
- 写真図版376 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (890: 家形埴輪 1)
- 写真図版377 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (890: 家形埴輪 1)
890A面屋根 (a~c) 890B面屋根 (d)
- 写真図版378 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (890: 家形埴輪 1)
890B面屋根 (a・b) 890大棟断面 (c)
890屋根と壁体の接合部断面 (d)
- 写真図版379 遺物
890A面階上左側壁体 (a) 890A面階上右側壁体 (b)
890B面階上左側壁体 (c) 890B面階上右側壁体 (d)
890C面階上右側壁体 (e) 890D面階上右側壁体 (f)
890隅柱階廻り突帯貼り付け痕 (g) 890隅柱断面 (h)
- 写真図版380 遺物
家形埴輪 1柱 (891~893)
家形埴輪 1台輪 (894~896) 890裾廻り突帯 (a)
- 写真図版381 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (897: 家形埴輪 2)
897壁面 (A面) (a) 897壁面 (C面) (b)
- 写真図版382 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (897: 家形埴輪 2)
897壁面 (B面) (a) 897壁面 (D面) (b)
- 写真図版383 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (898: 家形埴輪 3)
898屋根裏面 (a) 898屋根裏面成形痕 (b)
898大棟裏面 棟木端貼り付け痕 (c)
898大棟裏面~破風板表面 棟木貼り付け痕 (d)
- 写真図版384 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (898: 家形埴輪 3)
898大棟と破風板の接合 (a・b)
898屋根と壁体の接合 (c)
- 写真図版385 遺物
898C面右側桁柱 (a~d) 898D面左側桁柱 (e・f)
898D面右側桁柱 (g・h)
- 写真図版386 遺物
898屋根と壁体の接合部 (a~c)
898階廻り突帯・台輪 (d)
898B面基底部掻き破り痕 (e)
898A面基底部掻き破り痕 (f)
- 写真図版387 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (899: 家形埴輪 4)
899大棟飾り (a) 899四柱部上端飾り (b)
- 写真図版388 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (899: 家形埴輪 4)
899四柱部上端飾り (a・b)
- 写真図版389 遺物
899壁体 (A面) (a) 899A面階上左側壁体 (b)
899A面階上右側壁体 (c)
899階廻り突帯 (A面~D面間) (d)
899階廻り突帯 (A面~C面間) (e)
- 写真図版390 遺物
899壁体 (B面) (a) 899B面階上左側壁体 (b)
899B面階上右側壁体 (c)
899階廻り突帯 (B面~C面間) (d)
899階廻り突帯 (B面~D面間) (e)
- 写真図版391 遺物
899壁体 (C面) (a) 899C面階上左側壁体 (b)
899C面階上右側壁体 (入口) (c)
899壁体と屋根の接合 (d)
- 写真図版392 遺物
899壁体 (D面) (a) 899D面階上右側壁体 (b)
899階廻り突帯・台輪 (c) 899壁体と屋根の接合 (d)
899四柱部上端 飾り接合痕 (e)
- 写真図版393 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (900: 家形埴輪 5)
900D面側壁体と屋根の接合 (a)
- 写真図版394 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (900: 家形埴輪 5)
900C面~B面間基底部コーナー (a)
- 写真図版395 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (901: 家形埴輪 6)
901棟木端貼り付け痕 (a) 901壁体接合痕 (b)
901大棟裏面棟木痕 (c)
- 写真図版396 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (902: 家形埴輪 7)
901棟木端貼り付け痕 (a) 901棟木端 (b)
901大棟付近破風板貼り付け痕 (c)
901大棟裏面棟木端貼り付け痕 (d)
902妻側壁体 (外面) (e) 902妻側壁体 (内面) (f)
902屋根裏面 (g・h)
- 写真図版397 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (903: 家形埴輪 8)
903A面屋根 (a) 903C面壁体 (b)
903B面屋根 (外面・内面) (c)
- 写真図版398 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(903: 家形埴輪 8・904: 家形埴輪 9)
903屋根と壁体の接合 (a)

- 写真図版399 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (905~908: 家形埴輪 9)
904棟木 (a) 904棟木側面 (b)
- 写真図版400 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (909~912: 家形埴輪 9)
913大棟内面 (a) 913棟木端 (b)
- 写真図版401 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(913: 家形埴輪10・914: 家形埴輪11)
- 写真図版402 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (915・916: 家形埴輪12)
914桁 (a・b) 914入口 (c)
914屋根裏面 (上側が妻側外壁面) (d)
915屋根縦断面 (e)
- 写真図版403 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(917・918: 家形埴輪12・919: 家形埴輪13)
- 写真図版404 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(920: 家形埴輪13・922: 家形埴輪14
923: 家形埴輪14・924: 家形埴輪15)
922内面・断面 (a)
- 写真図版405 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (925: 家形埴輪15
926: 家形埴輪16・927: 家形埴輪17)
- 写真図版406 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (928~931: 家形埴輪17
932~936: 家形埴輪18・937: 家形埴輪19)
- 写真図版407 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(938~940: 家形埴輪19・941~943: 家形埴輪20
944・946・947: 家形埴輪21・950: 家形埴輪22)
- 写真図版408 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (945: 家形埴輪21・
948・949・951・952: 家形埴輪22)
949裾廻り突帯剥離面 (a) 948裾廻り突帯接合痕 (b)
- 写真図版409 遺物
南造り出し出土家形埴輪 (953~955: 家形埴輪23)
954裏面・断面 (a)
- 写真図版410 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(956: 957: 家形埴輪23・962~963)
前方部南側1段目テラス出土家形埴輪 (958)
区西溝出土家形埴輪 (959・960)
南周濠出土家形埴輪 (961)
北周濠出土家形埴輪 (965)
- 写真図版411 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(964・967~970・972・986・987)
- 南周濠出土家形埴輪 (971)
北周濠出土家形埴輪 (966)
- 写真図版412 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(973~976・978~981・983~985・988)
区西溝出土家形埴輪 (977)
前方部南側1段目テラス出土家形埴輪 (982)
- 写真図版413 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(989・991~993: 家形埴輪24・994~995・997・998)
南周濠出土家形埴輪 (990・999)
- 写真図版414 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(996・1000・1001・1003・1007・1008)
区西溝出土家形埴輪 (1002)
- 写真図版415 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(1004~1006・1009~1014・1024~1026・1028)
南周濠出土家形埴輪 (1027)
- 写真図版416 遺物
南造り出し出土家形埴輪
(1015・1016・1017・1020・1023)
南周濠出土家形埴輪 (1016・1018・1019・1022)
前方部南側1段目斜面出土家形埴輪 (1021)
北造り出し出土家形埴輪 (1029・1030)
- 写真図版417 遺物
北造り出し出土家形埴輪 (1031~1041)
- 写真図版418 遺物
北造り出し出土家形埴輪 (1042~1046)
北周濠出土家形埴輪 (1047・1048)
- 写真図版419 遺物
北周濠出土家形埴輪 (1050)
北造り出し出土家形埴輪 (1051・1052)
- 櫛形埴輪**
- 写真図版420 遺物
出土櫛形埴輪
- 写真図版421 遺物
南造り出し出土櫛形埴輪 (1054・1056・1058・1060)
前方部南側1段目斜面出土櫛形埴輪 (1059)
北造り出し出土櫛形埴輪 (1055・1057)
- 写真図版422 遺物
南造り出し出土櫛形埴輪 (1061~1080・1082)
南渡土堤出土櫛形埴輪 (1081)
- 写真図版423 遺物
南造り出し出土櫛形埴輪 (1083~1085・1087~1090)
前方部南側1段目斜面出土櫛形埴輪 (1086)
- 写真図版424 遺物
南造り出し出土櫛形埴輪 (1091~1103・1105~1109)

- 区画溝出土櫛形埴輪 (1104)
- 写真図版425 遺物
南造り出し出土櫛形埴輪 (1110~1115)
区画溝出土櫛形埴輪 (1116~1122)
- 写真図版426 遺物
区画溝出土櫛形埴輪 (1123~1128)
南外堤出土櫛形埴輪 (1129)
南周濠出土櫛形埴輪 (1130)
前方部南側1段目斜面出土櫛形埴輪 (1131)
- その他の埴輪**
- 写真図版427 遺物
北造り出し出土櫛形埴輪 (1132~1137・1139・1140)
北周濠出土櫛形埴輪 (1138・1141)
南造り出し出土圓形埴輪 (1142・1145・1146)
前方部南側1段目斜面出土圓形埴輪 (1143)
区画溝出土圓形埴輪 (1144)
- 写真図版428 遺物
出土盾形埴輪
- 写真図版429 遺物
前方部南側1段目斜面出土盾形埴輪 (1147・1149)
北周濠出土盾形埴輪 (1150) 1147細部 (a)
- 写真図版430 遺物
南周濠出土盾形埴輪 (1148・1152)
前方部南側1段目斜面出土盾形埴輪 (1151)
前方部北側1段目斜面出土盾形埴輪 (1153・1154)
- 写真図版431 遺物
南造り出し出土船形埴輪 (1155・1156)
区画溝出土船形埴輪 (1157・1161)
- 写真図版432 遺物
南造り出し出土船形埴輪 (1158・1159)
前方部南側1段目斜面出土船形埴輪 (1160)
南造り出し出土蓋形埴輪 (1162・1163・1165・1168)
前方部北側1段目斜面出土蓋形埴輪 (1164・1167)
- 写真図版433 遺物
南造り出し出土蓋形埴輪 (1166)
北造り出し出土紋形埴輪 (1169~1171)
- 写真図版434 遺物
区画溝出土甲冑形?埴輪 (1172)
南造り出し出土不明品 (1173)
前方部南側1段目斜面出土不明品 (1174)
南周濠出土不明品 (1175・1177)

小型土器・小型土製品

- 写真図版435 遺物
北造り出し出土小型土器
(1178~1181・1183~1187・1189・1191・1196・1204
~1207・1210~1212・1226・1227・1237・1238)
北渡土堤出土小型土器 (1190)

- 写真図版436 遺物
北周濠出土小型土器 (1182・1188)
北造り出し出土小型土器
(1192~1195・1198~1201・1203・1208・1225・1228~
1231)

- 写真図版437 遺物
前方部北側斜面出土小型土器 (1197・1202)
北周濠出土小型土器 (1209・1236)
北造り出し出土小型土器
(1216~1224・1229・1240・1242・1244・1246)
北造り出し出土小型土製品 (1247)

- 写真図版438 遺物
北造り出し出土小型土器
(1213~1215・1232~1235・1239・1241・1243・1245)
北造り出し出土小型土製品 (1248~1250)
南造り出し出土小型土製品 (1251~1253)

土器・土製品・金属製品・木製品

- 写真図版439 遺物
南周濠出土土器 (1254・1261・1264・1266・1267・
1270・1276・1279)

- 南周濠出土土製品 (1286)
北周濠出土土製品 (1285・1287・1288)

- 写真図版440 遺物
池田古墳下層遺跡出土土器 (2・6・7・9・11)
南周濠出土金属製品 (M2・M3・M5・M6)

- 写真図版441 遺物
南周濠出土金属製品 (M1) W1 襲接写 (a)

- 写真図版442 遺物
北周濠出土木製品 (W1)

- 写真図版443 遺物
北周濠出土木榫 (W2・W3)
W2 端部 (a) W3 端部 (b)

- 写真図版444 遺物
北周濠出土木製品 (W4~W8)

- 写真図版445 遺物
北周濠出土木製品 (W9)
前方部南側1段目斜面出土木製品 (W10)
南周濠出土木製品 (W11・W12)



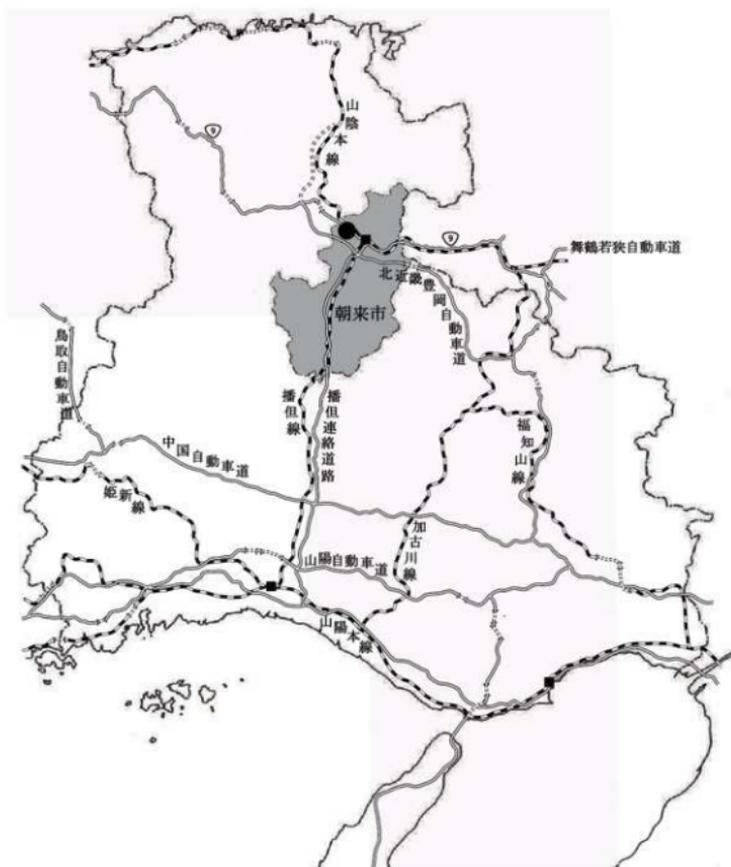
第1図 朝来市の位置

第1章 池田古墳

第1節 地理的環境

1. 池田古墳の地理的位置

池田古墳は、朝来市和田山町平野に所在する。朝来市は、兵庫県の北部、いわゆる但馬地域にあたり、この但馬地域のなかでは南部にあたる地域である(第1図)。南側は播磨地域と境をなしている。北端を豊岡市出石町と、北東部を京都府福知山市夜久野町と、東側を兵庫県丹波市と、南東部を同多可郡多可



第2図 兵庫県下の道路・鉄道網

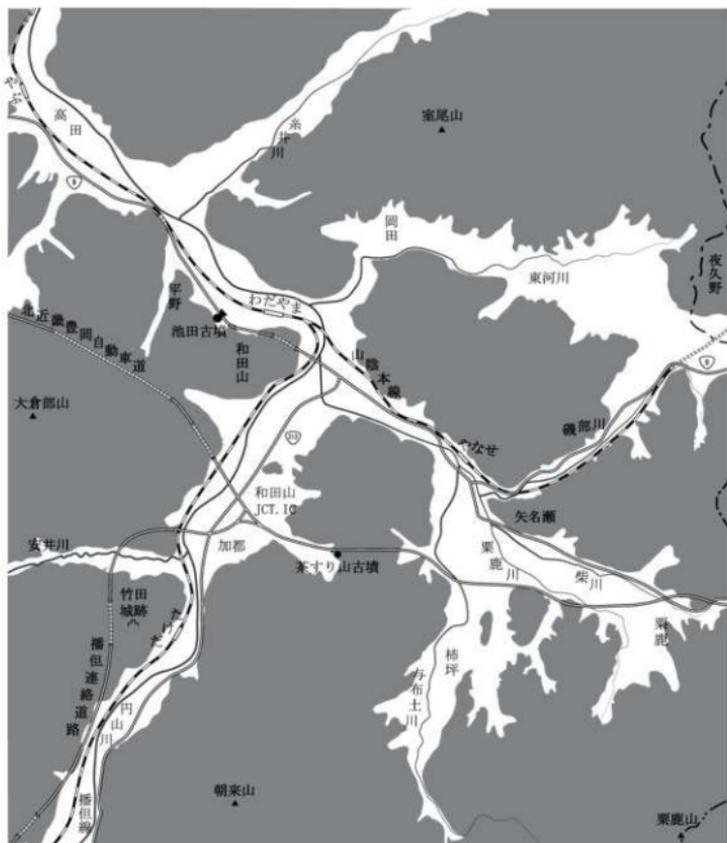


第3図 朝来市の地理的位置

町と、南側を神崎郡神河町と、南西側を穴栗市と、西側を養父市と、それぞれ境をなしている(第3図)。市域は、南北32km、東西24kmと南北に長く、その面積は402.98km²である。

朝来市は、平成17年4月1日に、いわゆる平成の大合併により、朝来郡生野町・同朝来町・同和田山町・同山東町が合併し、新たに誕生した市である(第3図)。このなかで、池田古墳の所在地は、旧の和田山町にあたる(第4図)。朝来市の平成26年3月末現在の人口は32000人である。¹⁾

旧和田山町は、昭和5年に枚田村から町制に移行して誕生した町で、昭和31年9月30日には竹田町と

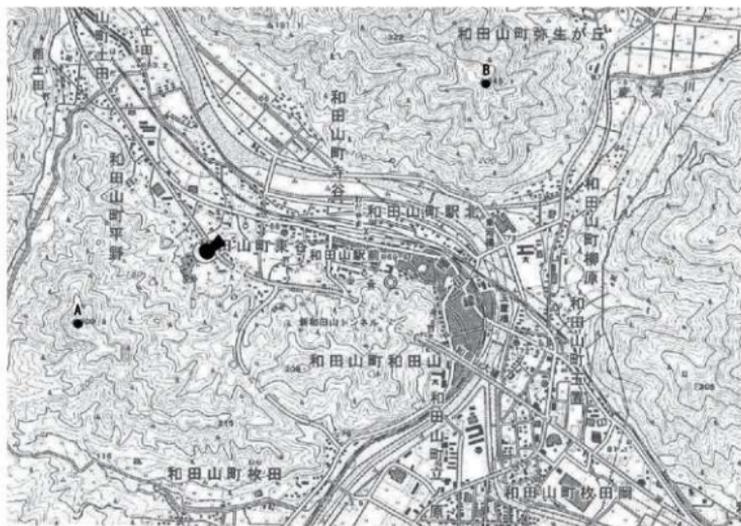


第4図 旧和山町の地理的位置

南但町が合併し、南但馬の中心を担ってきた。また、古代以来交通の要衝でもあり、畿内と山陰を結ぶ山陰道が通っていた。さらに、当地において、播磨（姫路）から北進する官道（但馬道）と合流していた²⁾。そして、この交通の要衝としての役割は、現代まで継承されている（第4図）。

まず、鉄道交通としては、京都と山陰を結ぶJR山陰本線と瀬戸内（姫路）と但馬を結ぶJR播但線が和山田駅で合流している。道路交通も鉄道交通とはほぼ平行しており、京都と山陰を結ぶ国道9号線に姫路から北上してくる国道312号線が、枚田岡で合流している（第4図）。ちなみに、池田古墳は、枚田岡の西約2kmの国道9号線下に位置している。和山田駅の西約700mにあたる。

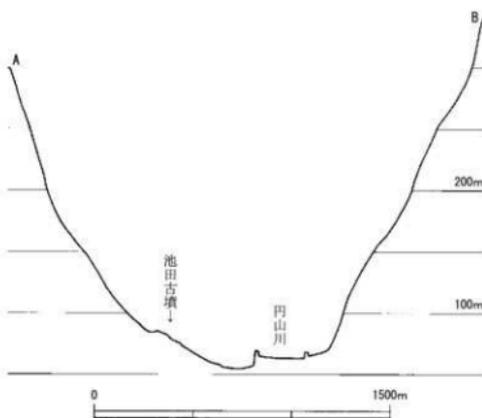
ところで、これらの鉄道交通と陸上交通の経路は、朝来市域においてはほぼ近接している（第3図）。これは、狭小な谷地形に制約されたためと考えられる。さらには、円山川もこれとはほぼ平行している。この円山川についても、江戸時代後期に津居山（現豊岡市）から市川河口の女鹿（現姫路市）まで舟運



第5図 池田古墳の位置

が開設され、河川交通の機能も果たされていた。

さらに、道路交通については、現在高規格道路にその機能が引き継がれている。国道9号線に替わる北近畿自動車道と、国道312号線に替わる播但連絡道路である（第4図）。北近畿自動車道は、平成26年現在、養父市まで開通し、平成28年度には豊岡市日高町まで開通予定で、現在豊岡市佐野まで工事が進められている。



第6図 谷底平野横断面

2. 池田古墳の地形的位置

朝来市は、山地と盆地からなる。山地が地域の84%を占め、わずかに谷底平野が形成されている。この谷底平野の大半は、円山川およびその支流によって形成されたものである。このなかで、和田山町加都、およびその東側の旧山東町域を中心とした地域には、比較的広大な平野が形成されている。(第4図)。

円山川は、朝来市生野町円山を源とし、養父市を経て、豊岡市津居川で日本海へと注いでいる。上



第7図 朝来市中心部（城ノ山古墳から）

流域では田路川・神子畑川と、中流域では与布土川・糸井川・大屋川・八木川と、下流域では稲葉川・出石川・六方川・奈佐川と合流している（第427図）。全長67kmを測り、流域面積は1300km²におよぶ。また、但馬地域では唯一の一級河川である。

朝来市は、円山川の源流域から中流域にあたる地域に位置する。朝来市域における円山川は、源流域から北進した後、和田山町和田山で与布



第8図 池田古墳周辺の微地形

土川と合流、その後大きく北西方向へ屈曲している（第5図）。この屈曲地点が朝来市の中心となっている（第7図）。そして、北西方向へ屈曲した地点から、北西側約1.5km下った地点の左岸に、池田古墳が所在する（巻首図版1）。この地点は、加都と比べるとはるかに狭い谷底平野となっており、その幅はわずか700mである（第6図：A・B地点は第5図）。

池田古墳の南側は大倉部山（標高692m）を中心とした山地となっており、ひとつの谷を隔てた北側の山地と円山川北側の山地が、円山川を中心とした小谷を形成している（第6図）。その小規模な谷の底部にかけて傾斜が緩やかに変換する付近に、池田古墳が立地している（第6図）。池田古墳周辺の標高は、西端部で89m、東端部で76mと、約5°の傾斜が認められる。また、池田古墳北西部における円山川河川敷の標高は、64mである。

一方、池田古墳の南東側、旧国道付近においては、円山川によって形成された顕著な段丘崖が認められる。その比高は2m～3mを測る。以上から、池田古墳は段丘上に立地していることが理解できる。さらに、池田古墳周辺の微地形（第8図）をみると、大倉部山山地の南側斜面であるが、池田古墳のあたりは、わずかに谷地形となっている（巻首図版3）。また、今回の調査における墳丘断面の観察結果によると、池田古墳の基盤は小規模な尾根状をなしていたことが理解できる。以上から、池田古墳は、小規模な谷中にある小尾根上に立地しているものと考えられる。

〔註〕

- (1) 朝来市ホームページによる
- (2) 甲斐昭光「加都遺跡Ⅰ－播但連絡有料道路5期合併施工事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」
兵庫県教育委員会 2005
- (3) 八鹿町「八鹿町史 上巻」1971
宿南 保「街道と舟路」『和田山町史 上巻』和田山町 平成16年
- (4) 青木哲哉「加都遺跡の地形環境」『加都遺跡Ⅱ－一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』兵庫県教育委員会 2007
青木哲哉「加都遺跡の地形環境」『加都遺跡Ⅲ－一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』兵庫県教育委員会 2012
- (5) 工藤智巳「地形と自然景観」『和田山町史 上巻』和田山町 平成16年

第2節 歴史的環境

1. はじめに

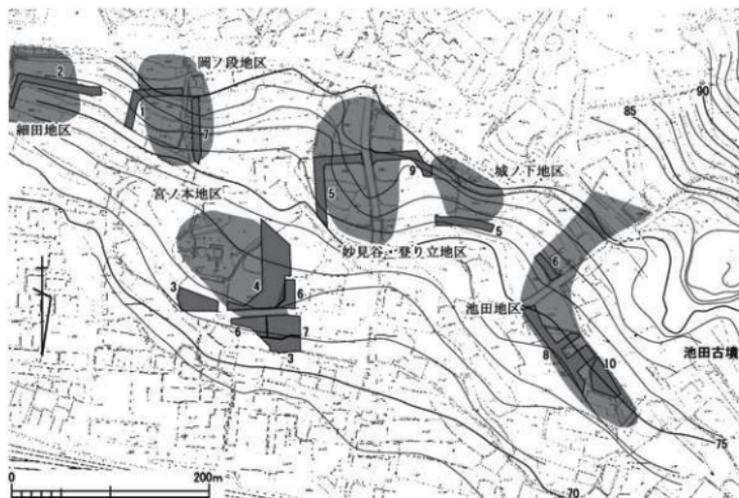
前節で報告したように、池田古墳は狭小な谷地形上に立地するため、周囲に周知されている遺跡はわずかである。ここでは、池田古墳の歴史を検討する上で重要と考えられる、和田山町加都を中心とした旧和田山町域および旧山東町域の、調査が行われた遺跡を対象として見ていくことにする。時代的には、池田古墳の歴史的位置付けを行う上で重要と考えられる、弥生時代後期末から古墳時代中期を中心にみていくことにする(第10図・第1表)。さらに、池田古墳を検討するうえで重要と考えられる、古代交通路についてもまとめておきたい(第16図)。

なかでも、池田古墳の南側から東側一帯に近接する宮ノ本遺跡については、本古墳との関連で見逃すことのできない遺跡である。数次にわたり本発掘調査が行われていることから、まず当該遺跡の詳細についてまとめることにする。

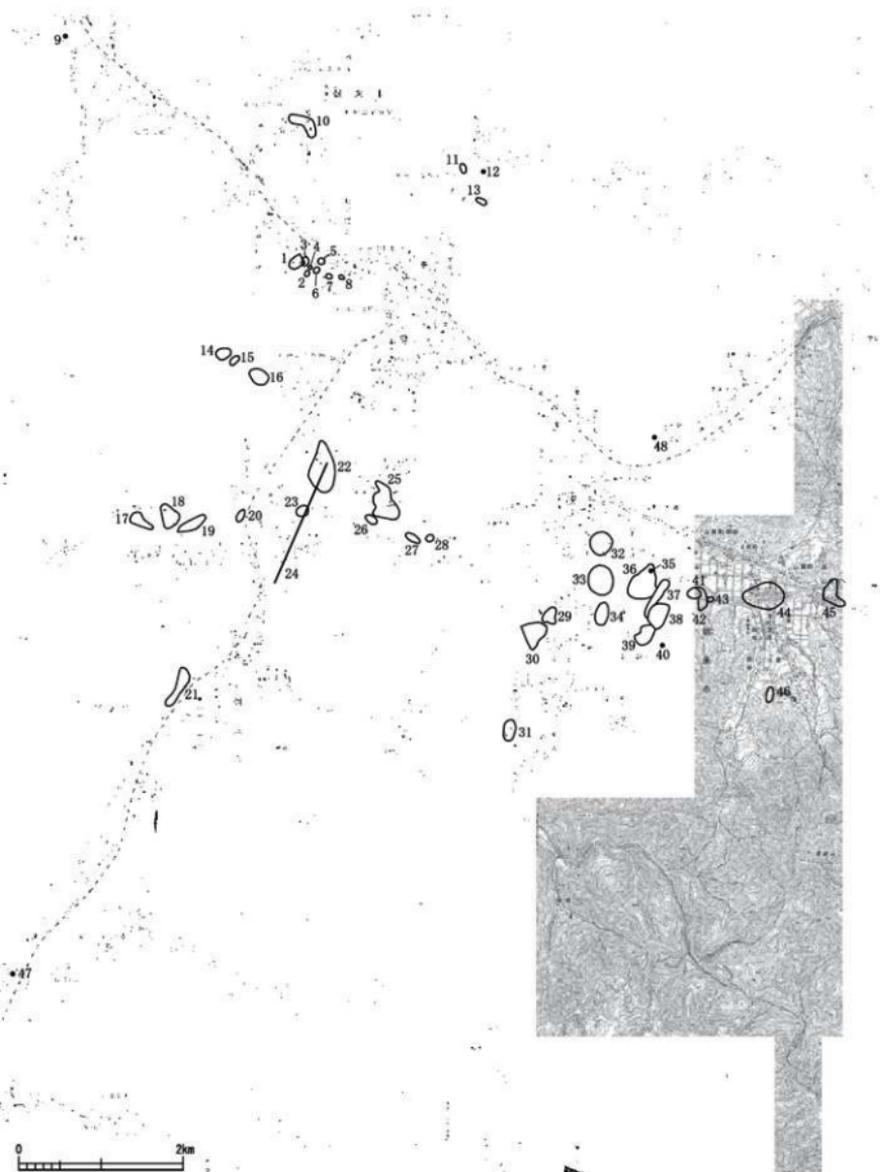
2. 宮ノ本遺跡

宮ノ本遺跡は、池田地区(3)、城ノ下地区(4)、妙見谷・登り立地区(6)、宮ノ本地区(5)、岡ノ段地区(7)、細田地区(8)の6地区からなる(第9図・第11図)。池田古墳と最も近接した集落遺跡である。このなかで、各地区で確認調査もしくは本発掘調査が計10次にわたり行われている(第9図)。調査は、いずれも和田山駅南土地区画整理事業に伴い和田山町教育委員会(現朝来市教育委員会)によって行われたものである¹¹⁾。

池田地区 平成12年度に行われた確認調査において、古墳時代前期の土器を包含する溝状遺構が検出さ



第9図 宮ノ本遺跡と調査地



第10図 主要周辺遺跡

第1表 主要周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	県遺跡番号	所在地
1	池田古墳	730001	和田山町平野字イケダ
	池田古墳下層遺跡	730488	和田山町平野字イケダ
2	城ノ山古墳	730220	和田山町東谷字城山
3	宮ノ本遺跡(池田地区)	730758	和田山町東谷
4	宮ノ本遺跡(城ノ下地区)	730757	和田山町東谷
5	宮ノ本遺跡(宮ノ本地区)	730755	和田山町東谷
6	宮ノ本遺跡(妙見谷・登り立地区)	730756	和田山町東谷
7	宮ノ本遺跡(岡ノ段地区)	730754	和田山町東谷
8	宮ノ本遺跡(細田地区)	730753	和田山町東谷
9	高田長持形石棺所在地		和田山町高田
10	秋葉山墳墓群	730168・730169・730433～730437	和田山町林垣字箕山
11	小丸山古墳	730317	和田山町岡田字小丸山
12	岡田2号墳	730200	和田山町岡田字兜塚
13	門在1号墳	730559	和田山町榊原字門在
14	内高山西古墳群	730748・730749・730769～730776	和田山町枚田字内高山
15	内高山東古墳群	730745～730747	和田山町枚田字内高山
16	上エ山古墳群	730725～730741・730759～730767	和田山町枚田字上へ山
17	市条寺古墳群	730232～730235・730402～730409	和田山町安井字市条寺
18	向山古墳群	730221～730231・730716～730718	和田山町加都字向山
19	梅田古墳群	730345～730350・730669・730671～730715	和田山町加都字向山
20	梅田東古墳群	730649～730662	和田山町加都字向山
	梅田東木棺墓群	730663	和田山町加都字向山
21	ムクノ本遺跡	730342	和田山町久世田字ムクノ本他
22	加都遺跡(宮ノ田地区)	730751	和田山町加都字宮ノ田他
23	加都遺跡(桜地区)	730750	和田山町加都字桜
24	但馬道	730752	和田山町加都
25	筒江中山墳墓群	730632	和田山町筒江字中山
	筒江中山古墳群	730240～730266・730576～730578	和田山町筒江字中山
26	中山遺跡	730290	和田山町筒江字中山
27	筒江浦石遺跡	730611	和田山町筒江字浦石
28	茶すり山古墳	国指定史跡36	和田山町筒江字茶ヶ谷
29	寺山古墳群	740160～740175・740742・740743	山東町大月字東南山
30	宮ノ谷古墳群	740176～740222・740744～740750	山東町杉本字宮ノ谷
31	森向山遺跡・森向山古墳群	740584・740569～740583	山東町森字向山
32	水徳遺跡	740138	山東町大月字水徳
33	柿坪遺跡	740139	山東町柿坪字溝尻
34	柿坪中山古墳群	740289～740311	山東町柿坪字中山
35	芝花弥生墓群	740702	山東町和賀字芝ヶ端
36	芝花古墳群	740325～740395・740699～740701	山東町和賀字向山
37	和賀向山古墳群	740398～740421	山東町和賀字向山
38	五反田遺跡	740459～740462	山東町柿坪字五反田
39	馬場古墳群	740463～740482	山東町柿坪字馬場
	持谷古墳	740486	山東町越田字持谷
41	若水古墳群	740488～740497・740703～740712	山東町栗鹿字若水
42	若水遺跡	740498	山東町栗鹿字若水
43	若水古墳群	740713～740719	山東町栗鹿字若水
44	栗鹿遺跡	740601	山東町栗鹿字大門
45	柴遺跡	740684	山東町柴字方谷
46	獅名谷古墳群	740647～740655	山東町栗賀字獅名谷
47	船宮古墳	750045	桑市
48	新堂見尾1号墳	740727	山東町新堂字見尾

れている。後述する（第3章）池田古墳下層遺跡との関連で、注目される。また、池田古墳の外堤の一部と考えられる盛土層も確認されている。平成20年度の調査でも同様の盛土が確認されている。

一方、平成16年度の調査では、南の外堤に相当する箇所を調査したが、外堤らしき構造物は確認されていない。また、この調査で谷状の落ち込みを確認し、ここからは蓋形埴輪が出土している。

平成18年度の調査では、池田古墳の南側に接する位置で調査が行われている。調査では、古墳時代と平安時代の流路が検出されている。古墳時代の流路内からは、弥生時代後期から古墳時代中期の土器が多く出土している。



第11図 宮ノ本遺跡全景（東上空から）

妙見谷・登り立地区 調査は、平成16年度に行われている。調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居が検出されている。また、遺構には伴わないが碧玉の破片が1点出土している¹⁵⁾。

さらに、平成19年度には、城ノ下地区にまたがる地区で調査が行われている。調査では、古墳時代後期と平安時代～鎌倉時代の土器が出土しているが、時期を明確にできる遺構は検出されていない。

宮ノ本地区 調査は、平成14年度から平成17年度の各年度に行われている¹⁶⁾。平成14年度の調査は2地区からなるが、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1棟、方形周溝墓の可能性が考えられる溝状遺構、自然流路が検出されている。いずれも、弥生時代後期初頭と考えられている。この中で特に注目されるのが、管玉（凝灰岩製）の未成品や碧玉の剥片が出土した1棟の竪穴住居跡（3号住居跡）である。これらの遺物の出土から、当該住居跡は玉製作に関わる工房跡と推定されている。

この他、平成15年度の調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の竪穴住居跡・溝状遺構・ピット・土坑等が検出されている。平成16年度の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡とこれに関連する溝状遺構・ピット等が検出されている。竪穴住居は幾度かの建て替えがなされている。平成17年度の調査では、弥生時代後期の竪穴住居と溝状遺構・ピット等が検出されている。

岡ノ段地区 調査は、平成13年度と平成17年度に行われている¹⁷⁾。平成13年度の調査では、古墳時代前期の集落跡が明らかとなっている。平成17年度の調査では古墳時代前期の溝状遺構が検出されている。この他、古代から中世にかけての溝状遺構やピットが検出されている。

細田地区 調査は平成13年度に行われている。第1次調査では古墳時代前期の溝状遺構が、第2次調査では4世紀から5世紀にかけてと考えられる竪穴住居4棟と自然流路が、検出されている。特に、自然流路内からは滑石製有孔円盤・木桶状木製品・火鉢板・祭祀具と思われる製品等が出土しており、池田古墳との関係で注目される¹⁸⁾。

以上が、調査で明らかとなった宮ノ本遺跡の概要である。一部、池田古墳と平行する時期に集落が存在したことは明らかであるが、造墓主体となるような大規模な集落と位置付けられるものではない。



第12図 池田古墳から見た宮ノ本遺跡

3. 主要周辺遺跡

(1) 弥生時代後期

池田古墳周辺における当該期の遺跡は、宮ノ本遺跡を除いてほとんど知られていない。多くは、比較的平野の開けた、加都地域および旧山東町地域に集中している。丘陵上においては木棺墓を主体とした墳墓群が、平野部においては集落跡が、調査により明らかとなっている。

まず、墳墓としては、秋葉山墳墓群 (10)・門在1号墳 (13)・梅田東古墳群 (20)・筒江中山墳墓群 (25)・寺山古墳群 (29)・宮ノ谷古墳群 (30)・柿坪中山古墳群 (34)・芝花弥生墓群 (35)・五反田遺跡 (38) が周知されている。いずれも丘陵上もしくは尾根状に造られた墳墓群で、木棺墓と箱式石棺を埋葬主体としている。各遺跡の概要は以下の通りである。

秋葉山墳墓群 池田古墳の北約1.7kmに当る。昭和49年度に和田山町教育委員会により本発掘調査が行われている。調査の結果、3基の墳丘墓 (1号墳・2号墳・7号墳) が検出されている。3基とも弥生時代後期末から古墳時代初頭に位置付けられるもので、いずれも複数の主体部からなり、木棺墓・石蓋土坑墓・組合式箱式石棺を埋葬施設としている。

門在1号墳 小尾根先端部に造られた弥生時代終末期～古墳時代初頭の木棺直葬墓である。平成6年度に、関西電力電線建設工事に伴い和田山町教育委員会により本発掘調査が行われている。調査の結果、平面形が5.2m×3m、深さが2mと大型の墓域内に、長さ4mの組合せ木棺が納められていたことが明らかとなっている。棺内からは鉾が副葬品として出土している。

梅田東古墳群 播但連絡道路 (5期事業) に伴い、平成8年度に本発掘調査が行われている。尾根上に立地する遺跡で、後期後半と後期後半～古墳時代初頭の墳墓が検出されている。後期後半では、木棺墓群17基と土器棺1基が検出されている。破砕土器供獻が認められ、棺内からはガラス製小玉・ガラス製管玉・ガラス製粟玉・碧玉製管玉や鉄製品の副葬が認められた。後期後半～古墳時代初頭では、墳丘墓5基 (10号墳～14号墳) が検出されている。なかでも10号墳では船形木棺が、11号墳では小堅穴式石室が、中心主体であることが明らかとなっている (第13図)。



第13図 梅田東古墳群 10号墳第1主体部

筒江中山墳墓群 木棺墓と甕棺墓からなる墳墓群である。当墳墓群の大半は24基からなる古墳群で、22号墳の墳丘下から木棺墓2基と、その付近から甕棺が検出されている。

寺山古墳群 県道榎倉山東線道路改良事業にともない、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている。後期から後期末の2基の墳丘墓と、その周囲から9基の木棺墓群が検出されている。

宮ノ谷古墳群 寺山古墳群同様、県道榎倉山東線道路改良事業にともない、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている。木棺墓および箱式石棺を埋葬施設とする3基の墳丘墓が検出されている。

柿坪中山古墳群 複数主体からなる墳丘墓群である。報告書では古墳時代前期と報告されているが、出土土器等から弥生時代後期後半と考えられる。3基 (1号墳～3号墳) について調査が行われ、木棺墓・石室墓・土器棺などの埋葬施設が検出されている。その後4号墳についても調査が行われ、木棺墓・小堅穴式石室などからなる墳丘墓であることが明らかとなっている。

芝花弥生墓群 一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路Ⅱ；以下「北近畿豊岡自動車道」と略称）建設に伴い、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている。後期前葉の木棺墓17基と土器棺3基が明らかとなっている。木棺墓の多くには、破碎土器供献が確認されている。

五反田遺跡 昭和63年度に榎浦磨屋本店東山工場建設に伴い本発掘調査が行われている。調査の結果、弥生時代後期の土器棺墓4基と木棺墓9基が明らかとなっている。

次に、集落遺跡としては、宮ノ木遺跡（3～8）・ムクノ木遺跡（21）・筒江浦石遺跡（27）・森向山遺跡（31）・若水遺跡（42）・粟鹿遺跡（44）が周知されている。若水遺跡を除いては、いずれも平野部に立地する遺跡である。いわゆる大規模集落は認められないが、粟鹿遺跡の方形貼石墓は、当地域では特筆すべきものである。

ムクノ木遺跡 平成元年から平成2年度にかけてゴルフ研修センター建設計画に伴い、和田山町教育委員会により確認調査が行われている。調査の結果、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての溝状遺構が検出されている。溝状遺構および田河道の中から、当該期の土器が出土している。

筒江浦石遺跡 「北近畿豊岡自動車道」建設に伴い、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている。弥生時代末～古墳時代初頭の粘土探掘跡多数と流路跡が検出されている。

森向山遺跡 昭和60年度に但馬学習農園建設事業に伴い、山東町教育委員会により調査が行われている。古墳時代初頭にかけての竪穴住居・掘立柱建物・土坑等が検出されている。なかでも、竪穴住居が1棟明らかとなっている。

若水遺跡（740498）「北近畿豊岡自動車道」建設に伴い、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている。若水古墳群・若水城跡の調査において当該期の遺構が明らかとなっている。2重の環濠が検出されている。

粟鹿遺跡 平成11年度から15年度にかけて、「北近畿豊岡自動車道」建設に伴い、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている。弥生時代中期末から後期初頭の竪穴住居跡15棟をはじめとして、方形貼石墓・木棺墓・土坑墓・土器棺墓などが検出されている。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡なども、検出されている。

（2）古墳時代前期

古墳時代において、南但馬地区においては、若水古墳群（41）→城ノ山古墳（2）→池田古墳（1）→茶すり山古墳（28）→船宮古墳（47）と、首長墓の系譜がたどれるといわれている。

まず前期の首長墓としては、若水古墳群（41）と城ノ山古墳（2）が挙げられる。その概要は以下の通りである。

若水古墳群 若水遺跡とともに検出された古墳群で、10基について調査が行われている。このなかで、若水古墳（740703）が盟主墳と位置付けられるもので、径41mを測る。二基の埋葬施設からなり、いずれも組み合せ式箱形木棺を主体としている。このなかで、第1主体部には飛鳥文鏡と連弧文鏡が各1面副葬されていた。池田古墳に繋がる当地域の盟主墳と考えられ、注目される。

城ノ山古墳 池田古墳の東約80mに所在する（第14図）。国道9号線和田山バイパス建設に伴い、本発掘調査が行われている。南北36m、東西30mの円墳で、組み合せ式木棺を埋葬主体としている。木棺内からは、三角縁神獣鏡3面をはじめとする計6面の銅鏡や石製品（琴柱・合子・銅）・玉類（勾玉・管玉）・鉄製品（鉄剣・直刀等）が出土している。

この他、当該期には内高山西古墳群(14)・内高山東2号墳(15:730746)・上エ山古墳群(16)・向山古墳群(18)・筒江中山古墳群(25)・森向山13号墳(31)・芝花11号墳(36)・芝花26~28号墳(36)・芝花72~74号墳(36)・新堂見尾1号墳(48)が周知されている。その概要は以下の通りである。

内高山西古墳群 8基からなり、上エ山古墳群と平行して本発掘調査が行わ



第14図 池田古墳と城ノ山古墳

れている。但馬に通常に見られる階段状の古墳群で、主体部は全て木棺直葬である。

内高山東2号墳 上エ山古墳群と平行して本発掘調査が行われている。木棺を主体とするもので、墳裾から布留式の土師器甕が出土している⁽²⁷⁾。

上エ山古墳群 「北近畿豊岡自動車道」建設に伴い、兵庫県教育委員会により平成17年度と平成18年度に本発掘調査が行われている。A支群の2基が該当し、1号墳は箱式石棺を埋葬主体としている⁽²⁸⁾。

向山古墳群 県立北部農業技術センター整備事業に伴い、平成2年度に本発掘調査が行われている。3基の古墳(1号墳~3号墳)が検出されている。竪穴式石室・箱式石棺・木棺直葬を主体としている。このなかで、2号墳第2主体からは、内行花文鏡が出土している。

筒江中山古墳群 24基の古墳からなる。うち9基について調査が行われている⁽²⁹⁾。このなかで、当古墳群中最大の23号墳は、径27mの円墳で、箱形木棺を埋葬施設としている。棺内からは鉄剣・鉄鏃・鉄斧・鉋・内行花文鏡が出土し、これらの副葬品から4世紀末の築造と考えられている。

森向山13号墳 石棺と2棺並列の木棺が直列に配された長方形墳で、出土遺物から4世紀末から5世紀初頭と考えられている⁽³⁰⁾。

芝花11号墳 芝花古墳群(後述)中にある墳墓である⁽³¹⁾。木棺墓・土坑墓・石棺墓・土器棺各1基が、埋葬施設として検出されている。

芝花26~28号墳・芝花72~74号墳 いずれも方墳である⁽³²⁾。これら6基の古墳は、朝杖式木棺・組合式木棺・組合式石棺・土坑墓・土器棺を埋葬施設としている。

新堂見尾1号墳 3世紀後半から4世紀にかけての径25mの円墳である。第1埋葬施設は竪穴式石室を埋葬主体としている。副葬品として、小型銅鏡・鉄剣・鉄鏃・鉄斧・鉋・玉類・土師器が出土している⁽³³⁾。他の埋葬施設として、箱式石棺・土器棺が検出されている。

また、当該期の集落遺跡としては、宮ノ本遺跡(3~8)・永徳遺跡(32)が周知されている。宮ノ本遺跡については、先述したとおりである。

永徳遺跡 昭和53年度に県営ほ場整備事業に伴い発掘調査が行われている。調査の結果、古墳時代前期を中心とした土坑などが検出されている⁽³⁴⁾。

(3) 古墳時代中期

古墳と集落遺跡が周知されている。

前期の城ノ山古墳に続く当該期の首長墓としては、池田古墳(1)→茶すり山古墳(28)→船宮古墳

(47)が挙げられる。池田古墳を除く概要は、以下の通りである。

茶すり山古墳 和田山町筒江字梨ヶ谷に所在する。平成12年度から平成14年度にかけて、「北近畿豊岡自動車道」建設に伴い、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている。当概事業に伴い、はじめてその存在が明らかとなった古墳である。最大径90m、高さ約18mの近畿地方最大規模の二段築成の円墳である。2基の埋葬施設（第1主体部・第2主体部）が検出され、組合式



第15図 整備後の茶すり山古墳（西上空から）

箱形木棺が納められていた。両主体部には多量の武器・武具類が副葬されていた。出土遺物から中期中葉と考えられ、池田古墳に継ぐ但馬の王墓と位置付けられている。平成16年度には国指定史跡となり、平成21年度には復元・整備が完成している（第15図）。

船宮古墳 円山川上流域の段丘上に立地し墳丘全長91mを測る、中期後半に位置付けられる前方後円墳である。周濠を伴い、墳丘斜面には葺石が葺かれている。また、周濠外側斜面にも葺石が確認されている。さらに、くびれ部付近においては造り出しが確認されている。

他の古墳としては、岡田2号墳（12）内高山東1号墳（15：730745）・市条寺古墳群（17）・向山古墳群（18）・梅田古墳群（19）・宮ノ谷古墳群（30）・芝花古墳群（36）・芝ヶ端古墳（36）と和賀山1号墳（37）・馬場古墳群（39）・持谷古墳（40）・若水古墳群（43）・櫛名谷古墳群（46）が周知されている。

岡田2号墳 県道金浦和田山線道路改良に伴い、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている。調査は、残存する墳丘の北側を対象として実施されている。この結果、円筒埴輪が出土し、これをもとに5世紀末～6世紀初頭に位置付けられることが明らかとなっている。また、新たに幅7.8mの周濠を伴うことが明らかとなり、これをもとに約26.4mの円墳に復元されている。

内高山東1号墳 木棺を埋葬主体とし、5世紀後半に位置付けられている。

市条寺古墳群 12基からなる古墳群である。平成2年度に、県立北部農業技術センター整備事業に伴い本発掘調査が行われている。調査は4基（1号墳～4号墳）を対象とし、主体部は石棺と木棺からなる。

向山古墳群 先述（13頁）した調査で検出されたもので、3基（5号墳・6号墳・11号墳）が検出されている。5号墳からは、鉄鐙が出土している。

梅田古墳群 播但連絡道路（5期事業）に伴い、平成8年度～平成10年度にかけて本発掘調査が行われている。木棺を埋葬主体とする33基の古墳（1号墳～33号墳）が検出され、出土土器等から前期末から後期中葉に位置付けられている。なかでも、1号墳からは四葉乳文鏡1面が、3号墳からは乳文鏡1面が出土している。また、15号墳SX01内からは人骨が完存する状態で検出されている。

宮ノ谷古墳群 寺山古墳群同様、県道檜倉山東線道路改良事業に伴い、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている。7基の古墳が明らかとなっている。箱形木棺と箱形石棺を埋葬主体としている。

芝花古墳群 8号墳～10号墳・14号墳が、芝花弥生墓群と同じ調査で明らかとなっている。8号墳が木棺墓3基、9号墳が石室系石棺と木棺墓、10号墳が木棺墓2基、14号墳が石棺墓1基、が埋葬施設として明らかとなっている。

芝ヶ端古墳 「北近畿豊岡自動車道」建設に伴い、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている⁽¹⁸⁾。木棺直葬を主体とする古墳である。円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪、MT15型式前後の須恵器が出土していることから、6世紀前葉に位置付けられている。

和賀向山1号墳 「北近畿豊岡自動車道」建設に伴い、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている⁽¹⁹⁾。直径約14mの円墳で、横穴式石室（堅穴系横口式石室）を埋葬施設としている。円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪、TK47～MT15型式相当の須恵器などが出土しており、これらの遺物から6世紀前葉に位置付けられている。

馬場古墳群 20基からなるが、昭和63年度に佛掛播磨屋本店東山工場建設に伴い、4基について本発掘調査が行われている⁽²⁰⁾。3号墳においては径13～14mの円墳で、組合式木棺を主体としている。鉄刀・鉄斧等が副葬され、5世紀前半に位置付けられている。19号墳については3基の主体部からなり、内1基は割竹形木棺を主体としている。また、第一主体からは方格規矩鏡・鉄剣・鉄斧の副葬が確認され、4世紀末に位置付けられている。この他20号墳は、木棺直葬と考えられ、5世紀末と考えられている。

持谷古墳 昭和62年度に山東町教育委員会により本発掘調査が行われている⁽²¹⁾。調査の結果、墳丘自体を確認することはできなかったが、木棺直葬墓が1基確認されている。墓上祭祀に供された土器の他、棺内からは鉄鎌・鉄剣・鉄刀の副葬が確認されている。これらの遺物などから、5世紀前半代と考えられている。

若水古墳群 古墳7基と墳丘を伴わない木棺墓・石棺墓が20基検出されている⁽²²⁾。

櫛名谷古墳群 9基の古墳からなり、昭和54年度に農村広場の造成に先立ち本発掘調査が行われている⁽²³⁾。調査の結果、7号墳・8号墳で二棺並列埋葬が確認されている。そして、出土遺物から、5世紀末から6世紀初頭に位置付けられている。

集落跡としては、加都遺跡（22・23）と柿坪遺跡（33）が周知されている。

加都遺跡 平成8年度から平成10年にかけて、播但連絡道路5期合併施工事業と「北近畿豊岡自動車道」建設および一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴い、兵庫県教育委員会により、計72728㎡と広範囲に及ぶ本発掘調査が行われている⁽²⁴⁾。調査地は、宮ヶ田地区（22）と桜地区（23）の2地区からなる。調査の結果、古墳時代の遺構としては、5世紀初頭をはじめとして8期に分けられている。古墳1期から古墳5期が該当し、古墳5期が中心をなすと分析されている。この間、約70基弱の堅穴住居が検出されている。

柿坪遺跡 平成11年度から14年度にかけて「北近畿豊岡自動車道」建設に伴い、兵庫県教育委員会により本発掘調査が行われている⁽²⁵⁾。調査の結果、古墳時代全般の大規模な集落跡が明らかとなった。なかでも注目されるのが、中期前半から中頃にかけての大型掘立柱建物で構成される首長居館の一部が明らかとなった点である。また、居館の周囲からは10棟前後の堅穴住居も検出されている。首長居館は、茶すり山古墳とほぼ同時期であることから、当該古墳の被葬者の居館と位置付けられている⁽²⁶⁾。

（4）古代交通路

古代においては、当地を山陰道と但馬道が通っていた（第16図）。山陰道については、速坂峠から粟鹿・和田山・高田を経て養父市へ抜けていたと考えられている。このなかで、柴置跡（45）において、古代山陰道の粟鹿駅家の存在を示す木簡が出土している⁽²⁷⁾。また、これに附属する施設と考えられる掘立柱建物が検出されている。なお、池田古墳付近においては、具体的な山陰道の通過位置は明らかにされ



第16図 但馬における古代交通路

ていない。池田古墳南東側の段丘崖（第8図）が一つの候補になるのではないかと考えられる。

但馬道については、山陽道が姫路から分岐・北上し、和田山で山陰道に合流するものである。その一部が道路遺構として、「北近畿農園自動車道」建設に伴う加都遺跡の調査で明らかとなっている⁽⁵⁾。

〔註〕

- (1) 朝来市教育委員会田畑 基氏の御教示による。
- (2) 前岡恵美子「宮ノ本遺跡（第8次）」『朝来市埋蔵文化財センター古代あさご館 年報 第1号（平成18年度）』朝来市教育委員会・朝来市埋蔵文化財センター古代あさご館 2009
- (3) 朝来市教育委員会田畑 基氏の御教示による。
- (4) 前岡恵美子「宮ノ本遺跡（第9次）」『朝来市埋蔵文化財センター古代あさご館 年報 第2号（平成19・20年度）』朝来市教育委員会・朝来市埋蔵文化財センター古代あさご館 2011

- (5) 朝来市教育委員会田畑 基氏の御教示による。
- (6) 朝来市教育委員会田畑 基氏の御教示による。
- (7) 朝来市教育委員会中島雄二氏の御教示による。
- (8) 藤井祐介『秋葉山墳墓群』和田山町教育委員会 1978
- (9) 朝来市教育委員会田畑 基氏の御教示による。
- (10) 山田清朝『梅田東古墳群－播但連絡道路（5期事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』兵庫県教育委員会 2002
- (11) 小川良太『筒江中山古墳群』『兵庫県史 考古資料編』兵庫県 1992
- (12) 平田博幸『寺山古墳群 宮ノ谷古墳群 諏訪城跡発掘調査報告書（一）檜倉山東線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査』兵庫県教育委員会 2010
- (13) 前掲 (12)
- (14) 榎本誠一『柿坪中山古墳群 第1集』兵庫県山東町教育委員会 1975
- (15) 榎本誠一・加古千恵子『柿坪中山古墳群 第2集』兵庫県山東町教育委員会 1978
- (16) 岸本一宏『芝花弥生墓群・古墳群－一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う発掘調査報告書Ⅴ－』兵庫県教育委員会 2008
- (17) 朝来市教育委員会中島雄二氏の御教示による。
- (18) 田畑 基『ムクノ木遺跡』和田山町教育委員会 1992
- (19) 藤田 淳『筒江浦石遺跡－一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路Ⅱ）建設に伴う発掘調査報告書Ⅰ－』兵庫県教育委員会 2007
- (20) 田畑 基『森・向山遺跡』『兵庫県埋蔵文化財年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会 1988
- (21) 岸本一宏『若水古墳群・城跡－一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う発掘調査報告書Ⅵ－』兵庫県教育委員会 2009
- (22) 深井明比古『栗鹿遺跡－一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』兵庫県教育委員会 2007
- (23) 前掲 (21)
- (24) 榎本誠一『城の山・池田古墳』和田山町教育委員会 1972
- (25) 渡辺 昇『上エ山古墳群 内高山古墳群－一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ－』兵庫県教育委員会 2012
- (26) 前掲 (25)
- (27) 前掲 (25)
- (28) 中村 弘『向山古墳群・市条寺古墳群・一乗寺経塚・矢別遺跡－県立北部農業技術センター整備に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会 1999
- (29) 前掲 (11)
- (30) 前掲 (20)
- (31) 前掲 (16)
- (32) 岸本一宏『和賀向山1号墳・芝ヶ端古墳・芝ヶ端遺跡・芝花古墳群－一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う発掘調査報告書Ⅳ－』兵庫県教育委員会 2008
- (33) 山東町教育委員会『新堂見尾1号墳現地説明会資料』2004

- (34)瀬戸谷 晴『永徳遺跡-県営ほ場整備事業に伴う調査の記録-』朝来郡山東町教育委員会 1979
- (35)岸本一宏『史跡 茶すり山古墳-一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-VI』兵庫県教育委員会 2010
- (36)田畑 基『船宮古墳』朝来町教育委員会 1990
- (37)岡崎正雄『岡田2号墳』兵庫県教育委員会 1989
- (38)前掲 (25)
- (39)前掲 (28)
- (40)前掲 (28)
- (41)菱田淳子『梅田古墳群Ⅰ-播但連絡道路(5期事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-』兵庫県教育委員会 2002
- 仁尾一人『梅田古墳群Ⅱ-播但連絡道路(5期事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ-』兵庫県教育委員会 2003
- (42)前掲 (12)
- (43)前掲 (16)
- (44)前掲 (32)
- (45)前掲 (32)
- (46)朝来市教育委員会中島雄二氏の御教示による。
- (47)田畑 基『持谷古墳発掘調査報告書』山東町教育委員会 1988
- (48)前掲 (21)
- (49)朝来市教育委員会中島雄二氏の御教示による。
- (50)甲斐昭光『加都遺跡Ⅰ-播但連絡有料道路5期合併施工事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』兵庫県教育委員会 2005
- 吉識雅仁『加都遺跡Ⅱ-一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路Ⅱ)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-』兵庫県教育委員会 2007
- 渡辺 昇『加都遺跡Ⅲ-一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-』兵庫県教育委員会 2012
- (51)吉識雅仁『柿坪遺跡』兵庫県教育委員会 2008
- (52)菱田哲郎『古墳時代の産業革命と茶すり山王』『王者の帰還-茶すり山王のすべて-』記念講演会 2012
- (53)西口圭介『紫遺跡-一般国道483号北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』兵庫県教育委員会 2009
- (54)吉識雅仁・甲斐昭光『兵庫県和田山町加都遺跡の道路状遺構』『古代交通研究』第8号 古代交通研究会 1998

第3節 調査・研究歴

1. はじめに

池田古墳の調査は、昭和46年度の調査が初めてである。この調査は、国道9号線バイパス建設に先立つもので、今回報告する調査が行われるまでは、唯一の本格的な調査であった。この調査により、初めて池田古墳の存在が明らかとなった（写真図版2）。その後、池田古墳の規模等を明らかにすべく、トレンチ調査を基本とした調査が、数次にわたり行われてきている（第17図）。これらの調査の多くは、将来の国史跡指定に向けての基礎資料を得ることを目的としたものでもあった。以下、各調査の概要についてまとめていくことにする。なお、上記の調査以降の調査呼称については、朝来市教育委員会により付けられている。本節においても、これに倣ってまとめていくことにする。また、調査内容・成果についても、同じく朝来市教育委員会によりまとめられたものを基にしている。

2. 調査歴

昭和46年度調査 国道9号線和田山バイパス建設に伴い、昭和46年度に本発掘調査が行われている。計18か所の調査区を設定し、調査が行われている。主な調査成果については、すでに調査報告書にまとめられている¹⁾。

なお、当該調査の範囲は、今回報告する調査の範囲内に収まるものである（第17図）。結果として、多くの範囲において、今回の調査が昭和46年度調査の再調査という形をとることとなった。これは、昭和46年度調査が、架橋による保存が決定していたため、ある程度保存を前提とした調査となっていたことによるものである。つまり、葺石などについてはその存在の確認に留め、特に埴輪列についてはその埴輪の一部を取り上げる程度の調査であったことによるものである。

昭和52年度調査 池田古墳の範囲確定を目的とした確認調査で、18か所にトレンチが設定され、調査が行われている。

昭和57年度調査 町道平野・片倉線改良工事に伴う確認調査で、後円部南側周濠および外堤推定位置を中心にトレンチが設定され、調査が行われている。この調査では、外堤は検出されていない。

平成元年度調査 個人住宅建て替えに伴う調査で、調査区2箇所について調査が行われている。後円部から周濠へ放射状に設定した調査では、後円部墳頂部側は、明治30年代後半～明治40年頃および昭和2～3年の旧国鉄山陰線新設の際に完全に削平されていることが、確認される結果となった。

平成3年度調査 倉庫新築に伴う確認調査で、調査区1箇所について調査が行われている。後円部に設置された調査区で、埴土盛土と葺石を検出した。葺石は3段目の斜面に伴う可能性が考えられている。

平成5年度調査 個人住宅建て替えに伴う調査で、調査区3箇所について調査が行われている。このなかで、前方部周濠西側コーナー部の調査で、前方部北側の外堤部が確認されている。

平成8年度調査 現状変更に伴う状況調査で、調査区4箇所について調査が行われている。南側周濠に設定されたトレンチで、旧耕土を確認し、遺構面が掘削されていないことが確認されている。

平成10年度調査 個人住宅建設および農地転用に伴う状況調査で、後円部南側の周濠内を対象に6本のトレンチが設定されている。このなかで、1・3トレンチにおいて周濠底が確認されている。なお、外堤にあたる6トレンチにおいては、人為的盛土を確認することはできなかった。

平成12年度調査 駐車場整備事業に伴う調査で、後円部北西側外堤周辺とくびれ部北西側周濠の2箇所を対象としている。調査の成果については、前者では地表から約1m下で地山を確認し、後者では地表より1.3m～1.5m下で周濠埋土を確認している。

平成18年度調査 国庫補助事業市内遺跡発掘調査事業による確認調査が行われている。墳丘南側くびれ部を対象にトレンチ1本が設定され、地表から1.6m～1.8m下で墳丘底部ラインと造り出し底部ラインを確認した。この結果、造り出し底部ラインは後円部底部ラインにほぼ平行していることが明らかとなっている。この調査で、円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・鳥形埴輪・土師器・木製品が出土している。なお、当該調査区の北東隅は、今回報告する調査区と一部重複している。

また、当年度に電気探査・地中レーダー探査も行われている。

平成19年度調査 国庫補助事業市内遺跡発掘調査事業による確認調査で、後円部西側周濠・同北側周濠・後円部北側墳裾を対象としている。後円部西側周濠では2本のトレンチを設定したが、周濠北端および墳裾は確認できなかった。後円部北側周濠においては1本のトレンチを設定したが、明確な周濠外壁ラインは確認できなかった。後円部北側墳裾においては、1本のトレンチを設定し、墳裾の葦石を検出した。葦石の根石は他の石より一回り大きなものを使用し、一部はその下に木をかませていることが明らかとなった。落石防止のためかと考えられている。また、墳丘側で平坦面を確認した。墳丘最下段のテラスと想定されるものである。

平成20年度調査 国庫補助事業市内遺跡発掘調査事業に伴う調査で、後円部南側を対象に調査が行われている。後円部南側の葦石・テラス面のデータ収集を目的とした調査である。調査の結果、葦石を伴う1段目斜面、1段目テラスおよび2段目斜面を確認した。1段目・2段目斜面は、葦石が葺かれた状態で検出されている。また、1段目テラス肩部では埴輪列が検出されている。また、テラス面のレベルが地形に合わせて下がっていることも明らかとなっている。

平成21年度調査 国庫補助事業市内遺跡発掘調査事業に伴う調査で、前方部の墳裾を確認する目的で2本のトレンチを設定し、調査が行われている。調査の結果、1トレンチでは外堤の一部を、2トレンチでは1段目斜面の一部を確認している。

平成22年度調査 国庫補助事業市内遺跡発掘調査事業に伴う調査で、後円部北側に3箇所、墳頂部に1箇所、トレンチを設定して調査が行われている。後円部北側の1トレンチでは、1段目斜面と1段目テラスを確認している(第18図)。1段目斜面には葦石が認められたが、テラス上では埴輪列は残存しなかった。また、他の2本のトレンチ調査においては、後円部に伴う渡土堤の確認を目的としたが、確認することはできなかった。

後円部墳頂部に開けられたトレンチでは、埋葬施設の確認を目的とした調査が行われたが、その痕跡すら確認できなかった。

平成23年度調査 国庫補助事業市内遺跡発掘調査事業に伴う調査で、前方部北側の外堤および後円部北側周濠内の渡土堤の確認を目的として調査が行われている。調査の結果、外堤については、その痕跡を全く確認できなかった。周濠内についても渡土堤を確認することはできなかった。



第18図 平成22年度調査

3. 研究歴

池田古墳については、その調査成果をもとに検討がなされ、多くの成果が挙げられている。これらの成果については、大きく、池田古墳の築造年代に関するものと、長持形石棺に関するもの、墳丘形態に関するもの、に分けることができる。

築造年代について 榎本誠一・中島雄二・高橋克壽の研究が挙げられる。

榎本誠一の研究は、『池田古墳』の報告の中で述べられたのが最初である。まず、周濠内から出土した6世紀前半頃の須恵器杯蓋を築造時期の下限としている。次に、5世紀中頃と考えられている土師古墳（大阪府）や允恭古墳（大阪府）と墳丘形態が同形式であることから、上限の目安となると考え、5世紀中頃～6世紀初め頃の築造と位置付けられている。その後、周濠などの古墳築造法や埴輪類の製作技法から、5世紀前半の築造とより古く位置付けられている。

中島雄二は、池田古墳出土埴輪をもとに時期の検討を行っている。それによると、B種ヨコハケの出現をもとに、5世紀初めに位置付けている。

高橋克壽は、池田古墳出土埴輪について、津堂城山古墳と同時期の、5世紀初めを下らない時期と発表されている。この年代観の発表を受けて大きく進展したのが、次にまとめる長持形石棺に関する調査・研究である。

長持形石棺について 和田山町高田地内に所在する長持形石棺片（第19図）を、池田古墳との関連で検討したものである。但馬考古学会・瀬戸谷皓・岸本一宏の研究が挙げられる。なお、これらの研究成果をもとに長持形石棺が復元され、朝来市埋蔵文化財センター古代あさご館に展示されている（第20図）。

まず、当該石棺片を初めて資料化したのは但馬考古学会である。和田山町高田所在の石棺片を実測・資料化するとともに、出石町所在の長持形石棺片との比較検討もしている。この報告のなかで、石材を分析した奥田尚は、和田山町の石棺と出石町の石棺は、岩相的にわずかに異なることから、同一棺の破片ではないと結論付けられている。これを受け、但馬考古学会は、和田山町石棺については池田古墳に埋納されていた可能性が高いと、結論付けられている。

瀬戸谷皓は、高田所在長持形石棺について、高橋克壽の年代観および津堂城山古墳石棺との類似から、池田古墳の埋葬施設とする可能性を捨て去ることに躊躇せざるを得ないと結論付けられている。さらに、出石町所在の長持形石棺についても、高田所在石棺と極めて類似性が高いことから、同一石棺の可能性についてまで言及されている。

岸本一宏は、この石棺片から長持形石棺の復元を試み、津堂城山古墳石棺と多くの点で類似することを明らかにされている。さらに、高橋克壽の年代観をもとに、池田古墳と津堂城山古墳の年代が近いことから、同石棺が納められていた古墳として池田古墳が最有力とされている。



第19図 高田地内所在石棺片



第20図 復元された長持形石棺

墳丘構造について 榎本誠一は、『池田古墳』の報告の中で、調査成果をもとに、墳丘全長128m、後円部径約64m、前方部幅約61mと復元している。その後、第2次調査以降の成果をもとに、全長135mと改められている。ただし、その後の池田古墳に関する解説においては、昭和52年度の調査を踏まえた141m¹⁰³、さらには128m、本報告以前の調査成果をもとにした133m等の説が認められ、その規模については確定されていない。兵庫県教育委員会も、本報告刊行までは全長141mとしてきた。

岸本一宏は、前掲論文において、それまでの調査成果をもとに、墳丘の復元を試みている。この結果、前掲の長持形石棺の型式および築造時期をもとに、石棺型式は津堂城山型が最も近く、墳丘形態は菅田御廟山型に最も類似するとされている。

その他 横尾正信は、天文考古学的な観点から、池田古墳の位置を検討している。これによると、大倉部山と池田古墳を結ぶ延長上に小盛山古墳と長塚古墳があり、このラインは大倉部山山頂から夏至に太陽がのぼるラインであるというものである。さらに、大倉部山頂と茶すり山古墳を結ぶラインは、冬至の日に太陽が昇るラインとされている。

また、池田古墳の被葬者については、岸本一宏は畿内からの派遣首長を想定されているが、榎本誠一は、在地勢力と中央政権との関係においての現象として理解すべきとされている¹⁰⁴。

〔註〕

- (1) 榎本誠一『城の山・池田古墳』和田山町教育委員会 1972
- (2) 中島雄二『池田古墳』朝来市教育委員会 2013
- (3) 前掲(1)
- (4) 榎本誠一「但馬の大型古墳」『よみがえる古代の但馬』但馬考古学研究会 1981
- (5) 中島雄二「但馬・丹後地域における埴輪の諸様相」『古代文化』第59巻第4号 財団法人古代学協会 2008
- (6) 高橋克壽「埴輪からみた但馬の古墳時代」『シンポジウム古代但馬の王墓をめぐる』発表資料 兵庫県教育委員会 2002
- (7) 但馬考古学会「但馬の長持形石棺」『古代学研究107』古代学研究会 1985
- (8) 瀬戸谷晴『シリーズ但馬Ⅱ 但馬の古代2』但馬文化協会 2005
- (9) 岸本一宏『池田古墳をめぐる若干の検討』『王権と武器と信仰』同成社 2008
- (10) 前掲(4) 岸本一宏も同規模に復元されている(前掲(9))。
- (11) 榎本誠一・瀬戸谷晴『日本の古代遺跡2 兵庫北部』1982
- (12) 山本三郎『池田古墳』『兵庫県史 考古資料編』兵庫県 1992
- (13) 前掲(2)
- (14) 田畑 基「北近畿の主要な遺跡 城ノ山古墳・池田古墳」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会 2001
- (15) 前掲(9)
- (16) 横尾正信『池田古墳と大倉部山頂を結ぶ型なるラインのお話』『但馬一の前方後円墳 池田古墳の謎を解く 池田古墳を活かした地域づくりシンポジウム記録集』大蔵地域自治協議会 2012
- (17) 岸本一宏『茶すり山古墳 調査概報』兵庫県教育委員会 2002
- (18) 榎本誠一「但馬地域における首長墳の成立と展開—大型円墳をめぐる—」『古代近畿と物流の考古学』学生社 2003

第2章 調査の経緯

第1節 調査の起因

1. 調査にいたる経緯

調査は、一般国道9号沿線環境改善事業（池田橋撤去盛土化工事）に伴うものである。調査に至る経緯は以下の通りである。

昭和46年度 池田古墳については、国道9号線和田山バイパス建設工事に伴い本発掘調査が実施された。この結果、但馬最大の前方後円墳であることが明らかとなった。この結果をもとに、兵庫県教育委員会と建設省（当時）が協議を重ね、池田古墳に係る箇所については道路を橋梁化（池田橋）し、墳丘を保護することとなった。以上の経緯を経て、池田古墳は永らく保護されてきた（巻首図版4）。

平成3年度 地元住民から、池田橋に起因する騒音・振動に対する改善要求があり、池田橋撤去の要望がなされた。これに対して、同年度に兵庫県文化財審議会埋蔵文化財部会が現地で開催され、周辺の景観を保全しつつ池田古墳の保存を図ることを目的に、盛土工法が承認された。

平成17年度 国土交通省が地域支援策の一環として盛土化に協力することとなった。以後、兵庫県教育委員会と国土交通省との間で、当事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて、継続的に協議が続けられた。

平成18年度 朝来市は、地域住民の環境改善と住民と池田古墳の保護について、以下のような基本方針で取り組むこととなった。それは、①池田古墳と池田橋の問題は、古墳の保護と周辺の環境改善を整合して解決を図る。②池田古墳は、地元の理解と協働体制、つまり「地域で守られてゆくこと」が必要である。③地域の環境整備の中で、橋から盛土化の構造変化とともに池田古墳の保存・活用・整備を検討する、の3項目である。

平成19年度 朝来市は、池田古墳に関する問題点を整理し保存と活用の方向性を検討するため、「池田古墳調査整備検討委員会」を立ち上げた。

また、盛土化工事に伴う埋蔵文化財の対応について、兵庫県教育委員会と国土交通省が協議し、以下のように合意した。①事業に伴う用地（本線部分約1500㎡・迂回路部分約1400㎡）については、国土交通省を事業者として、兵庫県立考古博物館が本発掘調査を担当する。②迂回路部分は本線部分に準ずる構造となるため、本発掘調査を実施する。③迂回路箇所については平成20年度初頭に確認調査、同下半年に本発掘調査を実施する方向で調整する。本線部分は平成22年度に調査を行う予定。④古墳の完全性を確保するため、遺存する周溝・墳丘に配慮した盛土化の工事を行う。盛土に伴う不等沈下についても、調査後に事業者と検証する。

2. 調査方針

以上から、本発掘調査が行われることとなった。なお、本発掘調査にあたっては、単なる「記録保存」として対応するのではなく、ある程度の保存も考慮して実施した。このため、遺物についてはすべて取り上げたが、墳丘およびそれに付随する葺石については現状のまま保存することとした。詳細については、第9章第3節で報告する。

第2節 本発掘調査

1. はじめに

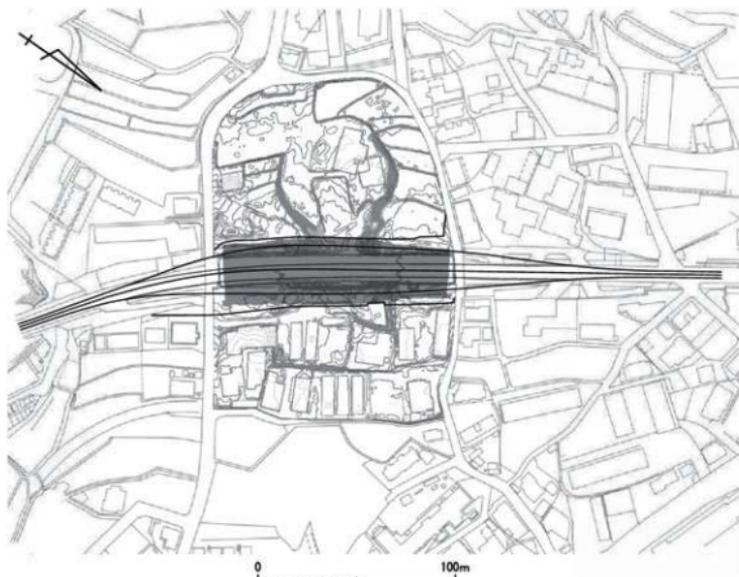
本発掘調査は、前節のとおり、工事工程に合わせて行う必要から、平成20年度から平成22年度の3箇年にわたり行われた(第22図)。具体的には、平成20年度(第1次調査)は京都方面の迂回路建設予定地箇所、平成21年度(第2次調査)は鳥取方面の迂回路建設予定地箇所、平成22年度(第3次調査)は本線部分、を調査対象とした(第23図)。

また、調査は、前節での報告通り、工事に伴う本発掘調査の形態で実施したが、古墳の保存を前

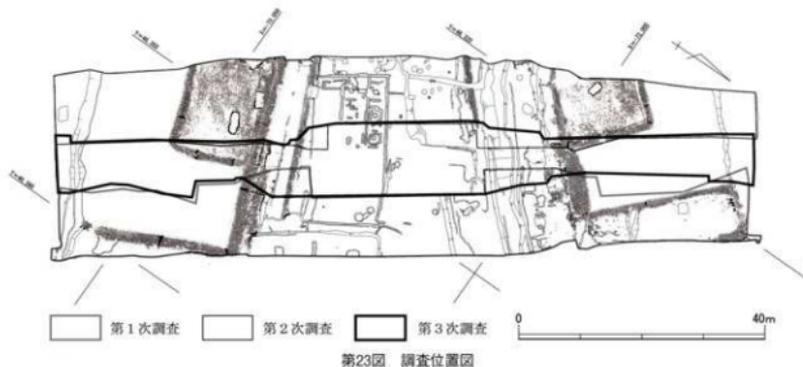


第21図 竣工後の池田古墳 城ノ山古墳から

提として行った。具体的には、出土した埴輪は全て取り上げることにしたが、葦石に関しては現状のまま現地に保存することとした。ただし、調査終了前に、葦石に影響しない範囲で幅1m以下のトレンチを設定し、盛土の有無等の確認を目的とした調査を行った(第51図)。その際、前方部北側から北渡土堤にかけての断面について、断面の剥ぎ取りを行った(第203図)。なお、その調査の詳細については、その都度報告する。



第22図 工事予定地と調査位置



2. 調査の概要

各年度の調査内容・体制等は以下の通りである。

(1) 平成20年度（第1次調査）

調査番号 2008096

調査期間 平成20年10月26日～平成21年3月23日

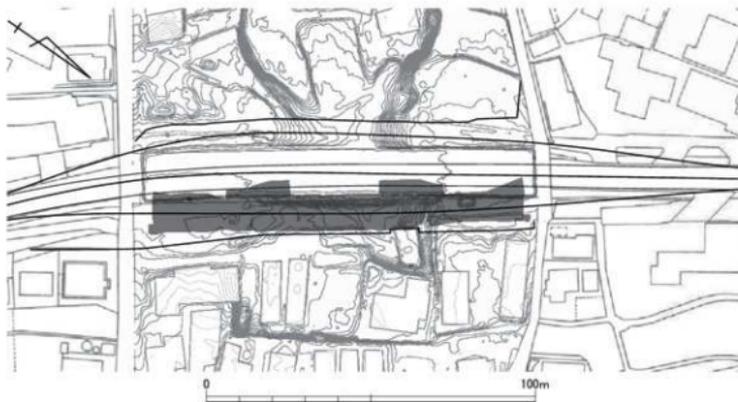
調査面積 1434㎡

調査体制 調査員 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部 吉識雅仁・山田清朝

現場事務員 原 英美・佐藤美鈴・日下部信子

現場補助員 西本寿子・山本亮司

調査概要 上り線（京都方面）の迂回路工事予定地を対象とした（第24図）。調査にあたっては、検出面が現地表面からある程度深いと予想される地点については、掘削にあたって安全勾配を確保する必要があった。一方、次年度以降に調査予定の本線部分の調査成果と平面的に連続させる必要があった。そこ



で、周濠を中心とした掘削が深くなると予想される地区については、本線工事予定地区まで掘削範囲を拡張させ、検出面が工事範囲と一致するようにした。このため、調査区の平面形と工事予定範囲が一致しない結果となった。ただし、東側については、安全勾配を確保したため、古墳検出範囲は、工事予定範囲より狭くなっている。

調査は、周濠内の後世の埋め土（第86図19層 第87図36・37層）までを重機により掘削した以外は、全て人力により掘削し、調査を進めていった。

調査の成果については、平成21年2月4日に小型ヘリコプターによる空中写真撮影を行った。また、現道（橋脚）下にあたる調査区西側については、ボールによる写真撮影を行い（第29図）、上記の写真と合成した。そして、この写真撮影の成果をもとに、1/50の平面図を作成した。ただし、斜面の葺石・円筒埴輪列については、手実測により実測をおこない、その後空測成果と合成した。

調査日誌抄 調査の主要な経過は以下の通りである。

11月17日 北周濠、機械掘削開始。前方部墳頂、人力掘削開始。

11月19日 南周濠、機械掘削の開始（第25図）。

11月20日 北周濠、機械掘削完了。

12月1日 前方部北側、1段目斜面葺石を確認。以後、葺石の検出。

12月10日 北渡土堤の検出開始（当初は渡土堤の認識なし、後日渡土堤と判明）。

12月15日 前方部南側1段目テラス、埴輪列を確認。以後、埴輪列の検出作業。

12月17日 南周濠、中層以下の掘り下げ開始（第26図）。

12月18日 前方部南側、1段目斜面葺石の検出開始（第88図）。

12月22日 南周濠下層、水鳥形埴輪（水鳥形埴輪25）を初めて確認（第27図）。以後、水鳥形埴輪を次々と発見。

12月25日 前方部南側でも渡土堤を確認（南渡土堤）。以後、渡土堤の検出開始。

12月26日 水鳥形埴輪が、南渡土堤から前方部基底部にかけ、一定の間隔で出土していることが明らかに。検出順に出土状況写真の撮影→出土状況の実測。



第25図 機械掘削（南周濠）北から



第26図 周濠の掘削作業（南周濠）北から



第27図 最初の水鳥形埴輪発見



第28図 文化財審議委員会視察

- 1月13日 積雪のため、作業中止。
- 1月20日 前方部南側1段目テラス埴輪列検出状況の実測開始。
- 1月22日 南北両側で、外堤を確認。北渡土堤との接点で暗渠状の醜群を確認、以後検出作業。埴輪が多量に出土。
- 1月26日 前方部南側2段目斜面葺石の実測開始。
- 1月27日 兵庫県文化財審議会の視察（榎本誠一・和田晴吾委員参加：第28回）。
- 1月28日 前方部で、弥生時代後期の竪穴住居跡1棟を検出（池田古墳下層遺跡：第72回）。
花園大学高橋克壽先生・賀来孝代氏来跡。水鳥形埴輪について御教示頂き、水鳥形埴輪が雁鴨類であること等が明らか。
- 1月29日 前方部北側・北渡土堤の全景写真の撮影。前方部南側1段目テラス埴輪列・葺石検出状況の写真撮影。
- 2月3日 橋桁下部のボール写真の撮影（第29回）。
- 2月4日 中型ヘリコプターによる空中写真の撮影。前方部南側・南渡土堤の全景写真の撮影。
- 2月5日 前方部北側1段目斜面葺石の実測開始。2月23日実測終了。
- 2月6日 北渡土堤北端、外堤接合部埴輪出土状況の実測開始。2月20日、実測終了。
- 2月11日 文化庁福宜田佳男文化財調査官視察（第30回）。
- 2月13日 山手短期大学河上邦彦先生・京都橋女子大学一瀬和夫先生・京都府立大学菱田哲郎先生来跡。
- 2月18日 南周濠、水鳥形埴輪の取り上げ。
- 2月19日 北渡土堤北端部出土埴輪の取り上げ。
- 2月23日 前方部南側1段目斜面葺石の実測開始。大阪府立近つ飛鳥博物館白石太一郎先生来跡。
- 2月24日 北周濠、柱状木製品の取り上げ（第31回）。取り上げ後、木樋（W2・W3）と判明。
- 2月25日 北渡土堤斜面葺石の実測開始。
- 3月1日 一般市民を対象とした現地説明会を開催。約520名が来跡（第32回）。
- 3月2日 南渡土堤西側斜面葺石の実測開始。
- 3月23日 南渡土堤西側斜面葺石の実測完了。現地からの引き上げ。



第29回 ボール写真の撮影



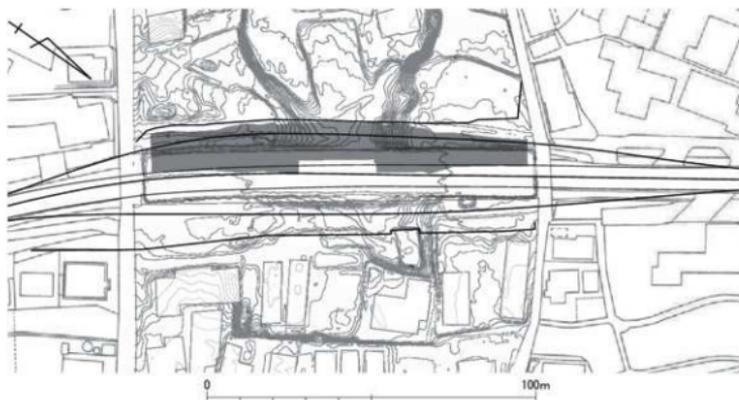
第30回 文化庁福宜田佳男調査官の視察



第31回 木樋の取り上げ（北周濠）



第32回 現地説明会



第33図 調査位置図(第2次調査)

(2) 平成21年度(第2次調査)

調査番号 2009159

調査期間 平成21年7月6日～平成21年12月22日

調査面積 1525㎡

調査体制 調査員 山上雅弘・山田清朝

現場事務員 原 英美・佐藤美鈴・日下部信子

調査補助員 西本寿子・山本亮司・黒田祐介

竹知克征・三ツ石 元

調査概要 下り線(鳥取方面)の迂回路工事予定地を対象とした(第33図)。調査範囲の設定においては、第1次調査と同様、調査成果が平面的に連続するよう、一部現道(橋脚)下まで範囲を拡張し、調査を行った。

調査は、南側と北側の周濠部分については、盛土層を中心に重機により掘削した。以下の周濠部分と墳丘部については、全て人力により掘削し、調査を進めていった。

前年度同様、調査終了後の10月14日にヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。また、橋脚の下側については、ボールによる写真撮影を行なった。そして、以上の成果をもとに、平面図を作成した。葺石・円筒埴輪列については、前年度同様、手実測により実測した。さらに、造り出し上面についても、埴輪の出土状況・礫の検出状況を手実測により実測した(第42図)。



第34図 前方部南側1段目テラスの検出



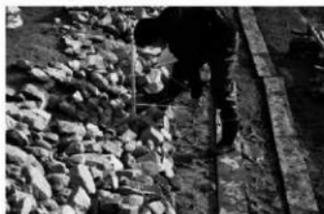
第35図 南造り出しの調査

調査日誌抄 調査の主要な経過は以下の通りである。

- 7月7日 前方部墳頂、人力掘削を開始。
- 7月9日 調査区西壁で竈跡を確認。後日、大正時代の瓦窯と判明。
- 7月13日 南周濠、機械掘削を開始。
- 7月14日 北周濠、調査前の写真撮影。
- 7月21日 前方部南側斜面、人力掘削を開始。
- 7月27日 前方部南側、2段目斜面葺石を検出(第34図)。
- 7月29日 南周濠、南造り出しを確認(第35図)。以後、検出作業。造り出し上面で埴輪を検出(第36図)。
- 7月30日 前方部南側1段目テラス、埴輪列の検出開始。
- 8月6日 前方部南側1段目テラスの検出終了。全景写真の撮影。
- 8月10日 台風9号により、南周濠水没。1日中水替え作業。
- 8月11日 前方部南側1段目テラス、埴輪列検出状況の実測開始。南造り出し南側斜面から水鳥形埴輪出土。
- 8月18日 前方部北側、人力掘削を開始。前方部南側斜面と南造り出しとの間が溝状をなす(区画溝)ことが明らかに。以後、区画溝の検出作業(第40図)。
- 8月21日 前方部南側1段目テラス、埴輪列検出状況の実測完了。引き続き2段目斜面葺石の実測開始(第37図)。
- 8月25日 北周濠、機械掘削の開始。南造り出し、上面北縁部で埴輪列を確認。
- 8月26日 南造り出し南側斜面、葺石の実測開始。
- 8月28日 前方部北側斜面、北側1段目テラス埴輪列を確認。
- 8月31日 前方部北側、3段目斜面葺石を発見。
- 9月1日 前方部南側、2段目斜面葺石の実測完了。
- 9月4日 兵庫県文化財保護審議委員会開催(第38図)。
- 9月7日 前方部北側、3段目斜面葺石の実測開始。
- 9月8日 南造り出し南側斜面、葺石の実測完了。池田古墳調査整備検討委員会開催(第39図)。
- 9月10日 南造り出し及び区画溝の全景写真の撮影。
- 9月11日 南造り出し上面埴輪出土状況の実測開始。



第36図 南造り出し埴輪の検出



第37図 葺石の実測(南側2段目斜面)



第38図 兵庫県文化財保護審議委員会



第39図 池田古墳調査整備検討委員会

9月14日 岡山大学新納 泉先生来跡。前方部北側、3段目斜面葺石の実測完了。

9月16日 北周濠、北造り出しを確認。以後、北造り出しの検出作業（第41図）。

9月18日 前方部北側と北造り出しの境が、石敷き遺構からなることが明らかに。鳥根大学岩本崇先生来跡。

10月4日 「但馬歴史の道ウォーク」のコースに組み込まれ、調査途中の状況を公開・解説。

10月5日 京都府立大学菱田哲郎先生来跡。

10月6日 南造り出し、上面埴輪出土状況の実測と平行して、埴輪の取り上げ開始。京都橘大学一瀬和夫先生来跡。

10月7日 花園大学高橋克壽先生・賀来孝代氏来跡。

10月13日 前方部北側から北造り出し、全景写真の撮影。

10月14日 ヘリコプターによる空撮。南造り出し全景写真の撮影。糸井小学校児童26名見学。

10月15日 南造り出し上面埴輪出土状況の実測・埴輪の取り上げ再開。大阪府立近つ飛鳥博物館白石太一郎先生来跡、調査指導あり。

10月17日 北周濠、石敷遺構の実測開始。

10月20日 北造り出し上面埴輪出土状況の実測開始（第42図）。

10月27日 記者発表。

10月29日 和田山高校生8名見学。

11月3日 午前中に地元説明会を開催。約30名参加。午後、現地説明会を実施。約150名来跡。

11月5日 南周濠、区画溝斜面葺石の実測開始。

11月7日 北周濠、石敷遺構の実測完了。引き続き、北造り出し斜面葺石の実測開始。

11月12日 南造り出し上面埴輪列、出土状況の実測。実測後、埴輪の取り上げ開始。12月21日、取り上げ完了。外堤・南側テラスの断割り調査。16日に終了。

11月13日 文化庁清野孝之氏来跡。

11月26日 北造り出し上面埴輪出土状況の実測完了。

12月1日 北造り出し上面、埴輪の取り上げ開始。北側3段目葺石の実測開始。12月8日完了。

12月10日 すべての実測作業が完了。

12月16日 葺石材同定用サンプルの採取。

12月22日 引き揚げ。



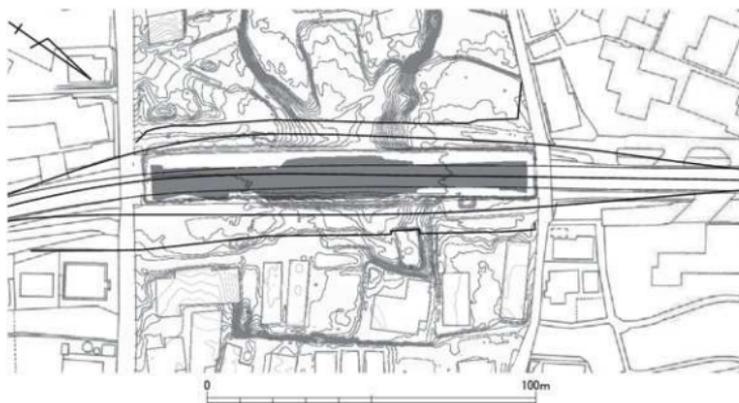
第40図 区画溝の検出



第41図 北造り出しの調査



第42図 埴輪出土状況の実測（北造り出し）



第43図 調査位置図（第3次調査）

（3）平成22年度（第3次調査）

調査番号 2010150

調査期間 平成22年12月20日～平成23年3月15日

調査面積 1276㎡

調査体制 調査員 渡辺昇・山田清朝

現場事務員 原 英美・佐藤美鈴・日下部信子

調査補助員 西本寿子・黒田祐介・山本亮司・大田好美・吉田知花・三沢朋未・中川裕子
白髭香奈・辻本沙樹・森田昇太郎・坂川幸裕

調査概要 本線部分の工事予定地を対象とした（第43図）。調査にあたっては、3箇年の調査成果を平面図・写真ともに合成する必要から、工事計画より広めに調査範囲を設定した。したがって、一部は第1次及び第2次の調査区と平面的に重複している。ただし、周濠の一部については、未調査となった箇所も認められる（第23図）。

ただし、この箇所については、次年度の平成23年4月に、工事と平行して調査を行っている。調査の結果、埴輪等は全く出土していない。

調査は、第1次調査と第2次調査の成果から、埴丘部についても大半が後世の盛土であることが明らかとなったため、盛土層を中心に重機により掘削した。周濠についても、従来と同様、後世の埋め土層までは機械により掘削した。以下の調査は、全て人力により掘削し、調査を進めていった。



第44図 第3次調査と迂回路

調査日誌抄 調査の主要な経過は以下の通りである。

- 12月20日 前方部墳頂、機械掘削開始。
- 1月11日 南周濠、機械掘削開始。前方部南側1段目テラスの検出開始（第45図）。
- 1月17日 大雪（積雪50cm）のため、作業中止。
- 1月18日 南周濠、人力掘削を開始（機械掘削と平行）。
- 1月19日 南造り出しの検出開始。
- 1月20日 前方部南側1段目テラスの全景写真撮影。
- 1月21日 前方部南側1段目テラス、埴輪列の実測開始。
- 1月28日 前方部北側から北周濠にかけて、機械掘削を開始。
- 2月2日 文化庁林 正憲文化財調査官による現地視察。
- 2月4日 前方部南側、2段目葺石実測開始。南造り出し東側裾部から完存する水鳥形埴輪（水鳥形埴輪17）出土（第46図）。
- 2月17日 南造り出し東側斜面、葺石の実測開始。
- 2月21日 前方部南側1段目斜面、葺石実測開始。
- 2月22日 北周濠、笠形木製品出土。兵庫県立考古博物館山野館長来跡。兵庫県文化財保護審議委員会（榎木誠一・和田晴吾・寺沢知子）の現地視察（第48図）。
- 3月2日 ヘリコプターによる空中写真撮影。現地説明会にむけての記者発表。
- 3月5日 現地説明会を実施。約300名が来跡。
- 3月10日 朝日放送の取材を受ける（第49図）。
- 3月11日 前日の取材成果が放送される予定であったが、東日本大震災が発生し、未放映に。
- 3月15日 調査完了。現場からの引き揚げ。



第45図 葺石の検出（前方部南側2段目斜面）



第46図 完存する水鳥形埴輪の発見



第47図 南造り出し 埴輪出土状況の実測



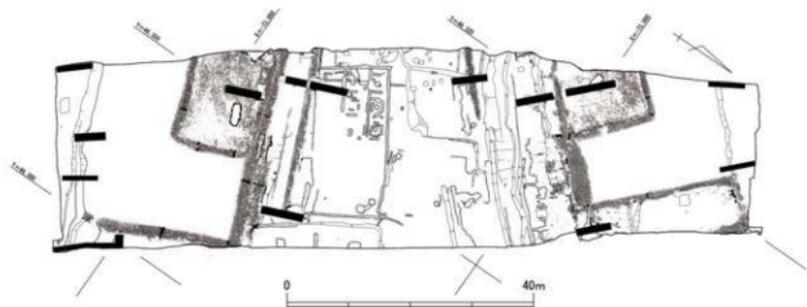
第48図 兵庫県文化財保護審議委員会



第49図 朝日の取材



第50図 墳丘北側 埴輪出土状況の実測



第51図 断割り調査位置図

3. 調査の手法

調査は、基本的に前方部→周濠の順に進めていった。調査にあたっては、特に埴輪の取り上げに注意を払った。なかでも周濠内から出土した多量の埴輪の取り上げについてである。

周濠内から出土した埴輪については、本来の樹立位置から何らかの要因で遊離したものである。このため、これらの埴輪の樹立位置の復元を試みる手順として、埴輪の取り上げにあたっては、出土した時点ですぐに取り上げるのではなく、以下の手順で行った。

それは、①出土した埴輪に番号の付与、②特徴的な埴輪については、出土状況の写真撮影・さらには出土状況の実測、③出土位置の座標をトータルステーションシステムで測定（第52図）、④出土地点のレベルの測定、⑤取り上げ、の手順である。ただし、これは出土位置を確定できた埴輪に限られ、他の埴輪については可能な限り出土地点が特定できるように記録し、取り上げていった。

また、造り出し上面から出土した埴輪についても、手実測による測量後、大小問わず全ての埴輪片に番号を付け、取り上げていった。



第52図 トータルステーションシステムによる出土地点の測量

第3節 整理作業

1. はじめに

整理作業は、平成23年度から平成26年度の4箇年にわたり行われた。発掘調査は3次（第1次～第3次）にわたり行われたが、出土した埴輪は、28㍑入りコンテナ658箱分と膨大な量となった。そこで、整理作業にあたっては、効率よく作業を進めるため、一定の手順のもとに行った。そして、この一環として、池田古墳の整理作業にあたり、いくつかの点で新たな手法を取り入れて行った。具体的には、水島形埴輪の実測方法および家形埴輪の復元方法である。この2点については、本節において別項を設け、報告する。

2. 整理の手順

先述したように、整理対象とした埴輪は莫大な量に及ぶ。このため、整理スペースに限りがあるため、幾度かに分けて行う必要があった。さらに、第1次から第3次の調査は、結果として平面的に連続するものである。このため、埴輪の接合にあたっては、調査次ごとにまとめるのではなく、3次分を合わせて行う必要があった。そこで、以下の手順で接合作業を進めていった。

まず、1段目斜面・造り出し・波土堤・周濠等、地区単位の接合を基本とした。ただし、多くの埴輪は原位置が保たれておらず、下方へ転落したと考えられるものが多数認められる状況であった。このため、ある程度の埴輪は墳丘の上方から下方へ転落していったことを考慮に入れる必要があった。そこで、以下の手順で接合作業を進めていった。

- ①まず接合作業にあたっては、調査の結果から池田古墳の北側と南側とは直接的な接合関係にはないものと判断されたため、両者を完全に分離して実施することにした。
- ②次に、前方部2段目斜面・同1段目テラス・同1段目斜面・造り出し・波土堤・周濠等、それぞれの地区単位で接合を行うことを基本とした。
- ③先の埴輪の埋没状況を考慮に入れ、前方部の上側の地区からその下側の地区へと接合を進めていった。たとえば、古墳南側でみると、2段目斜面→1段目テラス→1段目斜面→造り出し・波土堤→周濠という順番である。まず、各地区単位で接合を行い、次に隣接する下側の地区との接合を試みた(第53図)。

具体的には、2段目斜面と1段目テラス、1段目テラスと1段目斜面、1段目斜面と造り出し・波土堤、造り出し・波土堤と周濠等、隣接する地区から出土した埴輪相互の接合である。その後、上側の地区の埴輪を片付け、新たに下側の埴輪を広げ、接合を行っていった。

- ④上記の接合作業を行っていく過程で、調査時に番号をつけて取り上げた埴輪について、1点ずつその種類を特定していった。この成果が、第5章以下の出土位置図に反映されている。



第53図 整理作業

- ⑤地区単位で接合を行っていくにあたり、出土量の最も多い円筒系埴輪について接合を優先させていった。他の形象埴輪等については種類ごとに峻別し、全ての円筒系埴輪の接合が終了後、種類ごとに接合を行っていった。
- ⑥水鳥形埴輪や家形埴輪の接合過程において、製作方法を記録・検討する上で重要と考えられる内面・断面・剥離面など、接合・復元後の撮影が困難な部位については、事前に写真撮影を実施した。必要に応じて、その箇所の実測をおこなった。
- ⑦埴輪に塗布された赤色顔料についても、接合・復元する前に当館所有の蛍光X線分析装置を使用し、その分析を行った。この結果は、第6章第3節で報告する。

3. 整理作業の経過

(1) 概要

各年度の整理作業の概要・体制等は以下の通りである。なお、埴輪等の遺物の水洗については、発掘調査事務所にて調査と併行して行った(第54図・第55図)。

(2) 平成23年度

整理概要 まず、魚住分館にて埴輪のネーミング作業を行った。これに引き続き、兵庫県立考古博物館にて埴輪の接合・復元作業を行った(第53図)。本年度の埴輪の接合は、古墳南側から出土した埴輪を対象とした。

また、花園大学の高橋克壽先生には、埴輪の種類・部位の特定にあたって御教示・御指導をいただいた。

さらに、水鳥形埴輪17について、大手前大学史学研究所岡本篤志研究員の協力により、三次元計測機によるレーダー測量を行った。この成果をもとに、外形を中心とした部分についての図化を試み、精度的にその有効性を確認した。この結果を受け、翌年度に水鳥形埴輪9点を対象として、三次元計測を行うこととなった。

整理体制 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

整理保存課 山本 誠・深江英憲

調査課 山田清朝

嘱託員 友久伸子・鏡子ふさ恵・三好綾子・奥野政子・藤尾裕子・嶺岡美見
藤池かづさ・吉村あけみ・佐々木 愛・平宮可奈子・榎 真菜美
吉田優子・又江立子・宮野正子



第54図 埴輪の水洗作業(1)



第55図 埴輪の水洗作業(2)

(3) 平成24年度

整理概要 平成23年度に引き続き、埴輪及び土器・土製品の接合・実測・復元・写真撮影を行った。

本年度の接合については、北側から出土した埴輪を対象とした(第57図)。

さらに、円筒系埴輪の接合の進捗に合わせ、その実測を進めていった。また、年度後半には、水鳥形埴輪の実測も行った。さらには、小型土製品・土器・金属製品・木製品の実測も行った。

このなかで、一部の水鳥形埴輪の実測にあたっては、前年度に試みその有効性が確かめられた、三次元計測機によるレーダー測量の成果をもとに、実測を行った(第58図 後述)。

この間、8月7日・8日には、毛野考古学研究所 賀来孝代氏が来館し、水鳥形埴輪を実見した。合わせて復元方法等も含め、御教示・御指導をいただいた。また、翼の打ち合わせを表現するなど、畿内中央部の水鳥形埴輪の情報が忠実に伝播されている等、の評価をいただいた。

11月29日には、花園大学高橋克壽先生が来館し、家形埴輪の復元方法についてのご指導をいただいた。また、出土埴輪全般についての御指導もいただいた。

1月21日には、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所高妻洋成・辻本與志一両氏の御指導により、同所にてX線CTスキャナーによる水鳥形埴輪頭部のX線透過写真の撮影を行った(後述)。

また、これらの作業と平行して、遺構図の整理・レイアウトおよび原稿の執筆を行った。

整理体制 (公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課 篠宮 正・深江英恵・岡本一秀

調査課 山田清朝

嘱託員 友久伸子・増田麻子・鳥田留里・鏡子ふさ恵・佐伯純子・柏木明子・鳥村順子
三好綾子・嶺岡美見・藤池かづさ・吉村あけみ・佐々木 愛・平宮可奈子
吉田優子・久保夏美・上田沙耶香

(4) 平成25年度

整理概要 平成24年度に引き続き、出土埴輪の接合・実測・復元・写真撮影(第59図)を行った。これと併行して、遺構図の作成・トレース(第60図)、および埴輪実測図のレイアウト・トレースを行った。



第56図 櫛形埴輪の復元



第57図 円筒埴輪の復元作業



第58図 水鳥形埴輪の実測

さらには、原稿の執筆を行った。また、出土木製品の保存処理を併行して行った。

本年度の埴輪の復元は、水鳥形埴輪と家形埴輪を中心に実施した(第61図)。特に、家形埴輪1と家形埴輪4の復元には約5箇月以上を要した(第71図)。

この他、遺物写真の撮影にあたっては、3月8日に兵庫県立考古博物館開催のバックヤードツアーの中に撮影風景の見学を取り込み、その様子を公開した。

また、出土埴輪の胎土分析および花粉分析をパリオサーヴェイ株式会社、出土木製品の樹種同定と出土した歯の同定を株式会社古環境研究所に、AMSによる木片等の年代測定を株式会社加速器分析研究所に、葦石の石材同定を株式会社パレオ・ラボに、それぞれ委託した。その結果は、第6章に掲載している。

さらに、出土埴輪の蛍光X線分析を三辻利一先生に、埴輪に塗布された赤色顔料の分析を兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部の岡本一秀に、それぞれ依頼した。

この他、6月3日には花園大学高橋克壽先生が来館し、家形埴輪の復元方法についての御教示・御指導をいただいた。

整理体制 (公財) 兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部

整理保存課 長濱誠司・深江英憲・岡本一秀
調査課 山田清朝
嘱託員 友久伸子・森本貴子・増田麻子・宮田麻子
柏木明子・川村由紀・鳥村順子・藤池かづさ
吉村あけみ・嶺岡美見・平宮可奈子・加藤裕美・榎 真菜美・上田沙耶香・坂東知奈

(5) 平成26年度

整理概要 平成25年度に引き続き、原稿の執筆・編集を行い、本報告の刊行に至った。また、独立行政法人奈良国立文化財研究所高妻洋成・辻本與志一両氏の御指導により、同所にてX線CTスキャナーによる水鳥形埴輪17・30のX線透過写真の撮影を行った。また、W1についても、木取りを確認するため、X線透過写真の撮影を行った。

整理体制 (公財) 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

整理保存課 菱田淳子・長濱誠司・岡本一秀
調査課 山田清朝
嘱託員 友久伸子・森本貴子・池田悦子・坂東知奈・河合たみ・山口陽太



第59図 遺物写真の撮影



第60図 遺構図のトレース



第61図 水鳥形埴輪の復元

4. 水鳥形埴輪の実測について

水鳥形埴輪は、その形態が複雑であり、かつ正面・側面・後面・上面等、多方向からの実測が必要であった。しかし、従来の実測方法では多くの手間と時間を要すると予想される状況であった。そこで、水鳥形埴輪の実測にあたり、新たな手法を取り入れた。それが、3次元レーダー測量とCTスキャン投影である。

3次元レーダー測量については、調査終了後の平成23年度に締結した大手前大学・朝来市教育委員会との池田古墳の測量調査に関する覚書（詳細は第9章第3節の一貫として行ったものである）。

実際には、大手前大学岡本篤志研究員により、同大学所有のレーダー計測器（コニカミノルタ VIVID910）を使用して、兵庫県立考古博物館（当時）にて計測を行った（第62図）。対象としたのは、すべての水鳥形埴輪ではなく、基本的に残存状況の良好な埴輪に限定して行った。具体的には、水鳥形埴輪5・16・17・19・23・25・28～31の10体についてである。

まず、レーダー計測後、実測に必要な方向からの画像を撮り込み（第63図）、この成果をもとに、図化ソフトPolyWorksにより、水鳥形埴輪の外郭線およびその見通しラインの図化を行った。特に、見通しの図化にあたっては、精度・効率性の面から大変有効であった。

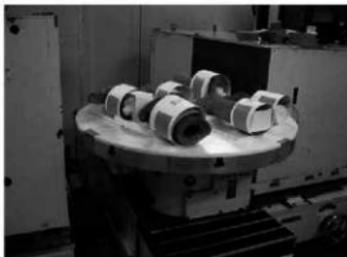
CTスキャン投影は、水鳥形埴輪の頸部から頭部にかけての内面ラインの計測を目的とした。実際のCTスキャン投影は、独立行政法人 国立文化財機構奈良文化財研究所にて、日立製HiXCT-1MによるX-ray CT Systemを使用し実施した（第64図）。対象としたのは、残存状態が良好な頭部等、内面の計測が困難な埴輪についてである。3次元レーダーにより計測した外面のラインに対応する箇所にX線を投影し、映し出された断面映像（第65図）から、内面のラインを復元したものである。結果として、製作技法の解明にも大変有効であった。



第62図 レーダーによる三次元計測



第63図 水鳥形埴輪28の3D画像



第64図 CTスキャン投影



第65図 X線透過写真

5. 家形埴輪の復元について

家形埴輪の復元にあたっては、埴輪片を接合し、不足部位についてモルタルで補完していく方法で実施した。ところが、家形埴輪1など大型の埴輪については、モルタルで復元した屋根を載せると、下部にかなりの重量がかかると思される状況となった。そこで屋根の復元にあたっては、モルタルに替り、ポリスチレンフォーム保温板（カネライトフォーム スーパーE-1）を使用し、上部の軽量化を図った。

実際には、まず身舎部を復元し（第66図）、これをもとに残存する屋根の破片を合わせ、屋根を図上で復元した。これをもとにポリスチレンフォーム保温板で実物大の屋根を復元した（第67図）。その後、残存する屋根の破片をポリスチレンフォーム保温板で復元した屋根の中に埋め込んでいった。その後、ポリスチレンフォーム保温板の表面にモルタルを薄く塗り（第68図）、最後に着色していった。また、ポリスチレンフォーム保温板で復元した屋根は、身舎部分と常時着脱ができるよう、はめ込み式とした。

なお、水鳥形埴輪14についても、頭部と体部の接合において、同様の手法で復元を行った（第70図）。



第66図 家形埴輪1 身舎の復元



第67図 ポリスチレンフォーム保温板による屋根の復元



第68図 モルタルの塗布



第69図 家形埴輪1の完成



第70図 水鳥形埴輪14の復元



第71図 家形埴輪4の復元

第3章 池田古墳下層遺跡の調査成果

第1節 概要

池田古墳下層遺跡とは、池田古墳の墳丘上に認められる築造以前の埋蔵文化財を対象とし、以前から周知されていたものである。今回の調査においても、当該期の遺構が検出されているため、本章で報告する。

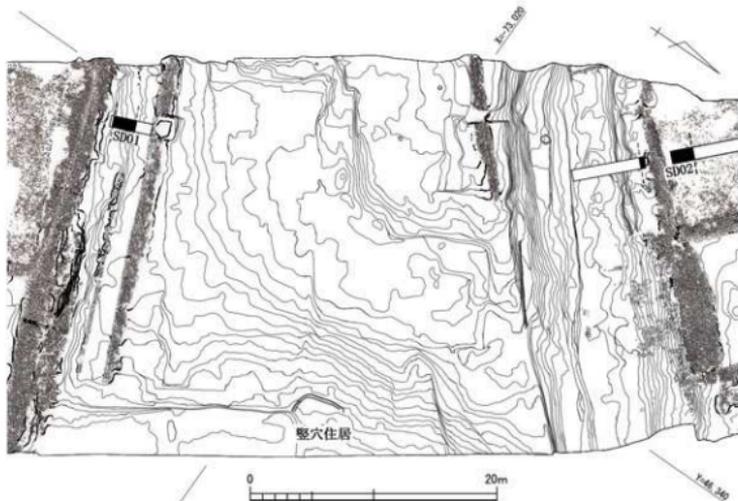
検出された遺構は、竪穴住居跡と溝状遺構(SD01・SD02)である(第73図)。これらの遺構は、基本的には池田古墳前方部を中心に検出されている。ただし、SD02は前方部北側から北造り出しにかけて検出されている。竪穴住居跡については、前方部が削平を受けた面で検出されている(第72図)。地形的には、最も良好な位置にあたる。

溝状遺構については、いずれも前方部墳丘の断ち割り調査(第51図)の際に明らかとなったものである。このため、断面観察が主で、平面的な調査はほとんど行われていない。古墳保護の観点からも、面的な調査は行っていない。

なお、これらの遺構は、いずれも出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第72図 住居跡の検出作業



第73図 池田古墳下層遺跡 遺構位置図

第2節 遺構と遺物

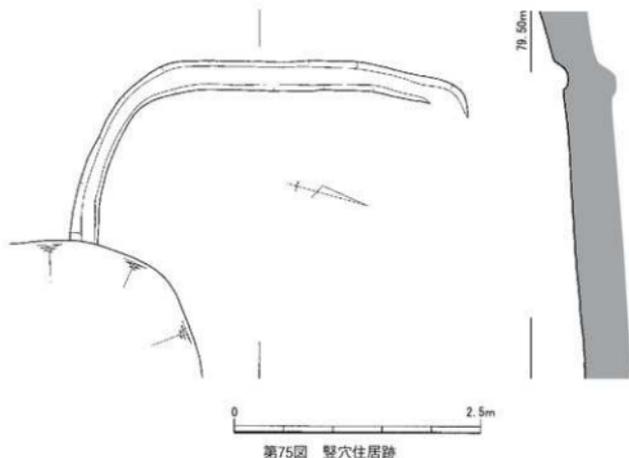
1. 竪穴住居跡

検出状況 前方部中央東端（第1次調査）で検出している（第73図）。前方部は全体的に削平を受けているが、当住居跡は、周壁溝のみが残存していた（第74図・第75図）。残存する範囲は、全体の1/2以下と考えられる。また検出面が傾斜しており、西側を中心に残存し、東側については全く残存していなかった。

規模 残存する限りにおいて、平面形は隅丸方形をなすものと考えられる。西辺がほぼ完成し、その



第74図 竪穴住居跡



第75図 竪穴住居跡

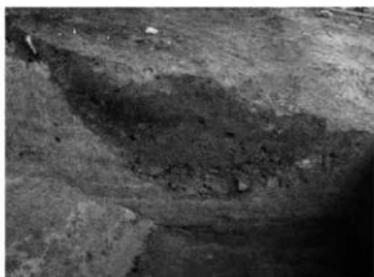
規模は3.20mを測る。その直交方向では、2m検出している。また、検出面における周壁溝の幅は西辺で30cm、南辺で25cmを測る。横断面は逆台形に近く、西側検出面からの深さは14cmである。

その他 周壁溝以外、附属施設は残存していなかった。また、遺物の出土量も少なく、周壁溝内からわずかに弥生時代後期後半の土器片が出土している。ただし、小片のため図化できなかった。

2. 溝状遺構

SD01

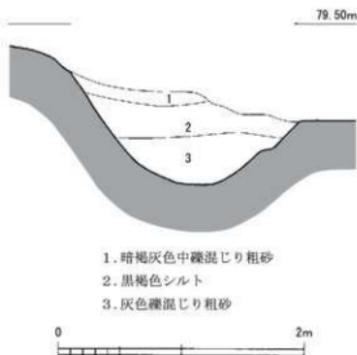
遺構 南側1段目テラスに設定したトレンチで確認した遺構である（第73図・第76図）。断面とテラス上面での観察結果から、ほぼ東西方向にのびる溝状の遺構と考えられる。検出面における幅は1.80mを測り、横断面は緩やかなU字形をなす（第77図）。最深部における検出面からの深さは1.20mを測る。



第76図 SD01断面 西から

埋没状況 最下層は、土石流起源による堆積と考えられ、その下層には角礫の堆積が認められた。中層については、自然堆積後土壌化した層と考えられ、上層については、テラス成形に伴う整地層と考えられる。このため、時期は特定できない。

時期 なお、調査においては遺物の出土は確認できなかった。



第77図 SD01断面

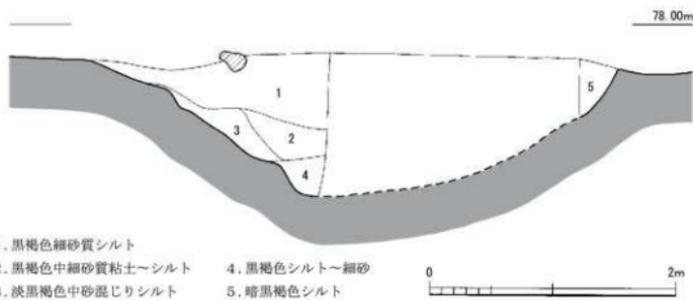
SD02

遺構 北造り出し中央部南端で検出している(第73図)。後述する北造り出しの構築を調べるために設定した幅1mのトレンチ調査(第51図)で明らかとなった遺構である。検出した範囲では、東西方向にのびる遺構と考えられる。



第78図 SD02断面 西から

また、北造り出しの南側、石敷き遺構を扶んだ南側にも上記トレンチを延長する形で別のトレンチを設定した。このトレンチ北端においても、遺構と考えられる落ち込みが検出されている。両者は、その埋土の特徴が酷似することか



第79図 SD02断面

ら、同一の遺構と考えられる。つまり、石敷き遺構を中心に両トレンチに及ぶ規模の溝であったと考えられる。

規模 以上から、当溝の幅は4.30mと復元することができる(第79図)。また、横断面は逆台形もしくは緩やかなU字形をなすものと考えられ、最深部における検出面(造り出し上面)からの深さは1.15mを測る。

出土遺物 溝内からは壺・甕・高坏・器台・鉢の各器種が出土している(第80図・第2表・第3表)。壺と甕の一部は、完形に近い状態で出土している(第78図)。

壺 1～3の3個体が出土している。

1は、直口壺の口縁部である。内外面ともナデにより仕上げられ、外面上端には3条の擬凹線が引かれている。

2は、口縁部をのぞいて完存する個体である。長頸壺に分類されるもので、底部はほぼ丸底に近い形態である。全体的に磨滅傾向にあるが、体部下外面は叩き整形後ハケにより仕上げられている。また、わずかではあるがヘラ掻きが残存する。内面は、体部が左上がり方向のヘラ削り、頸部がヨコハケにより仕上げられ、最後に口縁部内外面がヨコナデにより仕上げられている。口縁部外面は、わずかに凹線状をなしている。

3は、脚部を中心に残存し、台付壺の一部と考えられる。脚部から体部にかけての外面はヘラミガキを基調とし、脚端部はユビオサエ後ナデにより仕上げられている。体部内面は、ナデにより仕上げられている。

第2表 池田古墳下層遺跡出土土器観察表(1)

No	種別	器種	出土地点	残存状況	法量 (cm)				色調	
					口径	頸径・肩径	最大径	底径		器高
1	弥生	壺	SD02	口縁部1/6	10.10	10.00			(6.60)	灰白～浅黄橙
2	弥生	壺	SD02	口縁部1/2・体部以下完存	11.00	8.80	13.42	3.25	23.45	にぶい橙～浅黄橙
3	弥生	壺	SD02	脚部完存		4.20		8.70	(5.40)	淡黄～灰白
4	弥生	甕	SD02	口縁部完存	15.60	12.30			(4.80)	浅黄橙～灰
5	弥生	甕	SD02	口縁部5/12	13.60	12.30	16.10		(10.20)	淡黄～暗黄
6	弥生	甕	SD02	口縁部1/2・体部以下完存	12.15	10.80	12.80	2.60	14.10	淡黄～明黄褐
7	弥生	高坏	SD02	口縁部1/4・底部わずか	13.30	4.40		10.10	8.20	黄灰～にぶい橙
8	弥生	高坏	SD02	口縁部1/6	20.40				(4.55)	浅黄
9	弥生	高坏	SD02	口縁部1/3・脚部完存	13.20	2.90		10.60	(11.20)	灰黄～浅黄
10	弥生	高坏	SD02	脚部1/2		3.70		11.60	(9.30)	灰黄～浅黄
11	弥生	高坏	SD02	脚部3/4		3.90		13.80	(9.30)	浅黄～にぶい黄橙
12	弥生	器台	SD02	受部1/3	22.60				(5.85)	浅黄橙
13	弥生	鉢	SD02	底部完存				3.60	(5.40)	暗灰黄～灰黄
14	弥生	高坏	旧表土層	脚柱部完存		3.40			(10.20)	橙～にぶい黄橙

堖 4～6の3個体が出土している。

4は、口縁部を中心に残存する。体部外面はタテハケにより仕上げられ、内面は横方向のヘラ削りがわずかに認められる。口縁部は、内外面ともユビオサエとヨコナデにより仕上げられている。

5は、口縁部から体部上半にかけて残存する。体部外面はタテハケ、内面は横方向のヘラ削りとヘラナデにより仕上げられている。口縁部は下端部を中心にヨコナデにより拡張させ、外端面には2条の擬凹線が引かれている。

6は、口縁部を除いて完存する個体である。体部外面はタテハケ、内面は縦方向から斜方向のヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は、内外面ともヨコナデにより仕上げられている。

高 坏 7～11の5個体が出土している。

7は、完全に戻元できた個体である。坏部が碗形をなすタイプで、内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。脚部外面は横方向のヘラミガキ、内面はナデにより仕上げられている。脚部と坏部の接合部外面は、短いタッチの板ナデにより仕上げられている。

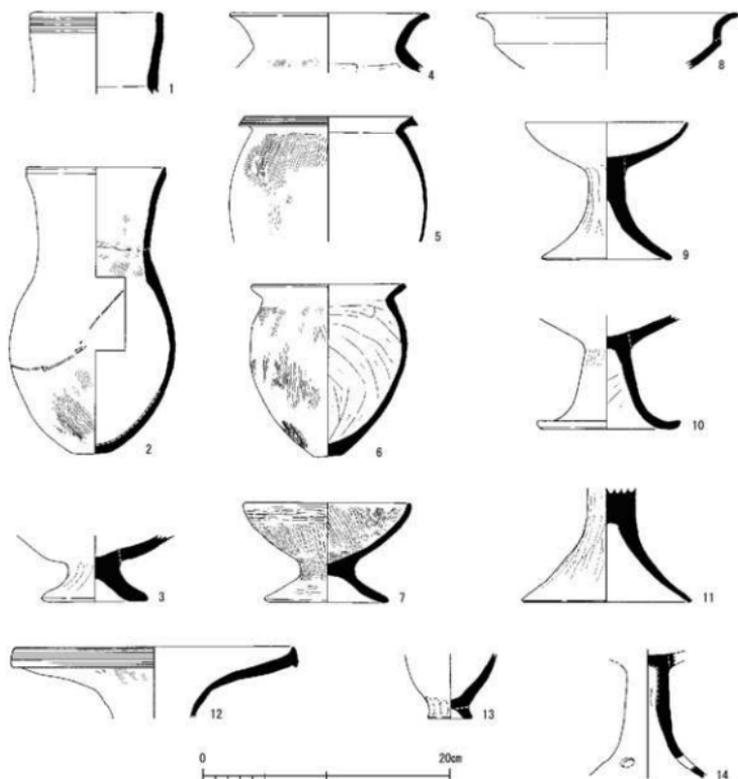
8は、坏部を中心に残存する。体部に対して口縁部が大きく外反するタイプである。坏部外面がヘラ削り後ナデにより仕上げられている以外は、ヨコナデにより仕上げられている。

9は、完全に戻元できた個体である。坏部は皿形に近く、内面はヘラミガキ、外面はヘラナデにより仕上げられている。脚部は、外面が縦方向のヘラミガキ、内面がヘラナデにより仕上げられている。

10は、脚部から坏部の一部にかけて残存する。脚端部は大きく外反し、脚柱部外面は縦方向のヘラミガキにより、内面はヨコ方向のヘラ削りにより仕上げられている。坏部外面はナデにより仕上げられているが、内面は剥離により調整は観察できない。

第3表 池田古墳下層遺跡出土土器観察表(2)

胎 土	調 整	写真 図版
0.5～1mm大のチャート・長石・タサリ礫・石英多く含む	外面：口頸部ナデ 内面：体部ヘラナデ→口縁部ナデ	—
1～3mm大の長石・チャート多量に含む	外面：体部下半叩き→ハケ・体部上半→口縁部磨滅・口縁部ヨコナデ 内面：底部→体部ヘラ削り→頭部ハケ→口縁部ヨコナデ	440
0.5～1mm大の石英・長石・チャート含む	外面：脚端部ユビオサエ→ナデ→脚部ヘラミガキ→体部ヘラミガキ 内面：脚部ナデ・体部ナデ	—
1～3mm大の石英・長石・チャート含む	外面：体部ハケ→口縁部ユビオサエ・ヨコナデ 内面：体部ヘラ削り→口縁部ユビオサエ・ヨコナデ	—
0.5～1mm大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部ハケ→口縁部ヨコナデ 内面：体部ヘラナデ・ヘラ削り→口縁部ヨコナデ	—
1～3mm大の石英・長石・チャート多量に含む	外面：底部→体部タテハケ→口縁部ヨコナデ 内面：底部→体部ヘラ削り→口縁部ヨコナデ	440
0.5～1mm大のチャートわずかに含む	外面：脚部ハケ→脚部下半ヘラミガキ→坏部ヘラミガキ 内面：脚部ナデ・坏部ヘラミガキ	440
1～3mm大のチャート・長石・石英含む	外面：坏部ヘラ削り→ナデ→口縁部ヨコナデ 内面：坏部→口縁部ヨコナデ	—
0.5～1mm大の石英・長石・チャート含む	外面：脚部ヘラミガキ→脚部ヨコナデ→坏部ヘラナデ→口縁部ヨコナデ 内面：脚部ヘラナデ・坏部ヘラミガキ	440
0.5～1mm大の長石・石英・チャート多く含む	外面：脚部ヘラミガキ→脚端部ヨコナデ・坏部ナデ 内面：脚部ヘラ削り・坏部磨滅	—
0.5mm以下の長石・チャート含む	外面：脚柱部ヘラミガキ→脚端部ヨコナデ 内面：脚部絞り目・ナデ	440
1～3mm大の石英・長石・タサリ礫・チャート含む	外面：受部ヘラミガキ→脚部ヨコナデ 内面：脚部ヨコナデ	—
1～2mm大の石英・長石・チャート多く含む	外面：脚部ユビオサエ・体部磨滅 内面：底部→体部ナデ	—
0.5～1mm大の長石・チャート・タサリ礫含む	外面：磨滅 内面：脚部絞り目・坏部磨滅	—



第80図 池田古墳下層遺跡出土土器

11は、脚部がほぼ完存する。外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられ、内面にはしほり目が認められる。

器 台 12の1個体が出土している。受部を中心に残存する。端部は上下に拡張され、端面には4条の擬凹線が引かれている。全体的に磨滅傾向にあるが、外面には縦方向のヘラミガキが認められる。

鉢 13の1個体が出土している。体部以下を中心に残存する。底部はてづくね成形により、脚台が形成されている。体部は磨滅傾向にあるが、内面はナデにより仕上げられている。

3. その他

この他、田表土層中から、14の高坏が出土している（第80図）。14は脚柱部を中心に残存する。全体的に磨滅傾向にあるが、内面にはしほり目が認められる。また、径1.2cmの円孔が残存する。

第4章 池田古墳の調査成果

第1節 概要

1. 概要

前章での報告のとおり、平成20年度から3箇年にわたり調査を行った。以下、初年度の調査を第1次調査、次年度を第2次調査、最終年度の調査を第3次調査と呼称する。後述するように、前方部を中心に削平を受けているため、残存していたのはこの南北両側に限られる。そこで、これを前提として、適宜「南側」「北側」と呼称していく。

先述したように(第2章第2節)、各調査区検出面の範囲が接する、もしくは互いの調査区が平面的に重複するよう、調査区を設定していった(第23図)。このため、調査前の地表面からの深さが深い箇所、特に周濠部分においては、地表面における調査区ラインが、平面的に重複する結果となっている。ただし、最終的には、一部周濠内において未調査に終わった箇所も存在する結果となっている。逆に、テラス部分を中心に、平面的に大きく重複している箇所も認められる。なお、上記未調査箇所については、第3次調査終了後の平成23年4月4日に、本線部分の工事に合わせて調査を行っている。

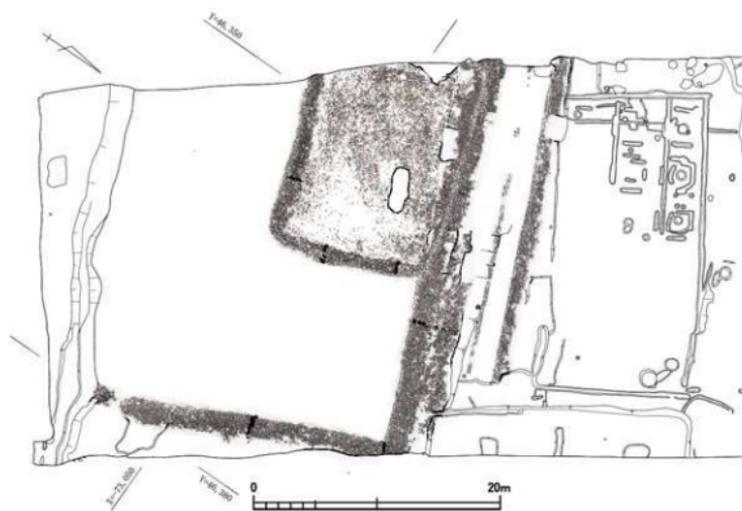
2. 検出状況(巻首図版8)

3箇年にわたる調査成果をまとめたのが、第81図・第82図・第84図である。調査前から予想されたことであるが、墳丘の大半は明治時代以降に行われた山陰線敷設に伴う土取りにより、残存していなかった(第83図・第85図網掛け部分)。墳丘として残存していたのは、南北両側の1段目斜面(南側1段目斜面・北側1段目斜面)と1段目テラス(南側1段目テラス・北側1段目テラス)、南側2段目斜面・南側2段目テラス・北側3段目斜面の一部である(第82図・第84図)。なお北側3段目斜面については、第2次調査の範囲に限られるもので、東側の第3次調査・第1次調査では検出されていない。また、各斜面が残存する範囲においては、葺石が葺かれた状態で検出されている。

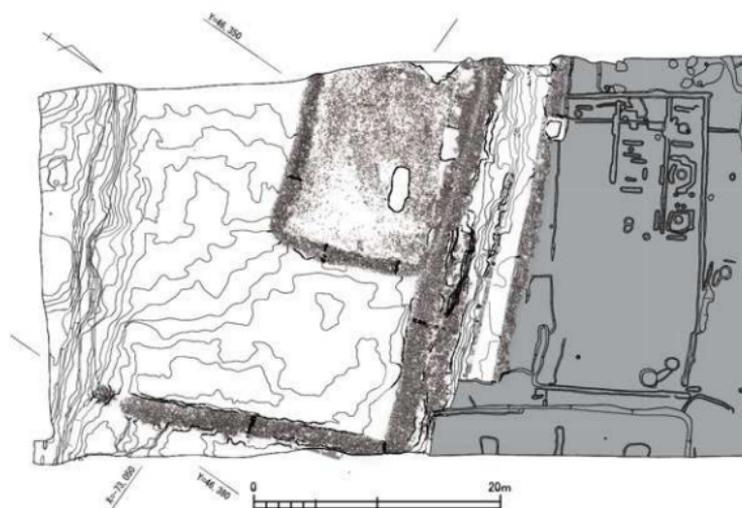
一方、墳丘の外側、周濠部においては非常に良好な状態で各施設が検出されている。南北両側の造り



第81図 全体図(第1次~第3次)



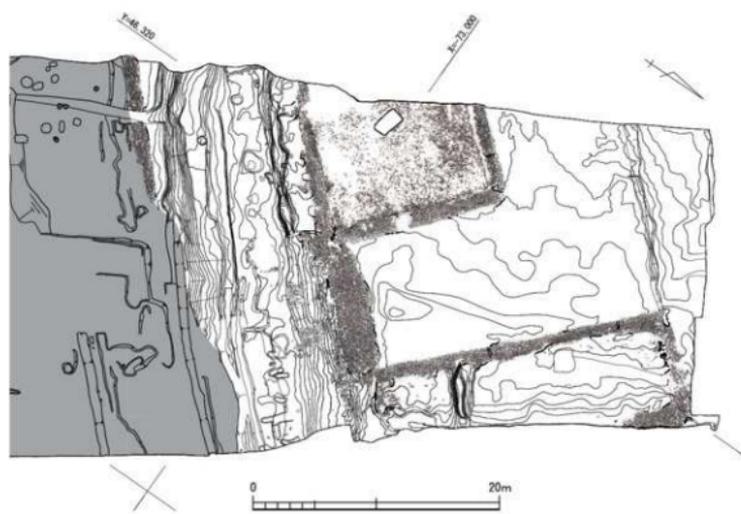
第82図 平面図 (南半)



第83図 池田古墳残存部 (南半)



第84図 平面図 (北半)



第85図 池田古墳残存部 (北半)

出し（南造り出し・北造り出し）・渡土堤（南渡土堤・北渡土堤）・外堤（南外堤・北外堤）、および周濠（南周濠・北周濠）である（第82図・第84図）。特に、造り出しと渡土堤については、削平を受けることなくほぼ上面まで残存していた。

2. 池田古墳の埋没状況

(1) はじめに

調査にあたって、池田古墳は、墳丘においては大きな改変を受け、段築等墳丘の具体的な内容は理解しにくい状況であった。一方周濠においては、水田となっていたことからその範囲を理解することができたが、完全に埋没した状況であった。

以下、調査を通じて明らかとなった、池田古墳の埋没状況およびその過程について報告していく。なお、3次におよぶ調査のなかで最も良好に土層観察のできた、第2次調査西側壁面の観察結果（第86図・第87図）をもとに、報告していくことにする。

このなかで、葺石を伴う斜面においては、転落した葺石とともに埴輪片が多量に出土している。このような層については、「転石層」と呼称し、以下報告していくことにする。

(2) 前方部

調査前の段階において、地表面レベルで南周濠側とは2.60m、北周濠側とは3.00mの比高差が認められた。このため、墳丘の存在自体は明らかであったが、段築等については不明瞭な状態であった。

墳頂部の基本的な土層は、墳丘上に表土・耕作土・盛土が認められた。このなかで、墳丘中央部、表土層下から切り込む瓦窯（第86図4層）が明らかとなっている。4層は登り窯で、層内からは耐火煉瓦や窯壁片が多量に出土している。また、その周囲の26層・27層内からも、上記の瓦焼成に伴う耐火煉瓦や瓦が多量に出土している。詳しくは第9章第3節で報告するが、大正時代の遺構と考えられる。この他、断面図には表現されていないが、窯跡の影響が及ばない箇所については、墳丘上は盛土層で覆われていた。

墳丘の南側斜面においては、表土層下に、円礫を多量に含む層が認められた。特に人頭大の礫が中心である。6層～9層が該当する。円礫は葺石および基底石に使用されたと考えられるものである。遺物が含まれていなかったため、具体的な時期は不明である。10層は、埴輪片を多く含む層で、1段目斜面に伴う転石層である。また、墳丘部から周濠への変換部においては、水路が造られていた（5層）。

墳丘の北側は、表土層下の28層については、墳丘に盛られていた2次堆積層で、層中からはビニール片等が出土している。昭和以降の整地層と考えられる。その下層の29層からは、葺石に使用されたと考えられる円礫が多量に出土している。墳丘を削平した際の2次堆積層と考えられる。31層は、2段目テラス以下が削平された後に堆積した層である。層中から東播系須恵器や青磁器片・白磁片等が出土していることから、鎌倉時代以降に形成された層と考えられる。少なくとも、当該期以前に墳丘の削平が行われたことを示す層である。

この他、30層については転石層に相当する層である。3段目斜面崩落に伴う葺石・埴輪片が多量に出土している。その下側、周濠との変換部付近の32層・33層についても、転石層に相当する層である。埴輪片が多くはないが出土している。

なお、墳丘中央部における調査前地表面から検出墳丘面までの深さは、1.20mである。また、墳丘保護のため十分な断り割り調査はできなかったが、墳丘自体は暗褐色シルト層を基盤とし、その上層に盛土を行い、墳丘が構築されている。

(3) 南周濠 (第86図)

調査前までは耕作地であったところである。このため、一部盛土層(1層)が認められたが、基本的に耕作土(2層)に覆われていた。また、この層下面から切り込む水路・暗渠跡も検出されている。第86図に表されていない第1次調査・第2次調査地区についても、同様であった。ただし、第1次調査区においては、全体的に約90cmの盛土が認められた。

以下、周濠埋土(24層)までは、シルト質細砂～粗砂を基本とした湿地性の堆積層である。いずれの層も土壌化しており、水田土壌であったものと考えられる。この中で、22層については、土石流に起因する層と考えられ、数度の土石流堆積があったものと考えられる。したがって、土石流→湿地性堆積の繰り返しの結果が、13層～21層と考えられる。

また、20層中からは、鎌倉時代前半の須恵器・白磁片が出土しており、当該期に堆積した層と考えられる。したがって、当層は造り出し直上の層であることから、造り出しの埋没開始が当該期まで遡るものと考えられる。また、周濠の基盤となる層は、青灰色シルトと極細砂～粗砂の互層からなる。

この他、第86図では表現されていないが、渡土堤を覆う層についても、20層と同じ層であることが確認されている。

なお、周濠底の標高は77.60mを測り、調査前の地表面からの深さは2.30mである。この他、24層の周濠埋土と25層の区画溝埋土については、本章第5節以下で詳述する。

(4) 北周濠 (巻首図版26 第87図)

基本的な状況は、南側と同じである。ただし、調査区西側においては1層の盛土層が約1m認められた。第1次調査地区においても、60cmの盛土が認められた。以下、35層以下は水田土壌層である。35層～39層については、各層が砂質であることから、南側同様、土石流→湿地性堆積の繰り返しの結果と考えられる。

このなかで、周濠埋土(40層)の上層の39層中からは、東播系の須恵器片が出土している(図版198)。したがって、鎌倉時代前半に当層が形成されたものと考えられる。特に当層は造り出しおよび外堤を覆う層であることから、造り出しおよび外堤の埋没が鎌倉時代以降と考えられ、南側と同じ状況を確認することができる。また、周濠の基盤となる層は、青灰色シルト質極細砂からなる。

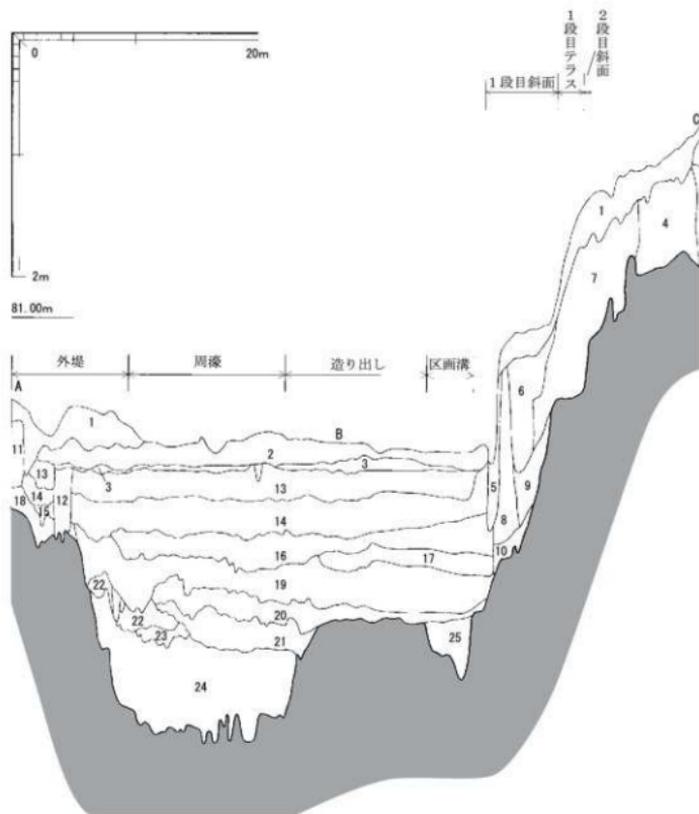
この他、第87図では表現されていないが、渡土堤を覆う層についても、39層と同じ層であることが確認されている。

なお、40層の周濠埋土については、次節で詳述する。また、周濠底の標高は75.90mと南側より低く、調査前における地表面からの深さは2.70mである。

(5) 小 結

以上から、墳丘の削平および、造り出し・渡土堤・外堤の埋没は、少なくとも鎌倉時代までさかのぼることは明らかである。したがって、当該期までは、古墳築造当初の景観が保たれていたのではないかと

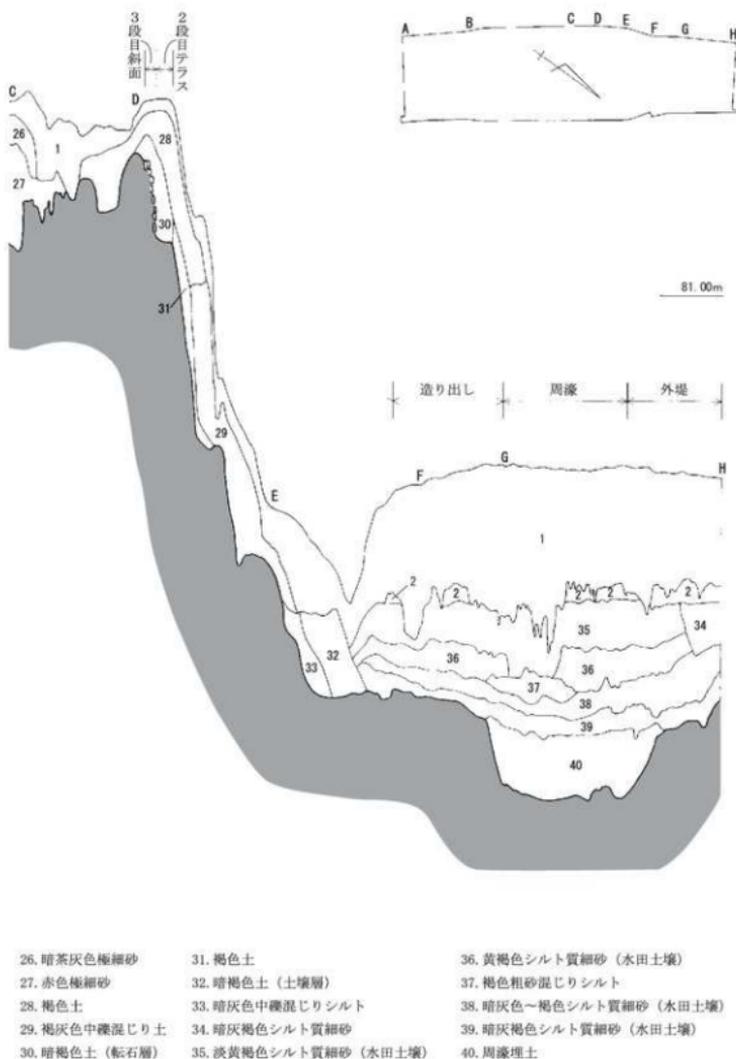
と考えられる。造り出し・渡土堤・外堤を覆う層が、鎌倉時代以降の水田土壌層であることから、当該期に周濠部分が水田化されたものと考えられる。その水田化の一環として、周濠および造り出し・渡土



- | | | |
|------------------|----------------------|-----------------------------|
| 1. 盛土 | 10. 青灰色シルト (転石層) | 19. 暗灰色粗砂混じり細砂 |
| 2. 耕作土 | 11. 暗灰色細砂 | 20. 黒灰色粗砂混じり極細砂～細砂 |
| 3. 灰褐色細砂 (床土) | 12. 水路跡 | 21. 暗褐色粗砂混じり極細砂～細砂 |
| 4. 露跡 | 13. 灰褐色粗砂混じり細砂 | 22. 黄灰色粗砂と灰色シルトの互層
(洪水層) |
| 5. 暗灰褐色土 (用水路埋土) | 14. 灰褐色粗砂混じり細砂 | 23. 黒灰色粗砂混じりシルト |
| 6. 大礫混じり暗褐色土 | 15. 暗黒灰色細砂 | 24. 周濠埋土 |
| 7. 大礫混じり暗褐色土 | 16. 灰色粗砂～小礫混じり極細砂～細砂 | 25. 区画埋土 |
| 8. 大礫混じり暗褐色土 | 17. 黒灰色粗砂混じり極細砂～細砂 | |
| 9. 大礫混じり暗青灰色シルト | 18. 黄灰色細砂 | |

第86図 基本土層図 (南半)

堤・外堤にかけて平坦化されたものと考えられる。花粉分析においても、これを支持する結果が得られている（第6章第4節）。



第87図 基本土層図 (北半)

第2節 前方面

1. 概要

前方面の多くは削平・攪乱を受け、残存状況は良好とは言えない状況である。特に、前方面中央については、調査前からの予想通り、古墳築造当初の状態を全く留めていなかった(第83図・第85図)。

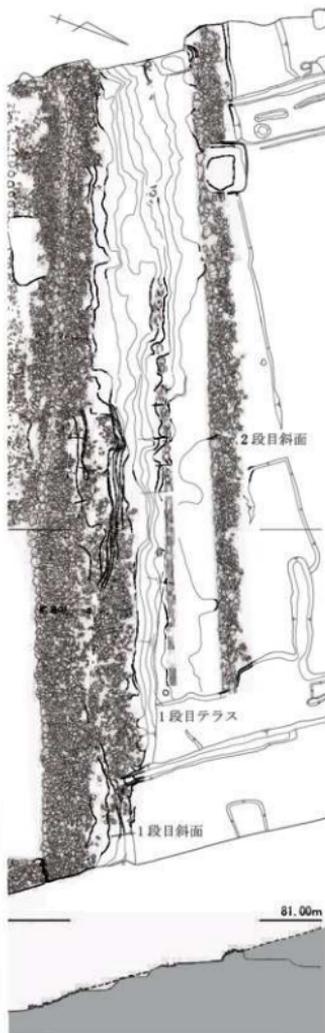
残存していたのは、南側では1段目斜面・1段目テラス・2段目斜面の一部である(第89図 写真図版8)。1段目斜面については、葺石が葺かれた状態で検出されている(第88図)。ただし、その上部1段目テラス付近については、葺石は残存していなかった。1段目テラスと2段目斜面は、東側約6mが削平・攪乱を受け、残存していなかった。さらに、2段目斜面については、その下部のみが残存し、上部は削平を受けていた。

北側については、1段目斜面・1段目テラス・2段目テラス・3段目斜面が検出されている(第90図 写真図版42)。1段目斜面は、北造り出しと北渡土堤の間について、葺石を伴って比較的良好な状態で検出されている。ただし、上部ほど葺石の残存状況はよくない傾向にある。西半と東端付近については、削平を受けていた。

1段目テラスについては、西半部において埴輪列がわずかに残存する程度である。テラスの南側から2段目斜面にかけては全く残存していなかった。2段目テラスと3段目斜面は、西側(第2次調査区)に限り残存していた。テラスの北側と2段目斜面の上部は、削平を受けていた。



第88図 前方面南側斜面の検出



第89図 前方面南側



第90図 前方部北側

2. 1段目斜面

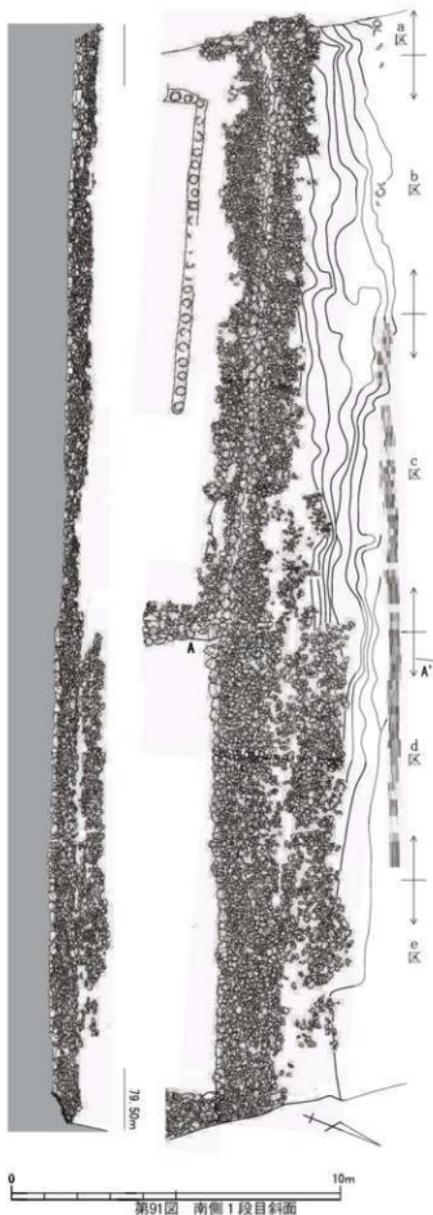
前方部南側と北側で葺石をともなって検出されている。なお、葺石については、先述したように（第2章第2節）、ある程度の保存を前提としているため、断割り等の調査ができなかった。このため、詳細な葺石の葺き方等について、調査では明らかにできなかった。

(1) 前方部南側（巻首図版10・11・15）

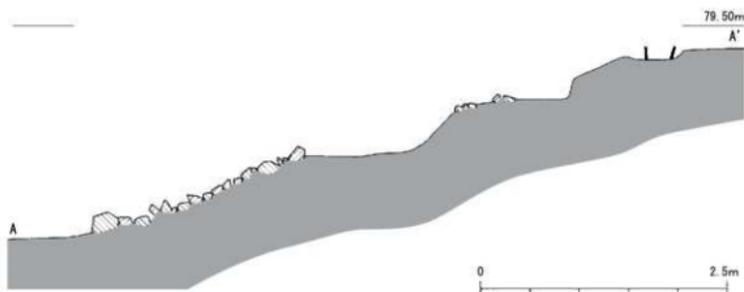
概要 第1次調査から第3次調査の、3次におよぶ調査において検出されている（第91図 写真図版9～13）。検出した長さは33mを測る。西端は、くびれ部からわずかに後円部側まで検出されている。一方、東側については、渡土堤との接合部まで検出されている。基底部と1段目テラスとの比高は、西端部で1.30m、中央部（A-A'）で2mを測る。

葺石 斜面全面には葺石が葺かれていたようであるが、1段目テラス肩部から裾部まで残存する箇所は認められず、斜面の下半を中心に残存していた（第91図）。葺石が残存しない箇所については、墳丘がはは露出した状態で検出されている。A-A'ラインにおける、基底石と1段目テラス南側肩部とを結ぶラインをから復元される1段目斜面の傾斜角は、18°である（第92図）。

葺石は、周濠から墳丘への傾斜変換点に基底石を直接置き、これを基礎に葺かれている。基底石設置のための掘り方等は認められない。基底石については、一部を除いて、西端から東端まで良好な状態で検出されている。この基底石のラインは、ほぼ直線的であるが、南造り出し北側斜面とセットとなり区画溝をなす箇所（b区・c区：第93図）と、南周濠に



第91図 南側1段目斜面



第92図 南側1段目斜面断面

面した箇所（d区・e区）の境で、わずかに変換点が認められる。底部の標高もわずかに後者の方が低くなっている。その標高は、変換点の西側（b区）で78.00m、変換点の東側（e区）で77.30mである。

基底石から70cm～80cm上側までの葺石は比較的良好に残存していたが、より上側に葺かれた葺石については、部分的な残存にとどまる。葺石が良好に検出された箇所（e区：B-B'）で計測した斜面の傾斜は、約30°である（第102図）。

以下、①後円部（a区：第93図）、②区画溝を構成する箇所（b区・c区：第93図）と、③南周濠に面した箇所（d区・e区：第96図）にわけて、詳しく報告していく。

a区（第94図 写真図版10：⑥） 基底石が、わずか1m検出されたに過ぎない。基底石5分である。また、斜面上方については、調査区外へ広がるため、全体的な特徴を明らかにすることはできない。

当区に直接続くb区の基底石が、石材を横長に設置しているのに対して、当区の基底石は縦長に設置されている。基底石の上に葺かれた石材については、顕著な差は認められない。少なくとも、a区からb区にかけては、連続して石が葺かれていることは明らかである。

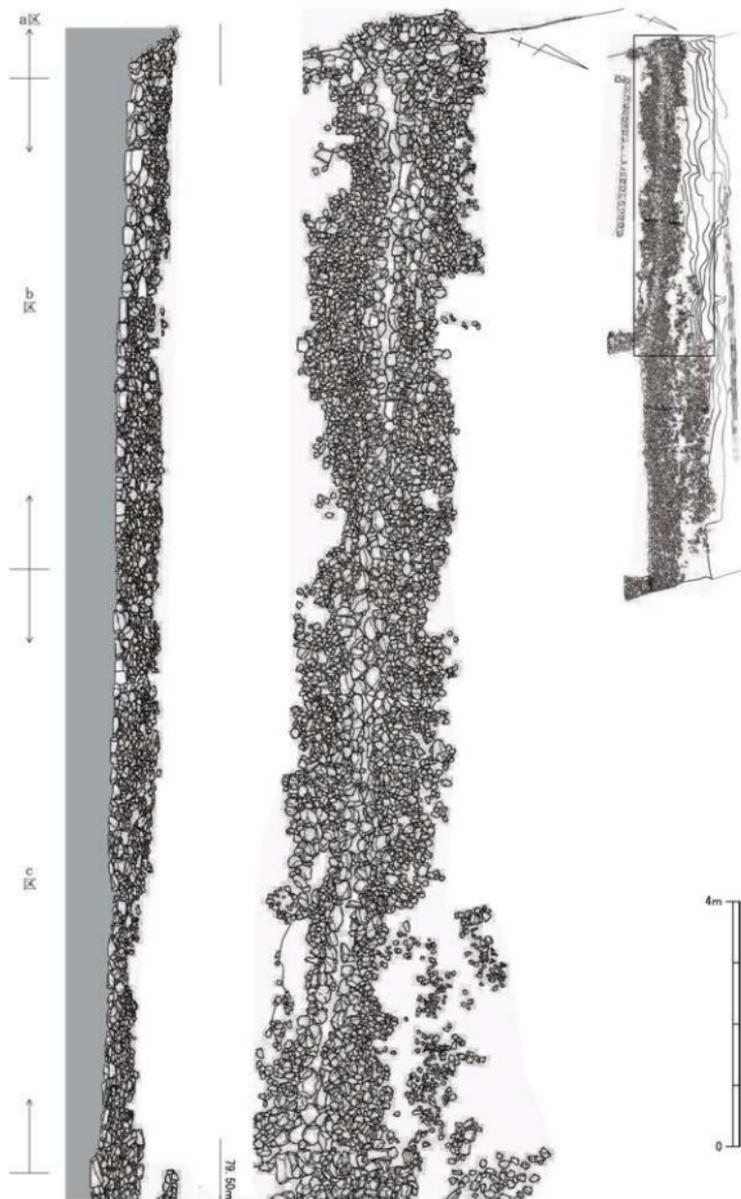
b区・c区（第94図・第95図 写真図版9：①～④） 区画溝を構成する北側斜面である。b区（第94図）が西半、c区（第95図）が東半にあたる。全体的に良好な状態で残存していたが、b区中央部については、昭和46年度の調査で掘削されたトレンチ（第17図）により、上側が一部崩れていた。また、c区中央部やや東側においても、一部で残りの状態が良くない箇所が認められた。

基底石の多くは、30cm～50cm大の石材を横長にして設置されている。部分的に20cm前後の石材が縦長に置かれている。また、その厚みは20cm未満であるが、多くの基底石は周濠側に対して明確な面を有していない。前面に造り出しが存在していたことに起因するものと考えられる。

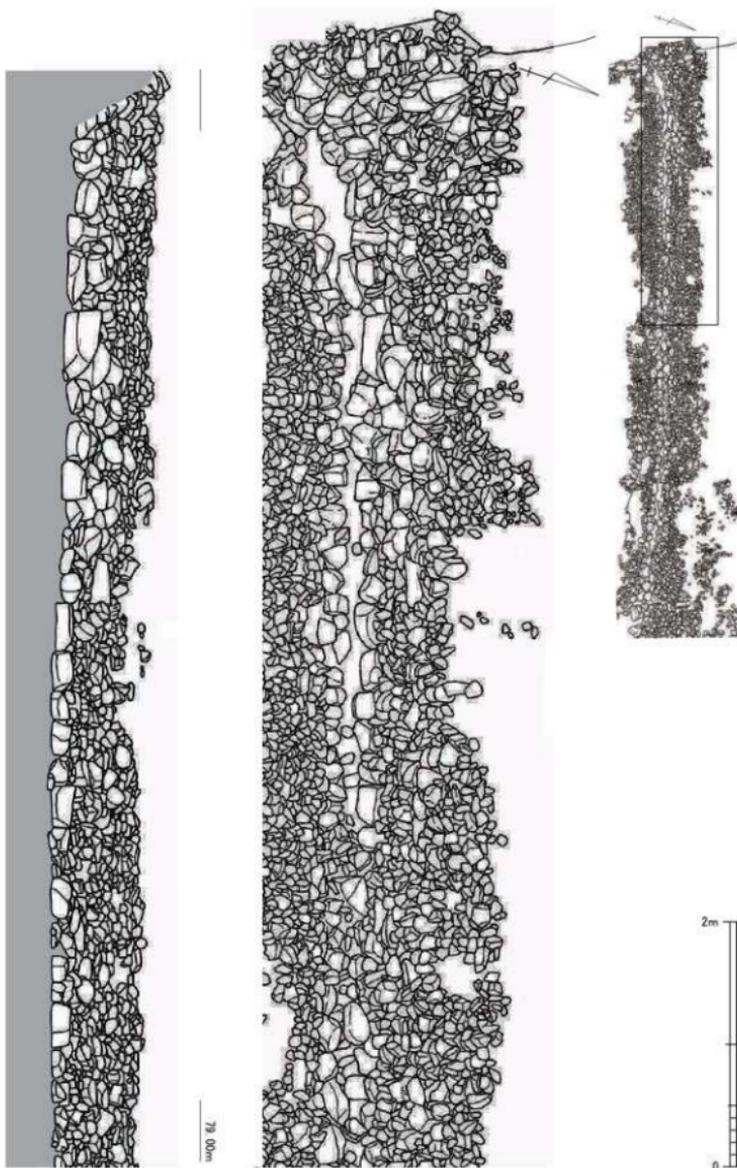
基底石下面の標高は、b区西端部で78.00m、c区東端部で77.60mと、東側ほど低くなる傾向が認められる。さらに、後述するc区東側のd区とは20cmの段差が認められる。この基底石のラインは、後述するd区と比較すると、直線的なラインをなさず、凹凸の目立つラインとなっている。

基底石を除く葺石については、10cm～15cm大の石材が多く使われていた。部分的に30cm大の石材も認められる。多くは、石材を縦長に、下側の石の半分以上を重ねるようにして積み上げられている。しかし、全体的に石材相互の凹凸が激しく、均一な面をなしていない。

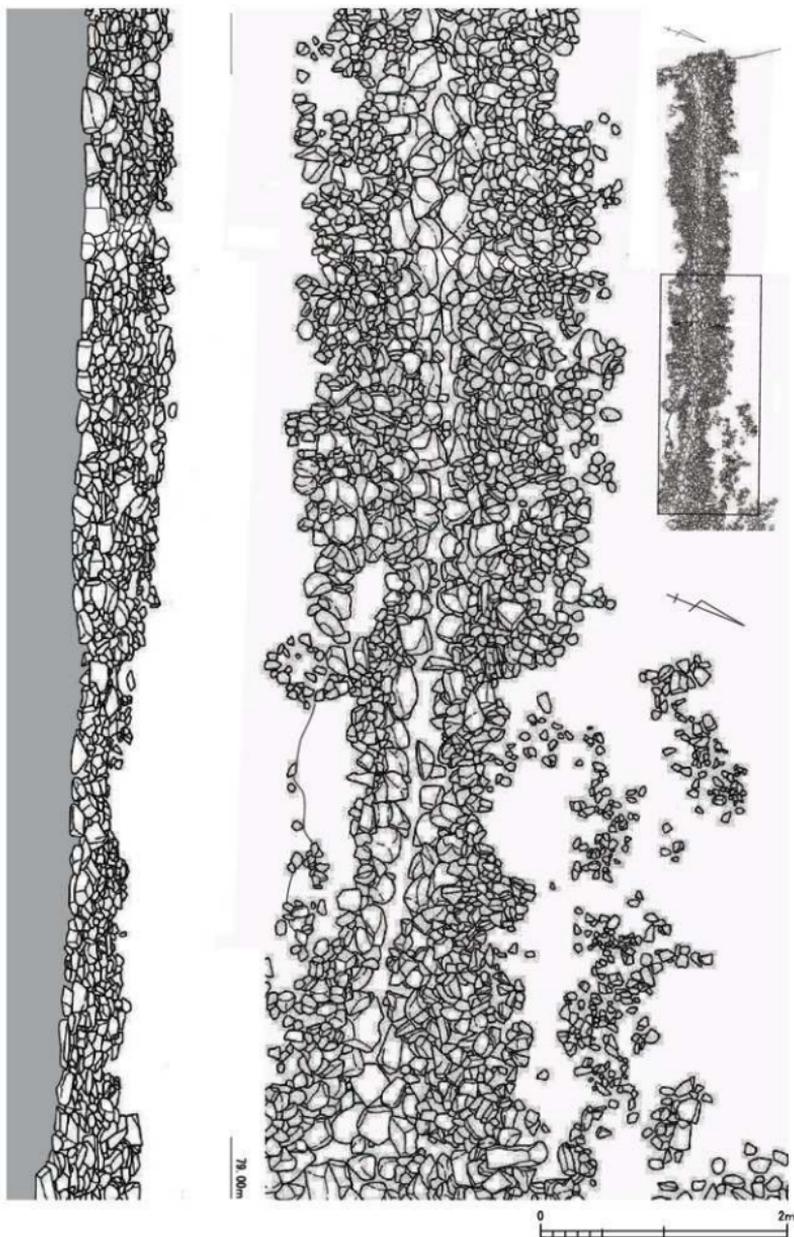
なお、c区東半は、1段目テラス付近の高さまで葺石を検出し、平面図（第95図）に掲載されているが、いずれも原位置が保たれてはいないものである。このため、立面図（第95図）からは除外している。



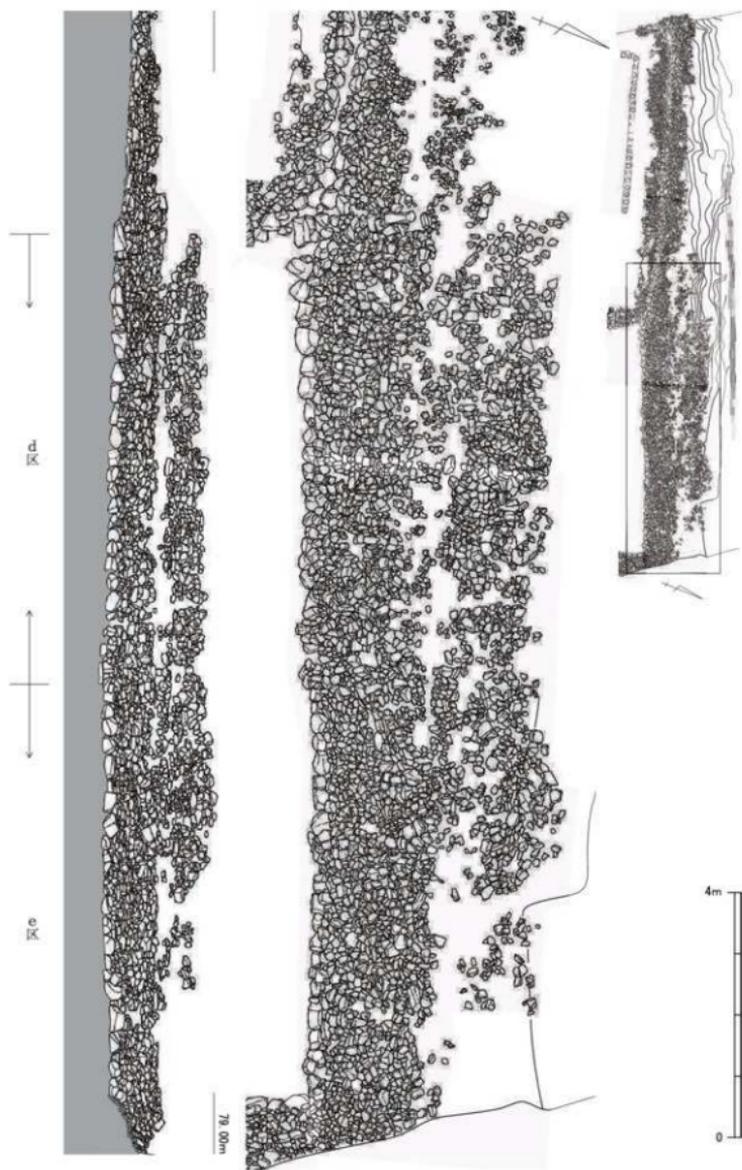
第93図 南側1段目斜面葬石 (a~c区)



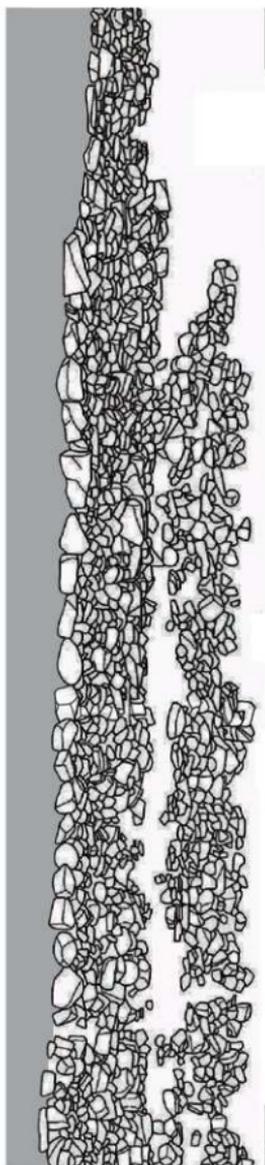
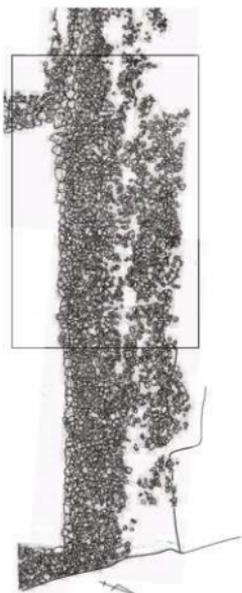
第94図 南側1段目斜面葺石(a区・b区)



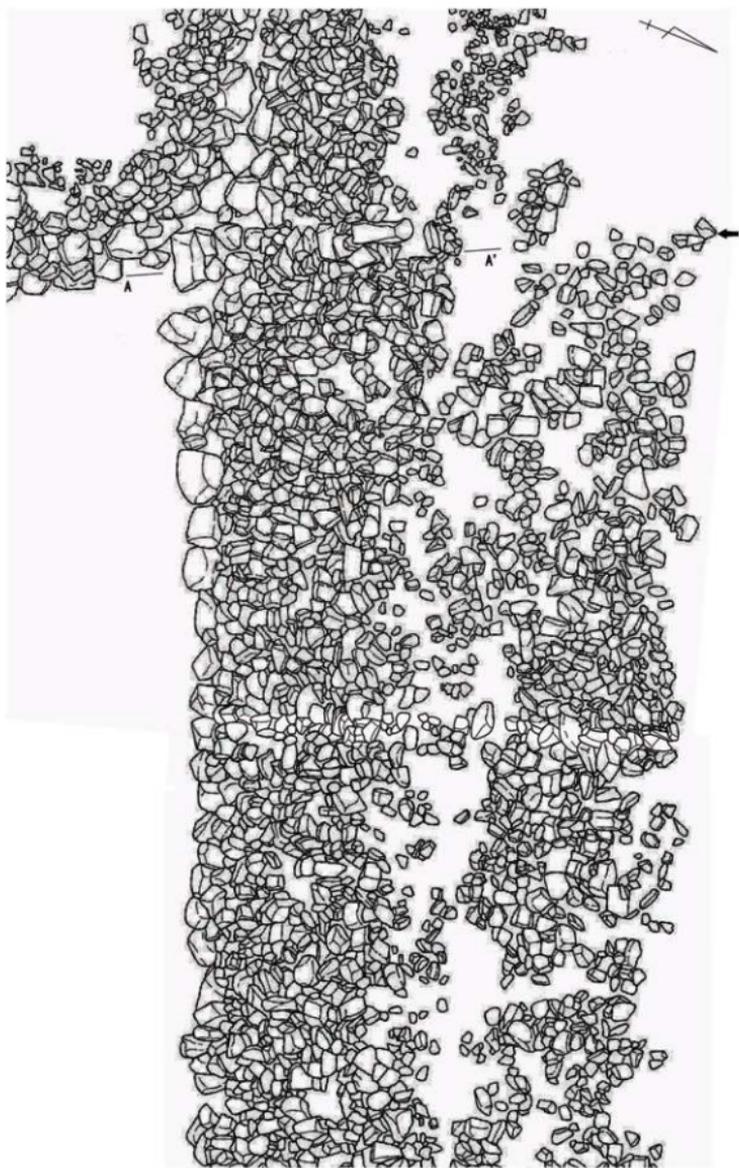
第95図 南側1段目斜面葺石(c区)



第96図 南側1段目斜面葺石（d区・e区）



第97図 南側1段目斜面葺石立面図（d区）



第98図 南側1段目斜面寶石平面図 (d区)

基底石・葺石ともに、石材は河原石と山石（角礫）が混用されている。また、目跡については確認できなかった。

d区・e区（第96図～第98図・第100図・第101図 写真図版11～13）南造り出しと南渡土堤に挟まれた地区の1段目斜面である。基底部で全長13.5mを測る。西側のe区から続く斜面で、斜面そのものは連続するものである。しかし、基底石の下面の標高は、d区西端部で77.40mと、e区に対して20cm低くなっている。この20cmの標高差に相当する箇所において、基底石のラインが南側へずれている。基底石は全体的に原位置が保たれていたが、d区とe区の境付近は、やや周濠側へ押し出された状況であった。このため、この付近に限り、基底石のラインに乱れが認められた。一部、基底石を欠く箇所も認められた。

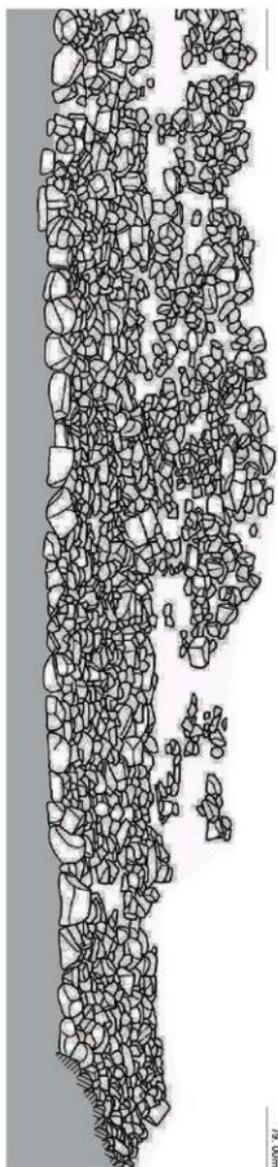
葺石の葺かれ方は、b区・c区と基本的に同じである。しかし、区画溝を境に積み方に変化が認められ、目跡が認められた（第98図矢印）。まず、基底石が45cm以下とやや小ぶりな傾向が認められ、石材の設置についても、横長ではなく縦長に置く傾向が目立つ。石材の厚さは10cm～20cmと、b区・c区と同規模であるが、面をもっている点が異なる。

また、e区において、基底部から80cmの高さまでは当初の状態が保たれて検出されている。しかし、これより上側は、全体的に原位置が保たれていない状態で検出されている。さらに、前者と後者の間には、斜面傾斜に変化が認められ、幅50cmの犬走り状をなしていた（第102図・B-B'ライン矢印 写真図版13：①）。この面の標高は78.10mである。

なお、南渡土堤との接合部については、南渡土堤においての項で報告する（本章第4節）。



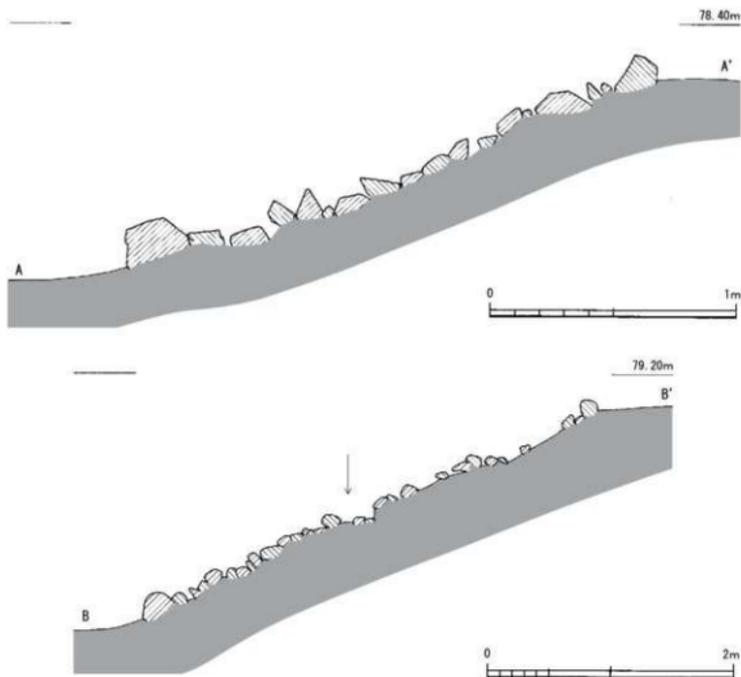
第99図 南側1段目斜面葺石の検出



第100図 南側斜面葺石立面図（e区）



第101図 南側1段目斜面墓石平面図(e区)



第102図 南側1段目斜面 葺石断面

(2) 前方部北側

概要 第1次調査から第3次調査の、3次におよぶ調査において検出されている(第103図 写真図版43・44・47・48)。ただし、斜面として良好な状態で検出できたのは、第1次調査と第3次調査で検出した、北造り出しと北渡土堤に挟まれた地区(f区・g区)に限られる(第104図)。また、後述するように、1段目テラスそのものも南側のように良好な状態では検出されていない。このため、斜面の規模等についても明確にすることは困難である。

この結果、1段目斜面そのものも、その上側(1段目テラス側)は葺石もなく、良好な状態では検出されていない(第103図)。このため、1段目テラス付近で検出された葺石については、原位置が保たれていないものと考えられる。

f区西側(第103図) 1段目テラスの一部が植輪列として残存していたが、そのテラスの北側肩部より北側は後世の削平を受け、残存していなかった。かろうじて、北造り出しと前方部の境をなす石敷き遺構により、裾部のラインを復元することが可能である。

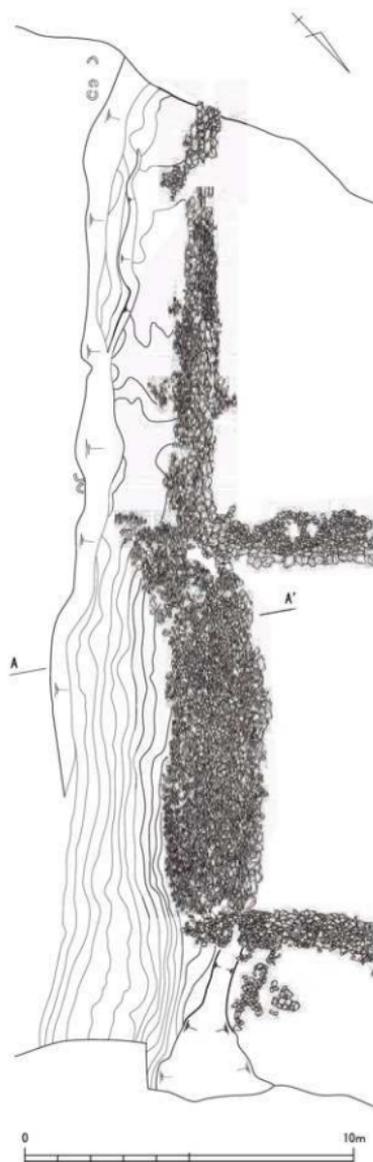
f区・g区 北造り出しと北渡土堤に挟まれた地区である。検出した長さは、基底ラインで10.65m、直線距離で10.50mである。また、基底部における北造り出しと北渡土堤の距離は、17.00mを測る。基

本的には良好な状態で遺存していたのであるが、f区とg区の境を中心に基底石が周濠側へずれており、押し出された状況である。このため、基底石のラインが直線ではなく、やや弧状をなしている(第103図)。このため、第104図の立面についても、f区とg区の境で屈曲させたラインで表現している。

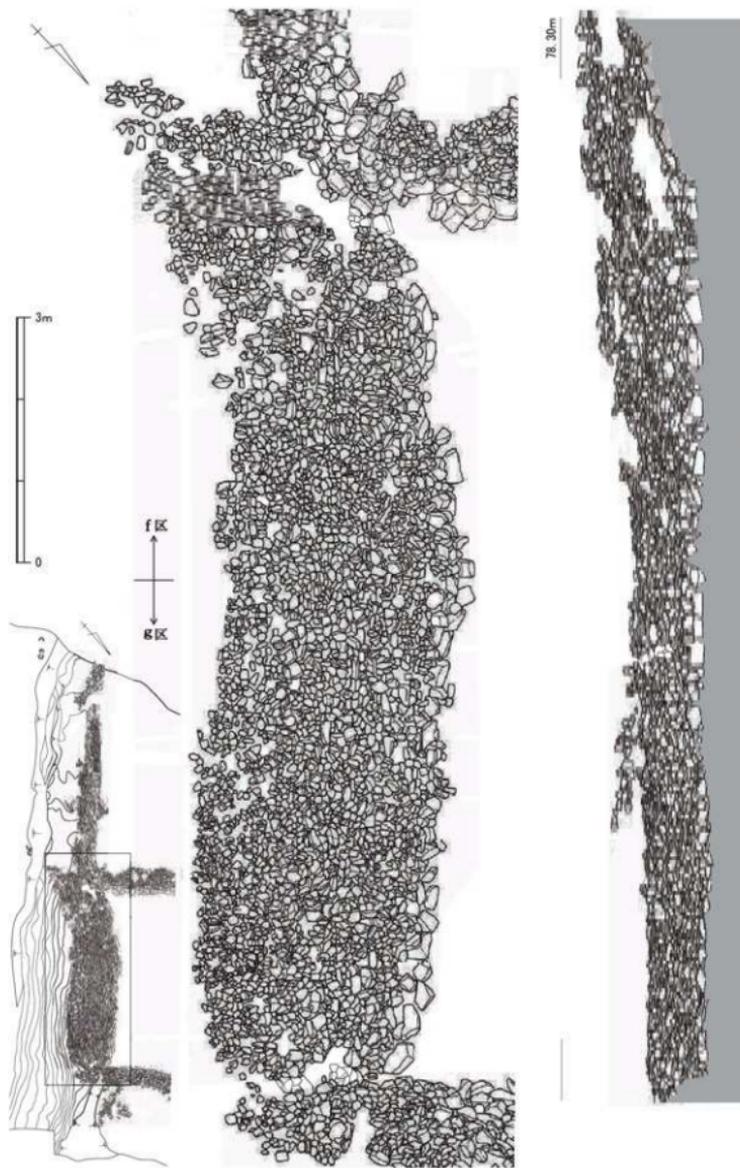
葺石は、周濠底から平均80cmの高さまで良好に残存していた。特にf区西端付近では、周濠底から1mまで残存していた(第105図)。ただし、上部に関しては葺石の空白部も目立ち、g区のように良好な状態ではない。f区(B-B'ライン)・g区(D-D'ライン)斜面の傾斜角は $35^{\circ} \cdot 25^{\circ}$ である(第107図・第109図)。

また、g区では、基底部から56cmの高さで、わずかに幅約80cmの小テラス状の平坦部が認められた(第109図D-D'ライン矢印 写真図版47:② 写真図版48:④)。f区(B-B'ライン・C-C'ライン)でも、基底部から50cm~55cmの高さで、幅約80cmのテラス状をなしていた(第107図・第109図)。この面の標高は、C-C'ラインで77.25mである。前方面南側で認められたのとはほぼ同じ状況である。ただし、前方面南側とは異なり、テラス状の平坦部においても葺石がほぼ原位置のまま検出されている。当該箇所では、葺石上面が揃えられ、明確な平坦面をなしている。しかし、このテラス状の平坦部より上側については、葺石そのものが当初の状態が保たれているとは言い難い状況である。テラス状をなす平坦部より上側斜面の傾斜は 20° と明らかに緩やかとなっている(第107図・第109図)。

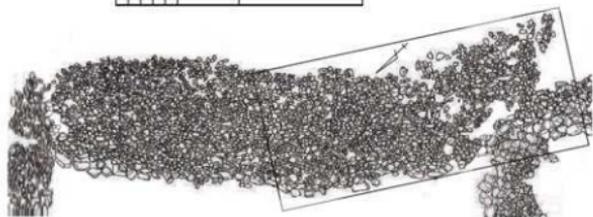
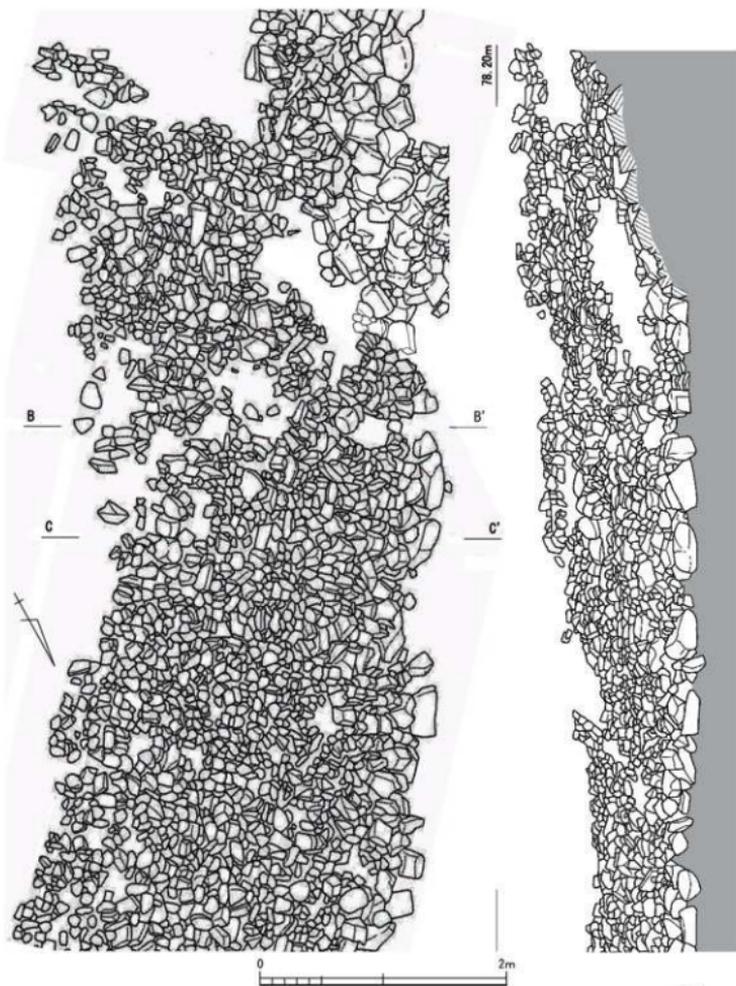
基底石は40cm以下の角礫が使用されている。40cm大の石は、横長に据え置かれている。石材の厚さは10cm大が多く、20cmを超えるものは認められない。しかし、全体的に周濠側に面をもつよう置かれている。基底石下面の標高は、f区西端で76.65m、g区東端で76.40mと、東側へわずかに傾斜が認められる。



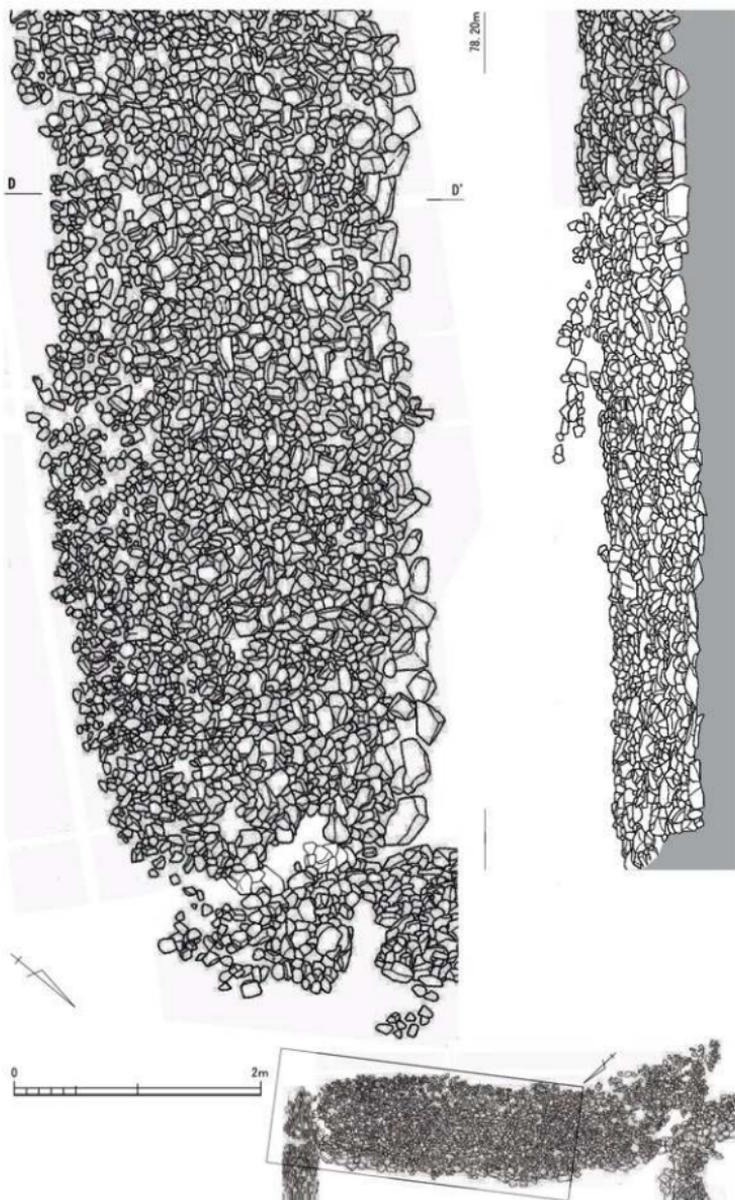
第103図 北側1段目斜面



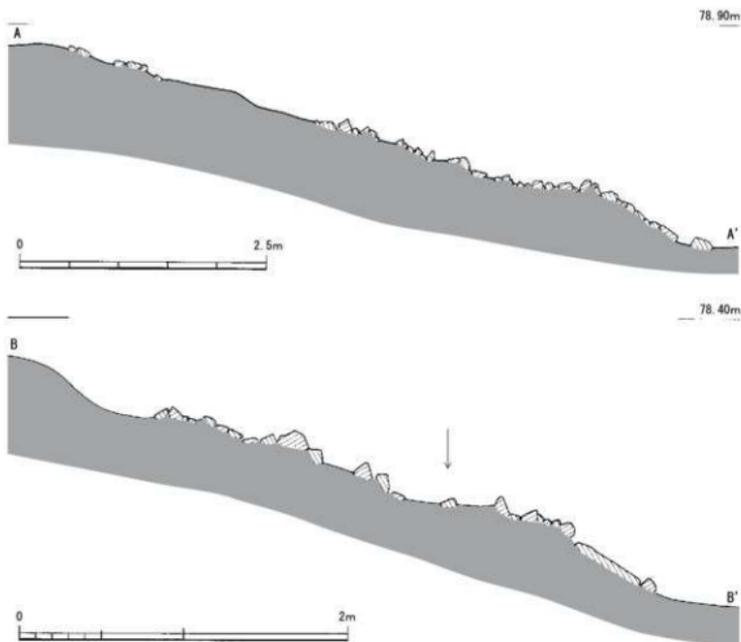
第104図 北側1段目斜面葬石（f区・g区）



第105図 北側1段目斜面築石（1区）



第106図 北側1段目斜面礫石 (g区)



第107図 北側1段目斜面横断面図(1)

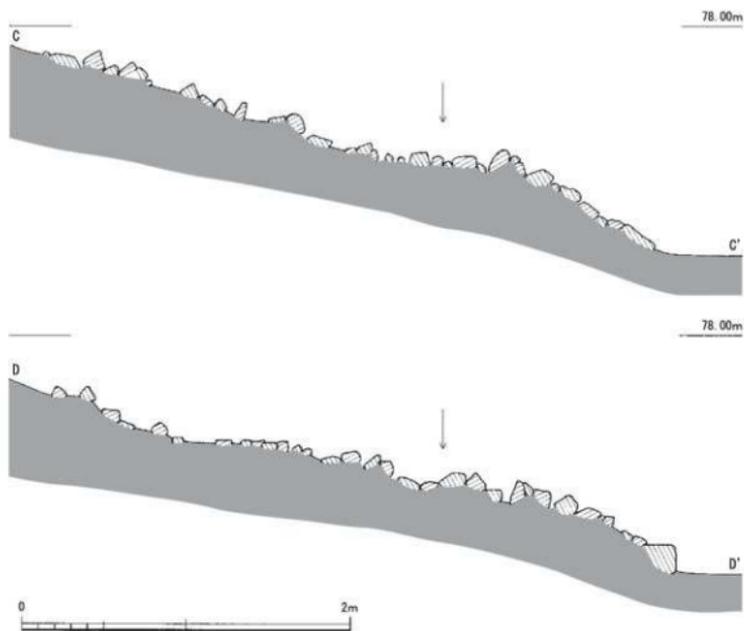
斜面に葺かれた石は、30cm以下の石材が用いられ、15cmから20cm大の石材が中心である。基底石の上には、基底石の一部を覆うように積み重ねられている(第109図)。全体的にf区のほうが、当初の状態が保たれている。このなかで、f区西端部で認められた45cm大の石材が目目される。断ち割り調査ができなかったため確認できなかったが、板材の可能性が考えられる。多くが20cm大のなかで、際だって大型の石材で、48cm×28cmの規模を測る。周濠側に面をもつように置かれていた(第107図：B-B'ライン 写真図版44：④)。横穴式石室奥壁の鏡石を想定させる状況である。

使用された石材も、河原石が中心で、山石(角礫)はわずかである(第6章第7節)。

g区東側 斜面そのものはある程度遺存していたが、葺石の原位置は保たれていなかった(第103図)。また、北渡土堤との境は、後世の擾乱を受け溝状をなし、明確ではない。



108図 北側1段目斜面葺石の検出



第109図 北側1段目斜面横断面(2)

3. 1 段目テラス

前方面の南側と北側の両側で検出されている(第111図・第125図)。ただし、南側については埴輪列を伴い比較的良好な状態で検出されたのに対して、北側についてはその一部が検出されたにとどまる。

(1) 前方面南側

概要 北側は2段目葺石により、南側は肩部の埴輪列により画されている(第111図 写真図版15~30)。西側は調査区境(第2次調査西壁)まで検出されているが、東側については、後世の攪乱を受け、途中で途切れている。

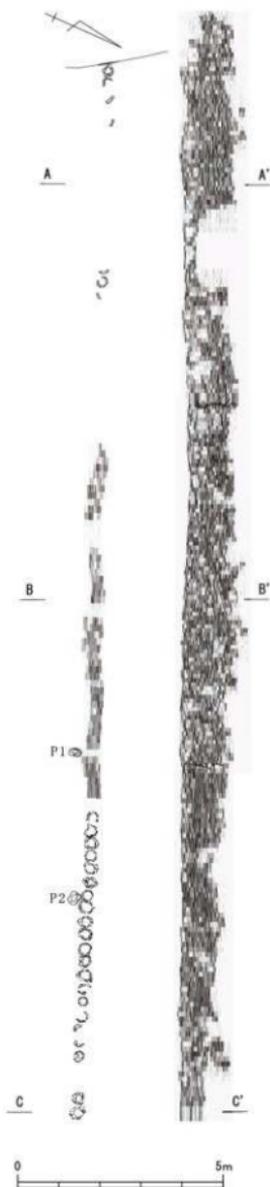
検出した長さとは、25.70mである。2段目斜面葺石基底ラインと埴輪列北側との間は、西端部(A区西端)で1.70m、中央部(B区)で1.90m、東端部(C区東端)で2.30mと、前部部へ向かって広がる傾向にある(第111図)。またテラスの標高は、西端部で79.30m、中央部で79.31m、東端部で79.33mと、ほぼ一定している。

テラスの造成 1段目テラスにおいて、2箇所(Aライン・Bライン)に幅1mのトレンチを設定し(第114図、その造成過程を断面観察した(写真図版19)。その結果、2ラインとも、基盤層を削平した後にテラスが造成されていることが明らかとなった。以下、最も良好に断面観察ができたBラインを中心に報告する(写真図版19:②)。

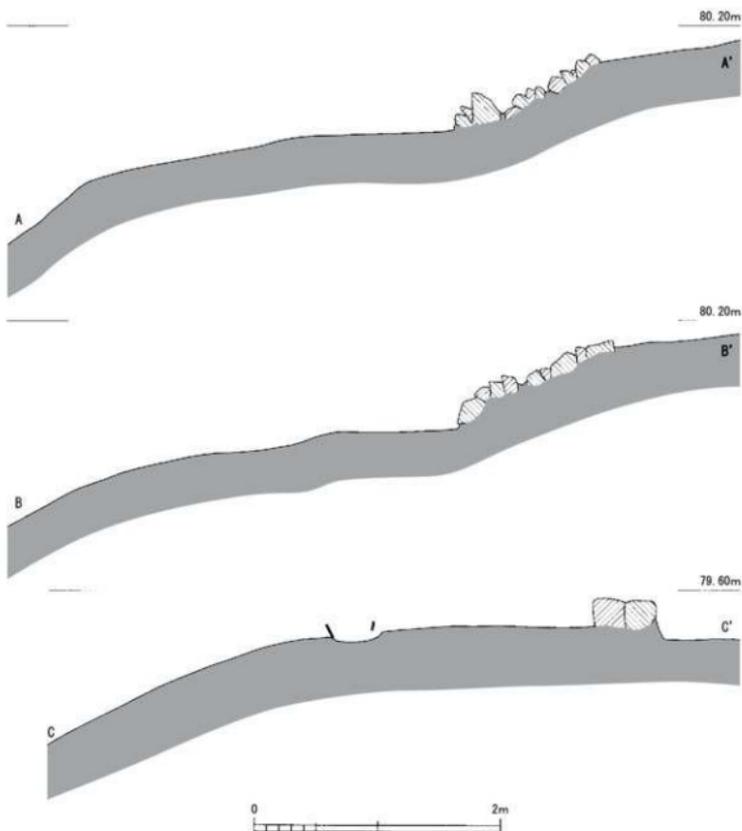
まず、①基盤層の削平、②テラス基盤の造成、③テラス~1段目斜面の造成、④2段目斜面の構築、と大きく4つの工程を確認することができた。



第110図 南側1段目テラスの検出



第111図 南側1段目テラス

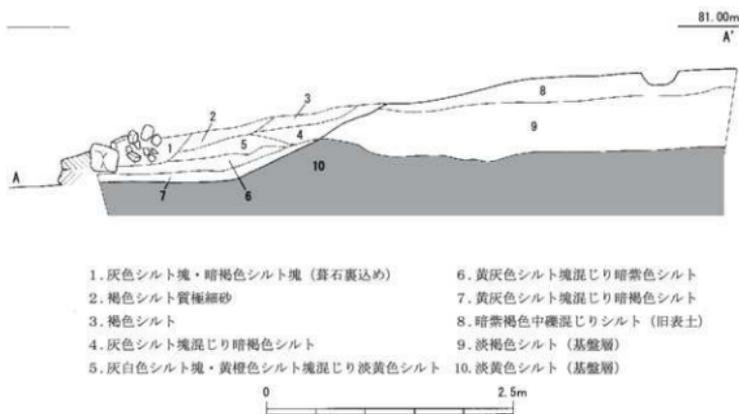


第112図 南側1段目テラス 横断面

①の工程においては、基盤層（30層・31層）が逆台形状に削平されている。テラスから2段目斜面に相当する箇所が平坦になるよう、削平が行われている（31層上面）。その削平の深度は1.20mに及ぶ。合わせて、1段目斜面に相当する箇所についてもさらに70cm掘り下げ、平坦化させている（29層下面）。また、墳丘中心部側の削平も、一定の斜面になるように削平が行われている。

②の工程においては、①で削平された箇所への盛土である。まず、1段目斜面相当箇所の盛土が行われている（25層～29層）。25層～29層を埋めた段階で、31層上面とほぼ同じレベルとなっている。25層～29層については、シルトを中心とした粘土質の層（25層・27層）と極細砂を中心とした砂質の層（26層・28層・29層）が交互に盛られており、版築の技法が認められる。

次に、①で削平された面に沿うように17層～24層が埋められている。17層～24層については、基本的には極細砂を中心とした層（20層・23層）とシルトを中心とした粘土質の層（18層・21層・22層）からな



第113図 南側1段目テラス 断割り断面(1)

り、1段目斜面相当箇所同様、版築の技法が認められる。特に14層～23層の層境がかなり明確であることから、各層を埋めた段階で締固めが行われたものと考えられる。また、13層・14層・16層については、旧表土層を埋めた層と考えられる。最後に、12層が一気に埋められている。多くの粘土塊からなる層で、明らかに締固められた層である。

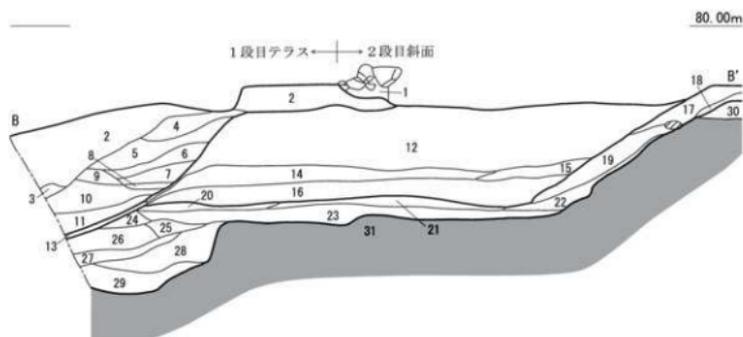
次に③の工程であるが、12層を整地後、一旦1段目斜面相当箇所が大きく削平されている（13層上面ライン）。その後、2層～11層が埋められている。この埋戻しにあたって、大きく3段階に分かれている。

まず第1段階は、9層～11層の埋戻しである。まず極細砂を基本とする10層・11層が埋められ、最後に粘土塊からなる9層で締固められている。第2段階が4層～8層の埋戻しである。極細砂を基調とする6層～8層を埋めた後、シルトを基調とした4層・5層で締固められている。最後の第3段階が2層・3層の盛土である。2層については、極細砂を基調とするが、粘性のある極細砂塊を多く含み、当層自体が締固められた層となっている。そして2層上面が、1段目テラスから1段目斜面にかけての面と考えられる。

最後の④の工程であるが、2段目斜面が構築されていく。この過程については、2段目斜面自体の残存状況が良好ではなかったため、十分な観察はできなかった。

以上、②・③の工程においては幾段階にもわたり埋戻しが行われているが、所要所で締固めが行われている様子が理解できる。

Aライン（第113図）についても、基本的な工程はBラインと同じである。まず、旧表土層の8層と基盤層である9層・10層を掘削し、2段目斜面相当箇所が平坦になるよう削平されている。その後、2層～7層が埋められる。7層は、旧表土層と考えられる。他の2層～6層については、シルトを基調とした層で、かなり締固められている。最後に、2段目斜面が構築されている（写真図版19：①）。



1. 褐灰色シルト混じり極細砂 (葦石裏込め)
2. 灰色細砂塊・極細砂塊混じり浅黄橙色極細砂
3. 浅黄橙色極細砂混じり黒褐色シルト
4. 黄橙色極細砂・緑灰色極細砂・黒褐色シルト
5. 黄橙色極細砂混じり黒褐色シルト
6. 黄橙色シルト混じり黄灰色極細砂
7. 灰白色極細砂塊・黒褐色シルト塊混じり黄橙色極細砂
8. 黄橙色シルト塊混じりにぶい黄橙色極細砂
9. 灰白色シルト塊・オリーブ灰色極細砂
10. 黄橙色極細砂塊・灰色極細砂塊混じり灰黄褐色極細砂
11. 黄橙色極細砂塊・灰色極細砂塊混じり灰黄褐色極細砂
12. にぶい橙色極細砂塊・灰白色極細砂塊
13. 灰色極細砂
14. 黒色シルト塊・黄灰色シルト塊混じり灰色極細砂
15. 灰白色砂礫塊混じり褐灰色極細砂
16. 褐色極細砂塊混じりにぶい黄橙色シルト・褐灰色シルト
17. 黄橙色細砂混じり褐灰色細砂
18. 黄橙色極細砂・橙色シルト・灰褐色細砂混じり黒褐色シルト
19. 黄橙色細砂塊・黒色シルト塊混じり褐灰色細砂
20. 黄橙色シルト塊混じり灰色極細砂
21. 褐灰色極細砂塊・黄橙色シルト塊混じり黄橙色シルト
22. 黄橙色シルト塊混じり黒色シルト
23. 橙色極細砂塊・灰白色極細砂塊混じり灰色極細砂
24. にぶい褐色極細砂混じりシルト
25. にぶい褐色極細砂混じりシルト
26. 褐灰色シルト混じり極細砂
27. 褐色極細砂混じりシルト
28. 褐灰色シルト混じり極細砂
29. 灰褐色中礫混じり極細砂
30. 赤黒色極細砂混じりシルト (旧表土)
31. 黄橙色シルト混じり極細砂～細砂 (基盤層)



第114図 南側1段目テラス 断割り断面(2)

埴輪列 26.80mにわたり検出されている。埴輪列そのものの残存状況は一様ではない。最も良好に残存していたものは、底部が正立した状態での出土である。第1次調査で検出した箇所（F群・G群）である。この地区でも、埴輪は1段目突帯までの残存である。特に第1次調査で検出された埴輪列の東側が、このような状態で検出されている。上記の状態で検出された箇所については、掘り方まで残存していた。掘り方は、基本的には溝状をなし、そのなかに埴輪が立て並べられていた。

一方、第2次調査を中心とした西側（後円部側）については、テラスの肩部が崩落しており、この影響で埴輪列自体も崩落しかかったもの、崩落したものが多く認められた。もちろん、この箇所では掘り方まで残存していた箇所は認められなかった。

以上の状況で、8群（西からA群～H群）、計51基（H1～H53・H30は報告済・H50とH51は埴輪は残存せず）について、現位置を確認することができた（写真図版20～30）。以下、単位ごとに見ていく。なお、埴輪ごとに「H」を頭に付けた番号を、西側から順番に付けている。

A 群（第115図 写真図版22：④） H1～H6の6本からなる。ほぼ原位置が保たれているものと考えられる一群である。掘り方自体は残存していないものの、底部が押しつぶされた状態で列状に並んでいる。円筒埴輪を基本とし、H4が朝顔形埴輪で、H2が朝顔形埴輪もしくは丹後-因幡型円筒埴輪と復元される（第7章第7節）。

B 群（第115図） A群東側の一団である。埴輪片が散乱した状態で、原位置を復元できる個体は認められない。A群の状況から、9本はあったものと推定される。

C 群（第116図 写真図版22：②） B群東側の一団である。本来あるべき溝状の掘り方は残存していなかった。H7～H9については、底部が明らかで、墳丘面に接していることから、ほぼ原位置が保たれているものと考えられる。H10とH11については、その出土状態から、ほぼ原位置に近い位置において出土しているものと判断される。H11の東側については、散乱した状態で、原位置を復元することは困難である。このなかで、H9が朝顔形埴輪と復元されている（第7章第7節）。

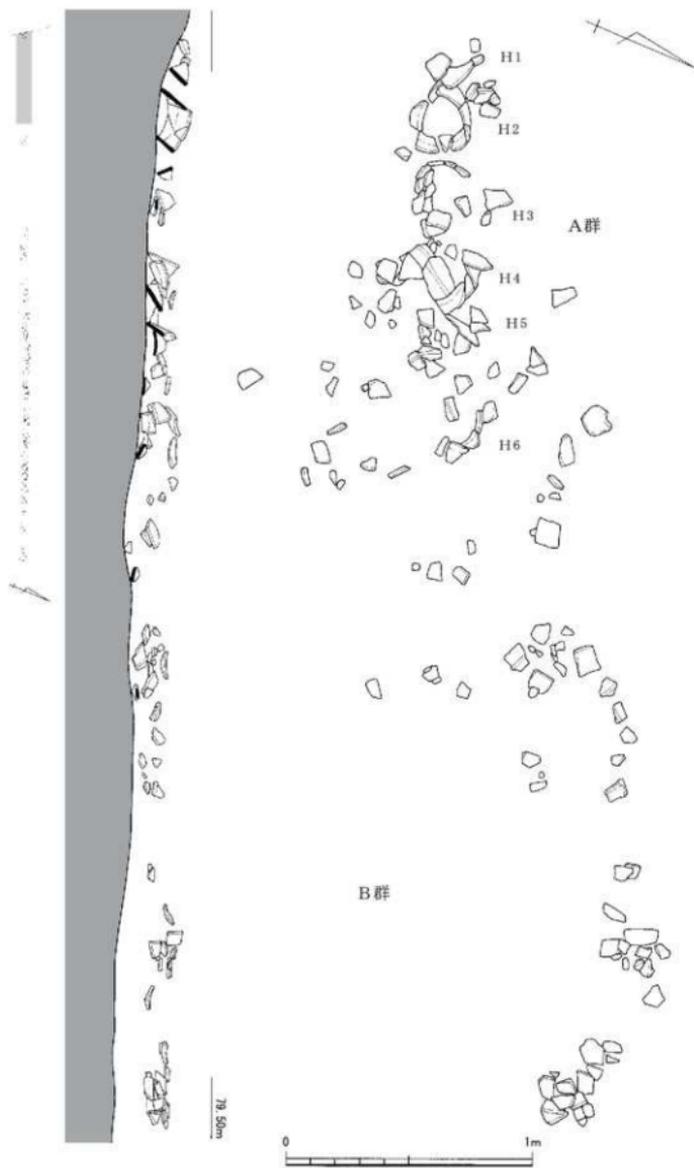
D 群（第117図） C群東側の一団である。全体的に埴輪片が散乱した状態で検出されている。このなかで、H12～H15の4本については、ほぼ原位置が保たれているものと考えられる。ただし、掘り方そのものは残存しておらず、かろうじて原位置が保たれている状況である。その西側については、その出土状況から、原位置を特定できるものは認められない。

E 群（第118図 写真図版22：③） D群東側の一団である。西半のH16～H18の3本については、ほぼ原位置が保たれているものと考えられる。ただし、D群同様、掘り方自体は残存せず、かろうじて原位置が保たれている状態である。東半については、埴輪片が散乱した状態で、原位置を復元することは困難である。約3本分に相当するものと考えられる。

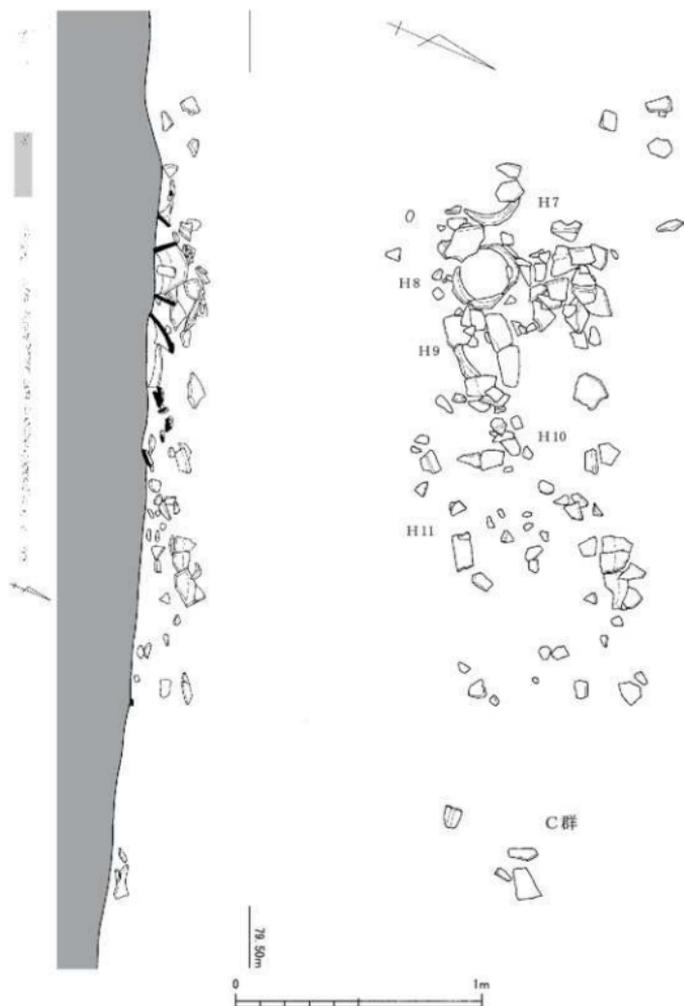
F 群（第120図 写真図版23～25） E群東側の一団である。H19～H29の11本の埴輪からなる。当群は、底部を中心に残存し、基本的に原位置が保たれている。このなかで、H20が朝顔形埴輪と復元されている（第7章第7節）。ただし、H27～H29については、やや南側へ傾いた状態での出土である。唯一、H26に限り埴輪1本分南側に飛び出した位置で出土している。当該箇所は、柱穴状をなし（P1：

第4表 F群埴輪間規模

	間隔（埴輪間） (cm)	間隔（芯々間） (cm)
H19	6	30
H20	-	35
H21	6	32
H22	6	25
H23	10	38
H24	6	30
H25	-	-
H26	-	-
H27	5	35
H28	4	30
H29	-	-
平均値	6.1	31.8



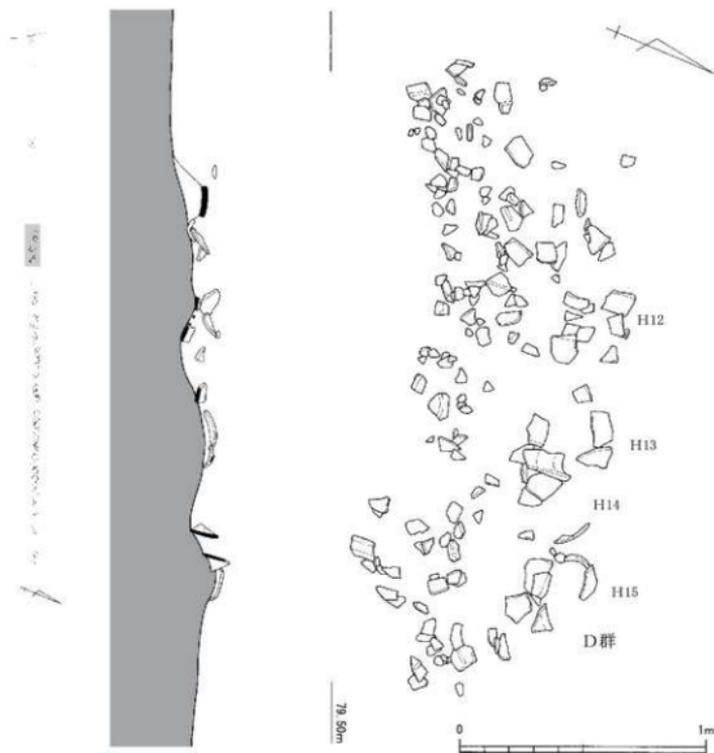
第115図 南側1段目テラス 埴輪列 (A群・B群)



第116図 南側1段目テラス 埴輪列(C群)

第123図・第124図)、この中から埴輪片(49)が出土している。この穴に立てられていたかについては、調査では明らかにできなかった。破片が放り込まれた状態での出土ではあるが、柱穴の径が30cmを測りと、埴輪の大きさから埴輪の樹立は困難と考えられる。

樹立された埴輪は、相互の間隔が狭く、平均で約6.10cmである。芯々間の距離は平均で31cmである(第4表)。



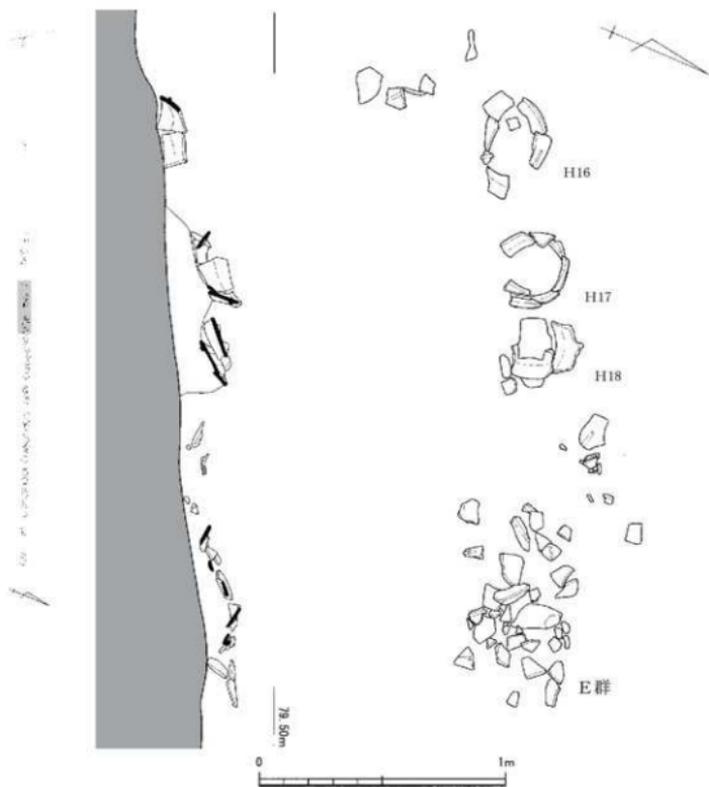
第117図 南側1段目テラス 埴輪列 (D群)

また、A群～E群とは異なり、当群西端から掘り方が残存していた。掘り方は、溝状をなし、この中に埴輪が並べられていた。掘り方の幅は45cm～70cmと一定していないが、北側の掘り方のラインのみ直線状をなしている。H19・H20とH25～H27の2箇所において、掘り方のラインが南側へ大きく張り出している。検出面からの深さは30cmである。溝底部の深さは一定しておらず、埴輪が底部に直接樹立されているものは認められなかった。溝内に整地後、樹立されている（写真図版25：③）。

G群（第121図 写真図版26～30）F群の東側の一群である。H31～H50の20本からなり、東側のH群とはH51の1本分を隔てている。ただし、H50については、埴輪そのものは残存せず、掘り方のみが残存していた。また、

第5表 G群埴輪間規模

	間隔 (埴輪間) (cm)	間隔 (芯々間) (cm)
H31	5	30
H32	3	30
H33	3	30
H34	6	30
H35	7	35
H36	5	32
H37	2	30
H38	10	38
H39	6	30
H40	8	35
H41	2	32
H42	6	34
H43	10	36
H44	7	30
H45	12	38
H46	10	38
H47	—	25
H48	10	35
H49	—	—
H50	—	—
平均値	6.6	32.7



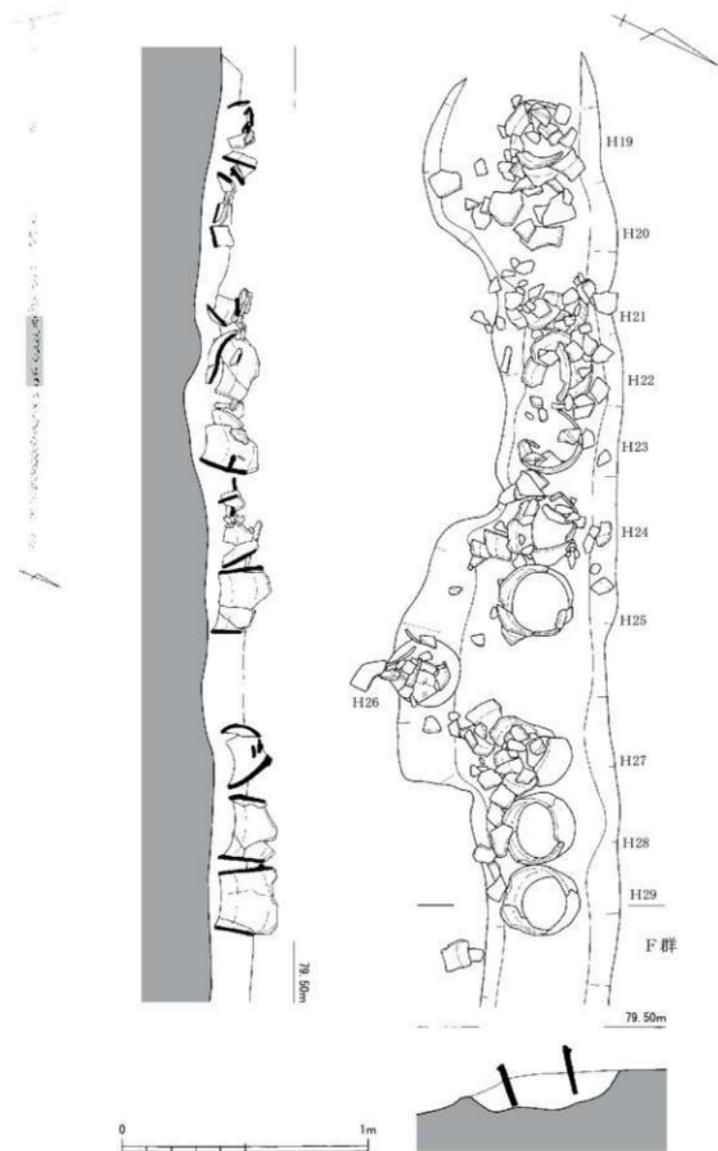
第118図 南側1段目テラス 埴輪列 (E群)

西側のF群との境は、H30の1本分を隔てている。なお、H30については、昭和46年度の調査において検出され、調査後に取り上げられたものである。すでに、『城の山・池田古墳』において掲載されている(同報告 第51図:14)。

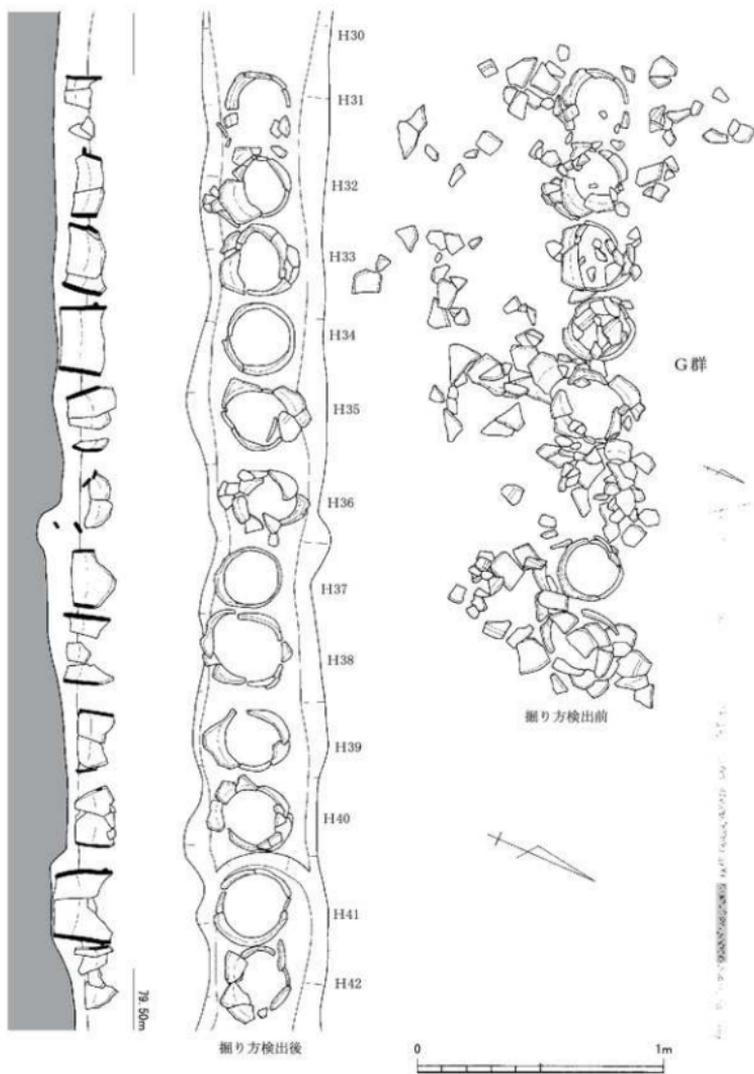
当群においても、溝状をなす掘り方が残存していた。全長6.40mを測る。幅についてはほぼ一定であるが、埴輪樹立箇所については、円筒埴輪と相似形に張り出していた。このため、平面形は団子状をなしている。特に、掘り方南側のラインにおいて顕著である。最大幅58cmを測り、埴輪間における幅は35cmである。掘り方底部のレベルはほぼ一定しており、平均的な検出面からの深さは5cm～8cmを測る。ただし、H41の部分については、埴輪の底部径に合わせて一段深く掘られ(第119図)、検出面からの深さは15cm



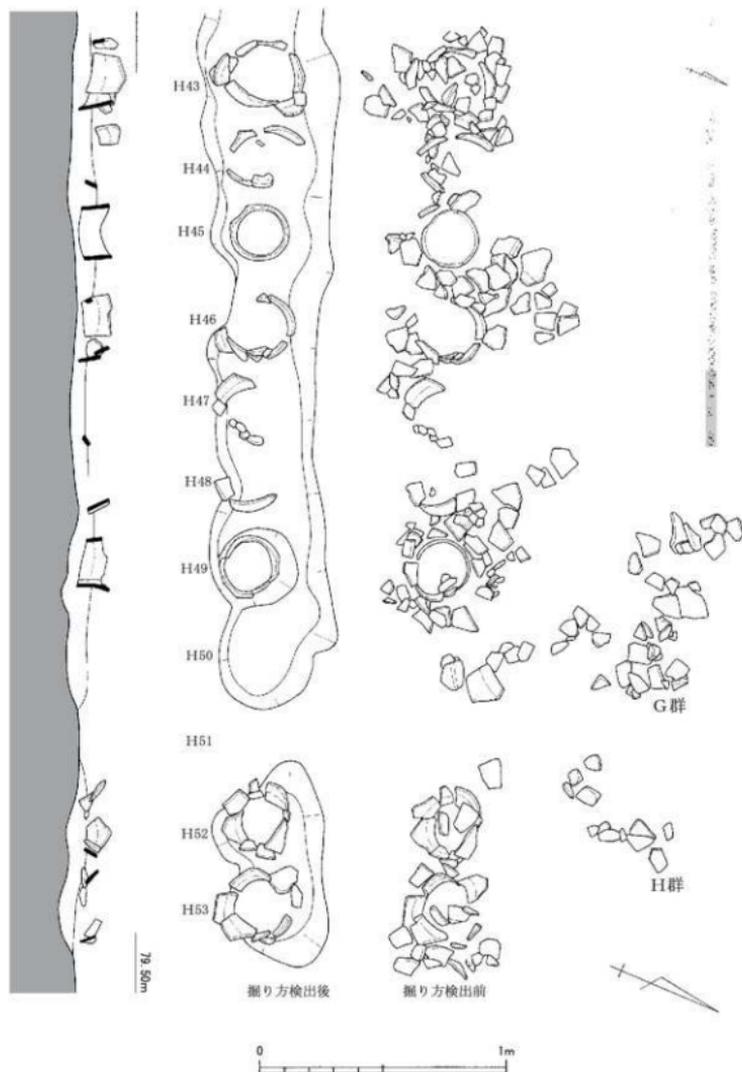
第119図 H41掘り方底部



第120図 南側1段目テラス 埴輪列 (F群)



第121図 南側1段目テラス 埴輪列 (G群)



第122図 南側1段目テラス 埴輪列 (G群・H群)

を測る。

樹立された埴輪は、相互の間隔が狭く、平均で6.60cmである。また、芯々間の距離は平均で32cm強とF群より狭くなっている（第5表）。

なお、H39～H42の掘り方検出前の埴輪出土状況については、十分調査を行うことができなかった。このため、当該箇所出土状況については図化ができなかった。

H 群（第122図）G群東側の一群である。H52・H53の2本からなり、G群とはH51の1本分を隔てて存在する。底部を中心に残存する。当群より東側については、攪乱を受け埴輪列は未検出である。

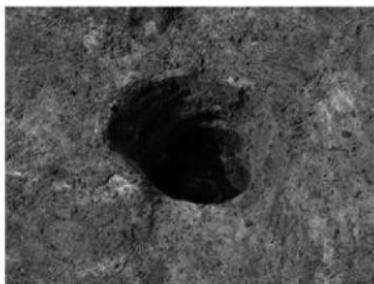
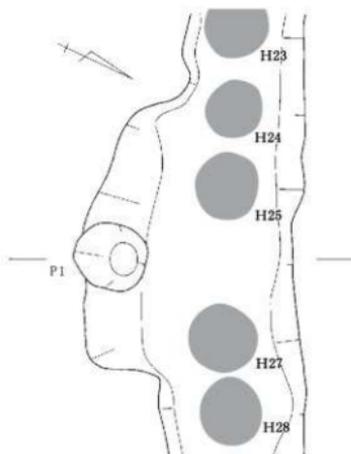
当群の埴輪は掘り方が残存していた。H52とH53の2本分に限られた掘り方で、平面形が長楕円形を基本とするが、南側は埴輪樹立箇所のみ張り出している。その規模は、長軸方向で84cmを測り、その直交方向は最大で45cmである。最深部における検出面からの深さは13cmである。その出土状況から判断して、埴輪は掘り方内底部に直接樹立されておらず、整地後に置かれたものと考えられる。

柱 穴 埴輪列の南側で2穴検出している（第111図）。H25とH27の中間南側（P1）とH37とH38の中間南側（P2）の、それぞれ埴輪列から10cm離れた位置にあたる。2穴とも、埴輪列から10cmと、同じ位置関係において検出されている。P1とP2の間の距離は、3.70mである。

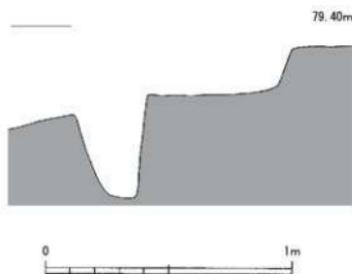
P1は、H26の埴輪を取り上げた際に明らかとなったもので（第123図・第124図）、柱穴内に埴輪が落ち込んだ状態で検出されている（第120図 写真図版24：③）。さらに、その南東側にも埴輪片が集中して出土している（h6：第245図）。P1から出土した埴輪については、その出土状況から判断して、H27が倒れ込んだものと考えられる。

また、P1付近を中心とした埴輪列掘り方が、P1を南限として広がっている（第124図）。当初からP1が存在した可能性が高いものと考えられる。

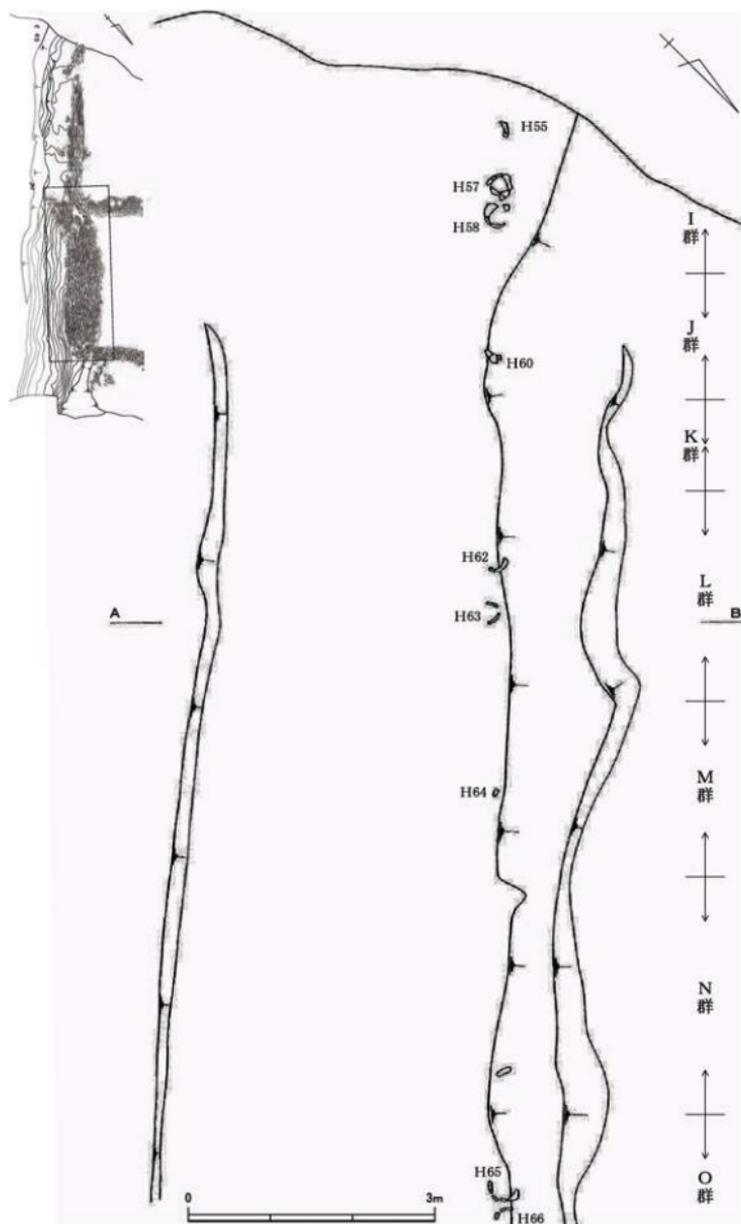
検出面におけるP1の平面形は、楕円形傾向にあ



第123図 P1



第124図 P1平面・断面図



第125図 北側1段目テラス

るが、底部はほぼ円形をなす(第123図・第124図)。検出面における規模は、30cm×27cmを測り、北側検出面からの深さは42cmである(第124図)。なお、柱穴内には柱材等は遺存していなかった。

P2は、P1の東側に位置する(第111図)。P1同様、検出面における規模は楕円形傾向にあるが、底部付近はほぼ円形をなしている(第126図)。検出面における規模は、30cm×25cmを測り、検出面からの深さは11cmである。P1のような埴輪の出土は認められなかった。



第126図 P2

(2) 前南部北側

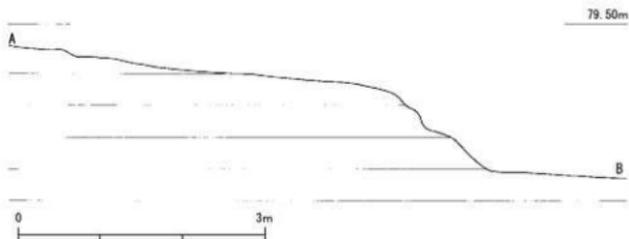
概要 南側とは対照的に、残存状況は良好ではない(写真図版50)。先述したように(第4章第1節)、前南部北側の大半は後世の擾乱・削平を受けている。このため、2段目斜面自体が全く残存していなかった。結果として、2段目斜面の葺石も全く残存していない。わずかに、テラスの痕跡としては、埴輪列の一部が残存していた(第125図)。検出できたのは、前南部西側の第2次調査の範囲に限られる。埴輪列に関しては、後述するように掘り方が残存せず、南側の埴輪列よりかなり散乱した状態で検出されたため、現位置をどの程度まで留めているかについては疑問である。しかし、全体的に直線状をなすことから、ほぼ現位置に近いものと考えられる。

このように埴輪列が検出されたことから、わずかにテラスの平面的位置をとらえることが可能となった。ただし、埴輪列のすぐ北側は、後世の削平を受け、1段目斜面は残存していない。また、南側に関しても平坦であるが、その幅が約3.5mと、前南部南側で確認したテラスの幅より明らかに広がっている。このため、南側の大半は後世の削平により平坦となったものと考えられる。よって、前南部北側1段目テラスの規模を明らかにすることは困難である。

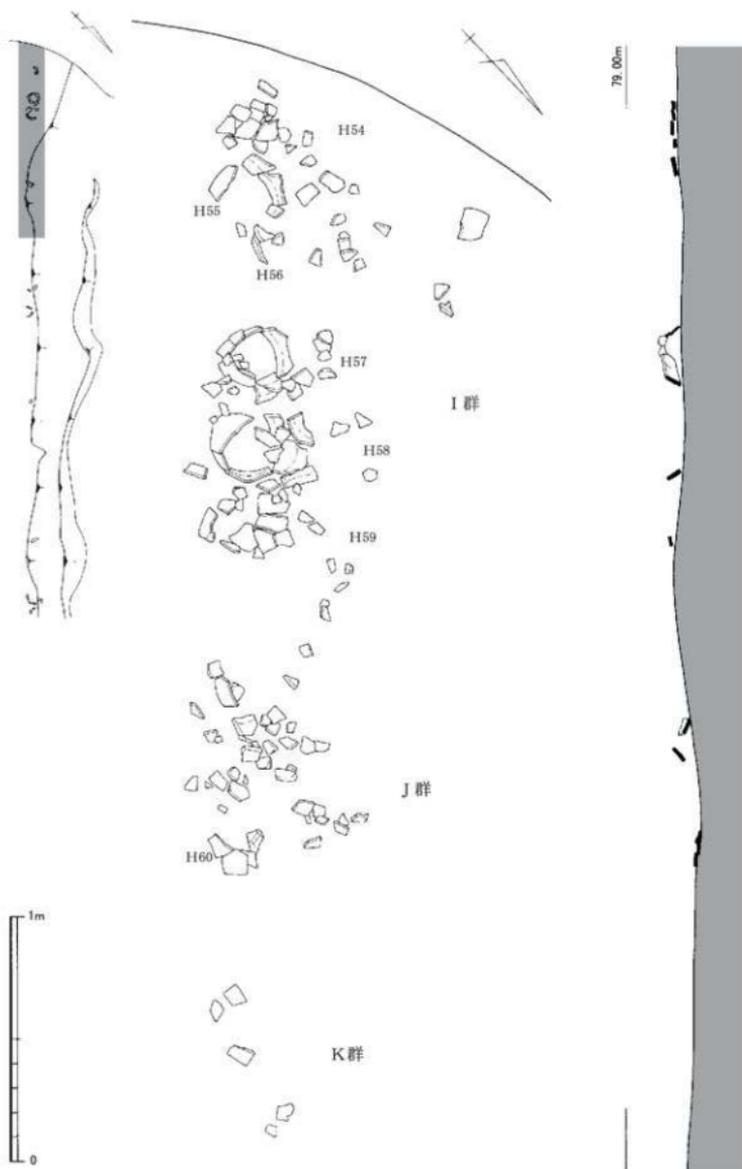
平坦部の標高は、西端部で78.70m、東端部で78.60mと、わずかに東側へ傾斜している。

テラスの造成 1段目テラスの造成方法についても、トレンチによる断面調査を実施したが、良好な成果を得ることはできなかった。基本的に、検出面以下において、盛土層を確認することはできず、全て細砂～シルト質極細砂を基調とした基盤層が観察されたにとどまる。

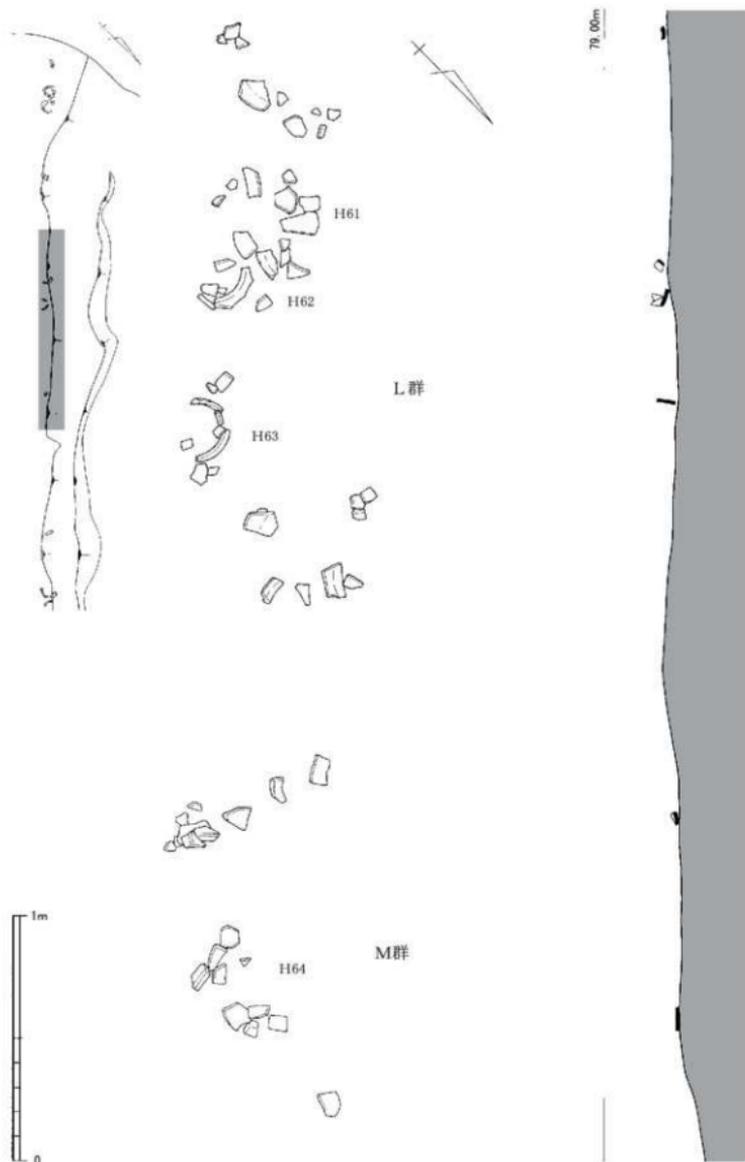
埴輪列 後南部側の第2次調査の範囲に限り検出され、第1次調査と第3次調査では全く検出されてい



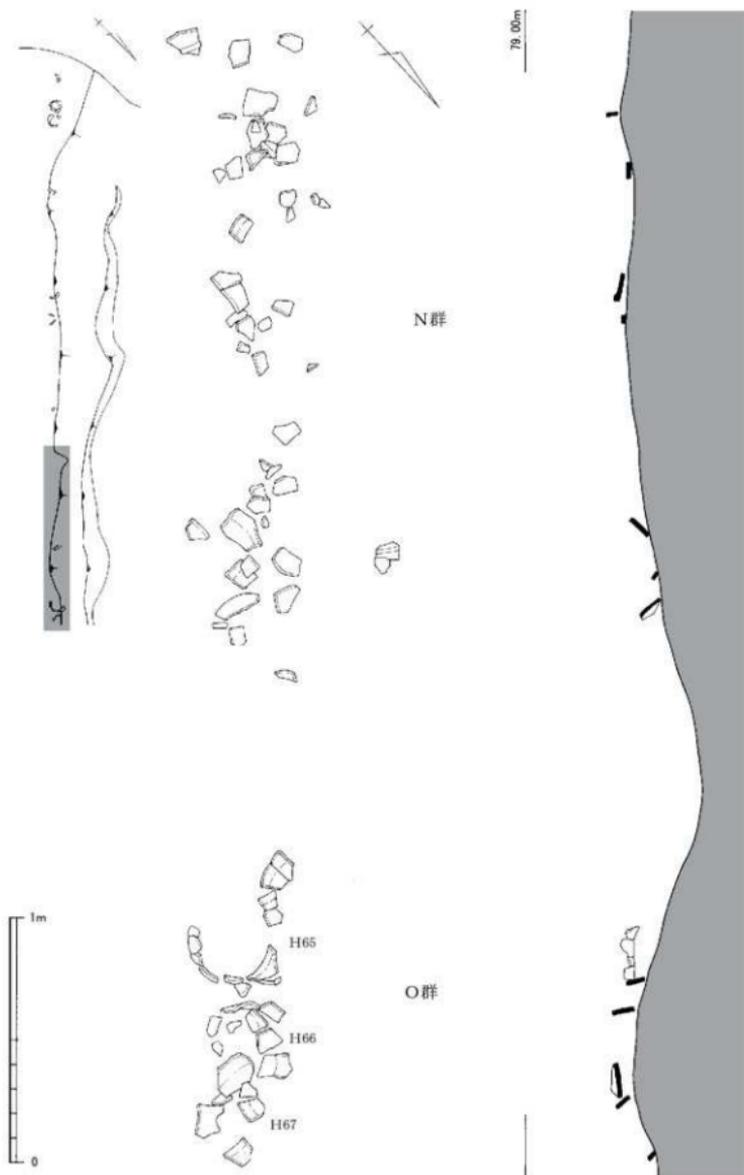
第127図 北側1段目テラス 横断面



第128図 北側1段目テラス 埴輪列 (I群~K群)



第129図 北側1段目テラス 埴輪列 (L群・M群)



第130図 北側1段目テラス 埴輪列 (N群・O群)

ない。この結果、検出された長さは、約14mに限られる(第125図)。その検出された埴輪列についても、検出状況は決して良好ではなく、わずかに数個体が現位置を留めている程度である。また、南側で検出されたような、掘り方は全く残存していなかった。掘り方底部がかろうじて残存している状態である。

検出した埴輪列は、その検出状況から、西側からI群～O群の7群に分けられる(第125図)。以下、群単位でみていくことにする。



第131図 埴輪列の検出作業

I 群(第128図 写真図版51:①②④) 北側埴輪列の最も西側に位置する。後円部に最も近い一群である。当群は、H54～H59の6本分かなり、H56を除いてはほぼ原位置が保たれた状態で検出されている。H56に関しては、埴輪は出土していないが、1本分の空間であることから、当地に埴輪が存在したことを前提として、番号を付けている。

J 群(第128図) I群の東側の一群である。I群とは2本分の空間が認められる。当群は3本分と考えられるが、原位置が保たれているのは東側の一部(H60)に限られる。他については、埴輪片が散乱した状態で出土している。

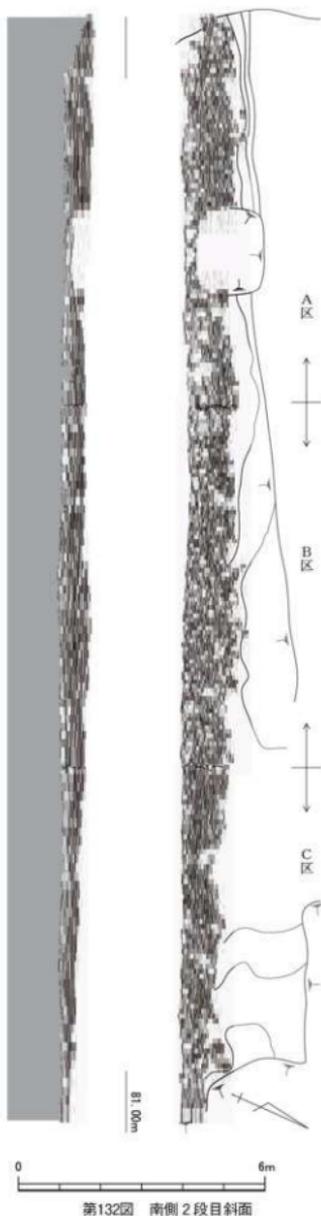
K 群(第128図) J群の東側の一群である。J群とは2本分の空間が認められる。埴輪片が数片散乱した状態で、原位置が保たれているものは認められない。

L 群(第129図 写真図版51:③) K群の東側の一群である。K群とは明確な空間は認められず、その境界は不明瞭である。全体的に埴輪片が散乱した状態で検出されている。このなかで、H61～H63の3本分については、ほぼ原位置が保たれているものと考えている。H62とH63との間についても、埴輪1本が樹立されていたものと考えられる。

M 群(第129図) L群の東側の一群である。L群とは明確な空間が認められる。埴輪片が数片散乱した状態で、原位置が保たれているものは、H64を除いては認められない。H64についても、小片がわずかで、原位置がかろうじて保たれた状態である。

N 群(第130図 写真図版52:⑥⑦) M群の東側の一群である。全体的に埴輪片が帯状に散乱した状態で出土している。このため、原位置が保たれて出土した埴輪は認められない。

O 群(第130図 写真図版52:⑤) N群の東側の一群である。北側1段目テラスの東端にあたる。N群とは3本ないしは4本分の間隔があり、この間は抉られた状態となっている。この間については、北側へ崩落したものと考えられる。出土状況から判断して、当群の東側3本分(H65～H67)は、ほぼ原位置が保たれているものと考えられる。



第132図 南側2段目斜面

4. 2段目斜面

(1) 概要

前方部南側に限り葺石を伴って検出されている(写真図版31~38)。第1次調査から第3次調査にかけて連続して検出されている(第132図)。基本的には、1段目テラス植輪列が残存する範囲とほぼ一致する。西側では後円部まで残存するようであるが、東側については、第1次調査区中央部以東が削平を受け、残存していなかった。検出した長さは、26.45mである。

基底石底部の標高は、西端部(A区西端)で79.50m、中央部(B区中央部)で79.30m、東端部(C区東端)で79.40mと、中央部がやや低い傾向にあるが、全体的には東側へ傾斜する傾向にある。

ただし、斜面上部の大半は削平を受け、テラス面から最高で80cmの高さまでしか残存していなかった。この状況のなか、西側ほど残存状況が良好な傾向が認められた。

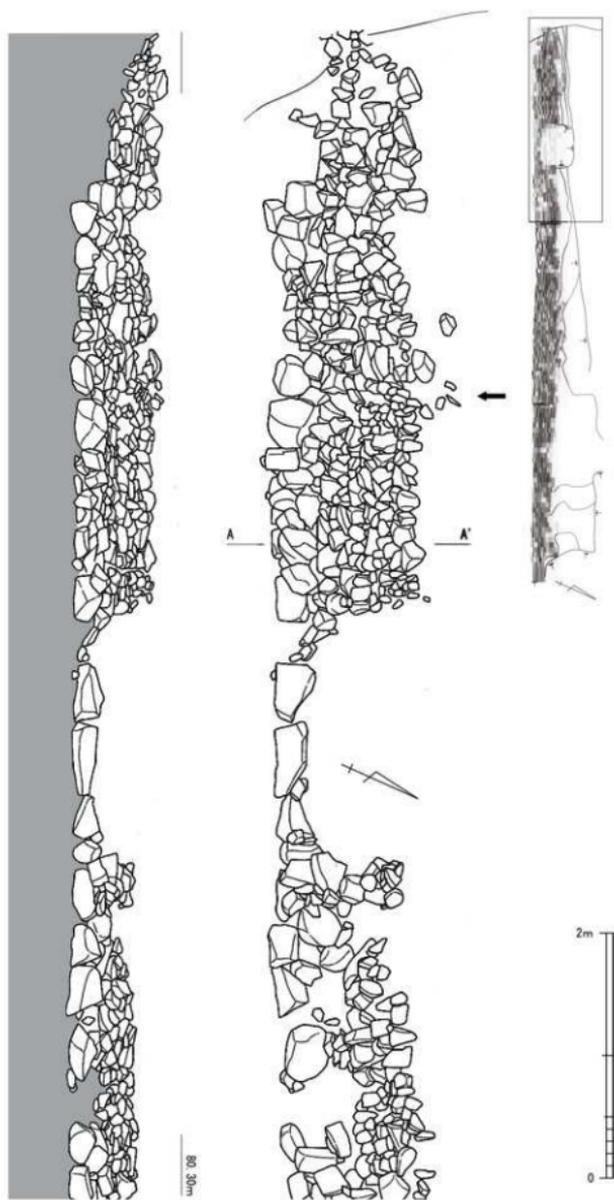
(2) 葺石

概要 大きめの石を基底石とし、その上側にやや小ぶりな礫が葺かれていた。ただし、1段目斜面葺石とは若干積み方を異にしている。この結果、斜面の傾斜が一定していない。基底石の上に積まれた2石ないし3石ほどが、基底石の後側に積み、2・3石目までがかなり緩やかな傾斜となっていた。その後、斜方に積み上げられている。よって、断面のラインで見ると、①基底石分が垂直に立ちあがり、②その後やや水平傾向もしくは墳丘側へわずかに落ち込み、③その後斜上方に立ち上がっている(第135図)。

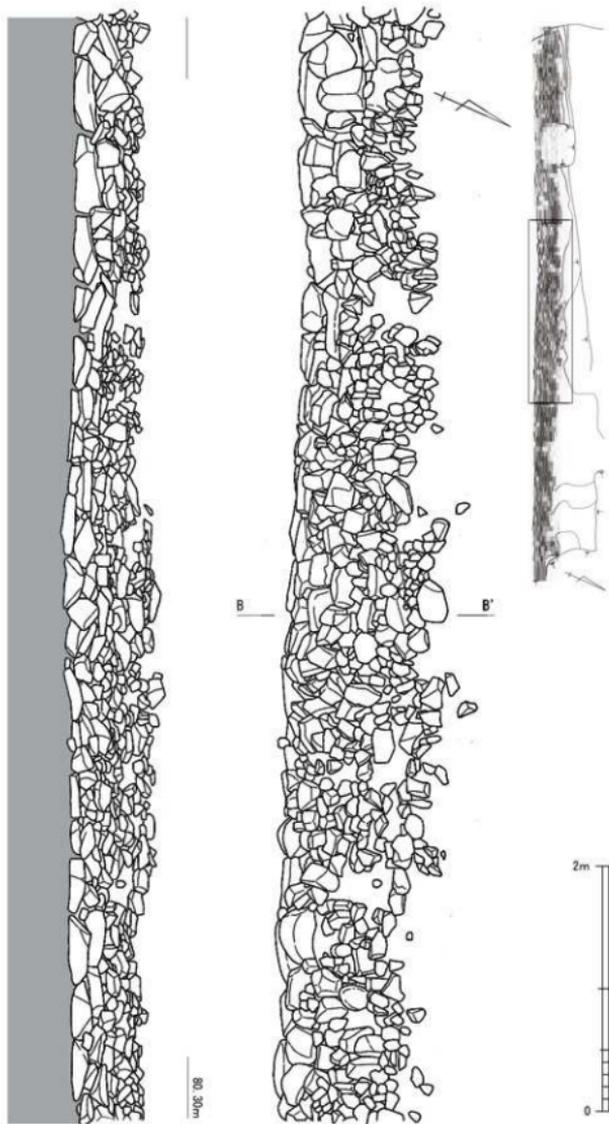
この結果、2段目斜面の傾斜角は、A-A'ラインで、③部分が30°、平均(①-③間)でも30°となる(第135図)。B-B'ラインでは、③が30°、平均(①-③間)では35°となる(第135図)。

なお、基底石はテラスの造成と平行して直接置かれており(第114図)、設置のための掘り込み等は認められなかった。石材は、基底石・葺石とも全体的に角礫が多く、河原石の使用はわずかである。

以下、2段目葺石を3区(西から、A区・B区・C区)に分けて報告する(第132図)。

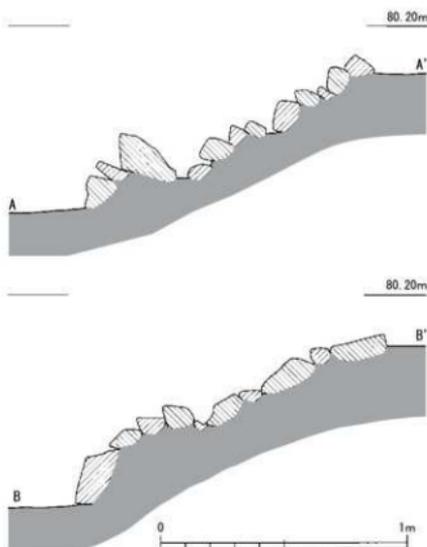


第133図 南側2段目斜面葺石 (A区)



第134図 南側2段目斜面葺石 (B区)

A 区（第133図：写真図版33・34）2段目葺石のなかで最も西側の地区である。中央部やや東側については、昭和46年度調査の際のトレンチ（旧トレンチ）にあたり、葺石は基底石を除いて取り上げられていた。この箇所（旧トレンチ）については、2段目斜面のなかでも最も良好な状態で検出されている。25cm～40cm大の角礫を基底石とし、その上側に10cm～20cm大の河原石が主に使用されている。特に当該地区の基底石は、石材を縦長に置いて使用し、B区以东とは積み方を違えている。また、基底石以外の石材についても、垂角礫が多く、縦長に積み上げる傾向が認められる。ただし、基底石の厚みが10cm～15cmと薄く、テラス側に対して明確な面が認められるものは、わずかである。



第135図 南側2段目斜面葺石横断面

さらに、旧トレンチ以西の中間部（第133図矢印）においても、目跡と考えられる石材の積み方の変化が線的に認められる。なお、この目跡とトレンチの間が、最も良好に葺石が積まれた状態が検出された区間である（写真図版33：②）。当該区間では、テラス面から65cmの高さまで残存していた。

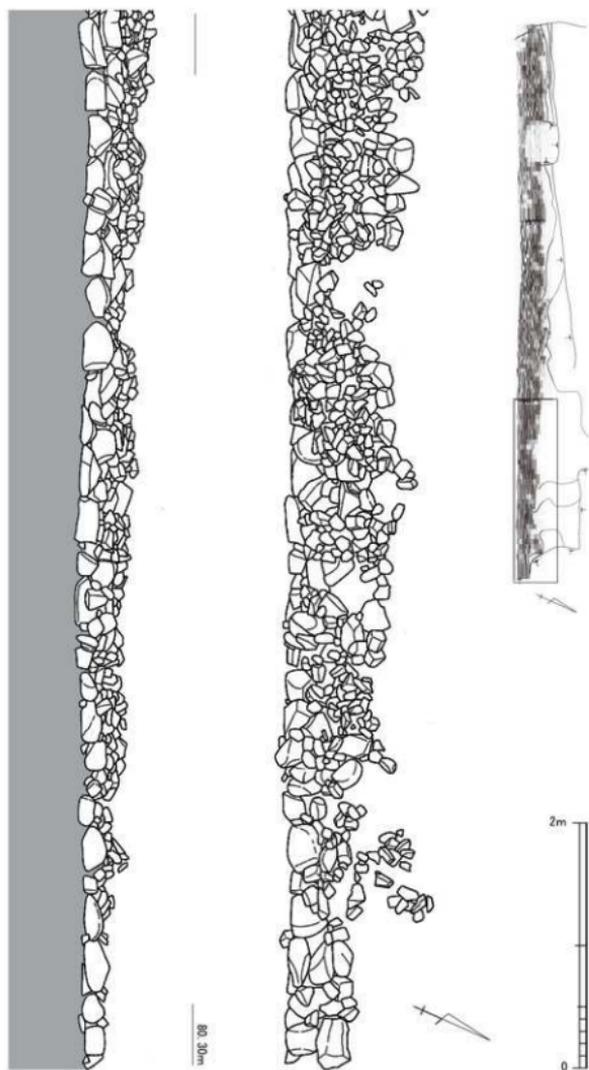
旧トレンチより東側については、トレンチ側を中心に、葺石の残存状況は良好といえるものではない。このなかで、基底石は良好に残存し、30cm～60cm大の角礫を中心に使用されている。旧トレンチ以西と異なり、石材が横長に置かれている点が特徴的である。

B 区（第134図：写真図版34～36）2段目葺石のなかで中央部にある地区である。A区東側と比較して、全体的に葺石の残存状況は良好である。特に、当区中央部では80cmの高さまで残存していた。基底石は30cm～65cm大の角礫で、いずれも横長に置かれていた。また、厚さも15cm～20cmを測り、テラス側に対する明確な面が認められた。

基底石の上に積まれた石材は10cm～20cm大が基本で、多くは縦長に積まれていた。ただし、中央部では30cm大の石材も多く使用されていた。この30cm大の石材は横長に積まれる傾向が認められた。

一方、中央部より西側3mは、比較的均質（10cm～15cm大）な石材が使用されている傾向が認められた。前者と工区が異なる可能性が考えられる。

C 区（第136図：写真図版37・38）最も東側の地区である。東側ほど残りの状態は悪く、東端では基底石のみの残存である。基底石の積み方はB区と同様、横長に石材が置かれている。石材の規模も大きな変化は認められない。ただし、厚さが20cm大のものが多く、テラス側に対して明確な面をなしている。基底石の上側に葺かれた石材は10cm～15cm大が多く、25cm大の石材も混入している。



第136図 南側2段目斜面墓石(C区)

5. 3段目斜面（巻首図版14）

(1) 概要

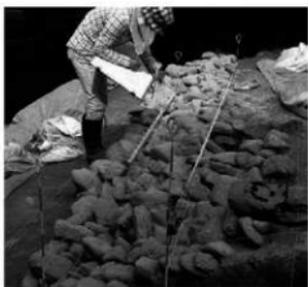
前方面北側で検出されている（写真図版53・54）。ただし、葺石を伴う斜面が残存していたのは、後門部側11.60mに限られる（第138図）。この箇所においては、2段目テラスをわずかに伴って検出されている。3段目斜面と2段目テラスが残存していた範囲は、第2次調査の範囲に限られ、両者はセットで検出されている（第140図）。これより東側については、テラス・斜面ともに後世の削平を受けていた。

2段目テラスは、北周濠側の大半が削平を受けていた。さらに東側ほど削平範囲が多く、最も良好に残存する西端（後門部側）で、幅1.80m残存する。その標高は、西端部で81.50m、東端部で81.40mと、わずかに東側へ傾斜している。

(2) 葺石

概要 葺石は、調査区西側、後門部側の11.60mの範囲に限り残存していた。ただし、この範囲のほぼ中央部は、後世の攪乱を受け、幅90cmの範囲は残存していなかった。この箇所を境に、西側をA区、東側をB区として、報告する（第139図）。

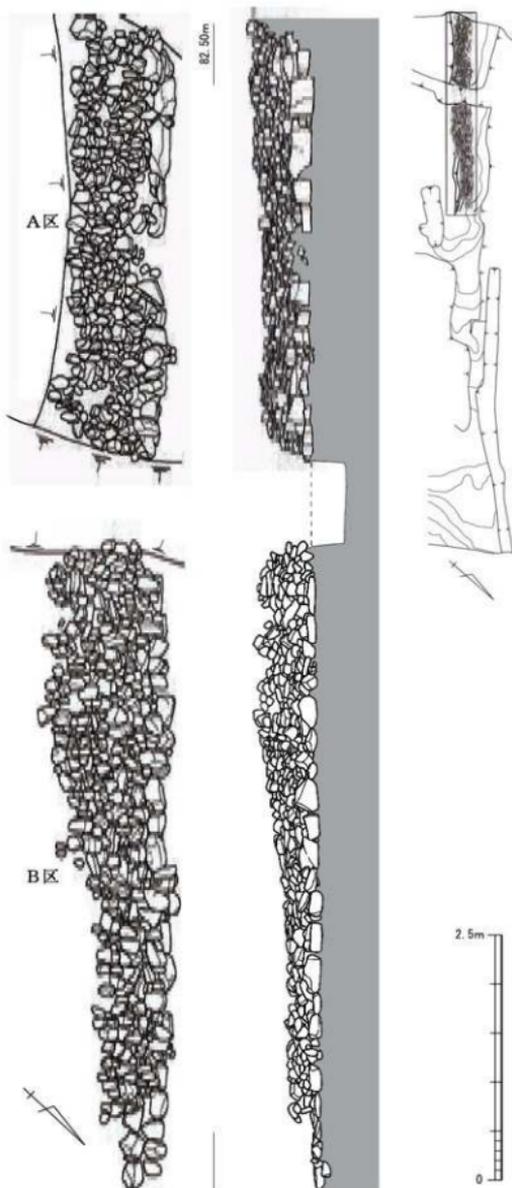
葺石は、基底石の上に直接積まれるので



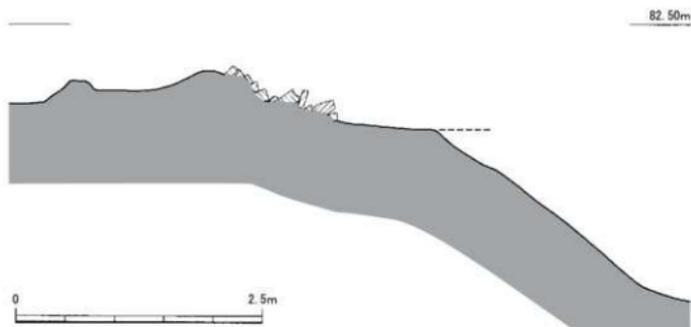
第137図 北側3段目斜面葺石の実測



第138図 北側3段目斜面



第139図 北側3段目斜面墓石



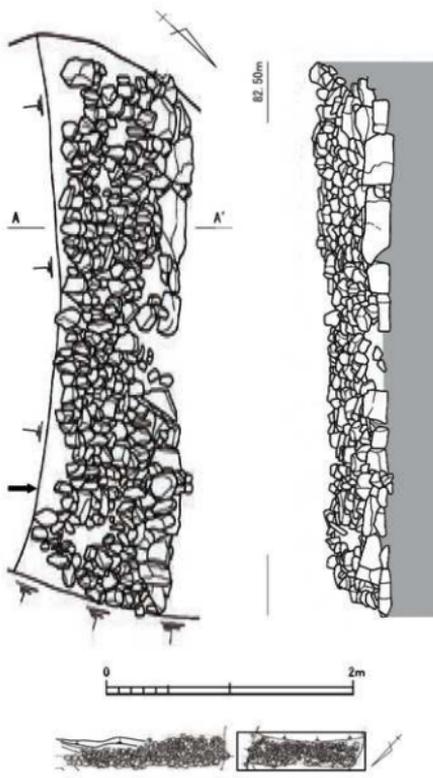
第140図 北側2段目テラス 横断面 (Bライン)

はなく、基底石の斜面側もしくはその背後から葺かれていた (第143図)。テラス面と斜面上端部を結ぶラインの傾斜角は、Aラインで 35° 、Bライン・Cライン・Dラインで 30° と、後円部側ほど傾斜が急になる傾向が認められる (第143図)。また、基底石上面を基準とした傾斜は、Aラインで 30° 、Cラインで 25° 、Dラインで 20° と、傾向は上記と同じである。

基底石は、テラス面に直接置かれ、その上側により小規模な石が葺かれている。なお、基底石設置にあたり、掘り方等は認められなかった。

A区 (第141図 写真図版53:③) 3段目斜面の西半部である。最も良好に残存する地区である。西側 (後円部側) ほど残存状況は良好で、テラス面から65cmの高さまで残存していた (写真図版55:②)。基底石は、25cm～60cm大の河原石が使用されているが、一部で山石も使用されている。特に、後円部側の大きな2石については、角礫が使用されている。厚さ10cm～20cmを測り、周濠側に面をもつよう置かれていた。

葺石については、10cm～15cm大の河原石が使用されていた。



第141図 北側3段目斜面葺石 (A区)

なお、葺石の積み方を詳細に観察した結果、1箇所で見跡が認められた(第141図矢印)。

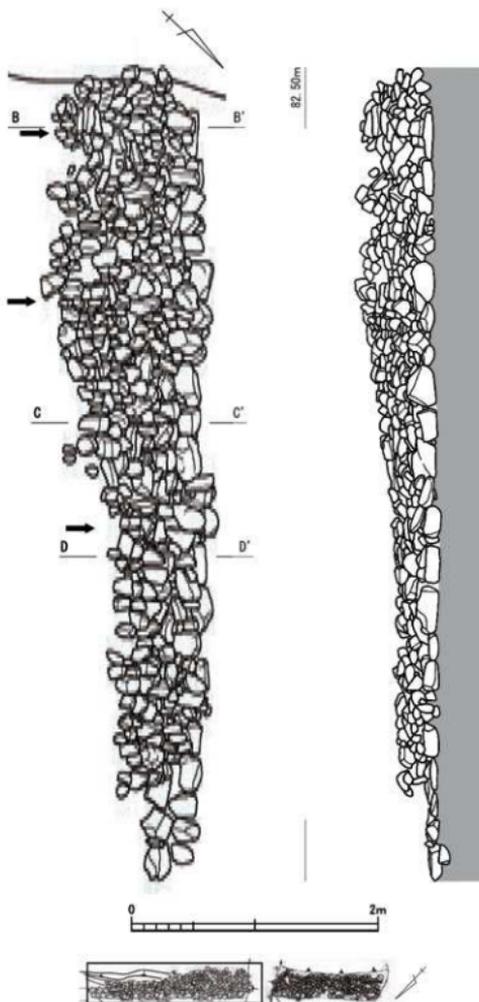
B区(第142図 写真図版53:②) 3段目斜面の東半部である。東側ほど残存状況は良好ではなく、東端部では基底石が残存するのみである。西端部では、テラス面から60cmの高さまで残存していた。基底石・葺石ともに河原石の使用を基調としており、A区と同様の特徴が認められる(写真図版55:①)。

ただし、葺石に使用された石は、15cm~20cmと、A区より大きめの石材が使用されている。また、全体的に縦長に置かれている。一方、基底石については、25cm~40cmと、A区ほど大きな石材は使用されていない。また、基底石の厚みは20cmを超えるものはわずかで、10cm大が大半である。このため、周濠側に面を持つが、テラス面からの高さはA区より低くなっている。

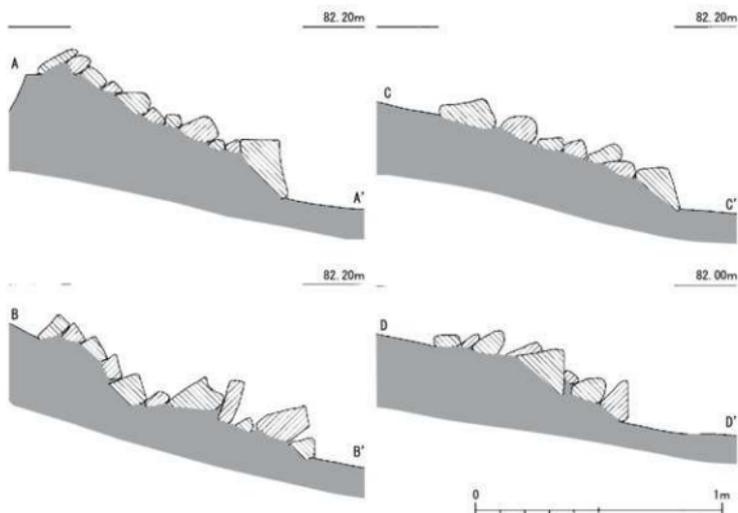
また、A区で認められた目跡であるが、B区では3箇所(第142図矢印)で認められた。その間隔は、西側が1.40m、東側が1.80mである。

この目跡単位で、葺石の葺かれ方が異なる特徴が認められる。特に、西端部(Bライン)

では基底石の背後に水平方向に石が葺かれ、その後斜上方に葺かれる傾向が認められる(第143図)。一部落ち込んでいる箇所も認められる。またDラインでは、基底石の背後にさらに基底石と同様の石が据えられ、その背後から斜方向に葺かれている傾向が認められた(第143図)。



第142図 北側3段目斜面葺石(B区)

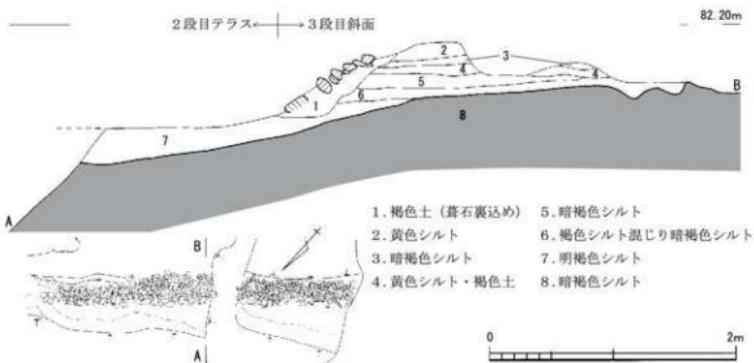


第143図 北側3段目斜面葺石断面

(3) 墳丘の構築

A区とB区の境をなす攪乱部の断面において、断面観察を行った(第144図)。この結果、数度にわたる盛土により墳丘が構築され、テラスの造成・葺石の葺き上げが行われた状況が明らかとなった。

まず、8層は墳丘の基盤となる層である。8層の上側ほど土壌化していることから、旧表土層と考えられるとともに、顕著な削平を受けていないものと考えられる。その後、盛土(7層)によりテラスが造成されている。その後、墳丘3段目が数度の盛土(2層～6層)により造成されている。特に、2層～4層については、比較的締まりがあり、明らかに異なる土がほぼ同じ厚さで盛り上げられており、版築に近い造成方法が想定される。最後に、3段目葺石が控えとなる土を盛り上げながら葺かれている。



第144図 北側3段目斜面 墳丘断面

- | | |
|---------------|-------------------|
| 1. 褐色土(葺石裏込め) | 5. 暗褐色シルト |
| 2. 黄色シルト | 6. 褐色シルト混じり暗褐色シルト |
| 3. 暗褐色シルト | 7. 明褐色シルト |
| 4. 黄色シルト・褐色土 | 8. 暗褐色シルト |

第3節 造り出し

1. 概要

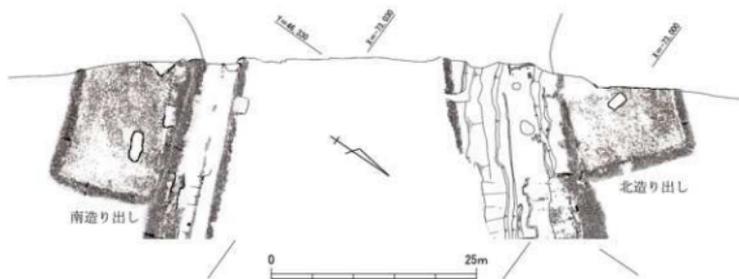
造り出しは、前方部の南側（南造り出し）と北側（北造り出し）の両側で検出されている（第146図）。南造り出しは第2次調査と第3次調査で、北造り出しは第2次調査で、それぞれ検出されたものである。南造り出しについても、大半は第2次調査で検出されている。また、南造り出し西側の一部は朝来市教育委員会の調査によって検出されている。両者を合わせると、南造り出しについては、ほぼ全体が調査で明らかとなっている。



第145図 南造り出しの調査

このように南側の造り出しは、調査によりその大半が検出されているが、北造り出しについては、後円部側を中心にわずかに未検出な箇所も存在する。全体的に、造り出しの残存状況は良好で、その上面まで残存していた（第145図）。また、斜面には葺石が葺かれた状態で検出されている。

2基の造り出しとも、その一隅がくびれ部にあたり、対称的な位置に設置されている。その一方、その平面形・樹立植輪の種類および量・前方部への取り付け方等、細部については異なる点も多く認められる。これについては、第8章第2節において検討する。



第146図 造り出し

2. 南造り出し (巻首図版16・17)

(1) 概要

第2次と第3次の調査で、西側の一部を除き、ほぼ全体が検出されている(第148図 写真図版56～91)。北西隅が墳丘くびれ部と近接している。前方部とは溝により区画され(区画溝)、この区画溝を含めた斜面全面に、葺石が葺かれている。造り出し上面は、ほぼ築造当初の面が残存していた。また、北側と西側の上面縁辺部には埴輪列が検出されている。

(2) 形状・規模

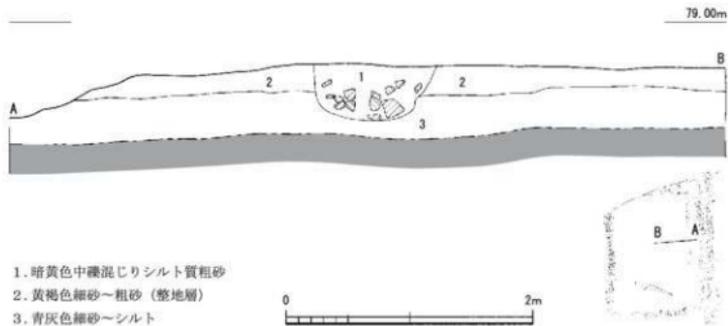
平面形は、基底部・上面ともに長方形を基本形とする。ただし、検出された各コーナーは、丸味を帯びている。東西方向については、前方部のラインに平行する。ただし、東側裾部のラインについては、やや弧状をなしている。南北方向については、裾部間で13.30m、上面で11.15mを測る。東西方向については、北側裾部で18.20m、その上面で16.45mを測る。両者を基準とした上面における面積は、183.41㎡である。

横断面・縦断面ともに台形をなし、南周濠と上面との比高は60cmである(第148図・第149図)。また、北側区画溝底部との比高も60cmである(第171図)。

(3) 造り出しの構築

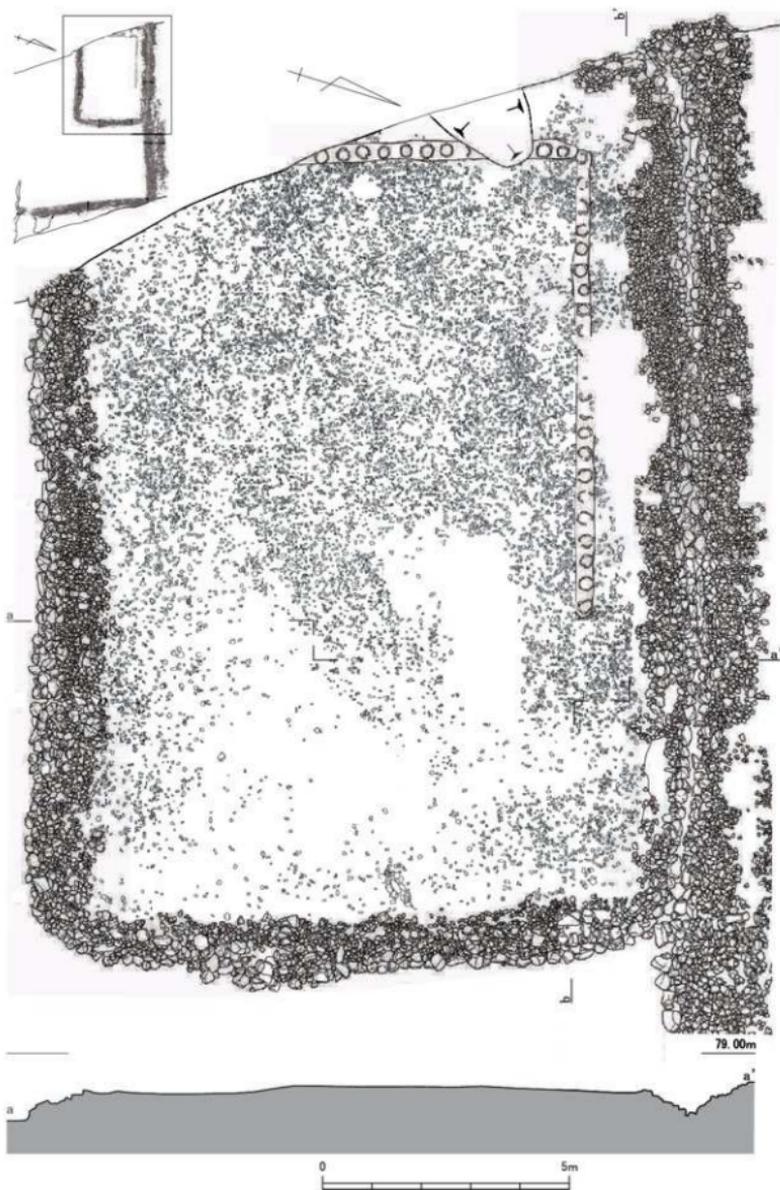
調査終了後、造り出し中央部に幅1mのトレンチを設定し、断ち割り調査を実施した(第51図)。この結果、造り出し上面下20cmは整地層となっていた(第147図)。以下は、基盤層となっていた。細砂とシルトのラミナが認められ、洪水起源の堆積層と考えられる。この結果、造り出しは自然地形を削り出すことにより造られていることが明らかとなった。

なお、トレンチの中央部で深さ40cmの落ち込みを確認した。落ち込み内には20cm以下の角礫が集積していた。遺物が出土していないため、造り出しに直接かかわるものについては明らかにできなかった。



1. 暗黄色中礫混じりシルト質粗砂
2. 黄褐色細砂～粗砂(整地層)
3. 青灰色細砂～シルト

第147図 南造り出し断割り断面



第148図 南造り出し平面図・断面図

(4) 造り出し上面

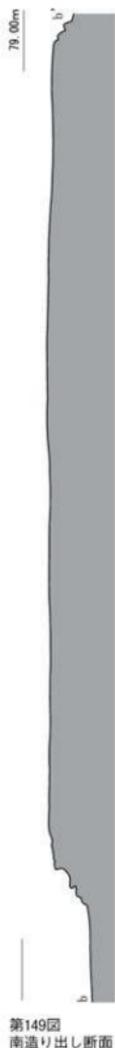
概要 造り出し上面は、ほぼ平坦であるが、中央部ほどわずかに高い傾向にある(第149図)。造り出し中央部における標高は78.60mである。ただし、南東部についてはわずかに後世の削平を受け、約10cm低くなっている。上面においては、散乱した埴輪片と礫が検出されている(第148図)。礫は、5cm～10cm大の小礫が大半である。小礫は、敷きつめられた状態での検出状況ではなかったが、当初は敷きつめられていたものと考えられる。なお、埴輪片の出土状況等については後述する(第5章第2節)。

北側埴輪列 造り出し北側縁辺部で検出されている(第150図 写真図版62～65)。北側縁辺のラインにはほぼ平行し、埴輪中心部と北側肩部との距離は1mである。ただし、北側縁辺部全体に及んでは検出されず、西側に偏った位置で検出されている(第148図)。東側約1/3にあたる5.50mにおいては、埴輪列は検出されていない。西端部は、西側埴輪列のH90の北側まで達している。全体で22本(H68～H89)検出し、その長さは9.5mとなる。ただし、中央部は昭和46年度調査(第17図)のため、検出できたのは一部に限られる。この調査時のトレンチを境に、東側をP群、西側をQ群と呼称する(第150図)。

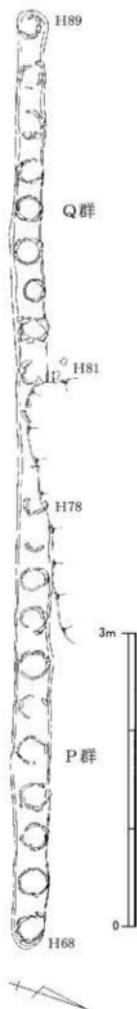
また、埴輪列を検出した範囲全域で、掘り方も残存していた。掘り方は、前方部1段目テラス埴輪列同様、溝状に掘られたもので、この底部に埴輪が並べられていた。

P群(第151図 写真図版64) H68～H78の11本の埴輪からなる。いずれも底部のみの残存である。基本的に底部が完存した状態で出土しているが、H77については、一部のみ残存する。埴輪相互の間隔は18cm～22cmと、ほぼ一定である(第6表)。また、芯々間の距離に関しても45cmに集中するが、H77～H78間のみ35cmと狭い箇所も認められ、平均すると約43cmとなる。

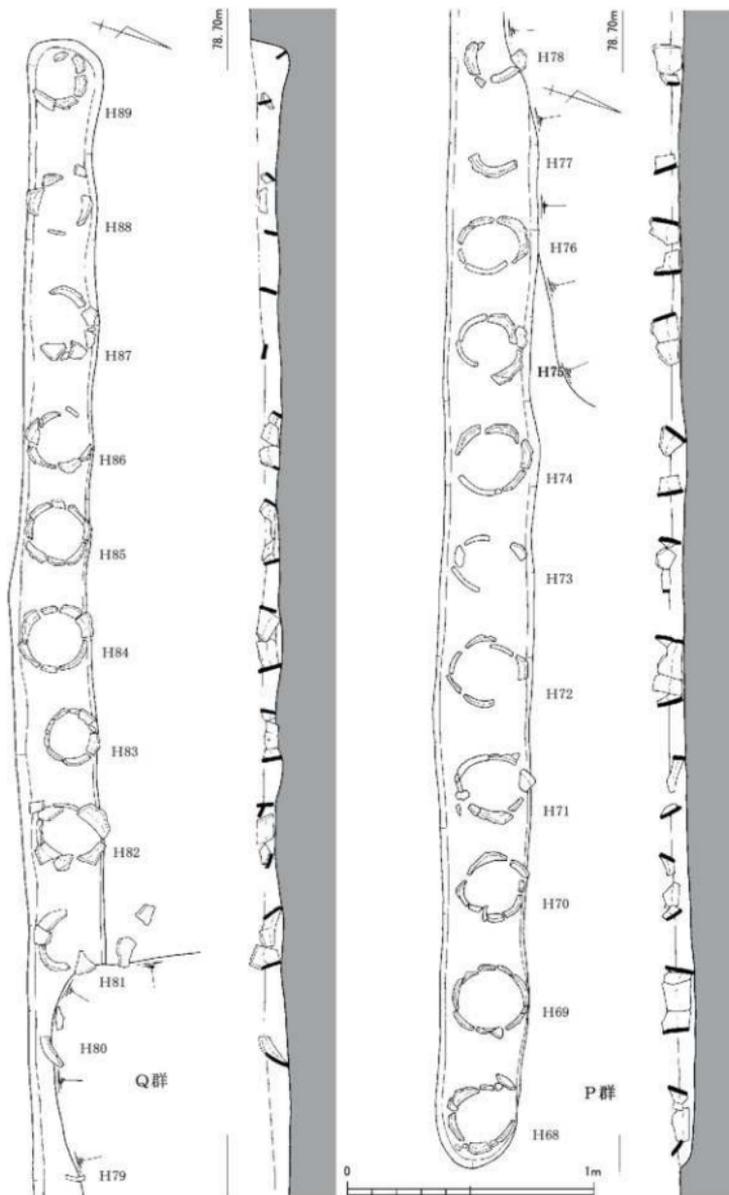
Q群(第151図 写真図版64・65) P群の西側にあたる。H79～H89の11本の埴輪からなる。P群同様、底部のみ残存する。基本的に底部が完存した状態での出土であるが、H79とH80については、以前の調査で大半が取り上げられ、一部のみが残存する。埴輪相互の間隔は、P群同様18cm～20cmに集中するが、H85～H86間の14cmのようにやや狭い箇所も認められる(第7表)。また、芯々間の距離に関しても、全体的にP群より狭いものが目立つが、平均的には43cmと同じである。



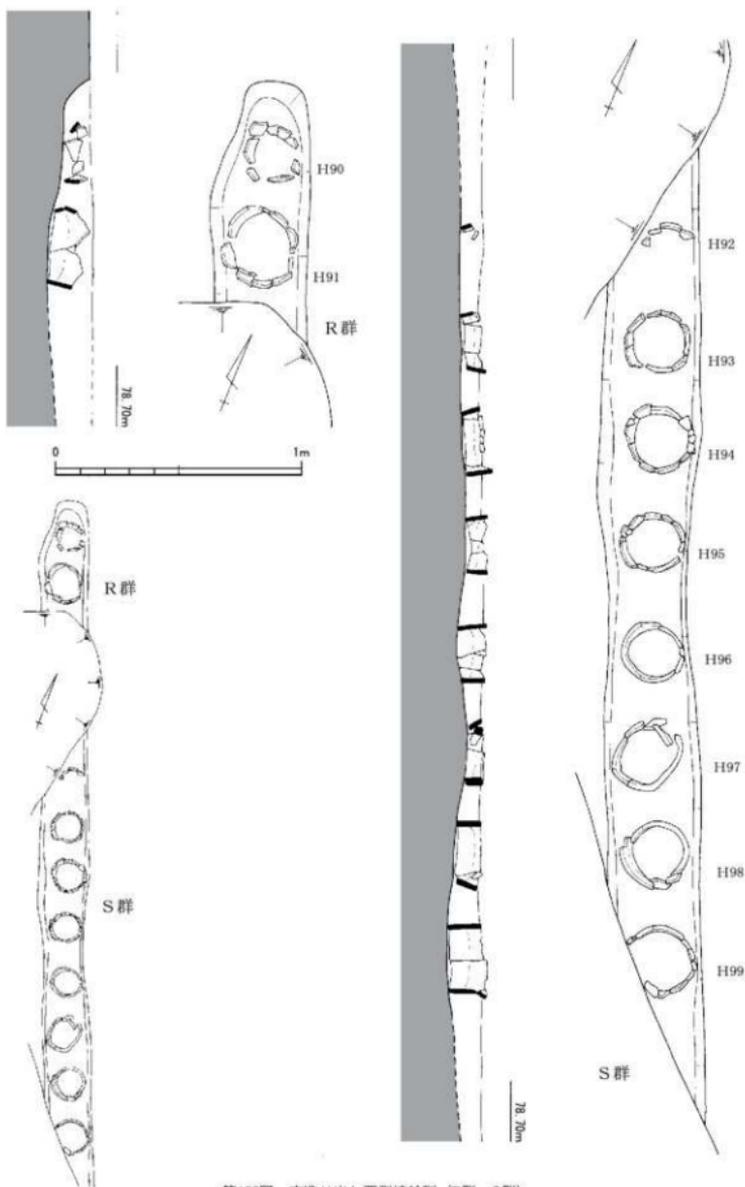
第149図
南造り出し断面



第150図 北側埴輪列



第151図 南造り出し北側埴輪列 (P群・Q群)



第152図 南造り出し西側埴輪列 (R群・S群)

西側埴輪列 全体で10本（H90～H99）からなり、5.40mにわたり検出されている（第152図）。北側埴輪列とはほぼ直角をなしているが、厳密には87°を測る。

埴輪列の北端に関しては、北側埴輪列との交点を起点としている。西側縁辺にはほぼ平行すると考えられ、埴輪中心部と西側肩部との距離は1mを測る。南側に関しては、調査区外まで延びている。このため、西側埴輪列は全体が検出されていない。基本的に、掘り方が溝状に掘削され、この溝内に埴輪が一定の間隔をもって並べられている（写真図版67）。掘り方の幅は40cmを測り、検出面からの深さは10cm～20cmである。

また、H91とH92との間約1.2mは、朝来市教育委員会が実施した調査区（平成18年度調査：第17図）と平面的に重複し、埴輪列は途切れている。当該箇所については、すでに朝来市教育委員会の調査により、埴輪が確認されている。以上から、上記の朝来市教育委員会の調査区を境に、北側をR群、南側をS群として報告する。

R 群 H90とH91の2本からなる（第152図 写真図版65・66・68）。2本とも底部のみ残存し、埴輪下面が掘り方底部とはほぼ接した状態で出土している。掘り方底部の深さは、造り出し上面（掘り方検出面）から約10cmである。また、両埴輪間の間隔が10cm、芯々間の距離が38cmと、後述するS群より狭い傾向にある（第8表）。

S 群 H92～H99の8本からなる（第152図 写真図版66～68）。R群同様、底部のみ残存する。H92を除いては、底部がほぼ当初の状態で出土している。H92に関しては、底部の1/3がわずかに残存する程度である。S群に関しても、溝状に掘り方が掘られ、その底部に埴輪が並べられている。埴輪相互の間隔が約15cmと、北側埴輪列よりわずかに狭い傾向にある（第8表）。一方、特にH95～H96間のみ21cmと、他より広がっている。また、芯々間の距離に関しても、平均値が約41.7cmとわずかに狭い傾向にある（第8表）。

（5）東側斜面

検出状況 第2次調査と第3次調査で全体が検出されている（第154図 写真図版60・73～76）。斜面全面に葺石が葺かれた状態で検出されている。ただし、東側斜面中央部より南側（B区：第156図）は、葺石自体がやや崩れた状態で検出されている。これは、後述する南側斜面が全体的に崩落傾向にあることと一体のものであると考えられる。このため、基底石が良好な状態で検出されていないことに加え、その裾部のラインが乱れている。また、斜面の傾斜が崩れ、その傾斜角はD-D'ラインで20°と、後述す

第6表 北側埴輪列P群埴輪間規模

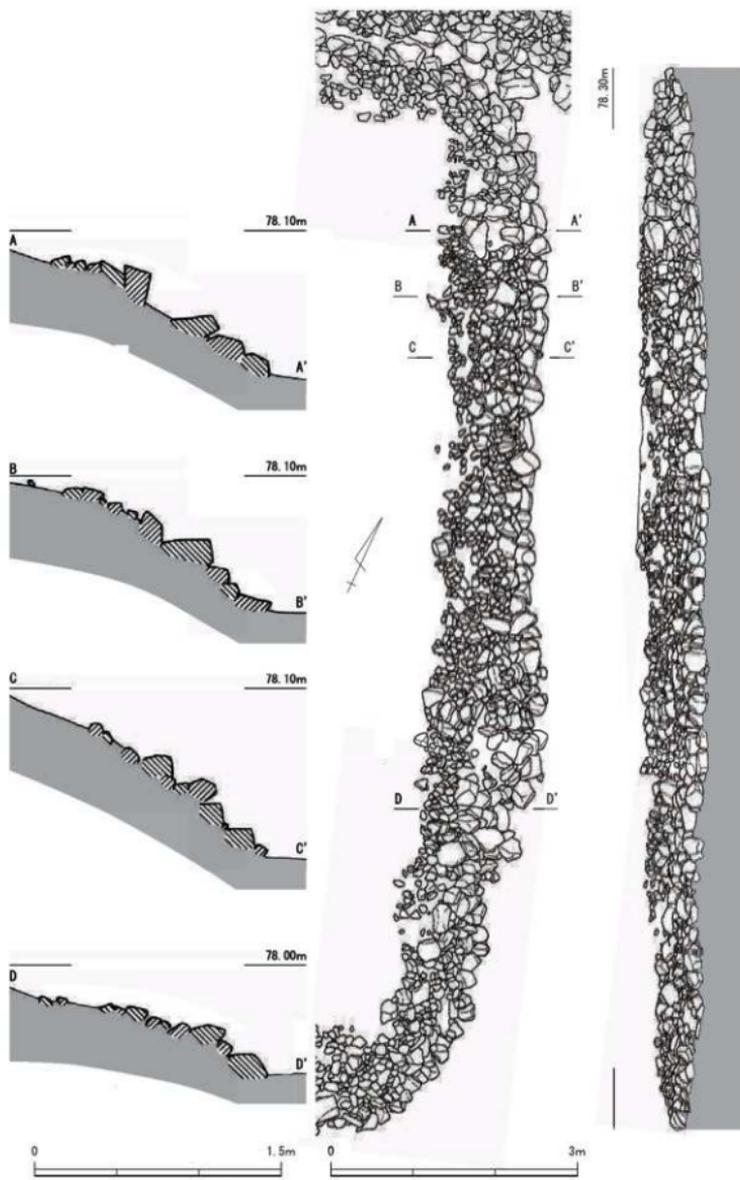
	間隔（埴輪間） (cm)	間隔（芯々間） (cm)
H68	22	48
H69	18	45
H70	18	40
H71	20	45
H72	18	45
H73	18	45
H74	20	45
H75	18	40
H76	18	40
H77	-	35
H78	-	-
平均値	18.9	42.8

第7表 北側埴輪列Q群埴輪間規模

	間隔（埴輪間） (cm)	間隔（芯々間） (cm)
H80	-	40
H81	20	42
H82	18	40
H83	16	38
H84	18	45
H85	14	38
H86	20	45
H87	22	48
H88	23	50
H89	-	-
平均値	18.9	42.9

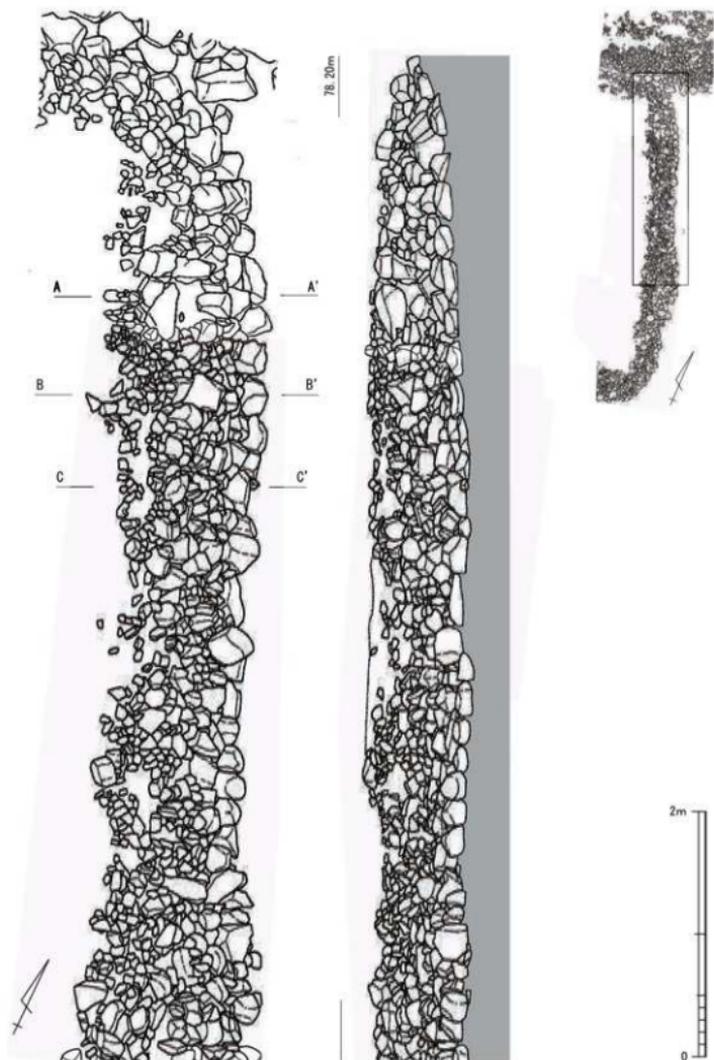
第8表 西側埴輪列埴輪間規模

	間隔（埴輪間） (cm)	間隔（芯々間） (cm)
H90	10	38
H91	-	-
H92	-	-
H93	12	40
H94	17	42
H95	21	45
H96	17	45
H97	12	40
H98	15	42
H99	-	-
平均値	14.9	41.7

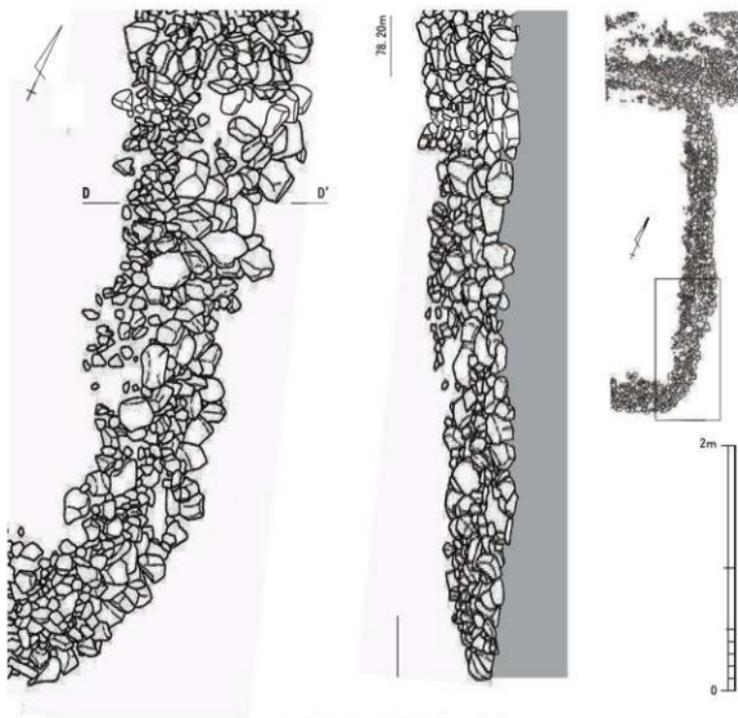


第153図 南造り出し東側斜面葺石断面

第154図 南造り出し東側斜面葺石



第155図 南送り出し東側斜面葺石（A区）



第156図 南造り出し東側斜面葺石 (B区)

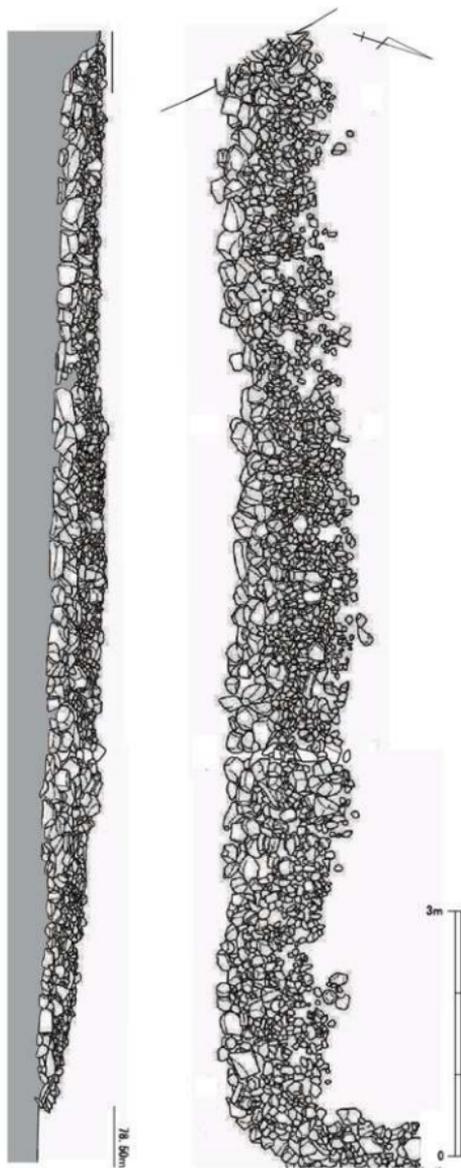
るA区と比較して、明らかに緩やかとなっている(第153図)。また、周濠底と造り出し上面との比高は55cmと、低い傾向にある。

一方、中央部より北側(A区:第155図)に関しては、比較的良好な状態で検出され、葺かれた当初の状態が保たれているものと考えられる。このため、葺石裾部には基礎石が残存し、その裾部のラインはほぼ直線的である。

A区斜面の傾斜は、A-A'・B-B'で30°、C-C'ラインで40°を測る。周濠底と造り出し上面との高低差は、Aラインで80cm、Cラインで1mを測る(第153図)。

なお、残存状態が良好と考えられるA区の葺石であるが、斜面の所々で石の存在しない箇所が認められた(写真図版76:④)。葺かれた後に崩れたのか、意識的に葺かれなかったのかについては、調査では明らかにできなかった。ただし、この葺石の認められなかった箇所に、柱穴等は認められなかった。**基礎石** 20cm~40cm大の石が用いられている。特に、前方部に近い一群は40cm大の石が横長に据えられている(写真図版74~76)。これに対して南側ほど小型になる傾向が認められ、B区は20cm大の方形に近い石が据えられている(写真図版73:②)。

基礎石下面のレベルは、大半が77.20mとほぼ水平である。ただし、前方部付近、北東隅付近は77.60



第157図 南造り出し南側斜面葺石

mと、高くなっている。また、B区南側、東南隅付近も77.40mと高くなる傾向が認められる。なお、基底石は周溝底に直接設置されており、設置のための掘り方等は認められなかった。

葺石 一方、葺かれていた石材は、A区では10cm～15cm大の河原石と山石からなる。ただし、石材の大きさは均一ではなく、所々に20cm～30cm大の石材が認められた。一方、B区においては10cm大の石材は少なく、20cm～30cm大の石材が目立つ傾向にある。

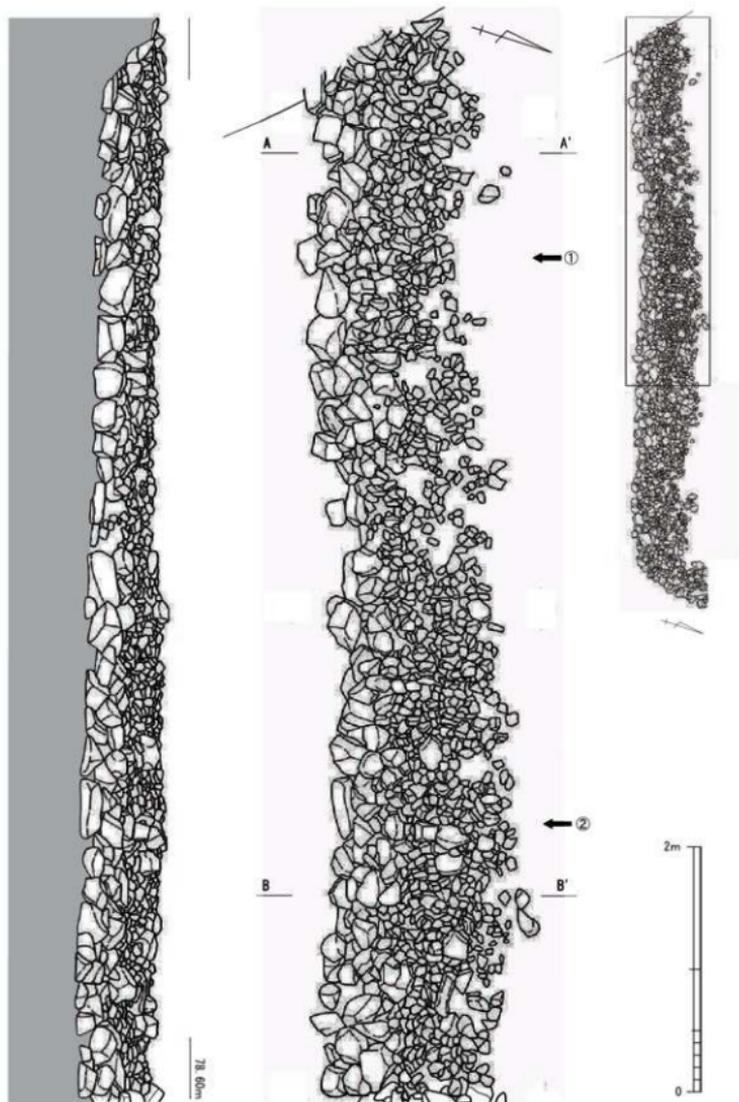
斜面自体は均一な傾斜ではなく、葺石上面の凹凸が顕著であった。これは、葺かれた石自体が同規模でないことに起因するものと考えられる。また、いくつかの斜面中の石が、角礫を用いて水平な面をもつように葺かれていた(第153図：Aライン・Bライン 写真図版76：③)。

なお、B区に関しては、全体的に崩落傾向にあり、葺かれ方を詳細に観察できる状態ではなかった。

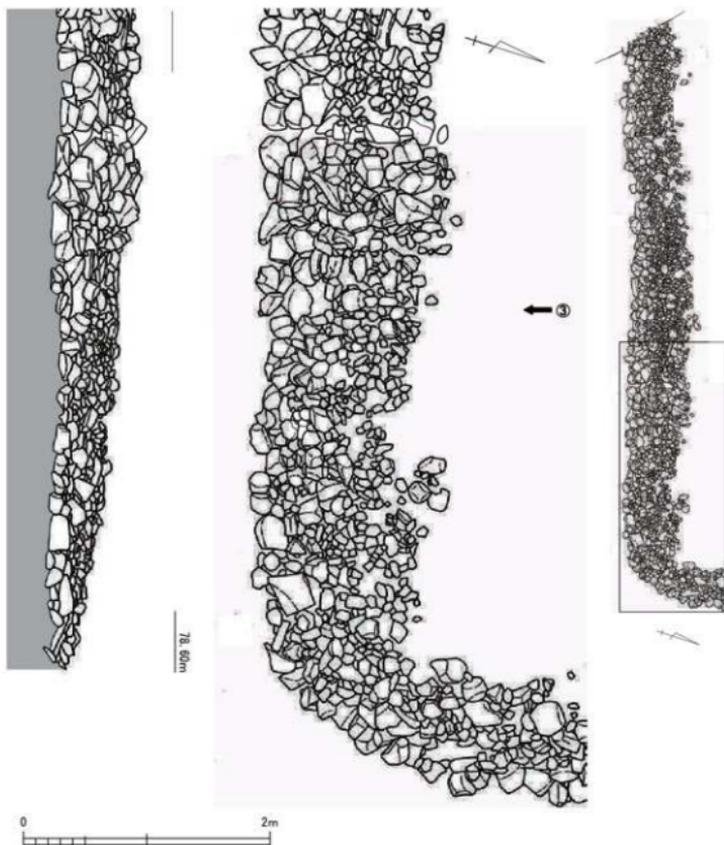
(6) 南側斜面

検出状況 2次調査と3次調査で検出されているが、西側については調査区外までのび、全体は検出されていない(第157図 写真図版69～72)。検出した長さは、上面で13.40m、基底部付近で12.50mである。

葺石 東側斜面同様、斜面全面に葺石が葺かれた状態で検出されている。しかし、先述したように、斜面に葺かれた葺石は、全体的に下方(南側)にずり落ちた状態で検出されて



第158図 南造り出し南側斜面葺石 (A区)

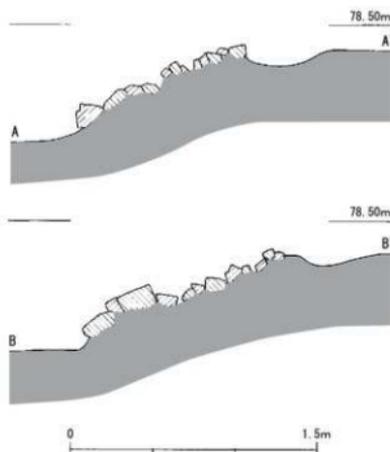


第159図 南造り出し南側斜面葺石 (B区)

いる。このため、基底石のラインは直線的ではなく、波打った状態となっている（写真図版69・70）。造り出し南側肩部が葺石上端部のラインと平行して溝状に落ち込んでいる（第160図）点も、この状況と一連のものと考えられる。このため、厳密には、南側斜面で検出された葺石は、原位置は保たれていない。ただし、ずり落ちた規模はわずかであるため、ほぼ当初の状況に近い状態で検出されているものと考えられる。なお、この葺石のずれは、先述した東側斜面の一部にかけて連続している。

以上の状況を考えて、最下段には40cm～50cm大の基底石が置かれていたものと判断される。ただし、全体的な傾向として東側（B区）はやや小さい傾向が認められる（第159図 写真図版72：④）。また西側（A区）の基底石については、石材を横長に置く傾向が認められる（第158図 写真図版71：②）。なお、基底石は東側同様、周濠底に直接設置されており、設置のための掘り方は認められなかった。

基底石の上には5cm大～20cm大の石が葺かれていた。基底石下面と造り出し上面との比高は、西端部

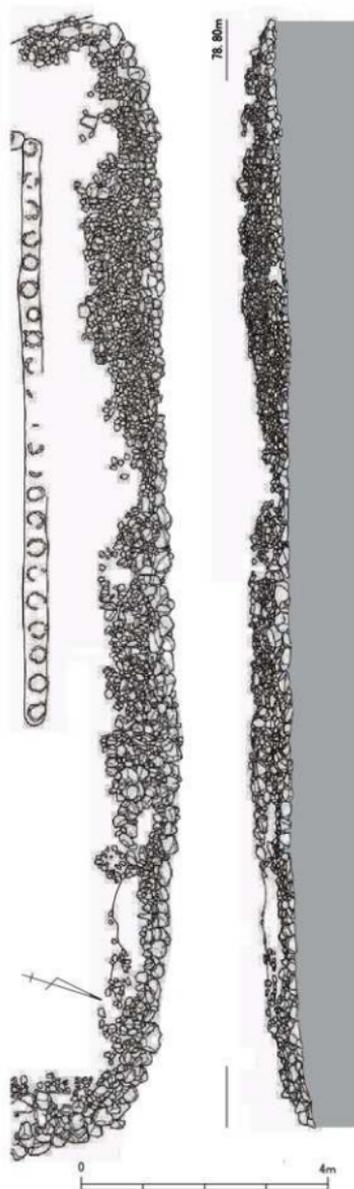


第160図 南造り出し南側斜面葺石断面

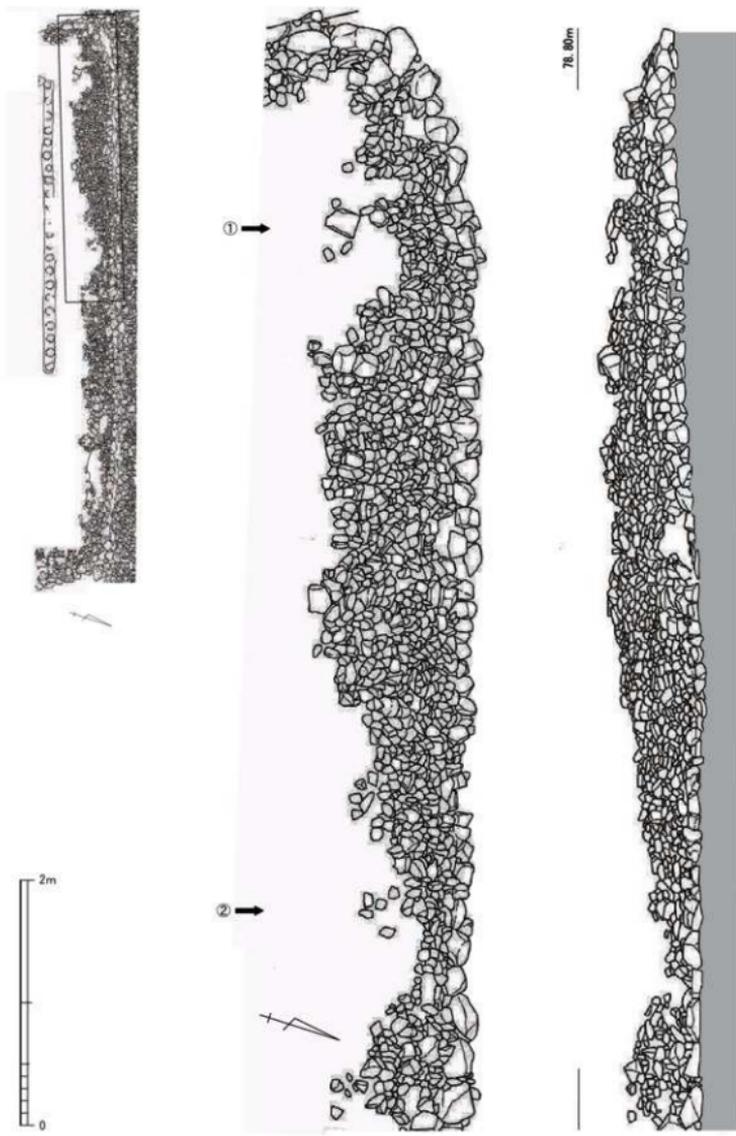
(Aライン)で50cm、中央部(Bライン)で42cmと、東側は徐々に低くなっている(第160図)。また、その傾斜角は、Aラインで約30°、Bラインで約25°と、東側ほど傾斜が緩くなっている。これは、東側ほど崩落の規模が大きかったことに起因する可能性も考えられる。

また、A区においては、2箇所において、目跡の可能性のある石の葺かれ方の変化点が認められた(第158図矢印①②)。矢印①においては、その西側が立方体に近い石材が基底石として使用されているのに対して(写真図版71:②)、東側は横長の石材が用いられている。東側の目跡(矢印②)においては、その西側が10cm大のほぼ同じ大きさの石が葺かれているのに対して、東側においては20cm大の石材も一部で用いられている。

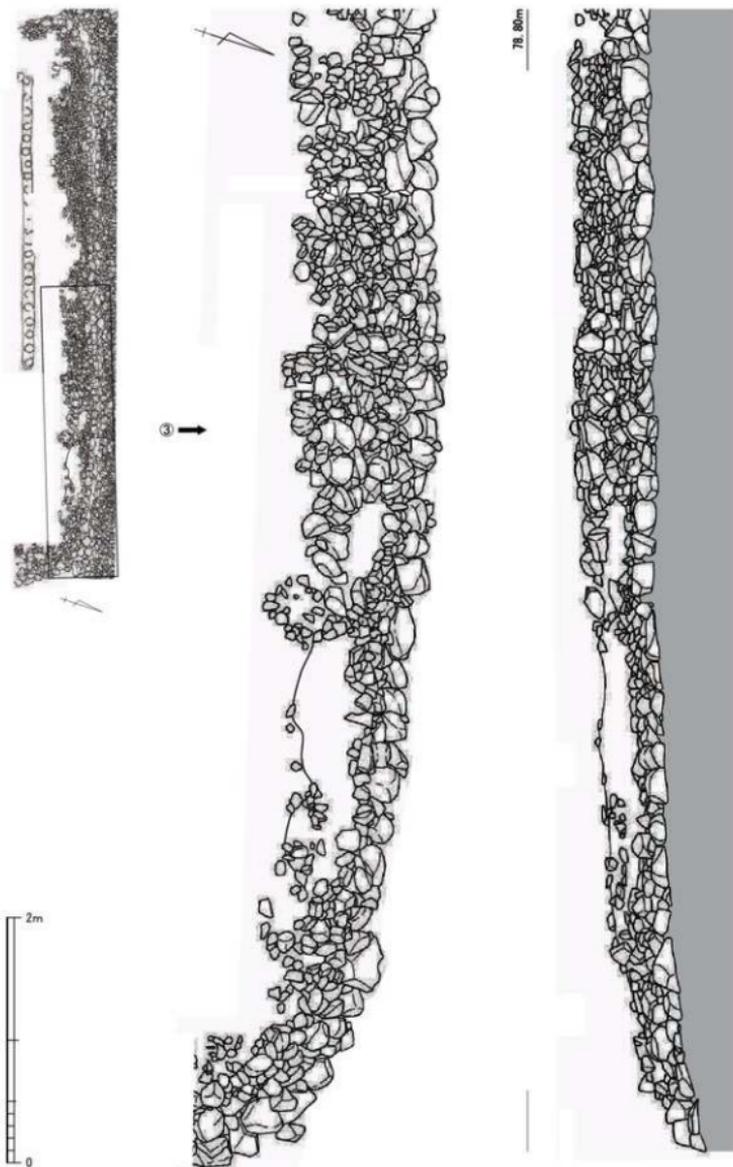
B区においても1箇所でも認められた(第159図矢印③)。A区東側目跡から続くもので、これより西側は20cm大の石材が部分的に用いられている(写真図版72:③)。一方、目跡の東側は10cm~15cm大の石材が均質に葺かれている(写真図版72:④)。



第161図 南造り出し北側斜面葺石



第162図 南造り出し北側斜面葺石 (A区)



第163図 南造り出し北側斜面葺石 (B区)

(7) 北側斜面

検出状況 造り出し北側の斜面で、前方部1段目斜面とセットで区画溝をなす南側の斜面である(第161図 写真図版77・78・82~85)。南造り出しのなかでは唯一、一辺全体が検出された斜面である。基底部における規模は、北西隅から北東隅間で18.60mを測る。

斜面には葺石が葺かれ、その状況が保たれていたが、場所により残存状況が異なる。北東隅付近の残存状況がやや悪く、基底石底部から30cmの高さまでしか残存していなかった。また、A区東側でも基底石底部から30cmの高さまでしか残存していない箇所が認められたが、これは昭和46年度調査(第17図)で削平された所である。A区中央部が最も良好に残存しており、基底石底部から80cmの高さまで残存していた(第162図)。

基底石 基底石については欠くことなく、完存していた。その底部の標高は、北西隅で78.00m、中央部で77.80m、北東隅で77.40mとなっている。この標高は、前方部の基底石とほぼ対応するもので、後述するように、基本的には前方部1段目斜面とセットで造られたものと考えられる。

基底石は、10cm大から45cm大の石が使われていた。角礫もしくは亜角礫が大半で、河原石の使用はわずかである。しかし、場所によりその大きさ等に差が認められる。

まず、A区西端部、造り出し北西隅付近では、20cm大~40cm大の角礫が使われている。これらの石材は、周濠底に横長にして置かれていた。一方、矢印①以东(A区)は、20cm以下の石材が使用されている(第162図 写真図版83:①・②)。平均的には10cm大の石が目立つ傾向にある。また、石材自体も縦長にして置かれる傾向が認められる。さらに、矢印②以东(B区)においては、再び20cm大~45cm大の石材が使用され、横長に使用されている(写真図版84:③・④)。

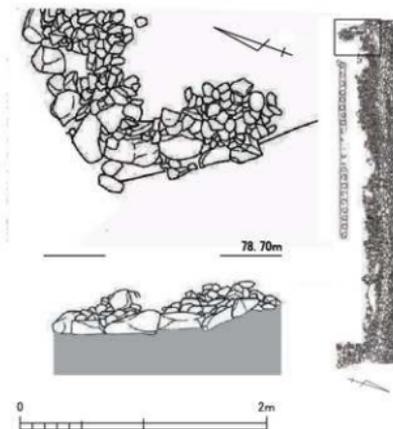
葺石 A区においては、基底石の大きさとは無関係に10cm大の石材が使用されていた。基底石同様、角礫もしくは亜角礫が大半で、河原石の使用はわずかである。いずれも、縦長に使用されている。一方、矢印②以东においては、これら葺石のなかに20cm大の石材が目立ち、葺かれた石材に均質性は認められない(写真図版84:③)。特に矢印③以东は、20cm~25cm大の石材が主に用いられる傾向が認められる(第163図)。なお、この位置は造り出し上面埴輪列東端とほぼ一致するものである。

石材 河原石は閃緑岩、角礫は閃緑岩・斑れい岩・花崗閃緑岩が使用されている(第6章第7節)。

(8) 西側斜面

検出状況 基底石で1m・4石分、葺石で1.1m分と、検出した範囲は限られている(第164図)。

基底石 基底石は、40cm~50cm大の石が横長に設置されている。基底石底部のレベルは75.36mで、検出した限りでは一定している。葺石の残存状況は良好ではなく、基底石底部から35cmの高さまでしか残存していない。



第164図 南造り出し西側斜面葺石

(9) 区画溝

検出状況 南造り出しは、前方面とは直接接続していない。造り出し4面に斜面を有し、基石が巡らされている。本来前方面に接続する北側についても斜面を有し、溝状をなしている。その状態から、本報告では「区画溝」と称し、この造り出しと前方面が近接する地区について報告する。

区画溝は、造り出し北側斜面と前方面南側1段目斜面からなる（第166図 写真図版77～85）。先述したように、基底石のライン・レベルから、前方面斜面と造り出し斜面とは、相互に意識して造られたことは明らかである。ただし、前方面側と造り出し側で、互いを意識したような基底石の配列・使用法等は認められない。石材の大きさ、置き方等について、整合性は全く認められない。造り出しと前方面を近接させることを意識して造られたようである。

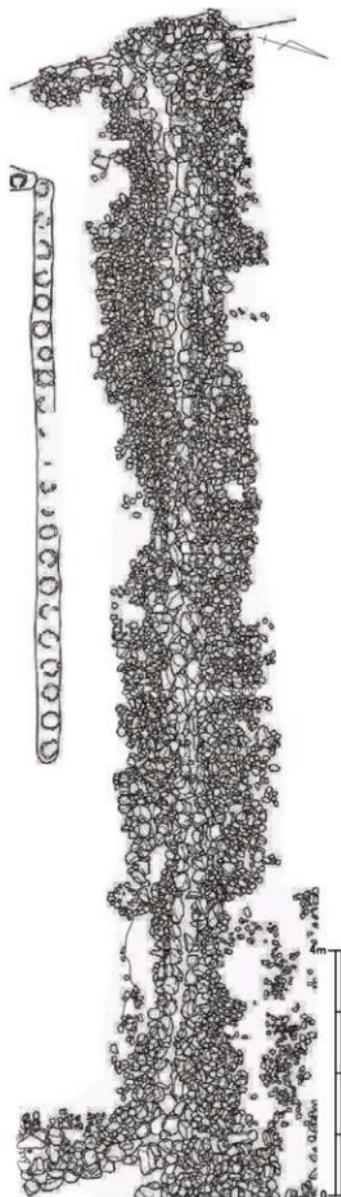
以下、区画溝の底部を中心に報告する。

A 区 平均して5cm～15cm、最大で30cmの間隔が認められる（第167図）。この30cmの間隔が認められる地点は、造り出し北西隅と墳丘くびれ部が近接する箇所である。造り出し北西隅とくびれ部とは正確に対応せず、わずかに後円部側にずれていることによるものである。

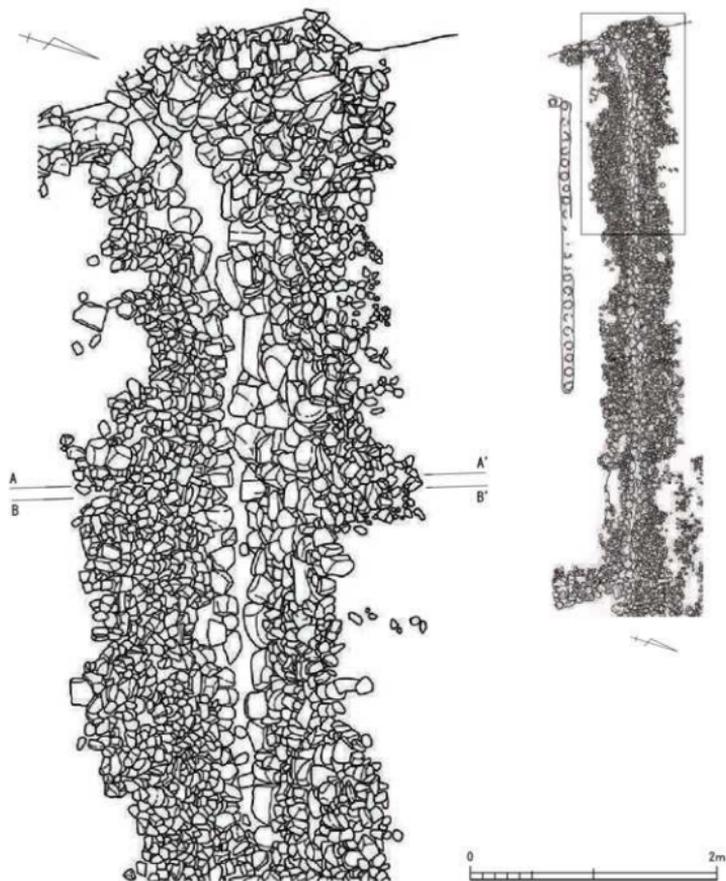
なお、両基底石間は基盤層が露出しており、底部には石材は置かれていない（第171図 写真図版79：②）。



第165図 区画溝の検出



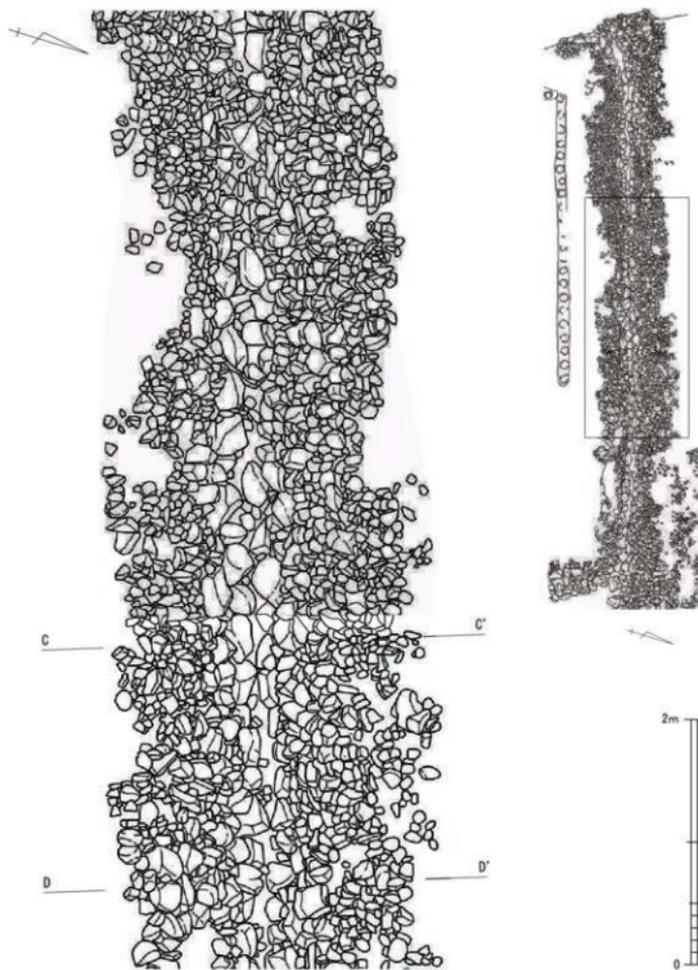
第166図 区画溝



第167図 区画溝 (A区)

B 区 両側の基底石が接している箇所が多いが、場所によっては両者が重なっている箇所も認められる (第168図 写真図版80:③)。前方部側の基底石が造り出し側の基底石の上になる箇所と、逆の箇所とが認められる。以上から、墳丘と造り出しはほぼ同時に造られたものと考えられる。ただし、両者の基底石が重なっている箇所においても、その重なりはわずかである。少なくとも、A区と同様、底部に石は置かれていない。

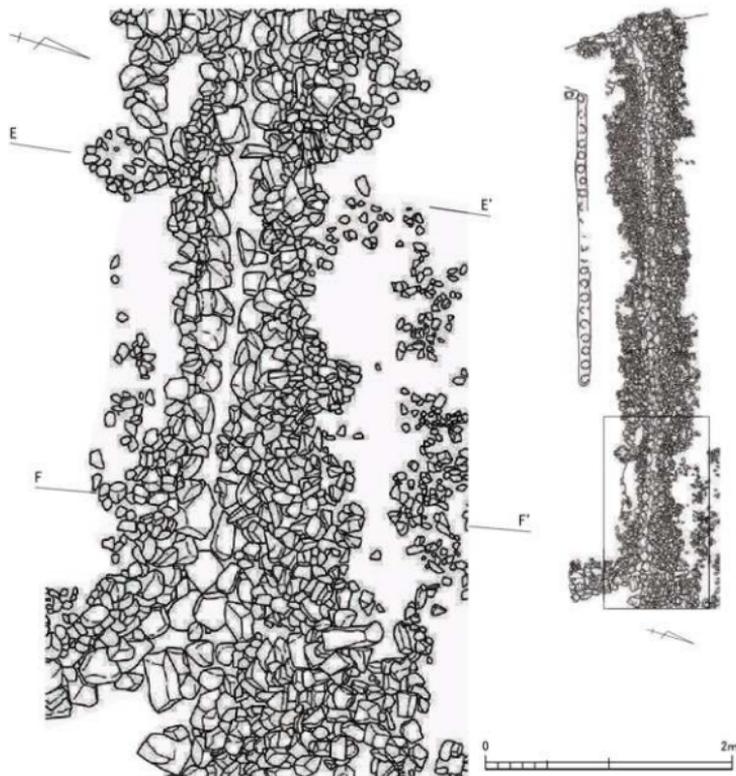
C 区 5cm~10cmの間隔が開けられている (第169図 写真図版81:①・82:②③)。ただし、東端部造り出し北東隅付近は、両側の基底石間の底部に面を有した石が置かれている (写真図版82:③・④)。この石の上側に両側の基底石が置かれている。また、この箇所は、他の地点と比べて底部の傾斜が顕著となっている。



第168図 区画溝 (B区)

以上のように、墳丘側・造り出し側斜面がセットで造られている。しかし、その底部のラインは直線的ではなく、わずかに蛇行傾向にある。

区画溝の規模 横断面はV字形に近く、造り出し上面レベルでの幅は1.80m～2.00mを測る。そして、同上面からの深さは、AラインからDラインにかけては60cm (第171図)、Fラインでは45cmを測る。また、造り出し側への立ち上がりは40°、前方部側への立ち上がりは35°と、わずかに前方部側のほうが緩やかな傾斜が認められる。ただしFラインにおいては、両側とも傾斜が緩やかな傾斜が認められる。



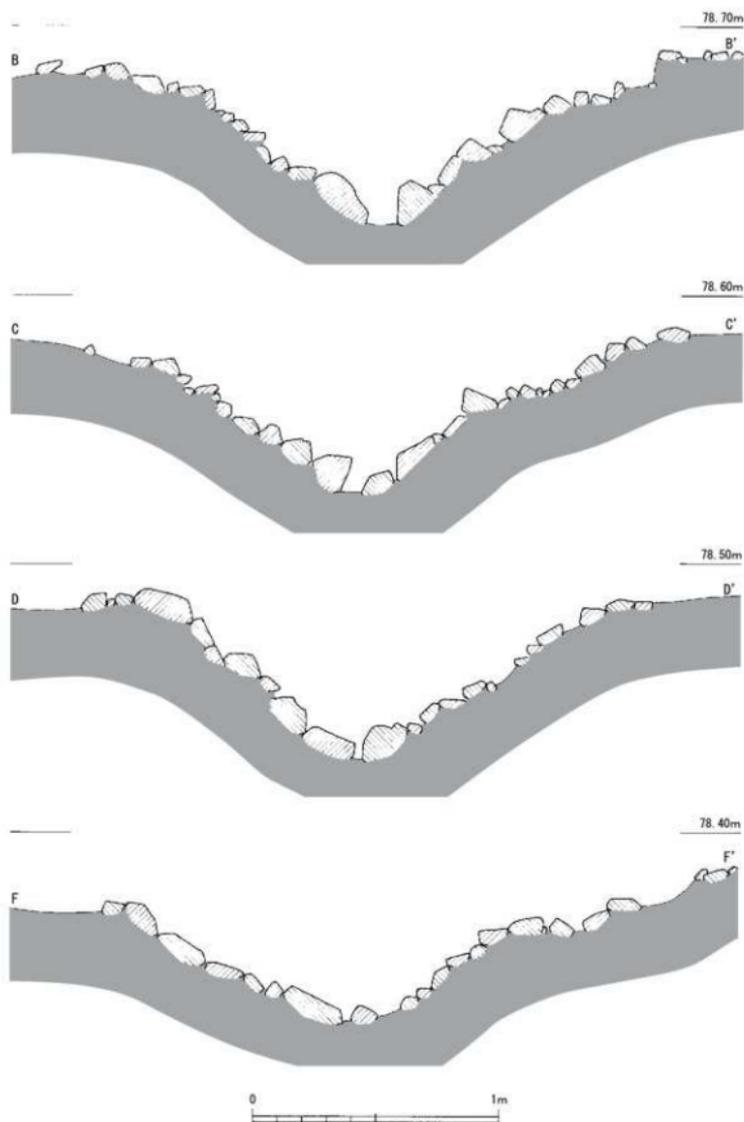
第169図 区画溝 (C区)

区画溝の埋没 区画溝内は、2層の堆積からなる(第172図 写真図版85:②)。下層は、流水に起因した堆積で、細砂を中心に一気に埋没したようである。このため、下層および底部からは埴輪は1点も出土していない。また、この層は周濠内では認められなかった。このため、当層は古墳築造後あまり時間を経ない時期の堆積と考えられる。

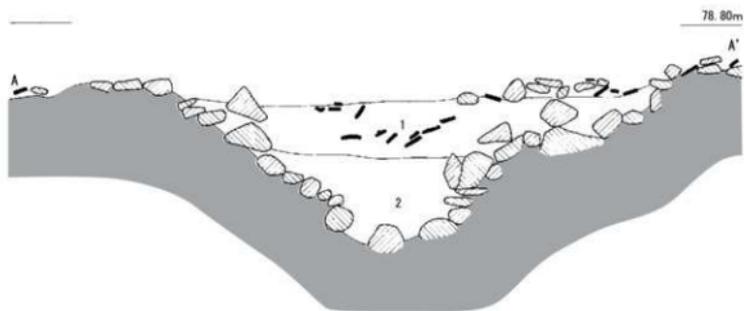
一方、上層については下層堆積後凹地状をなしていた箇所徐々に堆積し、その後土壌化した層と考えられる。この層中及び上面からは、埴輪がまとまって出土している(写真図版86~91)。出土状況については、後述する(第5章第2節)。



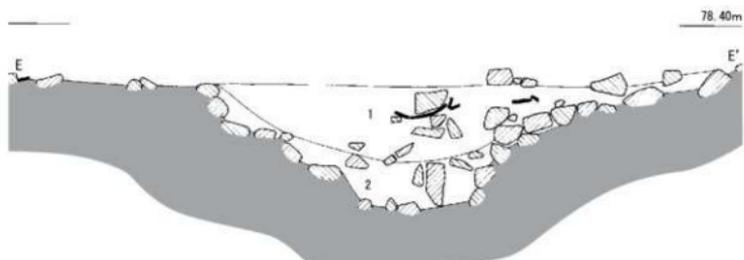
第170図 区画溝内上層部断面



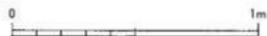
第171図 区画溝横断面



1. 暗黒灰色極細砂混じりシルト 2. 暗青灰色シルト質極細砂～細砂



1. 黒灰色シルト質極細砂 2. 暗灰色シルト質細砂～中砂



第172図 区画溝土層断面

3. 北造り出し (巻首図版18・19)

(1) 概要

第2次調査で、西北部を除いては、全体の3/4以上が検出されている(第174図 写真図版92)。ただし、斜面全体が検出できたのは、東側(東側斜面)に限られる。前方部とは帯状をなす石敷きにより区画され(石敷き遺構)、斜面には葺石が葺かれている。造り出し上面は、ほぼ築造当初の面が残存していた。

(2) 形状・規模

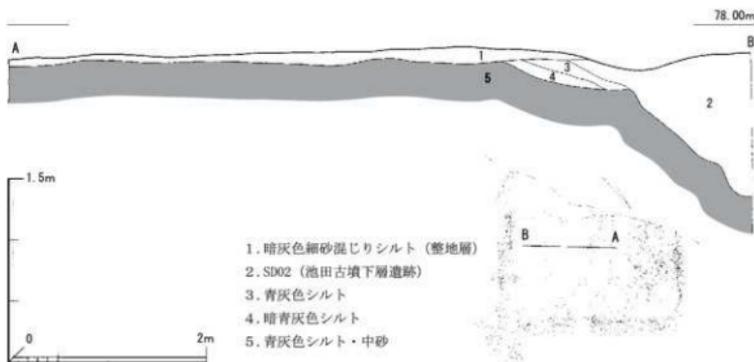
平面形は、基底部・上面ともに方形に近い形態をなすものと考えられる(第174図)。ただし、唯一検出された北東隅は、角張らず隅丸状をなしている(写真図版94:③)。北側斜面から復元される造り出し北側ラインは、前方部のラインとはほぼ平行する。南北方向については、北側裾部と石敷き遺構北辺部間で14.50m、北側肩部と石敷き遺構北縁間で12.80mを測る。東西方向については、石敷き遺構北縁ラインにおいて、東側裾部から13.80m検出している。上面では、最大(石敷き遺構北側)12.00m検出している。

横断面・縦断面ともに台形をなし、北周濠との比高は、北側で40cm、東側で55cmを測る(第179図・第180図・第182図)。

(3) 造り出しの構築

調査終了後、造り出し中央部に、幅1mのトレンチを南北方向に設定し、造り出し基盤の土層観察を行った(第173図)。この結果、造り出し上面の下10cmは、攪乱が顕著な土壌層を観察することができた。造り出し上面を整形した際の整地層と考えられる。以下の層については、自然堆積による堆積層となっていた。特に、5層においては、シルトと中砂のラミナが顕著に認められた。池田古墳が立地する谷の埋没過程における一堆积と考えられる。

以上から、北造り出しの構築は、部分的な整地を伴うが、基盤層の削平によるものと考えられる。



第173図 北造り出し断割り断面



第174図 北造り出し

(4) 造り出し上面

概要 造り出し上面は、ほぼ平坦であるが、西側ほどわずかに高い傾向にある。造り出し中央部における標高は77.56m、西端部中央で77.80mである。上面からは、散乱した埴輪片と礫が検出されている。礫は、5cm～10cmの小礫が大半である。小礫は、敷きつめられた状況での出土ではなかった(第174図)が、当初は敷きつめられていたものと考えられる。なお、埴輪片の出土状況等については後述する(第5章第2節)。

埴輪列 南造り出しとは異なり、埴輪列またはその掘り方については、検出されなかった。

(5) 東側斜面

概要 北造り出しのなかで、全体が検出された唯一の斜面である。斜面全面に葺石が葺かれた状態で検出されている(第176図 写真図版99-102)。ただし、中央部よりわずかに南よりの箇所において後世の攪乱を受け、幅約1.50mにわたり葺石は残存していなかった。この箇所を除いては、基底石・葺石ともに当初の状況が保たれた状態で検出されている。このため、基底石のラインもほぼ直線的である。他の斜面同様、基底石は掘り方を伴うことなく、周濠上に置かれている。

基底石下面と造り出し上面を基準とした斜面の傾斜は、Aラインで33°、Bラインで30°、Cラインで31°、Dラインで29°、Eラインで28°を測る(第179図・第180図)。徐々に北側ほど傾斜がゆるくなる傾向が認められる。さらに、葺石上面の傾斜を測ると、A～Cラインでは30°であるのに対して、D・Eラインでは20°と、その差は顕著である。

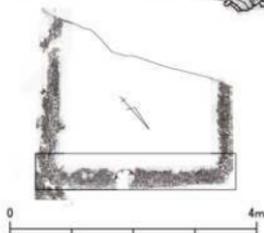
基底石のレベルは、A区南端で76.50m、B区北端で76.90mと、北側ほど高くなる傾向が認められる。周濠底と造り出し上面との高低差は、Aライン・Bラインで60cm、Cラインで75cm、Dラインで55cm、Eラインで40cmと、北側ほど低くなる傾向が認められる(第179図・第180図)。

葺石 後世の攪乱を受けた箇所より南側をA区、北側をB区とすると、A区とB区とでは、石の積み方が大きく異なる。

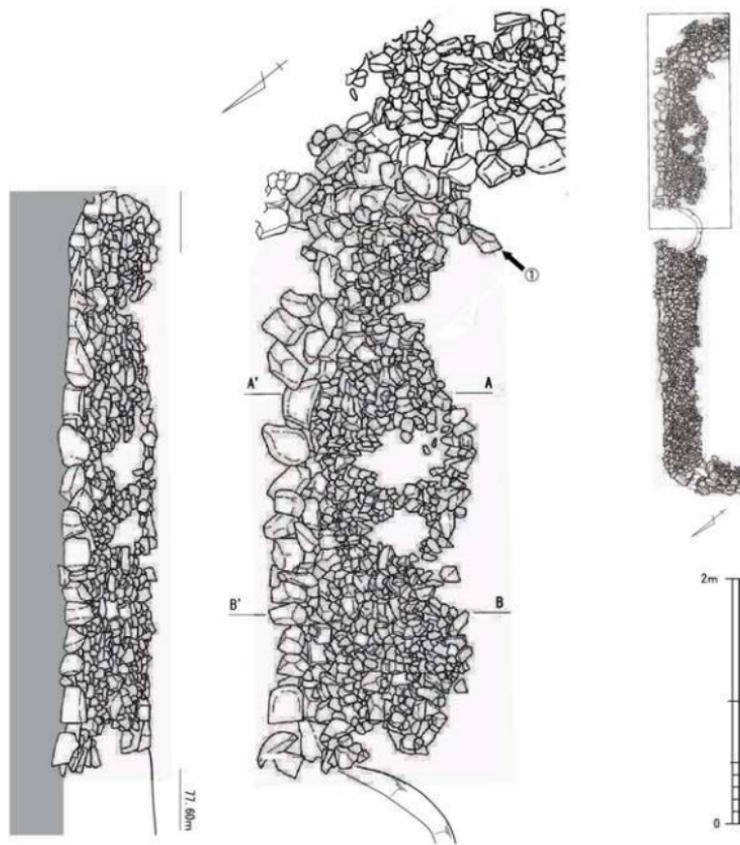
A区 A区(第177図)では、20cm～40cm大の角礫を



第175図 北造り出し東側斜面の検出



第176図 北造り出し東側斜面葺石

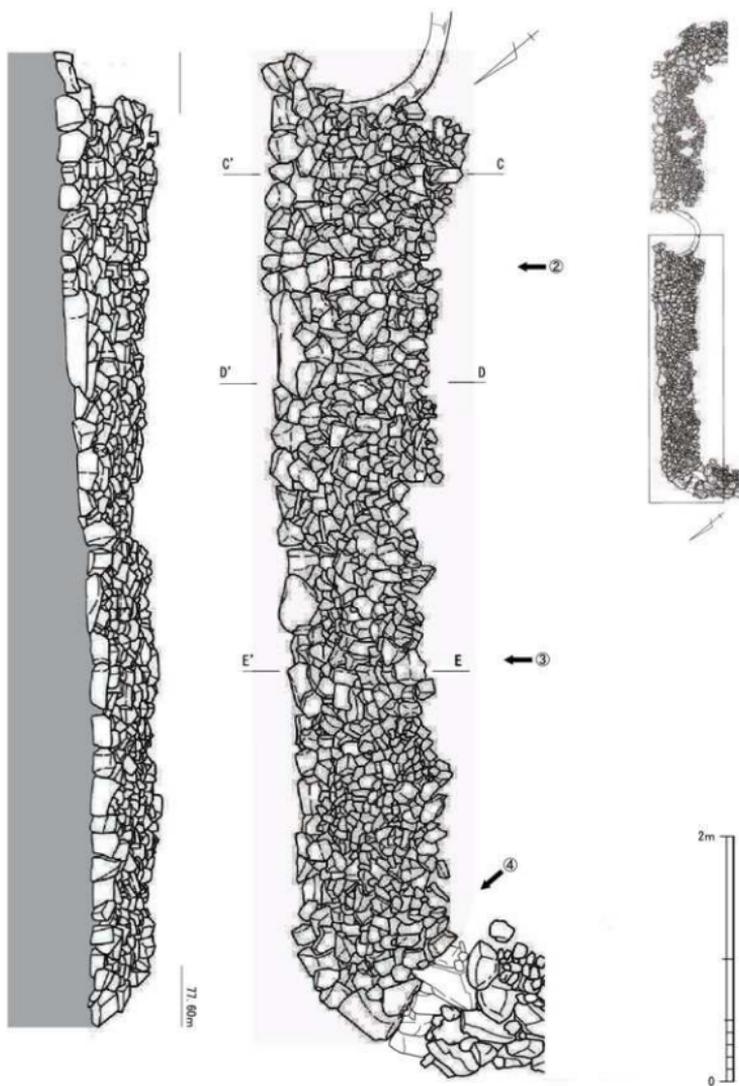


第177図 北造り出し東側斜面葺石 (A区)

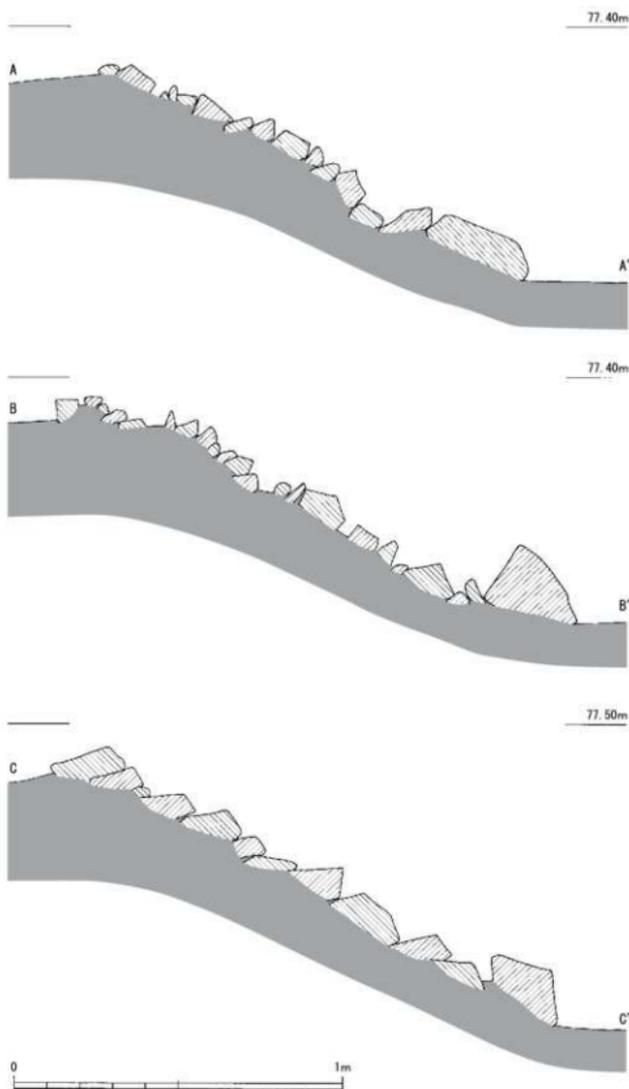
基底石とし、基本的に縦位に置かれている。その後、斜面に葺かれた石も角礫で、5cm~10cm大と小さい傾向が認められる。そして、これらの石は基底石の上に直接積まれるのではなく、基底石の背後から積まれている（第175図・第179図）。この特徴が顕著なのがBラインで、最下段の石が基底石の機能を果たしていない（第179図）。したがって、葺石上面のレベルは、基底石の背後で大きく落ち込んでいる。

また、A区の南端部では、目跡と考えられる石の葺き方・大きさに大きな変化点が認められる（第177図矢印① 写真図版102：①）。さらに、A区中央部付近では、斜面の一部に葺石が全く認められない箇所が2箇所認められた。当初から石が葺かれていなかったのかどうかについては、調査では明確にできなかった。ただし、周囲の斜面と比較して土色の変化等は認められなかった。

B 区 B区では、他の葺石同様、基底石の上に石が直接置かれるようになる（第180図）。特に、目跡（第178図矢印② 写真図版101：②）を境にして、積み方に大きな変化が認められる。目跡より北側にお

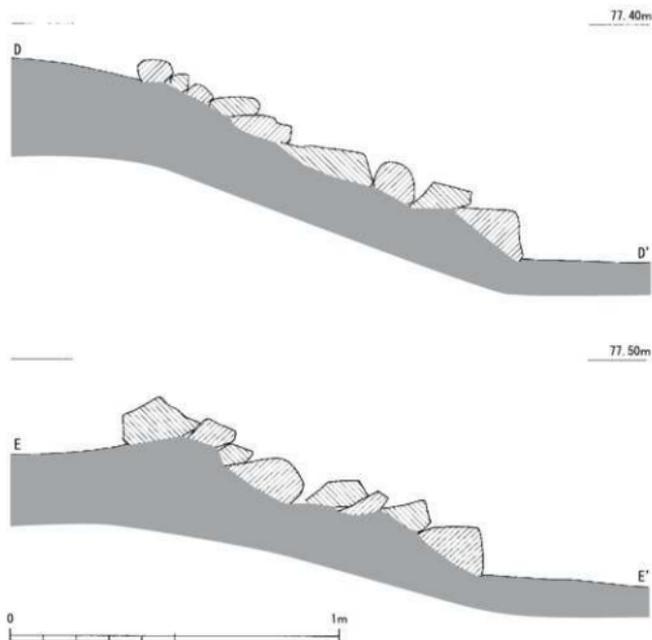


第178図 北造り出し東側斜面葺石 (B区)



第179図 北造り出し東側斜面墓石断面(1)

跡
し
丘



第180図 北造り出し東側斜面葺石断面(2)

いは、30cm大の角礫が多く、基底石として使用されている。目跡付近には90cm大の石も用いられている。さらに、B区中央部付近の目跡(第178図矢印③ 写真図版101:①)より北側においては、基底石が周濠側に対して明確な面をもつ傾向が顕著である(第180図 Eライン)。

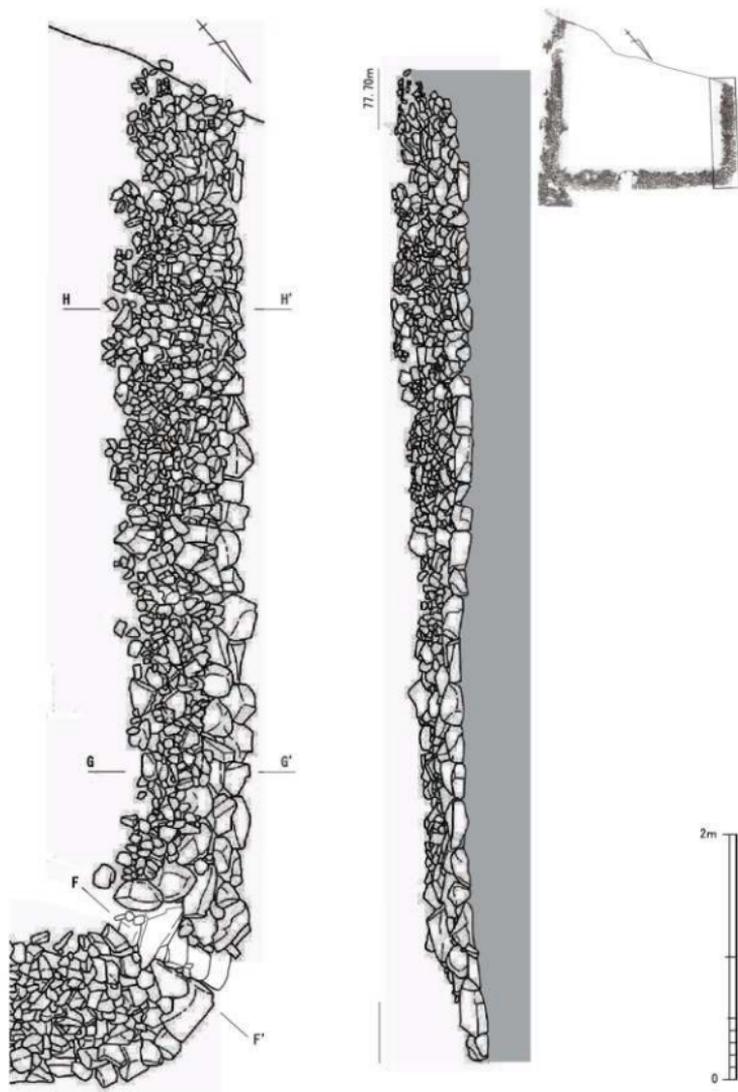
なお、造り出し北東隅においても石の積み方が大きく変化している(第178図矢印④)。詳細については北側斜面の項で報告する。

斜面に葺かれた石材は、A区同様角礫が大半である。ただし、その大きさが15cm大と、A区よりやや大きな傾向が認められる。特に、目跡②と目跡③の間は、より大きな石材が用いられている。B区全体に隙間なく葺かれており、石相互がかみ合っている。

(6) 北側斜面

概要 西側は調査区外までのび、全体は検出されていない。検出した長さは、基底石ラインで8mである。東側斜面同様、斜面全面に葺石が葺かれた状態で検出されている(第181図 写真図版95~98)。全体的に残存状況は良好で、基底石のラインもほぼ直線的である。他の葺石同様、基底石は掘り方を伴うことなく、周濠上に置かれている。

基底石下面と造り出し上面を基準とした斜面の傾斜は、Fラインで20°、Gラインで21°、Hラインで29°と、西側ほど傾斜が急になっている(第182図)。葺石上面の傾斜を測ると、Fラインで14°、Gラインで



第181図 北造り出し北側斜面葺石

25°、目ラインで30°と、西側ほど傾斜が急である。特に、北東隅（Fライン）の傾斜は、際だって緩やかとなっている。

基底石のレベルは、東側斜面と比較して変化が激しく、北東隅（Fライン）で76.80m、Gラインで76.95m、Hラインで76.95m、西端部で77.00mと、そのレベルは波状をなしている。周濠底と造り出し上面との高低差は、Fラインで30cm、Gラインで35cm、Hラインで55cmと、西側ほど大きくなっている（第182図）。ただし、平面的には、基底石のラインはほぼ直線状をなしている。

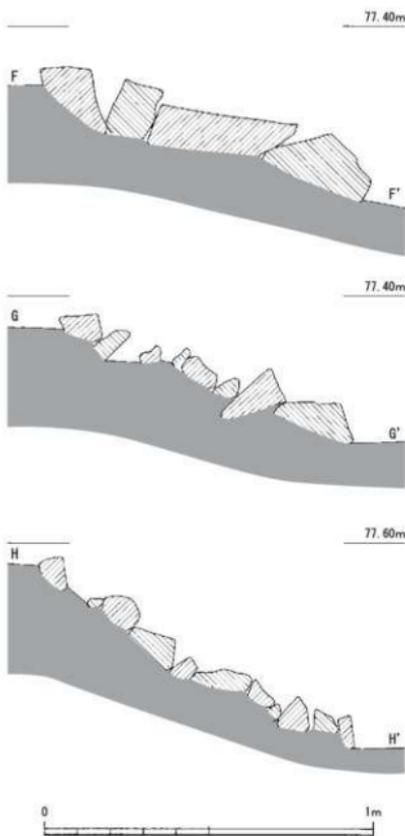
基底石 基底石は、北東隅で東側斜面に対して大きく変化する（写真図版98：④）。まず、40cm～50cm大の角礫が使用されている。特に北東隅において、この傾向が顕著である。北東コーナーを弧状にするための手段とも考えられる。また、東側斜面北側では基底石の面が意識されていたが、北側ではその傾向は認められない。また、Hラインあたりから西側の基底石は、小型となっている。

葺石 斜面に葺かれた石についても20cm～40cm大の大きな石が葺かれている。特に、北東隅付近（Fライン以西）は特微的で、基底石と同規模の石材が造り出し上面まで使用されている（写真図版98：④）。周濠底部から造り出し上面まで使用された石材は、わずか4石に限られる（第182図 Fライン）。石を斜面に貼り付ける傾向が強く感じられる。

ただし、目跡は明確にできなかったが、Hラインの東側1.80mのあたりから西側については、斜面に葺かれる石が10cm～15cm大と小規模になる。さらに、Hラインから西側は、基底石自体が20cm以下と小規模となっている（写真図版97：①）。

この他、北側斜面全体が、東側斜面と比較して、石の葺き方が推定な傾向が伺える。東側では、上下左右の石が噛み合っているのに対して、北側では隙間が目立つ傾向にある。

石材は、角礫が中心で、閃緑岩および花崗閃緑岩からなる（第6章第7節）。



第182図 北造り出し北側斜面葺石断面

造り出し

(7) 石敷き遺構

概要 北造り出しは、南造り出しとは異なり、南辺全体が前方部に接している。ただし、墳丘との境は、礫が帯状に敷きつめられていた(写真図版105~111)。本報告では「石敷き遺構」と呼称し、以下報告していく。なお、石敷き遺構についても、斜面の葺石同様、保存を前提とした調査ということで、詳細な所割り調査を行うことはできなかった。

石敷き遺構は、前方部のラインと平行して約13.50m検出した(第183図)。西側については、調査区外までのび、東側については造り出し北東隅で前方部1段目斜面と造り出し北側斜面に解消されている。全体的にはほぼ完存した状態で検出されているが、西側において1箇所、後世の攪乱を受け、検出できなかった箇所がある。また、前方部の1段目テラスより北側が後世の削平を受けているため、前方部側との関係については明らかにできない。

石敷き遺構は、顕著な溝状をなさず、石の上面が水平になるよう礫が敷き並べられていた。ただし、後述する東側でレベルが急激に下がる箇所については、溝状をなしている。その他、上面のレベルはわずかに前方部側の方が高くなる傾向が認められる。前方部斜面への立ち上がりの可能性も考えられるが、前方部との関係は先述したように、後世の削平のため、調査ではその詳細を明らかにすることはできなかった。

石敷き遺構底部(礫上面)のレベルは、西端部で77.90m、中央部(Cライン)で77.70m、東部(Fライン)で77.30mと、全体的に東側への傾斜が認められる。ただし、その傾斜はわずかである。しかし、東端部で76.70mと急激にそのレベルが低くなっている。

また、平面的な石の敷き並べ方から、大きく4区(西から1区~4区)に分けることができる(第183図)。以下、各区の詳細について報告していく。

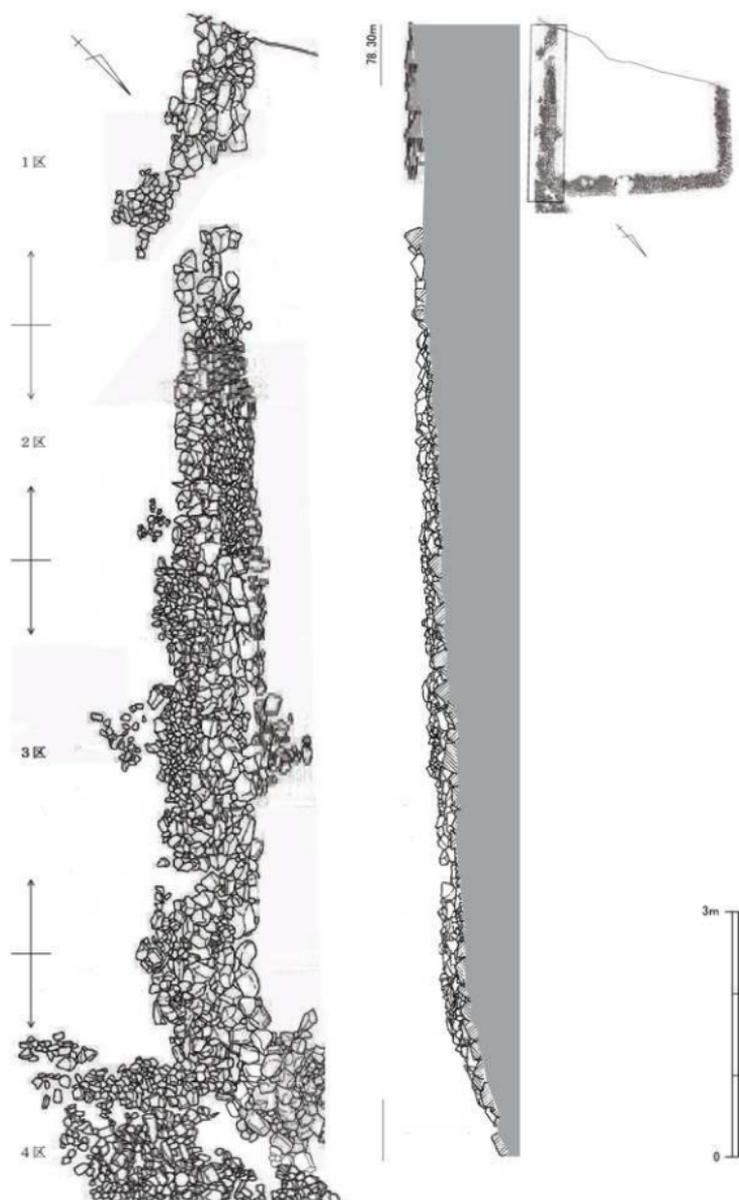
1区(第184図 写真図版107) 石敷き遺構西端部にあたる。西側は調査区外へのび、検出した長さは3.60m、幅は最大で1mである。30cm~40cm大の石材と、20cm大の石材が使用されている。角礫が主体であるが、大小の石材とも、そのなかに河原石が数石認められる。30cm~40cm大の石を配置し、その隙間に10cm大の石を埋め込むようにして、敷かれている。ただし、東側の2区付近は30cm~40cm大の石が大半で、隙間がやや目立つ。当初からの状態であるのかについては、調査では明らかにできなかった。両側に石が並べられ水路状をなすようにも感じられる(第184図Bライン)。

横断面をみると、2種の大きさの石材を含め、各石材の上側が面をもつように並べられている(第184図Aライン)。さらに、その面のレベルがほぼ揃えられている。わずかに南北両側が高く、横断面が弧状をなす傾向も認められる。中央部における礫上面の高さは、77.94mである。

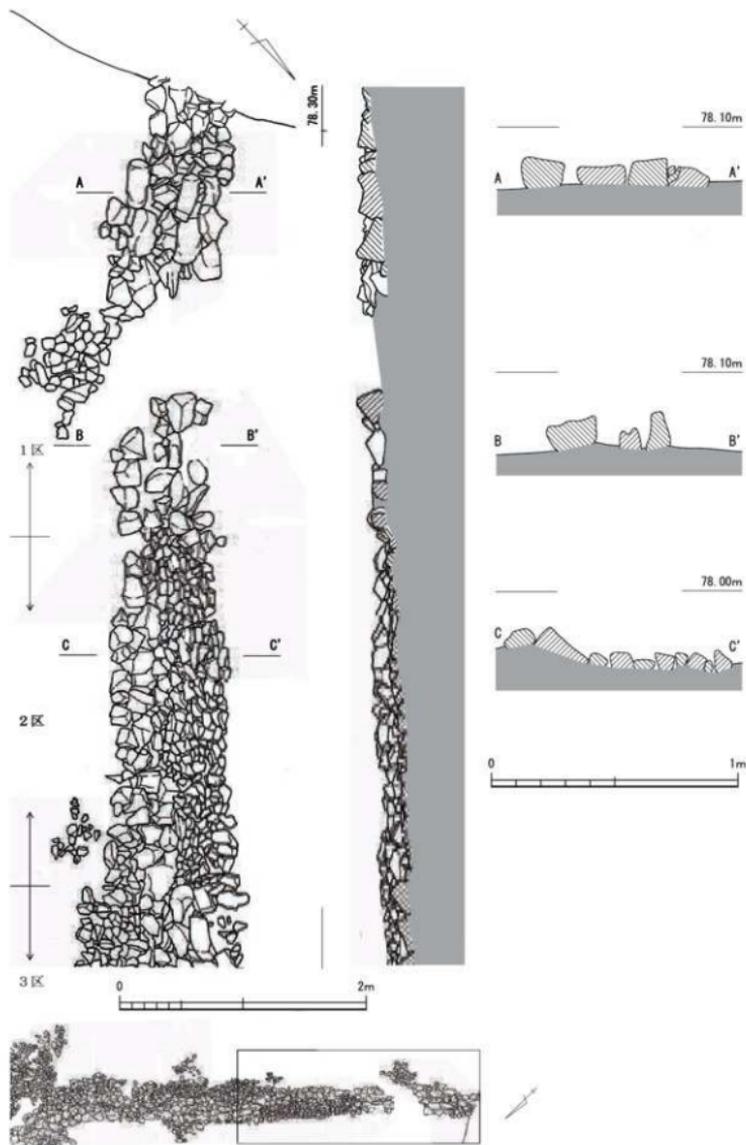
2区(第184図・第185図 写真図版108:②・③) 検出した石敷き遺構の中央部西側にあたる。検出した長さは3.00m、幅は最大で1mである。20cm大の石材と10cm~15cm大の石材が使用されている。20cm大の石のうち数石が河原石である以外、全て角礫が使用されている。

当区の石材の使われ方はかなり特徴的である。2区中軸から北側は10cm~15cm大の石が敷き詰められ、中軸より南側は20cm大の石が置いている。10cm~15cm大の石が敷きつめられた範囲の幅は、西側で40cm、中央部で60cm、東側で40cmと、2区全体で一定していない。10cm~15cm大の石は、その敷きつめ順が復元できないほど隙間なく敷きつめられ、互いに噛み合った状態であった。このため、特定の石を抜くことも困難な状況である。

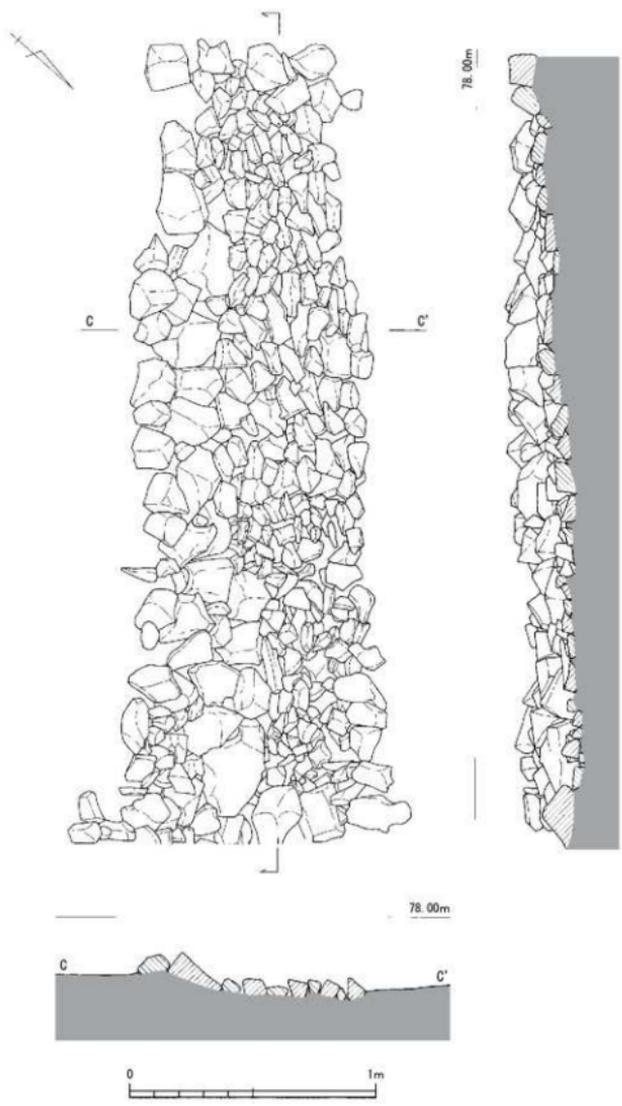
一方、中軸より南側の石はほぼ2列に並べられ、その上面のレベルが北側より高くなっている。加え



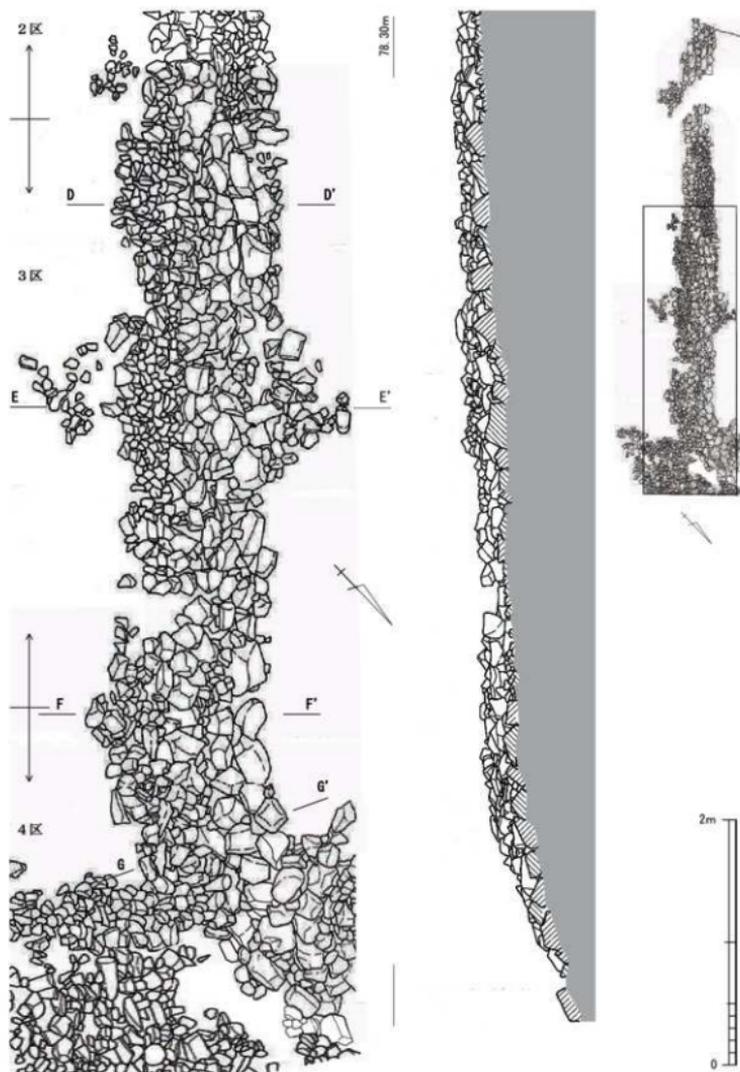
第183図 石敷き遺構



第184図 石数き遺構 (1区・2区)



第185図 石敷き遺構（2区）



第186図 石敷き遺構（3区・4区）

て、石材の上側に面をもたせる意識は認められず、凹凸が顕著である（第185図）。一方、北側の小礫群とはきっちり噛み合った状態で石が敷かれている。

これに対し、南側の大型の石の置き方には、上側に面をもつような意識は認められない。また、10cm～15cm大の石の上面が意識的に揃えられていたが、石材が大型であることにもよるが、南側は明らかに高くなっている。前者とは10cm～15cmの比高が認められる。

横断面をみると、小石の上側は面をなすように並べられている（第185図）。さらに、その面のレベルがほぼ揃えられている。わずかに南北両側が高く、弧状をなす傾向も認められる。中央部における石上面の高さは、77.50mである。また、縦断方向の高さは、西端部で77.80m、東端部で77.60mと、東側へ緩やかに傾斜している。

3 区（第186図 写真図版109・110） 2区の東側約4.80mの区間である。一部に空白部が認められるが、ほぼ全体が検出されている。幅は1.20m～1.50mを測る。石材は、25cm～40cm大の石と、10cm～15cm大の角礫が使用されている。2種の石材の敷かれ方が2区とは大きく異なり、南側に小石が、北半部に大型の石が並べられている。まず、大型の石が石敷き遺構の主軸に沿うように縦長に並べられている。その後、南側に小石がわずかな斜面上に沿うように積み上げられている（写真図版109：①・②）。基本的に葺き石と同じ積み上げられ方である。

このような並べられ方は、3区西半で顕著である。東半では、南側の小石が15cm～20cm弱と、若干大きくなる傾向が認められる。大型の石材の並べられ方は同じである。

横断面（Dライン：第188図）をみると、大型の石が並べられたあたりは、上側に石の面が揃うように並べられている。これに対して、小石については面を意識した並べ方は認められない。また、全体的に、大型の石の上面のレベルが77.65mであるのに対して、南端部の石の上面のレベルは77.80mと15cm高くなっている（写真図版110：③・④）。

一方、東半部（Eライン：第188図）になると、石敷き遺構の南側・北側とも中央部より高くなっている。南端が77.85m、北端が77.80mであるのに対して、中央部は77.65mと15cm～20cmの比高が認められる。また、Dラインと比較して、南側ほど石の上面が揃えられている傾向が認められる。

さらに、4区との境（Fライン：第188図）になると、その上面のレベルは南側から北側へわずかに傾斜する傾向が認められる。南端部で77.60m、北端で77.40mと、20cmの比高が認められる。また、上面が揃えられている意識も認められない。

4 区（第186図 写真図版111） その底部が弧状をなし、東側へ急激にその高さを減じていく。4区西端での標高が77.40mであるのに対して、東端部では77.00mと、40cmの比高が認められる。使用されている石材は、造り出し側と前方部側とで大きく異なる。造り出し側では20cm～40cm大と、比較的大型の石材が用いられている。一方、前方部側は15cm～20cm大の石材が主体である。

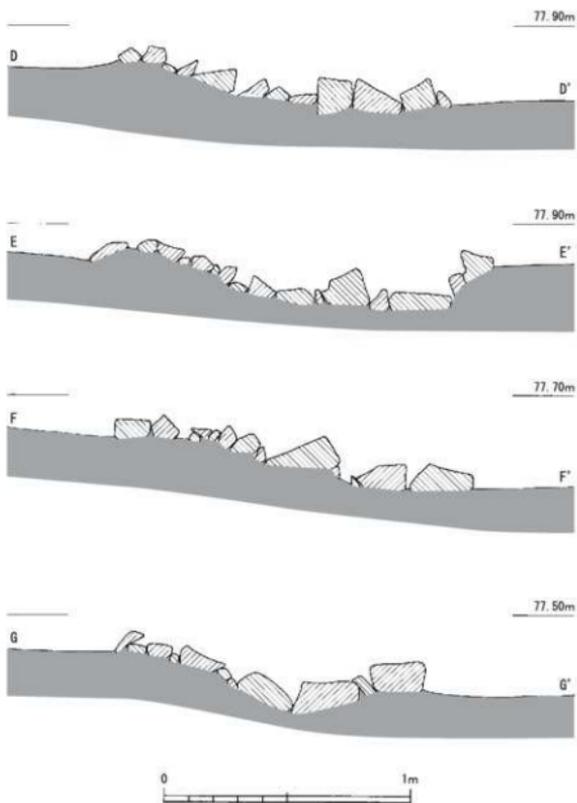
また、造り出し側と前方部側の境が溝状をなすが、この底部にも20cm～40cm大の石材が使用されている。墳丘側は葺き石の残存状況が良好ではなく、



第187図 石敷き遺構の検出

石敷き遺構底部との関係を良好に検出することはできなかった。ただし、わずかに検出できた葺石から、10cm大の礫が上記の底部の石の上側に積まれている。

横断面（Gライン：第188図）をみると、墳丘側の方が造り出し側より傾斜が急である傾向が認められる。この傾向は、当遺構の東側ほど顕著である。また、Gラインより東側は、底部に用いられた石材が上側に面をもつように置かれている。



第188図 石敷き遺構横断面

第4節 渡土堤

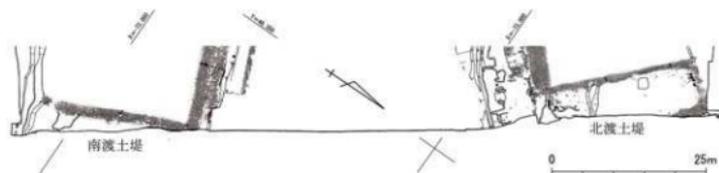
1. 概要（巻首図版20～26）

渡土堤は、造り出し同様、前方部の南側と北側の両側で検出されている（第190図）。いずれも第1次調査で検出されたものである。南北両側とも、前方部と外堤を直線的に結ぶように造られている。加えて、渡土堤の斜面には葺石が葺かれ、その基底石のラインは前方部1段目斜面基底石ラインにほぼ直交する。このため、渡土堤全体が、平面的に前方部に対して直交している。

ただし、南側・北側ともに、東側の多くが調査区外へ広がっており、全体を検出することはできていない。このため渡土堤の幅等の規模は明らかにされていない。全体的に、北渡土堤の方が良好に残存している。



第189図 南渡土堤の調査



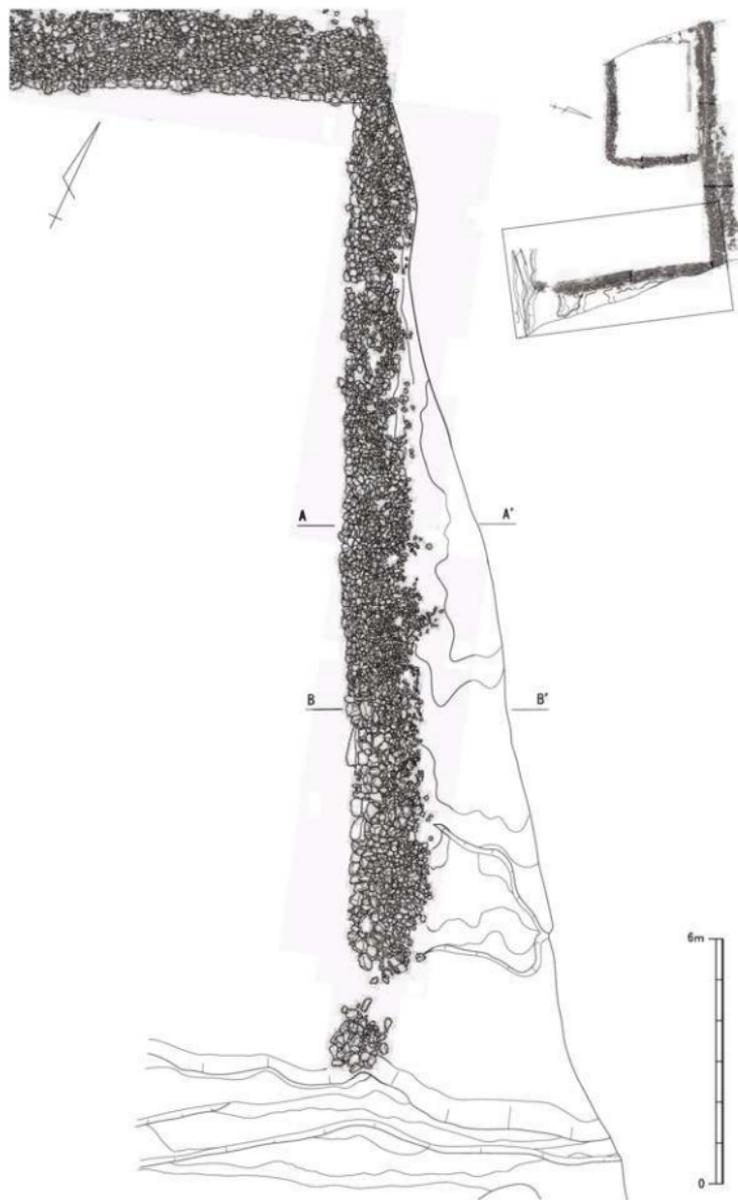
第190図 渡土堤

2. 南渡土堤

(1) 概要

東側の大半が調査区外にあたり、検出できたのは全体の約1/3に限られる（第191図 写真図版114～121）。ただし、西側斜面に関しては、前方部から外堤まで、ほぼ全体が検出されている。このため、縦断方向に関しては、その規模を明らかにすることが可能である。検出された長さは、基底部レベルで23.50mを測る。ただし、外堤の北側、外堤との接合部付近において一部途切れている。このことに関しては、項を改めて報告する。

一方、横断方向に関しては、全容を明らかにできた箇所はない。横断面は蒲鉾形をなすものと考えられる（第193図）。検出された基底部を基準とした最大幅は、5.50mである。また、基底部と上面との比高は、最も良好に残存していたAラインで、70cmを測る（第195図）。そして、斜面においては、墳丘・造り出し同様、葺石が葺かれていた。これに対して、上面においては、顕著ではないが外礫が少なからず検出されたことから、礫が敷き詰められていた可能性が考えられる。なお、東側斜面は全く検出されていない。



第191図 南渡土堤

(2) 構築方法

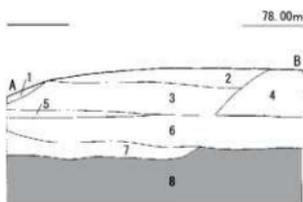
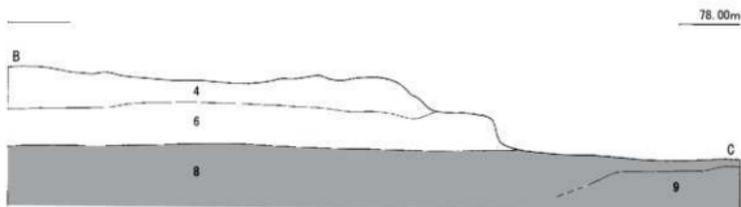
渡土堤南端部で、渡土堤の主軸方向およびこれに直交する方向にトレンチを設定し、断面観察を行った(第192図・第193図)。この結果、基本的に盛土によって構築されていることが明らかとなった(第193図)。基盤となる8層・9層に対して6層を盛り、平坦化させている。渡土堤横断面を見ると、その後渡土堤中心部に4層を盛り上げ、その周囲に1層～3層を盛り付けている。特に、2層については小礫と粘土を、3層については粘土をブロック状に混入させ、締め固められている。また、渡土堤縦断方向については、各層がほぼ水平に盛り上げられている。



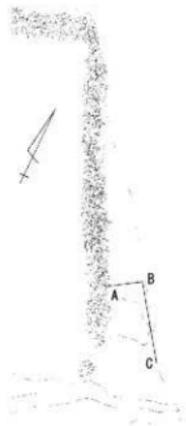
第192図 南渡土堤横断面 (A-B)

(3) 上面

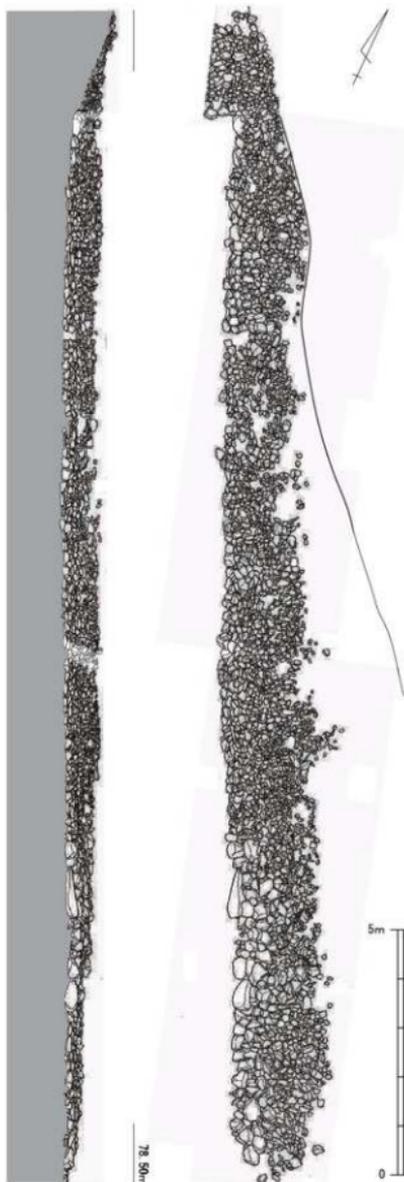
基本的に上面まで残存していたものと考えている。南側ほど広く検出されているのに対し、北側前方



1. 暗灰色極細砂～中砂混じりシルト
2. にぶい黄色シルト混じり明緑灰色極細砂
3. にぶい黄色シルト混じり青灰色極細砂
4. 灰白色極細砂混じり暗灰色シルト
5. 黄灰色中礫混じり粗砂
6. 暗緑灰色シルト混じり砂礫
7. 明オリーブ灰色極細砂混じり灰色シルト
8. 暗灰色シルト
9. 灰色シルト混じり砂礫



第193図 南渡土堤断り断面



第194図 南渡土堤西側斜面葺石

部付近では、上面全てが調査区外となっている。上面は平坦面をなしていたものと考えられるが、全体が検出されていないこともあり、東側ほど調査区外へ向かってわずかに高くなる傾向が認められる。検出した上面の最大幅は、南端付近で3.50mを測る。北渡土堤で検出した上面幅が6.50mであることから、南北の渡土堤が同規模であることを前提とすると、全体の1/2強を検出したことになる。

また、上面における標高は、Aラインの最高所で77.90mを測り、周濠底部との比高は95cmである。

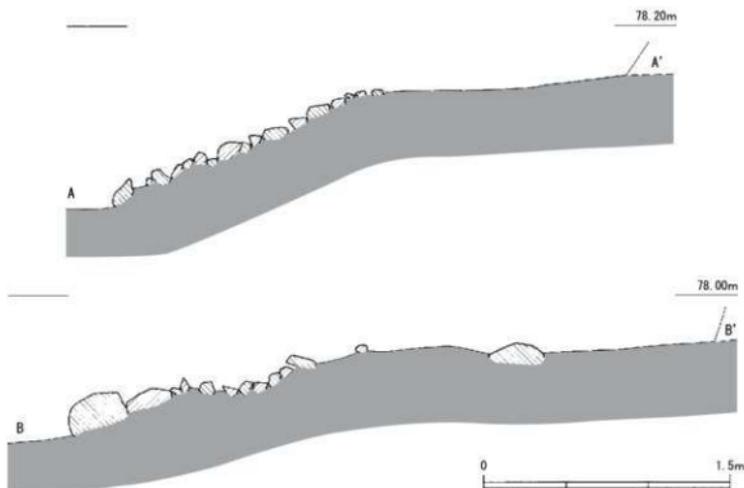
上面においては、顕著な礫は認められなかったが、少なからず小礫が検出されている。当初は、造り出し同様、小礫が敷きつめられていた可能性が考えられる。

(4) 西側斜面

南端部を除いて、斜面全面に石が葺かれていた(第194図 写真図版115・116)。基底面において、前方部1段目基底石から20.60m検出されている。基底石については、数石分残存していなかったが、ほぼ完全に近い状態で検出されている。葺石についても、上端部および、北半の一部を除いてほぼ完全な状態で検出されている。

基底石底部のレベルは、前方部付近が77.30mを測り、前方部側から外堤側にかけて大きな変化は認められない。また、平面的にもほぼ直線状をなす。葺石が残存していた基底部からの高さについても、北端部から中央部にかけて70cmと、ほぼ同じである。ただし、南端部は一石分のみの残存である。

全体的に石の積み方はやや雑拙である。この結果、斜面の傾斜についても、Cラインで30°、Dラインで30°、Eラインで20°と、



第195図 南渡土堤横断面

一定していない(第199図)。さらに、同じライン上においても、その傾斜は一定していない。特に南端部付近については傾斜が緩やかになり、基底石底部からの高さが10cmと低くなっている。なお、墳丘部・造り出し斜面同様、基底石は掘り方を伴うことなく、周濠底に直接置かれていた。

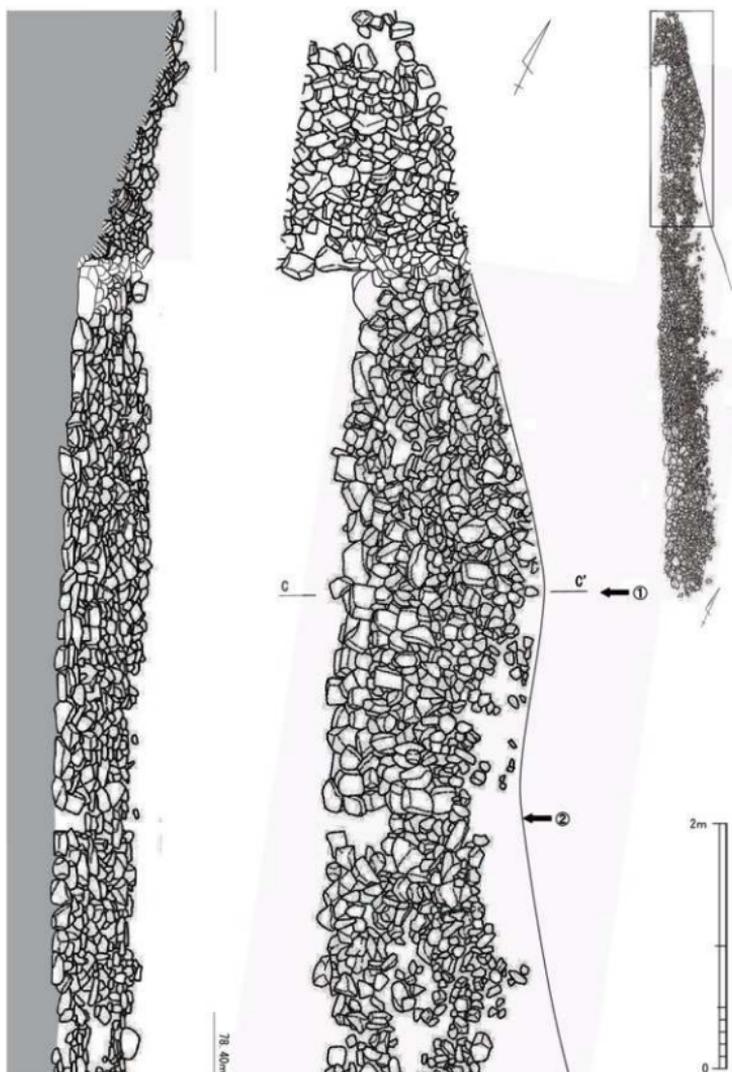
以下、南渡土堤を3区(北から、1区・2区・3区)に分け、詳細に見ていくことにする。

1 区(第196図) 前方部との接合部から目跡②(矢印② 写真図版118:③)までである。20cm~40cm大の角礫を基底石とし、横長に設置されている。基本的には当初の状態が保たれているが、部分的に周濠側へ押し出された状態の石も認められた。これらの石を除いては、基底石のラインはほぼ直線的である。また、基底石底部のレベルも、前方部との接合部で77.30mを測るが、そこから2m南側で77.15mとなり、以南はほぼ一定している。

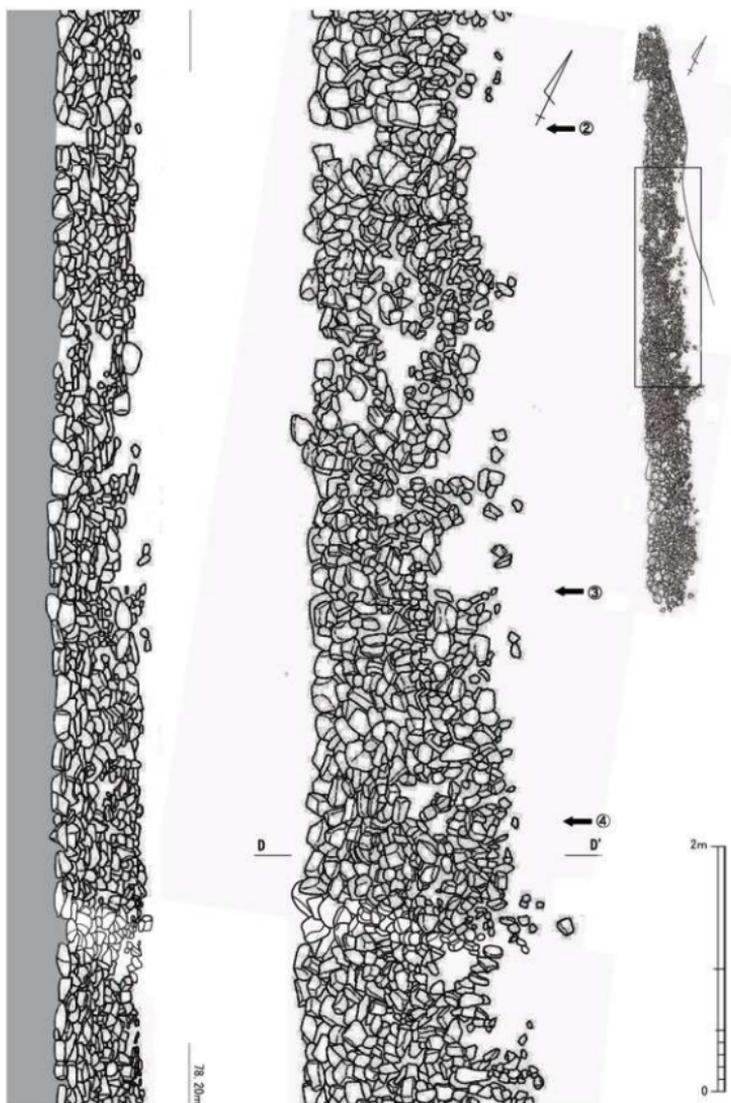
斜面に葺かれた石は、目跡を境に大きく異なる。目跡①(第196図:矢印①)より北側は、10cm~15cm大の角礫を中心に使用されている。一方、目跡①より南側は20cm大の河原石が多く使われている。ただし、目跡①より北側にも20cm大の石が少なからず使われているが、それは全て河原石である。また、目跡②(第196図:矢印②)においては、基底石から肩部まで20cm大の石が使われている。最も良好に残存していた目跡①付近で、基底石底部から70cmの高さまで葺石が残存していた。

2 区(第197図) 1区の南側、矢印②から矢印④(第197図:矢印④)の南側までを対象とする(写真図版118:④・119:①)。矢印②から矢印③の間は、比較的良好に検出された西側斜面葺石のなかでは、残存状況がやや悪い区画である。基底石数石分の原位置が保たれておらず、斜面に葺かれた石が抜けている箇所も目立つ状態である。なお、基底石底部のレベルは、77.10mと一定している。

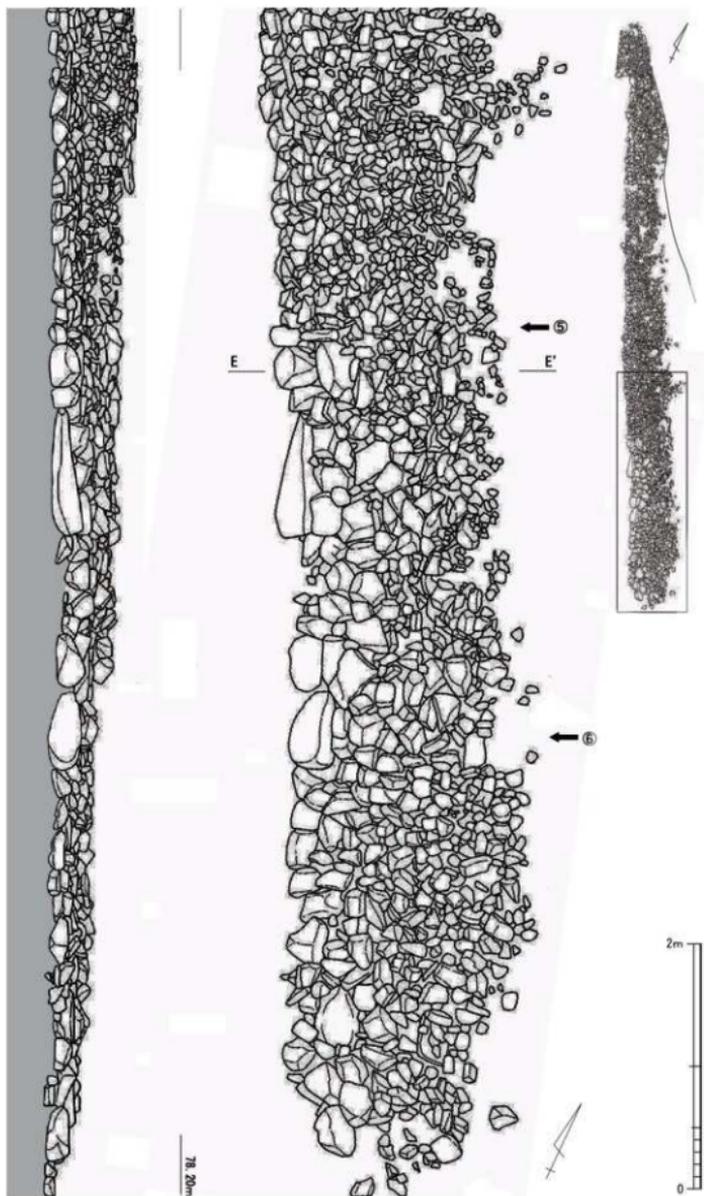
残存する範囲でみると、矢印②以南は、以北と比べて使用された石材に顕著な変化が認められる(写真図版120:④・⑤)。基底石・葺石とも大半に角礫が用いられている。まず、基底石は20cm大の角礫が使われている。斜面に葺かれた石は、10cm以下の角礫が使われている。ただし、斜面中にも20cm大の石



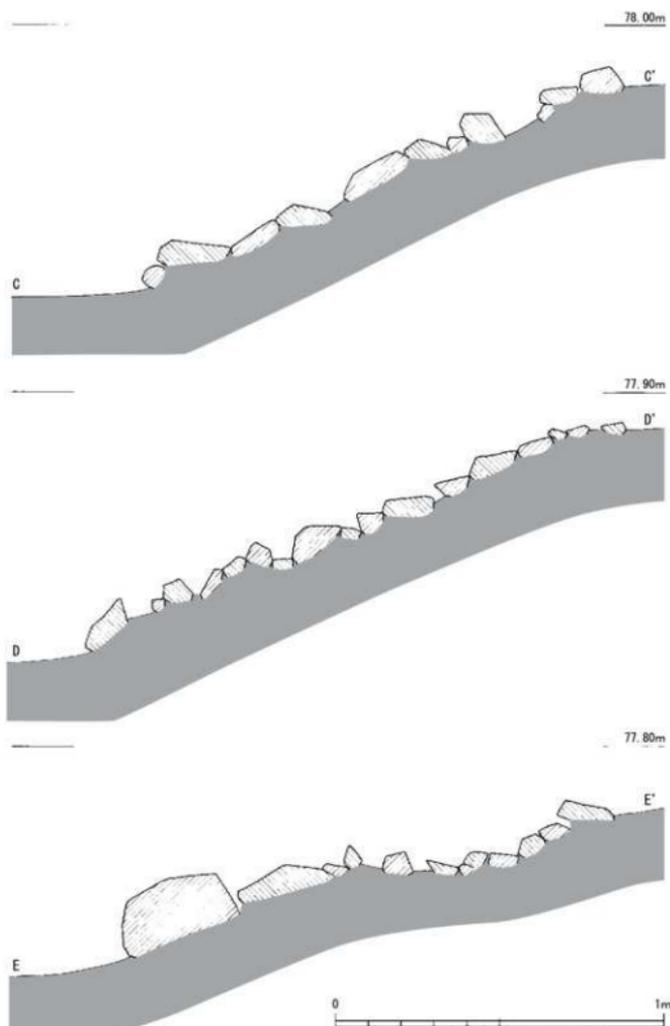
第196図 南波土堤西側斜面露石（1区）



第197図 南渡土堤西側斜面礫石（2区）



第198図 南渡土堤西側斜面露石（3区）



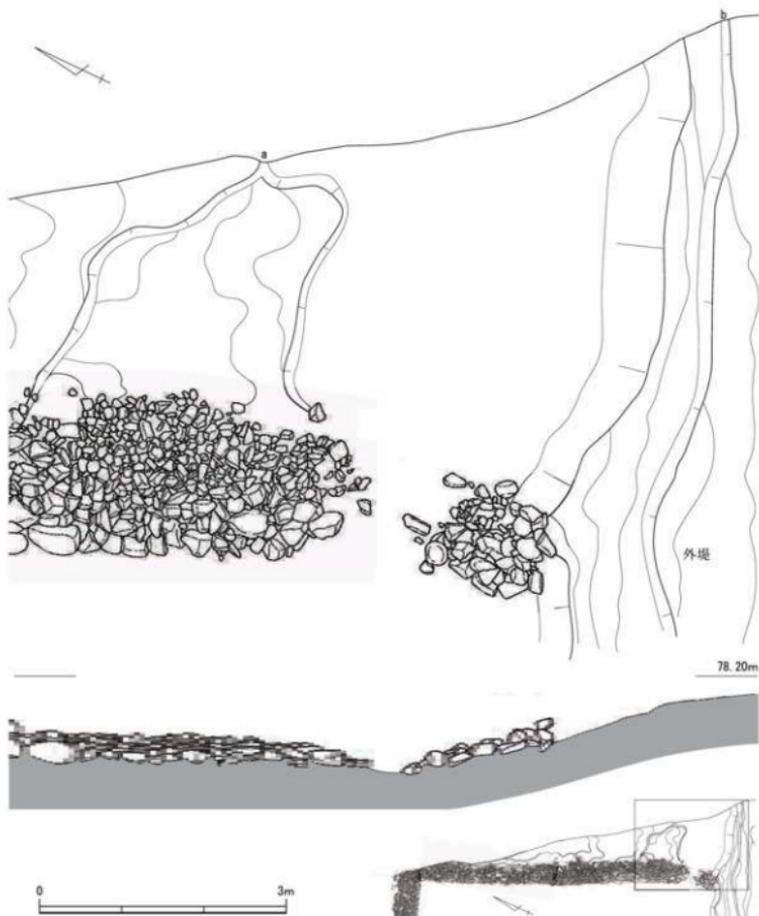
第199図 南渡土堤西側斜面葺石横断面

も使われている。

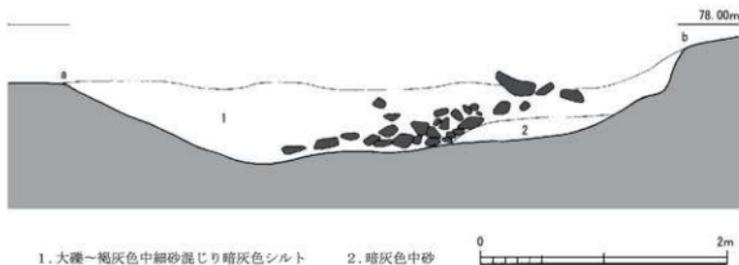
矢印③(第197図)以南になると、以北と様相が変化する。基底石は20cm~40cm大と大型となり、河原石が主体となる。また、大きな石材は横長に置かれている。斜面に葺かれた石も、10cm~15cm大が主と、大型になる。ただし、石材は、矢印③以北と同様、角礫がほとんどである。

なお、矢印②-矢印③間及び矢印③-矢印④間の距離は、それぞれ4mと2mを測る。

3区(第198図)2区の南側、矢印④以南から南端部までを対象とする(写真図版119:②・③)。当区には、目跡が2箇所(矢印⑤・矢印⑥)認められる。矢印⑤以北については、2区南部から連続するものである。基底石底部のレベルは、2区から引き続き77.10mと一定している。矢印⑤と矢印⑥の間については、それ以北とは大きく変化する。まず、基底石であるが、50cm・60cm・1m大の石材が目立つ。これらの石を横長に置き、基底石としている。1m大の石材は角礫であるが、他の基底石は全て河原石である。斜面上に葺かれた石についても、ほとんどが30cm大の石からなる。なかには40cm大の石材も使用されている。いずれも河原石である。なお、矢印⑤と矢印⑥の間の距離は、約3.50mである。



第200図 南渡土堤南端部



第201図 南渡土堤南端部溝断面

矢印⑥以南については、全体的に石材が小規模になる。基底石は30cm大が主体で、最大でも40cm大である。いずれも河原石である。斜面に葺かれた石は、10cm～15cm大の河原石が主体である。ただし、30cm大の石も少なからず用いられている。なお、矢印⑥から南端までの距離は、約3.50mである。

(5) 南端部

当初は、外堤まで直接接続していたと考えられるが、調査の結果、渡土堤とは直交する方向に、溝状に落ち込んでいた。渡土堤上面における幅は5mを測る。この溝により、前方部側から連続して検出された葺石は、当該箇所においては検出されなかった。しかし、この途切れた箇所には、10cm～30cm大と、なかには基底石大の礫も多く埋もれていた(第201図)。調査では、原位置が保たれていない石と判断して、大半を取り上げていった。これらの礫については、この溝内だけに集中し、外堤に葺かれていた葺石の一部と考えることはできない。また、この礫の間からは、奈良時代から平安時代にかけての土師器や須恵器などが出土している(第5章第10節 図版198)。牛の歯も出土している(第6章第5節)。

底部の深さは渡土堤上面から70cmを測り、周濠とはほぼ同じレベルである(第200図)。当溝内に堆積していた土層を観察すると、砂を多く含み、流れ込みにより堆積したものと判断される。また、外堤側の断面については、攻撃面となった状況が認められる。よって、当初は周濠底より高いレベルであったものが、周濠側からの強い流れにより削られ、周濠と同レベルとなったものと考えられる。

このなかで、わずかに原位置に近い状態が保たれていると判断したのが、外堤北側斜面で検出した礫の一群である。ただし、北側で検出した葺石のように、良好な状態では検出されていない。当初は、北渡土堤で検出されたように、外堤に接続していたものと考えられる。

ところで、溝状に落ち込む斜面においても、葺石が葺かれている(写真図版119:③)。南側より北側の傾斜が緩やかとなっているが、それぞれの傾斜に合わされている。このことから、当初からこの溝状の落ち込みが存在していたのではないかと考えられる。落ち込み内で検出された礫についても、北渡土堤で認められた状況と同様のものの可能性が考えられる。このことについては、後に第8章第3節で検討する。

(6) 前方部との接合部

前方部との接合部については、葺石を除去することができなかったため、十分な調査を行うことはできなかった。基底石をみると、前方部の基底石に対して直角になるよう、渡土堤側の基底石が置かれて

いる。さらに、斜面においても葺石が連続し、その積み方等に大きな変化は認められない（写真図版117：②）。また、前方部と渡土堤の斜面が接合するラインは直線的で、当初から両者の接合を意識した積み方である。以上から、渡土堤と前方部とが一体で造られたものと考えられる。

3. 北渡土堤

(1) 概要

東側の大半が調査区外に当たり、検出できたのは全体の約1/2強に限られる（第205図 写真図版122）。南渡土堤同様、西側斜面に関しては、前方部から外堤までほぼ全体が検出されている。このため、縦断方向に関しては、その規模を明らかにすることができる。南渡土堤同様、基底部は前方部に対してほぼ直交している。検出された長さは、基底部レベルで23.20mを測る。

一方、横断方向に関しては、南渡土堤とは異なり、東側斜面についても、北端の一部において検出されている。しかし、検出されたのは斜面の一部で、斜面裾部までは検出されていない。検出された範囲では、横断面は蒲鉾形をなす（第207図）。検出された基底部を基準とした最大幅は、9.50mである。上面における幅は、6.80mである。また、基底部と上面との比高は、最も良好に残存していたaラインで、58cmを測る（第207図）。斜面においては、南渡土堤同様、葺石が葺かれていた。また、上面においても、顕著ではないが小礫が少なからず認められたことから、礫が敷きつめられていたものと考えられる。

この他、外堤との接合部においては、わずかに溝状をなし、巨礫が集石していた（第217図 写真図版131～133）。この礫の上側には円筒埴輪等が倒れ、その場で押し潰された状態で数本出土している（第218図）。さらに、渡土堤中位より南側においても、溝状の落ち込み（溝状遺構）が検出されている（第215図 写真図版129）。

(2) 構築方法

前方部から北渡土堤にかけて、1本のトレンチを設定し、渡土堤の構築および渡土堤と前方部との関



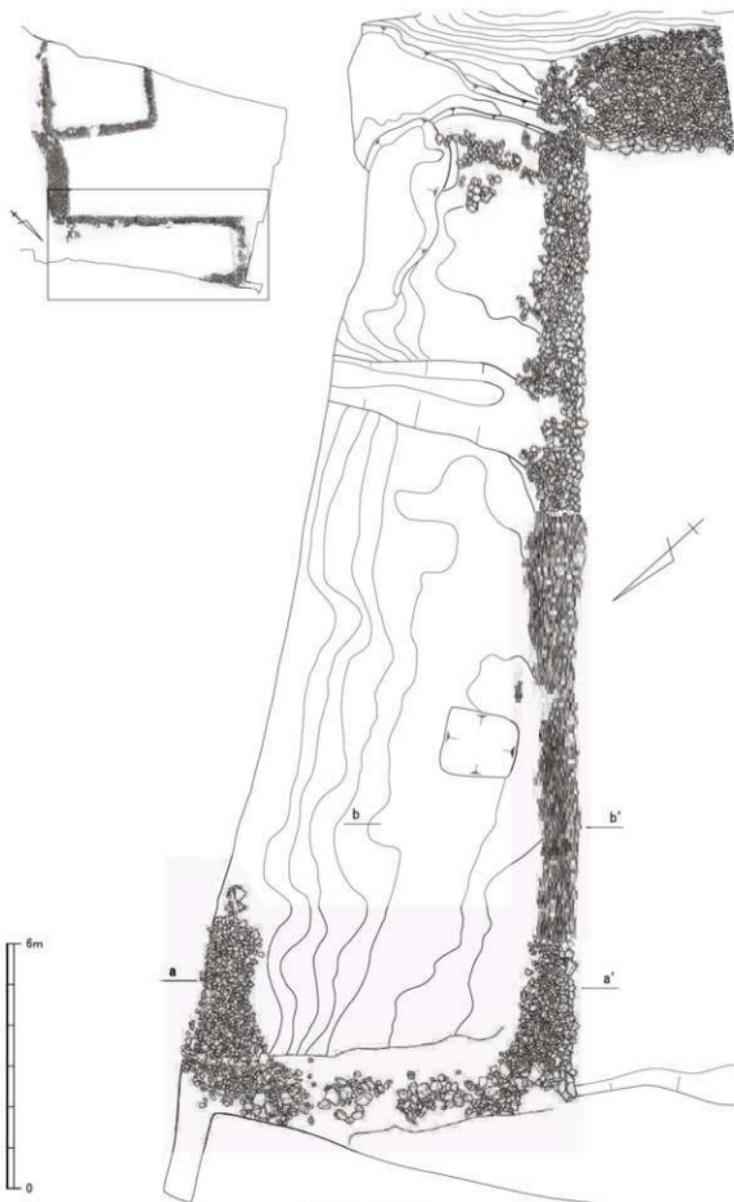
第202図 北渡土堤の調査



第203図 断面剥ぎ取り作業



第204図 剥ぎ取り断面（右半が北渡土堤）



第205図 北渡土堤

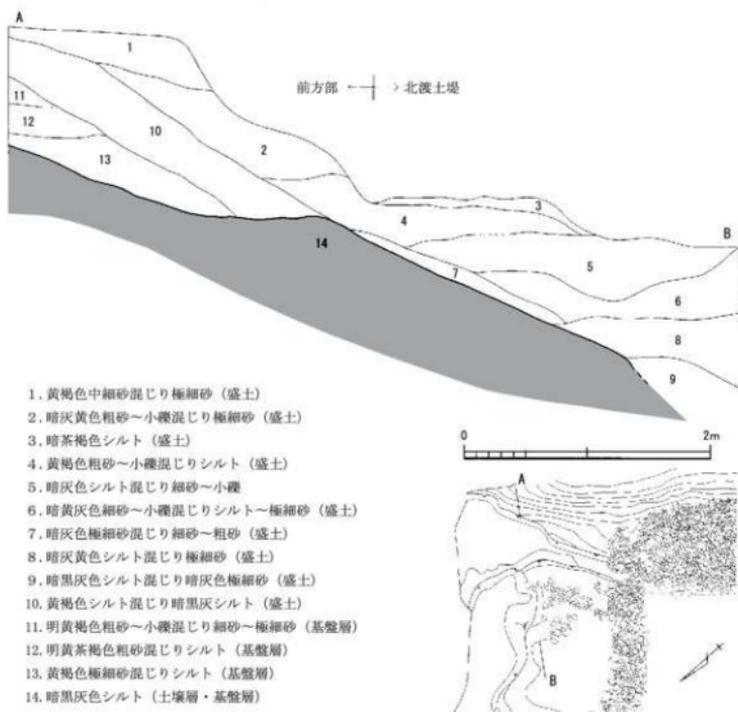
係について明らかにすべく、土層観察を行った（第206図）。また、この断面については、土層転写による剥ぎ取りを行い（第203図）、調査後の観察を可能にしている（第204図）。

これによると、11層～14層については墳丘構築前の基盤となる層と考えられる。特に14層は顕著に土壌化した層であることから、墳丘構築前の表土層と考えられる。

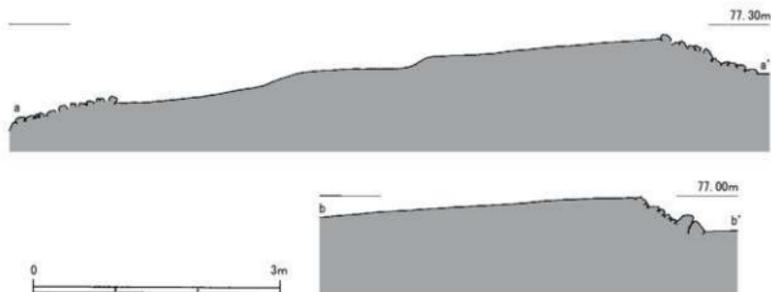
まず、10層が積み上げられ、前方部が形成されている。その後、渡土堤側から3層～9層が順次積み上げられている。各層とも明らかに人為的に積み上げられた層である。特に、8層中には、シルトのブロックが顕著に認められた。調査では、渡土堤上面から1.50m掘り下げたが、この深度までは盛土からなることが明らかとなっている。最後に、前方部側に1層と2層が積み上げられ、前方部が形成されている。このように、墳丘側盛土→渡土堤側盛土→墳丘側盛土と、渡土堤と前方部は当初から一体のものとして造られていることが理解できる。

なお、南側同様葺石を除去することができなかったため、葺石に関して十分な調査を行うことはできなかった。基底石は、渡土堤側の基底石が前方部側の基底石のラインより墳丘側に入り込んでいるよう

79.00m



第206図 前方部～北渡土堤土層断面



第207図 北渡土堤横断面

にも見える。これは、先述したように（第4章第2節）、墳丘側の葺石がわずかに周濠側にずれていることに起因するものと考えられる。また、斜面の葺石についても、墳丘から渡土堤にかけて連続している。

以上、渡土堤が盛土からなり、渡土堤と前方部とが一体で造られていることが明らかとなった。

（3）上 面

ほぼ上面まで残存していた。特に北端部においては、上面の全幅が検出されている（第207図）。上面は平坦面をなしていたものと考えられるが、面的に水平ではなく、わずかに東側への傾斜が認められる。また、南渡土堤同様、上面において少なからず小礫が検出されていることから、上面に小礫が敷きつめられていたものと考えられる。平面的に最も良好に検出されたaラインにおいて、上面の幅は6.50mを測る。

両側斜面において葺石が検出されたaラインをみると、西側においては77.13mの高さまで葺石が検出されている（第207図）。一方、東側においては、76.35mの高さまでしか検出されていない。当初から、東側の方が低かったのかについては、調査では明確にできなかった。ただし、渡土堤の東側については、一部後世の削平が認められることから、その影響も考慮に入れる必要があるものと考えられる。

しかし、Gラインにおける葺石の傾斜をみると、上端の方がやや緩やかとなっており、大きな削平を受けた様子は認められない（第214図）。また、bラインにおいても認められるように、渡土堤の東側が全体的に低くなっており（第207図）、外堤との接合部の溝底部のレベルも東側ほど低くなっている。以上から、当初から多少の傾斜があった可能性は否定できない。

上面における標高は、Aラインで76.95m、北渡土堤中間部のBラインで76.75m、外堤との接合部付近のDラインで77.03mと、外堤に向かって徐々に高くなる傾向が認められる。また、西側周濠底との比高は、Aラインで58cm、Bラインで30cm、Cラインで45cm、Dラインで43cmを測る（第212図）。

（4）西側斜面

斜面全面に葺石が葺かれていた（第208図 写真図版125）。基底部において、前方部1段目基底石から23.50m検出されている。基底石については、一石も欠くことなく残存していた。葺石については、上端部を除いては、ほぼ良好な状態で検出されている。



第208図 北渡土堤西側斜面葺石

基底石底部のレベルは、大きな変化は認められないが、前方部側から外堤側にかけて、徐々に高くなる傾向が認められる。その標高は、前方部との接合部で76.40m、外堤との接合部で76.80mである。また、基底部のラインは、平面的にはほぼ直線的である（第208図）。葺石が残存していた基底石の底部からの高さについては、場所により異なり、前方部との接合部付近で70cm、中央部で15cm、外堤との接合部付近で30cmである。

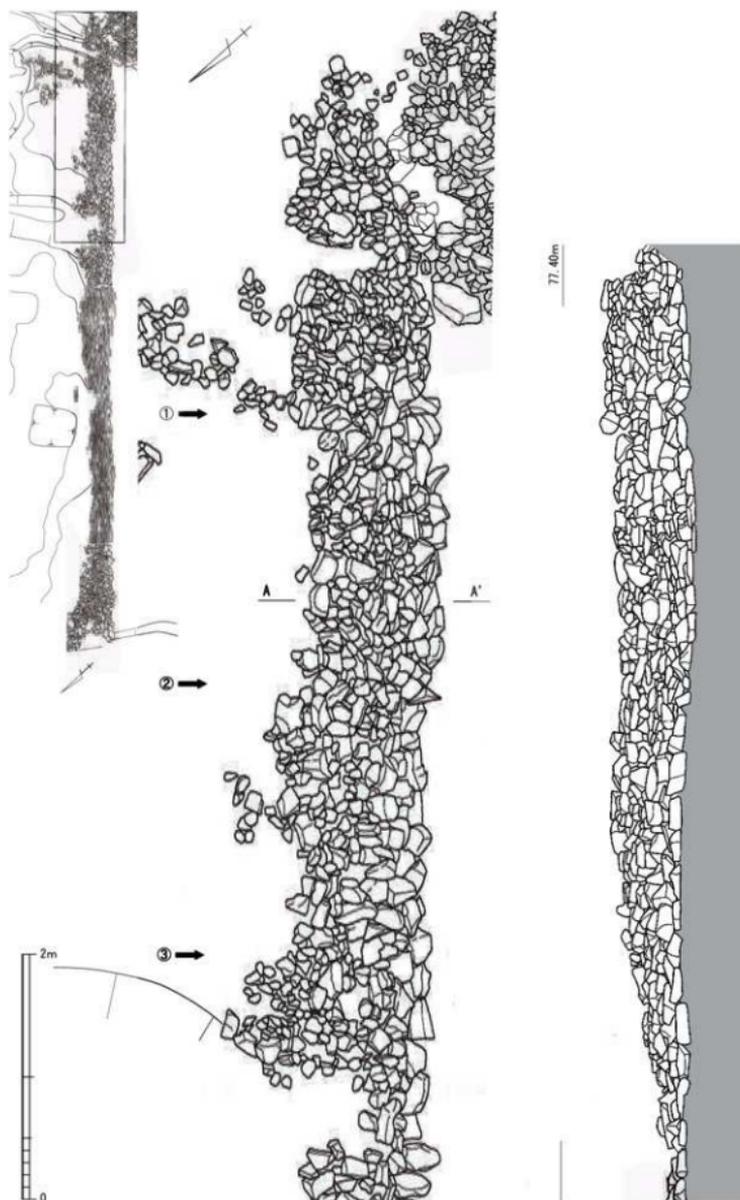
基底石底部と肩部葺石上端を結ぶラインを基準とした斜面の傾斜についても、南渡土堤同様、Aラインで40°、Bラインで15°、Cラインで30°、Dラインで25°と、一定していない（第212図）。特に、2区Bラインの傾斜の緩やかさは、他の斜面では認められなかった緩やかさである。さらに、Aラインを除いては、同じライン上においてもその傾斜は一定していない。

なお、前方部・造り出し斜面同様、基底石は掘り方を伴うことなく、周濠底に直接置かれていた。また、目跡が6箇所において認められた（第209図～第211図 矢印①～⑥）。

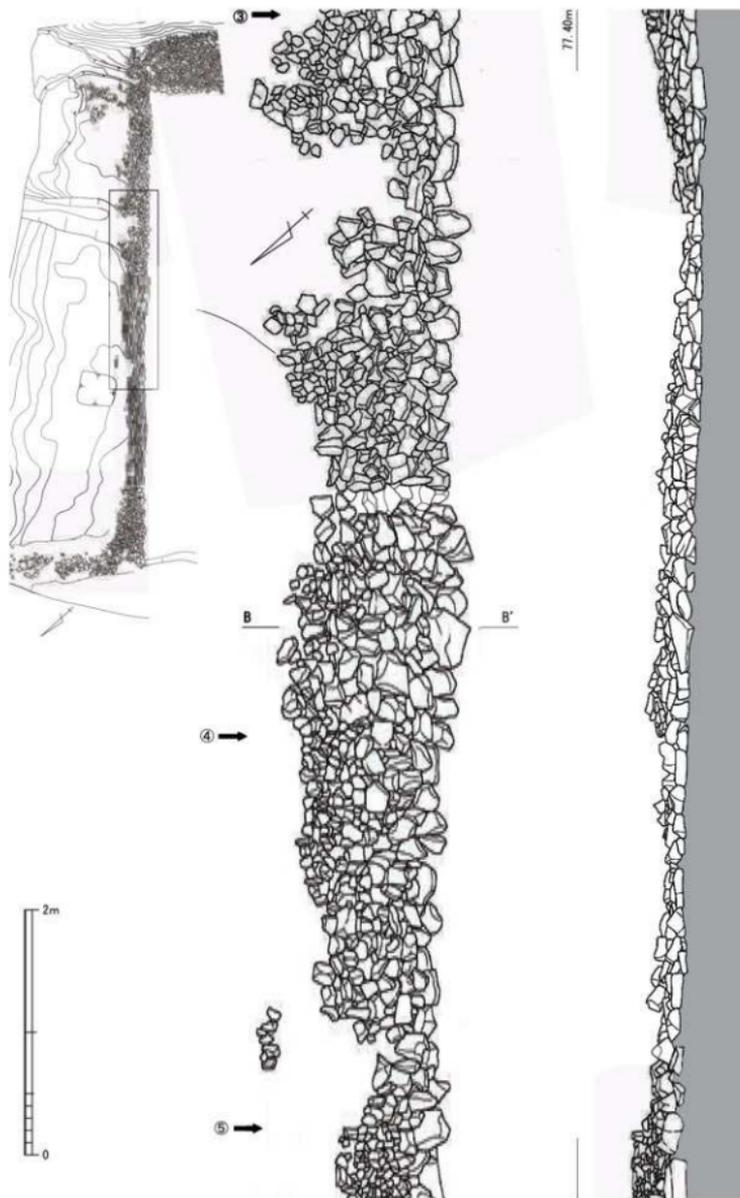
以下、北渡土堤を3区（南から、1区～3区）に分割し、詳細に見ていくことにする。なお、前方部との接合部については、項を改めて報告する。

1区（第209図 写真図版126：⑤）前方部との接合部から溝状遺構までである。基底石は、矢印①～矢印②において20cm～40cm大の河原石が用いられている以外は、20cm～30cm大の角礫が使用されている。ほぼ築造当初の状態が保たれているが、部分的に周濠側へ押し出された状態の石も認められた。このため、2区～3区と比較すると、全体的に基底石のラインがやや乱れる傾向が認められる。

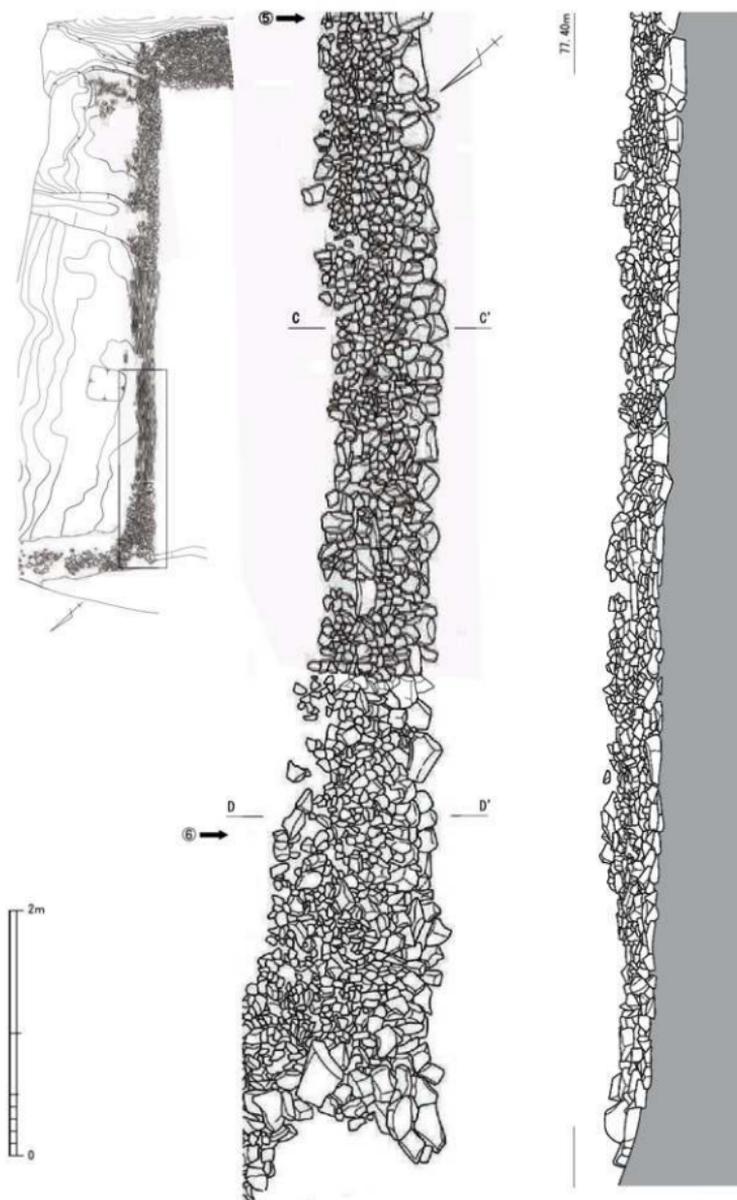
また、基底石底部のレベルも、前方部との接合部付近と溝状遺構付近で76.40mを測るが、その中間は76.30mとなり、そのレベルにもや



第209図 北渡土堤西側斜面葺石(1区)



第210図 北渡土堤西側斜面露石（2区）



第211圖 北渡土堤西側斜面礫石（3区）

や乱れが認められる。中間部のレベルが低い箇所と基底石が乱れている箇所とはほぼ一致することから、基底石の乱れとそのレベルの高低が対応しているものと考えられる。

斜面に葺かれた石は、10cm～15cm大の角礫と、20cm～30cm大の河原石が使用されている（第209図）。特に前者の石は、矢印①より填丘側で顕著に使用が認められる。しかし、矢印①以北においては、20cm～30cm大の河原石が用いられ、角礫はほとんど使用されていない。ただし、石の葺かれ方は全体的に粗く、石と石の間が大きな隙間となっている箇所も認められた。

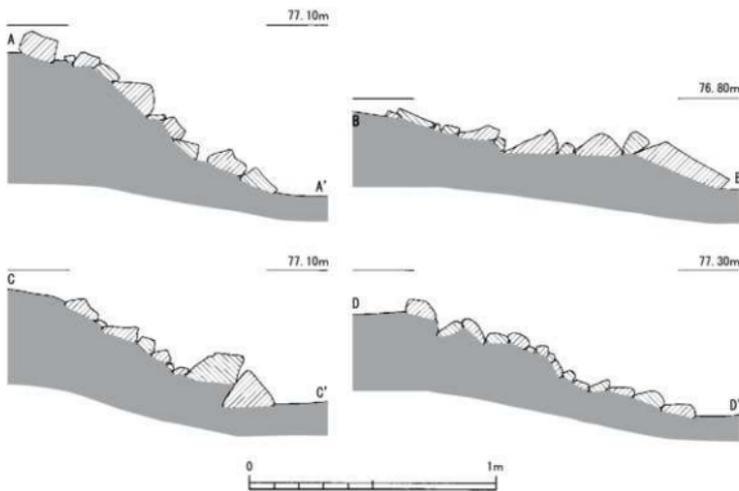
2 区（第210図 写真図版127：①）溝状遺構から矢印⑤までを対象とする。当区の南端部は溝状遺構との接合部となっている。溝状遺構以北については、平面的には葺石全体が比較的良好に残存していたが、斜面の傾斜が極端に緩く、基底石底部からの高さがわずか15cmに過ぎない。西側斜面と溝状遺構が連続するよう意識された結果と考えられる。

溝状遺構から矢印④の間は、20cm大～30cm大の角礫を基底石としている。これらの石は縦長に置かれているが、1石のみ50cm大の石が横長に置かれている。これらの石は、厚みがなく、面をもたせる意識は認められない。また、斜面に葺かれた石についても、全て角礫が用いられている。20cm大～30cm大の角礫が主体であるが、溝状遺構付近は10cm大～15cm大の角礫が目立つ傾向にある。

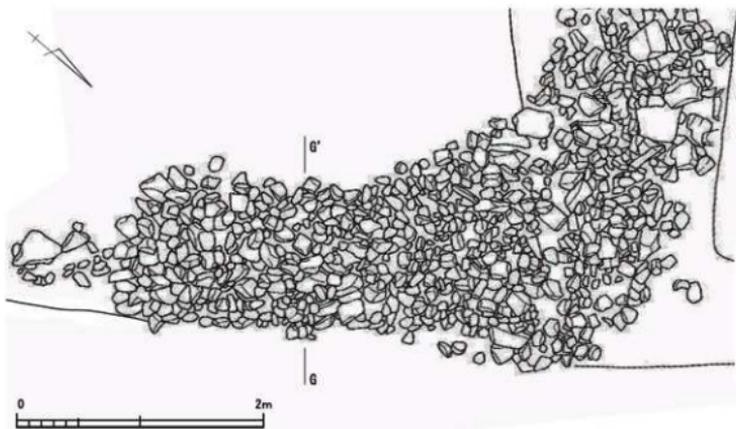
矢印④より北側は、西側斜面のなかでも傾斜が極端に緩やかな区間である（第210図）。基底石・葺石ともに河原石が用いられている。最大30cm大で、基底石と葺石の規模には、顕著な差は認められない。

3 区（第211図 写真図版127：②）2区の北側、外堤との接合部までを対象とする。当区には、目跡が1箇所（矢印⑥）認められる。基底石底部のレベルは、外堤との接続部分に向かい徐々に高くなっている。

当区では、基底石・葺石ともに角礫が用いられているが、葺石を中心に一部河原石も用いられている。基底石は、30cm大～40cm大の石材が使用されている。葺石については、5cm～10cm大の石材が用いられ



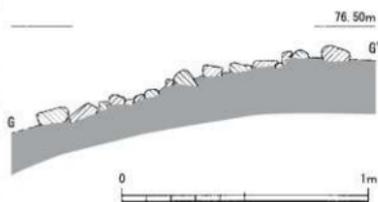
第212図 北渡土堤西側斜面葺石断面



第213図 北渡土堤東側斜面葺石

ている。2区と比べて、基底石底部からの傾斜が急で、40cmの高さまで残存している。

また、目跡(矢印⑥)以北については、基底石が20cm大と小型になる。ただし、外堤との接合部付近は40cm大とやや大型の扁平な石材が、外堤斜面に貼り付けられるように用いられている(写真図版127:③)。また、傾斜も 21° (Dライン:第212図)と緩くなる。これは、北端部の溝への取り付きの影響も考えられる。



第214図 北渡土堤東側斜面葺石断面

(4) 東側斜面

先述したように、渡土堤上面が全体的に東側へ傾斜しているため、上面から東側斜面への傾斜変換点は不明確である。このなかで、渡土堤東北隅、外堤との接合部付近で葺石が検出されており(第213図写真図版128)、当該箇所については東側斜面と特定可能である。ただし、当該箇所の東側は調査区外に当たり、斜面の下端までは検出されていない。つまり、検出されたのは、斜面に葺かれた葺石のみで、裾部の基底石は検出されていない。

検出された葺石は、10cm~20cm大の河原石が用いられている。上端部の標高は76.35m、下側の標高は76.10mで、その比高は25cmである。この範囲での斜面の傾斜は、Gラインで 15° ~ 20° と、西側斜面と比較して明らかに緩やかとなっている(第214図)。

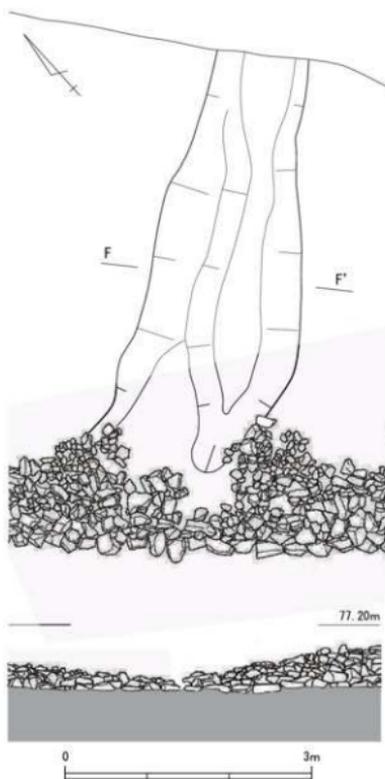
(5) 溝状遺構

前方部との接合部から6mの位置で検出された溝で、渡土堤に対してほぼ直交する(第215図 写真図版129)。検出した長さは5.70mである。東側は調査区外まで延びている。ただし、南側斜面については、

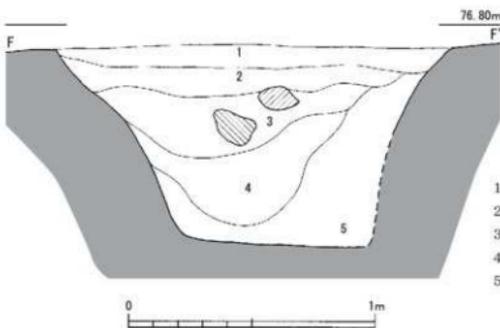
実際にはより抉られており、さらに拡がる状況であった。しかし、遺構の保存の観点から、全てを検出することはできなかった。渡土堤上面における幅は1.10m～1.80mを測る。横断面は箱形に近く（第216図）、最深部における渡土堤上面からの深さは80cmを測る。西端における底部の標高は76.50mを測り、渡土堤基底部との比高は20cmである。一方、東側底部の標高は、東端で76.01mと、東側ほど深い傾向にある。

当溝両側の立ち上がりは急であるが、西端付近は緩やかとなり、渡土堤西側斜面に繋がっている。このため、渡土堤斜面自体も、溝との合流付近は傾斜が明らかに緩やかとなっている。渡土堤西側斜面の葺石が、溝状遺構の壁面西端まで連続している。斜面に石を葺く時点、つまり築造当初から当溝が存在していたものと考えられる。

当溝内は、5層からなり、いずれも人為的に埋められた層と考えられる（第216図）。下層の4層と5層については、その層相から判断して人為的に埋められた層と考えられる。また、3層についても、20cm大の円礫が混入し、埴輪片が出土することから、人為的に埋められた層と考えられる。2層については、人為的に埋戻し後に土壌化した層と考えられる。最上層の1層については、2層堆積後凹地であった箇所が埋



第215図 溝状遺構



1. 暗灰黄色細砂混じりシルト
2. 暗灰色中細砂混じりシルト
3. 黒灰色シルト混じり中砂
4. 青灰色シルト混じり黒灰色砂質シルト
5. 青灰色シルト混じり黒色シルト

第216図 溝状遺構断面



第217図 北渡土堤北端部



第218図 北渡土堤北端 埴輪出土状況



第219図 北渡土堤北端 溝状遺構横断面

められ、整地された層と考えられる。

(6) 外堤との接合

北端部は、北外堤に渡土堤が直接接続するのではなく、外堤と平行する溝状をなしていた（第217図 写真図版131・132）。渡土堤上面における幅は1.80m～2.20mを測り、Eラインにおいては、外堤側横断面はやや深い皿形をなし、渡土堤側は逆台形傾向をなしている（第219図）。溝斜面には葺石は認められない。また、その痕跡も認められなかった。最深部における渡土堤上面からの深さは35cmを測る（第219図）。この溝の底部は、渡土堤西側の周濠底の標高が76.74mであるのに対して、その東側葺石上端部は77.00mと高くなり、その後Eラインでは76.70mと低くなっている。

この溝の中には多くの石が集石していた（集石群：写真図版132）。20cm大の角礫が基本であるが、40cm大の角礫も少なからず含まれていた。これらの石は、溝内に並べられた状況、あるいは意識的に置かれた状況は感じられず、放り込まれたような状況であった。

そして、これらの石の上側・隙間から大量の埴輪が出土している（第218図 写真図版133）。基本的に、大きな石が溝中軸ライン上に集中し、その南北両側から埴輪がまとめて出土している。多くの埴輪は、比較的大きな破片で、1個体がある場で押し潰された状態で出土している。Eラインでは、溝の中心部から北側にかけて礫が集中し、その南側から埴輪が出土する傾向が認められる（第219図）。また、Eラインの東側では、北側に埴輪が集中して出土する傾向が認められる。

なお、埴輪の出土状況については、後述する（第5章第2節）。



第220図 北渡土堤北端 埴輪の検出作業

第5節 周濠

1. 概要

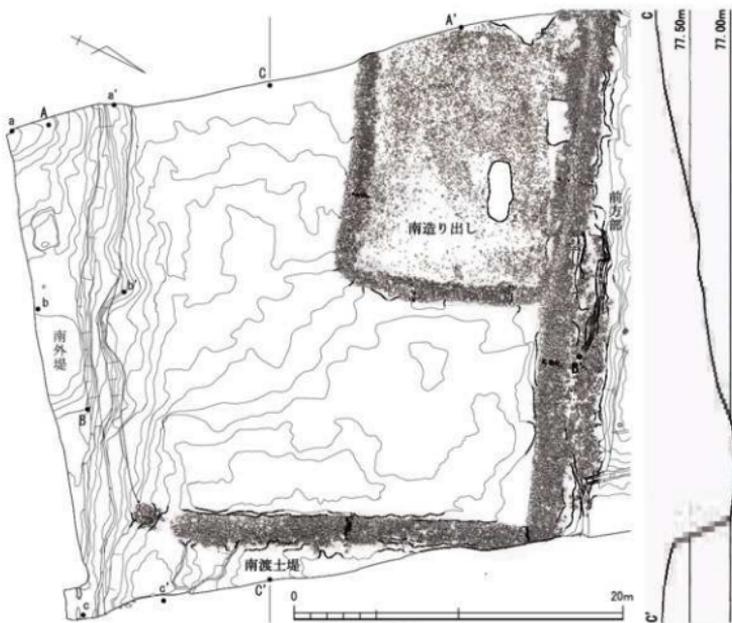
南北両側で検出されている（南周濠・北周濠）。両側とも、造り出し・前方部・渡土堤・外堤に囲まれた範囲が検出されている。周濠内は、後世の攪乱を受けることなく、良好な状態で検出されている。

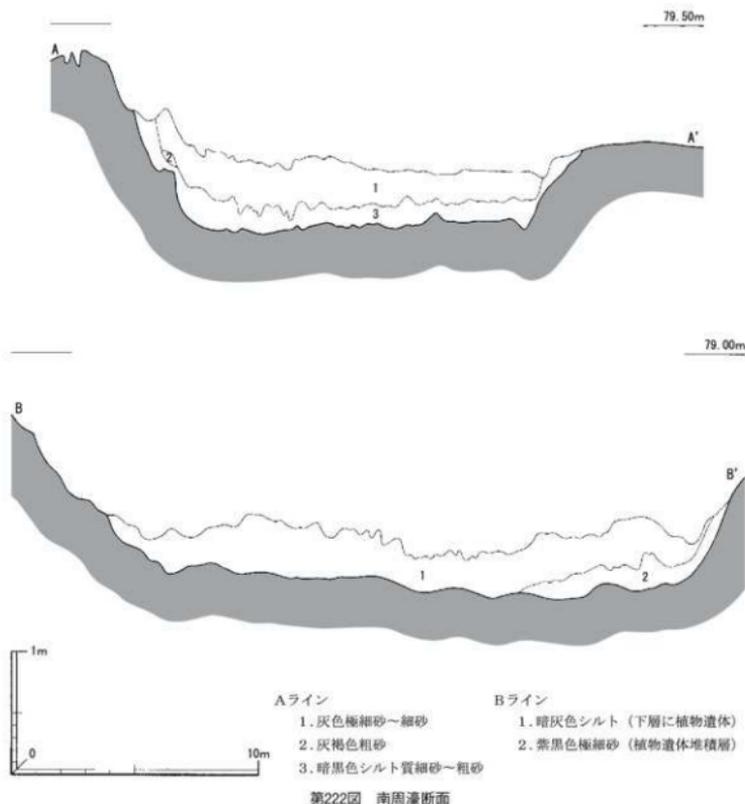
2. 南周濠

(1) 検出状況

前方部から外堤にかけて、検出されている（第221図 写真図版134・135）。前方部基底部（造り出しと渡土堤の中間点）から外堤下端までの距離は23mを測る。底部は、全体的にほぼ平坦に仕上げられている。横断面の観察によると、底部がほぼ平坦になるよう、基盤層が成形されている（第222図）。このため、横断面は逆台形を基本形としている。

縦断方向については、底部の標高が、第2次調査区西側（Aライン）中央部で77.90m、調査区中央部（Bライン）で77.10m、南渡土堤裾部で77.05mを測り、西側から東側への傾斜が認められる。その傾斜角は2.6°を測る（第221図）。縦断面（Cライン）をみると、傾斜はほぼ一定しているが、渡土堤付近が大きく窪んでいる。これは、渡土堤付近（第1次調査区）の調査時に、湧水の影響でヘドロ化したことに起因するものである。本来は一定の傾斜であったものと考えられる。





(2) 埋没状況

周濠内の堆積は、その西側と東側とでは大きく異なり（第222図）、共通する堆積層は認められない。

西側（Aライン）においては、大きく2層からなり、下層は自然堆積によるものと考えられる（写真図版135）。一方、上層については、シルトを多く含む層であるが、人為的に埋められた層と考えられる。

東側（Bライン）においては、大きく2層からなるが、少なくとも下層は自然堆積による層である。湿地性の堆積層で、その下層を中心に有機質および植物遺体が多量に含まれていた。当層は造り出し北側裾部から前方部裾部・渡土堤裾部にかけての帯に認められた層で、この上面から多くの埴輪片等が出土している。上層については、Aライン同様、人為的に埋められた層である。

(3) 遺物の出土

下層から出土している。特に、平面的には造り出し・前方部・渡土堤の縁部から集中して出土している。一方、外堤付近からの出土はわずかである。唯一、h24でまとまって出土している（第285図）。

3. 北周濠

(1) 概要

検出範囲は、南周濠と同様である。前下部下端と外堤下端との距離は23mを測り、南周濠と同様である。底部は全体的に平坦に仕上げられ、横断面は逆台形をなす。

縦断面は、底部の標高が、調査区南側（Dライン）中央部で76.90m、調査区中央部（Eライン）で76.65m、渡土堤根部で76.60mを測り、南側から北側へのわずかな傾斜が認められる（第224図）。その傾斜角は2°と、南周濠とほぼ同じである。北渡土堤付近の落ち込みが目立つが、南周濠同様、湧水によるヘドロ化の影響と考えられ、本来は一定の傾斜であったものと考えられる。

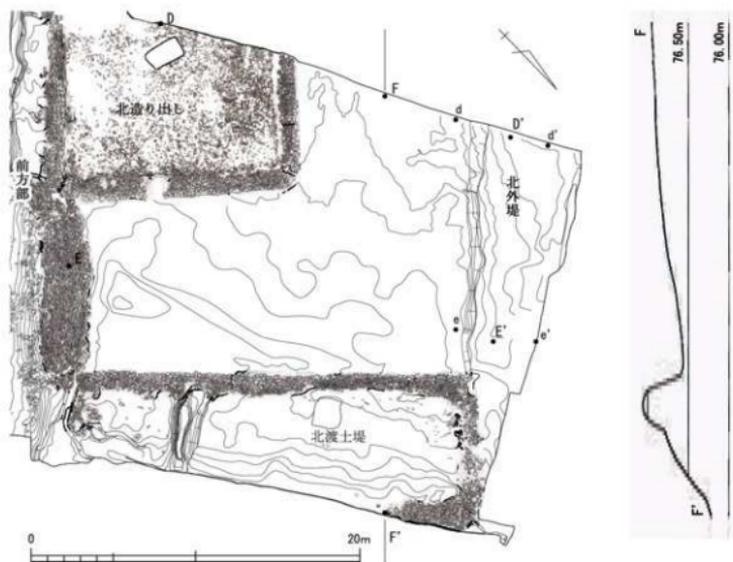
(2) 埋没状況（第225図）

調査区西側（Dライン）と調査区中央部（Eライン）とでは、基本的な埋没状況は同じであるが、西側はどよみや複雑な堆積が認められる。

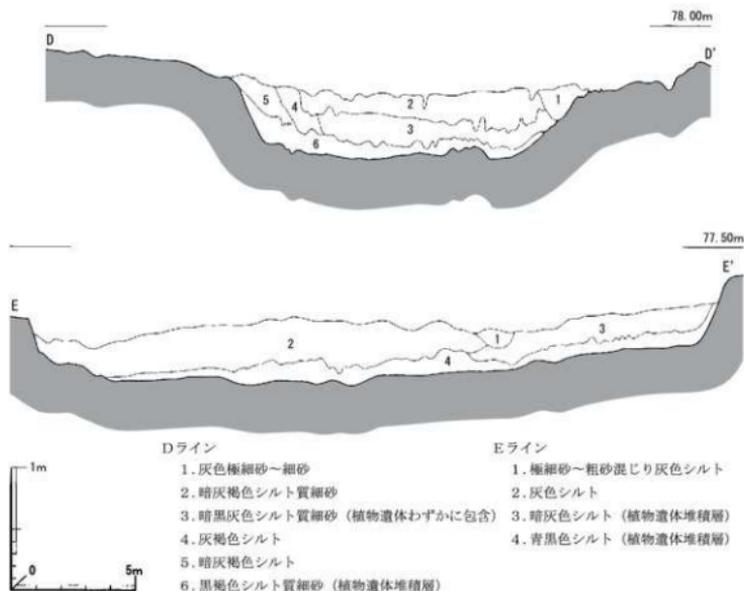
Dラインでは、最下層の6層を除いてはシルトを基本とした堆積が認められる（第225図）。いずれも、人為的に埋められたもので、1層に関しては洪水層と考えられる。6層に関しては、層中に植物遺体が多く含まれた湿地性の堆積層である。



第223図 土層断面実測



第224図 北周濠



第225図 北周濠断面

なお、当層からの埴輪の出土は認められない。

Eラインにおいては、2層と3層は同じ特徴を有する層で、大きくこの両層と4層の2層からなる。1～3層については、Dライン同様人為的に埋められた層である。これらの層から、埴輪片が出土している。4層は、Dラインの6層に対応する土壌層で、植物遺体が多く含まれていた。



第226図 北周濠断面（第2次調査西壁）

(3) 遺物の出土

上層から出土している。また、平面的には造り出し・前方部・渡土堤の縁辺部から集中して出土している。ただし、南周濠と比較すると、その量は明らかに少ない。

第6節 外堤

1. 概要

南北両側で検出されている。両側とも周濠側からの立ち上がりを中心に検出されており、横断全体は検出されていない。また、頂部についても、当初の高さまで残存しているのかについては、調査で判断することはできなかった。

2. 南外堤

(1) 概要

3次の調査にわたり、ほぼ東西方向にのびる外堤が、調査区南端で検出されている（第221図写真図版136～138）。ただし、南側については、その範囲が調査区外へ及ぶと考えられ、明確ではない。横断面は蒲葺形をなすものと考えられ、その北側縁が検出されているものと理解している。周濠底からの立ち上がりは明確であるが、頂部は、削平を受けているものと考えられ、明確ではない。



第227図 南外堤の調査（第3次調査）

(2) 形状・規模

検出した頂部の標高は、西端（aライン）で79.25m、中央部（bライン）で78.80m、東端（cライン）で78.10mと、西端（第2次調査）で最も高く、東端が最も低くなっている（第228図）。東端については、後述するように、外堤の主軸が東側ほど南側へ寄る傾向がある。この結果、頂部が検出されていないことに起因するものと考えられる。また、周濠底部との比高は、西端（aライン）で1.10m、中央部（bライン）で1.20m、東端（cライン）で1.40mを測る（第228図）。

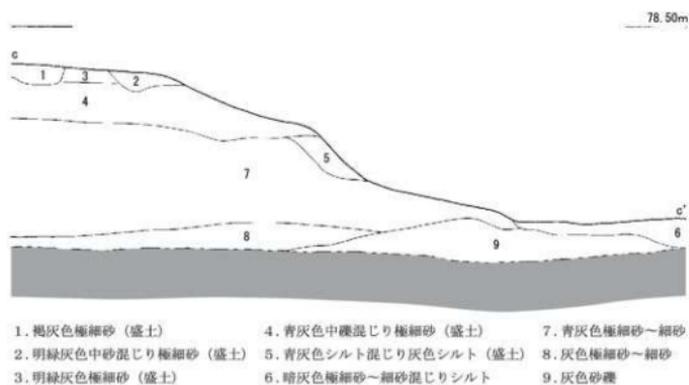
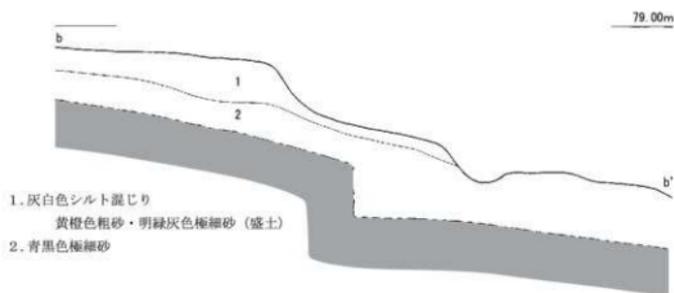
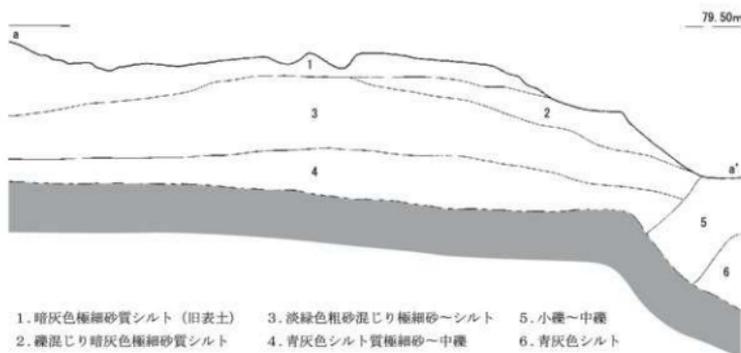
また、外堤基底部を基準とした外堤の検出幅は、西端（aライン）で5.60m、中央部（bライン）で3.50m、東端（cライン）で2.80mと、東側ほど狭くなっている（第228図）。

(3) 外堤の方向性

外堤全体が検出されていないため明確にできないが、外堤基底部のラインをみると、前方部基底部のラインとは明らかに平行関係にはない（第221図）。西側（後円部側）ほど前方部との距離が間く傾向にある。

(4) 外堤の構築

基盤層の削り込みと盛土により構築されている。明らかに盛土と確認できたのは、bラインの1層と、cラインの1～5層である（第228図）。aラインにおいては盛土層を確認することはできなかったが、その最上層の1層は、土壌化しており、古墳築造時の表土層である可能性が考えられる。



第228図 南外堤断面

また、盛土層下の各層については、自然堆積による層であることが確認できた。特に、cラインの7層以下については、ラミナ等が認められ、洪水に起因する堆積と考えられる。

なお、斜面には、葺石は認められなかった。外堤基部付近においても、その転石も認められなかったことから、当初から葺石は存在しなかったものと考えられる。

(5) 出土遺物

外堤頂部の直上は後世の堆積層(第86図)であったため、外堤上からの埴輪の出土はわずかであった。加えて、外堤斜面およびその基部付近においても、埴輪の出土はわずかである。また、外堤頂部においても、埴輪を樹立した痕跡を確認することはできなかった。

以上から、外堤上に埴輪が樹立されていた状況を確認することはできなかった。

3. 北外堤

(1) 概要

3次の調査にわたり、ほぼ東西方向にのびる外堤が、調査区北端で検出されている(第224図 写真図版139~141)。南外堤同様、北側については、その範囲は調査区外へ及ぶと考えられ、明確ではない。横断面は蒲葺形をなすものと考えられ、その南側約1/2が検出されているものと理解している。また、東側ほど調査区外へ拡がるため、東端部ではほとんど検出されていない。

(2) 形状・規模

検出した頂部の標高は、西端(dライン)で77.80m、中央部(eライン)で77.45mと、西端が最も高くなっている(第229図)。また、周濠底部との比高は、西端(dライン)で20cm、中央部(eライン)で65cmを測る。南外堤と比較して、全体的に低い傾向が認められる。

特に、渡土堤との接合部をみると、渡土堤上面と外堤上面のレベルに顕著な差は認められない。このため、外堤自体は、当初の形状に近い状態で検出された可能性も考えられる。

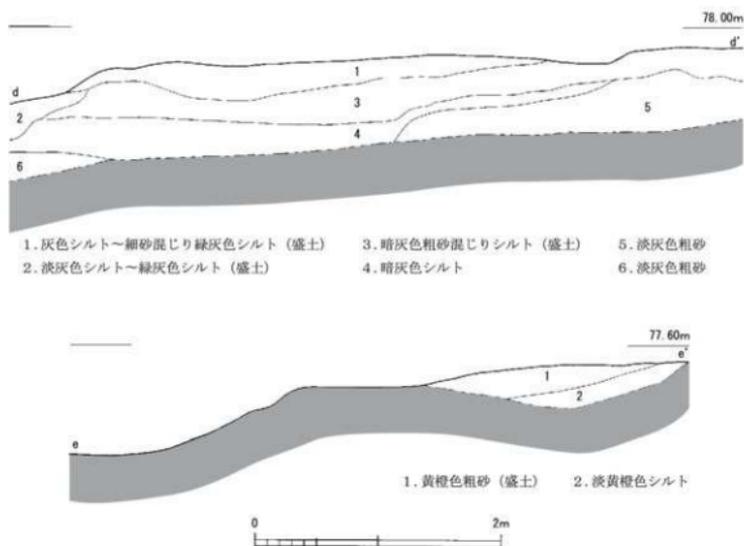
また、外堤基部部を基準とした外堤の検出幅は、西端部(dライン)で4.50m、中央部(eライン)で3.00mと、東側ほど狭くなっている(第229図)。

(3) 外堤の方向性

外堤全体が検出されていないため明確にできないが、外堤基部部のラインをみると、前方部基部部のラインとは明らかに平行関係にはない(第224図)。わずかではあるが、西側(後円部側)ほど前方部との距離が開く傾向にある。

(4) 外堤の構築

基盤層の削り込みと盛土から構築されている。明らかに盛土と確認できたのは、dラインの1層~3層と、eラインの1層である(第229図)。また、盛土層下の各層については、自然堆積による層であることが確認できた。なお、北外堤斜面においても葺石は認められなかった。外堤基部付近において、転石も認められなかった。よって、当初から葺石はなかったものと考えられる。これは、渡土堤西側斜面の外堤部との接合部まで葺石が残存するのに対して、これに接続する外堤斜面には葺石が一石も認め



第229図 北外堤断面

られなかった点からも、明確である。

（5）出土遺物

外堤頂部の直上は後世の堆積層（第87図）であったため、外堤上からの埴輪の出土はわずかであった。加えて、外堤斜面およびその基底部付近においても、埴輪の出土はわずかである。また、外堤頂部においても、埴輪を樹立した痕跡を確認することはできなかった。

以上から、外堤上に埴輪が樹立されていた状況を確認することはできなかった。ただし、渡土堤との接合部からは多量の埴輪が出土している（第4章第4節）。

第5章 出土遺物

第1節 概要

池田古墳に伴う遺物としては、埴輪・小型土製品・木製品・鉄製品が出土している（第230図）。量的には、埴輪が大半を占めている（巻首図版27）。

埴輪としては、円筒系埴輪と形象埴輪に大きく分類することができる。円筒系埴輪としては、円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪・丹後・因幡型円筒埴輪・その他が出土している。その他については、上記のいずれかに分類できることは明らかであるが、その種類を特定できないものである。この点については、次節で詳説する。

形象埴輪としては、水鳥形埴輪・家形埴輪・櫛形埴輪・圓形埴輪・船形埴輪・器財形埴輪が出土している。さらに、器財形埴輪としては、盾形埴輪・鞍形埴輪・蓋形埴輪・その他が出土している。その他としたものについては、甲冑あるいは鞆の可能性が考えられる埴輪と、種類を特定できない不明品が出土している。

小型土器としては、壺・鉢・高坏のように、当時一般的であった土器を小型化したものが、小形土製品としては桶形土製品・槽形土製品・棒状土製品・餅状土製品が出土している。

木製品としては、その種類を特定できるものとして、笠形木製品と木桶が出土している。他に、6点当該期のもと考えられる木製品が出土しているが、用途の特定は困難である。

鉄製品は、鉄斧が出土している。

なお、土器も出土しているが、直接池田古墳に関連するものは認められない。周濠の埋没過程で混入した平安時代を中心とした土器である。具体的には、土師器・須恵器・灰軸陶器が出土している。



第230図 池田古墳関連出土遺物

第2節 円筒系埴輪

1. 概要 (巻首図版30~34)

(1) はじめに

円筒系埴輪については、今回の調査のなかで最も多量に出土した埴輪である。円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪・丹後・因幡型円筒埴輪の4種が出土している。本報告では、これらの円筒系埴輪をまとめるにあたり、まず出土地区単位にまとめていくことにする。次に、上記の器種ごとに報告していく。

報告にあたっては、まず出土地点を明らかにしておきたい。次に、円筒系埴輪の4種についてであるが、完存もしくはそれに近い場合は、器種の特定は容易である。しかし、4種のいずれに分類されるか特定できないものが多く、特定できる個体はわずかである。以上のことから、器種の特定にあたっての判定基準を明らかにしておきたい。



第231図 主要円筒系埴輪出土位置 (南側)

(2) 出土地点

主な出土地点としては、前方部南側2段目斜面・前方部南側1段目テラス・前方部南側1段目テラス埴輪列・前方部南側1段目斜面・区画溝・南造り出し西側埴輪列・南造り出し北側埴輪列・南造り出し上面およびその周辺・南渡土堤・南周濠・前方部北側2段目テラスおよび3段目斜面・前方部北側1段目埴輪列・前方部北側1段目斜面・北造り出しおよびその周辺斜面・北渡土堤およびその周辺・北渡土堤北端部・北周濠・その他、に分類することができる(第231図・第232図)。

以下、その出土地点ごとにその概要を報告する。この報告にあたって、樹立位置を特定できる埴輪については、それぞれの頭に「H」をつけた番号を付け、これに該当する埴輪を報告していく。また、樹立位置を特定することはできないが、出土位置・出土状況が明らかなものについては頭に「h」を付けた番号をつけ、報告していく。

前方部南側2段目斜面 h3を除いては、2段目斜面上から出土したもので、いずれも破片となって出土している。



第232図 主要円筒系埴輪出土位置(北側)

前方面南側1段目テラス テラス上には、2段目斜面から落ち込んだと考えられる一群(h1～h5・h7)が認められる。さらに、埴輪列から倒れ込んだ状態で検出された一群(h6)が存在する。厳密には、h3は2段目斜面上から出土しているが、ここではテラス出土埴輪として扱うことにする。

前方面南側1段目テラス埴輪列 底部のみではあるが、大半の底部が樹立された状態で出土している。

H1～H53の53本分(H30は報告済・H50・H51は埴輪が残存せず)を検出している。



第233図 出土円筒系埴輪

前方面南側1段目斜面 南側1段目テラスから落ち込んだ埴輪群と考えられるものである(第248図)。このため、樹立した状態で検出された埴輪は存在しない。

区画溝 前方面南側1段目斜面と南造り出しからの埴輪が混在している。1本の埴輪が倒れ込んだ状態で検出された箇所(h8～h10・h12・h14・h16・h18)と、小片が散乱した状態で出土した箇所(h11・h13・h15・h17)が認められる(第254図)。当初の樹立位置については、第7章第7節で検討する。

南造り出しおよびその周辺 造り出し上面から出土した埴輪と南側斜面・東側斜面から出土した埴輪からなる。上面においては小片が散乱した状態で出土している。造り出し斜面出土埴輪のなかには、一部斜面裾部付近の周濠出土埴輪も含まれる。

南造り出し西側埴輪列 南造り出し上面西側縁辺部で検出された埴輪列である。底部のみではあるが、樹立された状態で検出されている。H90～H99の10本からなる。

南造り出し北側埴輪列 南造り出し上面北側縁辺部で検出された埴輪列である。底部のみではあるが、樹立された状態で検出されている。H68～H89の22本からなる。

南渡土堤 渡土堤上面およびその斜面から出土した埴輪群である。樹立した状態で検出された埴輪は認められない。斜面出土埴輪のなかには、一部斜面裾部付近の周濠出土埴輪も含まれる。

南周濠 前方面・造り出し・渡土堤斜面裾部付近を除く地区から出土した埴輪である。小片のものが多く、良好な状態で出土したものはわずかである。

前方面北側2段目テラスおよび3段目斜面 樹立された状態で検出された埴輪は認められない。多くは、小片が散乱した状態で出土している。

前方面北側1段目埴輪列 埴輪列の一部が残存していた。原位置が保たれていないものも多く認められたが、一部では樹立された状態で出土している埴輪も認められた(H54～H67)。

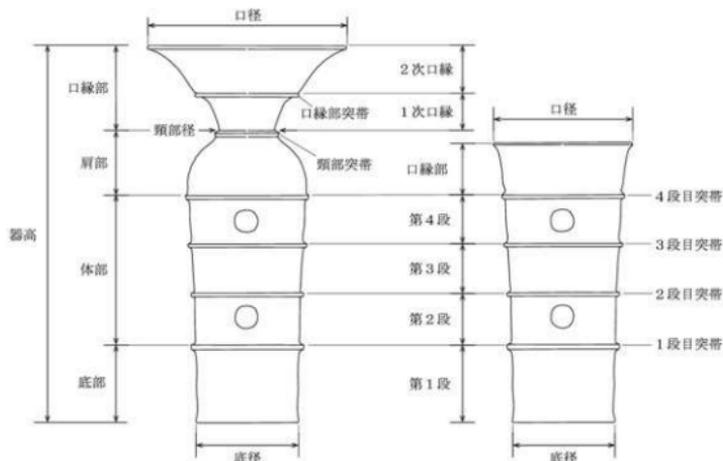
前方面北側1段目斜面 前方面南側同様、基本的に南側1段目テラスから落ち込んだ埴輪群と考えられるものである(h25・h26)。このため、樹立した状態で検出された埴輪は存在しない。

北造り出しおよびその周辺 造り出し上面、およびその周囲斜面から出土した埴輪である。前方面との境をなす石敷き遺構から出土した埴輪も含まれる。一部斜面裾部付近の周濠出土埴輪(h30)も含まれる。

北渡土堤およびその周辺 渡土堤上面およびその斜面から出土した埴輪群である。樹立した状態で検出された埴輪は認められないが、一部で倒れ込んだ状態で検出されている(h31～h34:第294図)。

北渡土堤北端 北外堤との接合部において、多量に出土している(h35:第299図)。

北周濠 南周濠同様、前方面・造り出し・渡土堤斜面裾部付近を除く地区から出土した埴輪である。小



第234図 円筒埴輪・朝顔形埴輪 部分名称

片のものが多く、良好な状態で出土したものはわずかである。

その他 前方部盛土層内から出土した埴輪である。全て小片で、樹立された位置の復元も困難である。

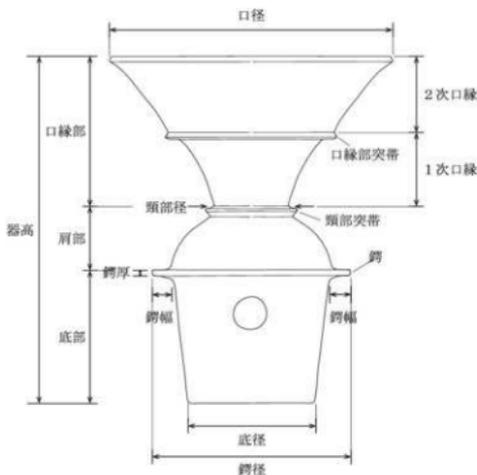
(3) 円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪・丹後・因幡型円筒埴輪の判断基準

まず、上記4種の埴輪について、その種類を特定する判断基準を明確にしておきたい。

円筒埴輪 底部から口径部にかけては直線的なもので、直立する口径部の形態およびその存在により判断される。

朝顔形埴輪 円筒形の体部に複合口径壺の上半部が載せられた形態をなすものである。よって、複合口径をなす口径部と、肩部の形態から判断される。

壺形埴輪 底部上端に鈎状の突帯が貼り付けられ、その上に複合口径壺の上半部が載せられた形態をなすものである。底部には円形透かしが認められる。底部の円形透



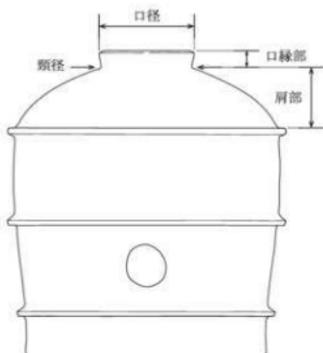
第235図 壺形埴輪部分名称

かし、または鈎状の突帯により判断される。

丹後—因幡型円筒埴輪 半球形の肩部に口縁部が短く立ち上がるもので、口縁部形態から判断される。

以上が、4種の円筒系埴輪の特徴と、その判断基準である。よって、体部片については、円筒埴輪・朝顔形埴輪・丹後—因幡型円筒埴輪の可能性が考えられる。透かしを伴わないと判断できない底部については、4種すべての可能性が考えられる。肩部片については、朝顔形埴輪・丹後—因幡型円筒埴輪・壺形埴輪の可能性が考えられる。複合口縁および頸部片については、朝顔形埴輪もしくは壺形埴輪の可能性が考えられる。

以上から、出土地点ごとに、(1)円筒埴輪、(2)体部片、(3)底部片、(4)丹後—因幡型円筒埴輪、(5)朝顔形埴輪、(6)肩部片、(7)口縁部片・頸部片、(8)壺形埴輪に分類し、報告していく。なお、円筒系埴輪の部分名称等は第234図～第236図の通りである。



第236図 丹後—因幡型円筒埴輪 上部名称

2. 前南部南側2段目斜面

(1) 概要

円筒埴輪・底部片・朝顔形埴輪・肩部片が出土しているが、出土量はわずかである。良好な状態で出土したものは認められず、全体的に小片での出土が目立つ。

(2) 円筒埴輪 (図版1 写真図版182 観察表1)

1～7が出土している。

1は、口縁部から4段目にかけて残存する。口縁部は、体部から直線的に立ち上がり、端部を逆L字形に屈曲させている。端部は、内外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられている。4段目には円形の透かしが1箇所残存する。4段目は、外面が縦方向のハケ、内面がナデとユビオサエにより仕上げられている。突帯は、断面形が方形に近い台形をなし、端部はわずかにM字状をなす。

2は、口縁部から2段目にかけて残存する。4段目と2段目には、透かし穴が各1箇所わずかに残存する。体部から口縁部にかけて直立し、口縁端部が外方に屈曲する。上下から押圧するヨコナデにより仕上げられ、端面は認められない。

内外面ともハケを基調とし、最後に口縁部がヨコナデにより仕上げられている。外面は2段目を除いてタテハケの後ヨコハケが施されているが、2段目はタテハケのみである。ただしヨコハケについては、静止痕は認められない。内面は、タテハケが主体であるが、口縁部に限りヨコハケが加えられている。突帯は3条残存する。いずれも断面形が長方形に近い台形をなし、突帯高が1.10cmと突出傾向にある。

3～7は、口縁部のみ残存する。3は、わずかに反外傾向にある口縁部に対して、端部は逆L字形に折り返されている。外面はヨコハケにより仕上げられているが、内面は全体的に剥離傾向にある。最後に、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。なお、外面には赤色塗布が認められる。4の口縁端部は逆L字形をなし、ヨコナデにより口縁部より明らかに薄く仕上げられている。外面は縦方向のハ

ケにより仕上げられている。内面の調整は、磨滅のため観察できない。5の口縁端部は、断面長方形に肥厚する。この結果、口縁部外面は帯状をなす。磨滅のため調整は観察できない。6は、直立する口縁部に対して、端部は逆L字形に折り返されている。内外面とも、磨滅のため調整は観察できない。外面の一部に赤色塗布が認められる。7は直立する口縁部に対して端部がわずかに反転する。外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はヨコハケにより仕上げられている。

(3) 体部片 (図版1・2 観察表1)

8~13が出土している。

8と9は、体部の小片である。8の外面はハケにより仕上げられ、弧状をなす線刻が認められる。内面は縦方向のハケにより仕上げられている。9は、体部の小片である。外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、2本の平行する線刻が描かれている。内面は、ハケの後ナデが加えられている。外面の一部には赤色塗布が認められる (写真図版182)。

10と12は、体部2段と突帯1条が残存する。10の上段には円形の透かしが1箇所残存する。外面は、上段がヨコハケにより仕上げられ、静止痕が認められる。下段はタテハケにより仕上げられている。内面は、上段がユビオサエの後ユビナデ、下段がハケの後ナデにより仕上げられている。ユビオサエについては、突帯貼り付け位置内面上側に顕著に認められる。突帯は、断面形が台形をなすが、突帯高が8mmと低い傾向にある。なお、外面全面に赤色塗布が認められる。

12は、体部2段と突帯1条が残存する。上段外面はタテハケの後ヨコハケ、下段内面はヨコハケにより、内面はナデにより仕上げられている。突帯は断面台形をなし、端部は丸味を帯びている。

11は、体部3段と突帯2条が残存する。外面は、全体的に磨滅傾向にあるが、中段はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は、各段ともナデにより仕上げられている。突帯は、上段と下段ではその断面形状が異なる特徴が認められる。また、最上段には円形の透かしが1箇所残存する。

13は、体部1段と突帯1条が残存する。外面はストロークの長いヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。突帯は、断面台形をなす。

(4) 底部片 (図版2 観察表1)

14の1点に限られる。14は、底部のみ残存する。外面はヨコハケ、内面は縦方向のユビナデにより仕上げられている。基底下面は未調整である。

(5) 朝顔形埴輪 (図版2 写真図版183 観察表1)

16の1点に限られる。16は、口縁部から肩部にかけて残存する。口縁部は1次口縁のみの残存で、内外面ともハケにより仕上げられている。内面は斜方向、外面は縦方向である。頸部内面はヨコナデにより仕上げられ、外面には断面鈍角三角形の突帯が貼り付けられている。肩部内面は、上半がユビナデ、下半がハケの後ナデにより仕上げられている。外面の調整については、磨滅のため観察できない。

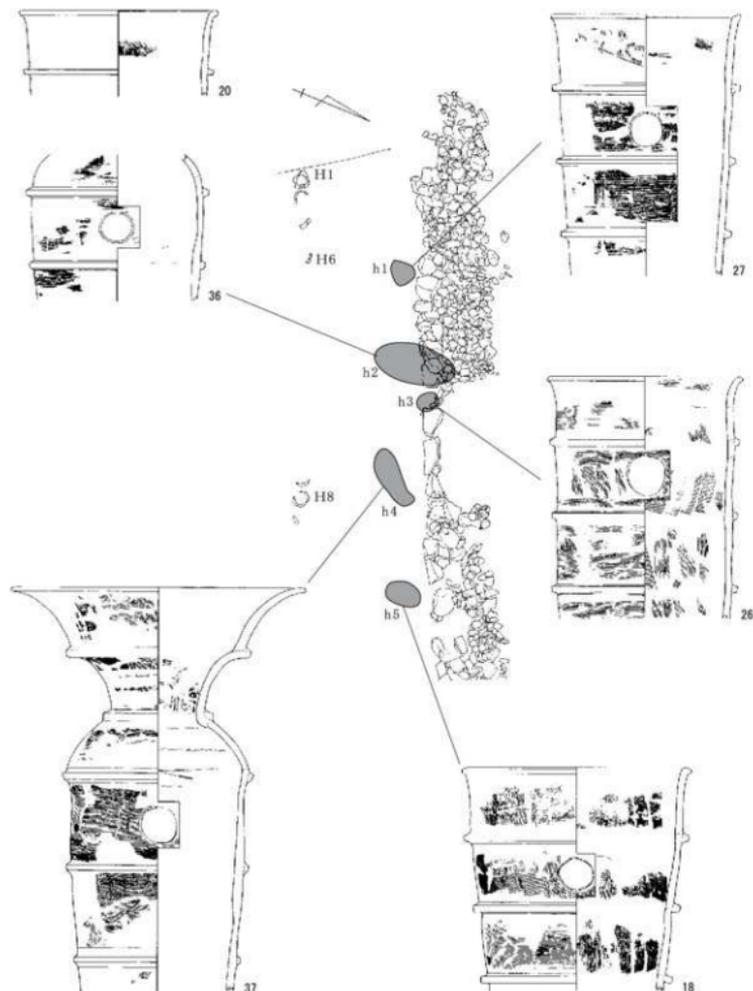
(6) 肩部片 (図版2 観察表1)

15の1点に限られる。15は、肩部から体部にかけて残存する。外面肩部と体部の境には、突帯が貼り付けられている。内外面ともナデにより仕上げられている。

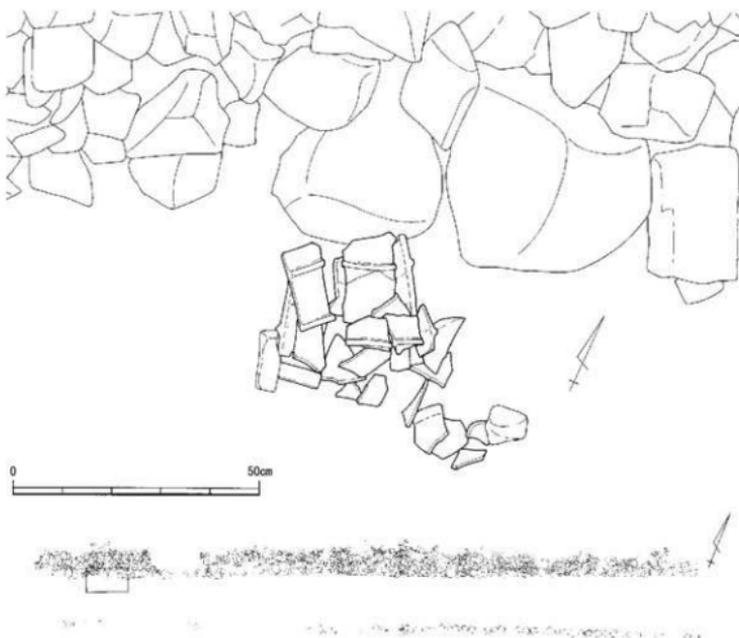
3. 前方部南側1段目テラス

(1) 概要

南側1段目テラス上から出土した円筒系埴輪群である。円筒埴輪・体部片・底部片・朝顔形埴輪・肩部片・口縁部片・丹後型円筒埴輪が出土している。このなかで、6箇所(h1～h5・h7)でまとまった出土が認められる(第231図・第237図)。他に、小片ではあるが円筒埴輪や体部片等が出土している。埴輪列出土埴輪については次項で報告する。



第237図 前方部南側1段目テラス 主要埴輪出土位置



第238図 h1 埴輪出土状況

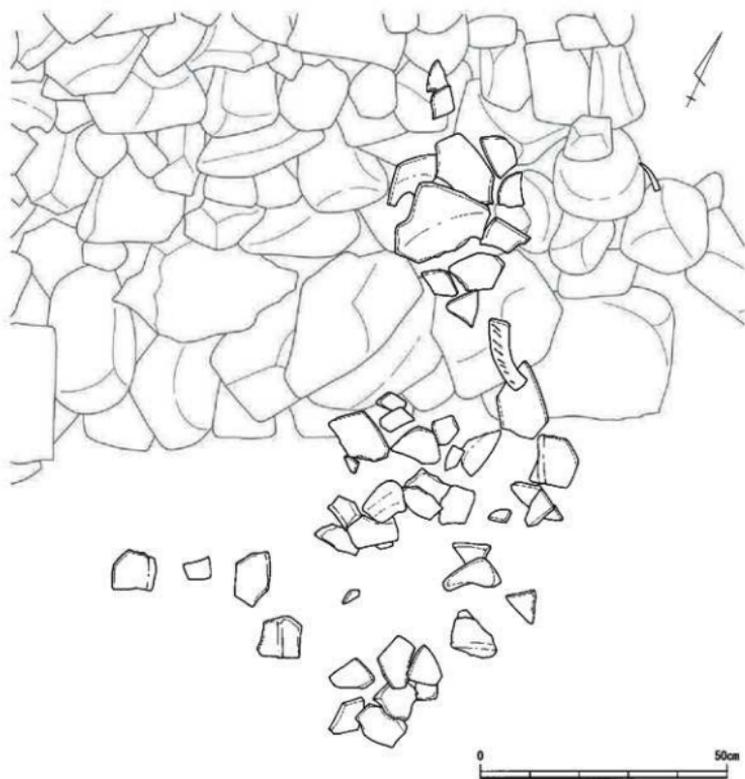
主な埴輪の出土状況は以下の通りである。

h1 (第238図 写真図版39:①・② 観察表2) 27が、後円部側に近い1段目テラス上面から出土している。厳密には、テラス直上ではなく、わずかに転石層が堆積した後に倒れたものである。一部、2段目葺石基底石までおよんでいるが、基本的にはテラス上での出土である。ただし、その位置は、テラス上でも2段目斜面付近にあたる。体部がその場で押し潰された状況で出土している。これらの出土状況から考えて、2段目斜面上部から倒れ、その場で潰れたものと考えられる。

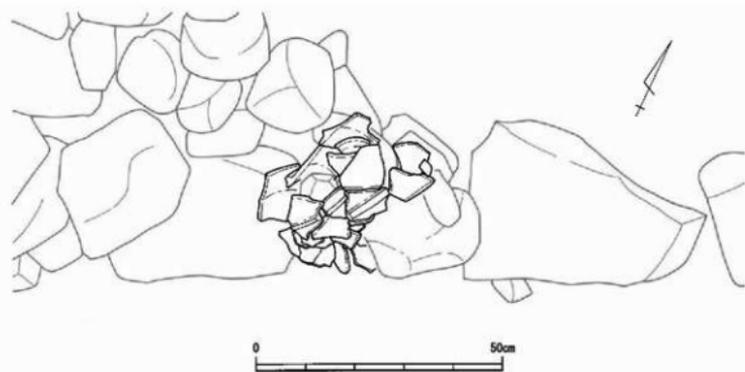
h2 (第239図 写真図版39:③ 観察表2) 20・36が、2段目葺石転石層および1段目テラスにかけて出土している。ただし、テラス上でも2段目斜面付近に集中し、埴輪列側までは及んでいない。南北で3mの範囲から出土しており、破片も比較的小片のものも目立ち、全体的に散乱した状態での出土傾向にある。葺石直上からの出土ではなく、上部の崩壊とともに倒れ込んだものと考えられる。

h3 (第240図 写真図版40:⑥ 観察表2) 26が2段目葺石基底石直上から出土している。h2の東側、h4の西側にあたる。一箇所に集中し、円筒埴輪が押しつぶされた状態で出土している。このような状況から、2段目テラス埴輪列の一部が2段目斜面に倒れ込み、押し潰されたものと考えられる。

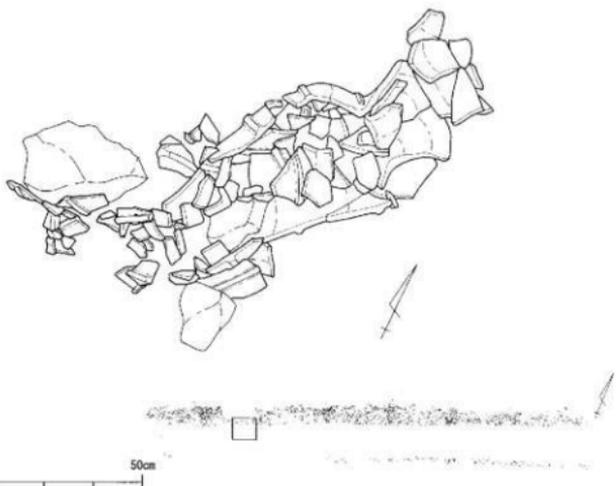
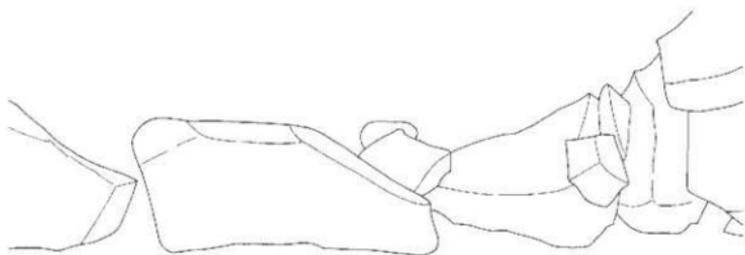
h4 (第241図 写真図版40:④⑤ 観察表3) 37が、平面的には1段目テラス上から出土している。ただし、その位置は、テラス上でも2段目斜面付近である。口縁部を2段目基底石側に向け、倒れた状態で出土している。1箇所でまとまった状態での出土で、倒れた埴輪がその場で押し潰された状況である。



第239図 h2 埴輪出土状況



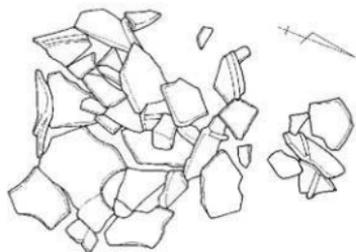
第240図 h3 埴輪出土状況



第241図 h4 埴輪出土状況

h5 (第243図 写真図版41:① 観察表1) 18が、平面的には1段目テラス上から出土している。その位置は、テラス上でも2段目斜面付近で、テラス直上ではなく、2段目葺石転石層上から出土している。1箇所でまとまった状態での出土で、倒れた埴輪がその場で押し潰された状況である。

h7 (第242図 観察表3) 円筒埴輪列日群北側のテラス中央部に位置する (第231図)。38が1箇所に集中して出土している。比較的破片が大きいことから、倒れたものがその場で押し潰されたものと考えられる。



第242図 h7 埴輪出土状況



第243図 h5 埴輪出土状況

(2) 円筒埴輪 (図版2～4 観察表1・2)

17と20は、口縁部から4段目にかけて残存する。

17の口縁部外面には、赤色塗布が認められる。直立する体部に対して、口縁部は全体的に外反傾向にある。外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。特に、口縁部において静止痕が認められる。ただし、静止痕の間隔は一定せず、ハケ目自体が波打っており、全体的に稚拙である(写真図版182)。内面は、ハケの後ナデが加えられている。その他、突帯貼り付け位置下側の内面はユビオサエ痕が顕著である。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

20は、直立する口縁部に対して端部が大きく外反する。口縁部から体部にかけての内面は、ナデとハケにより仕上げられ、その後口縁端部がヨコナデにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置の内面上側は、ユビオサエが顕著に認められる。外面の調整については、磨滅のため観察できない。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突帯高が1.00cmと突出する。また、端部もシャープに仕上げられている。

19・21～25は、口縁部を中心に残存する。

19の下端には突帯の貼り付け痕が認められるが、突帯自体は剥離している。体部から口縁部にかけては、斜上方に開き気味にのび、端部を逆L字形に屈曲させている。外面はハケ、内面は横方向を主体としたナデにより仕上げられている。

21は、体部に対して大きく外反し、端部を肥厚させている。端部内面は、帯状に肥厚している。内外面ともヨコナデにより仕上げられている。体部内面にはヨコハケが認められる。

22は、口縁部から端部にかけて外反傾向にあり、端部はやや丸く仕上げられている。内外面ともタテハケにより仕上げられている。最後に、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。なお、外面の一部に赤色塗布が認められる。

23の口縁部は、外端部を中心としたヨコナデにより、外端部が斜上方につまみだされている。外面は縦方向のハケ、内面は斜方向のユビナデにより仕上げられている。全体的に器壁が厚く仕上げられている。

24は、外傾する口縁部に対して、端部が短く外反する。内外面の調整は、磨減のため観察できないが、端部は内外面ともヨコナデにより仕上げられている。

25は、端部にかけて大きく外反し、端部は垂直な端面が形成されている。外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。外面には赤色塗布が認められる。出土位置・色調・胎土等の特徴から、28と同一個体の可能性が考えられる。

18・26・27は、口縁部から2段目にかけて残存する。

18は、ほぼ全面に赤色塗布が認められ、口縁部を中心に黒斑が認められる。4段目には円形の透かしが2方に開けられている。体部から口縁部にかけてやや開き気味に直線的にのび、口縁部は逆L字形に屈曲する。

口縁部は、内外面ともタテハケを基調とし、最後に口縁部がヨコナデにより仕上げられている。4段目外面はタテハケ、3段目外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。3段目のヨコハケは波打つようなヨコハケで、静止痕は認められない。内面は、タテハケを基調とし、突帯貼り付け位置の内面に限り、ヨコナデが加えられている。また、突帯貼り付け位置内面の下側には、ユビオサエ痕が顕著に認められる。

突帯は3条残存する。各突帯の断面形は方形に近い台形を基本形とするが、厳密には同じではない。突帯高が1.15cm～1.30cmと突出傾向にある点は、共通して認められる特徴である。

26は、2段目から4段目にかけて黒斑が認められる。4段目に円形透かしが1箇所残存し、2段目にもその一部が残存する。各段に千鳥に配されたものと考えられる。

口縁部は外反傾向にあり、内外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられている。口縁部外面はヨコハケにより仕上げられているが、静止痕は認められない。内面は、ハケの後ナデが加えられている。2段目から4段目外面は、いずれもヨコハケにより仕上げられているが、静止痕は認められず、ストロークの長いヨコハケと考えられる。内面は、縦方向(下→上)のハケの後ナデが加えられている。なお、3段目と4段目の高さは、いずれも12.00cmと11.90cmとほぼ同じである。突帯は、断面方形に近い台形をなし、強いヨコナデにより貼り付けられている。

27は、各段に黒斑が認められる。4段目と2段目には円形の透かしが2箇所ずつ開けられているが、各段とも相対する位置よりわずかにずれた位置に開けられている。このため、2段目と4段目の透かしの位置関係は、整った千鳥の関係とは言い難い。このほか、口縁部外面には、斜行する1本の線刻が認められる(写真図版184:a)。

口縁部は、内外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられ、外端面が形成されるとともに、内面も直線的に仕上げられている。この結果、口縁部が外側に短く屈曲した形態となっている。

外面はハケにより仕上げられているが、口縁部は縦方向を基調とし、4段目以下はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。特に4段目と3段目には斜行する静止痕が認められる(第244回 写真図版184:b)。また、ハケ目が細かい傾向が認められる。内面は、口縁部にハケ痕がわずかに認められるが、全体的にナデとユビオサエにより仕上げられている。

突帯は3条残存する。いずれも断面形が長方形に近い台形で、突帯高が1.1cmと突出する。



第244図 27体部外面拓影

(3) 体部片 (図版4 観察表2)

28と30は、体部2段と突帯1条が残存する。28の内面は、ナデとユビオサエにより仕上げられている。突帯は、断面形が上端部を突出させる台形をなし、その剥離面には縦方向のハケ目が認められる。この他、上段には円形透かしの一部が残存する。出土位置・色調・胎土等の特徴から、25と同一個体の可能性が考えられる。30は、内面がタテハケの後ヨコハケ、外面上段がヨコハケにより仕上げられている。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突出傾向にある。

29は、体部1段が残存する。外面はヨコハケにより仕上げられている。内面の調整は、磨滅のため観察できない。また、円形の透かしの一部が残存する。

(4) 底部片 (図版4 観察表2)

31は、底部が残存する。全体的に磨滅傾向にあるが、内面はナデにより仕上げられている。また、下端内面はユビオサエ痕が顕著である。下面は未調整である。

32は、底部と1段目突帯が残存する。底部外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面については磨滅が著しく、調整を観察することはできない。底部下面は未調整である。突帯は、上端部を欠く。

(5) 朝顔形埴輪 (図版6 観察表3)

37は、口縁部から体部(2段目)にかけて残存する。体部は、内面がタテハケの後にいいなナデにより仕上げられている。外面は、3段目・4段目がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。両段ともに静止痕が認められる(写真図版186:a)。なお、2段目については、磨滅のため観察できない。また、3段目と4段目には円形の透かしが開けられている。3段目は2箇所残存し、ほぼ相対する位置に開けられている。4段目も2箇所残存する。突帯は3条残存する。いずれも断面形が台形をなすが、突出度はわずかで、全体的に丸味を帯びている。

肩部は、外面がヨコハケ、内面がユビオサエとユビナデにより仕上げられている。また、径1.4cmの小孔が1箇所が開けられている(写真図版185)。頸部との境外面には断面長方形の突帯が貼り付けられている。

口縁部は、1次口縁の上端やや内側に2次口縁が載せられている。1次口縁の端部は突出し、突帯状をなす。外面は、1次・2次ともに縦方向のハケにより仕上げられている。内面は、1次口縁が横方向のハケにより仕上げられている。2次口縁については、磨滅のため観察できない。最後に、外面のハケの後、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

(6) 肩部片 (図版5 観察表2)

36は、肩部から体部(3段目)にかけて残存する。肩部から体部にかけて、外面はヨコハケにより仕上げられている。特に4段目においては静止痕が認められる。内面の調整は、磨滅のため観察できない。3段目と4段目に突帯が貼り付けられているが、断面形状は異なり、4段目突帯の方が突出傾向にある。この他、4段目には円形の透かしが1箇所残存する。

(7) 口縁部片 (図版5 観察表2)

33は、1次口縁の一部と2次口縁が残存し、1次口縁の上端部に2次口縁が載せられている。そして、当該箇所外面はわずかに断面三角形の突帯をなす。1次口縁・2次口縁とも、内外面はナデにより仕上げられている。また、内面の一部にはハケ目が残存する。この他、1次口縁と2次口縁の接合部内面を中心に、ユビオサエ痕が顕著に認められる。

34は、1次口縁の大半と2次口縁が残存し、1次口縁の上端部に2次口縁が載せられている。剥離した1次口縁の接合面には、貼り付けのための刻み目が顕著に認められる(写真図版183:a)。内面は1次口縁・2次口縁ともナデ、外面は2次口縁がハケ、1次口縁がナデにより仕上げられている。また、外面には、部分的ではあるが赤色顔料が残存する。

35は、1次口縁上端から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の上端部に2次口縁が載せられ、その境界面が1次口縁端部により突帯状をなす。2次口縁内外面はハケにより仕上げられている。1次口縁内外面の調整は、磨滅により観察できない。

(8) 丹後-因幡型円筒埴輪 (図版7 観察表3)

38は、口縁部から2段目下端まで残存する。3段目に円形の透かしが2箇所残存し、4段目外面には線刻が認められる(写真図版187:c)。

やや扁平傾向にある肩部に対して、口縁部がやや外傾気味に屈曲する。端部は外傾する端面が形成されている。肩部に対して口縁部の器壁が極端に薄く仕上げられている点が、特徴的である。肩部外面はヨコハケ、内面は縦方向のユビナデにより仕上げられ、最後に口縁部内外面がヨコナデにより仕上げられている。また、頸部内面はナデにより仕上げられている。

体部は、4段目がタテハケの後ヨコハケ、3段目がヨコハケ、2段目がタテハケとヨコハケにより、仕上げられている。特に、4段目と3段目のヨコハケには静止痕が認められる(写真図版187:e)。内面は、4段目から2段目にかけてタテハケにより仕上げられている。なお、4段目上端部において、内面のハケ目の上側に肩部の粘土が継ぎ足されている(写真図版187:d)。断面観察の結果を合わせると、この箇所成形上の時間差が認められる。

突帯は、3条残存するが、いずれも断面形が長方形に近い台形をなし、突出傾向にある。1段目突帯は、剥離痕のみ認められる。

4. 前方部南側1段目テラス埴輪列

(1) 出土状況

現位置が保たれた状態で出土した埴輪の具体的な出土状況(第115図～第118図・第120図～第122図)については、第4章で報告したとおりである。上記以外にも、h6についても、その出土状況(第245図)から、埴輪列が倒壊したものと考えられる。h6は、H27の東側に散乱した状況での出土であるが、H27を中心に拡散している。H27もしくは、H26の可能性が高い一群である。

なお、本項に限り埴輪の種類ごとではなく、樹立位置単位で報告していく。



第245図 h6 埴輪出土状況

(2) A群

H1 底部の109が該当する(図版18 観察表7)。基底部から2段目にかけて残存する。内外面ともナデを基調とし、内面下端

部はエビオサエにより仕上げられている。底部下面もナデにより仕上げられている。突帯は、断面台形をなし、比較的突出している。突帯の貼り付けはヨコナデにより、端部はシャープに仕上げられている。

H2 底部の95と肩部の138からなる(図版16・22 観察表6・8)。両個体から、H2は朝顔形埴輪もしくは丹後-因幡型円筒埴輪が樹立されていたものと判断される。

95は、底部から2段目にかけて残存するが、残存する範囲では黒斑は認められない。内外面の調整は、磨減が著しく観察できない。底部は未調整で、溝状の圧痕が認められる(写真図版191)。突帯は、その高さ1.4cmと突出し、断面は長方形をなす。

138は、肩部が残存する。下端には4段目突帯が残存する。基本的に内外面とも磨減のため調整は観察できないが、突帯貼り付け位置内面上側にはエビオサエ痕が顕著に認められる。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突出している。

H3 底部の114の1個体である(図版19 観察表7)。114は、底部から2段目にかけて残存する。底部と2段目の境をなす突帯は剥離しており、その剥離痕のみ認められる。内外面とも磨減が顕著であるが、部分的にハケの痕が認められる。底部下面はナデにより仕上げられているが、部分的に棒状の圧痕も認められる(写真図版196)。

H4 底部の128と、口縁部の136からなる(図版21 観察表8)。

136については、出土位置からH5の可能性も考えられたが、胎土の特徴から、128と同一個体の可能性が高いと判断したものである。よって、H4は、朝顔形埴輪が樹立されていたものと判断される。

136は2次口縁が残存する。内外面ともハケの後、端部がヨコナデにより仕上げられている。128は、底部から2段目にかけて残存する。外面はヨコハケにより、内面はナデにより仕上げられている。底部外面のヨコハケは、静止痕が認められず、ストロークの長いヨコハケである。底部下面は、ナデにより

仕上げられている。

H 5 底部の82が出土している(図版14 観察表5)。82は、底部から2段目にかけて残存する。2段目下部に円形の透かしが1箇所残存する。底部外面上部は斜方向のハケ、下部はナデにより仕上げられている。他の部位の調整については、磨減が著しく観察することはできない。底部下面はナデにより仕上げられている。突帯は、比較的突出し、断面形は方形に近い台形をなす。

H 6 底部の87が該当する(図版15 観察表5)。底部から2段目にかけて残存する。内外面とも磨減が著しく、調整を詳しく観察することはできない。ただし、突帯貼り付け位置の内面やや上側は、ユビオサエ痕が帯状に認められる。底部下面は、ナデにより仕上げられている。突帯は断面台形をなすが、下端の突出が弱い傾向にある。器壁が1cmと、他の埴輪と比較して薄い傾向が指摘できる。

その他 45と52の円筒埴輪が出土している(図版10・11 観察表3)。

45は、口縁部を中心に残存する。口縁部は、体部に対して外反傾向にあり、端部はさらに短く外反している。端部は、ヨコナデにより断面に対して直角な端面をなしている。体部は、内外面とも縦方向に近い斜方向のハケにより仕上げられている。

52は、口縁部のみ残存する。内外面をハケの後、端部を中心にヨコナデにより短く外反し、明確な端面が形成されている。

(3) B群

円筒埴輪の40・62、体部の69、底部の122・133、肩部の139が出土している(図版9・13・20~22 観察表3・4・7・8)。散乱した状態で出土しており、樹立状態は保たれていない。

40は、口縁部から4段目にかけて残存する。口縁部の一部には、赤色塗布が認められる。口縁部は外反気味に立ちあがり、端部はさらに短く外反する。内外面とも磨減傾向にあるが、内面にはナデとユビオサエの痕跡が認められる。さらに、一部にハケ目が認められる。また、外面については、口縁端部付近に線刻状の平行する弱い沈線が認められる。

62は、口縁部が残存する。端部は短く外反し、ヨコナデにより仕上げられている。

69は、体部2段分と突帯1条が残存する。外面はナデ、内面はハケとナデにより、仕上げられている。突帯は、断面形が台形をなし、比較的突出する。出土位置・胎土・色調等の特徴から、62と同一個体の可能性が考えられる。

122は底部が残存する。内外面の調整は、磨減により観察できない。ただし、底部下面は弱いナデが加えられている。133は底部が残存する。内外面の調整は磨減により観察できないが、下端部付近内面にはユビオサエ痕が顕著に認められる。また、底部下面は未調整である。

139は、肩部下端の小片である。外面がナデにより仕上げられ、線刻が加えられている(写真図版198)。内面の調整は磨減のため観察できない。

(4) C群

H 7 底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

H 8 体部片の68と、底部片の98が出土している(図版13・図版17 観察表4・6)。

68は3段分残存する。上段が口縁部から3段目の可能性が考えられるが、どの部位かの確定は困難である。中段には円形の透かしが2箇所認められる。外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられて

いる。内面は、ハケの後ナデとユビオサエにより仕上げられている。ヨコハケは、静止痕が認められず、ストロークの長いヨコハケである。

98は、底部から2段目にかけて残存する。外面の調整は、磨減が著しく観察できない。内面は、ナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下面もナデにより仕上げられている。突帯は、断面台形をなすが、突出度は低い傾向にある。

H9 底部の93が出土している(図版16 観察表6)。93は、底部から2段目にかけて残存する。底部下端には半円形に挟まれた箇所が認められる。外面はハケ、内面はユビナデとユビオサエにより仕上げられている。特に内面のナデは丁寧とはいえず、下部を中心に粘土紐痕が顕著に認められる。また、底部下面は未調整である。突帯は、断面台形をなすが、下面に対して上面が広い特徴が認められる。

H10 底部の103が出土している(図版17 観察表6)。内面はユビナデとユビオサエにより仕上げられているが、外面の調整は磨減が著しく観察することはできない。底部下面は未調整である。

H11 円筒埴輪の55が出土している(図版11 観察表4)。55は、口縁部の小片である。直立する口縁部に対して、端部が短く外反する。口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。他の箇所の調整は、磨減のため観察できない。

また、円筒埴輪の47(図版10 観察表3)がH11の北側から出土している。47は、口縁部から4段目にかけて残存する。口縁部は、端部付近を中心にヨコナデにより仕上げられ、外反傾向にある。他の部位の調整については、内外面とも磨減が著しく観察できない。ただし、突帯貼り付け位置の内面やや上側は、ユビオサエ痕が帯状に認められる。突帯は断面台形をなす。突出度は顕著ではないが、上端部は強いヨコナデによりシャープに仕上げられている。器壁が8mmと、他の埴輪と比較して薄い点が特徴的である。

その他 底部片の130と、口縁部片の135が出土している(図版21 観察表8)。130は、底部が残存する。内面は、ナデとユビオサエにより仕上げられている。特に下端部付近内面は、ユビオサエ痕が顕著である。外面の調整は磨減により観察できない。また、底部下面は弱いナデが加えられている。

135は、口縁部が残存する。1次口縁の一部と2次口縁が残存し、1次口縁の延長上に2次口縁がつけられている。さらに、当該箇所外面には断面台形の突帯が貼り付けられている。1次口縁・2次口縁とも、内外面はナデにより仕上げられている。

(5) D群

H12 底部の91が出土している(図版16 観察表6)。91は、底部から2段目の下端にかけて残存する。底部から体部にかけて開き気味に立ち上がり、底部と体部の境には突帯が貼り付けられている。突帯はその貼り付け部のみ残存する。外面はタテハケ、内面はユビナデとユビオサエにより仕上げられている。下端部はナデにより仕上げられている。

H13 底部片の112が出土している(図版19 観察表7)。112は、底部から1段目突帯まで残存する。全体的に歪んでおり、平面形が25cm×23cmの楕円形をなす。底部外面はヨコハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整である(写真図版195)。突帯は断面台形をなし、強いヨコナデにより貼り付けられている。

H14 体部片の80と、底部片の81が出土している(図版14 観察表5)。

80は、体部1段分と突帯1条が残存する。外面はヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。突

帯は、断面形がM字形に近い台形をなすが、全体的に丸みを帯びている。出土位置・色調・胎土等の特徴から、81と同一個体の可能性が考えられる。

81は、底部が残存する。内面はナデとユビオサエにより、外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。特にヨコハケについては、静止痕が認められる。また、底部下面は弱いナデが加えられている。出土位置・色調・胎土等の特徴から、80と同一個体の可能性が考えられる。

H15 底部片の102が出土している（図版17 観察表6）。102は、底部から2段目にかけて残存する。底部を中心に黒斑が認められる。底部は、その立ち上がりやや歪んでおり、直線的ではない。また、底部下端内面は、自重により肥厚傾向にある。全体的に磨滅傾向にあるが、外面の一部にはハケ目が認められる。内面はナデとユビオサエにより仕上げられ、部分的にハケ目が認められる。底部下端はナデにより仕上げられている。

その他 円筒埴輪の59と、底部片の125が出土している（図版11・20 観察表4・7）。

59は、大きく2体からなる。1つは口縁部から4段目にかけて残存するもので、もう一つは体部のみが残存する。両者は、出土位置・色調・胎土等の特徴から同一個体と考えられるものである。そこで両者を図上で復元したのが図版11の実測図である。結果として、口縁部から2段目まで残存する円筒埴輪となる。このため、円形の透かしが2段目と確認できる。

4段目を中心に黒斑が認められる。体部から口縁部にかけて直立し、口縁部は短く屈曲気味に外反する。外面は、ハケの後ヨコナデにより明確な外端面が形成されている。外面は、口縁部がタテハケの後ヨコハケ、4段目がヨコハケにより仕上げられている。内面は、4段目から口縁部にかけてナデにより仕上げられている。突帯は断面長方形に近い台形をなし、突帯高1.10cmと比較的突出している。

125は、底部が残存する。底部外面はタテハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。また、底部下面は未調整で、粘土の継ぎ目も認められる。

(6) E群

H16 円筒埴輪の44と、底部片の88が出土している（図版10・16 観察表3・5）。

44は、口縁部のみが残存する。直立する体部に対して外反し、外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられている。内面はナデにより仕上げられている。外面のヨコハケには、明確な静止痕は認められない。

88は、底部を中心に残存する。下端部から突帯までの高さが3cmと極端に低く、円筒埴輪以外の可能性も考えられる。突帯下外面はナデにより仕上げられているが、突帯より上側の調整は不明である。内面は、ハケの後ナデとユビオサエにより仕上げられている。特に下端部付近は、ユビオサエ痕が顕著である。底部下面はナデにより仕上げられているが、圧痕も認められる。突帯は、断面形が方形に近い台形をなし、強いヨコナデにより貼り付けられている。

H17 底部片の90が出土している（図版16 観察表5）。90は、底部から2段目にかけて残存する。1段目突帯を中心に黒斑が認められる。内外面とも磨滅が著しいが、内外面にわずかにハケ目が認められる。また、内面はユビオサエとナデにより仕上げられている。底部下端はナデにより仕上げられている。1段目突帯は、強いナデにより貼り付けられ、断面形は台形をなすが、突出度はわずかである。

H18 体部片の77と、底部片の94が出土している（図版14・16 観察表5・6）。

77は、体部2段分と突帯1条が残存する。上段には円形の透かしの一部が残存する。復元される径は7.5cmと大型の透かしである。外面は、ヨコハケにより仕上げられているが、下段には斜行する静止痕が

認められる。内面は、突帯貼り付け位置の下側にユビオサエ痕が顕著に認められ、その後ハケとナデにより仕上げられている。

94は、底部のみ残存する。内外面とも磨減が著しいが、ハケの痕が認められる。底部下面は、ナデにより仕上げられている。

その他 樹立場所は特定できないが、E群から出土した埴輪として、底部片の86と118が挙げられる(図版15・20 観察表5・7)。

86は、底部から2段目にかけて残存する。2段目を中心に黒斑が認められる。底部・2段目とも、外面はヨコハケの後斜方向のハケにより仕上げられている。静止痕は認められず、ストロークの長いヨコハケである。内面は全体的に磨減傾向にあるが、部分的にタテハケが認められる。底部下端は、ナデとユビオサエにより仕上げられている。突帯は、ナデにより貼り付けられ、断面は方形に近い台形をなす。

118は、底部のみ残存する。外面はタテハケ、内面はユビナデとユビオサエにより仕上げられている。特に内面下端部はユビオサエ痕が顕著に認められる。

さらに、場所を特定することは困難であるが、A群からE群に及ぶ範囲から出土した埴輪として、円筒埴輪の46と56、体部片の74がある(図版10・11・14 観察表3～5)。

46は、口縁部が残存する。直立する口縁部に対して、端部が緩やかに外反する。外面はヨコハケ、内面はユビオサエとハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

56は、口縁部の小片である。全体的に外反傾向にあり、端部が内側に肥厚する。内外面ともナデにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

74は、体部1段と突帯1条が残存する。体部外面には径1cmの円形刺突が1箇所認められる。貫通はしていない。外面は、タテハケとヨコハケが部分的に残存し、内面は磨減が著しく調整を観察することはできない。

(7) F群

H19 底部片の116が出土している(図版19 観察表7)。116は、底部から2段目にかけて残存する。内外面の調整は、磨減が著しく観察できない。わずかに、内面下端部がユビオサエにより仕上げられている。底部下面もナデにより仕上げられている。突帯は断面台形をなすが、突出度は低い傾向にある。

H20 底部片の101が出土している(図版17 観察表6)。101は、底部のみ残存する。内外面ともタテハケにより仕上げられている。

H21 97が出土している(図版17 観察表6)。97は、底部から体部にかけて残存する。底部から2段目にかけて残存する。2段目下部には、円形の透かしが1箇所に残存する。外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。ハケには静止痕は認められないが、全体的に目が細かい(8～9本/cm)傾向が認められる。内面はナデを基調とし、下端部はユビオサエにより仕上げられている。底部下面は、ナデにより仕上げられている。

H22 円筒埴輪の54と、底部片の84が出土している(図版11・15 観察表3・5)。

54は、口縁部の小片である。直立する口縁部に対して、端部が短く屈曲し逆L字形をなす。外面はハケの後、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。内面の調整は、磨減のため観察できない。外面には径1cmの円形刺突が認められる(写真図版189)。また、赤色塗布が部分的に認められる。

84は、底部から2段目にかけて残存する。全体的に、底部から斜方向に立ち上がっている。底部外面

はタテハケの後ヨコハケにより、内面はハケの後ナデとユビオサエにより仕上げられている。特に内面下端部は、強いユビナデにより仕上げられている。また、底部下面は未調整である。突帯は、断面台形をなすが、突出度は低い傾向にある。

H23 89が出土している(図版16 観察表5)。底部から体部にかけて残存する。底部から2段目にかけて直立し、2段目には円形の透かしが1箇所残存する。底部外面はタテハケ、内面はハケの後ナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下面はナデにより仕上げられている。2段目外面の調整は、磨滅のため観察できない。突帯は断面台形をなすが、退化傾向にあり突出度はわずかである。

H24 111が出土している(図版19 観察表7)。底部から2段目の一部にかけて残存する。底部を中心に黒斑が認められる。底部外面はヨコハケとタテハケにより、2段目はヨコハケにより仕上げられている。タテハケ・ヨコハケともに、他の埴輪と比較してハケ目が細かい(8本/cm)点が特徴的である。内面は、底部から2段目にかけてナデにより仕上げられている。また、底部付近はユビオサエ痕が顕著である。底部下端は未調整で、刻み目状の圧痕が多く認められる。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突帯高が1.2cmと突出している。

H25 92が出土している(図版16 観察表6)。底部から2段目の一部にかけて残存する。突帯を中心に黒斑が認められる。外面の調整は、磨滅が著しく観察することはできない。内面は、ナデにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置の内面や下側には、ユビオサエ痕が帯状に認められる。底部下面は、ナデにより仕上げられている(写真図版190)。突帯は、断面台形をなすが、突出度はわずかである。全体的に、器壁が8mmと薄い傾向にある。

H26 円筒埴輪の49が出土している(図版10 観察表3)。49は、口縁部から3段目にかけて残存する。円形の透かしが4段目に2方向に開けられ、3段目にも1箇所その一部が残存する。3段目と4段目の透かしは、基本的に千鳥に配されていたものと考えられる。また、口縁部には直線状の線刻が認められる。さらに、3段目から4段目にかけて黒斑が認められる。

口縁部は、体部から直立し、端部がわずかに外反する。ハケの後ヨコナデにより仕上げられているが、端面はやや丸味を帯びている。口縁部高が18.80cmと高い点が、特徴的である。

4段目と3段目は、外面がハケにより仕上げられている。また、内面についても磨滅が著しいが、わずかにハケ目が認められる。また、4段目突帯貼り付け位置の内面下側にはユビオサエ痕が顕著に認められ、その後ハケが加えられている。

突帯は、3段目と4段目の2条残存するが、いずれも断面台形をなす。ただし、3段目突帯のほうが歪んだ台形をなし、4段目は特徴を異にしている。

H27 105が出土している(図版18 観察表6)。底部から2段目にかけて残存する。2段目には、円形の透かしが1箇所わずかに残存する。このほか、底部には2箇所径1.1cmと径1.5cmの小穴が開けられている。ただし、両小穴は相対する位置関係にはない。また、円形の透かしとの位置関係についても、千鳥の関係にはなく、明確な規則性は認められない。

外面は、全体的に磨滅が著しく、調整を観察することは困難である。わずかに、2段目にヨコハケが認められる。内面は、全体的にナデにより仕上げられ、特に下端部付近は縦方向のユビナデにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置内面には、ユビオサエ痕が帯状に認められる。底部下面は、ナデにより仕上げられている。

H28 108が出土している(図版18 観察表6)。底部から2段目にかけて残存する。外面はタテハケ、

内面はナデとユビオサエにより、仕上げられている。外面には部分的にヨコハケも認められる。ただし、2段目外面の調整は、磨減が著しく観察できない。また、内面下半はナデが不十分で、粘土紐痕が顕著に認められる（写真図版194：a）。底部下端はナデにより仕上げられているが、部分的に圧痕が認められる（写真図版194）。突帯は、断面形が長方形に近く、比較的突出している。

H29 体部片の65と、底部片の96が出土している（図版12・17 観察表4・6）。

65は、体部2段分と突帯1条が残存する。内外面の調整は、磨減が著しく観察できない。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、比較的突出する。その他、下段には円形透かしの一部が残存する。

96は、底部から2段目にかけて残存する。内外面とも磨減が著しく、調整は観察できない。わずかに、底部下面がナデにより仕上げられている（写真図版191）。突帯は、断面台形をなすが、突出度は低い傾向にある。

(8) G群

H30 昭和46年度の調査により取り上げられ、すでに報告されている。

H31 円筒埴輪の53、体部片の78、底部片の119が出土している（図版11・14・20 観察表3・5・7）。

53は、口縁部の小片である。直立する口縁部に対して、端部が短く屈曲している。内外面の調整は、磨減が著しく観察できない。

78は、体部2段分と突帯1条が残存する。体部上段には円形の透かしが1箇所残存する。内外面とも磨減が著しく、調整を詳しく観察できないが、内面にはナデの痕跡が認められる。突帯は、断面形が台形傾向にあるが、端部にシャープさは認められない。

119は、底部のみ残存する。直立気味に立ち上がり、外面はヨコハケ、内面はハケの後ナデとユビオサエにより仕上げられている。外面のヨコハケには、少なくとも2段目および静止痕が認められる。底部下面にはナデが加えられているが、刻み目状の圧痕が認められる。

H32 円筒埴輪の50と、底部片の134が出土している（図版11・21 観察表3・8）。

50は、口縁部と4段目突帯が残存する。口縁部は全体的に外反傾向にあり、さらに端部はより大きく外反している。端部はヨコナデにより仕上げられ、明確な端面が形成されている。外面には、平行する2本の直線状の線刻が鋸形に描かれている。

また、内外面の調整は、磨減が著しく観察できない。突帯は、残存が一部に限られるが、断面形は台形をなすものと考えられる。

134は、底部のみ残存する。外面はヨコハケ、内面はユビナデとユビオサエにより仕上げられている。また、下端部内面には横方向のナデが加えられている。底部下面は未調整である（第246図）。

H33 底部の117が出土している（図版20 観察表7）。内面は、縦方向のハケにより仕上げられている。外面は磨減が著しく、調整は観察できない。下端部は自重で肥厚し、その箇所を中心にユビオサエにより粗く成形されている。下面もユビオサエとナデにより仕上げられている。

H34 104が出土している（図版18 観察表6）。底部から



第246図 134底部下面

2段目にかけて残存し、2段目を中心に黒斑が認められる。全体的に磨減傾向が著しく、調整の観察は困難である。このなかで、底部外面にはタテハケが認められる。また、内面にもタテハケが認められる。突帯は、突出度が低く、断面形は台形をなす。底部下端は、自重により肥厚傾向にある。

H35 39は、出土位置から判断して、口縁部から2段目まで残存する個体と、底部を中心に残存する個体から、1個体に復元したものである(図版8 観察表3)。

口縁部は、外面がヨコハケ、内面がナデにより仕上げられている。外面のヨコハケは、ストロークの長いヨコハケである。最後に、端部がユビオサエとナデにより仕上げられ、わずかに外反傾向にあるとともに、明確な端面が形成されている。

体部はいずれも、外面がヨコハケ、内面がナデにより仕上げられている。外面のヨコハケには、静止痕は認められない。2段目においては、径4.5cmと復元される円形透かしの一部が残存する。また、2段目において黒斑が認められる。

突帯は、いずれも突出傾向にあり、断面形は長方形に近い。突帯は上下からの押さえ込みにより成形されており、端面はM字状をなす。また、突帯貼り付け位置の内面は、他より肥厚傾向にある。

底部は完存するが、全体的に整った円筒形をなさず、下端部が24cm×20cmと楕円傾向にある。下端部は自重により肥厚している。ただし、下面には溝状の圧痕が認められる。外面はヨコハケにより、内面はユビオサエにより仕上げられている。外面のヨコハケには静止痕が認められる。静止痕は少なくとも2段目におよんでいる。また、ヨコハケと肥厚部分との関係から、ヨコハケは自重による肥厚前に施されている。

H36 体部片の67と、底部片の124が出土している(図版12・20 観察表4・7)。

67は、体部2段分と突帯1条が残存する。外面は、上段がヨコハケ、下段がナデにより仕上げられている。内面の調整は、磨減が著しく観察できない。突帯は、断面形がM字形に近い台形をなす。この他、下段には円形透かしの一部が残存する。

124は、底部が残存する。外面はタテハケにより仕上げられているが、他の埴輪と比較して目の細かいハケにより仕上げられている。内面は縦方向のナデにより仕上げられている。また、下端内面はユビオサエ痕が顕著である。下面は未調整で、圧痕が認められる。

H37 体部片の79と、底部片の106が出土している(図版14・18 観察表5・6)。

79は、体部4段と突帯3条が残存する。上から2段目に円形の透かしが開けられていることから、4段目にあたるものと考えられる。円形の透かしについては、3段目にも認められる。4段目と3段目の透かしは、互いにはまき鳥の関係に配されている。外面は、各段ともヨコハケにより仕上げられている。特に3段目と2段目において、斜行する静止痕が認められる。内面は、ナデを基調としている。また、2段目突帯内面上側と3段目突帯内面下側においては、ユビオサエ痕が顕著である。

106は、底部から2段目にかけて残存する。底部と2段目に黒斑が認められる。全体的に磨減傾向が著しく、調整の観察は困難である。わずかに、底部内面にヨコハケが認められる。また、底部には径2.4cm~2.6cmの小穴が開けられている。突帯は、突出度は低く、断面形は緩やかな三角形をなしている。

H38 円筒埴輪の41、体部片の42、底部から体部片の107が出土している(図版9・18 観察表3・6)。41と42は、出土位置が一致し、色調・胎土等の特徴の類似から、同一個体の可能性が高いものと考えられる。ただし、両者間の直接的な接合関係が認められなかったこと、および42の具体的部位が不明なことから、別の番号を付けて報告する。ただし、両個体の復元された径から判断すると、42の最上段が41

の口縁部に相当する可能性が高いものと考えられる。

41は、口縁部から4段目にかけて残存する。外反気味に立ち上がる口縁部に対して、端部はさらに大きく外反している。4段目には円形の透かしが1箇所残存するとともに、弧状をなす線刻が認められる。口縁部は縦方向と横方向のハケ、内面は斜方向のハケにより仕上げられている。その後、口縁端部内外面が、ヨコナデにより仕上げられている。4段目は、内面がハケとナデにより仕上げられている。外面については、磨滅のため調整は観察できない。突帯は、1条残存するが、断面形が蒲葺形に近く、退化傾向にある。

42は、体部3段と突帯2条が残存する。中段には円形の透かしが1箇所認められる。外面は、最下段が磨滅している以外、ヨコハケにより仕上げられている。特に中段外面には静止痕が認められる。また、中段にはタテハケも部分的に認められる。内面は、全体的にナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が台形傾向にあるが、端部がシャープさを欠き、退化傾向にある。

107は、底部から3段目にかけて残存する。底部から2段目にかけて黒斑が、3段目に赤色塗布が認められる。

底部は、外面がヨコハケ、内面が工具を用いた縦方向のナデにより仕上げられている。下端は未調整であるが、自重により平坦となっている。体部外面は磨滅傾向にあり、2段目外面のタテハケと3段目外面のヨコハケがわずかに認められる。内面は、底部と同様、ナデにより仕上げられている。また、2段目には円形の透かしが、相対する位置に2箇所開けられている。

突帯は、2条とも比較的突出傾向にある。強いヨコナデにより貼り付けられた結果、断面形が三角形に近い傾向にある。

H39 底部片の126が出土している（図版20 観察表7）。内面は、ユビナデを中心に仕上げられている。外面の調整については、磨滅のため観察できない。

H40 底部片の113と、口縁部片の137が出土している（図版19・22 観察表7・8）。

113は、底部から2段目にかけて残存する。底部に黒斑が認められる。内外面の調整は、磨滅が著しく観察できない。わずかに、下端部付近がナデにより仕上げられている。突帯も磨滅傾向にあり、突出度は弱く、断面形は緩やかな台形をなす。137は2次口縁が残存する。内外面ともハケにより仕上げられている。また、口縁部外面には、赤色塗布が認められる。

H41 体部片の64と、底部片の85が出土している（図版12・15 観察表4・5）。

64は、突帯1条とその上下の段が残存する。外面はハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。また、内面の一部にはハケ目が認められる。

85は、底部から2段目にかけて残存する。全体的に内外面の調整は、磨滅が著しく観察できない。底部下面はナデにより仕上げられている。また、底部には径2.3cmの小穴が1箇所開けられている。2段目との境となる突帯は断面台形をなし、ナデにより貼り付けられている。

H42 体部片の75と、底部片の110が出土している（図版14・19 観察表5・7）。

75は、体部2段分と突帯1条が残存する。上段外面はタテハケの後ヨコハケにより、内面は突帯貼り付け位置上側を中心としたユビオサエの後、ナデとハケにより仕上げられている。下段外面はわずかにハケ目が認められる。また、上段外面には線刻が認められる。

110は、底部から2段目にかけて残存する。底部には黒斑が認められる。底部外面はヨコハケにより、内面はユビオサエとナデにより仕上げられている。外面は、下端部付近に限りタテハケが認められる。

自重で肥厚した箇所との関係から、タテハケの後に自重で肥厚したものと考えられる。2段目は、外面の調整が磨滅のため観察できない。内面は、底部と同様、ナデとユビオサエにより仕上げられている。

突帯は、比較的突出し、断面形は台形をなす。突帯の剥離部分には、突帯割り付けのためのヘラよる沈線が認められる。

H43 100が出土している（図版17 観察表6）。底部から2段目にかけて残存し、底部に黒斑が認められる。底部外面はヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。ヨコハケの一部には静止痕が認められ、その特徴からBb種ヨコハケと判断される。突帯は、突出度はわずかであるが、断面形は整った台形をなす。底部付近内面は、自重で肥厚した部分がユビオサエにより整形されているが、底部下端は未調整である。

H44 底部片の83が出土している（図版15 観察表5）。底部のみ残存する。残存する限りにおいては、黒斑は認められない。磨滅が著しく、内外面とも調整を観察することは困難である。ただし内面下端部付近は、ユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整で、瓦痕が多く認められる。

H45 円筒埴輪の43、体部片の73、底部片の121が出土している（図版10・13・20 観察表3・5・7）。43は、口縁部が残存する。斜外方に直線的に立ち上がり、端部が短く外反する。外面をハケの後、端部がヨコナデにより仕上げられている。特に外面のハケは、10本/cmと他の埴輪のハケ目と比較して大変細かい特徴が認められる。

73は、体部のみ残存する。上段部には、円形透かしが相対する位置に2箇所認められる。下段は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がヨコハケにより仕上げられている。上段は、外面がヨコハケ、内面がタテハケにより仕上げられている。また、突帯貼り付け部の上側には、貼り付けの際のユビオサエ痕が帯状に認められる。突帯は、断面台形をなし、強いナデにより貼り付けられている。

121は、底部のみ残存し、黒斑が認められる。径2.7cmの小穴が1箇所開けられている。内外面ともナデを基調とし、内面にわずかにハケ目が認められる。

H46 体部片の63と、底部片の132が出土している（図版12・21 観察表4・8）。

63は、体部2段と突帯1条が残存する。上段には円形の透かしが開けられている。外面はハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。突帯は、断面形が方形に近い台形をなしている。

132は、底部のみの残存であるが、大きく外反する傾向が認められる。外面はタテハケ、内面はユビオサエとユビナデにより仕上げられている。底部下面は弱いナデにより仕上げられているが、ヘラ状の瓦痕が認められる。

H47 体部片の70と、底部片の129が出土している（図版13・21 観察表4・8）。

70は、体部2段分と突帯1条が残存する。下段外面はタテハケの後ヨコハケにより、内面はハケとナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突帯高1.30cmと突出する。この他、わずかに残存する上段には、円形透かしの一部が認められる。

129は、底部が残存する。外面はタテハケにより仕上げられている。内面は、磨滅が著しいが、わずかにナデの痕が認められる。また、底部下面にはナデが加えられている。

H48 底部片の127が出土している（図版20 観察表8）。外面はタテハケのちヨコハケ、内面は縦方向のユビナデとユビオサエにより仕上げられている。一部に斜方向のハケ目も残存する。底部下面は弱いナデにより仕上げられている。

H49 円筒埴輪の51と60、体部片の61、底部片の120の4体からなる（図版11・20 観察表3・4・7）。

このなかで、60と61は、出土位置・色調・胎土等の特徴から、同一個体である可能性が高いものと考えられる。

51と60は、口縁部が残存する。51は全体的に外反傾向にあり、さらに端部は外方へ短く屈曲する。内外面とも磨減が著しいが、端部はヨコナデにより仕上げられている。60は、わずかに聞き気味に立ち上がる口縁部に対して、端部が短く外反する。内面がナデ、外面がハケの後端部がヨコナデにより仕上げられている。他の円筒埴輪と比較して、全体的に器壁が薄い点が特徴的である。

61は、体部1段と突帯2条が残存する。下側の突帯は剥離痕のみで、突帯そのものは残存しない。体部には、円形の透かしの一部がわずかに残存する。内面はナデにより仕上げられているが、外面の調整については磨減が著しく観察できない。残存する突帯は、断面形が蒲鉾形に近い特徴が認められる。

120は、底部のみ残存する。内面はナデとユビオサエにより仕上げられているが、外面の調整は磨減のため観察できない。底部下面はナデにより仕上げられている（写真図版196）。

H50 体部片の72と、底部片の115が出土している（図版13・19 観察表4・7）。

72は、体部1段分と突帯1条が残存する。内外面とも磨減が著しく、調整は観察できない。突帯は、断面形が台形をなすが、全体的に丸みを帯びている。

115は、底部から2段目にかけて残存する。外面の調整は、磨減が著しく観察できない。内面はユビオサエの後ナデにより仕上げられている。端部下面もナデにより仕上げられている。

その他 円筒埴輪の57と、体部片の58が出土している（図版11 観察表4）。両個体は、出土位置・胎土・色調等の特徴から同一個体の可能性が考えられるものである。

57は、口縁部から4段目にかけて残存する。体部から口縁部にかけて直立し、口縁端部が短く外反する。端部は、内外面の調整後ヨコナデにより仕上げられ、明確な端部が形成されている。また、4段目には円形の透かしが1箇所残存する。外面は、体部・口縁部とも縦方向を主体としたハケにより仕上げられているが、口縁部にはわずかにヨコハケも認められる。外面のハケ目は、10本/cmと大変細かい点の特徴的である。内面は、口縁部から体部にかけてナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が方形に近い台形をなし、突帯高が1.10cmと突出傾向にある。

58は、体部2段分と突帯2条が残存する。体部上段には、円形透かしが1箇所認められる。外面は、上段がヨコハケの後タテハケ、下段がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。外面のハケ目は、10本/cmと大変細かい点の特徴的である。内面は、ナデを基調とし、突帯貼り付け位置内面にはユビオサエ痕が顕著に認められる。突帯は、2条とも断面形が長方形に近い台形をなし、突帯高は下段が1.25cm・上段が1.20cmと突出傾向にある。

(9) 日群

H52 底部片の123が出土している（図版20 観察表7）。123は底部のみ残存し、黒斑が認められる。下端部から上部にかけて、内湾気味に立ちあがる傾向が認められる。全体的に磨減が著しいが、外面下端にはヨコハケが認められる。

さらに、内面下端付近には縦方向のユビナデ痕



第247図 埴輪列出土円筒系埴輪

が顕著に認められる。全体的に下端部を中心に歪んでいる。下端面には溝状の圧痕が認められる（写真図版197）。

H53 底部片の99が出土している（図版17 観察表6）。外面はハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整で、溝状の圧痕が認められる。

その他 底部片の131が出土している（図版21 観察表8）。全体的に磨減傾向にあるが、内面はナデにより仕上げられている。また、下面もナデにより仕上げられている。

(10) h6（第245図）

円筒埴輪の48、体部片の66・71・76が出土している（図版10・12～14 観察表3～5）。

48は、口縁部が残存する。直立する口縁部に対して、端部は短く屈曲し、逆L字形をなす。内外面の調整は、磨減が著しく観察できない。

66・71・76は、体部2段と突帯1条が残存する。66は、内外面とも磨減傾向にあるが、上段外面のみタテハケが認められる。突帯は、断面形が台形をなすが、全体的に丸味を帯びている。この他、下段には円形の透かしが1箇所残存する。

71の外面は、上段がタテハケ、下段がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は、上段がハケとナデ、下段がナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が台形をなすが、全体的に丸味を帯びている。突帯剥離面にはタテハケが認められる。この他、上段には円形の透かしが1箇所残存する。

76は、内外面とも磨減傾向にあるが、上段外面のみタテハケが認められる。また内面突帯貼り付け位置の下側には、ユビオサエ痕が顕著に認められる。突帯は、断面形が台形をなすが、全体的に丸味を帯びている。この他、下段には円形の透かしが1箇所残存する。

5. 前方面南側1段目斜面

(1) 出土状況

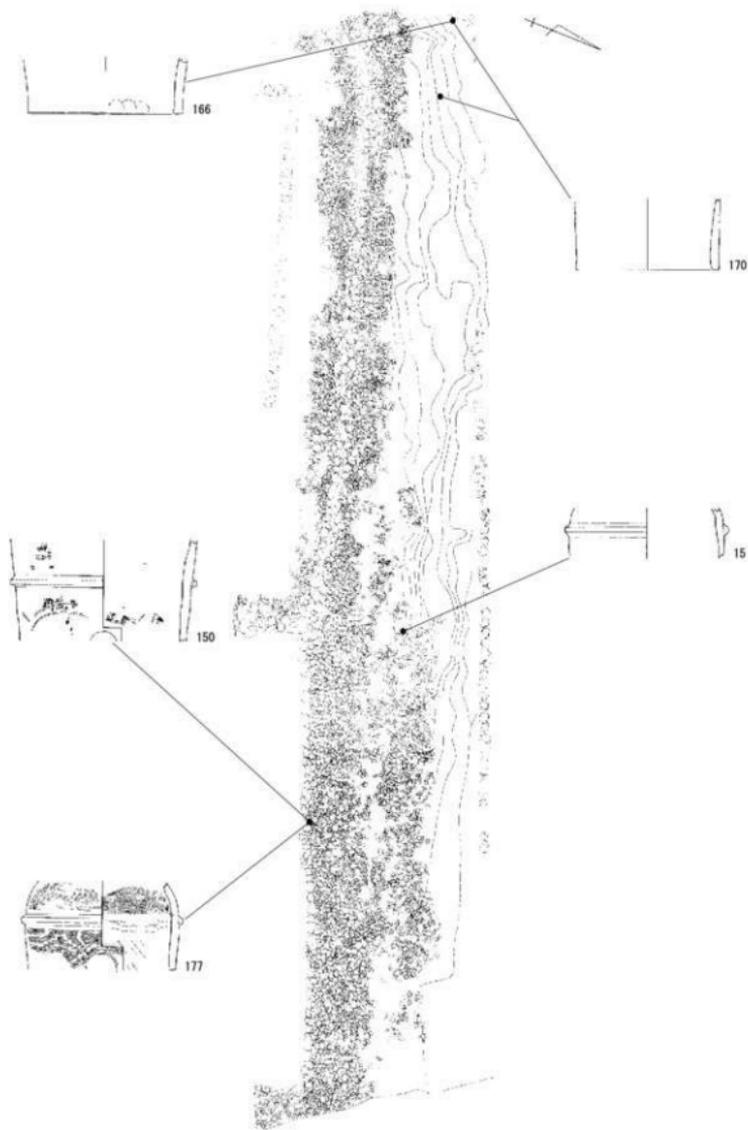
西側から東側にかけて、ほぼ全面的に出土している。しかし、いずれも小片での出土で、完形に近い状態あるいは集中して出土したものは認められない（第248図）。いずれも、転石層中から出土していることから、1段目埴輪列の倒壊に起因するものと考えられる。器種としては、円筒埴輪・体部片・朝顔形埴輪・壺形埴輪が出土している。

(2) 円筒埴輪（図版22・23 観察表8・9）

140・141・143～148は、口縁部のみ残存する。

140は直線的に立ち上がり、端部が逆L字形に屈曲する。内外面のハケの後端部がヨコナデにより仕上げられ、明確な端部が形成されている。141は直立する口縁部に対して、端部が短く外反する。内外面ともナデにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。端部は丸く仕上げられている。また、外面には2本の直線からなる線刻が認められる。出土位置・胎土・色調等の特徴から、142と同一個体の可能性が考えられる。

143は、直立する口縁部に対して端部がわずかに外反する。外面の調整は磨減により観察できないが、2本の直線的な線刻が認められる（写真図版198）。内面はナデにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。144は、直立する口縁部に対して端部が短く外反する。外面は



第248図 前方面南側1段目斜面 主要円筒系埴輪出土位置

タテハケ、内面はナデにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。145は、口縁端部が大きく外反する。内外面ともナデにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。端部には端面が形成され、その上下両端部はシャープに仕上げられている。

146は、下端部に突帯の剝離痕が認められる。口縁部外面には、2本の平行する線からなる鍵括弧形の線刻が認められる（写真図版198）。口縁部は直線的に立ち上がり、端部が短く屈曲する。内外面のハケの後端部がヨコナデにより仕上げられているが、端面は形成されていない。また、外面のハケは、縦方向の後横方向に、内面は縦方向から斜方向に、それぞれ施されている。

147と148は、口縁部の小片である。147は、直立する口縁部に対して端部が逆L字形をなす。内面はナデ、外面はストロークの長いヨコハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。このため、明確な端面が形成されている。この他、外面全面に赤色塗布が認められる。

148は、斜外方に開き気味の口縁部に対して、端部は一旦上方に立ち上がり、その後外方につまみ出されている。外面はナデ、内面は斜方向のハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

(3) 体部片（図版22～24 観察表8～10）

142は、体部1段と突帯1条が残存する。外面はヨコハケ、内面はユビオサエの後ナデにより仕上げられている。突帯は断面形が台形をなすが、突出度は大きくはない。出土位置・胎土・色調等の特徴から、141と同一個体の可能性が考えられる。

149～153と155～157は、体部2段分と突帯1条が残存する。

149の下段下端部には円形透かしの一部が認められる。外面はハケ、内面はハケの後縦方向を主体としたナデにより仕上げられている。上段のヨコハケには静止痕が認められる。150は、突帯の大半が剝離し、その基部のみ残存する。下段には、円形の透かしの一部が1箇所認められる。さらに、弧状をなし平行する2本の線刻と1本の線刻の一部が認められる（写真図版198）。外面は、上段がハケ（タテハケ→ヨコハケ）により、下段がタテハケにより仕上げられている。内面は、全体的に磨減が著しいが、下段においてハケ目が残存する。突帯貼り付け位置下側の内面には、ユビオサエ痕が顕著に認められる。

151は、上段外面に赤色塗布と黒斑が認められる。下段には円形の透かしが1箇所認められる。内外面ともハケにより仕上げられている。特に、外面はタテハケの後ヨコハケが加えられ、上段の一部に静止痕がわずかに認められる。また、内面はユビオサエの後タテハケにより仕上げられ、最後にナデが加えられている。突帯は、断面台形をなすが、突帯高は7.5mmと突出はしていない。

152の下段には、円形の透かしの一部が残存する。また、上段には赤色塗布と黒斑が認められる。外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。特に下段のヨコハケは、ハケ原体が数度器面から離れている。内面は、ハケの後部分的にナデが加えられている。また、突帯貼り付け位置の上側及び下側内面にはユビオサエ痕が顕著に認められ、その後ハケにより仕上げられている。

153の外面はハケ（タテハケ→ヨコハケ）により、内面はハケの後ナデにより仕上げられている。特に内面には、縦方向の工具の当たりが認められる。突帯は、下端の幅が広い傾向にあるが、突帯高は9mmと突出度はわずかである。

154は、体部1段分と突帯1条が残存する。体部外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はタテハケの後縦方向のナデにより、仕上げられている。外面のヨコハケには静止痕が認められる。また、突帯貼り付け

位置内面には、ユビオサエが顕著に認められる。

155～157と159も、体部2段と突帯1条が残存する。155外面はヨコハケ、内面はユビオサエとナデにより仕上げられている。特に上段のヨコハケには静止痕が認められる(写真図版198)。また、突帯貼り付け位置の内面には、強いヨコナデが加えられている。156は、突帯の大半が剥離し、その基部のみ残存する。下段には、直線状の線刻3本が認められる。内外面とも磨減が著しく、調整は観察できない。157は、内面がナデにより仕上げられている。外面は磨減傾向にあるが、線刻がわずかに残存する。159は、上段外面がヨコハケにより、下段外面がタテハケの後ヨコハケにより、内面がナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が方形に近い台形をなし、突帯高1.05cmと突出する。

158は、体部の小片である。突帯の断面形が方形に近い台形をなし、比較的突出している。内面はナデにより仕上げられている。外面には、わずかにヨコハケが認められる。

160は、体部の小片と突帯が残存する。体部には、直線状の線刻3本が認められる(第249図・写真図版198)。内外面とも磨減が著しいが、外面にわずかにハケ目が認められる。突帯は、基部のみ残存する。

161は、体部の小片と突帯が残存する。体部には、直線と弧状からなる線刻3本が認められる(第250図)。外面はタテハケ、内面はユビオサエとナデにより仕上げられている。突帯は断面形が長方形に近い台形をなし、突帯高は1.20cmと突出している。162～165は、体部の小片である。162の外面には波状をなす1条の線刻が認められる(第252図)。他より太い線刻である。163は、外面がナデ、内面がハケにより仕上げられ、外面には線刻が施されている(第251図)。6本の直線状の線刻からなる(写真図版199)が、その内容は不明である。164は、2本の直線状をなす線刻が認められる(写真図版199)。165は径7mmの円孔が開けられている。

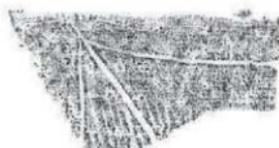
(4) 底部片(図版24 観察表10)

166～170が該当し、いずれも底部が残存する。

166は内外面とも磨減が著しいが、外面にはタテハケが、内面下端部付近にはユビオサエ痕が、底部下面には、弱いナデが加えられている。167は、外面がヨコハケ、内面がユビオサエにより仕上げられている。底部下面は弱いナデが加えられているが、圧痕も認められる。168は、内外面とも磨減が著しく、調整は観察できない。底部下面には弱



第249図 160拓影



第250図 161拓影



第251図 163拓影



第252図 162拓影

いナデが加えられているが、圧痕も認められる。169は、斜外方に直線的にのび、下端部の幅が極端に広がっている。内外面の調整は、磨滅が著しいため観察できない。ただし、内面下端部付近はユビオサエにより仕上げられている。なお、底部下面は未調整で圧痕が認められる。170は内外面とも磨滅が著しく、調整は観察できない。底部下面は未調整である。また、残存する範囲においては、黒斑は認められない。

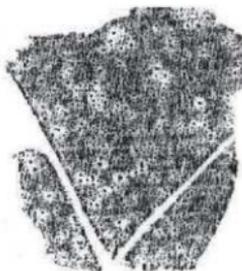
(5) 口縁部片・頸部片 (図版24 観察表10)

171と172は、1次口縁上端から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の延長上に2次口縁が継ぎ足され、その境外面には断面台形をなす突帯が貼り付けられている。171は、1次口縁・2次口縁とも外面がタテハケ、内面がヨコハケにより仕上げられている。

172は、1次口縁外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がナデにより仕上げられている。2次口縁内面はヨコハケ、外面はタテハケの後ヨコハケ、その後ナデにより仕上げられている。口縁部外面には赤色塗布が認められる。

173と174は、2次口縁の小片である。

173は、内外面の調整が磨滅のため観察できないが、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。また、端部断面は方形をなし、明確な端面が認められる。174は、内外面がハケにより仕上げられている。特に内面はヨコハケを基調としている。さらに、内面には線刻が認められる(第253図・写真図版199)とともに、その線刻内には赤色塗布が残存する。



第253図 174拓影

(6) 肩部片 (図版24 観察表10)

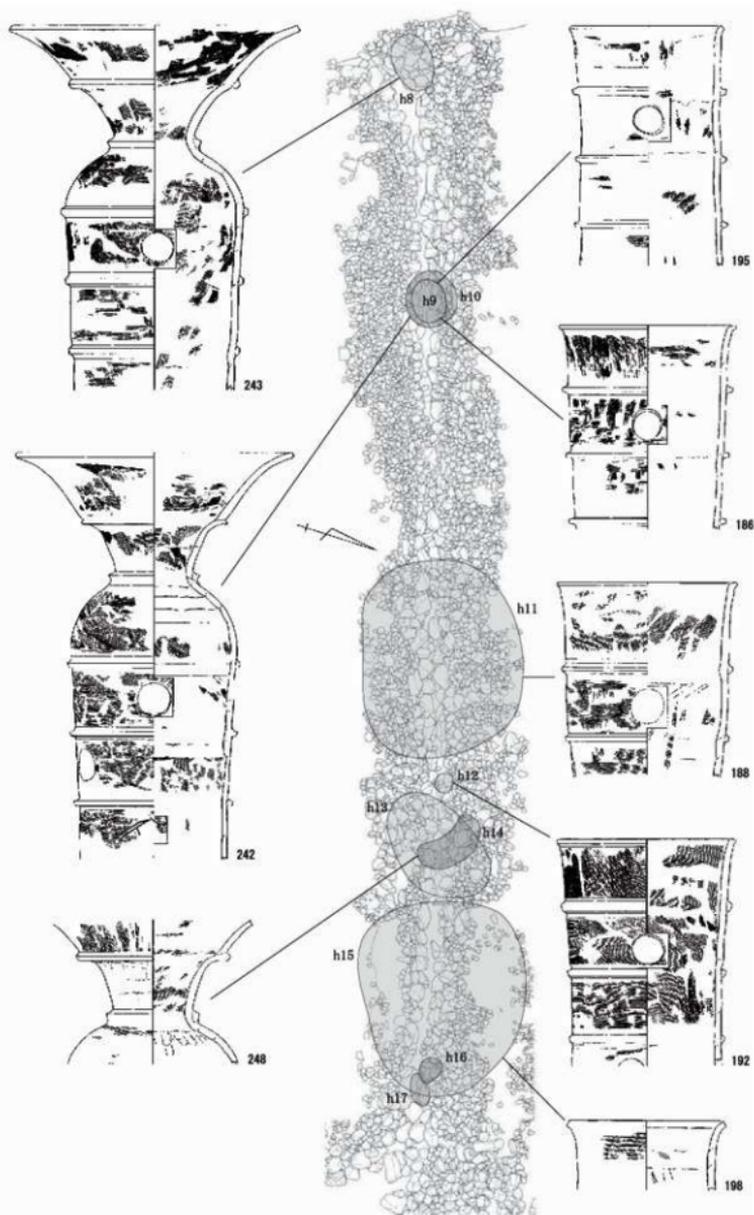
176と177の2点が該当する。

176は、4段目から肩部にかけて残存する。4段目の上段が内湾傾向にあることから、肩部と判断したものである。肩部・4段目ともに外面は磨滅のため調整は不明である。内面はナデを基調として仕上げられている。突帯は、断面形が長方形に近く、突出傾向にある。ただし、他の突帯と比較して全体的に薄く仕上げられている。

177は、4段目から肩部にかけて残存する。体部には円形の透かしが1箇所残存する。肩部は、外面がヨコハケ、内面が斜方向のハケにより仕上げられている。体部は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がナデと斜方向のハケにより、仕上げられている。また、4段目突帯貼り付け位置内面には、ユビオサエ痕が顕著に認められる。そして、この箇所を境に製作時の時間差が認められる(写真図版200)。この他、体部の一部に赤色塗布が認められる。

(8) 壺形埴輪 (図版24 観察表10)

175は、肩部とその下端の突帯の一部が残存する。残存する突帯の規模から鈎状をなすと考えられ、壺形埴輪と判断したものである。内外面ともナデにより仕上げられ、内面にはユビオサエ痕も認められる。外面には14条の直線からなる線刻が認められる(写真図版199)。色調・胎土・線刻の特徴等から、417(238頁)と同一個体の可能性が考えられる。



第254図 区画溝内主要埴輪出土位置

6. 区画溝

(1) 出土状況

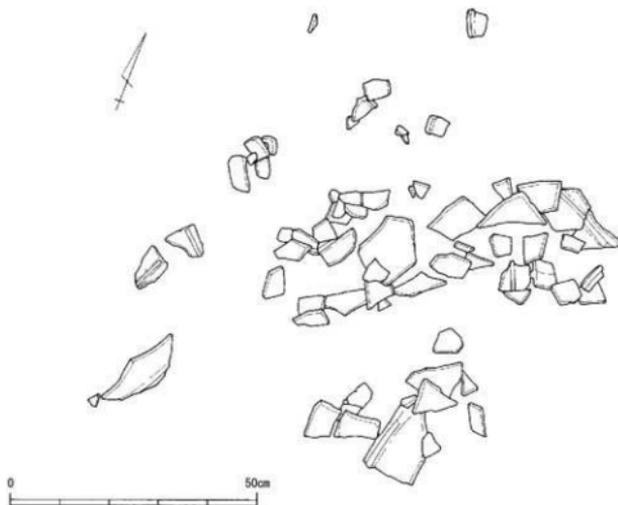
区画溝内からは、多量の埴輪が出土している。ただし、区画溝底部から出土した埴輪は皆無で、いずれも1層中および1層上面(第172図)から出土している。このなかで、h11(第259図)とh15が1層上面出土埴輪群の代表例で、比較的広い範囲に小片が散乱した状態で出土している。出土埴輪は、円筒系埴輪に限らず、家形埴輪等も出土している。平面的には、中央部より東側でまとまって出土している(第254図)。その代表例が、h11~h16である。この他、くびれ部付近においても1箇所集中箇所が認められる(h8)。



第255図 h12埴輪出土状況の実測

また、区画溝内から出土した埴輪については、埴輪側から落ち込んだ埴輪と、造り出し側から落ち込んだ埴輪が混在して出土しているものと考えられる。その樹立位置の復元については、章を改めて検討することにする(第7章第7節)。

h8 くびれ部付近にあたる(第254図)。朝顔形埴輪1個体(243)が倒れ、その場で押し潰れた状態で出土している。このため、比較的大きな破片が1m四方の範囲から出土している(第256図 写真図版)



第256図 h8 埴輪出土状況

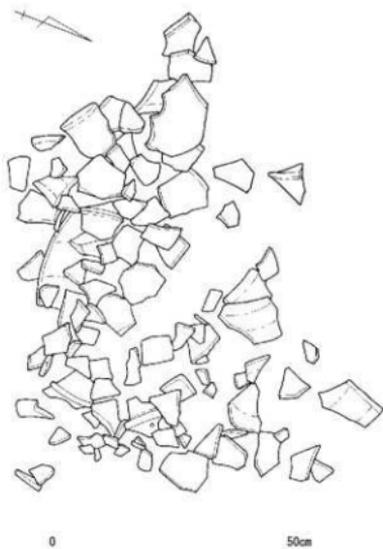
86：③④・87：①)。

h9 円筒埴輪(186・195)と体部片(225)が落ち込み、その場で潰れた状態で出土している。このため、各破片が比較的大きな状態で出土している(第257図 写真図版87：②)。

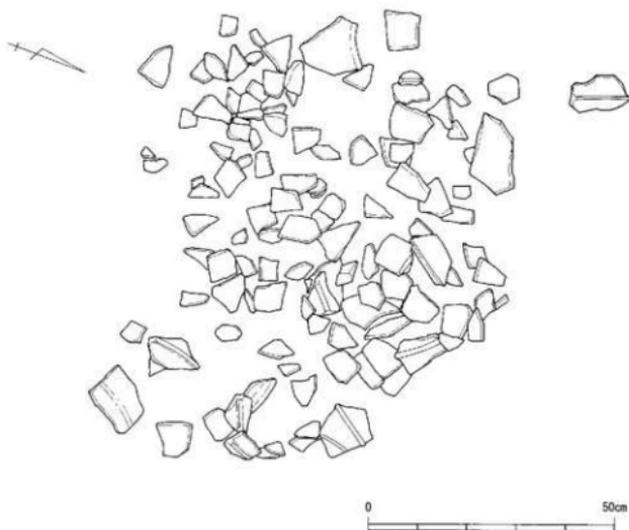
h10 h9の下層に位置する(第254図)。朝顔形埴輪1個体(242)が区画溝内に倒れ、その場で押し潰された状態で出土している。比較的小片となっているが、1mの範囲内に集中して出土している(第258図 写真図版88：④)。

h11 区画溝のほぼ中央部にあたる(第254図)。家形埴輪・水鳥形埴輪等とともに、小片となって散乱した状態で出土している(第259図)。このため、h11から出土した埴輪で、完形もしくはそれに近い状態まで復元できた個体は認められない。層位的に区画溝がほぼ埋没した段階の層から出土している。その出土位置において、レベル差は認められない。

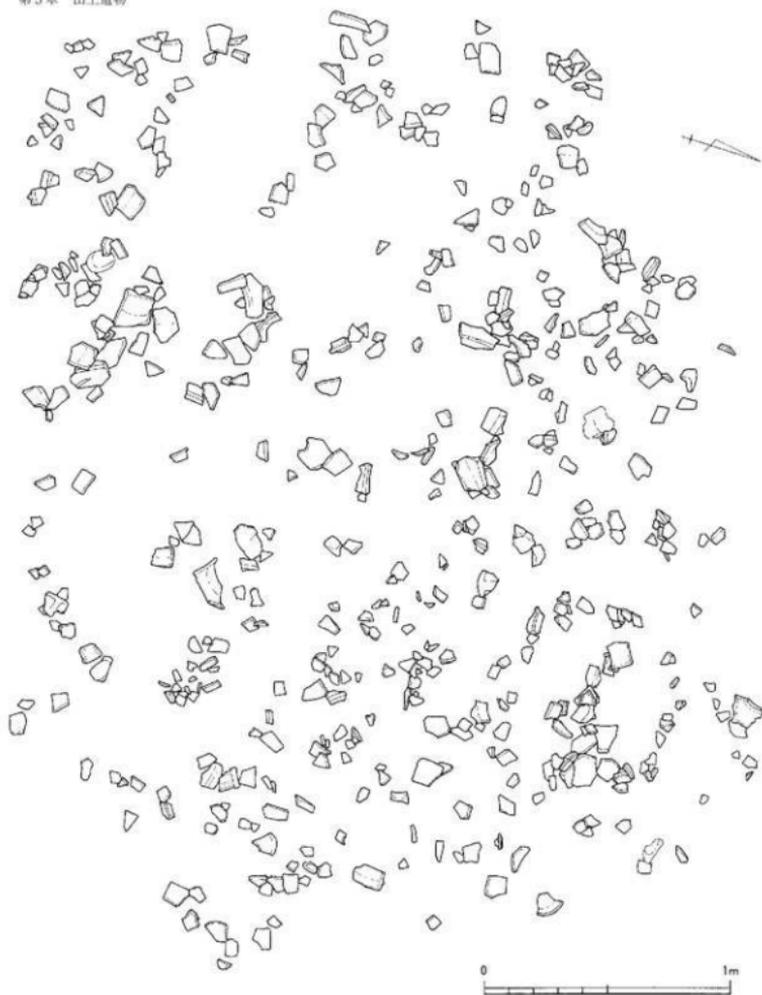
このなかで、円筒系埴輪の出土位置は、第260図のとおりである。破片の数は多いが、接合関



第257図 h9 埴輪出土状況



第258図 h10 埴輪出土状況

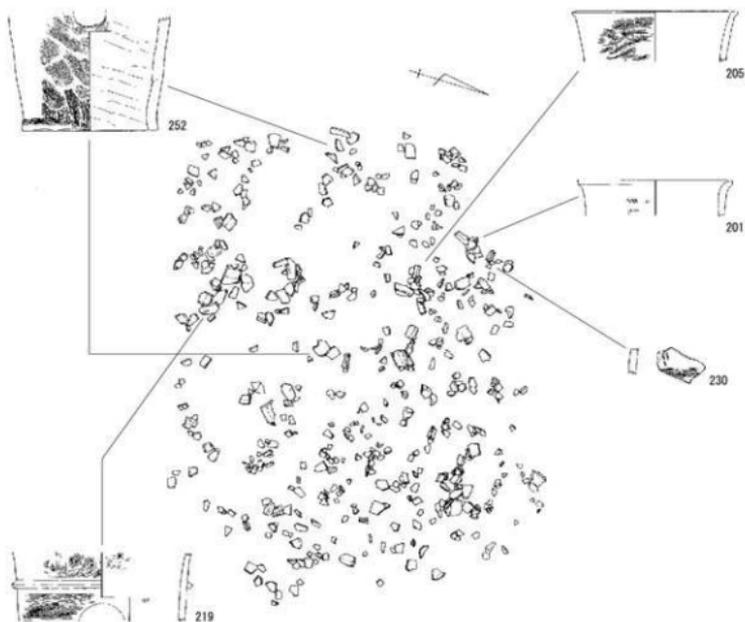


第259図 h11 埴輪出土状況

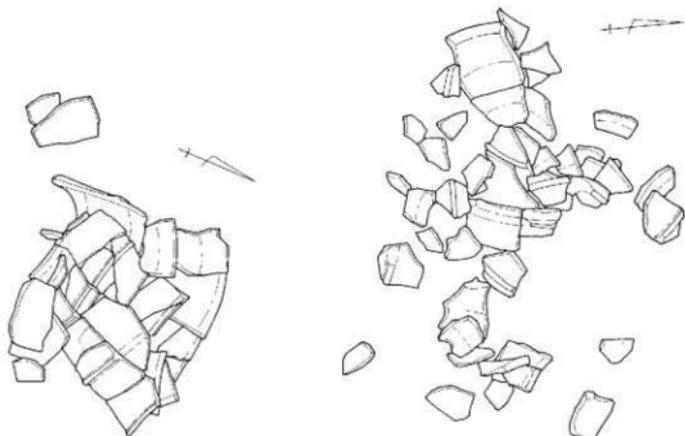
系の認められる個体はわずかである。この他、h11と他地点との接合関係も、わずかではあるが認められる。

h12 h11とh13の間に位置する(第254図)。円筒埴輪1体分(192)が落ち込み、その場で押し潰された状態で出土している(第261図 写真図版89:①~④)。口縁部が墳丘側を向いていることから、造り出し側から倒れ込んだ可能性が考えられる。

h13 h14の上層にあたる(第254図)。h11同様、層位的に区画溝がほぼ埋没した段階の層から出土している。家形埴輪等とともに、小片が散乱した状態で出土している(写真図版90:⑦)。このため、完形に



第260図 h11 円筒系埴輪出土位置

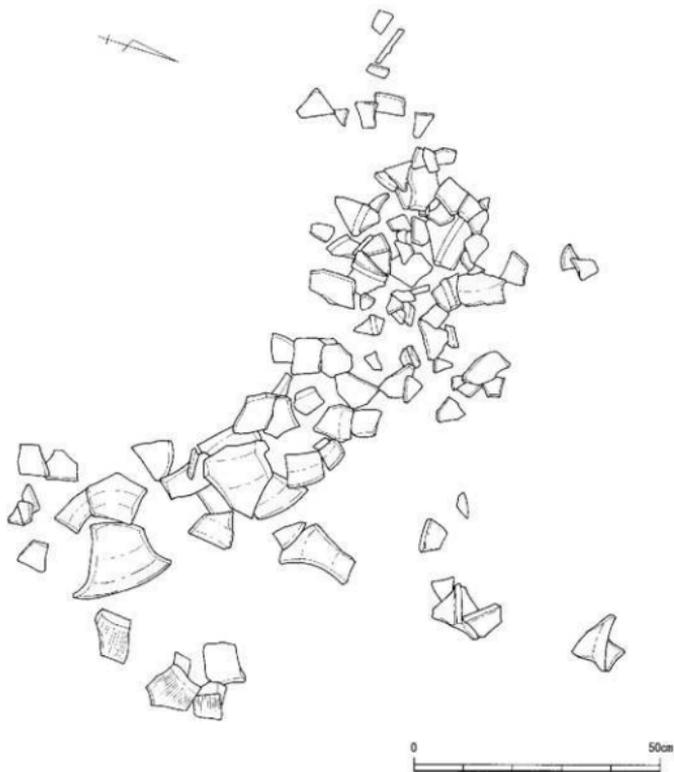


0 50cm

第261図 h12 埴輪出土状況

0 50cm

第262図 h16 埴輪出土状況



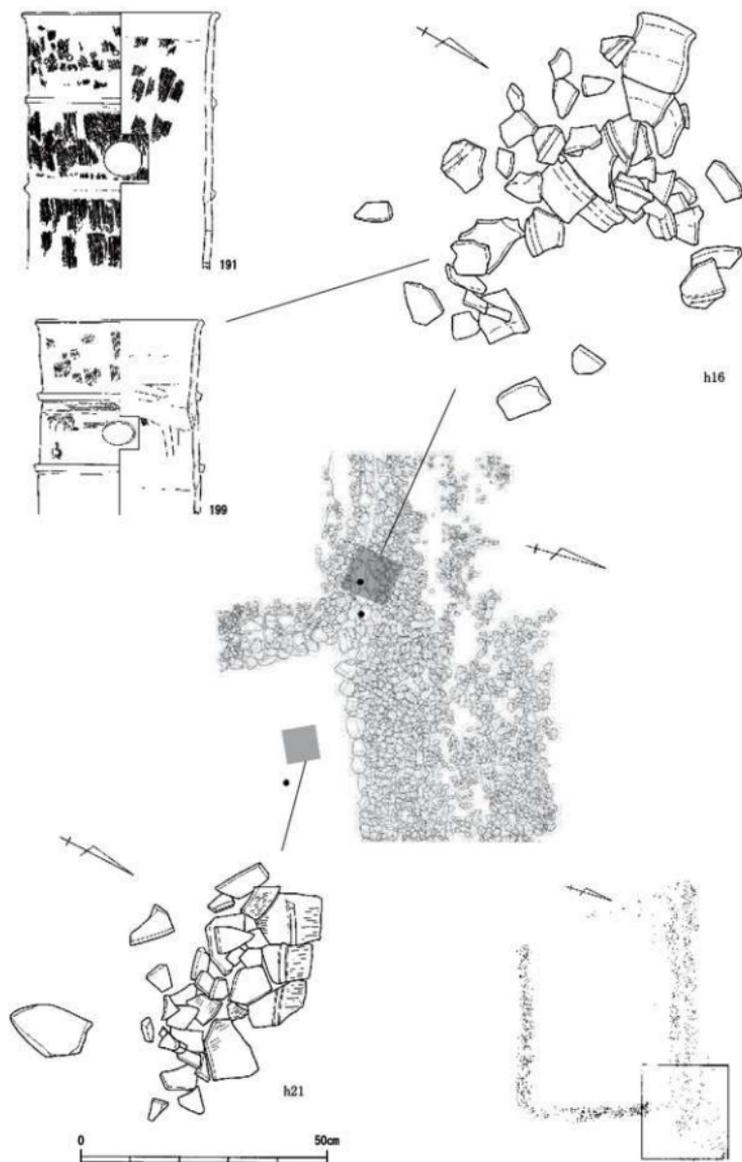
第263図 h14 埴輪出土状況

復元された個体は認められない。唯一、196がh11との接合関係をもって出土している。

h14 平面的にh13の下層にあたる（第254図）。円筒埴輪（180・211）と頸部片（248）が倒れ込み、その場で押し潰された状態で出土している（第263図）。248は、造り出し側に近い位置で出土している。また、215がh14とh10との接合関係をもって出土している。

h15 区画溝の東端部、埋土上面から出土している（第254図）。多くの小片が3m×3.50mの範囲に散乱した状態で出土している（写真図版91）。このため、完形近くまで復元できた個体は認められない。198・234・237～239が出土している。

h16 平面的にh15の下層にあたる（第254図）。円筒埴輪（191・199・233）が、倒れた後押し潰された状態で出土している（第262図 写真図版91：②）。これらの出土状況は、ほぼ区画溝の中央部で、その主軸とはほぼ平行している。口縁部は後円部側を向いている。この出土状況から、199と233は直接的な接合関係を確認することはできなかったが、同一個体の可能性が考えられる。さらに、199の一部は造り



第264図 h16・h21 埴輪出土状況

出し上面から出土している。191は、口縁部を中心に倒れ込み、その場で潰れた状態で出土している(第264図)。また、191の一部は、南周濠底からも出土している(h21:第264図 写真図版145:③)。h21では、体部が押しつぶされた状態で出土している。h21については、本来区画溝内にあったものが、押し流されたものと考えられる。

h17 h16の東側、区画溝の東端部にあたる(第254図)。埋土の上層から出土している。

(2) 円筒埴輪(図版25～図版31 観察表10～12)

178と179は、口縁部から4段目にかけて残存する。

178は、体部から口縁部にかけてほぼ直立し、端部が逆L字形に屈曲する。内外面の調整は、磨減が著しく詳細な観察はできないが、口縁部外面がナデにより仕上げられている。内面についても、ナデが認められる。口縁端部は、内外面ともヨコナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が台形をなすが、全体的に丸みを帯びている。この他、4段目には円形の透かしの一部が残存する。また、口縁部と4段目外面に、赤色塗布が部分的に認められる。

179は、体部から口縁部にかけてほぼ直立し、端部が短く外反する。端部は、明確な端面が形成されている。外面は、口縁部がタテハケ、4段目がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。4段目のヨコハケは、ストロークの長いヨコハケである。内面は、口縁部から4段目にかけて、ナデとユビオサエの後ハケが加えられている。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が台形をなすが、端部はシャープさを欠く。また、4段目外面には、弧状をなす1本の線刻が認められる(写真図版200)。この他、ハケ目内に赤色塗布が残存している。

180は、口縁部から3段目まで残存する。口径が34cmと他の円筒埴輪より大型である点が特徴的である。体部から口縁部にかけてほぼ直線的で、口縁部は直立傾向にある。端部はヨコナデにより仕上げられ、ほぼ水平な端面が形成されている。円形の透かしが、4段目に相対する2箇所に開けられている。

外面は、口縁部から3段目にかけてタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。口縁部と4段目はストロークの長いヨコハケであるのに対して、3段目はB種ヨコハケにより仕上げられている。内面は、口縁部から3段目にかけて、ナデとユビオサエにより仕上げられている。突帯は、断面長方形に近い台形をなし、突出している。

181～185は、口縁部を中心に残存する。

181の外面には、弱い線刻が認められ、その溝には赤色塗布が残存する。直立する口縁部に対して、端部が逆L字形に短く外反する。外面のナデ、内面のハケの後、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。182は、外傾傾向にある口縁部に対して、端部が水平方向に屈曲している。全体的に内外面とも磨減傾向にあり、調整は観察できない。183は、全体的に直立傾向にあり、端部がヨコナデによりわずかに外反する。口縁部外面はヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。

184は、直立する口縁部に対して端部が緩やかに外反する。外面のタテハケ、内面のナデ・ユビオサエの後、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。185も直立する口縁部に対して、端部が外反する。外面はタテハケ、内面はナデにより仕上げられ、最後に端部内外面が強いヨコナデにより仕上げられている。このため、端部は口縁部より薄く仕上げられている。

186は、口縁部から2段目まで残存する。体部から口縁部にかけてほぼ直線的のび、口縁部が短く外反する。口縁端部は、内外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられ、明確な端面が形成されている。4

段目には円形透かしが2箇所に開けられている。他に、口縁部外面にはX字形の線刻が認められる。

外面はタテハケを基調とし、4段目と3段目は2次調整としてヨコハケが加えられている。ハケ目が、他の植輪と比較して細かい傾向（7～8本/cm）が認められる。内面は、ハケの後、ナデとユビオサエにより仕上げられている。突帯は、3段とも断面長方形に近い台形をなし、突出傾向にある。特に4段目突帯の上端部はシャープに仕上げられている。

187は、口縁部が残存する。直立する口縁部に対して、端部が短く外反する。外面はナデ、内面はユビオサエの後ナデにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。このため、端部には端面が形成され、その下端部はシャープに仕上げられている。

188は、口縁部から3段目にかけて残存する。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部も直立する。ただし、内外面のハケの後、ヨコナデにより上端部が外方へ突出し、ほぼ水平な端面が形成されている。4段目と3段目には円形の透かしが各1箇所、わずかに残存する。このほか、口縁部を中心に、赤色塗布が認められる。

外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。4段目・3段目とも、静止痕は認められず、ストロークの長いヨコハケにより仕上げられている。内面は、縦方向を中心としたハケの後ナデにより仕上げられている。ただし、突帯貼り付け部内面は、その貼り付けの際にヨコナデが加えられている。突帯は、断面台形をなし、強いヨコナデにより貼り付けられている。

189は、口縁部を中心に残存する。口縁部はわずかに外反傾向にあり、端部がやや大きく外反する。内外面ともハケにより仕上げられ、最後に端部がヨコナデにより仕上げられている。口縁部下端は、突帯の剥離痕のみが認められる。なお、この剥離面には縦方向のハケ目が明確に認められる（写真図版201）。

190は、口縁部から4段目にかけて残存する。口縁部から体部にかけて黒斑が認められるとともに、口縁部と体部の一部に赤色塗布が認められる。

口縁部は、内外面ともハケにより仕上げられている。特に外面は、ストロークの長いヨコハケが主体で、さらに上半部には斜方向のハケが加えられている。その後、端部を中心にヨコナデにより仕上げられ、端部が水平方向に引き伸ばされている。最後に、径1.0～1.2cmの小穴が1穴、外側から内側に向けて開けられている。さらに、4段目においては、径5.5cmの透かしの一部が1箇所認められる。対となる透かしは残存しない。

4段目は突帯が残存し、断面形は台形をなす。ただし、下端部がやや下がり気味である。また、この突帯の貼り付け面の幅が一定していない点も、この植輪の特徴である。内外面ともヨコハケを基調として仕上げられている。

191は、体部3段目から口縁部まで残存する。口縁部から体部にかけて黒斑が認められる。また、外面には赤色塗布も認められる。3段目は下部を欠き、4段目は完存する。両段ともに2方に円形の透かしが開けられている。両段の透かしは千鳥に配されている。外面は、両段とも縦方向のハケを基調とし、部分的にナデが加えられている。内面はナデにより仕上げられている。各段の突帯は、断面台形をなし、ハケの後ヨコナデにより貼り付けられている。また、剥離部分には、割り付け用と考えられる弱い沈線が認められる。

口縁部は完存し、端部は外方に折り返され、逆L字形をなす。ヨコナデにより仕上げられ、明確な端面が形成されている。外面は、タテハケにより仕上げられ、その後径1cmの円形刺突文が施されている。円形刺突文は2.5cmから3.5cmの間隔で9箇所施文され、全周の約1/2弱の範囲に偏在している。

192は、口縁部から2段目まで残存する。体部から口縁部にかけてほぼ直線的で、口縁部は直立する。口縁部は、内外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられ、ほぼ水平な端面が形成されている。4段目には、円形の透かしが2箇所を開けられている。また、2段目下端にも円形透かしの一部が1箇所残存する。さらに、口縁部には径1cm大の小穴が1箇所開けられている。このほか、口縁部と3段目を中心に赤色塗布が認められる。

外面は、口縁部がタテハケ、3段目と4段目がタテハケの後ヨコハケにより、仕上げられている。また、2段目もヨコハケにより仕上げられている。ただし、4段目のヨコハケは短いタッチで、やや斜行気味である。さらに、3段目のヨコハケには静止痕が認められず、ストロークの長いヨコハケにより仕上げられている。内面は、口縁部がヨコハケ、3段目・4段目がタテハケを基調として仕上げられている。2段目は、ナデにより仕上げられている。

193は、口縁部がわずかに残存する。外反傾向にあり、内端部を中心としたヨコナデにより仕上げられている。端部以外は、内面がナデ、外面がハケにより仕上げられている。

194は、口縁部から4段目にかけて残存する。体部から口縁部にかけて直立し、端部は逆L字形をなす。口縁部・体部ともに、外面はヨコハケにより、内面はナデとハケにより仕上げられている。突帯貼り付け位置の上側内面においては、ユビオサエが顕著に認められる。最後に口縁部内外面がヨコナデにより仕上げられている。突帯は断面形が台形をなし、端部が比較的シャープに仕上げられている。

195は、口縁部から2段目まで残存する。体部から口縁部にかけては直立傾向にあるが、口縁部はわずかに外反する。内外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられ、明確な端面が形成されている。また、口縁部には菱形の線刻が認められる。円形の透かしは、2段目と4段目に各2箇所開けられ、2段目と4段目とは千鳥に配されている。

口縁部外面はタテハケの後ヨコハケにより、2段目から4段目はヨコハケにより仕上げられている。内面は、2段目から口縁部にかけて縦方向を基調としたハケにより仕上げられている。突帯は、断面台形をなすが、突出度もわずかで全体的に退化傾向が認められる。

196～198は、口縁部が残存する。

196は、直立する口縁部に対して、端部が大きく外反する。内外面とも横方向のハケの後、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。外面のハケはストロークの長いヨコハケである。197は、口縁部が体部に対して外反し、端部は下端部を中心にヨコナデが加えられている。端部以外は、内外面とも磨減が著しく、調整は観察できない。198は、直立する口縁部に対して、端部が大きく外反する。外面はヨコハケ、内面はハケの後ナデにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。外面のヨコハケは、ストロークの長いヨコハケである。

199は、体部3段目から口縁部まで残存する。口縁部から4段目にかけて黒斑が認められ、同じく口縁部と4段目の一部に赤色塗布が認められる。

口縁部は、わずかに外反傾向にあり、タテハケの後両端部をつまむようなヨコナデにより仕上げられている。4段目外面は、1次調整のタテハケの後ヨコハケが加えられているが、単位等は不明である。楕円傾向にある透かしが1穴残存する。3段目外面は、磨減のため調整は全く観察できない。また、円形透かしが1箇所認められるが、4段目は千鳥の位置関係にある。ただし、正確に90°の位置関係にあるのではなく、約115°違っている。内面は、口縁部から体部にかけてナデを基調として仕上げられている。部分的に工具を用いた強い縦方向のナデが加えられている。

突帯は2段分残存する。いずれも断面長方形に近い台形をなし、強いヨコナデにより上端部が突出する傾向にある。また、4段目突帯の剥離部分には、ヘラによる割り付け用の沈線が認められる（写真図版205：a・b）。

200は、口縁部から4段目にかけて残存する。口縁部に黒斑と線刻が認められる。口縁部は、短く外反し、明確な端面が認められる。強いヨコナデにより仕上げられている。口縁部と4段目外面は、磨滅が著しくないにもかかわらずハケは認められず、基本的にナデにより仕上げられたものと考えられる。内面は、ユビオサエとナデの後ハケが加えられ、最終的に部分的なナデにより仕上げられている。突帯は、断面台形をなすが、突出度はわずかである。強いヨコナデにより貼り付けられている。

201と202は、口縁部を中心に残存する。201の口縁端部は、短く外反する。内端部を中心としたヨコナデにより、垂直な端面が形成されている。外面はタテハケにより仕上げられている。内面の調整は、磨滅のため観察できない。202は、端部がヨコナデにより短く外反し、端部をとがらせている。外面はタテハケ、内面は粗いハケの後ナデにより仕上げられている。

203は、口縁部から4段目にかけて残存する。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。内外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられ、明確に端面が形成されている。4段目には、円形の透かしが1箇所残存する。

外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はヨコハケにより仕上げられている。特に口縁部外面のヨコハケは、ストロークの長いヨコハケが中心である（第265図）。しかし、部分的にはあるが磨損痕らしきものが認められる。また、内面はヨコハケを基調とするが、突帯貼り付け部は、その貼り付けの際のナデ



第265図 203拓影

により消されている。

突帯は全体的に剥離し、全く残存しない。その剥離部分を観察すると、その下端に相当する位置に割り付け用と考えられる沈線が認められる（写真図版204）。

204は、口縁部から3段目にかけて残存する。口縁部に黒斑と赤色塗布が認められる。また、4段目には円形の透かし（径6cm）が開けられている。さらに3段目にもその痕跡が認められ、4段目は千鳥の位置に配されている。

口縁部はわずかに外反傾向にあり、斜行する端面が形成されている。口縁部内外面のハケの後、ヨコナデにより仕上げられている。外面はタテハケの後ストロークの長いヨコハケにより仕上げられている。内面は、斜方向のハケの後、ナデが加えられている。ハケはいずれも同じ原体（5本/cm）が使用されている。

体部の4段目と3段目についても、口縁部同様、外面はタテハケの後ストロークの長いヨコハケにより仕上げられている。内面についても、口縁部と同様に仕上げられている。特に、4段目突帯貼り付け位置の下側にユビオサエ痕が帯状に認められ、突帯貼り付けに伴うものと考えられる。

突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、比較的突出する。強いヨコナデにより貼り付けられ、上下からの押圧が加えられている。

205は、口縁部を中心に残存する。全体的に外傾傾向にあり、端部はヨコナデにより外側につまみ出されている。外面はヨコハケにより仕上げられている。内面は、磨滅のため観察できない。

206は、口縁部から4段目にかけて残存する。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部は短く外反する。内外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられ、端部は全体的に丸みを帯びている。4段目に円形の透かしが1箇所認められるが、わずかに残存するのみである。その残存状況から、径が5.5cmと復元され、楕円形傾向にあるものと考えられる。また、口縁部内面には2条の線刻が認められる（写真図版205：c）。

内外面とも、タテハケを基調として仕上げられている。ただし、内面のタテハケは部分的なもので、粘土紐痕が顕著に認められる。

突帯は、比較的突出し、断面形は台形をなす。突帯剥離面の突帯根部にあたる位置には、割り付け用と考えられるヘラによる沈線が認められる（写真図版205：d）。

207～214は口縁部の小片である。

207は、直立する口縁部に対して、端部が大きく外反する。上端部をつまむようなヨコナデにより、垂直な端面が形成されている。外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。また、一部に径7mmの小穴の一端が認められる。出土位置・胎土・色調等の特徴から、220と同一個体の可能性が考えられる。

208は、口縁部の小片である。端部がヨコナデにより短く外反する。外面には3重の山形をなす線刻が認められる（写真図版204）。209は直立する口縁部に対して、端部が短く外反する。外面はヨコハケ、内面はハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。このため、端部には端面が形成されている。210は直立する口縁部に対して、端部が大きく外反する。ただし、端部には明確な端面は認められず、全体的に丸みを帯びている。外面はヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。

211は、口縁部全体が外反傾向にあり、端部はさらに外反する。外面はタテハケ、内面はハケにより仕

上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。このため、端部には端面が形成されている。212は、直立する口縁部に対して端部が短く屈曲する。ヨコナデにより仕上げられ、口縁部より薄く仕上げられている。口縁部内外面の調整は、磨滅のため観察できない。

213と214は、直立する口縁部に対して端部がわずかに外反する。213はやや肥厚傾向にあり、外傾する端面が認められる。213は、内外面ともヨコハケにより仕上げられている。最後に端部がヨコナデにより仕上げられている。214は、外面がヨコハケにより仕上げられ、ハケ原体が器面から離れた箇所が認められる。最後に端部がヨコナデにより仕上げられている。内面の調整は、磨滅のため観察できない。

(3) 体部片 (図版31・32 観察表12・13)

215～219は、体部2段と突帯1条が残存する。

215は、上段外面がストロークの長いヨコハケにより仕上げられている。内面は、全体的にタテハケにより仕上げられている。下段外面は磨滅傾向にある。突帯は、比較的シャープに仕上げられ、上端部が突出する傾向にある。216は、上段外面がタテハケ、下段内面がヨコハケにより仕上げられている。内面はナデにより仕上げられている。下段外面には赤色塗布が認められる。

217は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。上段には静止痕が認められる。内面は斜方向のハケの後ナデにより仕上げられている。また、突帯はヨコナデにより貼り付けられているが、直線的ではなく波打つように貼り付けられている。その他、上段と下段において円形の透かしがそれぞれ1箇所残存する。両者はほぼ千鳥に配されている。

218は、上段外面はタテハケの後ヨコハケ、下段外面はヨコハケにより仕上げられている。下段内面の調整は、磨滅のため観察できない。内面は、タテハケの後ナデが加えられている。上段外面には赤色塗布が認められる。

219は、上段外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。下段はヨコハケにより仕上げられている。また、円形透かしの一部が残存するとともに、線刻が認められる(写真図版206)。内面は、上段・下段とも磨滅傾向にあるが、部分的にハケ目が認められる。突帯は、突出度が弱く、全体的に丸味を帯びている。

220は、体部2段が残存する。上段には、円形透かしの一部が残存する。内外面ともヨコハケを基調として仕上げられている。なお、突帯そのものは残存しないが、その剥離痕が認められる。その剥離面には斜方向のハケ目が認められる。出土位置・胎土・色調等の特徴から、207と同一個体の可能性が考えられる。

221と222は、体部1段と突帯1条が残存する。

221外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。その後、径1cmの円形刺突がほぼ同じ高さに3個残存する(写真図版206)。未貫通である。刺突間の距離は一定していない。内面は縦方向を主体としたハケにより仕上げられている。その他、外面に赤色塗布が認められる。

222は、体部1段と突帯1条が残存する。体部外面はヨコハケ、内面はハケとナデにより仕上げられている。外面のヨコハケについては、わずかに静止痕が観察できる。ただし、静止痕の上下端を確認することはできない。突帯は、全体的に丸味を帯び、退化傾向にある。外面には、わずかではあるが赤色塗布も認められる。その他、体部には円形の透かしの一部が残存する。

223～225は、体部2段と突帯1条が残存する。

223外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。ただし、上段のヨコハケには静止痕が認められるが、下段のヨコハケには静止痕は認められず、波打つようなヨコハケである。内面はタテハケの後ナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が方形に近い台形をなし、突帯高が1.70cmとかなり突出している。また、上段には円形の透かしが1箇所残存する。

224は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。上段・下段とも波打つようなヨコハケである。内面は斜方向のハケの後ナデにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置の上側内面には、1条のヨコナデ痕が認められる。その他、上段には円形の透かしが1箇所残存する。

225は、外面上段がタテハケの後ヨコハケ、下段がヨコハケにより仕上げられている。内面の調整は、磨滅のため観察できない。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなす。全体的に丸味を帯びているが、比較的突出している。

226と227は、体部1段と突帯1条が残存する。226の体部外面はタテハケ、内面はユビナデにより仕上げられている。突帯は断面台形をなし、端部が比較的シャープである。227は、内面がハケの後ナデにより仕上げられている。体部は全体的に磨滅傾向にあるが、下段には円形透かしの一部が残存する。突帯は、突出がわずかで、特に上側は体部と一体化している。

228は、体部2段と突帯1条が残存する。上段外面はナデにより仕上げられ、2本の線刻が加えられている（写真図版206）。下段外面の調整は、磨滅のため観察できない。内面は、ヨコハケにより仕上げられている。

229～231は、体部の小片である。229は、内外面ともヨコハケにより仕上げられている。鋭角に接合する2本の弧状をなす線刻が認められる。230も線刻が認められる。ハケの後に施されている。線刻の内容は不明である。231も線刻が認められる。線刻の内容は不明であるが、682の線刻と同じモチーフの一部である可能性が考えられる。

232は、体部2段と突帯1条が残存する。外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面はナデにより仕上げられている。突帯の断面形は長方形に近い台形をなす。突帯高1cmと比較的突出し、上下両端部はシャープに仕上げられている。外面全面に赤色塗布が認められる。

この他、233は、鋭角をなす2本の線刻が認められる（写真図版206）。234は、体部の小片で、径1cmの円形刺突文が1箇所認められる（写真図版206）。235は、鋭角に接合する2本の線刻が認められる（写真図版206）。

(4) 底部片（図版32・33 観察表14）

236～241の6個体図化したしたが、いずれも底部のみ残存する。

236は、下端部から斜上方に直線的に開く傾向にある。外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はハケの後ユビナデにより仕上げられている。外面のヨコハケの一部には静止痕が認められる。静止痕は斜行するタイプであるが、ハケの単位は短く、Bd種とは異なる特徴を示している。底部下面はナデにより仕上げられている。

237は直立傾向にあり、内面下端付近はユビオサエとナデにより仕上げられている。他の箇所調整については、磨滅のため観察できない。また、底部下面も弱いナデが加えられている。238は、内湾気味に立ち上がる傾向にあり、内面下端付近はユビオサエ、その上側はナデにより仕上げられている。外面の調整については、磨滅のため観察できない。また、底部下面にも弱いナデが加えられている。

239は、下端部が自重により外側に開いている。内面はナデとユビオサエにより、外面はタテハケにより仕上げられている。なお、底部下面は未調整である。240は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がユビオサエとナデにより、仕上げられている。また、底部下面にはナデが加えられている。241は、斜方向に開く傾向にあり、内外面ともナデにより仕上げられている。また、底部下面にもナデが加えられている。

(5) 朝顔形埴輪 (図版33~35 観察表14)

242は、口縁部から体部(2段目)にかけて残存する。3段目と4段目には円形の透かしが開けられ、それぞれの段に2箇所残存する。各段とも相対する位置に開けられているが、3段目と4段目の透かしの配置は直交関係にはなく、約64°離れた位置関係にある。この他、1次口縁外面には赤色塗布が認められる。さらに、2段目外面には線刻が認められる(第267図)。



第266図 242 1次口縁上端面

口縁部は複合口縁状をなし、外反する1次口縁の上端部に2次口縁が載せられている。1次口縁上端面には、接合のための刻目が顕著に認められる(第266図)。1次口縁の端部は外方に突出し、突帯状をなす。1次口縁・2次口縁とも、外面はタテハケ、内面はヨコハケにより仕上げられている。最後に、2次口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。また、1次口縁と2次口縁の接合部は、内外面ともヨコナデにより仕上げられている。

頸部内面はヨコナデにより仕上げられ、外面には断面三角形の突帯がヨコナデにより貼り付けられている。肩部は、外面が横方向・斜方向のハケにより仕上げられている。内面は、上半部がユビオサエとナデにより仕上げられ、粘土組織が顕著に認められる。下半部はハケにより仕上げられている。

体部は、2段目から4段目とも、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。ヨコハケは、ストロークの長いヨコハケである。内面は、各段ともハケの後、ナデとユビオサエにより仕上げられている。このなかで、3段目上半部においては、斜方向のハケ目の上に粘土が貼り付けられている。当該箇所の断面観察と合わせると、ハケ部分まで一旦仕上げた後、その上部が積み上げられている。突帯は、断面形が上端を突出させた台形をなし、全体的に突出した傾向にある。

243は、口縁部から体部(2段目)にかけて残存する。口縁部は複合口縁状をなし、1次口縁の延長上に2次口縁が載せられている。そして1次口縁と2次口縁の境外面には、断面台形をなす突帯が貼り付けられている。1次口縁・2次口縁とも、外面はタテハケにより仕上げられている。内面は、斜方向の



第267図 242拓影

ハケにより仕上げられている。最後に、2次口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。また、頸部内面はナデにより仕上げられ、外面には断面三角形の突帯が貼り付けられている。

肩部は、外面上半がヨコハケ、下半がヨコナデにより仕上げられている。

内面は、上半が頸部と一体のナデ、下半がタテハケにより仕上げられている。このため、肩部の中位において、製作時の時差が存在するものと考えられる。

体部外面は、4段目がタテハケ、3段目・2段目がタテハケの後ヨコハケにより、仕上げられている。内面は、各段ともに斜方向からタテ方向のハケにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置の内面には、ヨコナデが加えられている。その他、4段目には円形の透かしが相対する位置に2箇所残存する。また、体部外面には赤色塗布が認められる。

244は、口縁部から3段目の上部にかけて残存する。口縁部は複合口縁状をなし、1次口縁と2次口縁の一部が残存する。外反する1次口縁の上端部やや内側に2次口縁が載せられ、1次口縁端が突出し突帯状をなす。1次口縁は、外面がハケの後ナデ、内面がハケにより仕上げられている。2次口縁は、内外面ともナデにより仕上げられている。また、頸部内面はナデにより仕上げられ、外面には断面三角形の突帯が貼り付けられている。

肩部は、外面がハケの後ナデ、内面がユビオサエの後ハケ、最後にナデにより仕上げられている。4段目は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がハケとナデにより、それぞれ仕上げられている。また、4段目には円形の透かしが相対する2方向に開けられている。

246は、口縁部下半から体部にかけて残存する。口縁部から肩部にかけて黒斑が認められる。また、口縁部下半外面には赤色塗布が認められる。

体部は、4段目のみ残存する。円形透かしの一部が1次残存し、外面はヨコハケにより仕上げられている。不連続痕は認められるが、静止痕は認められない。内面は、ハケの後ナデにより仕上げられている。肩部は、全体の3/4が残存する。外面は全体的に磨減が著しいが、ナデを基調に仕上げられている。内面はユビオサエとナデにより仕上げられている。

口縁部は下半部が完存する。外面は縦方向のハケにより、内面は横方向のハケにより仕上げられている。内面には部分的にナデが加えられている。また、頸部には断面台形の突帯が貼り付けられている。突帯は、口縁部へのハケの後沈線による割り付け、さらに斜行する刻み目を入れた後、貼り付けられている（写真図版206：a）。

(6) 肩部片（図版36 観察表14）

250は、肩部の小片である。外面がヨコハケ、内面がハケにより仕上げられている。また、外面には弧状をなす2本の線刻が認められる（写真図版209）。251は体部から肩部にかけての小片である。内外面ともヨコナデにより仕上げられている。円筒埴輪の可能性も否定できない。

(7) 口縁部片・頸部片（図版35・36 観察表14）

245は、2次口縁が残存する。内外面とも丁寧なハケの後、端部はヨコナデにより仕上げられている。特に外面は、ヨコハケの後タテハケが施されている（第268図・写真図版208）。

247は、1次口縁から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の上端部やや内側に2次口縁が載せられ、1次口縁端部が突帯状をなす。1次口縁と2次口縁の接合部にあたる1次口縁上端面には、刻み目が認められる。外面は、1次口縁・2次口縁ともにタテハケにより仕上げられている。内面は、1次口縁が斜方向、2次口縁が縦方向のハケにより仕上げられている。最後に、2次口縁端部がヨコナデにより仕上げられている。また、口縁部外面には赤色塗布が認められる。

248は、肩部から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の上端部やや内側に2次口縁が載せられ、1次口縁端部が突帯状をなす。口縁部内面は1次・2次ともに横方向のハケにより仕上げられている。

外面は、1次口縁がタテハケの後ヨコハケ、2次口縁がタテハケにより仕上げられている。頸部は、内面がナデにより仕上げられ、外面には断面長方形の突帯がヨコナデにより貼り付けられている。肩部は、外面がヨコハ



第268図 245拓影

ケ、内面がユビオサエとナデにより仕上げられている。また、口縁部外面には、赤色塗布が認められる。

249は、肩部から1次口縁にかけて残存し、頸部には突帯が貼り付けられている。内外面ともハケを基調とし、内面にはナデが加えられている。突帯は断面三角形をなし、ヨコナデにより貼り付けられている。

(8) 壺形埴輪 (図版36・37 観察表14・15)

252は、底部のみ残存する。下部部から斜上方に直線的に開き、上部には円形透かしの一部が残存する。この透かしの存在から壺形埴輪と判断したものである。外面はハケ、内面はユビナデにより仕上げられている。底部下面はナデにより仕上げられている。

253は、完形に復元できた個体である。底径22.6cmに対して口径48.7cmと、全体的にバランスの悪い形態をなしている。1次口縁外面には赤色塗布が認められる。

底部はほぼ直立する円筒形をなすが、下部部付近はわずかに外側に開いている。下部部は外側にわずかに肥厚し、外面は帯状をなす。この部位は、下面も含め、内外面がヨコナデにより仕上げられている。この部位より上側の底部外面についてはハケ、内面はナデとユビナデにより仕上げられている。外面のハケは、下半が斜方向、上半がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。特に、ヨコハケについては静止痕が認められる。なお、底部上端付近には円形の透かしが1箇所残存する。

底部と肩部の境外面には、円盤状の罫が貼り付けられている。幅5.4cmを測り、わずかに下側へ傾斜する傾向にある。端部は、ほぼ垂直な端面が形成されている。上面がハケにより仕上げられ、最後に上面・下面がヨコナデにより仕上げられている。

肩部は、外面がハケにより仕上げられている。横方向が主体であるが、斜方向・縦方向も認められる。内面は、斜方向のユビナデを基調に仕上げられている。ただし、罫貼り付け位置の内面上側は、ユビオサエの後ヨコハケにより仕上げられている。この箇所成形時の時間差があるものと考えられる。

頸部外面には、断面鈍角三角形の突帯がヨコナデにより貼り付けられている。なお、この突帯剥離面には、縦方向のハケ目が認められる。内面は、ユビオサエとナデにより仕上げられている。

口縁部は複合口縁状をなす。1次口縁の上端部やや内側に2次口縁が載せられ、1次口縁端部が突出し突帯状をなす。突帯は、ヨコナデにより仕上げられている。1次口縁・2次口縁外面はタテハケを基調とし、その後1次口縁にはヨコナデが部分的に加えられている。内面は、1次口縁・2次口縁ともヨコハケにより仕上げられている。最後に、端部内外面がヨコナデにより仕上げられ、口縁部に直交する端面が形成されている。

7. 南造り出し北側埴輪列

(1) 概要

H68～H89の22本分からなる(第269図)。このなかで、H79とH80については、底部が小片のため図化されていない。また、樹立状態を確認することはできなかったが、明らかに埴輪列に伴うと考えられる埴輪についても、ここで報告する。



第269図 南造り出し北側埴輪列出土埴輪

(2) 埴輪列と出土埴輪

H69 257が出土し(図版38 観察表15)、底部のみ残存する。257は、内面はユビオサエにより仕上げられているが、外面の調整は磨滅のため観察できない。底部下面はナデにより仕上げられている。他の円筒埴輪と比較して、器壁が薄い特徴が認められる。

H70 258が出土している(図版38 観察表15)。底部から1段目突帯まで残存する。258は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面はナデを基調とし、特に下端部付近はユビオサエにより仕上げられている。底部下面はナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、比較的突出している。ヨコナデにより貼り付けられ、端部がシャープに仕上げられている。

H71 262が出土している(図版38 観察表15)。底部のみ残存し、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がナデにより仕上げられている。内面底部付近はユビオサエが顕著である。底部下面は未調整である。

H72 259が出土している(図版38 観察表15)。底部のみ残存し、外面はタテハケ、内面はユビオサエとユビオサエにより仕上げられている。特に外面下端部は、自重で肥厚後にハケが加えられている。

H73 261は底部のみ残存する(図版38 観察表15)。内外面ともハケにより仕上げられている。特に外面のハケは短いタッチで施されている。底部下面は弱いナデにより仕上げられている。

H74 260は底部のみ残存する(図版38 観察表15)。全体的に磨滅傾向にあるが、内面はハケとナデ・ユビオサエにより、外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。特に底部付近内面は、ユビオサエにより整形されている。底部下面はナデにより仕上げられている。

H75 263が出土し(図版38 観察表15)、底部から2段目にかけて残存する。外面は、底部がタテハケの後ヨコハケにより、2段目がヨコハケにより仕上げられている。静止痕は認められない。内面は、底部から2段目にかけてナデを基調として仕上げられている。突帯貼り付け部内面には、貼り付けの際に横方向のナデが加えられている。底部下面はナデにより仕上げられているが(写真図版210)、溝状の圧痕が認められる。突帯は突出度が低く、断面形は台形が崩れ三角形に近い形状をなしている。

H76 264が出土し(図版39 観察表15)、底部から2段目にかけて残存する。底部を中心に黒斑が認められる。2段目には径6cmと推定される円形透かしが、底部には径1.5cmの小穴が開けられている。各1箇所残存する。底部外面はハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下端は未調整である。突帯は断面台形をなすが、突出度は低い。強いナデにより貼り付けられている。

H77 底部片の265が出土している(図版39 観察表15)。やや外側に開き気味に立ち上がり、外面はハケ、内面はナデにより仕上げられている。底部下面は未調整である。

H78 266が出土している(図版39 観察表15)。底部が残存し、内面は横方向を主体としたハケにより

仕上げられている。外面は、下端部付近がタテハケにより仕上げられているが、上半部は磨滅のため観察できない。底部下面は、ナデにより仕上げられている。数箇所で強い溝状の圧痕が認められる。

H81 円筒埴輪の254と、底部片の267が出土している（図版38・図版39 観察表15）。

254は、口縁部が残存する。斜方向に開く口縁部に対し、端部が短く外反する。外面はタテハケ、内面はヨコハケにより仕上げられている。最後に、内外面ともヨコナデにより仕上げられている。この他、下端部には突帯貼り付け時のヨコナデ痕が認められる。

267は、底部から2段目にかけて残存し、この範囲に黒斑が認められる。底部外面はハケを基調とし、内面はハケとナデにより仕上げられている。底部は未調整で、溝状圧痕が認められる（写真図版211）。突帯は断面台形をなし、強いヨコナデにより貼り付けられている。

H82 体部片の256（図版38 観察表15）と、底部片の268（図版39 観察表15）が出土している。

256は、体部2段と突帯1条が残存する。体部は2段分ともわずかに残存する程度である。外面下段はタテハケの後ヨコハケにより、上段はヨコハケにより仕上げられている。突帯断面は方形をなす。

268は、底部から2段目にかけて残存し、底部を中心に黒斑が認められる。底部外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下端は未調整である（写真図版212）。

H83 269と276が出土している（図版39 観察表15・16）。269は、底部から2段目にかけて残存し、底部を中心に黒斑が認められる。外面はタテハケ、内面はユビオサエとユビナデにより仕上げられている。底部は未調整である。突帯は突出し、断面形は長方形に近く、強いナデにより貼り付けられている。

276（図版40 観察表16）は、底部のみ残存する。外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はナデを基調として仕上げられている。内面下端は、ユビオサエが顕著である。底部下面は部分的にナデにより仕上げられているが、溝状の圧痕も認められる。

H84 270が出土している（図版40 観察表15）。底部のみ残存し、内外面ともナデを基調とし、内面下端部はユビオサエ痕が顕著である。底部下面は未調整で、溝状の圧痕が認められる。

H85 271が出土している（図版40 観察表16）。底部のみ残存し、外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は全体的に磨滅傾向にあるが、下端部のみヨコナデが加えられている。

H86 272が出土している（図版40 観察表16）。底部のみ残存し、径2.5cmの小穴が1箇所に開けられている。外面はストロークの長いヨコハケ（5本/cm）、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整で、刻み目状の圧痕が認められる。

H87 273が出土している（図版40 写真図版212 観察表16）。底部のみ残存し、外面はタテハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整で、溝状の圧痕が認められる。

H88 274が出土している（図版40 観察表16）。底部のみ残存し、内外面ともハケの後ナデにより仕上げられている。さらに下端付近内面は、ユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整で、溝状の圧痕が認められる。

H89 275が出土している（図版40 観察表16）。底部のみ残存し、内外面とも磨滅のため調整を観察することは困難であるが、外面にわずかにヨコハケが認められる。また、底部付近内面は、ユビオサエにより整形されている。

P群 255が出土している（図版38 観察表15）。255は、体部2段と突帯2条が残存する。透かしは残存しないが、上段部に黒斑が認められる。外面はヨコハケにより仕上げられ、上段の下部にはハケ目に対して直交する静止痕が認められる。内面は、ハケとナデ・ユビオサエにより仕上げられている。

8. 南造り出し西側埴輪列

(1) 概要

H90~H99の10本分かななる(第270図)。このなかで、H92・H97については、底部が出土しているが、小片のため図化されていない。



第270図 南造り出し西側埴輪列出土埴輪

(2) 埴輪列と出土埴輪

H90 278が出土している(図版40 観察表16)。底部のみ残存し、外面はハケ、内面はナデにより仕上げられている。

外面のハケは、細めの原体(8本/cm)が使用されている。底部下端付近はユビオサエにより整形され、下面はナデにより仕上げられている。

H91 277が出土している(図版40 観察表16)。277は、底部から2段目まで残存する。全体的に、下端部から斜方向に直線的に広がる傾向が認められる。内外面ともヨコハケを基調とするが、内面下端部はユビオサエが顕著である。外面のヨコハケは、静止痕が認められず、ストロークの長いヨコハケである。また、内面上半は磨滅傾向が著しく、下部には工具の当たりが集中して認められる(写真図版212:a)。

H93 279が出土している(図版40 観察表16)。底部のみ残存し、外面がタテハケ、内面がユビナデにより仕上げられている。下端付近はユビオサエにより整形され、下面は弱いナデにより仕上げられている。

H94 280が出土している(図版40 観察表16)。底部のみ残存し、底部から内側に内傾気味に立ち上がる傾向が認められる。全体的に磨滅傾向にあるが、内面はナデとユビオサエ、外面は縦方向のハケにより仕上げられている。

H95 281が出土している(図版40 観察表16)。底部のみ残存し、やや内湾気味に斜外方に立ち上がる。外面はタテハケ、内面は下部を中心に縦方向のユビナデにより仕上げられている。外面のハケは細めの原体(8本/cm)が使用されている。底部下面は未調整で、圧痕が多く認められる(写真図版215)。

H96 283が出土している(図版41 観察表16)。底部のみ残存し、外面は縦方向のハケ、内面はナデにより仕上げられている。また、底部中位内面には、ユビオサエ痕が帯状に認められる。外面のハケは細めの原体(8本/cm)が使用されている。底部下面は粗いナデにより仕上げられ、凹凸が顕著である(写真図版215)。

H98 底部の284と、体部小片の285が出土している(図版41 観察表16)。

284は、底部のみ残存する。外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。特に内面下端部はユビオサエ痕が顕著である。底部下面はナデにより仕上げられているが、圧痕が多く認められる。285は、体部1段と突帯1条が残存する。外面はヨコハケにより仕上げられている。内面は磨滅のため観察できない。突帯下部に赤色塗布が認められる。

H99 底部のみ残存する282が出土している(図版41 観察表16)。282の底部は、やや内湾気味に斜外方に立ち上がる。内外面とも横方向を主体としたハケにより仕上げられている。外面のヨコハケは、ストロークの長いヨコハケとタッチの短いハケが併用されている。一部斜行する静止痕が認められるが、その長さは3.5cmほどである。また、内面下端部はユビオサエにより仕上げられている。底部下面はナデにより仕上げられているが、圧痕も認められる(写真図版213)。

9. 南造り出し上面・周辺斜面

(1) 概要

南造り出しにおいては、先述した埴輪列以外に、その上面および周辺斜面・周濠底から多量に埴輪が出土している。

(2) 出土状況

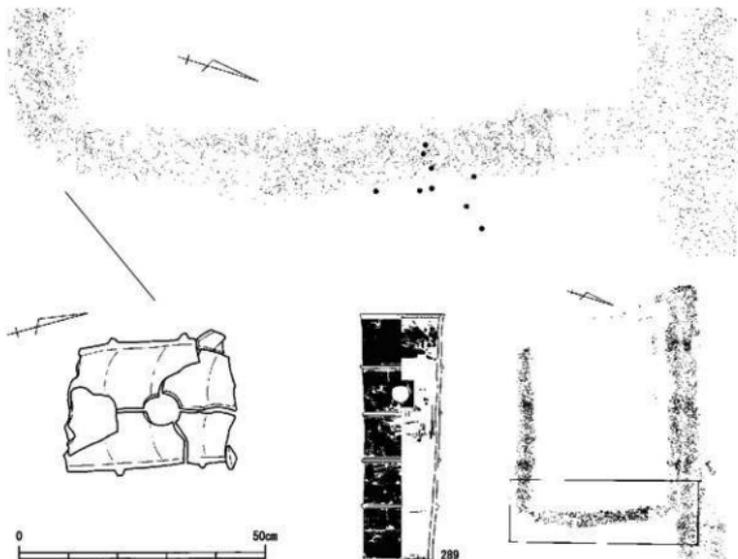
h18 南造り出し南辺中央部、斜面裾から周濠底にかけて出土している（第231図）。全体的に破片が大きく、ほぼ1体が倒れ、その後押し潰された状態での出土状況である（第271図 写真図版143：①）。斜面においては、葺石直上ではなく、転石層中から出土している。291と298が出土している。

h19 南造り出し南東隅、斜面裾部に近接した周濠底から出土している（第231図）。南造り出し裾部から50cmと、造り出しにほぼ近接した位置にあたる。このため、造り出しに伴うものとして報告する。h19は、289の体部が倒れ込み、その場で押し潰された状況を呈している（第272図 写真図版145：①②）。この他289は、造り出し東側斜面中央部から南周濠にかけての一定の範囲の転石層中に、散乱した状態で出土しており、最終的には完形に復元されている（図版43）。

h20 南造り出し東辺中央部斜面裾部から1.80m北側の周濠底から出土している（第231図）。円筒形の体部がその場で押し潰された状況で出土している（第273図）。



第271図 h18 埴輪出土状況



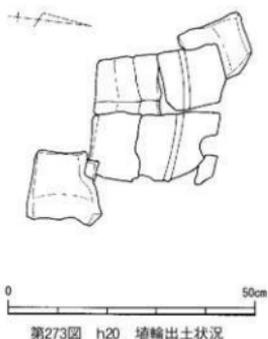
第272図 h19 埴輪出土状況

(3) 円筒埴輪

286は、口縁部から2段目にかけて残存する(図版41 観察表16)。口縁部から2段目にかけて黒斑が認められ、口縁部から4段目にかけて赤色塗布が認められる。また、4段目に2箇所、3段目に1箇所円形透かしが残存する。さらに、4段目には線刻が1箇所認められる(第274図)。

口縁部は、内外面のナデの後外端部を中心としたヨコナデにより仕上げられている。このため、外端部が外方につまみ出され、ほぼ水平な端面が形成されている。外面のハケは、タテハケの後ヨコハケが加えられている。ヨコハケには静止痕が認められる(写真図版214:c)。内面は斜方向のハケの後ナデが加えられている。

4段目も、内外面とも口縁部と同様に仕上げられている。また、4段目には、相対する位置に径6cmの円形透かしが開けられている。2段目と3段目は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられているが、明確な静止痕は認められず、ストロークの長いヨコハケにより仕上げられている。内面は、4段目・口縁部と同様である。なお、3段目と4段目の高さは、10.00cm・10.40cmとほぼ一定している。



第273図 h20 埴輪出土状況



第274図 286線刻拓影

突帯は、断面台形をなし、比較的突出している。また、2段目と3段目の境にある突帯剥離箇所では、割り付け用の沈線が認められる（写真図版214：a・b）。

287は、完形に復元できた数少ない個体である（図版42 観察表16）。全体で5段4条からなり、器高は68.7cmを測る。4段目と3段目に円形の透かしがそれぞれ1箇所残存し、両者は千鳥に配されている。

底部は、全体的には直立傾向にある。外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はタテハケにより仕上げられている。また、下端部内面には横方向のナデが加えられている。なお、1段目突帯は剥離して残存しないが、その剥離面にはタテハケの痕跡が認められる。体部外面は、各段ともタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。特に2段目と3段目においてはハケ目に対してやや斜行する静止痕が認められる（写真図版214：d・e）。内面は、縦方向のハケを基調として仕上げられている。

口縁部は、全体的には外傾傾向にあるが、端部付近はわずかに直立し、端部にはほぼ水平な端面が形成されている。内外面とも縦方向を主体としたハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。ただし、外面の一部にはタテハケの後ヨコハケが加えられている。なお、口縁部には1箇所、径1.4cmの小穴が開けられている。

突帯は、剥離した1段目突帯を除いて、3段とも残存する。断面形はM字形に近い台形をなし、ヨコナデにより貼り付けられている。

288は、完形に復元された個体である（図版42 観察表16）。5段4条からなり、器高67.80cmを測る。直立する体部に対して、口縁部が大きく外反する。端部は、内外面のハケの後強いヨコナデにより仕上げられ、わずかに端面が形成されている。円形の透かしが、4段目と3段目にそれぞれ2箇所開けられている。また、4段目と3段目は千鳥に配されている。

口縁部外面はタテハケにより仕上げられ、4段目以下はヨコハケにより仕上げられている。また、底部と2段目においては、1次調整としてのタテハケが認められる。いずれのヨコハケも、静止痕は認められない。内面は、3段目から口縁部がヨコハケの後ナデにより仕上げられている。底部と2段目はナデにより仕上げられている。また、各突帯の貼り付け部内面においては、貼り付けの際にヨコナデが加えられている。底部下面は未調整である。

突帯は、各段とも比較的突出し、断面形は長方形に近い台形をなす。ただし、突帯端面は体部と平行せず、突帯全体が斜下方に傾く形となっている。

289は、口縁部から底部にかけて残存し、完形に復元された個体である（図版43 観察表17）。5段4条からなり、器高80.30cmと、復元された円筒植輪のなかでは最も大型である。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部が短く屈曲する。口縁部内外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられ、外端面が形成されている。円形の透かしが2段目に2箇所開けられ、4段目では1箇所残存する。口縁部・4段目・3段目外面・1段目突帯には赤色塗布が認められる。

口縁部～底部は、基本的にタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。口縁部のヨコハケには、静止痕は認められない。また、4段目～2段目は、ストロークの長いヨコハケである（写真図版218）。一方、底部のヨコハケは静止痕が多く認められ、Bb種に分類されるものである（写真図版218）。内面は、口縁部が横方向を主体としたハケにより仕上げられている以外は、ナデにより仕上げられている。底部下端はユビオサエにより仕上げられている。また、3段目内面には、工具痕が比較的顕著に認められる。さらに、底部下面はナデにより仕上げられている。

290は、口縁部から体部（3段目）にかけて残存する（図版43 観察表17）。口縁部のハケ目内には赤色塗布がわずかに認められる。円形の透かしは、4段目に2箇所開けられ、3段目に1箇所残存する。4段目と3段目は千鳥に配されている。

体部から口縁部にかけて外傾気味にほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部が短く直立後、逆L字形に屈曲する。体部から口縁部外面はタテハケの後ヨコハケ、内面は横方向から斜方向のハケにより仕上げられている。最後に口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

突帯は2条残存するが、いずれも断面形が方形に近い台形をなす。

291は、口縁部から2段目まで残存する（図版43 観察表17）。口縁部に黒斑が認められる。4段目と3段目には、円形の透かしがそれぞれ2方向に開けられている。各段の透かしは相対する位置に開けられ、4段目と3段目とは千鳥に配されている。体部から口縁部にかけて直立し、口縁部が短く外反する。内外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられ、斜行する端面が形成されている。



第275図 291拓影

口縁部から体部外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。静止痕は認められず、全体的にストロークの長いヨコハケである（第275図 写真図版219:c）。内面は、斜方向のハケを基調とし、その後ナデが加えられている。ただし、ナデは丁寧とはいえず、下部ほど粘土紐痕が顕著に認められる（写真図版220:a）。また、各突帯貼り付け部のやや上側には、強いヨコナデ痕が認められる。

突帯は、断面形が方形に近い台形をなし、比較的突出している。特に、2段目突帯の剥離部分においては、割り付け用の沈線が認められる（写真図版219:b）。また、剥離面に1次調整のタテハケが残存する箇所も認められる（写真図版219:a）。

292は、体部から口縁部にかけて残存する（図版44 観察表17）。口縁部から体部にかけて黒斑が認められる。

体部は、2段目の一部と3段目・4段目が残存する。このなかで、4段目のみに円形の透かし（復元径5.0～5.3cm）が2方に開けられている。2段目は上端部の一部が残存し、外面はヨコハケにより仕上げられている。残存範囲が限られるが、その特徴からストロークの長いヨコハケと考えられる。3段目と4段目は、1次調整のタテハケの後、各段の下側はBb種ヨコハケ（第276図）、上側がストロークの長いヨコハケにより仕上げられている。両段ともヨコハケがほぼ全面に施され、タテハケが観察できるのは一部に限られる。内面は、各段とも縦方向を主体としたハケの後ナデにより仕上げられている。



第276図 292拓影

口縁部は1/2以上残存する。端部はほぼ直立するが、外端部を中心に強いヨコナデにより仕上げられたため、やや外方に開く傾向にある。外面は、1次調整のタテハケの後、ストロークの長いヨコハケにより仕上げられている（写真図版220：c）。なお、ハケ調整は、口縁端部のヨコナデの前に行われている。また、ヨコハケ後、「X」字形の線刻が1箇所施されている（写真図版220：b）。



第277図 293拓影

293は、体部から口縁部にかけて残存する（図版44 観察表17）。口縁部から体部にか

て黒斑が認められ、外面全面にわずかではあるが赤色塗布も認められる。

体部は、3段目の一部と4段目が残存する。3段目は、外面が連続するヨコハケにより、内面がナデにより仕上げられている。4段目は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。静止痕は認められず、ストロークの長いヨコハケ（第277図）である。内面は、斜方向のハケの後ナデが加えられている。また、4段目には、径4.1～4.5cmの円形の透かしが相対する位置に2孔開けられている。

体部に1条、体部と口縁部の境に1条の突帯が残存する。いずれも断面形は台形を基本形とするが、最終的に上端部を中心にヨコナデが加えられているため、上側が突出した変則的な台形である。

口縁部は完存し、端部は外方に折り返され、逆L字形をなす。口縁部中位やや下側には、径2.4cm～2.6cmの円形の透かしが1箇所認められる（写真図版221）。体部の円形の透かしとは千鳥に配されているが、その規模は明らかに小型である。

口縁端部はヨコナデにより仕上げられ、明確な端面が形成されている。外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。ヨコハケは全面ではなく、タテハケが顕著に認められる。口縁部直下には静止痕が認められる（第277図上端 写真図版220：d）。その間隔が1.80cm～2.80cmと、短い点が特徴的である。以下のヨコハケには、静止痕は認められない。内面は、斜方向のハケの後部分的にナデが加えられている。

294は、口縁部から4段目まで残存する（図版45 観察表17）。体部から口縁部にかけてわずかに外反傾向にあり、口縁端部が短く屈曲する。口縁部は、外面がタテハケ、内面が斜方向のハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。4段目は、内外面とも縦方向のハケにより仕上げられている。突帯は、断面形が台形をなすが、突出度はわずかである。この他、4段目には円形の透かしの一部が残存する。

295は、口縁部から4段目にかけて残存する（図版45 観察表17）。各段に黒斑が認められる。口縁部には直線状の線刻が3条、Y字形に描かれている。ただし、一部を欠くため、全体像を明らかにすることはできない。この他、4段目には円形の透かしが2方向に開けられている。基本的には相対する位置関係にあるが、両者は相対する位置ではなく、160°とその位置がややずれている。

体部から口縁部にかけて直立し、口縁部がわずかに外反する。口縁部内外面のハケの後ヨコナデにより仕上げられ、明確な端面が形成されている。口縁部から体部にかけての外面はヨコハケにより仕上げられている。ただし、口縁部はストロークが長く、体部は短いタッチと、特徴を異にしている。内面

は、ハケの後ナデとユビオサエにより仕上げられている。突帯は、1条残存し、断面台形をなす。

296は、口縁部から4段目突帯まで残存する（図版45 観察表17）。体部から口縁部にかけて斜外方に開き、口縁端部がわずかに外反する。内面は斜方向のハケにより仕上げられている。外面の調整については、磨減のため観察できない。突帯は、断面形が台形をなし、突帯高が1.20cmと突出している。

297は、口縁部から4段目まで残存する（図版45 観察表17）。体部から口縁部にかけてわずかに外傾し、口縁端部が外反する。口縁部は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面が斜方向のハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。4段目についても、外面がヨコハケ、内面がハケにより仕上げられている。突帯は、断面形が台形をなすが、丸味を帯び退化傾向にある。

298は、口縁部から3段目にかけて残存する（図版45 観察表17）。4段目には円形の透かしが2方向に開けられている。3段目外面の一部には、赤色塗布が認められる。特にこの埴輪は、比較的高温で焼成されている。

口縁部は直立する体部の延長上にあり、わずかに外反気味ではあるが、ほぼ直立する。端部は、内外面のハケの後、外端部を挟み込むようなヨコナデにより仕上げられている。このため、ほぼ水平な端面が形成されている。

内外面は、ともにハケを基調として仕上げられている。外面は、タテハケの後ヨコハケが基調であるが、3段目に限りタテハケは認められない。口縁部下半のヨコハケにおいては、静止痕およびヨコハケを一時停止した痕跡が認められる（写真図版221:a）。一方、4段目のヨコハケは、ストロークの長いヨコハケである。内面は、ヨコハケの後、口縁部には縦方向のユビナデが加えられている。また、4段目突帯の貼り付け部のやや上側内面には、ユビオサエ痕が顕著に認められる。

突帯は、2条残存する。いずれも断面台形をなすが、上端部より下端部のほうが低い傾向にある。突出度もわずかで、退化傾向にある。

299～315は、口縁部のみ残存する（図版45・46 観察表17・18）。

299は、斜方向に開く口縁部に対して端部が大きく外反する。端部は、内外面ともヨコナデにより仕上げられている。300は、わずかに外傾する口縁部に対して端部が短く屈曲する。外面はヨコハケ、内面は斜方向のハケにより仕上げられている。最後に、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。また、径1.2cmの小穴が1穴認められる。301は、直立する口縁部に対して端部が短く屈曲し、逆L字形をなす。内外面ともハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。比較的しっかりしたヨコナデで、端部の器壁は口縁部より薄く仕上げられている。302は、直立する口縁部に対して端部が短く外反する。外面はタテハケ、内面は斜方向のハケにより仕上げられている。最後に、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

303は、端部が斜下方に折り返され、端部がヨコナデにより薄く仕上げられている。口縁部は、内外面ともナデを基調とし、外面には線刻が認められる（写真図版222）。線刻は、三重の山形からなるもので、各山形は連続するものではない。304は、外傾傾向にある口縁部に対し、端部はさらに外反している。端部はヨコナデにより丸く仕上げられている。口縁部外面はヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。305は、斜方向に開く口縁部に対して、つまむようなヨコナデにより端部が逆L字形をなす。内面はナデ、外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。306は、斜方向に開く口縁部に対して、端部が逆L字形に屈曲する。つまむようなヨコナデにより、端部は丸く仕上げられている。内面はハケ、外面はハケとナデにより仕上げられている。307は、口縁部全体が外反傾向にあり、口縁端部が短く屈曲

する。外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面については、磨滅のため観察できない。最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられ、端面が形成されている。端面は丁寧に仕上げられ、端部はシャープに仕上げられている。

308は、斜方向に開く口縁部に対して端部が短く外反する。端部は、内外面ともヨコナデにより仕上げられている。他は磨滅のため調整を観察することはできない。309は、外傾する口縁部に対して端部が斜下方へつまみ出されている。内外面とも磨滅のため調整を観察することはできない。310は、直立する口縁部に対して端部が短く外反する。端部は、内外面ともヨコナデにより仕上げられている。内面はヨコハケにより仕上げられている。外面の調整は、磨滅のため観察することはできない。311は、斜方向に開く口縁部に対して端部がわずかに外反する。外面はヨコハケの後タテハケ、内面はヨコハケにより仕上げられている。最後に、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。この他、下端部には突帯貼り付け時のヨコナデ痕が認められる。

312は、直立する口縁部に対して、端部が逆L字形に屈曲する。外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、一部ハケ目に対して直交する静止痕が認められる。内面は磨滅傾向にあるが、わずかにハケ目も認められる。313は、ほぼ直立する口縁部に対して、端部がヨコナデにより斜外方に短く屈曲している。口縁部内面はナデにより仕上げられているが、外面は磨滅のため観察できない。314は、直立する口縁部に対して端部が大きく外反する。端部は、内外面ともヨコナデにより仕上げられている。内面はヨコハケにより仕上げられている。外面には、ユビオサエ痕がわずかに観察できる。315は、直立する口縁部に対して端部が短く外反する。外面はタテハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられ、端面が形成されている。

316～321は、口縁部の小片である（図版47 観察表18）。

316は、内外面の調整が磨滅のため観察できないが、端部は内外面ともヨコナデにより仕上げられている。また、外面には2本の線刻が認められるが、他の線刻と比較して鋭利な工具によっている。317は、直立傾向にある口縁部に対して、端部が逆L字形に屈曲する。内面はハケの後ナデにより仕上げられている。最後に、口縁端部がヨコナデにより仕上げられている。外面については、磨滅のため調整は観察できないが、赤色塗布が認められる。318はやや外傾気味に立ち上がり、端部はその延長上でヨコナデにより丸くおさまられている。内外面とも磨滅傾向にあるが、外面にはわずかにハケ目が観察できる。319は、外傾する口縁部に対して端部が逆L字形に屈曲する。端部は、内外面ともヨコナデにより仕上げられている。外面はナデにより仕上げられ、内面は磨滅のため調整を観察できない。320は、直立する口縁部に対して、端部がヨコナデにより外方につまみ出されている。この結果、外傾する端面が形成されている。内外面とも磨滅傾向にあるが、内面にはナデが加えられている。321は、斜方向に開く口縁部に対して、端部が大きく折り返されている。内外面ともヨコナデにより仕上げられ、端部は肥厚するとともに内傾する端面が形成されている。

（4）体部片（図版47～49 観察表18～20）

322～326・331は、体部2段と突帯1条が残存する。

322は、下段には方形の透かしの一部が残存する。内面はナデにより仕上げられているが、外面は磨滅のため観察できない。突帯は断面方形をなし、端部は比較的シャープに仕上げられている。323は、下段には円形透かしの一部が残存する。外面はタテハケ、内面はタテハケの後ナデにより仕上げられてい

る。また、突帯貼り付け位置の内面下側には、ユビオサエが顕著に認められる。突帯は、断面形が方形に近い台形をなし、比較的突出している。324は下段に円形透かしの一部が残存する。外面は、上段がタテハケの後ヨコハケ、下段がヨコハケにより仕上げられている。内面は、ユビオサエにより仕上げられている。突帯は、断面台形を基本形とするが、上辺が強いヨコナデにより挟られた形となっている。

325は、上段と下段には円形透かしの一部が残存し、両者はほぼ千鳥に配されている。また、上段外面には赤色塗布が認められる。内外面とも磨減が著しいが、外面はハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。突帯は、断面台形をなすが、端部は丸みを帯び、退化傾向が認められる。

326は、体部2段と突帯1条が残存する。下段外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。ヨコハケには斜行する静止痕が認められる(写真図版222)。上段外面は、磨減のため観察できない。内面は、上段・下段ともハケの後ナデとユビオサエにより仕上げられている。また、上段には、円形の透かしの一部が残存する。

331の内面は、突帯貼り付け位置の下側を中心にユビオサエの後ナデ、外面下段はヨコハケにより仕上げられている。外面上段の調整は、磨減のため観察できない。突帯は、断面形が台形をなすが、全体的に丸味を帯びている。

327は、体部1段と突帯1条が残存する。外面はストロークの長いヨコハケにより、内面はハケとナデにより仕上げられている。また、体部下端には円形の透かしがわずかに残存する。突帯は、断面台形をなすが、下端が低く、三角形に近い形状をなしている。

328～330・332は、体部2段と突帯1条が残存する。

328は、下段には円形透かしの一部が残存する。外面は、下段がヨコハケにより仕上げられているが、上段は磨減のため観察できない。内面は、上段・下段とも斜方向のハケにより仕上げられている。突帯は、基本的には蒲鉾形をなすが、その形状は一定していない。329は、下段には円形透かしの一部が残存する。外面は、上段・下段ともタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は、両段とも斜方向のハケにより仕上げられている。突帯は、断面台形をなすが、全体的に丸味を帯びている。330は、体部上端には円形透かしの一部が残存する。内面は、上段・下段ともナデにより仕上げられているが、外面は磨減のため観察できない。突帯は、断面長方形に近く、顕著に突出する。332外面は全体的に磨減傾向にあり、上段にわずかにタテハケが認められる。内面はナデを基調として仕上げられている。

333と334は、体部2段と突帯1条が残存する。333は、下段外面がナデ、上段外面がヨコハケにより、内面が上段・下段ともナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が長方形をなすが、全体的に垂下傾向にある。334の外面は、外面下段のタテハケ以外、ナデにより仕上げられている。

335は、体部1段と突帯1条が残存する。外面はヨコハケにより仕上げられている。内面は、突帯貼り付け位置にユビオサエが認められる。突帯は、断面形が台形をなし、突帯高1.20cmと突出している。

336・337・339は、体部2段と突帯1条が残存する。336の下段外面はハケ、上段外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は、上段・下段ともハケとナデにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置の上側と下側には、ユビオサエ痕が顕著に認められる。突帯は、断面形が台形をなすが、突出度はわずかである。337は、上段外面がタテハケの後ヨコハケ、下段外面がヨコハケにより仕上げられている。内面は、斜方向のハケにより仕上げられ、部分的にナデが加えられている。下段外面には赤色塗布が認められる。339の下段外面はヨコハケ、上段外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は、上段・下段ともナデにより仕上げられている。突帯貼り付け位置の下側には、ユ

ビオサエ痕が顕著に認められる。突帯は、断面形が台形をなすが、突出度はわずかである。

338と340は、体部1段と突帯1条が残存する。338外面は、タテハケの後ヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が方形に近いが、全体的に下方に垂下している。340内面は、全体的に磨滅傾向にあるが、突帯貼り付け位置の内側にはユビオサエ痕が認められる。外面はナデにより仕上げられ、1本の線刻が認められる。

341～348は、体部2段と突帯1条が残存する。

342は、内外面の調整が磨滅のため観察できない。突帯は、断面形が台形をなすが、突出度はわずかである。343は、透かしも認められないため、植輪全体における位置は不明である。内外面ともハケにより仕上げられている。突帯は断面形が台形をなすが、突出度は顕著でない。

341は、内外面ともナデにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置内面には、ユビオサエ痕が顕著に認められる。突帯は、断面台形をなし、比較的突出している。

344内面は、ハケとナデにより仕上げられているが、突帯貼り付け位置を中心に強いヨコナデにより仕上げられている。外面はヨコハケにより仕上げられている。突帯は、上面が傾斜し、全体的に丸味を帯びた形状をなしている。

345は、上段外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がナデにより仕上げられている。外面のヨコハケにはハケ目に対して直交する静止痕が認められる。また、突帯貼り付け位置内面には強いヨコナデ痕が認められる。突帯は、突帯高が6mmと、突出はわずかである。なお、外面のハケ目内に赤色塗布がわずかに認められる。

346の内面は、ナデにより仕上げられている。わずかにハケ目も残存する。外面は、下段がタテハケの後ヨコハケにより、上段がヨコハケにより仕上げられている。突帯は、断面形がM字形をなす。

347の外面はタテハケ、内面はナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が台形をなし、端部がシャープに仕上げられている。

348は、外面の調整が磨滅のため観察できない。内面は、ユビナデとユビオサエにより仕上げられている。突帯は、端部がシャープに仕上げられているが、下辺の突出はわずかである。

349は、体部1段分のみ残存する。外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面の調整は、磨滅のため観察できない。上側はストロークの長いヨコハケ、下側は直立する静止痕となっている。

350・351・353・354は、体部1段と突帯1条が残存する。

350の体部外面はヨコハケにより仕上げられ、ハケが器面から離れた痕が認められる。上端には円形透かしの一部が認められる。突帯は、断面形が変則的な台形をなし、退化傾向にある。351は、外面がヨコハケ、内面がナデにより仕上げられている。ヨコハケの一部にはハケ目に対して斜行する静止痕が認められる。突帯は、断面形が台形をなすが、上端が低く、突出度はわずかである。

353は、外面がヨコハケにより仕上げられている。内面は磨滅のため観察できない。体部片下端には円形透かしの一部が残存する。

354は、外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は斜方向のハケとナデにより仕上げられている。ハケ目の溝内には、赤色塗布が認められる。

352は、体部の小片で突帯は残存しない。外面はヨコハケにより仕上げられている。また、外面には2本の弧線からなる



第278図 352線刻拓影

線刻が認められ(第278図 写真図版222)、船を表現したものと考えられる。なお、内面の調整は磨滅のため観察できない。

355～365は、体部の小片である(写真図版222～224)。

355は、外面に鋸形に平行する線刻が認められる。356は、外面に鋸形をなす2本の平行する線刻が認められる。357は、外面には2本の弧状をなす線刻が認められる。船を表現した可能性も考えられる。

358は、外面に鋸形をなす2本の平行する線刻が認められる。356と同文である。359は、U字形をなす線刻が認められる。

360は、1本の直線と2本の弧状をなす線刻が認められる。361は、T字形をなす2本の直線からなる線刻が認められる。362は、1本の直線からなる線刻が認められる。ただし、当片の線刻は浅く、幅も狭く、他の個体の線刻とは特徴を異にする(写真図版223)。363は、外面がヨコハケにより仕上げられ、静止痕が認められる。364の外面には山形をなす3本の線刻が認められる(写真図版224)。365は、「X」字形の一部と考えられる線刻が認められる(写真図版224)。線刻の下側には突帯の剥離痕が認められる。

(4) 底部片(図版49～図版52 観察表21～23)

366は、底部から3段目にかけて残存する。2段目には、円形の透かしが1箇所残存する。その側面は、ヘラ削りにより丁寧に仕上げられている。外面は、各段ともヨコハケにより仕上げられている。特に底部と2段目は、ストロークの長いヨコハケで、静止痕は認められない。内面は、ナデを基調とし、下端部付近に限りヨコナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が方形に近い台形をなし、両端部は丸みを帯びている。

367は、底部から1段目突帯まで残存する。底部は、内外面ともハケにより仕上げられている。さらに、内面下端付近はユビオサエにより整形されている。底部下面は未調整で、圧痕が認められる。突帯は、断面台形をなすが、突出度はわずかである。

368～403は、底部のみ残存する。

368は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は縦方向のナデと横方向のハケを基調とし、下端部はユビオサエにより仕上げられている。底部下面は弱いナデにより仕上げられているが、圧痕が認められる。369は、外面がハケ、内面がユビナデにより仕上げられている。外面は全体的に磨滅傾向にあるが、タテハケとヨコハケが認められる。底部下面は未調整で、圧痕が顕著に認められる。370は、外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。特に下端部内面は、強いヨコナデが加えられている。底部下面はナデにより仕上げられている。371は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面はナデを基調とし、下端部はユビオサエにより仕上げられている。底部下面から外面下端部にかけてはナデにより仕上げられている。

372は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がナデにより仕上げられている。また内面下端にはユビオサエ痕が顕著に認められる。底部下面は弱いナデが加えられている。373は、内外面ともハケにより仕上げられ、内面にはナデが加えられている。他の埴輪と比較して目の細かいハケ(7～8本/cm)が使用されている。底部下端付近は自重で肥厚気味である。底部下面は未調整であるが、内面は強いヨコナデ、外面はヘラ削りにより仕上げられている。

374は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は縦方向のナデを基調とし、下端部はユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整である。375は、下端から内湾気味に斜外方

に立ち上がり、器壁が厚く仕上げられている。内外面ともハケにより仕上げられている。底部下面はナデにより仕上げられている。376は、残存する範囲では斜上方に立ち上がる。外面はハケ、内面はユビナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整で、圧痕が顕著に認められる。また、底部付近内面は、自重による肥厚部がユビオサエにより整形されている。

377は、やや斜上方に立ち上がる傾向が認められる。外面はハケ、内面は強い縦方向のユビナデにより、仕上げられている。底部下面は未調整で、圧痕が認められる。378は、内面が縦方向、外面が横方向を主体としたハケにより仕上げられている。さらに、内面下端には強いヨコナデが加えられている。また、底部下面は未調整である。なお、当個体の底部には径1.8cmの小穴が1箇所開けられている。379は、内面がナデにより仕上げられ、下端部はヨコナデが加えられている。外面は、タテハケの後横方向を主体としたハケにより仕上げられている。出土植輪のなかでも細かいハケ目である(10~11本/cm)。底部下面は未調整である。380は、底部が直立し、外面がタテハケの後下端部をヨコナデ、内面が斜方向のハケにより仕上げられている。下面はナデが加えられている。

381は、内面および下端部から下面にかけて、ナデにより仕上げられている。全体的に粗い仕上げである。外面も、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられているが、粗いハケ目である。382は、外面がタテハケ、内面がナデとユビオサエにより仕上げられている。特にユビオサエは、下端部で顕著である。底部下面は未調整で、圧痕が顕著に認められる。

383は、内外面ともタテハケにより仕上げられている。さらに内面は、ナデとユビオサエが加えられ、ユビオサエは下端部付近で顕著に認められる。底部下面は未調整で、ヘラ先状の圧痕が認められる。384は、外面がタテハケ、内面がナデにより仕上げられている。特に下端部はユビオサエが顕著である。底部下面は未調整で、圧痕が認められる。

385は、外面がタテハケ、内面がナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下面はナデにより仕上げられている。386は、内外面とも細かい縦方向のハケにより仕上げられている。さらに、内面下端にはナデが加えられている。また、底部下面は未調整で、圧痕が認められる。387は、外面がヨコハケにより仕上げられ、静止痕が認められる。ハケ目に対して直交するものとやや斜行するものとが認められる。内面は縦もしくは斜方向のハケの後、部分的にナデが加えられている。底部下面は弱いナデにより仕上げられている。388は、直線的に開く傾向にある。外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、ヨコハケには静止痕が認められる。静止痕は少なくとも3周以上に及ぶものと考えられる。ハケ目が細かい点特徴的である。内面は、ナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整である。

389は、内外面とも細かいハケとナデにより仕上げられている。また、下端部内面は強いヨコナデが加えられている。底部下面はナデにより仕上げられている。390は鉢形をなし、内外面および下面がナデにより仕上げられている。また、内外面ともわずかにハケが認められる。391は、内外面ともナデにより仕上げられ、外面下端にはヨコナデが加えられている。また、底部下面は未調整で、圧痕が認められる。392は、内外面とも磨減傾向にあるが、外面がハケ、内面がナデにより仕上げられている。底部下面はナデが加えられている。393は、内面がナデにより仕上げられ、下端部には強いユビオサエが加えられている。外面は磨減傾向にあるが、わずかに縦と横方向のハケ目が認められる。また、底部下面は未調整で、圧痕が認められる。

394は、内外面とも磨減が著しいが、下端部付近内面がユビオサエとナデ、同外面がヨコナデにより仕上げられている。また、底部下面は弱いナデが加えられているが、溝状の窪みが認められる。395は、内

外面とも磨減が著しいが、下端部付近内面がユビオサエ、同外面がハケにより仕上げられている。また、底部下面は弱いナデが加えられている。396は、内外面とも磨減が著しいが、ナデが加えられている。底部下面もナデにより仕上げられている。397は、外面がハケ、内面がユビナデとユビオサエにより仕上げられている。特に、下端部から6cmのあたりが、ユビオサエ痕が顕著に認められる。底部下面は、ナデにより仕上げられている。

398は、内外面とも磨減が著しいが、内面にはナデとユビナデが認められる。底部下面はナデにより仕上げられている。399は、内外面ともナデを基調とし、下端部内面がユビオサエにより仕上げられている。また、外面下端部付近には、工具の当たりと考えられる横方向の痕跡（写真図版225）が認められる。下面はナデが加えられているが、一部半径5mmほどの窪みも認められる。400は、直立後外傾傾向にある。内外面および下面がナデにより仕上げられている。また、内面下端付近はユビオサエにより仕上げられている。401は、内面がユビオサエとナデ、外面がタテハケにより仕上げられている。また、底部下面は未調整で、粘土に継ぎ目が認められる。402は、内面がナデ、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。底部下面は、ナデにより仕上げられている。403は、外面がタテハケ、内面がナデにより仕上げられている。内面の調整は、磨減のため観察することができない。また、底部下面はナデが加えられている。

(5) 朝顔形埴輪（図版53・54・56 観察表23・24）

404・405・416の3個体である。

404は、口縁部上半・口縁部下半～肩部・体部を図上で復元したものである。結果として、口縁部から体部まで残存する。口縁部から体部にかけては、黒斑が認められる。

体部は2段目から4段目まで残存し、4段目に円形の透かしが2箇所残存する。各段とも外面は縦の後横方向のハケ、内面は横方向を主体としたハケにより仕上げられている。3段目を除いては、静止痕は認められない。3段目の静止痕はハケ目に対して直交するが、数段におよぶものと考えられる。比較的ストロークの長いヨコハケである。また、内面の突帯に相当する箇所については、突帯貼り付けに伴うナデの痕が認められる。

突帯は、3条とも残存するが、いずれも断面台形をなし、上下を挟み込むようなヨコナデにより貼り付けられている。405よりは、突出度はわずかである。

肩部は半球形をなし、内外面とも横方向を主体としたハケにより仕上げられている。1箇所へラ描が認められる（写真図版225：a）。そのモチーフは不明である。

口縁部は複合口縁をなし、複合部外面に突帯が貼り付けられている。外面は縦方向、内面は横方向を主体としたハケにより仕上げられている。また、1次口縁外面には赤色塗布が顕著に認められる。

405は、底部を除いて体部から口縁部にかけて約1/2残存する。体部は、肩部を含めて4段残存する。口縁部上段と体部各段に黒斑が認められる。2段目と4段目には円形の透かしが開けられているが、各段1穴のみ残存する。両段の透かしは千鳥に配され、焼成前に外側から内側へ開けられている。

下側3段は円筒形をなし、外面は縦もしくは斜方向のハケを1次調整としている。2次調整は、ヨコハケにより仕上げられているが、全体的にやや粗く、各段の中央部には1次調整のタテハケが顕著に観察できる。ヨコハケは、2段目・4段目に静止痕が認められる（写真図版227：a）。両段とも上下2段に静止痕が認められるが、上下は一直線状をなすものではない。このため、Bb種ヨコハケと考えられる。

肩部は、タテハケの後にヨコハケにより仕上げられている。ヨコハケは連続するものではないが、静止痕は認められない。一部に直線状の線刻が認められるが、部分的な残存にとどまり、その内容は不明である。

体部各段の境は断面台形の突帯が貼り付けられている。高さ1.20cmと突出した突帯で、上下を挟むようなヨコナデにより仕上げられている。このため、端面はわずかに凹線状をなしている。

口縁部は複合口縁状をなし、各段とも大きく外反する。複合部外面には、断面台形の突帯が貼り付けられている。外面は縦方向のハケにより、内面は横方向を主体としたハケにより仕上げられ、最後にナデが加えられている。また、端部はヨコナデにより仕上げられ、明確な端面が形成されている。

416は、肩部から体部にかけて残存する。4段目突帯と、頸部突帯の剥離痕の存在から、朝顔形植輪と判断したものである。肩部から体部にかけて黒斑が認められる。

体部は3段分残存し、2段目に円形の透かしがわずかに残存する。復元径は5.5cm～6cmである。外面はタテハケを1次調整としている。2次調整はヨコハケであるが、4段目はわずかに観察できる程度である。2段目と3段目については、残存する限りにおいて静止痕は認められず、ストロークの長いヨコハケとなっている。突帯は全体的に突出しており、端面は凹線状をなす。

肩部は完存するが、頸部突帯は剥離痕のみ残存する。タテハケを基調とし、2次調整として部分的にヨコハケが認められる。また、線刻が認められるが、一部が残存するのみで、全体像は不明である。

(6) 口縁部片・頸部片 (図版54～56 観察表23)

406は、頸部から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の延長上に2次口縁がつくられ、その境外面がわずかに突帯状をなす。口縁部外面は1次口縁・2次口縁ともにタテハケにより仕上げられている。内面は、1次口縁がナデ、2次口縁がタテハケにより仕上げられている。頸部は、内面がナデにより仕上げられ、外面には突帯の剥離痕が認められる。また、口縁部外面には、赤色塗布が認められる。

407は、2次口縁と口縁部突帯が残存する。1次口縁の延長上に2次口縁がつくられている。1次口縁と2次口縁の境外面には、断面台形をなす突帯が貼り付けられている。外面はタテハケとナデ、内面はハケにより仕上げられ、最後に端部がヨコナデにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置の内面には、ユビオサエ痕が認められる。

408・410・411は、2次口縁が残存する。

408は、1次口縁の端部やや内側に2次口縁が載せられている。外面は、縦方向のハケの後、端部がヨコナデにより仕上げられている。内面は雨ざらし痕が顕著である。410の下端は1次口縁との接合面となっており、キザミ目が認められる。1次口縁の上端部に2次口縁が載せられていたものと考えられる。外面はタテハケにより仕上げられているが、内面は雨ざらし痕により調整は観察できない。外面のハケは、11～12条/cmと大変細かいハケ目である。最後に、端部がヨコナデにより仕上げられている。

411は、外面はほぼ全面に赤色塗布が認められる。下端部断面にはキザミ目が認められる。内面はハケとナデにより仕上げられているが、外面の調整は磨滅のため観察できない。最後に、端部がヨコナデにより仕上げられている。

409は、1次口縁上端から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の延長上に2次口縁が載せられ、その境に断面台形をなす突帯が貼り付けられている。外面は1次口縁・2次口縁ともにタテハケ、内面は斜方向のハケにより仕上げられている。最後に、2次口縁端部がヨコナデにより仕上げられている。また、

口縁部外面には、赤色塗布が認められる。

412は、頸部から肩部にかけて残存し、頸部には突帯が貼り付けられている。内面ともナデにより仕上げられている。突帯は緩やかな三角形をなし、ヨコナデにより貼り付けられている。

413は、頸部から口縁部にかけて残存する。頸部には断面三角形の突帯が貼り付けられている。内外面ともナデを基調とし、突帯がヨコナデにより貼り付けられている。

(7) 肩部片 (図版56 観察表23・24)

414は体部の小片である。外面には「○」状の線刻が認められる。内外面ともナデにより仕上げられている。

415は、肩部から体部4段目にかけて残存する。4段目外面は、タテハケにより仕上げられている。肩部外面は、ナデとハケにより仕上げられている。内面は、肩部から体部にかけて横方向のユビナデにより仕上げられている。

(8) 壺形埴輪 (図版56～58 観察表24)

417は、肩部とその下端の鈎の一部が残存する。残存する突帯の規模から、壺形埴輪と判断したものである。内外面ともナデにより仕上げられ、内面にはユビオサエ痕も認められる。外面には直線状の線刻が綾杉状に描かれている(写真図版229)。色調・胎土・線刻の特徴等から、175と同一個体の可能性が考えられる。

418は、肩部とその下端の突帯が残存する。残存する突帯の規模から、壺形埴輪と判断したものである。肩部はかなり扁平な半球形をなし、底部にかけて大きく内傾する。肩部は、外面がハケ、内面がヨコナデにより仕上げられている。肩部外面の一部にわずかに赤色塗布が認められる。

419は、底部上側から肩部の一部にかけて残存し、両者の境には鈎が貼り付けられている。底部上端から肩部にかけて大きく膨らみ、その最大部に鈎が貼り付けられている。底部外面はヨコハケ、内面はタテハケにより仕上げられている。また、底部には円形の透かしの一部が残存する。

肩部は、内面がユビオサエにより仕上げられている。外面は磨滅傾向にあるが、わずかにハケ目が認められる。断面観察の結果を合わせると、鈎下端部とその上部の成形において、時間差が認められる。鈎は、ヨコナデにより貼り付けられているものと考えられる。この箇所の内面は、ユビオサエ痕が顕著である。

420は、底部から口縁部にかけて残存する。ただし、口縁部は1次口縁のみの残存で、当該部位の上下側は図上復元によっている。底部は斜外方へほぼ直線的のび、相対する2方向に楕円形の透かしが開けられている。ただし、透かしが開けられた高さは、約2cmずれている。外面はヨコハケ、内面はタテハケにより仕上げられている。外面のヨコハケは、上側はストロークの長いヨコハケ、以下はB種ヨコハケにより仕上げられ、静止痕が認められる(写真図版227:c)。また、外面下端部にはタテハケ、内面下端部付近には弱いヨコナデが加えられている。

肩部はやや扁平な半球形をなし、底部との境外面には鈎状の突帯が貼り付けられている。外面は、上半が縦方向、下半が横方向のハケにより仕上げられ、最後に弧状に線刻が加えられている(写真図版227:b)。また、この線刻の中心部には径3mmの刺突文が認められる。縦方向のハケについては、他の部位より明らかに細かい点特徴的である。内面は、突帯貼り付け位置においてユビオサエが顕著に認められ、

他はナデにより仕上げられている。底部との境をなす突帯は、上面から側面にかけてはヨコナデにより、下面是ユビオサエの後ナデにより、それぞれ仕上げられている。

頸部は、内外面ともナデにより仕上げられている。外面には、突帯が貼り付けられていたようであるが、剥離痕のみで突帯は残存していなかった。口縁部は1次口縁のみ残存する。外面はタテハケにより仕上げられているが、内面は剥離が顕著で調整は観察できない。1次口縁上端部には刻み目が認められ、ここに2次口縁が載せられていたものと考えられる。

421は、底部から頸部にかけて残存する。底部外面はタテハケ、内面はユビオサエの後ナデにより仕上げられている。また、底部下端は内外面ともヨコナデが加えられている。下面もナデが加えられている。なお、上辺がほぼ直線状をなす透かしの一部が認められる。逆半円形、もしくは逆三角形をなしていたものと考えられる。

底部と肩部の境をなす鐙は、剥離痕のみ認められる（写真図版227:d）。なお、この剥離面には斜方向のハケ目が認められる。また、鐙貼り付けの際の割り付けと考えられる沈線が認められる。

肩部は、外面が横方向のナデ、内面が横方向のハケにより仕上げられている。また、頸部内面はナデにより仕上げられている。頸部外面には突帯の一部が残存する。正確な断面形は復元できない。

422は、底部上側から肩部の一部にかけて残存し、両者の境には鐙が貼り付けられている。底部上端から肩部にかけて大きく膨らみ、その最大部に鐙が貼り付けられている。底部外面はナデ、内面はハケとナデにより仕上げられている。また、底部には円形の透かしの一部が残存する。

肩部は、内面がユビオサエとナデにより仕上げられている。断面観察の結果を合わせると、鐙下端部とその上部の成形において、時間差が認められる。

鐙は、ヨコナデにより貼り付けられている。この筒所の内面は、ユビオサエ痕が顕著である。

423は、底部上部を中心に残存し、上端部には鐙が残存する。底部外面はタテハケ、内面は縦方向のナデにより仕上げられている。また、底部には円形透かしの一部が残存する。復元径は約8cmである。鐙は、ユビオサエとナデにより整形され、上面を中心にヨコナデにより貼り付けられている。

424は、底部から肩部の一部にかけて残存し、両者の境には鐙が貼り付けられている。底部外面はタテハケの後ヨコハケ、内面は上半がナデ、下半がタテハケにより仕上げられている。また、底部下面はナデが加えられている。底部と肩部の境をなす鐙は、ヨコナデにより仕上げられている。

肩部は、内面がユビオサエとハケにより仕上げられている。特に、鐙貼り付け位置内面にはユビオサエ痕が顕著に認められ、断面の観察結果と合わせると、鐙下端部で成形上の時間差が認められる。なお、肩部外面の調整は、磨減のため観察できない。

10. 南渡土堤

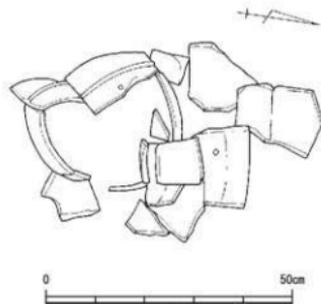
(1) 出土状況

全体的に小片が散乱した状態で出土している。また、出土量も多くはない。このなかで、h22とh23が比較的良好な状態で出土している（第279図・第280図）。

h22 前方部と南渡土堤が接合する付近の周濠底から出土している（第231図）。水鳥形埴輪28の南側に隣接して出土している。前方部基底石から約80cm、南渡土堤基底石からは約1.60m離れている。口縁部から3段目までがほぼ完存した状態で落ち込み、その場で押し潰された状態で出土している（第279図写真図版146:⑥）。h22の位置からは、前方部1段目に伴うものと判断されるが、他の埴輪片との接合

関係から、南渡土堤に樹立されていたものと考えられている。428が該当する。

h23 前方部との接合部に位置する。前方部1段目斜面と南渡土堤西側斜面の接合部、谷状となった位置にあたり、その転石層中から出土している。比較的大きな破片が1m四方の範囲に集中して出土している(第280図 写真図版146:⑦)。大半が朝顔形埴輪(495)で、ここに倒れ込んだものと考えられる。この他、円筒埴輪(428)の一部も出土している。さらに、盾形埴輪(1147)も出土している。

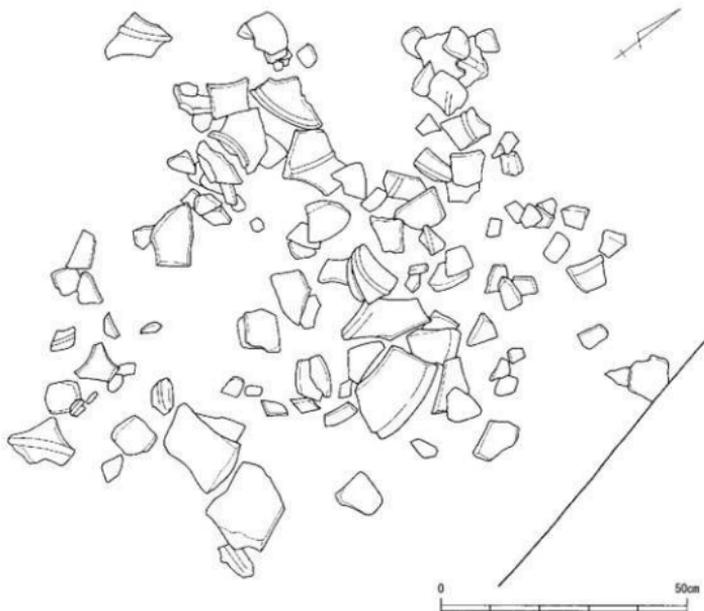


第279図 h22 埴輪出土状況

(2) 円筒埴輪 (図版59・60 観察表24・25)

425～427は、口縁部が残存する。

425は、わずかに開き気味に立ち上がり、端部がヨコナデにより外方へつまみ出されている。内外面ともナデを基調とし、最後に端部がヨコナデにより仕上げられている。426は、体部から直立気味に立ち上



第280図 h23 埴輪出土状況

がり、端部外端部を中心としたヨコナデにより、端部が横方向に引き出されている。このため、端部は断面が鋭角な三角形をなす。内外面とも剥離が顕著であるが、わずかにハケ目が認められる。427は、体部から外反気味に立ち上がり、端部が肥厚し玉縁状をなす。内外面とも磨減が著しく、調整は観察できない。口縁端部の一部に赤色塗布が認められる。

428は、口縁部から3段目まで残存する。体部から口縁部にかけて直立傾向にあり、口縁部がわずかに外傾傾向にある。体部から口縁部の各所に黒斑が認められるとともに、口縁部と4段目の一部で赤色塗布が認められる。

口縁部は、内外面とも斜方向を主体としたハケの後、口縁外端部を中心とした強いヨコナデにより仕上げられている。この結果、明確な上端面が形成されている。また、径1.7~2cmの小穴が1穴あけられている(写真図版228:a)。このほか、線刻が認められるが、多くは欠失している。

体部は、外面がヨコハケ、内面がタテハケ(4段目)とヨコハケ(3段目)により仕上げられている。外面のヨコハケは、静止痕が比較的明確に観察でき、ハケ目に直交するもの(第281図中央)と斜行するもの(第281図右側)とが認められる(写真図版228:b・c)。

4段目には、円形の透かしが2箇所に開けられている。2穴はほぼ相対する位置関係にあるが、わずかにずれている。

突帯は、上下からつまむナデにより整形され、断面形は台形傾向のM字形をなす。突出が顕著である。突帯剥離面においては、突帯貼り付けのための沈線が認められる(写真図版228:b)。

429と430は、口縁部が残存する。

429は、斜外方に広がる口縁部に対して、端部が短く外反する。上端部をつまむようなヨコナデにより、垂直な端面が形成されている。内外面とも縦方向を主体としたハケにより仕上げられている。最後に、口縁端部がヨコナデにより仕上げられている。また、内面には、一部工具の当たりが認められる。

430は、口縁部が直線的に立ち上がり、外端部をつまむようなヨコナデにより、外端部が外方へ引きだされている。外面はタテハケの後ヨコハケにより、内面はハケにより仕上げられている。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。なお、外面のヨコハケには複数の静止痕が認められるが、ハケの当りが弱い静止痕である。

431は、体部4段と突帯3条が残存する。胎土・色調等の特徴から、430と同一個体と考えられる個体で、実測後1個体として復元している(写真図版229)。最下段と上から2段目に円形の透かしが開けられていることから、最下段は2段目、上から2段目は4段目と考えられる。したがって、最上段は口縁部にあたるものと考えられる。なお、4段目と2段目の透かしの位置関係は子鳥ではなく、約45°ずれている。3段目を中心に黒斑が認められ、4段目と4段目突帯の一部には赤色塗布が認められる。さらに、



第281図 428拓影

口縁部には直線状の線刻が認められる。外面は、各段ともタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。口縁部と4段目には、斜行する静止痕が認められる。一方、3段目のヨコハケは、波打つようなストロークの長いヨコハケである。内面は、口縁部と4段目が斜方向の、3段目が横方向の、2段目が縦方向のハケにより仕上げられている。突帯は、3条とも断面形が台形をなし、2段目と3段目の突帯端面は斜行している。

432は、口縁部が残存する。斜外方に広がる口縁部に対して、端部がわずかに外反する。内端部をつまむようなヨコナデにより、明確な端面が形成されている。外面はタテハケ、内面はナデにより仕上げられ、最後に口縁端部がヨコナデにより仕上げられている。また、内面には平行する2本の弧状をなす線刻が認められる(写真図版229)。

433～435は、口縁部の小片である。

433は、外方に開く口縁部に対して、端部が上方へヨコナデによりつまみ上げられている。外面はヨコハケの後斜方向のハケ、内面はヨコハケにより仕上げられ、最後に端部がヨコナデにより仕上げられている。

434は、外方に開く口縁部に対して、端部が外方へつまみ出され、逆L字形をなす。外面はヨコハケとタテハケ、内面はナデとハケにより仕上げられ、最後に端部がヨコナデにより仕上げられている。435は、直立する口縁部に対して、端部がヨコナデにより外方へつまみ出され、逆L字形をなす。内外面ともナデを基調とし、最後に端部がヨコナデにより仕上げられている。

436～438は、口縁部が残存する。

436は、斜外方に広がる口縁部に対して、端部が短く屈曲する。ヨコナデにより、明確な端面が形成されている。内外面とも調整は観察できない。外面には、赤色塗布が部分的に認められる。437は、斜外方に広がる口縁部に対して、端部が短く屈曲する。上端部をつまむようなヨコナデにより、内傾する端面が形成されている。内外面の調整は、ともに磨減が著しく観察できない。口縁端部外面には、赤色塗布が認められる。438は、口縁部が短く外反する。上端部をつまむようなヨコナデにより、垂直な端面が形成されている。内面はナデにより仕上げられている。外面は、磨減が著しい。

(3) 体部片(図版60～62 観察表25～27)

439～441は、体部2段と突帯1条が残存する。

439の外面は、上段がヨコハケ、下段がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。各段のヨコハケは、静止痕が認められず、波打つようなヨコハケである。内面は磨減が著しいが、わずかにハケ目が残存する。突帯は、断面形がM字形に近い台形をなす。440は、内外面ともハケにより仕上げられ、最後に内面にナデが加えられている。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなすが、下端部が低く、斜下方に傾いた状態をなしている。441は、外面がヨコハケ、内面がナデにより仕上げられている。特に下段はストロークが長いヨコハケである。突帯は、断面台形をなすが、全体的に丸味を帯びている。

442と443は、体部1段と突帯1条が残存する。442は、外面がタテハケの後ヨコハケにより、内面がナデを基調とし、部分的にハケ目が認められる。突帯は、突出度は高くないが、下端幅が他の突帯より広い傾向にある。443の調整は、磨減が著しく内外面とも観察できない。突帯は、断面形が台形をなし、その一部に赤色塗布が認められる。

444と445は、体部1段と突帯2条が残存する。444は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がナデとタ

テハケにより仕上げられている。突帯は、2条とも断面台形をなすが、上段と下段とでは断面形が異なる。下段の方が突出傾向にある。また、上段の突帯上面にはハケ目が部分的に認められる。

445は、内面がナデとユビオサエにより仕上げられている。特に、上段突帯貼り付け位置の下側内面は、ユビオサエが顕著である。外面の調整は、磨減が著しく観察できない。突帯は、2条とも断面台形をなし、上段・下段ともに突出度が低い傾向にある。また、上段突帯の剥離部分において割り付け用の沈線が認められる。

446は、体部2段と突帯1条が残存する。内面は強い縦方向の板ナデにより仕上げられている。外面はタテハケにより仕上げられている。突帯は、断面形がM字形に近い台形をなす。

447と448は、体部1段と突帯1条が残存する。447の外面はタテハケにより、内面はナデにより仕上げられている。ただし、そのナデは、突帯貼り付け位置を基準に、より上側は横方向、下側は縦方向に施されている。突帯断面は、M字形に近い台形をなす。448の体部外面には線刻の一部が残存する。体部外面は磨減が著しく、調整は観察できない。内面はハケの後ナデにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置下側の内面にはユビオサエ痕が顕著に認められる。突帯は、断面形が方形に近い台形をなし、強いヨコナデにより貼り付けられている。

449は、体部2段と突帯1条が残存する。外面は磨減が著しいが、わずかにハケの痕跡が認められる。内面は、ナデとユビオサエにより仕上げられている。突帯は、断面台形をなすが、上端面の幅が狭く、退化傾向にある。

450と452は、体部1段と突帯1条が残存する。450の外面はタテハケの後ヨコハケにより、内面はハケの後ナデにより、仕上げられている。突帯は、断面形が方形に近い台形をなす。452は、外面がヨコハケにより、内面がハケの後弱いナデにより、仕上げられている。また、突帯貼り付け位置の内面は、ヨコナデにより仕上げられている。外面のヨコハケは、波打つ傾向にあり静止痕は認められない。突帯は、断面形が台形をなすが、下端が低く退化傾向にある。

451・454・455は、体部2段と突帯1条が残存する。451と454の内外面の調整は、磨減が著しく観察できない。451の突帯は、断面形が長方形に近く、突帯高が1.05cmと突出している。454の突帯は、断面形がM字形に近い台形をなす。455は、内面がナデにより仕上げられている。外面の調整は、磨減が著しく観察できない。突帯は、断面形がM字形に近い台形をなす。

453は体部の小片である。外面はヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。外面突帯側面を中心に、赤色塗布が残存する。

456は、体部1段と突帯1条が残存する。体部外面はヨコハケ、内面はハケの後ナデにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置の内面には、ユビオサエ痕が顕著に認められる。突帯は、断面方形をなし、強いヨコナデにより貼り付けられている。

457～459は、体部2段と突帯1条が残存する。

457の内面はハケにより仕上げられているが、外面の調整は磨減が著しく観察できない。458は、渡土堤と前方部の接合部から出土している。下段には円形の透かしの一部が残存する。外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられているが、下段には静止痕が認められる。静止痕は2本認められるが、1本はハケの当りが弱く、わずかに認識できる程度のものである。内面はナデを基調とし、突帯貼り付け位置の内面は弱いヨコナデにより仕上げられている。また、その下側はユビオサエが顕著である。突帯は断面形が方形に近い台形をなすが、下側端部は上端部より低くなっている。459の内面はナデにより仕上

げられている。外面は、上段がヨコハケ、下段がタテハケにより仕上げられている。上段のヨコハケは連続せず、ハケ原体が一旦離れている箇所が認められる。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突出傾向にある。

460・462・463は、体部1段と突帯1条が残存する。

460の外面はヨコハケにより、内面はハケの後弱いナデにより、それぞれ仕上げられている。外面のヨコハケには、静止痕が認められる。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突出傾向にある。462の体部外面はヨコハケ、内面はハケの後ナデにより仕上げられている。外面のヨコハケには静止痕が認められる。内面のハケは外面より粗いハケが使用されている。また、突帯貼り付け位置上側の内面にはエビオサエ痕が顕著に認められる。突帯は、断面台形をなし、上端より下端のほうが低くなっている。463の体部外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。静止痕が認められる。内面は、ハケの後ナデが加えられている。また、突帯貼り付け位置の内面下側には、エビオサエ痕が顕著に認められる。突帯は、断面形が方形に近い台形をなしている。

461・464・465は、体部2段と突帯1条が残存する。

461は、内面がハケの後ナデにより仕上げられている。外面はヨコハケにより仕上げられているが、上段では静止痕が認められるのに対して、下段ではハケが器表面から離れている。突帯は、断面形が台形をなすが、退化傾向にある。464は、外面上段・下段ともにヨコハケにより仕上げられている。上段には弱い静止痕が認められ、下段にはタテハケも認められる。内面は、ハケを基調とし、突帯貼り付け位置内面下側には強いナデが加えられている。突帯は、断面形が三角形をなす。突帯側面を中心に赤色塗布が認められる。また、下段には円形透かしの一部が残存する。465は、内面がナデにより仕上げられている。外面は磨減が著しく、調整は観察できない。突帯は、断面形が台形をなすが、やや退化傾向にある。外面には赤色塗布が認められる。

466と467は、体部1段のみが残存する。466外面は縦方向のハケを基本とし、部分的にヨコハケが加えられている。さらに、径1.3cmの円形竹管文が4.5cmの間隔で認められる（写真図版230）。体部の残存は全体の1/4に限られるが、当初は16個あったものと推定される。内面は、エビオサエの後ハケおよびナデにより仕上げられている。467の外面はヨコハケにより仕上げられている。円形透かしの一部が認められる。

469は、体部2段と突帯1条が残存する。下段には弧状をなす線刻が認められる（写真図版230）。船を表現している可能性も考えられる。また、線刻内には赤色塗布が残存する。外面は、ナデを基調とするが、上段の一部にはハケ目が認められる。内面は、斜方向のハケにより仕上げられている。突帯は、下端が低く、退化傾向にある。

468と470は体部の小片である。468の外面はヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。外面のヨコハケには静止痕は認められない。470は体部の小片である。外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、2本の直線からなる線刻が加えられている（写真図版231）。内面はハケとナデにより仕上げられている。

471は、体部2段と突帯1条からなる小片である。外面はヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が台形をなし、突帯高1cmと比較的突出している。外面には赤色塗布が認められる。

472は、体部1段と突帯1条からなる。外面はヨコハケ、内面は斜方向のハケにより仕上げられている。特に外面のヨコハケには静止痕が認められる（写真図版230）。突帯は、裾部のみが残存する。

473～475は、体部2段と突帯1条からなる。

473の外側はヨコハケ、内側はタテハケにより仕上げられている。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなすが、全体的に丸味を帯びている。474は、外面上段がヨコハケ、下段がナデにより仕上げられている。ヨコハケは波打つようなヨコハケで、静止痕は認められない。内側はナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が台形をなすが、突帯高5mmと退化傾向にある。475は、外面上段がヨコハケにより仕上げられている以外、内外面とも磨減が著しく、調整は観察できない。突帯は、断面形が台形をなすが、全体的に丸みを帯びている。突帯側面および上段ハケ目内には赤色塗布が認められる。

476は、体部の小片である。小片のため図化できなかったが、外面には「X」字状の線刻が認められる(写真図版231)。

(4) 底部片(図版62～64 観察表27・28)

477～494の18個体出土している。

477は、底部から2段目にかけて残存する。底部には、長方形をなす線刻が認められる(第282図 写真図版231)。内外面ともハケを基調とし、底部下面にはナデが加えられている。なお、2段目外面のハケは、縦方向と横方向が認められる。

478～494は、底部のみ残存する。

478は、下部からやや内湾気味に立ち上がっている。外面はタテハケ、内側はナデとユビオサエにより仕上げられている。また、内側の一部にはハケ目がわずかに認められる。底部下面はナデにより仕上げられている。479は、斜上方に直線的に開く傾向にある。外面はヨコハケ、内側はナデおよびユビオサエにより仕上げられている。外面は磨減傾向にあり、ヨコハケの単位は不明瞭である。480は、鉢形をなす。外面が全体的に磨減傾向にある。このなかで、縦方向の強いナデ痕が1条認められる。内側はユビオサエにより仕上げられている。481の調整は、内外面とも磨減が著しく観察できない。ただし、内側下端はユビオサエにより仕上げられている。また、底部下面はナデにより仕上げられている。482の外面はタテハケ、内側はユビオサエと縦方向のナデにより仕上げられ、下端部付近にはユビオサエ痕が認められる。下面もナデにより仕上げられている。

483は、底部が自重により内側に大きく肥厚している。外面は縦方向のハケにより仕上げられているが、磨減傾向にあり単位は不明である。内側は、縦に近い斜方向のハケの後、部分的にナデが加えられている。また、内側底部付近は、ユビオサエが加えられている。484の内側はナデを基調とし、下端部はユビオサエにより仕上げられている。外面の調整は、磨減が著しく観察できない。底部下面はナデにより仕上げられている。

485は、タテハケの後ストロークの長いヨコハケにより仕上げられている。内側は、ユビオサエとナデにより仕上げられ、粘土紐痕も認められる。486は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。ヨコハケは、静止痕が認められず、一旦ハケが器面から離れている。内側は、磨減・剥離が著しいが、ナデ痕が認められる。底部下面はナデが加えられている。



第282図 477線刻拓影

487は、外面がタテハケ、内面が斜方向のエビナデにより仕上げられ、下端部付近にはユビオサエ痕が認められる。下面は未調整である。488は、下端部から斜外方に直線的のびている。外面はタテハケ、内面はナデにより仕上げられている。下面もナデにより仕上げられている。489外面の調整は、磨滅のため観察できない。内面はナデとハケにより仕上げられている。底部下面は未調整である。

490は、底部から斜外方に直線的のびている。外面はタテハケ、内面は縦方向を主体としたナデにより仕上げられている。下面もナデにより仕上げられている。491は、やや外反気味に立ち上がる傾向にあり、外面はハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。ハケは、タテハケの後ヨコハケが施されている。底部下面は未調整で、圧痕が多く認められる。

492は、下端部から内湾気味にのびている。外面下端部付近はナデ、内面はユビオサエと縦方向のナデにより仕上げられている。下面もナデにより仕上げられている。493は、内外面ともナデにより仕上げられている。底部下面は未調整である。494は、内外面ともナデにより仕上げられている。底部下面は、ナデが加えられている。

(5) 朝顔形埴輪 (図版64・65 観察表28)

495と496の2個体が出土している。

495は、口縁部から肩部にかけて残存する。肩部下側の突帯の特徴から、朝顔形埴輪と判断したものである。

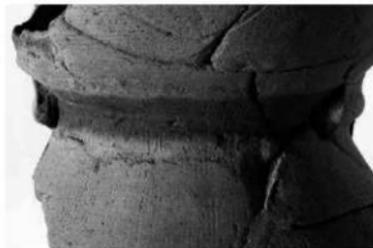
口縁部は、1次口縁と2次口縁の下半部が残存する。1次口縁の上端部延長上に2次口縁を接合させ、両者の接合部外面には断面台形の突帯が貼り付けられている。内面は、ハケを基調とし、1次口縁と2次口縁の接合部を中心にナデが加えられている。外面は、1次口縁がタテハケの後ナデ、2次口縁がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、最後に突帯がヨコナデにより仕上げられている。

頸部は、内面がナデにより仕上げられ、外面には断面三角形の突帯が貼り付けられている。突帯の剥離箇所では、割り付け用の凹線が認められる(第283図)。1次口縁のタテハケの後、肩部にヨコハケが施され、その後凹線が引かれている。

肩部は、外面がヨコハケ、内面が縦方向のエビナデにより仕上げられている。内面下半はハケの後ナデにより仕上げられている。下端には、断面台形の突帯が貼り付けられている。

496は、頸部から3段目にかけて残存する。4段目突帯の特徴および頸部外面の突帯から、朝顔形埴輪と判断したものである。頸部は、内面がナデにより仕上げられ、外面には突帯が貼り付けられている。突帯の断面形は、三角形傾向にあり、全体的に丸味を帯びている。肩部は、外面がナデ、内面がユビオサエとナデを基調とし、部分的にハケが加えられている。

体部は、4段目・3段目とも外面がナデにより仕上げられている。ただし、4段目外面にはハケ目がわずかに残存する。内面は、4段目・3段目ともハケを基調とし、部分的に縦方向のナデが加えられている。残存する2条の突帯は、いずれも断面形が長方形に近い台形をなし、突出傾向にある。その他、4段目には円形の透かしが1箇所残存する。



第283図 495頸部

(6) 口縁部片・頸部片 (図版65・66 観察表28)

497～504が出土している。

497は、2次口縁が残存する。内面がヨコハケ、外面がタテハケにより仕上げられている。最後に、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

498は、1次口縁上端から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の延長上に2次口縁がつくられ、その境界面に突帯が貼り付けられていたようであるが、剥離痕のみで残存しない。外面は、1次口縁・2次口縁ともにタテハケにより仕上げられている。内面は、1次口縁が斜方向のハケ、2次口縁がタテハケにより仕上げられている。最後に、2次口縁端部がヨコナデにより仕上げられている。また、口縁部外面には、赤色塗布が認められる。

499～501は、2次口縁が残存する。

499は、内面がヨコハケ、外面がタテハケにより仕上げられている。最後に、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。500は、内面が横方向、外面が縦方向のハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。501は、内面が横方向のハケにより仕上げられている。端部はヨコナデにより仕上げられている。

502と503は、1次口縁と2次口縁の接合部を中心に残存する。1次口縁の延長上に2次口縁がつくられ、その境界面には断面台形をなす突帯が貼り付けられている。502の1次口縁内面はナデ、2次口縁内面はハケにより、仕上げられている。503の調整は、内外面とも磨滅傾向にあり観察できない。

504は、1次口縁が残存する。下端は頸部まで残存し、外面には突帯の剥離痕が認められる。口縁部外面はタテハケ、内面はハケにより仕上げられている。また、外面上端部にはヨコナデ痕が認められ、2次口縁に近いものと考えられる。さらに、外面には鍵形をなす線刻が認められるが、他の線刻と比較して彫りが弱いものである (写真図版232)。

(7) 肩部片 (図版66 観察表29)

505～509の5個体が出土している。

505は、頸部から肩部にかけて残存する。外面がハケ、内面がユビオサエとナデにより仕上げられている。頸部外面は、突帯の剥離痕が認められる。

506は、肩部から体部(3段目)にかけて残存する。肩部は、内面がユビオサエとユビナデにより仕上げられている。外面の調整は、雨ざらし痕により観察できない。体部は、外面がタテハケにより仕上げられている。外面は、4段目がタテハケ、3段目がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。突帯は2条残存するが、いずれも断面台形をなす。

507は、肩部下端を中心に残存する小片である。下端には突帯の剥離痕が認められる。内面はナデにより仕上げられているが、外面の調整は磨滅のため観察できない。一部、右側に開くコ字形をなす線刻が認められる (写真図版232)。

508と509は、頸部から肩部にかけて残存する。508の頸部には突帯が貼り付けられている。内面はナデにより仕上げられているが、外面は磨滅により観察できない。突帯は断面台形をなし、ヨコナデにより貼り付けられている。肩部外面には4本の直線からなる線刻が認められる (写真図版232)。

509の頸部には、比較的突出した断面台形の突帯が貼り付けられている。内面はナデ、外面はヨコハケにより仕上げられている。

(8) 壺形埴輪 (図版66 観察表29)

510～514の5個体が出土している。510と511は肩部の鐮から、512～514は、底部の透かしの存在から、それぞれ壺形埴輪と判断したものである。514は、小片のため図化はできなかった。

510は、肩部とその下端の突帯の一部が残存する。肩部外面は横方向を主体としたハケの後ナデにより仕上げられている。内面は、下半が強いユビナデ、上半がナデにより、仕上げられている。また、鐮貼り付け位置の内面には横方向のハケが加えられている。

511は、底部と肩部の境をなす鐮状の突帯片である。突帯はヨコナデにより貼り付けられ、内面はナデにより仕上げられている。

512は、底部片である。内面はナデにより仕上げられ、外面はタテハケの後ストロークの長いヨコハケにより仕上げられている。底部下面は未調整で、圧痕が認められる。透かしの復元径は7cmである。

513は、外面がタテハケにより仕上げられ、その後部分的に横方向のヘラナデが加えられている。内面は斜方向のハケにより仕上げられ、底部付近にはナデが加えられている。また、外面の上端部には円形透かしの一部が残存し、その復元径は6.4cmである。

514は、底部の小片である(写真図版233)。底部片に円形の透かしが認められたため、壺形埴輪と判断したものである。透かしの復元径は7cmである。内面は縦方向のユビナデにより仕上げられているが、外面の調整は磨滅のため不明である。

(9) 丹後-因幡型円筒埴輪 (図版67 観察表29)

515～518の4個体が出土している。

515は、体部(4段目)から口縁部にかけて残存する。半球形をなす肩部に対して、口縁部が短く上方に直立する。口縁端部は、外端部を中心としたヨコナデにより断面三角形の突帯状をなし、外傾する端面が形成されている。体部には線刻が認められる(写真図版233:a)。

体部は、内面がヨコハケの後ナデにより、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。外面のヨコハケは、ストロークの長いヨコハケである。肩部は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がハケの後縦方向のユビナデにより仕上げられている。内面のハケは、下端部が横方向、その後上部にかけて縦方向に施されている。最後に、口縁部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

体部と肩部の境には、断面台形の突帯がヨコナデにより貼り付けられている。突帯貼り付け位置の内面には、強い横方向のユビナデ痕が認められる。また、体部下端には、3段目突帯の剥離痕が認められる。

516は、肩部から口縁部にかけて残存する。肩部に対して口縁部が短く上方に屈曲し、内端部を中心としたヨコナデにより外傾する端面が形成されている。内面はナデとユビオサエにより、外面はヨコハケにより仕上げられている。最後に、口縁部が内外面ともヨコナデにより仕上げられている。

517は、肩部から口縁部にかけて残存する。肩部に対して口縁部が短く上方に屈曲し、外端部を中心としたヨコナデにより内傾する端面が形成されている。内面はナデにより仕上げられ、口縁部は内外面ともヨコナデにより仕上げられている。肩部外面の調整は、磨滅のため観察できない。

518は、肩部から口縁部にかけての小片である。肩部に対して口縁部が短く上方に屈曲し、水平な端面が形成されている。肩部内面はナデにより仕上げられ、口縁部は内外面ともヨコナデにより仕上げられている。肩部外面の調整は、磨滅のため観察できない。

11. 南外堤

(1) 概要

外堤から出土した埴輪はわずかである。出土した埴輪も、体部片・底部片と肩部片に限られる。出土層位は、直上からではなく、その周辺から出土したものである。外堤上に樹立された状況を示すような状態で出土した埴輪は認められない。

(2) 体部片 (図版67 観察表29)

519の1点が出土している。

519は、体部2段と突帯1条が残存する。下段には円形の透かしの一部が残存する。さらに、上段には直線と弧線からなる線刻が認められる(第284図写真図版234)。一部の残存に限られるが、船を表現している可能性が考えられる。外面は、両段ともにヨコハケにより仕上げられている。内面は、ハケとナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなす。



第284図 519線刻拓影

(3) 底部片 (図版67 観察表29)

520と521の2点が出土している。

520は、外面がタテハケの後ヨコハケにより、内面がユビオサエの後ナデにより、それぞれ仕上げられている。下面は未調整で、溝状の圧痕が認められる。

521は、内外面とも磨減が著しいが、ナデを基調に仕上げられている。また、内面下端部付近はユビオサエが顕著に認められる。下面もナデにより仕上げられている。

(4) 肩部片 (図版67 観察表29)

522の1点が出土している。

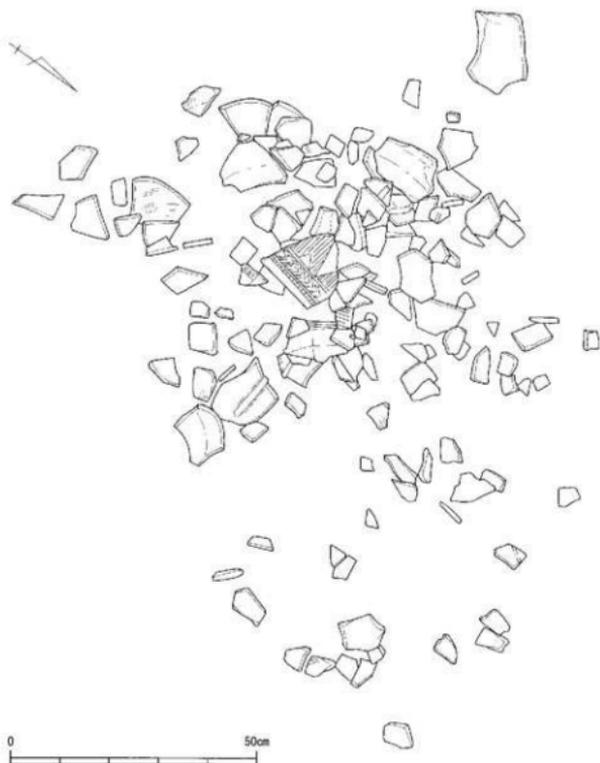
522は、肩部の小片である。内面はナデにより仕上げられ、外面には突帯が貼り付けられている。突帯断面は長方形に近い台形をなし、ヨコナデにより貼り付けられている。

12. 南周濠

(1) 出土状況

南造り出し・南渡土堤・前方部1段目斜面付近から出土した埴輪を除くと、良好な状態で出土したのはh24に限られる。

h24は、南外堤裾部から約3m北側の、周濠底から出土している。南造り出し東辺の南側延長上にあたる位置である(第231図)。ただし、南造り出し南辺からは約10m離れている。1m×1.20mの範囲に、やや大ぶりの埴輪片が集中して出土している(第285図 写真図版144:⑥)。これらの埴輪片の大半は丹



第285図 h24 埴輪出土状況

後-因幡型円筒埴輪 (541) で、底部を除いてほぼ完形に復元される1体分からなる (図版70)。周濠底に落ち込み、その場で押し潰されたものと考えられる。

唯一、上記埴輪片の中央部に盾形埴輪が1点 (1148) 出土している。盾形埴輪については、1片のみで、他に接合する個体は出土していない。

(2) 円筒埴輪 (図版68 観察表30)

523と524の2体が出土している。いずれも、口縁部がわずかに残存する。

523の端部は短く外反し、内外面ともヨコナデにより仕上げられ、明確な端面が形成されている。また、外面には複数の直線からなる線刻が認められる (写真図版234)。524は、直立する口縁部に対して端部が短く逆L字形に屈曲する。垂直な端面が形成され、端部外面は帯状をなす。内外面に対するナデの後、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

(3) 体部片 (図版68 観察表30)

525～527は、体部2段と突帯1条が残存する。

525の下段には円形の透かしの一部が残存する。内外面ともハケにより仕上げられている。特に上段のヨコハケは、ハケ原体が数回器面から離されている。また、上段の中央には、ハケの後の沈線状の当りが認められる。526の外側は、上段がヨコハケ、下段がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、各段のヨコハケには静止痕が認められる (写真図版234)。静止痕のラインがやや斜行傾向にある。内面はハケとナデにより仕上げられている。突帯は、断面台形をなし、その高さが1.15cmと突出している。527の外側は、上段がタテハケ、下段がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は、縦方向と斜方向のハケの後ナデが加えられている。突帯は、断面形が台形をなし、比較的突出している。なお、上段には円形透かしが1箇所残存する。

528は、体部1段と突帯1条が残存する。外側は、タテハケの後ヨコハケ、内面はハケとナデにより仕上げられている。また、円形透かしの一部が残存する。ほぼ全面に赤色塗布が認められる。

529は、体部2段と突帯1条が残存する。下段の一部に赤色塗布が認められる。外側はハケを基調とし、下段のヨコハケには静止痕が認められる。内面はタテハケの後ナデが加えられている。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、その高さが1cmと突出する。

(4) 底部片 (図版68 観察表30)

530～535の6点が出土している。

530は、底部付近が内傾し、その上側は内湾気味に立ち上がる。内面はユビオサエの後ハケとナデ、外側はタテハケにより仕上げられている。特に内面のユビオサエは、下端部付近で顕著に認められる。底部下面は弱いナデが加えられている。531は、内面がハケの後ナデにより仕上げられ、外側がタテハケにより仕上げられている。底部下面は弱いナデが加えられている。532は、底部から外傾気味に立ち上がる。内面下端部付近はユビオサエ、外側はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。ヨコハケはストロークの長いハケである。底部下面はナデが加えられている。

533は、内面がナデ、外側がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。底部下面にはナデが加えられている。また、上端部には透かしの一部が残存する。534は、内面がハケとナデにより仕上げられ、下端部付近はユビオサエが顕著に認められる。外側の調整は、磨減が著しく観察できない。底部下面は未調整で、粘土紐痕が認められる。535は、外側がタテハケ、内面がナデにより仕上げられ、下端部付近にはユビオサエ痕が認められる。下面は未調整で、キザミ状の圧痕が認められる。

(5) 朝顔形植輪 (図版69 観察表30)

539は、2段目から口縁部にかけて残存する。体部に黒斑が認められるとともに、口縁部外面全面に赤色塗布が認められる。

口縁部は複合口縁状をなすと考えられるが、残存するのはその1次口縁に限られる。内外面ともヨコハケを中心に仕上げられている。ただし、静止痕等は認められない。

肩部は、口縁部側・体部側とも突帯により区画されている。内外面ともヨコハケにより仕上げられている。外側は、ストロークの長いヨコハケである。ただし、肩部上半内面はナデを基調としている。

体部は、各段とも外側はヨコハケを基調としている。特に3段目においては、静止痕を確認すること

ができる。内面は、4段目から肩部にかけては斜方向のハケにより仕上げられているが、3段目以下はハケの後ナデにより仕上げられている。また、4段目には円形の透かしが相対する位置に2箇所開けられている。さらに、4段目においては直線的な線刻が施されているが、ユビナデにより部分的に消されている（写真図版237：a）。その他、2段目下端に円形透かしの一部が1箇所残存する。

各段の突帯は、断面台形をなし、強いヨコナデにより貼り付けられている。また、突帯が貼り付けられた箇所の内面はやや膨らみ、器壁が厚くなる傾向が認められる。

(6) 口縁部片（図版69 観察表30）

536と537の2点が出土している。いずれも2次口縁が残存する。

536は、下端部外面に突帯の剥離痕が認められる。外面はタテハケ、内面は斜方向のハケの後ナデにより仕上げられている。最後に、2次口縁端部がヨコナデにより仕上げられている。537は、内面がハケ、外面がナデにより仕上げられている。さらに、内面には5本の直線からなる線刻が認められる。

(7) 肩部片（図版69 観察表30）

538は、内面下半がハケ、上半がユビオサエとナデにより仕上げられている。両者の境が粘土紐の継ぎ目となっており、さらにハケの後にその表面を覆うように粘土紐が継ぎ足されている（写真図版234）。このため、ハケ目が施された部位まで整形後、やや時間をあけてその上部が継ぎ足されていたものと考えられる。外面については、内面のような不連続部分が認められないことから、粘土が継ぎ足された後にハケにより仕上げられたものと考えられる。

(8) 壺形埴輪（図版70 観察表30）

540は、肩部を中心に残存する。底部と肩部の境をなす突帯の剥離痕の規模から、壺形埴輪と判断している。底部は、外面がナデ、内面がハケの後ナデにより仕上げられている。肩部は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がハケの後横方向のナデにより、それぞれ仕上げられている。頭部は内面がユビオサエにより仕上げられ、外面には断面台形の突帯が貼り付けられている。突帯高が1.10cmと突出している。肩部外面には、平行する2本の線刻が直交する位置関係に描かれている（写真図版234）。

(9) 丹後-因幡型円筒埴輪（図版70 観察表31）

541は、底部を欠く以外、口縁部から1段目まで残存する。3段目に楕円形の透かしが相対する2方に開けられ、また肩部外面には線刻が認められる。

やや扁球傾向にある肩部に対して、口縁部が短く外反する。肩内外面のハケの後、口縁部内外面がヨコナデにより薄く仕上げられている。このヨコナデにより、外傾する端面が形成されている。弧線と直線からなる線刻が認められる（第286図）。

体部は4段からなる。4段目を除いては、外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。4段目については、ヨコハケのみで静止痕が認められる。やや左側へ傾斜してい



第286図 541線刻

る。内面は、底部・2段目が横方向の、3段目・4段目が斜方向の、ハケを基調として仕上げられている。体部各段の境には突帯が貼り付けられているが、その断面形は同じといえるものではない。しかし、全体的に突出傾向にある点は共通している。

4段目内面のハケと肩部内面のハケは連続せず、4段目のハケの後に施されている。器壁も体部に対して極端に厚くなっている。このため、底部から4段目まで整形後、時間をあけて肩部以上が成形されたものと考えられる。

13. 前方面北側1段目斜面

(1) 出土状況

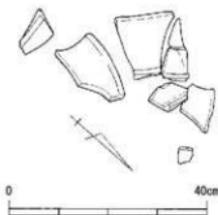
1段目斜面自体の残存状況が良好ではなかったため、埴輪の出土量も限られる。葺石残存箇所においては、小片が散乱した状態で出土している。



第287図 h25 埴輪出土状況

最もまとまって出土しているのが、北造り出しと北渡土堤に挟まれた斜面の上側である (h25: 第232図)。出土した地点は、すでに葺石自体が残存せず、墳丘面が露出した状態であった。この墳丘面直上から、埴輪片が3m×2mの範囲に散乱した状態で出土している (第287図)。

h26は、h25の西側に近接するもので (第232図)、一部は接合関係にある。残存する1段目斜面葺石の上端部にあたり、円筒埴輪(543)が出土している。出土地点においては、葺石の一部が残存するのみで、その墳丘面直上から出土している。口縁部から体部にかけて残存する円筒埴輪が、その場で押し潰された状態で出土している (第288図 写真図版45・46)。



第288図 h26 埴輪出土状況
写真図版45・46。

(2) 円筒埴輪 (図版71・72・77 観察表31・34)

542は、口縁部から2段目まで残存するものと、底部から2段目まで残存する2体からなる。両者は、出土位置・胎土・色調等の特徴から同一個体の可能性が考えられ、1個体に図上復元したものである。

体部から口縁部にかけて直立し、口縁部上半から端部にかけて大きく外反している。内端部を中心としたヨコナデにより、垂直な端面が形成されている。体部外面は、3段目・4段目ともにタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。体部内面は、タテハケとユビオサエにより仕上げられている。特に4段目外面においては、静止痕が比較的顕著に認められる (写真図版238:a)。ただし、その静止痕は、下段のみの可能性が考えられる。また2段目においても、その下端に静止痕が認められる。2段にわたり、2周以上の回転が考えられる。口縁部外面もタテハケの後ヨコハケ、内面はタテと斜方向のハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

突帯は4条残存するが、各段ともほぼ同規模で、断面形は方形に近い台形をなしている。また、4段目には、円形の透かしが2方向に開けられている。

底部は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がタテハケの後ナデにより仕上げられている。特に、底部外面のヨコハケにおいては、中段以下に静止痕が認められ、上段はストロークの長いヨコハケである。また、底部内面下端は横方向のヘラナデにより、底部下面はナデにより仕上げられている。

543は、口縁部から3段目まで残存する。体部から口縁部にかけて直立し、端部が外反している。口縁部に対して直交するヨコナデにより、外傾する端面が形成されている。外面は、3段目がヨコハケ、4段目と口縁部がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は、口縁部から3段目にかけてナデを基調とし、4段目には斜方向のユビナデが認められる。3段目と4段目突帯は、断面形が台形をなすが、下辺の規模が他の突帯と比較して大きい傾向が認められる。なお、出土位置・胎土・色調等の特徴から、544・545と同一個体の可能性が考えられる。

546は、口縁部から3段目まで残存する。直立する体部に対して口縁部が外側に開き、さらに端部は大きく外反している。外面は、3段目がヨコハケ、4段目がタテハケの後ヨコハケ、口縁部がタテハケにより仕上げられている。内面は、口縁部から3段目にかけて、ハケの後ナデにより仕上げられている。

547は、口縁部のみ残存する。外反する口縁部に対して端部が大きく外反している。端部は、ヨコナデにより丸く収められている。外面はヨコハケにより仕上げられているが、内面の調整は磨減のため観察できない。

548は、口縁部から4段目まで残存する。体部から口縁部にかけてほぼ直立し、端部がやや大きく外反している。端部は、外傾する端面が形成されている。口縁部・体部とも、内外面が磨滅のため調整は観察できない。

549は、口縁部から底部まで残存する。口縁端部と底部下端を欠くが、残存する段数から円筒埴輪と判断したものである。このため、口縁部と底部の規模等は不明である。

内外面の調整は、磨滅傾向にあるため観察することはできないが、4段目外面と底部内面にわずかにハケ目が認められる。また、2段目には円形透かしの一部が1箇所残存する。その他、突帯は4条残存するが、いずれも断面形が変形した台形をなし、全体的に丸味を帯びている。

596と597は、口縁部から4段目まで残存する。

596は、体部から口縁部にかけてほぼ直立し、端部が大きく外反している。端部は、口縁部に対して直交するヨコナデにより垂直な端面が形成されている。口縁部外面は、タテハケの後端部がヨコナデにより仕上げられている。内面は磨滅傾向にある。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突出傾向にある。

597は、体部から口縁部にかけてほぼ直立し、端部が大きく外反する。さらに端部は、下端部を下方につまみ出すようなヨコナデにより外傾する端面が形成されている。全体的に磨滅傾向にあるが、口縁部外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、最後に口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。なお、4段目突帯については、突帯は残存せず、剥離面のみ認められる。剥離面にはタテハケがわずかに認められる。その他、4段目には円形透かしの一部がわずかに残存する。

598と599は、口縁部のみ残存する。

598は、直線的にのびる口縁部に対して端部が短く外反している。端部は、ヨコナデにより丸く収められている。外面はヨコハケにより仕上げられているが、内面の調整は磨滅のため観察できない。599は、直立する口縁部に対して端部が大きく外反している。端部は、ヨコナデによりやや外傾する端面が形成されている。外面はヨコハケにより仕上げられているが、内面は磨滅のため調整は観察できない。

(3) 体部片 (図版71・73・77 観察表31・34)

544は、体部2段と突帯2条が残存する。543・545と同一個体の可能性が考えられることから、下段が1段目もしくは2段目の可能性が考えられる。

外面は、斜方向のハケの後ヨコハケ、内面はナデとユビナデを基調として仕上げられている。ヨコハケは連続したのではなく、原体が器面から離れている。なお上段の突帯については、剥離痕のみが認められる。残存する突帯の断面形は、方形に近い台形をなす。

この他、上段には方形透かしの一部が残存する。規模がわかるのは長辺のみで、8.70cmを測る。

550は、体部3段と突帯2条が残存する。外面は上段を除いてタテハケの後ヨコハケ、上段はヨコハケにより仕上げられている。特に中段のヨコハケは、ストロークの長いヨコハケである。内面はユビオサエとナデにより仕上げられている。上段の上端には円形透かしの一部が残存する。突帯は、断面台形をなすが、上段と下段ではその断面形は異なり、全体的に丸味を帯びている。

551は、体部2段と突帯2条が残存する。外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はナデを基調として仕上げられている。また、内面においては部分的に縦方向のハケ目が残存し、突帯貼り付け位置の下側にはユビオサエ痕が顕著に認められる。突帯は、断面台形をなすが、突出度が高くはなく、全体的に丸味を

帯びている。

552と600は、体部2段と突帯1条が残存する。

552は、外面がヨコハケ、内面がタテハケにより仕上げられている。突帯は、長方形に近い断面台形をなし、比較的突出している。出土位置・胎土・色調等の特徴から、555と同一個体の可能性が考えられる。600の内外面の調整は、磨減が著しく観察できない。突帯は、長方形に近い断面台形をなし、比較的突出している。上段外面には、半円形に残存する線刻が認められる。

(4) 底部片 (図版71・73・77 観察表31・34)

545・553～557・601～603の9点が出土している。

545は、底部のみ残存する。外面はヨコハケの後タテハケ、内面はナデにより仕上げられている。さらに内面下端はユビオサエにより整形されている。なお、外面のヨコハケとタテハケは異なる原体が用いられている。また、底部下面は未調整である。

553～555は、底部から2段目の一部にかけて残存する。

553は、底部外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がナデとユビオサエにより仕上げられている。2段目外面はヨコハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整である。

554は、底部外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がナデとユビオサエにより仕上げられている。ヨコハケには静止痕は認められず、原体が一旦器面から離れている。2段目外面はヨコハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。また、底部下面はナデにより仕上げられている。この他、2段目には円形透かしの一部が1箇所残存する。

555は、底部外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がユビオサエの後タテハケにより仕上げられている。ヨコハケの一部には静止痕が認められる。2段目外面はヨコハケ、内面はユビオサエの後ナデにより仕上げられている。底部下面は未調整で、凹凸が顕著である。

556と557は、底部のみ残存する。556外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はナデとユビナデにより仕上げられている。さらに、底部下面はナデが加えられている。557は、やや開き気味に直線的に立ち上がるが、内外面とも磨減のため調整は観察できない。また、底部下面についても同様である。

601は、底部から1段目突帯まで残存する。底部はやや開き気味に直線的に立ち上がる。外面はタテハケの後ヨコハケ、内面は縦方向のハケにより仕上げられ、下端付近はユビオサエ痕が顕著である。また、外面のヨコハケには突帯付近で静止痕が認められる。下面は未調整である。

602と603は、底部のみ残存する。602の内面はナデ、外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。下面もナデにより仕上げられている。603は、全体的に磨減傾向にあるが、内面にはタテハケの一部が残存する。また、下端内面にはユビオサエ痕が顕著に認められる。下面もナデにより仕上げられている。

(5) 口縁部片・頸部片 (図版74・78 観察表31・32・34)

558・562・604～606の5点が出土している。

558は、1次口縁上半から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の上端部やや内側に2次口縁が載せられ、1次口縁端が突帯状をなしている。1次口縁外面の調整は、磨減により観察できない。2次口縁外面はタテハケ、内面はナデの後ヨコハケにより仕上げられている。最後に、端部がヨコナデにより仕上

げられ、端面が形成されるとともに、下端部がわずかに突出する。

562は、頸部から1次口縁にかけて残存する。頸部には、断面鈍角三角形の突帯が貼り付けられている。外面はタテハケにより仕上げられているが、内面の調整は磨滅のため観察できない。口縁部外面には、赤色塗布が認められる。

604は、肩部上端から1次口縁下半にかけて残存する。肩部内面はユビオサエにより仕上げられているが、外面は磨滅のため観察できない。口縁部外面はタテハケ、内面はヨコハケにより仕上げられている。頸部外面には突帯が貼り付けられている。突帯は、ヨコナデにより斜方向に大きく引き伸ばされ、断面形は長方形をなし、かなり突出している。

605は、頸部から肩部にかけて残存する。内外面とも磨滅傾向にあるが、内面にはハケ目が部分的に残存する。また、頸部内面はナデにより仕上げられている。頸部外面には断面台形をなす突帯が貼り付けられているが、かなり退化傾向にある。

606は、肩部上半から頸部にかけて残存する。肩部内面はユビオサエとナデにより仕上げられ、外面はナデにより仕上げられている。さらに、線刻が加えられている（写真図版241：a）。頸部外面には断面方形をなす突帯が貼り付けられている。

(6) 肩部片（図版78 観察表34）

607の1点が出土している。

607は、肩部から体部（4段目）にかけて残存する。内外面の調整は、磨滅により観察できない。突帯は、断面形が台形をなすが、退化傾向にある。

14. 前方部北側3段目斜面

(1) 概要

出土した埴輪はわずかで、小片が散乱した状態で出土している。口縁部片と頸部片が出土している。

(2) 口縁部片・頸部片（図版74 観察表32）

559～561・563の4点が出土している。

559は、2次口縁が残存する。外面はタテハケ、内面は斜方向のハケ及びナデにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

560は、1次口縁上半から2次口縁下半にかけて残存する。1次口縁の延長上に2次口縁のび、その境に突帯が貼り付けられている。外面は1次口縁・2次口縁とも、タテハケにより仕上げられている。内面はヨコハケを基調とし、ナデが加えられている。また、口縁部外面には、赤色塗布が認められる。

561は、頸部から1次口縁にかけて残存し、頸部には断面鈍角三角形の突帯が貼り付けられている。内面はヨコハケにより仕上げられているが、外面の調整は観察できない。

563は、頸部を中心に残存する。肩部内面はユビオサエ、頸部内面はナデにより仕上げられている。頸部外面はタテハケにより仕上げられ、わずかに赤色塗布が残存する。突帯断面は鈍角三角形をなし、ヨコナデにより貼り付けられている。

(3) 肩部片 (図版74 観察表32)

564と565の2点が出土している。

564は、肩部のみ残存する。外面がヨコハケ、内面がヘラナデにより仕上げられている。突帯の貼り付け痕は認められない。外面全面に赤色塗布が認められる。565は、頸部から肩部にかけて残存する。肩部外面はヨコハケ、内面は強いユビナデとユビオサエにより仕上げられている。外面には、赤色塗布がわずかに認められる。

15. 前方部北側1段目テラス埴輪列

(1) 出土状況

先述したとおり、全体的に良好な状態では残存していない(第4章第2節)。I群からO群に分けられるが、K群とM群(H64)からは図化できる埴輪は出土していない。また、埴輪列に伴うことは明らかであるが、樹立位置を特定できない個体(N群～O群・I群～O群)が数点出土している。出土した埴輪は、円筒埴輪と底部片からなる。

(2) I群

H54～H59からなるが、H56から出土した埴輪は小片のため図化できなかった。

H54 底部片の592が出土している(図版77 観察表33)。592は、鉢形をなす。外面はタテハケ、内面はナデにより仕上げられている。さらに内面下端部はユビオサエが加えられ、下面は内側に大きく肥厚している。さらに下面にはナデが加えられている。

H55 底部片の577が出土している(図版75 観察表33)。577は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がナデにより仕上げられている。内面下端にはユビオサエ痕が認められる。底部下面にはナデが加えられている。

H57 底部片の587が出土している(図版76 観察表33)。587は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がタテハケにより仕上げられている。さらに内面下端には、やや強い横方向のユビナデが加えられている。底部下面にはナデが加えられている(写真図版240)。また、径2cmの小穴が1箇所に開けられている。

H58 572が出土している(図版75 観察表32)。1段目突帯まで残存し、底部からほぼ直線的に立ち上がる。外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はユビオサエの後ナデにより仕上げられ、下端部付近は横方向のユビナデが加えられている。また、外面のヨコハケはストロークが長く、ハケ原体は一旦器面から離されている。下面にはナデが加えられている。

H59 底部片の585が出土している(図版76 観察表33)。585は、外面がヨコハケ、内面が斜方向のハケにより仕上げられている。内面下端はユビオサエにより仕上げられている。底部下面には部分的にハケ目が認められる。

その他 円筒埴輪の568(図版75 観察表32)と、底部片の578(図版76 観察表33)が出土している。

568は口縁部の小片である。直線的にのびる口縁部に対して、端部がわずかに外反している。端部は、口縁部に直交するヨコナデにより仕上げられ、端部が形成されている。口縁部外面はタテハケにより仕上げられているが、内面の調整は、磨滅のため観察できない。

578は、やや外傾気味に直線的に立ち上がるが、内外面の調整は磨滅のため観察できない。下面にはナデが加えられている。

(3) J群

H60を中心に、小片が散乱した状態で出土している。ただし、H60と特定できる埴輪片は小片のため図化できなかった。その周辺から出土した3点が図化されている。

H60周辺 576・579・581が出土している（図版75・76 観察表32・33）。いずれも底部片である。

576はほぼ直立する。底部高が高く18.9cm残存するが、突帯の痕跡は認められない。内面はユビオサエの後タテハケにより仕上げられている。また、下端部付近にはユビオサエが加えられている。外面の調整は、磨滅のため観察できない。下面にはナデが加えられている。

579は、やや開き気味に立ち上がっている。外面はタテハケの後ヨコハケにより、内面はナデにより仕上げられている。さらに、内面下端はユビオサエにより整形されている。外面のヨコハケには静止痕が認められる。下面も部分的にナデにより仕上げられている。全体的に器壁が厚く、粗いつくりである。

581は、内外面とも磨滅傾向にあるが、外面にはハケ、内面にはナデの痕跡が認められる。また、内面下端はユビオサエにより整形されている。底部下面は未調整である。

(4) L群

H61～H63からなる。いずれも底部片が出土している。

H61 588が出土している（図版76 観察表33）。588は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がナデにより仕上げられている。また、下端部内面はユビオサエ痕が顕著である。底部下面はナデにより仕上げられている。

H62 594が出土している（図版77 観察表33）。594は、内外面の調整が磨滅により観察できないが、底部下面は未調整である。

H63 586が出土している（図版76 観察表33）。586は、内外面ともナデにより仕上げられている。底部下面もナデにより仕上げられているが、一部溝状の圧痕も認められる（写真図版240）。

その他 円筒埴輪の567（図版75 観察表32）と、底部片の582・589（図版76 観察表33）が出土している。

567は、口縁部の小片である。直線的にのびる口縁部に対して、端部が大きく外反している。端部は、口縁部に直交するヨコナデにより仕上げられ、垂直な端面が形成されている。口縁部外面はヨコハケにより仕上げられ、内面の調整は、磨滅のため観察できない。

582は、やや開き気味に立ち上がる。内外面の調整は、磨滅により観察できない。下面は未調整である。589は、内外面とも磨滅傾向にあるが、内面下端はユビオサエにより整形されている。底部下面はナデにより仕上げられている。

(5) N群

569・571・574・580・590・593・595が出土している（図版75～77 観察表32～34）。多くが小片で散乱した状態で出土しており、樹立位置の特定は困難な状況である。

569は、体部の小片である。直線からなる3本の線刻が認められる（写真図版239）。2本は鍵形に交わっている。

571は、体部2段と突帯1条が残存する。外面はヨコハケ、内面はナデとタテハケにより仕上げられている。外面のヨコハケにおいては、静止痕がわずかに認められる。また、突帯貼り付け位置内面には、

ユビオサエ痕が顕著に認められる。

574・580・590・593・595は、底部のみ残存する。

574は、内面がタテハケにより仕上げられている。内面下端にはやや強いヨコナデが、底部下面にはナデが、それぞれ加えられている。なお、外面の調整は磨滅のため観察できない。

580は、内外面の調整は磨滅により観察できない。下面にはナデが加えられている。590は、底部がやや外傾気味に直線的に立ちあがる。内面はタテハケを基調とし、下端部はユビオサエの後ヨコナデにより仕上げられている。また、下面にはナデが加えられている。

593は、やや外側に開き気味に立ちあがる。外面はタテハケとヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。内面下端はユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整である。595は、外面がタテハケ、内面がナデにより仕上げられ、内面下端はユビオサエにより仕上げられている。底部下面はナデにより仕上げられている。

(6) O群

H65～H67からなるが、H65については小片のため図化できなかつた。体部片と底部片が出土している。

H66 底部片の573が出土している（図版75 観察表32）。外面はタテハケの後ヨコハケ、内面下端はユビオサエにより仕上げられている。底部下面の調整は磨滅により観察できない。

H67 570（図版75 観察表32）と、583（図版76 観察表33）が出土している。

570は、体部2段と突帯1条が残存する。外面はヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置内面にはユビオサエ痕が顕著に認められる。下段には、円形の透かしの一部が残存する。

583は、直立する底部が残存する。外面はタテハケ、内面はナデにより仕上げられ、内面下端はユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整である。下端部には粘土が巻き足されたようで、その粘土組織が顕著に認められる。

その他 575（図版75 観察表32）が出土している。

575は、底部のみ残存し、直線的に立ち上がっている。内外面ともナデを基調とし、内面下端にはユビオサエが加えられている。下面も部分的にナデにより仕上げられている。

(7) N群～O群

底部片の584が出土している（図版76 観察表33）。584の内外面の調整は、磨滅により観察できない。

(8) I群～O群

円筒埴輪の566（図版75 観察表32）と、底辺部の591（図版77 観察表33）が出土している。

566は、口縁部のみ残存する。外側に開きながら直線的にのびる口縁部に対して、端部が水平方向に折り返されている。端部は、内外面をつまむようなヨコナデにより仕上げられ、端部が丸く仕上げられている。内外面とも磨滅のため調整は観察できないが、外面には「X」状の線刻が認められる（写真図版238）。

591は、全体的に内湾気味に立ち上がっている。外面はタテハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。また、下端部内面はユビオサエが顕著に認められる。下面は未調整である。

16. 石敷き遺構

(1) 出土状況

全体的に出土量は少ない。この中で、h27とh28の2箇所、埴輪が比較的良好な状態で、石敷き遺構直上から出土している。

h27 石敷き遺構中央やや東側（3区）から出土している（第232図）。石敷き遺構直上からの出土で、円筒埴輪（608・609）と体部片（612）が倒れ込み、その場で押し潰された状態で出土している（第289図 写真図版112：③）。その範囲は、東西85cm×南北50cmである。石敷き遺構中央部、石敷き上面が比較的平坦な箇所にあたる。

別個体として報告したが、同一個体の可能性が高いとした609と612は、h27から出土している。このため、出土位置・出土状況からもその可能性が高いものと考えられる。なお608については、口縁端部の特徴が異なることから、別個体と判断している。

h28 石敷き遺構東端付近（3区東端）から出土している（第232図）。北造り出し南東隅の西側にあたる。石敷き遺構直上からの出土で、1.20m×1.20mの範囲にやや散乱した状態で出土している（第290図 写真図版113：①）。基本的には、倒れ込んだ後に激しく押し潰されたものと考えられる。また、その出土位置から、造り出し側から倒れ込んだものと考えられる。なお、固化したのは613で、円筒系埴輪の底部から3段目までに限られるが、朝顔形埴輪の一部も出土している。

(2) 円筒埴輪（図版78・79 観察表34）

608は、口縁部から2段目まで残存する。体部から口縁部にかけてわずかに開き気味に立ち上がり、端部が短く屈曲している。端部は、ヨコナデにより外傾する面をもつ。体部から口縁部にかけては全体的に磨減傾向にあるが、3段目外面にはヨコハケが、4段目内面にはタテハケがわずかに認められる。

2段目には、円形の透かしが1箇所残存する。突帯は3条分残存するが、いずれも断面形が長方形に近い台形をなし、突出している。

609は、口縁部から3段目突帯まで残存する。直立する体部に対して口縁部が外反傾向にあり、端部はさらに短く外反している。端部には、外傾する端面が形成されている。

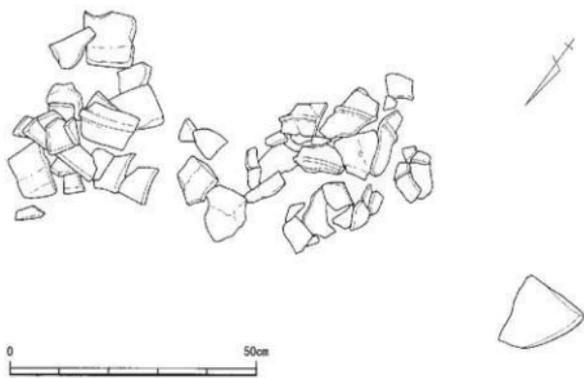
体部外面はヨコハケ、内面はタテハケの後ナデにより仕上げられている。口縁部外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はヨコハケにより仕上げられ、最後に口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

610は、口縁部が残存する。わずかに開き気味に立ち上がり、端部が短く屈曲する。端部は、口縁部に対して直交するヨコナデにより垂直な面をなす。内外面ともタテハケを基調とし、最後に端部がヨコナデにより仕上げられている。

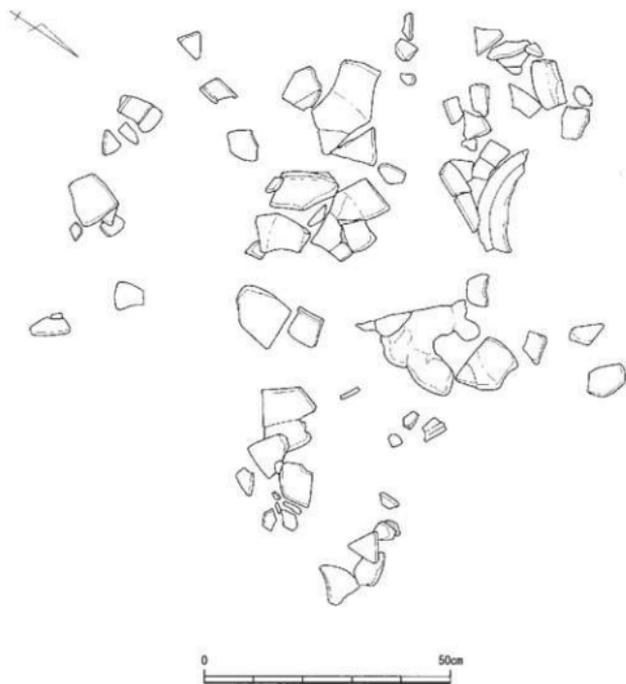
(3) 体部片（図版79 観察表34）

611と612が出土している。

611は、体部2段と突帯1条が残存する。内外面の調整は、磨減傾向にあり観察できない。上段外面には9本の直線からなる線刻が認められる（写真図版241）。下段には円形透かしの一部が残存する。



第289図 h27 埴輪出土状況



第290図 h28 埴輪出土状況

612は、体部3段と突帯2条が残存する。中段外面はタテハケの後ヨコハケ、上段外面はヨコハケにより仕上げられているが、下段の調整については磨滅のため観察できない。内面は全体的にハケの後ナデにより仕上げられている。また、下段の突帯貼り付け位置ではユビオサエ痕が、上段突帯貼り付け位置内面においてはナデの痕が顕著に認められる。

突帯は断面台形をなすが、上端部が突出している。また、中段には凹形透かしが残存し、その側面はヘラナデにより仕上げられている。出土位置・胎土・色調等の特徴から、609と同一個体の可能性が考えられる。

(4) 底部片 (図版79 観察表35)

613と614の2点が出土している。

613は、底部から3段目突帯まで残存する。外面は、底部から体部(2段目)にかけてヨコハケにより仕上げられている。内面は、全体的にユビオサエとナデにより仕上げられている。特に、突帯貼り付け位置内面と下端部付近はユビオサエ痕が顕著である。底部下面は未調整である。突帯は2条残存し、いずれも断面形が方形に近い台形をなし、端部がシャープに仕上げられている。

614は、底部のみ残存する。内外面の調整は磨滅により観察できないが、下端部内面はユビオサエにより仕上げられている。底部下面は弱いナデにより仕上げられている。

(5) 口縁部片・頸部片 (図版80 観察表35)

615～617の3点が出土している。

615は、1次口縁上端から2次口縁下半にかけて残存する。1次口縁の延長上に2次口縁がつくられ、その外面に突帯が貼り付けられている。内外面ともナデにより仕上げられている。また、2次口縁外面には線刻が認められる(写真図版241)。突帯は、断面形が方形をなすが、他の突帯と比較してやや退化傾向にある。また、突帯外面には赤色塗布が認められる。

616は、1次口縁上端から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の上端部より内側に2次口縁が載せられ、1次口縁端が突出し突帯状をなしている。1次口縁外面がタテハケにより仕上げられている以外は、磨滅により調整は観察できない。

617は、頸部から肩部にかけて残存し、頸部には断面三角形の突帯が貼り付けられている。頸部は内外面ともナデにより仕上げられている。肩部外面はハケにより仕上げられている。外面には赤色塗布が認められる。

17. 北造り出し

(1) 概要

上面においては、全体的に小片が散乱した状態で出土している。東側斜面および北東隅部で、まともに出土している(h29・h30)。

h29 造り出し東側斜面のほぼ中央部にあたる(第232図)。斜面の中位から上位にかけての葺石直上から、体部片(628)と肩部片(638)が出土している(第291図 写真図版147:①)。特に肩部片については、葺石上に倒れ、その場で押し潰された状態である。

なお、628と638の間には、直接的な接合関係を認めることはできなかったが、同一個体の可能性も考え

られる。

h30 北造り出し北東隅南側の周濠底にあたる(第232図)。618が出土している。底部を除き、ほぼ完存する個体が倒れ込み、その場で押し潰された状態で出土している(第292図 写真図版147:②)。他の個体の混入は認められない。また、底部付近が造り出し斜面裾部にほぼ接していることから、造り出し側から倒れ込んだものと考えられる。

(2) 円筒埴輪 (図版80・81 観察表35)

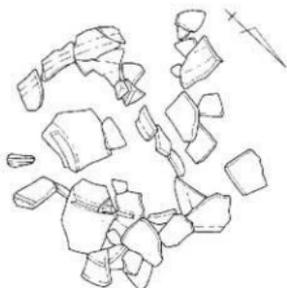
618~624の7個体が出土している。

618は、口縁部から底部上端部まで残存する。体部から口縁部にかけてはほぼ直立し、口縁端部が緩やかに外反している。端部は、内端部を中心としたヨコナデにより、外傾する端面を有する。体部から口縁部外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。特に、口縁部と4段目のヨコハケには、突帯間と同じ幅の静止痕が認められる(写真図版242:b)。突帯間を1周で施すヨコハケと考えられる。内面は、タテハケを基調とし、部分的にユビオサエが加えられている。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

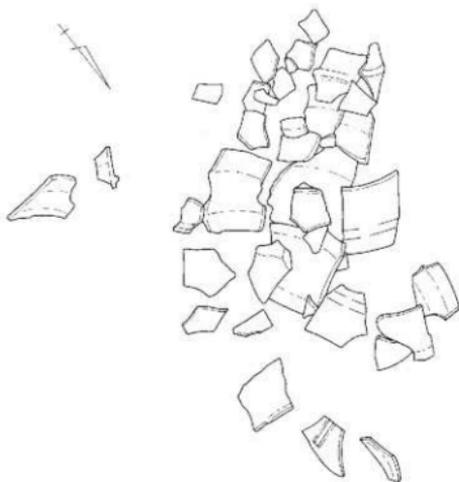
2段目と4段目には、円形の透かしが開けられている。4段目は2方向に開けられているが、完全に相対する位置関係にはない。2段目は1箇所のみ残存する。両段の透かしは、ほぼ千鳥の位置関係に配されている。

突帯は4条残存するが、いずれも断面形が方形に近い台形をなし、端部はシャープに仕上げられている。この他、口縁部外面には線刻が認められる(第486図 写真図版242:a)。内外面のハケが、17条/cmと細かい点がこの埴輪の特徴である。

619は、口縁部から4段目まで残存する。直立する体部に対して口縁部は外反傾向にあり、端部がより外反している。端部は、口縁部に対して直交するヨコナデにより、外傾する端面が形成されている。



第291図 h29 埴輪出土状況



第292図 h30 埴輪出土状況

外面は、口縁部・4段目ともにタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は、体部がナデとユビオサエ、口縁部がヨコハケにより仕上げられている。また、体部外面には数本からなる線刻が認められる(第485図)。突帯は1条残存するが、断面形が長方形に近い台形をなし、比較的突出している。

620は、口縁部から4段目まで残存する。体部から口縁部にかけてほぼ直線的のび、端部が短く外反している。端部は、上端部を中心としたヨコナデにより外傾する端面が形成されている。

全体的に磨滅傾向にあり、口縁部外面にはタテハケ、内面にはヨコハケがわずかに残存する。端部は内外面とも比較的強いヨコナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突出傾向にある。

621は、口縁部から4段目まで残存する。体部から口縁部にかけてほぼ外傾気味に直線的のび、端部が屈曲気味に外反している。端部は、口縁部に対して直交するヨコナデにより、外傾する端面が形成されている。全体的に磨滅傾向にあり、調整は観察できない。唯一、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突出傾向にある。

622は、口縁部の小片である。直立する口縁部に対して、端部が短く外反している。ほぼ垂直な端面が形成され、下端部は比較的シャープである。外面はタテハケ、内面はヨコハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。623は口縁部のみが残存する。直立する口縁部に対して、端部が短く折り曲げられている。やや内傾する端面が形成されている。外面はタテハケ、内面はヨコハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。624は口縁部のみが残存する。直立する口縁部に対して、端部がやや屈曲気味に外反している。端部内外面に対するヨコナデにより、外傾する端面が形成されている。口縁部内外面の調整は、磨滅により観察できない。

(3) 体部片(図版82 観察表35・36)

625～633の9点が出土している。いずれも体部2段と突帯1条が残存する。

625は、内面下段がタテハケ、上段がヨコハケにより仕上げられている。外面は、斜方向のハケの後ヨコハケにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置内面は、ナデにより仕上げられている。突帯は断面形が台形をなすが、突出度はわずかである。ただし端部はシャープである。

626は、内面がナデを基調とし、突帯貼り付け位置内面下側にはユビオサエ痕が顕著に認められる。外面はタテハケを中心に残存する。さらに、下段には矢印状をなす3本の線刻が認められる(485図)。

627は、内面がタテハケを基調とし、一部ヨコハケも認められる。外面は全体的に磨滅傾向にあるが、一部ヨコハケも認められる。突帯は断面台形をなし、上端部が突出している。また、突帯端部はシャープに仕上げられている。

628は、内面がナデ、外面がヨコハケを基調として仕上げられている。突帯貼り付け位置内面はユビオサエが顕著に認められる。突帯は断面台形をなし、比較的突出している。また、下段には円形の透かしの一部が残存する。その他、部分的に赤色塗布が認められる。

629は、全体的に磨滅傾向にあるが、ナデを基調としている。突帯は断面台形をなし、突出傾向にある。また、下段には円形透かしの一部が残存する。630は、下段外面にヨコハケが認められる以外は、磨滅傾向にあり、調整は観察できない。突帯は断面台形をなすが、やや退化傾向にある。

631は、内面がナデとユビオサエにより仕上げられている。外面は、下段がヨコハケにより仕上げられているが、上段は磨滅のため観察できない。突帯は断面形が方形に近い台形をなす。また、下段には円

形透かしの一部が残存する。さらに、上段には径1.20cmの小穴が1穴開けられている。632は、全体的に磨減傾向にあるが、内面はナデを基調としている。突帯は断面台形をなすが、退化傾向にある。633は、全体的に磨減傾向にあるが、内外面ともタテハケを基調としている。突帯は、断面形が方形に近い台形をなす。また、下段には円形透かしの一部が残存する。

(4) 底部片 (図版82・83 観察表36)

634～636の3点が出土している。

634は、底部のみ残存する。内面は縦方向の強いユビナデにより仕上げられている。外面の調整は、磨減により観察できない。下面は未調整である。

635は、底部がほぼ直線的に立ち上がる。内外面とも磨減傾向にあるが、外面にはわずかにハケが認められる。下面は、部分的に強い溝状の圧痕が認められる (写真図版243)。

636は、底部から1段目突帯まで残存する。底部はほぼ直線的に立ち上がり、器厚も一定している。内外面ともナデを基調として仕上げられている。特に内面は縦方向のナデが主体で、下端部付近および突帯貼り付け位内面はユビオサエ工が顕著である。下面は未調整で、粘土の継ぎ目が認められる。また、1段目突帯は断面形が長方形に近く、突出傾向にある。

(5) 口縁部片・頸部片 (図版83・84 観察表36)

637～639・641の4点が出土している。

637は、1次口縁と2次口縁の接合部の小片である。1次口縁の延長上に2次口縁を接合し、その接合部外面に突帯が貼り付けられている。突帯は、断面台形に仕上げられているが、器厚に対して薄く仕上げられている。外面はハケ、内面はハケの後ナデにより仕上げられている。

638は、頸部から肩部にかけて残存し、頸部には断面三角形の突帯が貼り付けられている。内外面ともナデにより仕上げられている。内面はナデとユビオサエを基調とし、部分的に強いユビナデも認められる。

639は、1次口縁下端から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の上端部やや内側に2次口縁が載せられ、1次口縁端部が突帯状をなしている。この1次口縁側の接合面には、刻み目が顕著に認められる。1次口縁・2次口縁外面がタテハケ、2次口縁内面がヨコハケにより仕上げられている。1次口縁内面の調整は、磨減により観察できない。640と同一個体の可能性が考えられる。

641は、1次口縁上端から2次口縁の一部が残存する。1次口縁の延長上に2次口縁がつくれ、両者の境外面には突帯が貼り付けられている。外面がタテハケ、内面がヨコハケにより仕上げられている。

(6) 壺形埴輪 (図版83・84 観察表36)

640・642・643の3点が出土している。

640は、口縁部を除いて完形に復元できた個体である。出土位置・胎土・色調等の特徴から、639と同一個体の可能性が考えられる。鉢形をなす底部に、扁球形の肩部を載せた形態である。また、肩部が底部に対して大きく膨らんだ形態をなし、製作においても両者間には時間差が認められる。

底部は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面は、全体的に磨減傾向にあるが、わずかにハケ目が認められる。さらに、下端部付近はユビオサエ工が顕著である。また、下面については

未調整である。この他、底部中位付近には円形の透かしが2箇所、相対する位置に開けられている。

肩部は、外面がヨコハケ、内面がヨコナデ（下半）とタテ方向の板ナデ（上半）により仕上げられている。下端部には鈎が貼り付けられている。また、上半部には径8mmの円形刺突が1箇所認められるが、器面から8mmの深さまでで、貫通はしていない（写真図版243：a）。

頸部は、内面がナデにより仕上げられているが、外面は縦方向のハケにより仕上げられている。外面には、突帯が貼り付けられている。突帯は、斜上方につまみだすようなヨコナデにより仕上げられ、断面形が長方形をなしている。胎土・色調等の特徴から、639と同一個体の可能性が考えられる。

642は、肩部とその下端の突帯の一部が残存する。残存する突帯の規模から、壺形埴輪と判断したものである。肩部外面はヨコハケにより、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。突帯貼り付け位置の上側を境に、製作に時間差が認められる。また、粘土も明らかに異なる。

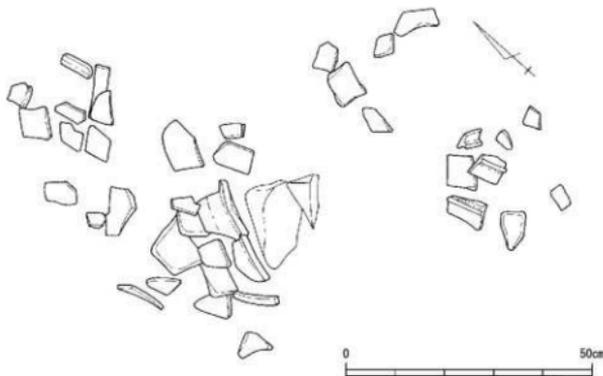
643は底部片である。底部片に円形の透かしが認められたため、壺形埴輪と判断したものである。内面はナデと斜方向のユビナデにより仕上げられ、外面はハケにより仕上げられている。底部下面は未調整である。

18. 北渡土堤

(1) 出土状況

全体的に出土量は少なく、小片での出土が目立つ傾向にある。特に、渡土堤上面から出土した埴輪はわずかである。このなかで、西側斜面の2箇所（h31・h32～h34）において、比較的多く出土している。

h31 渡土堤南部、前方部との接合部から3m北側の、斜面上側葎石直上から出土している（第232図）。円筒埴輪（647）の口縁部を中心に出土している。比較的小片で、50cmの範囲内から小片がまとまった状態で出土している（第293図 写真図版130：③）。出土位置・出土状態から判断して、渡土堤上から転落したものと考えられる。



第293図 h31 埴輪出土状況

この他、南側においても小片の出土が認められたが、体部片のみで図化には及んでいない。また、壺形埴輪の一部も出土しているが、復元・図化することはできなかった。

h32~h34 渡土堤中央部、西側斜面中央葺石直上から出土している(第232図)。円筒埴輪3体分(644・646・648)が出土している。特に、644が主体で、一箇所で押し潰された状態で出土している(第294図 写真図版130:④)。644と646は、ほぼ同じ位置から出土しているが、口縁端部の特徴が異なることから、別個体と判断している。これらも、渡土堤上から倒れ込んだものと考えられる。

(2) 円筒埴輪 (図版85~87 観察表36・37)

644と645は、口縁部から2段目まで残存する。

644は、体部から口縁部にかけてはほぼ直立し、端部が大きく外反している。端部は、ヨコナデにより外傾する端面が形成されている。体部から口縁部の調整は、内外面とも磨減傾向にあり観察できない。このなかで3段目外面に限り、わずかにタテハケの後ヨコハケが認められる。また、口縁端部は内外面ともヨコナデにより仕上げられている。

4段目には、円形透かしが相対する2方向に開けられている。また、口縁部と4段目には、わずかに竹管文が認められる(写真図版243:b)。突帯は3条残存するが、いずれも断面形が台形をなす。また、4段目突帯の剥離面においては、割り付け用と考えられる凹線状の強いヨコナデ痕が認められる。

645は、体部から口縁部にかけてはほぼ直立し、端部がやや大きく外反している。端部は、内端部を中心としたヨコナデにより、肥厚傾向にある。体部から口縁部は、内外面ともナデを基調として仕上げられている。4段目外面には、わずかにヨコハケが認められる。最後に、口縁端部がヨコナデにより仕上げられている。また、内面には、工具の当たりが認められる。

2段目と4段目には、円形透かしがそれぞれ2方向に開けられている。両段の透かしは、ほぼ千鳥の位置に配されている。また、3段目には線刻が認められる(写真図版244:a)。突帯は3条残存するが、いずれも断面形が長方形に近い台形をなし、顕著な突出傾向にある。また、各突帯の端部はシャープに仕上げられている。器壁が7mm~9mmと薄く仕上げられている点が、特徴的である。

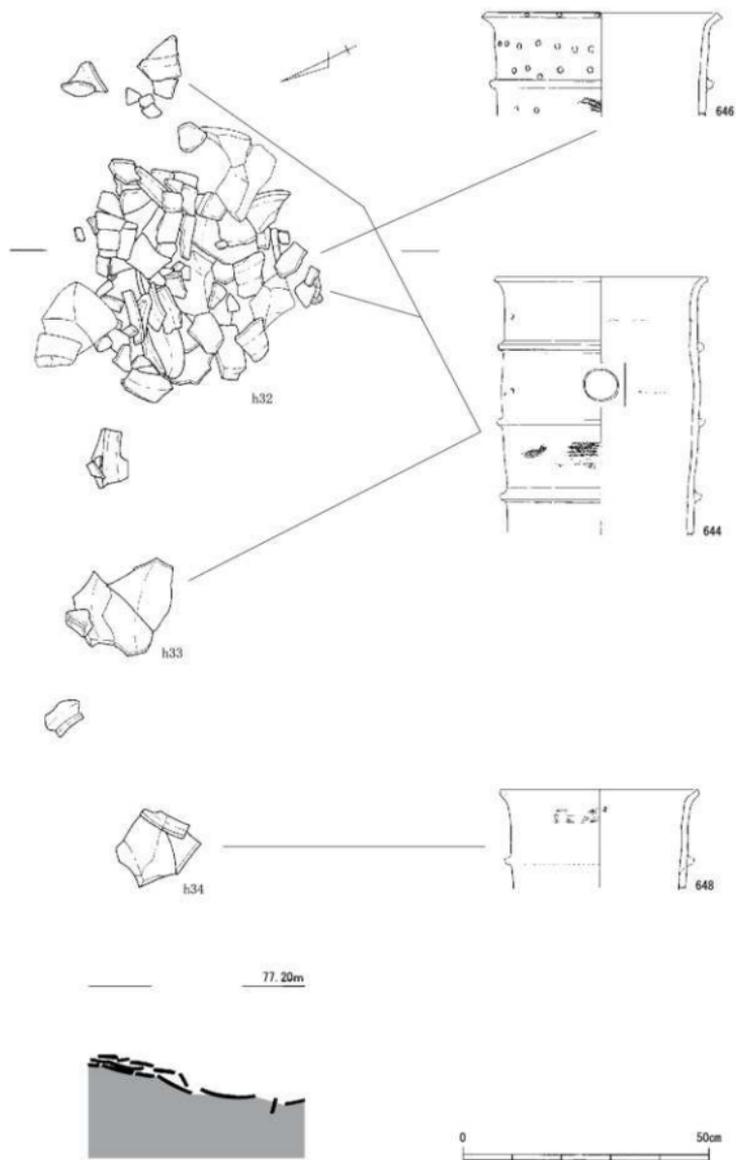
646~651は口縁部から4段目まで残存し、649を除き、体部から口縁部にかけてはほぼ直立している。

646は、端部が大きく外反し、下端部を中心としたヨコナデにより外傾する面が形成されている。全体的に磨減傾向にあり、調整を観察できるのは4段目外面のヨコハケに限られる。

また、口縁端部から4段目外面にかけては、径1cmの竹管文が押されている(写真図版243)。口縁端面においては4cmから5cmの間隔で押されている。口縁部外面においては2段にわたって押されているが、その高さ・間隔は一定していない。4段目においては、わずかな残存にとどまる。

647は、端部が大きく外反し、口縁部に対して直交するヨコナデにより外傾する面が形成されている。全体的に磨減傾向にあるが、口縁部外面はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。また、口縁端部は、端面から外面にかけてヨコナデにより仕上げられている。突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突出傾向にある。なお、突帯の剥離面にはヨコハケが認められる。

648は、端部が大きく外反し、上端部を中心としたヨコナデにより外傾する端面が形成されている。体部は内外面ともナデを基調とし、突帯貼り付け位置の上側と下側にはエビオサエ痕が顕著に認められる。口縁部外面は、タテハケの後ヨコハケにより、内面はハケとナデにより仕上げられている。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。4段目突帯については、剥離面のみが認められる。



第294図 h32~h34 埴輪出土状況

649は、体部から口縁部にかけてわずかに外反気味に立ち上がり、端部がやや大きく外反している。端部は、上端部を中心としたヨコナデにより外傾する端面が形成されている。

体部外面はタテハケの後ヨコハケ、内面はナデとユビオサエにより仕上げられている。ヨコハケは、連続するものではなく、一旦器面から離されて施されている状況が認められる。また、突帯貼り付け位置の内面はユビオサエ痕が顕著である。口縁部外面はヨコハケ、内面はタテ方向を主体としたハケにより仕上げられ、最後に口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。4段目には、弧状をなす線刻の一部が残存する(第486図)。

650は、端部が短く外反し、上端部を中心としたヨコナデにより垂直な端面が形成されている。体部から口縁部外面は、全体的に磨滅傾向にあるが、口縁部外面にわずかにタテハケが残存する。内面については、口縁部がヨコハケ、体部が斜方向のハケにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置の内面は、ナデにより仕上げられている。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。4段目には、円形透かしが1箇所残存する。

651は、端部がわずかに外反し、上端部を中心としたヨコナデにより外傾する端面が形成されている。体部から口縁部外面は、タテハケを基調とし、その後ヨコハケが加えられている。内面については、ハケの後ユビオサエが加えられている。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。突帯は1条残存するが、断面M字形をなし、特に下端部はシャープに仕上げられている。また、突帯剥離面にはタテハケが認められる。

652~656は口縁部のみ残存し、656を除き、口縁部は直立している。

652は、端部が短く外反し、ヨコナデによりほぼ垂直な端面が形成されている。内外面ともナデにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。また、外面には線刻が認められ、平行する2本の直線が山形に描かれている(写真図版244)。

653は、端部が大きく外反し、上下からはさむようなヨコナデにより、わずかに端面が形成されている。内外面とも磨滅のため調整は観察できないが、端部内外面はヨコナデにより仕上げられている。

654は、端部が外反し、外面はタテハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。さらに、外面には2本の平行する直線による鍵形をなす線刻が認められる(写真図版245)。

655は、端部が短く外反している。内外面の調整は磨滅のため観察できないが、外面に656と類似する直線からなる線刻が認められる(写真図版245)。

656は、体部から口縁部にかけて外反傾向にあり、端部が短く屈曲している。端部は、内端部を中心としたヨコナデにより、ほぼ垂直な端面が形成されている。口縁部外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。口縁部内面の調整については、磨滅のため観察できない。口縁端部下には、2本の直線からなる線刻が、直交して2セット認められる(第295図 写真図版245)。



第295図 656拓影

(3) 体部片 (図版87・88 観察表37)

657～662が出土している。このなかで、661と662は小片のため図化できなかった。

657は、体部の小片である。下端には突帯の剥離痕が残存する。外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、最後に径1cmの竹管文が押されている(写真図版245)。竹管文は、少なくとも2段にわたり各段一定の間隔で押されているが、その押された位置は一定していない。また、円形透かしの一部が残存する。

658は、体部2段と突帯1条が残存する。体部外面はタテハケの後ヨコハケにより、内面はハケの後ナデにより、仕上げられている。特に、上段外面のヨコハケには静止痕が比較的顕著に認められ、約3cmの間隔となっている(写真図版245)。突帯は、断面形が方形に近い台形をなし、比較的突出している。また、突帯剥離面にはタテハケが認められる。

659は、体部1段と突帯1条が残存する。内外面ともナデにより仕上げられ、外面には格子状の線刻が認められる(写真図版245)。660は、体部2段と突帯1条が残存する。内外面の調整は、磨滅傾向にあり観察できない。

661と662は、体部の小片である。661は、3本の直線からなる線刻が認められる(写真図版245)。662は、外面に弧状をなす1本の線刻が認められる(写真図版246)。

(4) 底部片 (図版88・89 観察表37・38)

663は、底部から体部(2段目)まで残存する。底部外面は磨滅傾向にあるが、わずかにヨコハケが残存する。内面は、体部にかけて縦方向の強いユビオサエ痕により仕上げられている。また、下端内面にはユビオサエ痕が認められる。体部外面は、ヨコハケにより仕上げられている。底部下面は未調整である。底部と体部の境をなす1段目突帯は、断面形が長方形に近く、突出している。

664は、底部から2段目まで残存する。内外面の調整は、磨滅傾向にあり観察できない。わずかに、下端内面にユビオサエ痕が認められる。底部下面は未調整である。

665は、底部から1段目突帯まで残存する。底部はやや開き気味に直線的に立ち上がり、器厚も一定している。内外面ともナデを基調として仕上げられている。特に内面は縦方向のナデが主体で、下端付近はユビオサエ痕が顕著である。下面は未調整である。

666は、底部から1段目突帯まで残存する。底部から2段目にかけて直立し、器厚も一定している。底部外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。下半は約8cm前後と短いタッチのヨコハケ、上半はストロークの長いヨコハケにより仕上げられている(写真図版247:b)。内面は下半がヨコハケ、上半が斜方向のハケにより仕上げられている。また、下端部内面にはユビオサエ痕が認められる。底部下面は未調整である(写真図版246)。

体部は、外面がヨコハケにより仕上げられ、連続する静止痕が認められる(写真図版247:a)。静止痕の状況から、下側から上側へハケが施されている。内面はナデとハケにより仕上げられている。また、突帯貼り付け位置の内面は、強い横方向のナデが加えられている。その他、円形の透かしが2方向に開けられている。2つの透かし穴の位置関係は173°と、わずかに相対する位置関係からはずれている。

667は、底部から体部(2段目)まで残存する。底部から体部にかけては、やや内湾気味に立ち上がっている。底部外面はタテハケの後ヨコハケ、内面は下半がヨコハケにより仕上げられている。内面上半の調整については、磨滅のため観察できない。また、体部内外面及び底部下面の調整についても、磨滅

のため観察できない。底部と体部の境をなす1段目突帯は、断面形が全体的に丸味を帯び、退化傾向にある。

668～670は、底部のみ残存する。

668の内面は、縦方向の強いユビナデにより仕上げられている。外面の調整は磨滅により観察できない。下面は未調整である。669は、やや内傾気味に立ち上がっている。内外面の調整は、磨滅により観察できない。670は、内面がナデとユビオサエにより、外面がタテハケにより仕上げられている。下面もナデにより仕上げられている。

(5) 壺形埴輪 (図版89 観察表38)

671は、鈎を中心に残存する。鈎の残存から、壺形埴輪と判断したものである。内面は、ヨコハケにより仕上げられている。底部外面はタテハケにより仕上げられているが、肩部外面の調整は磨滅のため観察できない。鈎は、ユビオサエにより成形され、弱いナデにより貼り付けられている。

(6) 丹後-因幡型円筒埴輪 (図版89 観察表38)

672は、肩部から口縁部にかけて残存する。肩部に対して口縁部が短く上方に屈曲し、外端部を中心としたヨコナデにより、内傾する端面が形成されている。内面はナデとユビオサエにより、外面はナデにより仕上げられている。最後に、口縁部は内外面ともヨコナデにより仕上げられている。

673は、肩部上半から口縁部にかけて残存する。肩部に対して、外端部を中心としたヨコナデにより大きく抉れ、さらに器壁が薄くなり、口縁部が形成されている。端部は、口縁部に対して直交するヨコナデにより、わずかに内傾する端面が形成されている。内面はナデとユビオサエ、外面はナデにより仕上げられている。最後に、口縁部は内外面ともヨコナデにより仕上げられている。

674は、肩部上半から口縁部にかけて残存する。肩部に対して口縁部が短く上方に屈曲し、外端部を中心としたヨコナデにより、ほぼ水平な端面が形成されている。内面はナデとユビオサエ、外面はナデにより仕上げられている。最後に、口縁部は内外面ともヨコナデにより仕上げられている。

19. 北渡土堤北端部

(1) 出土状況

暗渠状の溝をなす渡土堤と外堤との接合部、集石群の直上から多量の埴輪が出土している(第299図写真図版133)。その状況を詳細に観察すると、横断面が漏斗形をなす集石群の南側と北側に分かれて出土する傾向が認められる。つまり、集石群の両サイドから、完形もしくは完形近くに復元できた埴輪が出土している。多くが、完形に近い状態でその場に置かれていたものが、その後押し潰された状況を示している。

出土は円筒系埴輪に限られ(第296図)、このなかで丹後-因幡型円筒埴輪と確認できるものは出土していない。

具体的にみると、まず、中央部渡土堤側で、675が溝



第296図 北端部出土円筒系埴輪

と同方向に倒れ、その場で押し潰された状態で出土している(第297図)。また、この下層からは完形に復元された口縁部(703)が出土している。次に、その西側からは壺形埴輪の708が出土している。底部と肩部が10cmほど離れた位置から出土している。なかでも、底部片については、完形のもが上方から押し潰された状態で出土している(写真図版133:③)。



第297図 675出土状況

上記の西側では、686・691・694～696が密集した状態で出土している。特に695については、底部がほぼ完形し、その上側が溝側に倒れ、その後押し潰された状態で出土している(第298図)。底部については、立てられていた状況が保たれた状態で出土している。



第298図 695出土状況

また、696についても同様で、完存する底部が押し潰された状態で出土している。さらに686については、体部があたかも集石に持たれ掛けられ、その場に置かれていたかのような状況を呈していた。

691は、底部を中心に残存する。完形であったものが倒れ、押し潰された状態で出土している。ただし、全体的に1箇所に小片となって密集した状態で出土している。694も底部を中心に残存するが、集石群に立て掛けられていた状態で出土している。このため、全体的に大きな破片で出土している。

なお、上記一群の南側、溝肩部付近から710が比較的小片となって、一箇所に集中して出土している。

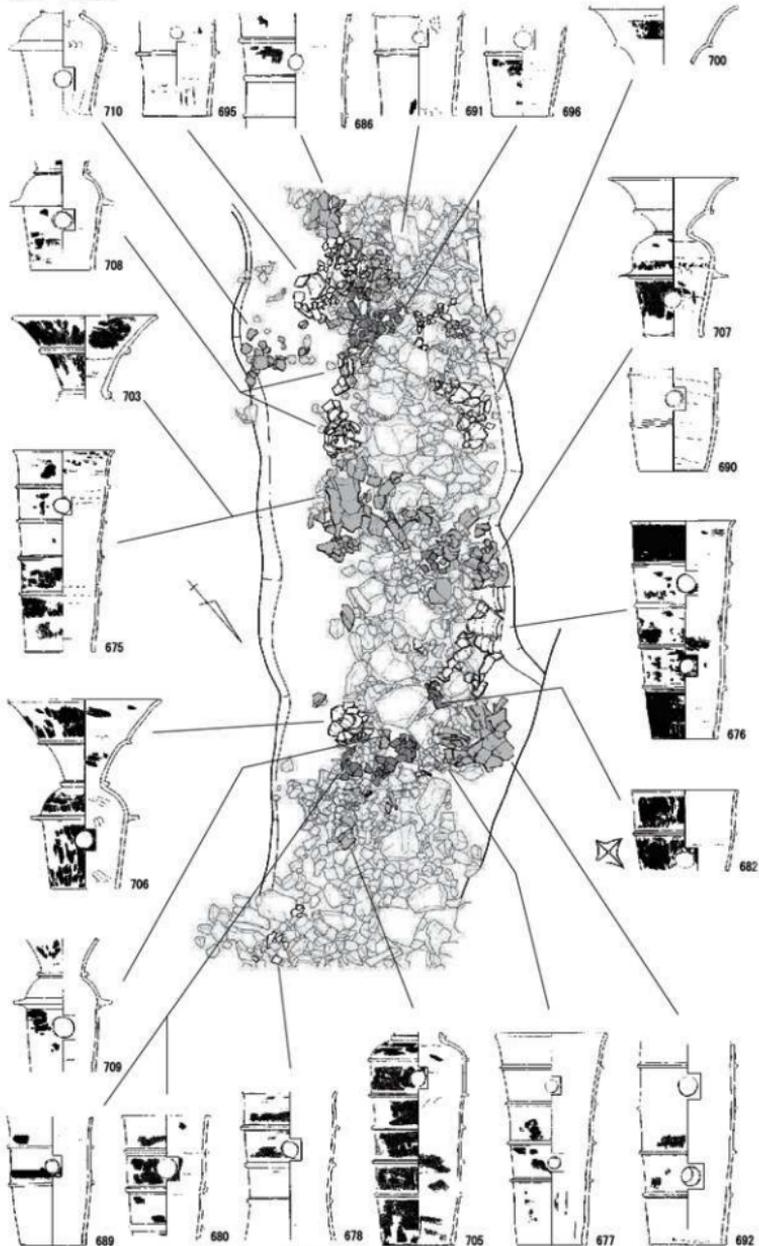
696の北側、集石群の北側においては684と693が出土している。684は、比較的小片が集中した状態で出土している。693については、684の東北側から近接して出土している。底部が立てられたままの状態に出土している。その他、この東側からは700が出土している。684・693より大きな破片が集中した状態で出土しているが、復元できたのは口縁部に限られる。

700の東側からは、約1.5mの空間をあけて、707が集中して出土している(写真図版133:①)。707は、完形の壺形埴輪に復元されている。また、707を取り上げたその下層からは、690が集中して出土している。小片が一箇所に集中した状態で出土しているが、底部を中心に完形に復元されている。

707の東側においては、676が出土している。完形の体部がその場で割れた状態で出土している。このため、当該埴輪群のなかで最も大きな破片の状態に出土している。そして、底部から口縁部まで完形に復元されている。

さらに676の東側においては、692が出土している(写真図版133)。676ほどではないが、比較的大きな破片が集中して出土している。形のある状態のものが押しつぶされた状態で出土している。この結果、口縁部を除いてほぼ完形に復元されている。また、676と692の中間からは、口縁部を中心とした682が1箇所に集中して出土している。

さらに、692の東側からは677が出土している。完形に復元されたが、多くは692の下層から出土している。北側から集石群側に倒れ、その場で潰された状態で出土している。



第299図 h35 埴輪出土状況

692の南側、集石群の南側を中心に、680・689・706・709が密集して出土している。なかでも、706の壺形埴輪は、比較的大きな破片からなり、完形の個体がある場所で押し潰された状態で出土している（写真図版133）。680と689は小片からなるが、一箇所に集中して出土している。基本的には完形に近い状態であったものが、その場で押し潰されたものと考えられる。特に、胎土・色調等の特徴等も考慮に入れると、両者は同一個体の可能性が考えられる。

680と689の東側からは、705の朝顔形埴輪が出土している。ほぼ完形に復元できた個体であるが、小片が密集した状態で出土している。さらに、705の東側からは678が出土している。

この他、706と675の間から、699の口縁部が2箇所に分かれて出土している。他の埴輪と比べて、やや広範囲に散乱していた。

(2) 円筒埴輪（図版89～図版94 観察表38・39）

675は、完形に復元された個体である。5段4条からなり、器高66.10cmを測る。口縁部の1/2、底部の2/3が残存する。体部から口縁部にかけてやや開き気味にほぼ直線的にのび、端部が短く外反する。端部は、上端部を中心としたヨコナデによりほぼ垂直な端面が形成されている。

底部は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がナデとユビオサエにより仕上げられている。体部は外面がナデにより仕上げられ、外面は3段目を除いてタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。特に2段目のヨコハケには、静止痕が認められる。3段目については、ヨコハケのみ残存する。口縁部は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がヨコハケにより仕上げられ、最後に端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

4段目と2段目には、円形の透かしがそれぞれ2方向に開けられている。4段目と2段目とは千鳥に配されている。さらに、4段目には径6mmの小穴が1箇所に開けられている（写真図版247）。

676はほぼ完存する個体で、全体のわかる数少ない資料である。5段4条からなり、器高は71.40cmを測る。底部から口縁部にかけてわずかに開き気味に立ち上がり、端部が短く外反している。端部は、ほぼ垂直な端面を形成している。

底部外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。全体的にストロークの長いヨコハケで、波打つ傾向が認められる。内面は、磨減傾向にあり、調整は観察できない。下面についても同様である。

体部は、各段とも外面はヨコハケにより仕上げられている。部分的に1次調整のタテハケが認められる。2段目から4段目の各段には、円形の透かしが2方向に開けられている。各段の透かしの配置は、ほぼ千鳥の関係となっている。突帯は4条とも残存する。断面形は台形をなすが、端部が全体的に丸味を帯びる傾向にある。また、2段目突帯剥離面には割り付け用の沈線が認められる。

口縁部は、タテハケを基調とし、その後下端部に1単位のヨコハケが加えられている。内面は、磨減傾向にあるが、部分的にヨコハケが残存する。最後に、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。また、外面には2本の平行する直線からなる線刻が認められる（第486図 写真図版247:d）。体部も含め、全体的にハケ目が細かい（10本/cm）点特徴的である。

677は、完形に復元できた個体である。底部から口縁部にかけて直線的に開き気味に立ち上がり、端部がわずかに外反している。端部は、内端部を中心としたヨコナデにより、外傾する面が形成されている。

底部外面はヨコハケ、内面は縦方向の板ナデにより仕上げられている。下面については弱いナデにより仕上げられている。

体部外面は、2段目がヨコハケ、3段目がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、4段目については磨滅のため観察できない。内面は、各段ともナデにより仕上げられている。また、2段目と4段目には円形の透かしが開けられているが、その位置はほぼ同じである。

口縁部は、内面がナデにより仕上げられているが、外面は磨滅のため観察できない。最後に、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

678は、口縁部から2段目まで残存する。体部から口縁部にかけてほぼ直立気味に立ち上がり、端部が短く外反している。ただし、2段目については外側に開く傾向にある。端部は、ヨコナデにより外傾する面をもつ。体部から口縁部内面はナデにより仕上げられている。口縁部と4段目外面は、ストロークの長いヨコハケにより仕上げられているが、2段目・3段目外面の調整は磨滅のため観察できない。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

4段目には、円形透かしが2方向にほぼ相対する位置に開けられている。突帯は3条残存するが、断面形がM字形をなしている。

679は、口縁部から3段目まで残存する。体部から口縁部にかけて屈曲気味に立ち上がり、端部が外反している。端部は、外傾する面をもつ。体部外面はヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。口縁部は、内面がナデにより仕上げられているが、外面の調整は磨滅により観察できない。

4段目には、円形透かしが2方向に開けられているが、両者は完全には相対する位置にはない。また、同じく4段目には線刻が認められる(第486図 写真図版250:a)。縦長の長方形の区画内中央を直線で2分し、これを境として縞状に斜線が描かれている。全体的に浅い沈線である。突帯は、断面形が方形に近い台形をなす。

680は、口縁部から2段目まで残存する。体部から口縁部にかけてわずかに開き気味に立ち上がり、端部が短く屈曲している。口縁部は、ヨコナデにより外傾する面をもつ。体部から口縁部にかけての内面は磨滅傾向にあるが、突帯貼り付け位置の上側にはユビオサエ痕が顕著に認められる。外面はヨコハケを基調とし、特に4段目においては1次調整のタテハケも認められる。最後に口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

4段目には、円形の透かしが1箇所残存する。突帯は3条分残存するが、残存するのは3段目突帯に限られ、2段目突帯と4段目突帯についてはその剥離痕が認められるのみである。

681は、口縁部から3段目まで残存する。体部から口縁部にかけてわずかに開き気味に立ち上がり、端部が短く外反している。外端部を中心としたヨコナデにより外傾する端面が形成されている。口縁部外面はタテハケの後ヨコハケ、体部外面はヨコハケにより仕上げられている。内面は、部分的にユビオサエ痕が認められる。なお、突帯については、2条とも残存せず、剥離面のみ認められる。

682は、口縁部から体部(4段目)まで残存する。体部から口縁部にかけてやや開き気味に立ち上がり、端部が短く屈曲している。端部は、ヨコナデにより外傾する面をもつ。体部外面はタテハケ、内面はナデにより仕上げられている。口縁部外面はタテハケにより仕上げられている。内面については、体部から口縁部にかけて磨滅傾向にあるが、ナデの痕がわずかに認められる。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

4段目には、円形透かしが1箇所残存する。また、同じく4段目には線刻が認められる(写真図版250:b)。方形の四辺を弧状に、その対角線を直線で表現したもので、対角線の交点には径1cmの小穴が開けられている。

683は、口縁部から体部（4段目）まで残存する。体部から口縁部にかけてやや開き気味に立ち上がり、端部が短く屈曲している。端部は、肥厚気味でヨコナデによりわずかに外傾する面をもつ。体部外面はヨコハケ、内面はナデにより仕上げられている。口縁部外面は、タテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。内面については、ナデにより仕上げられている。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。4段目には、円形の透かし穴が1箇所残存する。

684は、口縁部のみ残存する。直立する口縁部に対して端部が大きく外反している。端部は、ほぼ垂直な面が形成されている。内外面の調整は、磨滅のため観察できない。

685は、口縁部から4段目まで残存する。体部から口縁部にかけてほぼ直立し、端部がわずかに外反する。端部は、口縁部に直交するヨコナデにより外傾する面が形成されている。

体部は、内面がナデにより仕上げられ、内面の突帯貼り付け位置では強い横方向のユビナデが加えられている。口縁部外面は、タテハケの後ヨコハケにより、内面はハケの後ナデにより仕上げられている。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

(3) 体部片 (図版94・95 観察表39)

686は、体部4段と突帯3条が残存する。透かしの位置から判断して、2段目から口縁部にかけて残存するものと考えられる。内面は、2段目から口縁部にかけてナデにより仕上げられている。外面は、磨滅傾向にあるが、口縁部と4段目はタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。4段目には、円形透かしの一部が1箇所残存する。突帯は3条残存するが、いずれも断面台形をなし、比較的突出傾向にある。

687は、体部2段と突帯1条が残存する。内外面ともナデにより仕上げられ、下段外面には山形の線刻が認められる (写真図版252)。

688は、体部4段と突帯3条が残存する。透かしの位置から判断して、底部から4段目にかけて残存するものと考えられる。内面は、全体的に磨滅傾向にあるが、ナデの痕を観察することができる。外面は、2段目から4段目がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられている。底部は磨滅のため観察できない。4段目と3段目に、円形の透かしの一部が、各1箇所ずつ残存する。両者は、千鳥の関係を意識して配されたものと考えられるが、両段のなす角度は120°である。突帯は3条残存するが、端部はシャープに仕上げられている。

(4) 底部片 (図版95-97 観察表39)

689は、底部から3段目まで残存する。底部から体部にかけての内面と、底部外面の調整は、磨滅により観察できない。体部外面にはヨコハケがわずかに認められる。また、内面下部端部にはユビオサエ痕が認められる。底部下面は未調整である。2段目に円形の透かしが2方向に開けられている。突帯は1段目突帯が残存し、2段目突帯についてはその剥離痕のみ認められる。

690は、底部から3段目下部にかけて残存する。底部は全体的に外傾傾向にあるのに対して、体部は直立傾向にある。また、2段目には円形の透かしが1箇所残存する。

外面の調整は、全体的に磨滅のため観察できない。内面はナデを基調として仕上げられている。また、下部端部においては、内外面がユビオサエにより仕上げられている。下面にはナデが加えられている (写真図版252)。なお、2段目突帯の剥離面には、わずかにハケ目が認められる。

691は、底部から2段目突帯まで残存する。外面は磨減傾向にあるが、底部下端はタテハケにより仕上げられている。内面は全体的にユビオサエとナデにより仕上げられている。底部下面は未調整で、粘土の貼り合せ痕が認められる。2段目に円形の透かしが1箇所残存する。復元径が約4cmと、他の透かしより小さい傾向にある。突帯は1条残存し、2段目突帯についてはその剥離面のみ認められる。

692は、底部から口縁部下半まで残存する。底部から口縁部にかけて、内外面とも磨減傾向にあり、調整の観察は困難である。このなかで、2段目と3段目外面にはヨコハケが、底部下端外面にはタテハケがわずかに認められる。この他、下端部内面はユビオサエにより仕上げられている。また、底部下面はナデにより仕上げられている。

2段目と4段目には、円形の透かしがそれぞれ2箇所ずつ開けられている。両段の透かしの位置はほぼ同じで、他の埴輪とは特徴を異にしている。突帯は3条残存し、3段目突帯については剥離痕のみ残存する。残存する3条の突帯は、いずれも上端部が突出し、下方に垂下した断面形をなしている。また、4段目外面には、わずかに弧状をなす線刻が認められる（写真図版253：a）。

693は、底部のみ残存する。外面はタテハケ、内面は縦方向のナデにより仕上げられている。下面は未調整である。

694は、底部から2段目突帯まで残存する。内外面ともナデを基調として仕上げられている。さらに、底部内面は斜方向のユビナデが加えられている。底部下面は未調整である。2段目に円形の透かしが2方向に開けられているが、両者は完全には相対する位置関係にはない。突帯は2条残存し、いずれも端部がシャープに仕上げられている。

695は、底部から2段目にかけて残存する。外面の調整は、全体的に磨減のため観察できない。内面はタテハケとナデにより仕上げられている。また、下端部においては内面がユビオサエ、外面がヨコナデにより仕上げられている。下面にはナデが加えられている（写真図版253）。

体部は2段目の一部が残存し、円形の透かしが1箇所に認められる。径4cmと他の円筒埴輪の透かしより小型である。

696は、底部から2段目まで残存する。底部外面はタテハケの後ヨコハケ、内面下端はユビオサエにより仕上げられている。底部下面は未調整である。他の箇所については、剥離が著しく、調整は観察できない。2段目に円形の透かしが2方向に開けられているが、両者は162°の位置関係にあり、相対する位置関係にはない。突帯は1条残存するが、比較的シャープに仕上げられている。

697は、底部のみ残存する。内外面とも磨減傾向にあるが、下端付近内面はユビオサエにより仕上げられている。下面はナデが加えられている。また、下端部付近にはやや不定形な径4～5mmの穿孔が認められる。底部下端からの器厚がほぼ一定している。

698は、底部のみ残存する。内外面とも磨減傾向にあるが、ナデにより仕上げられているものと考えられる。下端付近内面はユビオサエにより仕上げられている。下面はナデが加えられている。

(5) 朝顔形埴輪（図版99 観察表40）

705の1個体に限られる。705は、口縁部を除いてほぼ完存する。6段5条からなり、残存高は69.50cmを測る。体部3段目と5段目には、円形の透かしがそれぞれ2箇所開けられている。各段の2穴は相対する位置に開けられているが、3段目と5段目は55°離れた位置関係にある。また、5段目外面には2本の弧状をなす線刻が認められる（写真図版254：a）。

体部外面は、タテハケの後ヨコハケを基調とし、2段目と3段目には段の幅とほぼ一致する静止痕が認められる（写真図版255：a 256：a）。内面は、ハケの後ナデにより仕上げられている。肩部外面はヨコハケ、内面はユビオサエとナデにより仕上げられている。底部下面は未調整である（写真図版254）。

各段及び頸部には、突帯がヨコナデにより貼り付けられている。体部の突帯は断面形が方形に近い台形をなす。頸部の突帯は断面形が山形をなす。なお、5段目の高さは11.80cmである。

(6) 口縁部片（図版97～99 観察表39・40）

699は、1次口縁上半から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の延長上に2次口縁がつくれ、両者の境外面には突帯が貼り付けられている。突帯の断面形は丸味を帯びている。口縁部は内外面とも磨滅傾向にあるが、2次口縁内面は縦方向のヘラナデにより外面はヨコハケにより仕上げられている。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

700は、1次口縁上半から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の上端部よりやや内側に2次口縁が載せられ、1次口縁端が突帯状をなしている。1次口縁内外面の調整は、磨滅により観察できない。2次口縁外面は、下半がタテハケ、上半がヨコハケにより仕上げられている。最後に、端部がヨコナデにより仕上げられ、断面は方形をなす。

701は、1次口縁上部から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の延長上に2次口縁がつくれ、両者の境外面には突帯が貼り付けられている。突帯は、断面形が台形をなすが、全体的に丸味を帯びている。内外面とも磨滅傾向にあり、調整は観察できない。唯一、端部がヨコナデにより仕上げられ、断面は方形をなす。

702は、1次口縁上部から2次口縁にかけて残存する。1次口縁の延長上に2次口縁がつくれ、両者の境外面に突帯が貼り付けられている。ただし、突帯は剥離しており、その断面形は不明である。1次口縁は、内外面ともナデにより仕上げられている。2次口縁外面はタテハケにより仕上げられているが、内面は磨滅傾向にあり不明である。最後に、端部がヨコナデにより仕上げられ、断面は方形をなす。

703は、頸部から口縁部にかけて残存する。1次口縁の延長上に2次口縁がつくれ、両者の境外面には断面台形の突帯が貼り付けられている。また、頸部外面にも断面鈍角三角形の突帯が貼り付けられている。口縁部外面は、1次口縁・2次口縁ともにタテハケにより仕上げられている。内面は、1次口縁から2次口縁にかけてヨコハケにより仕上げられ、その後1次口縁にはナデが加えられている。最後に、口縁端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

704は、2次口縁端部を中心に残存する小片である。端部はヨコナデにより仕上げられているが、他の調整は磨滅により観察できない。

(7) 壺形埴輪（図版100～103 観察表40）

706は、完形に復元できた個体である。やや外傾傾向にある円筒形の底部に、扁球形の肩部を載せ、その上に複合口縁が載せられている。口縁部高が器高の1/2近くあり、全体的にバランスを欠く。

底部は、外面がタテハケ、内面についてはユビナデとユビオサエにより仕上げられている。下面については弱いナデが加えられている。また、底部上位には円形の透かしが2箇所、相対する位置に開けられている。さらに、X字状の線刻が認められる（写真図版258：a）。

肩部は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がユビオサエとナデにより仕上げられている。さらに、

鈎貼り付け位置内面上側は、ヨコナデが加えられている。肩部下端には、鈎状の突帯が貼り付けられている。ユビオサエによる成形後、上面のみヨコナデにより仕上げられている。

口縁部は、1次口縁の延長上に2次口縁が延び、その境外面に突帯が貼り付けられている。1次口縁は、内面がヘラ削り後ハケにより仕上げられ、最後にナデが加えられている。外面については、磨減のため観察できない。2次口縁は、外面がタテハケ、内面がハケの後ナデにより仕上げられ、最後に端部がヨコナデにより仕上げられている。また、頸部外面には、断面鋭角三角形状の突帯が貼り付けられている。

707は、完形に復元できた個体である。器高52cmを測る。また、全体的に橙色系の色調を帯びている。他の壺形埴輪と比較して、口縁部高が低く、2次口縁に対して1次口縁が低い点が特徴的である。口縁部突帯は、全体的に剥離している。鉢形をなす底部に、扁球形の肩部を載せ、その上に複合口縁が載せられている。

底部外面は、タテハケを基調とし、上半に限りヨコハケが加えられている。内面は、ハケの後ナデにより仕上げられている。また下端部はユビオサエ痕が顕著である。下面は未調整である。底部中位には円形の透かしが2箇所、相対する位置に開けられている。

肩部は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がユビオサエとナデにより仕上げられている。肩部下端には、鈎状の突帯が貼り付けられている。鈎貼り付け位置の内面は、ユビオサエとユビナデが顕著である。幅が5cmと広いのに対して、先端部の厚さが5mmと、全体的に薄く仕上げられている。上面・下面とも、ユビオサエとユビオサエにより成形後、ナデにより仕上げられている。

なお、この鈎貼り付け位置上側を境に、内面の整形が明らかに異なり、ここを境に製作時の時間差が認められる。具体的には、底部上端部に鈎が貼り付けられ、その後肩部が載せられている。その後、肩部外面をタテハケにより整形し、肩部と鈎が一体化となるよう仕上げられている。

口縁部は、1次口縁の上端部に2次口縁が載せられている。1次口縁・2次口縁ともに内外面が磨減傾向にあり、調整は観察できない。なお、頸部外面には断面三角形の突帯が貼り付けられている。

708は、口縁部を除いて完形に復元できた個体である。器高35.90cmを測る。鉢状をなす底部に、扁球形の肩部を載せた形態である。肩部と底部の境外面には、幅3.90cmの鈎が貼り付けられている。製作においても、鈎の下端を境に時間差が認められる。

底部は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、その後ナデが加えられている。内面については、磨減により観察できない。下面についてはナデが加えられている。その他、底部上位には円形の透かしが2箇所、相対する位置に開けられている。

肩部は、外面がナデ、内面がユビオサエとユビナデにより仕上げられている。頸部は、内面がヨコナデ、外面がタテハケにより仕上げられている。その後、頸部外面には突帯が貼り付けられている。突帯は、ヨコナデにより外方につまみ出され、断面形は筒状をなしている。

709は、口縁部上半を除いて完形に復元できた個体である。器高43.75cmを測る。円筒形をなす底部に、扁球形の肩部を載せた形態である。さらに、口縁部が外方に直線的に広がっている。肩部と底部の境外面には幅3.80cmの鈎が貼り付けられている。製作においても、鈎の下端を境に時間差が認められる。

底部は、外面がタテハケの後ヨコハケにより仕上げられ、一部静止痕が認められる。内面については、ナデとユビオサエにより仕上げられている。下面については未調整である。その他、底部上位には円形の透かしが2箇所、相対する位置に開けられている。

肩部は、内面がユビオサエとナデにより仕上げられ、外面は磨滅により観察できない。口縁部外面はタテハケにより仕上げられているが、内面は磨滅のため観察できない。突帯は、ヨコナデにより外方につまみ出され、断面形は筈状をなしている。

710は、口縁部を除いて完形に復元できた個体である。ただし、頸部片・肩部片・底部片を図上で復元したもので、底部の一部を欠く。

鉢形をなす底部に、扁球形の肩部を載せた形態である。肩部と底部の境外面には罫が貼り付けられていたが、剥離して残存していない。

底部は、外面がナデにより仕上げられ、内面は縦方向のヘラナデにより仕上げられている。下面にはナデが加えられている。この他、底部中央には円形の透かしが1箇所残存する。

肩部は、全体的に磨滅傾向にあるが、外面がナデ、内面がユビオサエとナデにより仕上げられている。頸部は、内面がヨコナデにより仕上げられている。その後、頸部外面には突帯が貼り付けられているが、上端部を欠く。断面三角形をなしていたものと考えられる。

711は罫のみ残存する。罫は幅3.30cmを測り、ナデとユビオサエによる整形後、外側を中心に上面・下面・側面がヨコナデにより仕上げられている。罫上面には、径1cmの竹管文がほぼ等間隔に押されている（写真図版258）。残存するのは4個である。

712は、底部上半から肩部の一部にかけて残存し、両者の境には罫が貼り付けられている。内外面とも磨滅傾向にあり、調整は観察できない。罫は、ユビオサエにより成形後、ヨコナデにより貼り付けられている。また、底部には円形の透かしが1箇所残存する。出土位置・胎土等の特徴から、710と同一個体の可能性が考えられる。

20. 北周濠

(1) 出土状況

北造り出しおよび北渡土堤の裾部付近を除いては、埴輪の出土量はわずかである。また、ほとんどが小片で出土している。このため、良好な状態で出土した埴輪は認められない。出土した埴輪も、体部片・底部片・口縁部片・壺形埴輪に限られる。

(2) 体部片（図版103 観察表40）

713～715は、体部2段と突帯1条が残存する。

713は、内外面とも磨滅傾向にあり、調整を観察することはできない。突帯は、断面形が方形に近い台形をなし、その剥離面には割り付け用と考えられる沈線が認められる。

714は、内外面ともナデを基調として仕上げられている。また、上段には円形の透かしが残存するとともに、7本からなる線刻が認められる（写真図版258・第300図）。

715は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面がハケの後ユビナデとユビオサエにより仕上



第300図 714拓影

げられている。

突帯は、断面形が長方形に近い台形をなし、突出している。全体的に器壁が薄い点が特徴的である。また、外面には赤色塗布が認められる。

716は、体部の小片である。内外面の調整は、磨滅のため観察できない。

(3) 底部片 (図版103 観察表40)

717は、やや開き気味に立ち上がる。外面はタテハケ、内面はハケの後ナデにより仕上げられている。下面は未調整である。718は、全体的に内湾気味に外方に立ち上がる。内外面とも磨滅が著しく、調整は観察できない。

(4) 口縁部片 (図版104 観察表40)

720の1点に限られる。

720は、1次口縁上半から2次口縁下半にかけて残存する。1次口縁の上端部付近に2次口縁が載せられ、1次口縁端が突帯状をなしている。1次口縁内面がナデ、2次口縁外面がタテハケにより仕上げられている以外は、磨滅により調整は観察できない。

(5) 壺形埴輪 (図版103 観察表40)

719の1点に限られる。

719は、鐙を中心に残存する。残存する突帯の規模から、壺形埴輪と判断したものである。肩部外面はヨコハケ、内面はハケの後ユビナデとユビオサエにより仕上げられている。底部外面はヨコハケ、内面はハケの後ナデとユビオサエにより仕上げられている。鐙はヨコナデにより貼り付けられている。

21. 前方部盛土層

(1) 出土状況

前方部の盛土層(第86図7層 第87図26層・27層)から出土したものである。多くが小片で出土している。盛土層中からの出土であるため、その樹立位置を特定することはできない。円筒埴輪・体部片・朝顔形埴輪・口縁部片・肩部片が出土している。

(2) 円筒埴輪 (図版104 観察表41)

いずれも口縁部のみ残存する。

721は、外側に開き気味に立ち上がり、端部は短く外反している。外傾する端面が形成されている。外面はヨコハケ、内面は斜方向のハケの後、端部内外面がヨコナデにより仕上げられている。

722は、わずかに外反傾向にある口縁部に対して、端部が外方へ短く屈曲する。垂直な端面が形成され、断面方形の帯状をなす。外面はハケの後ナデ、内面はヨコハケにより仕上げられている。最後に端部がヨコナデにより仕上げられている。

724は、直線的にのびる口縁部に対して、端部に断面長方形の粘土板が貼り付けられ、帯状をなす。端部は、内外面ともヨコナデにより仕上げられている。口縁部外面は、ヨコハケにより仕上げられているが、内面は磨滅のため観察できない。

725は、口縁端部がヨコナデにより仕上げられるとともに、断面長方形に肥厚する。この結果、口縁部外面は帯状をなす（写真図版259）。端部以下の内外面は、磨滅のため調整は観察できない。

（3）体部片（図版104 観察表41）

723は、体部2段と突帯1条が残存する。内外面とも磨滅傾向にあり、調整を詳細に観察することはできない。突帯は、断面台形をなすが、突帯高5mmと退化傾向にある。

726は、体部の小片で突帯を中心に残存する。上段外面には線刻が認められる。また、突帯の断面形は長方形に近く、突帯高1cmと突出する。

727は、体部2段と突帯1条が残存する。内外面の調整は、磨滅傾向にあり観察できない。突帯は断面形が台形をなし、他の突帯と比較して大型である。

728は体部の小片で、弧状をなす線刻が認められる（写真図版259）。

（4）朝顔形埴輪（図版104 観察表41）

730は、墳頂部から出土している。4段目突帯と頸部突帯の存在から、朝顔形埴輪と判断したものである。頸部から体部（4段目）上端にかけて残存する。内外面とも磨滅傾向にあるが、内面にわずかにハケ目が残存する。頸部の突帯は、断面形が鈍角三角形をなすが、わずかに突出する程度で、かなり退化傾向にある。4段目突帯については、比較的突出している。

（5）口縁部片（図版104 観察表41）

732は、1次口縁上端から2次口縁にかけて残存する。接合面を良好に観察することは困難であるが、1次口縁の延長上に2次口縁がつくれ、両者の境外面に突帯が貼り付けられているものと考えられる。内外面とも剥離傾向にあるが、外面がタテハケ、内面がヨコハケにより仕上げられている。2次口縁外面に赤色塗布が認められる。

（6）肩部片（図版104 観察表41）

729は、頸部から肩部にかけて残存する。内面はタテハケにより仕上げられているが、外面は磨滅のため観察できない。頸部外面には突帯の一部が残存するが、その剥離部分にはハケ目が認められる。

731は、肩部から体部（4段目）上端にかけて残存する。体部外面はナデ、内面は横方向のヘラナデにより仕上げられている。肩部外面はタテハケの後ヨコハケ及びナデにより、内面はハケと横方向のヘラナデにより、それぞれ仕上げられている。突帯は、断面形が台形をなすが、全体的に丸味を帯び、退化傾向にある。

兵庫県文化財調査報告書 第471冊

朝来市 池田古墳

—一般国道9号池田橋盛土化事業(平野地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成27(2015)年3月20日 発行

- 編 集： 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)
- 発 行： 兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
- 印 刷： 船場印刷株式会社
〒670-0994 兵庫県姫路市定元町4-2
-